

くし かに く ぼる
後 兼 久 原 遺 跡

— 庁舎建設に係る文化財発掘調査報告 —

2003年 3 月
(平成15年)

沖縄県 北谷町教育委員会

はじめに

本報告書は現在、北谷町庁舎がある場所に位置している後兼久原遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

遺跡の所在するキャンプ桑江地域の返還計画があり、それに伴う区画整理事業を円滑に行うために文化庁の補助をうけて試掘調査が行われ、それと同時に本町で計画が進められていた庁舎建設予定地が、本遺跡の範囲と重なることから、調整の結果、当教育委員会が緊急発掘を行いました。

調査の結果、11世紀後半から13世紀を中心とするグスク時代の集落遺跡であることが判明しました。

本遺跡からは一戸建ての平地住居址の完全な間取り、それに付随する高床式建物址が発見され、木棺に埋葬された人骨、精錬鍛冶が行われていた可能性を窺わせる砂鉄貯蔵穴、さらに、遺跡の中心部の近くでは平地住居址群や高床式建物址群が重なる状態で検出され、これまでに前例の無い「畝」をもった畠が農工具の痕跡を伴って発見されました。

また、遺跡から出土したさまざまな遺物には中国・タイの陶磁器や備前の陶器、九州産の滑石製石鍋、鍛冶に関連する遺物や製品等が出土し、さらに、豚の骨の分析から14世紀に豚がいたことを示す資料であることが判明しております。

このようにグスク時代の集落を彷彿させ、アジアの歴史の中で北谷町の先人達の生活・文化を窺い知ることができる貴重な成果がありました。

本発掘調査が行われた範囲のうち集落の痕跡が残る範囲は現地保存を行いました。貴重な文化遺産を後世に残すことも私たちが行っていかなければならない重要な使命であります。

本書が多くの方々に活用され、さらなる文化財保護思想の高揚はもとより・諸開発事業における調整・協議、学術研究の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・資料整理にあたり御指導、御協力を頂いた関係各位に、深く感謝申し上げます。

平成15年3月

北谷町教育委員会
教育長 瑞慶覽 朝宏

頁		訂正前	訂正後	頁		訂正前	訂正後
抄録	市町村コードの欄	北谷町	473260	212頁	25行目	126図73	127図75
3頁	18行目	の平坦に	の平坦部に	33頁	23行目	畠址が3号	畠址が2号
64頁	30行目	(第29図30)	(第74図30)		26行目	(127図76・126図67)	(127図76)
68頁	11行目	関連性と	関連性があると	212頁	27行目	127図75	126図73
75頁	16行目	第18図㉔-1	第18図㉔-1		28行目	126図68・69	126図67～69
76頁	2行目	第23図㉔-3	第23図㉔-3	213頁	第39表 砥石 IV類A③第II層	1	0
	12行目	第20図㉔	第22図㉔		第39表 砥石 IV類A①第II層	0	1
	28行目	第14図㉔-1	第14図㉔-1		第39表 砥石 IV類A①第III層d	2	1
77頁	14行目	O-27	O-26		第39表 砥石 IV類A③第III層d	0	1
	24行目	(第10図㉔、第20図㉔-1)	(第20図㉔-1)		第39表 砥石 IV類A④第II層	1	0
	35行目	畦(第17図)では	畦では		第39表 砥石 IV類A⑤第II層	0	1
82頁	29行目	第E表	第19表		第39表 砥石 IV類A⑤第II層	1	0
	32行目	(3, O16点)	(3, O14点)	第39表 砥石 IV類A④第II層	0	1	
101頁	第20表 胎土㉔IIIcの小計	12	11	216頁	第41表② 第130図99	裏面	右側面
	第20表 胎土㉔口縁の小計	4	1		第41表⑥ 第126図73	IV類A①	IV類A③
	第20表 胎土㉔小計の小計	59	56	220頁	第41表⑥ 第127図74	ある。段差は、	ある。
122頁	第76図	57	56		第41表⑥ 第131図102	裏面は…。表面の	表面は…。裏面の
	第76図	56	57	221頁	第41表⑦ 第127図75	IV類A③	IV類A③
140頁	10行目	目痕	目跡		第41表⑦ 第126図71	IV類A④	IV類A⑤
175頁	34行目	C41	第102図41		第41表⑦ 第126図69	IV類A⑤	IV類A④
	35行目	C47	第102図47	231頁	第123図	55	55a
181頁	第29表⑤ 第103図78	底部	胴部	250頁	第46表 第136図2	内面はが	内面は
	第29表⑤	底部	口縁部		第46表 第137図8	周辺は帯びる。	周辺は黒味を帯びる。
	第103図84 分類の欄			324頁	図版33	36	37
194頁	11行目	混入	混入物		図版33	37	36
195頁	第31表 番号の欄	8	9	325頁	図版34	53	54
198頁	第32表 番号の欄	9	8		図版34	54	55
	第34表 番号の欄	4	5		図版34	55	53
	第34表 番号の欄	5	4	327頁	図版36	1～12	87～98
	第34表 番号の欄	11	12		図版56上	22	21
	第34表 番号の欄	12	11	347頁	図版56上	21	22
	第34表 修正後の番号12 底径の数値	-	3.6		図版56下(右から3番目の番号)	27	28
第34表 修正後の番号11 底径の数値	3.6	-	349頁	図版58下	82	72	
210頁	22行目	裏面	表面	352頁	図版61	12	10
211頁	23行目	第118図25・27	第118図27		図版61	11	9
	25行目	第128図49	第122図49		図版61	9	12
	27行目	24・26	24～26		図版61	10	13
				401頁	19行目	Nos	No



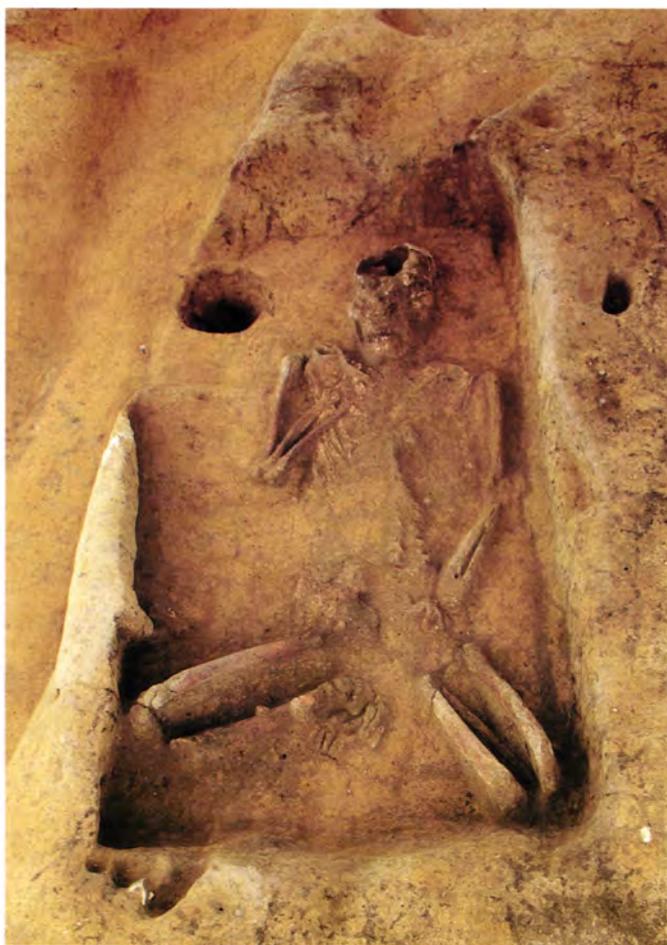
卷首図版1 1号平地住居址と1号高床式建物址（3区）



卷首図版2 上：遺構集中部検出状況（4区）
下：高床式建物址（2～7号）と畠址の検出状況

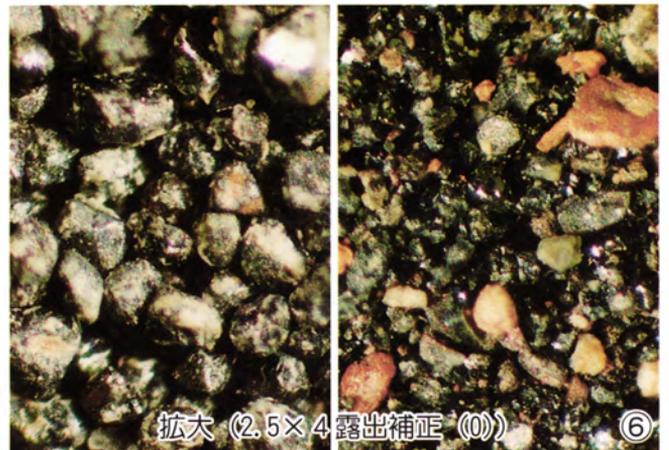


卷首図版3 上：畠址、中：鋤痕、下：R-28（4区）の土層断面（図版11参照）



卷首图版 4 上左：1号土壙墓
下左：3号土壙墓

上右：2号土壙墓
下右：4号土壙墓



卷首図版5：出土遺物 ①土器 ②カムイヤキ ③白磁・青磁 ④タイ産陶器・半練土器
 ⑤滑石製品 ⑥砂鉄 (右：後兼久原遺跡、左：内間カンジャーガマ遺跡)
 ⑦復元遺物 (土器・白磁・青磁)



巻首図版6 戦前の後兼久原遺跡周辺 (1945年 米軍撮影 沖縄県公文書館所蔵に加筆)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	くしかにくばるいせき							
書 名	後兼久原遺跡							
副 書 名	庁舎建設に係る文化財発掘調査報告							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	北谷町文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第21集							
編 著 書 名	山城安生・東門研治・松下孝幸・黒住耐二・川島由次・三鬼香織・小倉 剛							
編 集 機 関	北谷町教育委員会 文化課							
所 在 地	〒904-0103 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL098-936-3490							
発 行 年 月 日	2003年(平成15年)3月31日							
ふ り が な	ふ り が な	コ ー ド		北 緯 東 経		調 査 期 間	調 査 面 積 m ²	調 査 原 因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
くしかにくばるいせき 後兼久原遺跡	おきなわけんなかがみぐん 沖縄県中頭郡 ちやたんちやあざくわえ 北谷町字桑江 くしかにくばる 小字後兼久原	北谷町		26° 18' 57"	127° 46' 08"	1996.06.19 ~ 1997.02.01	6,210	庁舎建設
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
後兼久原遺跡	集 落	グスク(11世紀後半～13世紀前半) (第一期)	平地住居址(1・2号) 高床式建物址 畠址・鍬痕・柵列状遺構 炉址(5・6号) 土壇墓(1号、2～4号) 砂鉄貯蔵穴(1号、2・3号) 土坑(3号)・大土坑	くびれ平底土器 グスク土器 カムイヤキ 白磁 滑石製石鍋 ガラス小玉 羽口 鉄滓		平地住居址・高床式建物址・畠址・土壇墓などを有する集落が確認された。		
		グスク(14世紀後半～16世紀) (第二期)	平地住居址(3・4・5号) 炉址(1～4・7～9号) 石列(5号) 土坑(1・2・4・5号) 楕円状土坑 長楕円状土坑	青磁 タイ産陶器・半練土器 染付・瑠璃釉・三彩 褐釉陶器・黒釉陶器 本土産陶器 骨製品 鉄製品 土錘				
		近世 (第三期)	石列(1～4・6号) 小川跡状遺構 溝状遺構	沖縄産陶器 本土産磁器 円盤状製品 銭貨				

例 言

1. 本報告書は平成8年度事業として、「庁舎建設予定地文化財発掘調査」を委託者北谷町役場、受託者北谷町教育委員会として行った『後兼久原遺跡』緊急発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した25,000分の1は、国土地理院の承認を得て北谷町役場が作成したもの。500分の1の地形図は、沖縄県の承認を得て北谷町役場都市計画課が作成したものである。
3. 遺物の同定は下記の方々に依頼した。記して謝意を表します。
 - 陶磁器：手塚直樹（青山学院大学助教授）
 - 鉄製品：村上恭通（愛媛大学助教授）
 - 石 質：大城逸朗（石川高校校長）
 - 獣 骨：川島由次（琉球大学農学部教授）
 - 人 骨：松下孝幸（山口県立土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム館長）
 - 貝 類：黒住耐二（千葉県立中央博物館 上席研究員）
4. 松下孝幸氏・黒住耐二氏・川島由次氏には玉稿を頂いた。記して謝意を表します。
5. 砂鉄の分析は、浦添市教育委員会の砂鉄比較検討資料の要請を受け、大澤正巳氏へ分析を依頼した。記して謝意を表します。
6. 炭素14年代測定は、地球科学研究所で行った。
7. 本書に掲載した鉄製品のレントゲン写真は沖縄県埋蔵文化財センターで行った。
8. 本書の編集は、山城安生・鳥袋春美で行った。執筆は下記のとおりである。
 - 東門研治 第I章、第IV章1節1A・C・D、第IV章1節2A～D、第IV章1節3A、第IV章1節4E・F、第IV章1節7（1・3）、第IV章1節8、第V章2～12・24・25)
 - 山城安生 第II章、第III章、第IV章1節1B・E・F、第IV章1節2E～G、第IV章1節3B、第IV章1節4A～D・F～I、第IV章1節5～7（2）、第IV章1節9～11、第IV章2節1～3、第V章第1・13～21節、第VI章
9. 本書に掲載されている出土遺物の写真撮影は菊池恒三が行った。
9. 遺物洗浄・接合・実測・復元・集計・図面整理・トレース・図版作成等の資料整理は下記の人員で行った。
 - 前川恵子・仲村まゆみ・上間真寿美・成田真理子・豊里初江・我如古真弓・富平砂綾子・伊波直樹・知念 均・上原 恵・稲垣千明
10. 本書に掲載した後兼久原遺跡の発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物の全ては北谷町教育委員会に保管している。

本文目次

はじめに

巻首図版

報告書抄録

例言

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査経過	3
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第Ⅲ章 層序	10
第Ⅳ章 遺構	34
第1節 グスク時代の遺構	34
1. 平地住居址	35
A. 1号平地住居址	35
B. 2号平地住居址	37
C. 3号平地住居址	39
D. 4号平地住居址	39
E. 5号平地住居址	41
2. 高床式建物址	44
A. 1号高床式建物址	44
B. 2号高床式建物址	45
C. 3号高床式建物址	45
D. 4号高床式建物址	47
E. 5号高床式建物址	49
F. 6号高床式建物址	49
G. 7号高床式建物址	49
3. 4本柱プラン	51
4. 炉址	52
A. 1号炉址	52
B. 2号炉址	52
C. 3号炉址	52
D. 4号炉址	53
E. 5号炉址	53
F. 6号炉址	53
G. 7号炉址	54
H. 8号炉址	54
I. 9号炉址	54

5. 砂鉄貯蔵穴	55
A. 1号砂鉄貯蔵穴	55
B. 2号砂鉄貯蔵穴	55
C. 3号砂鉄貯蔵穴	56
6. 土坑	57
A. 1号土坑	57
B. 2号土坑	57
C. 3号土坑	58
D. 4号土坑	58
E. 5号土坑	58
7. 土壙墓	59
A. 1号土壙墓	59
B. 2号土壙墓	59
C. 3号土壙墓	64
D. 4号土壙墓	64
8. 大土杭	66
9. 楕円状土坑	68
10. 長楕円状土坑	68
11. 畠址	69
12. 鋤痕	70
13. 5号石列	70
14. 柵列状遺構	73
15. 柱穴群	74
第2節 近世の遺構	74
1. 石列	74
A. 1号石列	75
B. 2号石列	75
C. 3号石列	75
D. 4号石列	76
E. 6号石列	76
2. 小川跡状遺構	77
3. 溝状遺構	77
第V章 出土遺物	79
第1節 土器	79
第2節 カムイヤキ	113
第3節 白磁	123
第4節 青磁	136
第5節 染付	175
第6節 瑠璃釉	181
第7節 中国産陶器	186

1.	褐釉陶器	186
2.	黒釉陶器	187
第8節	三彩	190
第9節	タイ産陶器	193
1.	褐釉陶器	193
2.	無釉陶器	193
第10節	タイ産半練土器	194
第11節	本土産陶器	196
第12節	本土産磁器	196
第13節	陶質土器	197
第14節	沖縄産陶器	200
1.	施釉陶器	200
2.	無釉陶器	200
第15節	滑石製品	204
第16節	石器	209
第17節	金属製品	241
第18節	鍛冶関連遺物	248
1.	羽口	248
2.	鉄滓	249
第19節	土錘	254
第20節	玉類	254
第21節	石製品	255
第22節	骨製品	255
第23節	貝製品	257
第24節	円盤状製品	257
第25節	銭貨	259
第26節	煙管	262
第27節	瓦	262
第28節	木製品	263
第29節	貝類遺体	264
第VI章	総括	269
付篇		
付篇1	沖縄県北谷町後兼久原遺跡出土のグスク時代人骨（松下孝幸）	385
付篇2	沖縄における貝類遺体からみた湿地堆積物の検討（黒住耐二）	401
付篇3	後兼久原遺跡 砂鉄貯蔵穴出土の砂鉄分析結果（大澤正巳）	407
付篇4	県内最古（14世紀前半）と推定されたブタ出土骨について （川島由次、三鬼香織、小倉剛）	409
付篇5	後兼久原遺跡の新聞資料	411

目 次

<p>第1図 北谷町の遺跡 …………… 4</p> <p>第2図 後兼久原遺跡の位置と調査範囲 … 9</p> <p>第3図 グリット設定図 …………… 9</p> <p>第4図 層の範囲<1> 第三層 b …………… 15</p> <p>第5図 層の範囲<2> 第三層 c …………… 15</p> <p>第6図 層の範囲<3> 第四層 …………… 15</p> <p>第7図 層の範囲<4> 第五・六層 …………… 15</p> <p>第8図 層序<1>4区 ①R・S-27東壁、 ②S-27北壁、③S-26東壁、 ④S-26北壁、⑤S-25東壁 …… 16</p> <p>第9図 層序<2>4区 ⑥S-25北壁、 ⑦R-26東壁、⑧R-25東壁 …… 17</p> <p>第10図 層序<3>4区 ⑨R-27北壁、 ⑩R-26北壁、⑪Q-26東壁、 ⑫Q-25東壁、⑬R-25北壁 …… 18</p> <p>第11図 層序<4>3区 小川跡状遺構より南側 ⑭P-26東壁、⑮P-25東壁、 ⑯P-26北壁、⑰P-27北壁、 ⑱O-26東壁、⑲O-26南壁 (石列部) …………… 19</p> <p>第12図 層序<5>3区 1号平地住居址周辺 ⑳N-27東壁、㉑N-28南壁、 ㉒N-26・27南壁、㉓N-26 東壁 …………… 20</p> <p>第13図 層序<6>3区 小川跡状遺構より 北側 ㉔O-27東壁、㉕O-27南壁、 ㉖O-27南東壁、㉗O-27東壁、 ㉘O-27石列部(北側)、 ㉙O-27石列部(東側)、 ㉚O-26石列部(北側) …………… 21</p> <p>第14図 層序<7> ㉛No.1 畦 (K-25~28北壁) …………… 22</p> <p>第15図 層序<8> ㉜No.2 畦 (N-23~28北壁) …………… 23</p> <p>第16図 層序<9> ㉝No.3 畦 (Q-25~28北壁) …………… 24</p> <p>第17図 層序<10> ㉞No.3 畦 (Q-21~24北壁) …………… 25</p>	<p>第18図 層序<11> ㉟-1 調査区南壁 (S-27~28)、㊱-2 調査区 南壁(S-25~26) …………… 26</p> <p>第19図 層序<12> ㊲-1 調査区南壁 (S-23~24)、㊳-2 調査区 南壁(S-21~22)、㊴-3 調査区 南壁(R-20) …………… 27</p> <p>第20図 層序<13> ㊵-1 調査区西壁 (Q~R)、㊶-2 調査区西壁 (O~P)、㊷-3 調査区西壁 (M~N) …………… 28</p> <p>第21図 層序<14> ㊸-1 調査区西壁 (K~L)、㊹-2 調査区西壁 (I~J)、㊺-3 調査区西壁 (H~I) …………… 29</p> <p>第22図 層序<15> ㊻調査区西壁 (G・H)、㊼調査区北壁 (G-27・28、H-28) …………… 30</p> <p>第23図 層序<16> ㊽調査区東壁 (G~M-28) …………… 31</p> <p>第24図 層序<17> ㊾調査区東壁 (N~P-28)、㊿調査区東壁 (R・S-28) …………… 32</p> <p>第25図 グスク時代の遺構配置 …………… 35</p> <p>第26図 1号平地住居址(3区) …………… 36</p> <p>第27図 2号平地住居址(4区) …………… 38</p> <p>第28図 3号平地住居址(4区) …………… 40</p> <p>第29図 4号平地住居址(4区) …………… 42</p> <p>第30図 5号平地住居址(4区) …………… 43</p> <p>第31図 1号高床式建物址(3区) …………… 45</p> <p>第32図 2・3号高床式建物址(4区) …… 46</p> <p>第33図 4号高床式建物址(4区) …………… 47</p> <p>第34図 5・7号高床式建物址(4区) …… 48</p> <p>第35図 6号高床式建物址(4区) …………… 50</p> <p>第36図 4本柱プラン(4区) …………… 51</p> <p>第37図 1号炉址 …………… 52</p> <p>第38図 2号炉址 …………… 52</p> <p>第39図 3号炉址 …………… 52</p> <p>第40図 4号炉址 …………… 53</p> <p>第41図 7号炉址 …………… 53</p>
---	--

第42図	8号炉址	54	第78図	白磁<2> 玉縁口縁碗、外反口縁碗、 内彎口縁碗	132
第43図	9号炉址	54	第79図	白磁<3> 内彎口縁碗、直口口縁碗、 外反口縁碗	133
第44図	1号砂鉄貯蔵穴	55	第80図	白磁<4> 外反口縁碗、碗底部、 皿	134
第45図	2号砂鉄貯蔵穴	55	第81図	白磁<5> 皿	135
第46図	3号砂鉄貯蔵穴	56	第82図	青磁<1> 碗(劃花文、 鎬蓮弁文)	157
第47図	1号土坑	57	第83図	青磁<2> 碗(蓮弁文)	158
第48図	2号土坑	57	第84図	青磁<3> 碗(蓮弁文)	159
第49図	3号土坑	57	第85図	青磁<4> 碗(蓮弁文)	160
第50図	4号土坑	58	第86図	青磁<5> 碗(蓮弁文、 雷文帯)	161
第51図	5号土坑	58	第87図	青磁<6> 碗(弦文帯、無文)	162
第52図	1号土壙墓	60	第88図	青磁<7> 碗(外反口縁)	163
第53図	2号土壙墓	61	第89図	青磁<8> 碗(外反口縁)	164
第54図	3号土壙墓	62	第90図	青磁<9> 碗(直口口縁)	165
第55図	4号土壙墓	63	第91図	青磁<10> 碗(底部)	166
第56図	大土坑(4区)	66	第92図	青磁<11> 碗(底部)	167
第57図	楕円状土坑(4区)	67	第93図	青磁<12> 碗(底部)	168
第58図	長楕円状土坑	68	第94図	青磁<13> 皿(櫛描文、口折口縁、 腰折)	169
第59図	畠址及び鋤痕	71	第95図	青磁<14> 皿(稜花、腰折、 外反口縁)	170
第60図	5号石列	70	第96図	青磁<15> 皿(直口口縁、 底部)	171
第61図	柵列状遺構	73	第97図	青磁<16> 皿(底部)、杯、盤	172
第62図	1号石列	78	第98図	青磁<17> 盤(口折口縁、直口 口縁)	173
第63図	溝状遺構	78	第99図	青磁<18> 鉢、瓶、香炉、 泉州窯青磁	174
第64図	土器<1> I群 口縁部	101	第100図	染付<1> 碗	182
第65図	土器<2> II群 A類1	105	第101図	染付<2> 碗	183
第66図	土器<3> II群 A類2	106	第102図	染付<3> 碗	184
第67図	土器<4> II群 A類1 (把手)	107	第103図	染付<4> 皿、鉢、杯、壺	185
第68図	土器<5> II群 A類3(鏝)、 A類2(把手)	108	第104図	瑠璃釉	181
第69図	土器<6> II群 B類、D類、 A類(把手)	109	第105図	三彩 瓶(1. 破片 2. 鴨型 水注模式図)	190
第70図	土器<7> II群 C類	110	第106図	中国産陶器<1> 褐釉陶器	191
第71図	土器<8> I群 底部、 II群 底部	111			
第72図	土器<9> II群 底部	112			
第73図	カムイヤキ<1> 壺	119			
第74図	カムイヤキ<2> 壺	120			
第75図	カムイヤキ<3> 壺	121			
第76図	カムイヤキ<4> 壺、鉢、碗	122			
第77図	白磁<1> 玉縁口縁碗	131			

第107図	中国産陶器< 2 > 褐釉陶器(壺、茶入れ)、黒釉陶器……………	192	第142図	瓦……………	262
第108図	タイ産陶器(褐釉陶器、無釉陶器)、タイ産半練土器……………	195	第143図	木製品……………	263
第109図	本土産陶器 搗鉢……………	196	第144図	層序の柱状模式図……………	274
第110図	本土産磁器(型紙染付、銅版絵付、その他)……………	199	第145図	第一期(11世紀後半~13世紀)の出土遺物……………	276
第111図	陶質土器 急須、耳……………	199	第146図	第二期(14世紀後半~15・16世紀)の出土遺物……………	278
第112図	沖縄産陶器(施釉陶器、無釉陶器)……………	202	第147図	第三期(17世紀以降)の出土遺物……………	280
第113図	滑石製品< 1 > 石鍋……………	207	別刷1-A	6号石列(H・I・J-27)	
第114図	滑石製品< 2 > 二次製品……………	208	別刷1-B	4号石列(J~M-27)	
第115図	石器< 1 >……………	223	別刷1-C	2・3・4号石列(N・O・P-26・27)、小川跡状遺構	
第116図	石器< 2 >……………	224	別刷1-D	2号石列(P~S-25)	
第117図	石器< 3 >……………	225	別刷1-E	2号石列(O・P-25・26、Q-25)	
第118図	石器< 4 >……………	226	別刷2-A・B	柱穴群検出状況(3、4区)	
第119図	石器< 5 >……………	227			
第120図	石器< 6 >……………	228			
第121図	石器< 7 >……………	229			
第122図	石器< 8 >……………	230			
第123図	石器< 9 >……………	231			
第124図	石器< 10 >……………	232			
第125図	石器< 11 >……………	233			
第126図	石器< 12 >……………	234			
第127図	石器< 13 >……………	235			
第128図	石器< 14 >……………	236			
第129図	石器< 15 >……………	237			
第130図	石器< 16 >……………	238			
第131図	石器< 17 >……………	239			
第132図	石器< 18 >……………	240			
第133図	鉄製品< 1 > 刀子、鏃、他……………	246			
第134図	鉄製品< 2 > 釘……………	247			
第135図	碗型鉄滓……………	249			
第136図	羽口< 1 >……………	251			
第137図	羽口< 2 >……………	252			
第138図	羽口< 3 >……………	253			
第139図	土錘・玉類・石製品・骨製品・円盤状製品・煙管……………	256			
第140図	貝製品……………	258			
第141図	銭貨……………	261			

図版目次

巻首図版1	: 1号平地住居址と1号高床式建物址(3区)
巻首図版2	: 上: 遺構集中部検出状況(4区)、下: 高床式建物址(2~7号)と畠址検出状況
巻首図版3	: 上: 畠址、中: 鋤痕、下: R-28(4区)の土層断面
巻首図版4	: 上左: 1号土壙墓、上右: 2号土壙墓、下左: 3号土壙墓、下右: 4号土壙墓
巻首図版5	: ①土器 ②カムイヤキ ③白磁・青磁④タイ産陶器・半練土器 ⑤滑石製品 ⑥砂鉄(右: 後兼久原遺跡左: 内間カンジャーガマ遺跡) ⑦復元遺物(土器・白磁・青磁)
巻首図版6	: 戦前の後兼久原遺跡周辺(1945年米軍撮影 沖縄県公文書館所蔵に加筆)

図版 1	上：遺跡遠景（南東より）中：遺跡遠景（東より）下：現況（庁舎は写真中央）…………… 293		下左：No.3畦の 2 号石列（検出時）	
図版 2	上：1 区東壁（H～J）6 号石列検出状況 中左：I-28 東壁 中右：No.1 畦と 1 区の 6 号石列接点部（27ライン） 下左：1 区調査区西壁（G-27）下右：No.1 畦 2 号石列部（28ライン）… 294	図版 8	下右：No.3 畦の 2 号石列 …………… 299	
図版 3	上：2 区東壁（K～M）2 号石列 中左：No.1 畦と調査区東壁の接点（K-28） 中右：調査区東壁（Lライン） 下：1・2 区東壁・No.3 畦の第 IV 層堆積状況（壁面下部の白色） …… 295	図版 9	上：R-25 北壁（4 号高床式建物址柱穴検出時 手前の黒色部） 中：R-25 東壁（5 号高床式建物址柱穴検出時、手前の黒色部、うかせた柱穴は 4 本柱プラン） 下：R-27 北壁 …………… 300	
図版 4	上：3 区の 2・3 号石列検出状況（左奥が 3 号、中央に小川跡状遺構。西より） 中：2 号・3 号石列（奥が 3 号、手前が 2 号）小川跡状遺構（右端） 下：3 区の石列検出状況（右側奥は、岩盤。南西側より）…………… 296	1：R-27 北壁 2：R-27 北壁（西側の地山落ち込み部） 3：S-26 北壁 4：S-25 北壁（右下は試掘溝） …………… 301	図版 10	1：Q-27 北壁 2：Q-27 東壁（畦の最下は第 V 層） 3：R-27 東壁（畦の最下は第 V 層） 4：S-26 東壁 …………… 302
図版 5	上左：No.2 畦と調査区東壁の接点（N-28） 上右：2 号石列（手前）、3 号石列（後方） 中左：No.2 畦と 2 号石列の接点（N-27 北壁） 中右：No.2 畦と 3 号石列の接点（N-28 北壁） 下：N-27 東壁（1 号平地住居址上の畦、手前は検出中の柱穴） …… 297	図版 11	1：1 号石列（S-28） 2：1 号石列南側部の層序（S-27 南壁） 3：1 号石列に流れ込む第 II 層（R-28） 4：S-28 南壁 5：グスク期の造成部堆積（R-28。地山上は VI 層。米軍掘削穴の南側面） 6：Q・R-27 の堆積（米軍掘削穴の西側面） 7：貝層の広がり（Q・R・S-27） …………… 303	
図版 6	上：4 区の 2 号石列検出状況（南西より） 中：2 号石列の南壁（25ライン） 下左：2 号石列検出状況 下右：2 号石列の南壁（25ライン） …………… 298	図版 12	上：5 号石列・楕円状土坑（左奥）の検出状況 下：R・S-27、S-28 の検出状況 …………… 304	
図版 7	上：No.3 畦（N-25 側から見る。グリット内は第 III 層 d 上面） 中：No.3 畦（2 号石列）・Q-25 東壁（グリット内は地山面）	図版 13	上：R・S-26・27 の柱穴群検出状況 下：2 号平地住居址の検出状況（R-26）…………… 305	
		図版 14	上：1 号平地住居址（西側より） 下：1 号高床式建物址（西側より） …………… 306	

図版15	1 : 1・2号土壙墓検出状況 2 : 1号土壙墓と人骨頭部を挟る4号土坑 3 : 2号土壙墓横断面 4 : 1号土壙墓抉られた頭蓋骨 5 : 2号土壙墓畦南側面 6 : 1号土壙墓畦 7 : 2号土壙墓畦東側面 …… 307	図版25	土器<7> II群 C類 (上:外面、下:内面) …… 316
図版16	1 : 3・4号土壙墓検出状況 (3号は中央、4号は左) 2 : 3号土壙墓 3 : 4号土壙墓と7号炉址 4 : 3号土壙墓両足上の石灰岩礫除去後 5 : 4号土壙墓畦西側面 6 : 3号土壙墓楕円形の微粒砂岩礫除去後 7 : 4号土壙墓畦南側面 …… 308	図版26	土器<8> I群底部、II群底部 (上:外面、下:内面) …… 317
図版17	1 : 1号炉址 2 : 2号炉址 3 : 3号炉址 4 : 4号炉址 5 : 7号炉址と4号土壙墓 6 : 9号炉址 7 : 1号砂鉄貯蔵穴 8 : 3号砂鉄貯蔵穴 …… 309	図版27	土器<9> II群底部 (上:外面、下:内面) …… 318
図版18	1 : 1号土坑 2 : 長楕円状土坑 3 : 2号土坑 4 : 楕円状土坑 5 : 3号土坑 6 : 楕円状土坑内の貝殻集中部 7 : 大土坑28ライン東壁 8 : 大土坑に落ち込む石灰岩礫 …… 310	図版28	カムイヤキ<1> 壺 (上:外面、下:内面) …… 319
図版19	土器<1> I群 口縁部 …… 101	図版29	カムイヤキ<2> 壺 (上:外面、下:内面) …… 320
図版20	土器<2> II群 A類1 (上:外面、下:内面) …… 311	図版30	カムイヤキ<3> 壺 (上:外面、下:内面) …… 321
図版21	土器<3> II群 A類2 (上:外面、下:内面) …… 312	図版31	カムイヤキ<4> 壺、鉢、碗 (上:外面、下:内面) …… 322
図版22	土器<4> II群 A類1 (把手) (上:外面、下:内面) …… 313	図版32	白磁<1> 玉縁口縁碗 (上:外面、下:内面) …… 323
図版23	土器<5> II群 A類3 (鏝)、A類2 (把手) (上:外面、下:内面) …… 314	図版33	白磁<2> 玉縁口縁碗、外反口縁碗、内彎口縁碗 (上:外面、下:内面) …… 324
図版24	土器<6> II群 B類、D類、A類 (把手) (上:外面、下:内面) …… 315	図版34	白磁<3> 内彎口縁碗、直口口縁碗、外反口縁碗 (上:外面、下:内面)、瑠璃釉 …… 325
		図版35	白磁<4> 外反口縁碗、碗底部、皿 (上:外面、下:内面) …… 326
		図版36	白磁<5> 皿 (上:外面、下:内面) …… 327
		図版37	青磁<1> 碗 (劃花文、鎬蓮弁文) (上:外面、下:内面) …… 328
		図版38	青磁<2> 碗 (蓮弁文) (上:外面、下:内面) …… 329
		図版39	青磁<3> 碗 (蓮弁文) (上:外面、下:内面) …… 330
		図版40	青磁<4> 碗 (蓮弁文) (上:外面、下:内面) …… 331
		図版41	青磁<5> 碗 (蓮弁文、雷文帯) (上:外面、下:内面) …… 332
		図版42	青磁<6> 碗 (弦文帯) (上:外面、中:内面) 無文碗 (下左、下右) …… 333
		図版43	青磁<7> 碗 (外反口縁) (上:外面、下:内面) …… 334

図版44	青磁< 8 > 碗 (外反口縁) (上 : 外面、下 : 内面) ……………	335	外面、下段 : 内面) ……………	353	
図版45	青磁< 9 > 碗 (直口口縁) (上 : 外面、下 : 内面) ……………	336	図版63	沖繩産陶器 (施釉陶器、無釉陶器) (上 : 外面、下 : 内面) ……………	354
図版46	青磁<10> 碗 底部 (上 : 外面、下 : 内面) ……………	337	図版64	本土産陶器、滑石製品< 1 > 石鍋 ……………	355
図版47	青磁<11> 碗 底部 (上 : 外面、下 : 内面) ……………	338	図版65	滑石製品< 2 > 二次製品 ……	356
図版48	青磁<12> 碗 底部 (上 : 外面、下 : 内面) ……………	339	図版66	石器< 1 > ……………	357
図版49	青磁<13> 皿 (櫛描文、口折口縁、腰折) (上 : 外面、下 : 内面) ……	340	図版67	石器< 2 > ……………	358
図版50	青磁<14> 皿 (稜花、腰折、外反口縁) (上 : 外面、下 : 内面) ……	341	図版68	石器< 3 > ……………	359
図版51	青磁<15> 皿 (直口口縁、底部) (上 : 外面、下 : 内面) ……………	342	図版69	石器< 4 > ……………	360
図版52	青磁<16> 皿 (底部)、杯、盤 (上 : 外面、下 : 内面) ……………	343	図版70	石器< 5 > ……………	361
図版53	青磁<17> 盤 (口折、直口口縁) (上 : 外面、下 : 内面) ……………	344	図版71	石器< 6 > ……………	362
図版54	青磁<18> 鉢、瓶、香炉、泉州窯青磁 (上 : 外面、下 : 内面) ……………	345	図版72	石器< 7 > ……………	363
図版55	染付< 1 > 碗 (上 : 外面、下 : 内面) ……………	346	図版73	石器< 8 > ……………	364
図版56	染付< 2 > 碗 (上 : 外面、下 : 内面) ……………	347	図版74	石器< 9 > ……………	365
図版57	染付< 3 > 碗 (上 : 外面、下 : 内面) ……………	348	図版75	石器<10> ……………	366
図版58	染付< 4 > 皿、鉢、杯、壺 (上 : 外面、下 : 内面) ……………	349	図版76	石器<11> ……………	367
図版59	中国産陶器< 1 > 褐釉陶器 (上 : 外面、下 : 内面) ……………	350	図版77	石器<12> ……………	368
図版60	中国産陶器< 2 > 褐釉陶器 (壺茶入れ) 黒釉陶器 (上 : 外面、下 : 内面) ……………	351	図版78	石器<13> ……………	369
図版61	タイ産陶器 (褐釉陶器・無釉陶器) タイ産半練土器 (上 : 外面、下 : 内面) ……………	352	図版79	石器<14> ……………	370
図版62	①三彩 (瓶) ②陶質土器 (急須、耳) ③本土産磁器 (碗、小碗、蓋) (上段 :		図版80	石器<15> ……………	371
			図版81	石器<16> ……………	372
			図版82	石器<17> ……………	373
			図版83	石器<18> ……………	374
			図版84	鉄製品< 1 > 刀子・鎌・他 (上 : 表面、下 : 裏面) ……………	375
			図版85	鉄製品< 2 > 釘 (上 : 表面、下 : 裏面) ……………	376
			図版86	鉄製品 (レントゲン撮影) ……	377
			図版87	羽口< 1 > (上 : 側面、下 : 正面) ……………	378
			図版88	羽口< 2 > (上 : 側面、下 : 正面) ……………	379
			図版89	羽口< 3 > (上 : 側面、下 : 正面) ……………	380
			図版90	土錘・玉類・石製品・骨製品・円盤状製品・煙管 ……………	381
			図版91	貝製品 (上 : 表面、下 : 裏面) ……	382
			図版92	銭貨 (上 : 表面、下 : 裏面) ……	383
			図版93	瓦・木製品・碗型鉄滓 ……………	384

表目次

第1表	1号平地住居址 柱穴及び 炉址計測一覧 ……………	37	第33表	本土産磁器出土量 ……………	197
第2表	2号平地住居址 柱穴計測一覧 ……	39	第34表	本土産磁器観察一覧 ……………	198
第3表	3号平地住居址 柱穴計測一覧 ……	39	第35表	沖繩産陶器出土量 ……………	201
第4表	4号平地住居址 柱穴計測一覧 ……	41	第36表	沖繩産陶器観察一覧 ……………	203
第5表	5号平地住居址 柱穴計測一覧 ……	41	第37表	滑石製品出土量 ……………	206
第6表	1号高床式建物址 柱穴計測一覧	44	第38表	石器分類 ……………	209
第7表	2号高床式建物址 柱穴計測一覧	45	第39表	石器層位別出土量 ……………	213
第8表	3号高床式建物址 柱穴計測一覧	45	第40表	石器分類別の素材別出土量 ……	214
第9表	4号高床式建物址 柱穴計測一覧	47	第41表	石器観察一覧 ……………	215
第10表	5号高床式建物址 柱穴計測一覧	49	第42表	金属製品種類別出土量 ……………	241
第11表	6号高床式建物址 柱穴計測一覧	49	第43表	鉄製品観察一覧 ……………	242
第12表	7号高床式建物址 柱穴計測一覧	49	第44表	羽口出土量 ……………	248
第13表	4本柱プラン 柱穴計測一覧 ……	51	第45表	鉄滓・碗型鉄滓出土量 ……………	249
第14表	柵列状遺構 柱穴計測一覧 ……	73	第46表	羽口観察一覧 ……………	250
第15表	土器観察一覧 ① a～h ……	85	第47表	土錘観察一覧 ……………	254
第16表	土器観察一覧 ② a～c ……	92	第48表	ガラス玉観察一覧 ……………	255
第17表	土器観察一覧 ③ a～f ……	95	第49表	銭貨観察一覧 ……………	259
第18表	I・II群土器出土量 ……………	100	第50表	貝類出土量 ……………	265
第19表	I・II群土器 胎土・層位別出土量 ……………	101	第51表	グリット・層位別遺物出土量(カムイ ヤキ) ……………	282
第20表	I群土器 胎土別出土量 ……	101	第52表	グリット・層位別遺物出土量(白磁) ……………	283
第21表	II群土器 器種別(底部)出土量 ……………	101	第53表	グリット・層位別遺物出土量(青磁碗) ……………	284
第22表	II群土器 器種別(口縁部)出土量 ……………	102	第54表	グリット・層位別遺物出土量(青磁皿) ……………	285
第23表	II群土器 把手・鏝出土量 ……	102	第55表	グリット・層位別遺物出土量(青磁盤) ……………	286
第24表	II群土器 器種別(口縁部)・グリッ ト別出土量 ……………	103	第56表	グリット・層位別遺物出土量(染付) ……………	287
第25表	II群土器 底部グリット別出土量 ……………	104	第57表	グリット・層位別遺物出土量(中国・ タイ産陶器) ……………	288
第26表	カムイヤキ観察一覧 ……	115	第58表	グリット・層位別遺物出土量(羽口・ 金属製品・鉄滓) ……………	289
第27表	白磁観察一覧 ……	125	第59表	グリット・層位別遺物出土量(土錘・ 玉類・円盤状製品・他) ……	290
第28表	青磁観察一覧 ……	142	第60表	グリット・層位別遺物出土量(銭貨) ……………	291
第29表	染付観察一覧 ……	177	別刷2-C・D	柱穴計測一覧 (別刷2-C・D)	
第30表	中国産陶器観察一覧 ……	188			
第31表	タイ産陶器観察一覧 ……	194			
第32表	タイ産半練土器観察一覧 ……	195			

第 I 章 調査に至る経緯

第 1 節 調査に至る経緯

後兼久原遺跡の緊急発掘調査は、平成8年度の事業として委託者北谷町役場、受託者を北谷町教育委員会として行ったものである。

後兼久原遺跡の発見は、キャンプ桑江北側半分約40.5haが平成13年度に返還される予定地内の事前の試掘調査によって明らかになったものである。文化財保護行政をスムーズに行う立場から、返還後の諸開発に対応する基礎資料として、返還の内示がほぼ明らかになった平成7年度から事前の試掘調査をおこなった。試掘調査期間は平成7年から平成9年の3年間で、文化庁・沖縄県教育庁文化課の補助事業として行ったものである。平成7年度事業の範囲は20haで、その範囲を30mピッチで140ヶ所の試掘調査を行った。その結果、後兼久原遺跡は試掘穴No.1～7・18～22・25・26・30・139・140の17ヶ所で確認された約1.8haの範囲に存在することが判明した。たまたま、後兼久原遺跡の範囲には、米軍施設内ではあるが返還を見越したかたちで先行して北谷町庁舎（第3図）を建設する計画が持ち上がっていた。平成8・9年度は庁舎建設事業、平成10年5月供用開始の計画であった。庁舎の予定敷地面積が3haで建物面積は2,334㎡であり、その内の南東側25%の約6,000㎡が後兼久原遺跡と重なることが判明した。また、平成8年9月以後の諸事業に係る契約については全国的に消費税3%が義務付けられるということから、早急な対応を余儀なくされた経緯がある。

第 2 節 調査体制

本遺跡の調査体制は次のとおりである。

1996年（平成8年度）

調査主体 北谷町教育委員会
教育長 當山 憲一（平成8年度～平成11年度）
" 瑞慶覽 朝宏（平成12年度～）

調査指導

高宮 廣衛（沖縄国際大学名誉教授）
白木原 和美（熊本大学名誉教授）
平敷 令治（沖縄国際大学教授）
川島 由次（琉球大学教授）
村上 恭通（愛媛大学助教授）
松下 孝幸（山口県立土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム館長）
松下 玲子（山口県立土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム）
磯部 美恵子（ " ）
中野 江里子（ " ）
中野 範子（ " ）
大城 逸朗（石川高校校長）
名嘉真 宜勝（読谷村歴史民俗資料館館長）

當 眞 嗣 一 (沖縄県立博物館館長)
 黒 住 耐 二 (千葉県立中央博物館)
 大 城 慧 (現沖縄県教育庁文化課課長補佐)
 岸 本 義 彦 (沖縄県教育庁文化課)
 金 武 正 紀 (那覇市教育委員会)
 知 名 定 順 (宜野座村教育委員会)
 松 川 章 (浦添市教育委員会)
 安 和 吉 則 (")
 呉 屋 義 勝 (宜野湾市教育委員会)
 仲宗根 求 (読谷村教育委員会)
 上 地 克 也 (南風原町教育委員会)
 大 城 剛 (具志川市教育委員会)
 山 里 昌 次 (大里村教育委員会)

調査協力 ポール・宜野座 (在沖米海兵隊基地施設部不動産事務所 所長)
 和宇慶 修 (在沖米海兵隊基地施設部不動産事務所 不動産専門官)
 ロミー・宇 良 (キャンプコーディネーター事務官)
 クリス・ホワイト (在沖米海兵隊基地環境保全課 自然・文化財保護官)
 平 敷 兼 直 (在米海兵隊基地環境保全課 自然・文化財保護係)
 エリック・ウイリアムズ (在沖海兵隊基地環境保全課 考古学専門官)
 喜友名 朝 重 (在沖海兵隊基地施設営繕部)
 リサ・マクウェイド (在沖米婦人考古学博士)

事務局 文化課長 松 田 盛 (平成8年度～平成9年度)
 " 嘉手納 昇 (平成10年度～)
 文化係長 中 村 愿 (平成8年度～)
 文化課臨時職員 安 里 利 枝 伊 敷 実 鈴 我那覇 智 美
調査総括 文化係長 中 村 愿
調査担当者 文化課主事 山 城 安 生 東 門 研 治
調査補助員 文化課嘱託職員 上 間 真寿美 豊 里 初 江 仲 村 まゆみ
 比 嘉 敦 子 前 川 恵 子
 文化課臨時職員 赤 嶺 健 花 城 可 時 仲村渠 安 子
 與那覇 政 之 上江洲 ま き 大 城 ゆかり

発掘作業員

安慶名 トヨ子 安次富 寛 盛 植 田 据 治 上 原 亀 造
 上 原 ヨ シ 上 間 安 喜 上 間 常 貞 大 城 善 孝
 大 城 米 子 大 田 智恵子 嘉陽田 徳 吉 我如古 清
 喜屋武 盛 基 金 城 良 夫 久 場 千代子 久 場 フミ子

久保シズ子	郡山隆彦	後藤昭	島袋栄孝
下地寛勝	砂川榮	新城正雄	平良松芳
澤岷正吉	知念勇進	當間嗣明	渡口栄孝
渡久地政英	仲嶺真栄	名嘉實	仲宗根順次
中庭謙二	仲本潤一	仲村渠清三郎	比嘉泰子
福島広義	普久原フミ子	北郷シズ子	真栄城兼功
宮里盛安	宮平孝重	湧田セツ子	宮里キミ子

(以上、沖縄市シルバー人材センター)

金城志哉 喜友名勇人 棚原和宏 (以上、沖縄国際大学学生)

第3節 調査経過

今回の調査は町の新庁舎建設がキャンプ桑江北側返還予定地に計画された。その候補地は事前に試掘調査で発見された後兼久原遺跡と重なることから町との協議により緊急発掘調査を実施することとなった。

調査は1996年6月19日から1997年2月1日まで行った。遺跡はキャンプ桑江の略中央部の東側に位置し、試掘調査で標高30mと標高15mの石灰岩台地が形成された洪積世層の切れ目から、二次的に堆積した沖積世層の平坦に移行する地域に形成されていることが判明した。その範囲は略南北210m、東西120mで約11,258㎡である。その内の約1/2である6,210㎡が新庁舎建設に重なることから当該範囲を調査地とした。

調査を行うにあたり、本遺跡は米軍基地内であることから米軍人やその関係者の安全を図るため当該範囲をフェンスで囲み、また現場事務所の設置を行った。その後、米軍の基地建設に伴う埋土の除去をバックホウで行った。掘削にあたっては、懸念されたのが赤土流出で、その対策として「沖縄県赤土等流出防止条例施行規則」に基づき、調査区北西側に貯留池(25m×11m×4m)を設けた。

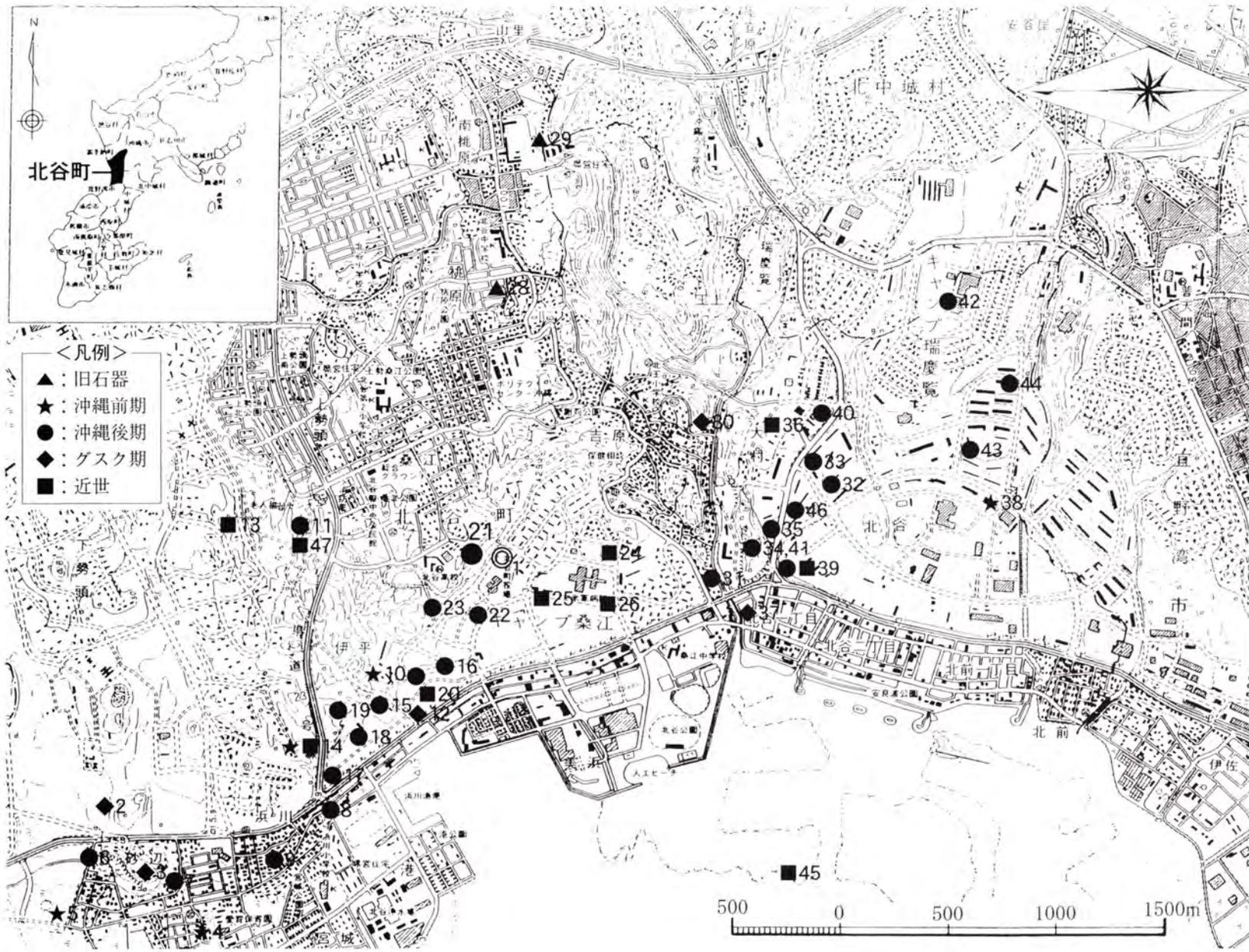
米軍による埋土は厚いところでは1.2～2.5m程で、平均して1mはあり、その除去作業だけでも約10日間を費やした。除去作業は調査範囲の南東側より北西側に向かって行い、包含層を確認していった。その際、範囲を4区画し、北西側から南東側に、1区～4区とした。グスク期の包含層は3区・4区に存在することが確認された。グリット設定(第3図)は、調査区の丘陵側に北西から南東方向に走る基地内道路に沿うように基準ラインを設け、このラインを29ラインとした。このラインに直交するように北東から南西方向にラインを設定し、10m×10mのグリットを72ヶ所設定した。グリット番号は北西から南東へアルファベット(GからS)、南西から北東へ算用数字(23から29)とした。各グリットの呼称は南西・南東角を指標とした。

掘下げは4区より開始した。本区の北西側に米軍による廃材処理のための大穴(米軍掘削穴)があり、その断面からグスク期の包含層が厚く堆積し柱穴を伴うことが判明した。

調査期間中、庁舎建設の着工が10月に行われるため、1・2区の調査を早急に行わなければならない、作業員を増員して調査にあたった。両区は3・4区から延びる近代の石列が及ぶのが確認された。しかし、グスク期の遺構はなく遺物も少数の出土となる状況で、遺跡の範囲が及ばない



- <凡例>
- ▲: 旧石器
 - ★: 沖縄前期
 - : 沖縄後期
 - ◆: グスク期
 - : 近世



- | 番号 | 遺跡 |
|----|-----------------|
| 1 | 後兼久原遺跡 |
| 2 | カーシーノポントン遺物散布地 |
| 3 | 砂辺貝塚 |
| 4 | クマヤー洞穴遺跡 |
| 5 | 砂辺サークバル貝塚 |
| 6 | 砂辺サークバル遺跡 |
| 7 | 砂辺ウガン遺跡 |
| 8 | 浜川ウガン遺跡 |
| 9 | 浜川千原岩山遺物散布地 |
| 10 | 伊礼原C遺跡 |
| 11 | 伊礼伊森原遺跡 |
| 12 | 伊礼原B遺跡 |
| 13 | 上・下勢頭区古墓群 |
| 14 | 大作原古墓群 |
| 15 | 伊礼原D遺跡 |
| 16 | 伊礼原E遺跡 |
| 17 | 千原遺跡 |
| 18 | 平安山原A遺跡 |
| 19 | 平安山原B遺跡 |
| 20 | 伊礼原A遺跡 |
| 21 | 桑江遺物散布地 |
| 22 | 小堀原遺跡 |
| 23 | 桑江ノ殿遺物散布地 |
| 24 | 伊地差久原古墓 |
| 25 | 前原古島A遺跡 |
| 26 | 前原古島B遺跡 |
| 27 | 前原古墓群 |
| 28 | 鹿化石出土地 |
| 29 | 桃園洞穴遺跡 |
| 30 | 吉原東角双原遺物散布地 |
| 31 | 池グスク |
| 32 | 長老山遺物散布地 |
| 33 | 玉代勢原遺跡 |
| 34 | 北谷城 |
| 35 | 北谷城第7遺跡 |
| 36 | 山川原古墓群 |
| 37 | 白比川河口遺物散布地 |
| 38 | 稲千原遺跡 |
| 39 | 北谷番所址 |
| 40 | 後原遺跡 |
| 41 | 北谷城遺跡群 |
| 42 | 横嵩原遺跡 |
| 43 | 大道原A遺跡 |
| 44 | 大道原B遺跡 |
| 45 | インディアン・オーク号の座礁地 |
| 46 | 塩川原遺跡 |
| 47 | 上勢頭古墓群 |

第1図 北谷町の遺跡

ことが判った。その後、両区は庁舎建設側に明渡し工事が開始された。調査は3・4区を中心に行うこととなった。

3区では近代の石列や小川跡状遺構が確認され、グスク時代では11世紀後半～13世紀と考えられる平地住居址と高床式建物址がセットで検出され、良好な状況でその配置も確認された。4区では近代の石列、小川跡状遺構、グスク時代の貝層（第Ⅲ層b）や柱穴群、埋葬人骨、砂鉄、貯蔵穴、平地住居址、高床式建物址、畠址などが確認された。両区は11世紀後半～13世紀代から近代までの様子が窺え、特に平地住居址・高床式建物址・畠の配置が見られ土地利用が把握できた。また、出土遺物は土器や中国産陶磁器、滑石製石鍋片、カムイヤキ、本土産陶器、石器、鉄製品、銭貨など多種多様な遺物が得られた。

4区で検出された4体の埋葬人骨のうち成人2体（1・2号人骨）、幼児1体（3号人骨）と土壙墓のレプリカを作成した。また、3区検出の1号平地住居址は遺構剥ぎ取りを行った。幼児人骨のレプリカ作成後、遺跡の現地保存のため、砂を厚さ40cm程覆い埋め戻しを行い、1997年2月1日に調査を終了した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

北谷町は沖縄本島の中部の東シナ海に面した西海岸側にあり、県庁所在地である那覇から北に直線距離で約16kmに位置している（第1図）。本町の総面積は、東西に4.31km、南北に5.91kmを測り、南北に細長い略方形状の行政区で、総面積13.62km²である。北側は嘉手納町、東側は沖縄市、南東部は北中城村、南側は宜野湾市と接し、西側は東シナ海に面している。北側には、戦後嘉手納町との分村を余儀なくされた経緯の要因である嘉手納基地が拡がり、中央部や南側の沖積平野部には米海兵隊キャンプ桑江・キャンプ瑞慶覧があり、町域の56%がいまだ米軍基地として存在する。戦中、北側の読谷村、嘉手納町から北谷町域の直線約12kmの海岸線から米軍は上陸した歴史があり、戦後はそのまま駐屯したかたちで町域の90%が接收された経緯がある。その地域は海岸線の平坦地の沖積平野部を多用していることから、戦前の集落地域に重なるところに戦後沖縄の諸問題がある。

地勢を概観すると、北側は標高約10～20mの微高地が続き、そこには米空軍嘉手納飛行場が拡がっている。東側は標高約100mの海成段丘の縁にあたり、西側へしだいに低くなる東高西低の地形で、沖積平野は海成段丘に囲まれるように形成されている。等高線の数値で示すと、東から西側へ、標高100～120mが3.96%、80～99mが4.99%、60～79mが14.90%、40～59mが11.53%、20～39mが26.63%、20m未満が43.98%、であり標高40m未満が約70%、80～40mが26%、80～120mが9%と低平な地勢である。

北谷町域の地質は、珊瑚石灰土質、国頭礫層、泥灰岩土層、沖積土層から成り立っていて、一見、複雑な地層を形成しているかのように見えるが、じつは沖縄本島の基幹を形成している2つの地質、北部地域の国頭礫層と南部地域の島尻層群の境目が、本町の北側に見られるカルスト残丘である所の境目に起因している。新しい石灰岩丘陵部の形成後、古い国頭礫層の土壌が北側か

ら流れ込んだ結果だと言われている。その南限が西流する白比川を境としている。よって、北側の上勢頭・下勢頭は、国頭礫層と隆起石灰岩が露頭し、町域のほぼ中央上部にあたる謝苺一帯では国頭礫層であり、南側の玉上^{たまがみ}一帯では泥岩土層（クチャ）、台地部や傾斜面では島尻マージが分布している。西海岸の低地部の北谷・北前一帯は海成沖積土層が分布している。

後兼久原遺跡は、北谷町字桑江小字後兼久原と小字小堀原に所在する。

後兼久原遺跡は前述したキャンプ桑江基地内の中央部、東隅にあり、現況は北谷町役場庁舎の南東角にあたる（第2図）。本遺跡は、標高約30m前後の隆起石灰岩丘陵を北東側背後にもち、崖で一段低くなり標高約20mの高さで舌状にとび出した面積約3,000㎡の小丘陵地域を遺跡の中心として、それから南西方向にゆるやかに広がる斜面部から標高約4～5mの沖積平野部に形成されている。いずれも柱穴をもつことから丘陵部から沖積平野部に拡がるグスク時代の生活址と考えられ、総面積は約11,258㎡と判断される。

南西部に拡がる沖積平野部は、平成7年度の試掘の結果から、遺跡の南西側から40数mまで海岸がせまり、当時の海成砂丘が略南北方向で遺跡の20数mのあたりに存在していた（第2図）。さらに本遺跡の形成時以前にも数mの海岸砂が堆積していた。このことは、遺跡の名称でもある「後兼久原（クシカニクバル）」の「カニク」が、方言で砂地の意味であることと合致しており、桑江の本集落から後方の砂地域という呼称が、小字名としてその地域の特性を示しているものと考えられる。

本遺跡背後の標高約30mの段丘は、北西から南東ラインを軸として迫り、南西側に拡がる沖積平野部との境は断層として痕跡を留めているとのことである。その石灰岩丘陵から沖積平野部の境目には数条の谷間が大小開析され、湧水や小川が流れている。特に北西約200mには町内でも水量の多い湧泉「ナルカー」があり、現在でも米軍が工業用水として吸水している。そこはまた、河川の奈留川も合流する場所で、上流域には「ウキンジュガマ」（洞穴）があり、さらに上流の源泉は「ウキンジュカー」がある一連の水系で、北谷城の攻防で破れた大川按司が隠れ避難した地域だとの伝承が残る。この下流域の麓には「トントングムイ（溜池）」、「クムイグワー」、「メーダグムイ」などの水を溜めて生活用水に用いた呼称が点在し、小字名としてクムイバル（小堀原）が奈留川の蛇行流域として、戦前には水田が存在していたようである。

遺跡の東南東側約100mに直径約20m、高さ数mの独立した小丘があり、俗称で「テンブス山」（方言でテンブスは「へそ」の意）と呼ばれた場所があり、そこには拝所があったという。聞き取り調査をした際に、この小丘と背後の丘陵部の間に、子供が飛び越えられる程度の小川が略北上して流れ、遺跡のほぼ中央に位置する現在の拝所付近から北西方向の左に向きを変え、サトウキビ工場の側を抜けて海へ向う流れであったという。

この遺跡のほぼ中央部に所在する拝所は、現在地よりも南約10m下方が本来の場所であったと言う。「メーマシの火の神」といい、一氏で管理しているというが、その由来については不明である。ただ、1713年編纂の『琉球国由来記』巻14に北谷間切の年中祭祀の中で、桑江村の「桑江之殿」と「ミヤマシ原之殿」があり、いずれも桑江村百姓の供物と平安山巫が祭祀を司るとある。メーマシに相当するものであろうか。さらに、1623年編纂である『おもろさうし』（15巻）には「きたたん」・「くわい」（桑江）が記されていて、記録によっても桑江集落は古い集落のひとつであるが、伝承による古島、あるいは古村というのが聞き取れないのが現状であ

る。

グスク時代の遺跡のうち、北谷町内でグスクの名称をもつものは本遺跡から南側に位置する『北谷城』(第1図34)が唯一である。南約1kmには北谷城の立地する丘陵と、それに沿って西流する白比川河川によって、後兼久原遺跡が立地する北側の字桑江・伊平・平安山の集落(キャンプ桑江)の沖積平野部と、南側の字北谷・伝道・玉代勢の集落(キャンプ瑞慶覧)があった沖積平野部とを南北に分ける分水域になるという。

北谷城は、12世紀に始まり15世紀中頃に終焉したと考えられている。城は、白比川沿い一帯に形成された石灰岩堤地形が海側へ突き出た、標高約44mの舌状台地の先端部に築かれている。この丘陵には、その他に12ヶ所の遺跡が点在し、南の伝道集落の15世紀の丘陵遺跡、その南東側の標高約16mの緩やかな斜面地に12世紀、14世紀～16世紀、近世～現代の複合遺跡である玉代勢原遺跡がある。さらに南側の北谷ムラの古村と言われる前城の15世紀の塩川原遺跡がある。その南西側には、グスク時代の遺物が採集され、船着場の伝承の残る長老山遺物散布地がある。

後兼久原遺跡の所在する沖積平野部には、平成7～9年度に行った試掘調査や平成11年度から行われている範囲確認調査によって沖積平野部とその境目で7つの遺跡が発見されている。北側約250mの奈留川を越えた下流域には、本遺跡と同時期でほぼ同様な12世紀ごろの平地住居址や高床式建物址が発見され、その下位に弥生中期相当期の貝層が発見された小堀原遺跡がある。さらに北側に続く平野部や丘陵との境目にあたる地域に、縄文時代早期に相当する前I期からグスク時代までの全時期の複合遺跡である伊礼原C遺跡が発見されている。同遺跡は15世紀中ごろのグスク時代の平地住居址も検出されるが、遺跡の中でも曾畑式土器が出土した低湿地からは、木製品・堅果類・種子などの植物遺骸などが出土する最も重要な遺跡である。さらに徳川の北側対岸に広がる15～16世紀の柱穴群である平地住居址の伊礼原D遺跡、それと同時期である国道58号と県道23号線(国体道路)が接する角に位置する千原遺跡が存在している。

国道58号と、県道23号線(国体道路)が接する北側に隆起石灰岩のカルスト残丘が高さ約10m、直径約10mの円筒状にそびえ立っている。その南側麓周辺でくびれ平底土器が採集される。周辺部には生活の様子が見えなく、崖上からの投棄物と思われ、祭祀遺跡の可能性が考えられている浜川ウガン遺跡がある。

北側の砂辺地域も遺跡の多い地域である。砂辺集落の背後には標高約38mの独立丘陵があり、それを取り囲むように遺跡が点在している。その丘陵には沖縄編年前IV・V期とグスク時代の遺跡である砂辺貝塚が位置し、丘陵上部で前V期の縄文時代後期相当の配石住居址や、北西側の拝所(伊平屋森)の近くではグスク時代の遺物が出土する。

この丘陵の北側には、グスク時代の6軒の柱穴群グループと2軒の高床状施設のグループに分けられる柱穴群や近世の石列などが発見されグスク土器・石器・カムイヤキ・白磁・羽口・鉄滓・滑石製品などが出土する砂辺サークバル遺跡がある。この遺跡は、4段の海岸段丘が形成されているところに位置している。その北西側には後II～III期の砂丘遺跡と考えられる砂辺サークバル貝塚がある。

砂辺貝塚が位置する丘陵から南西側に続く標高22mの小丘陵には、グスク土器が採集された砂辺ウガン遺跡があり、砂辺の殿(トゥン)、神井戸、ノロ墓が存在し砂辺集落の聖域とされて

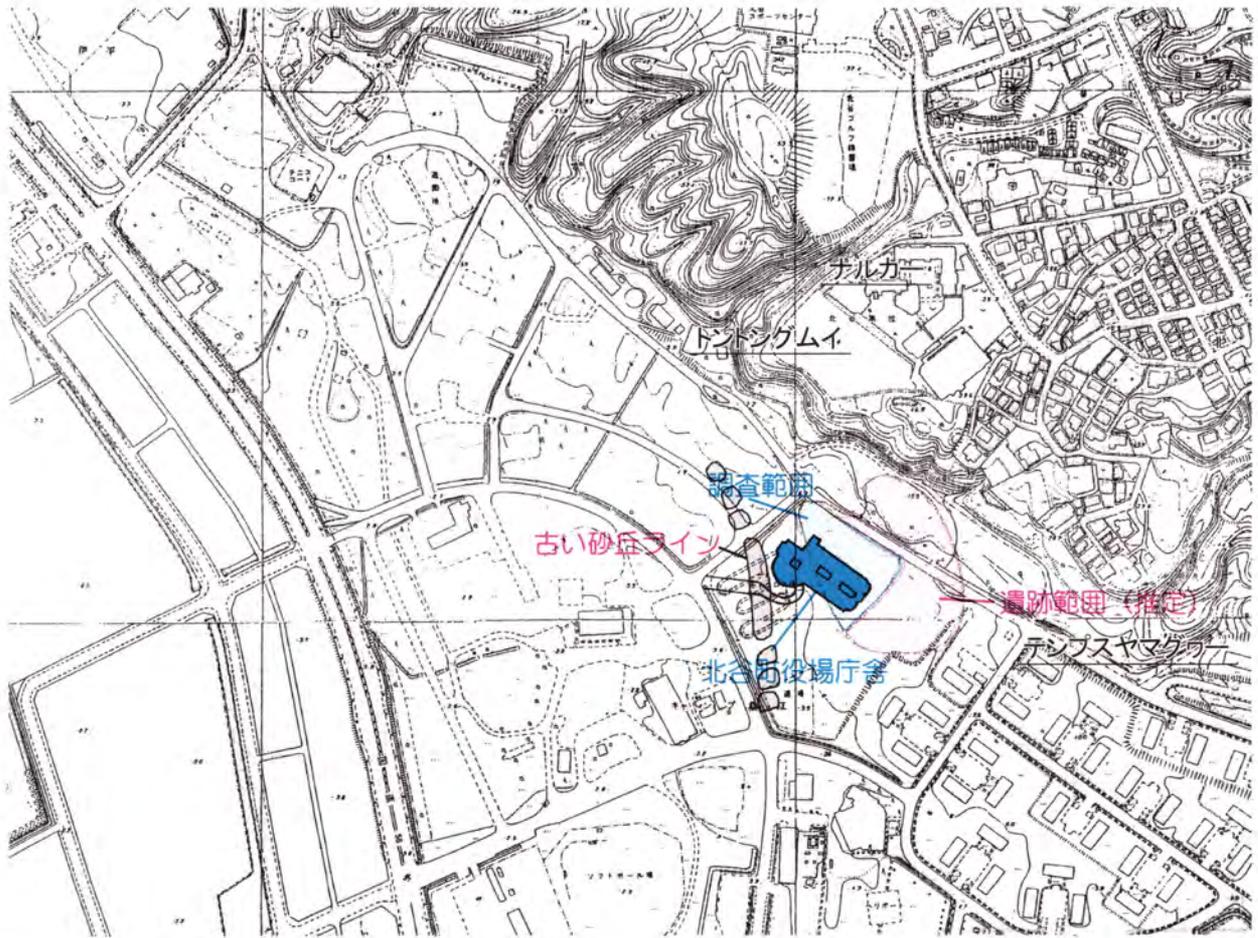
いる。また砂辺集落の南西側、海岸近くの標高7mの石灰岩段丘にできた陥没ドリーネの縦穴を入口にもつ鍾乳洞にクマヤー洞穴遺跡がある。この洞穴遺跡では、縄文時代前期・後期・晩期に相当する3つの時期とグスク時代に相当する時期、近世の時期の5期があり、4期目にあたるグスク時代の遺物は、かなり良質な青磁・白磁の香炉や碗が出土し、特定な人と関わる祭祀場所として利用されたと考えられている。

この様に、海側や平野部に見られるグスク時代の遺跡の分布とは異なり、石灰岩丘陵の奥まった内陸部の谷間を階段状に野面積みの石列で横断し、柵状に区画した遺構が発見された。12世紀～16世紀の水田が考えられる伊礼伊森原遺跡がある。

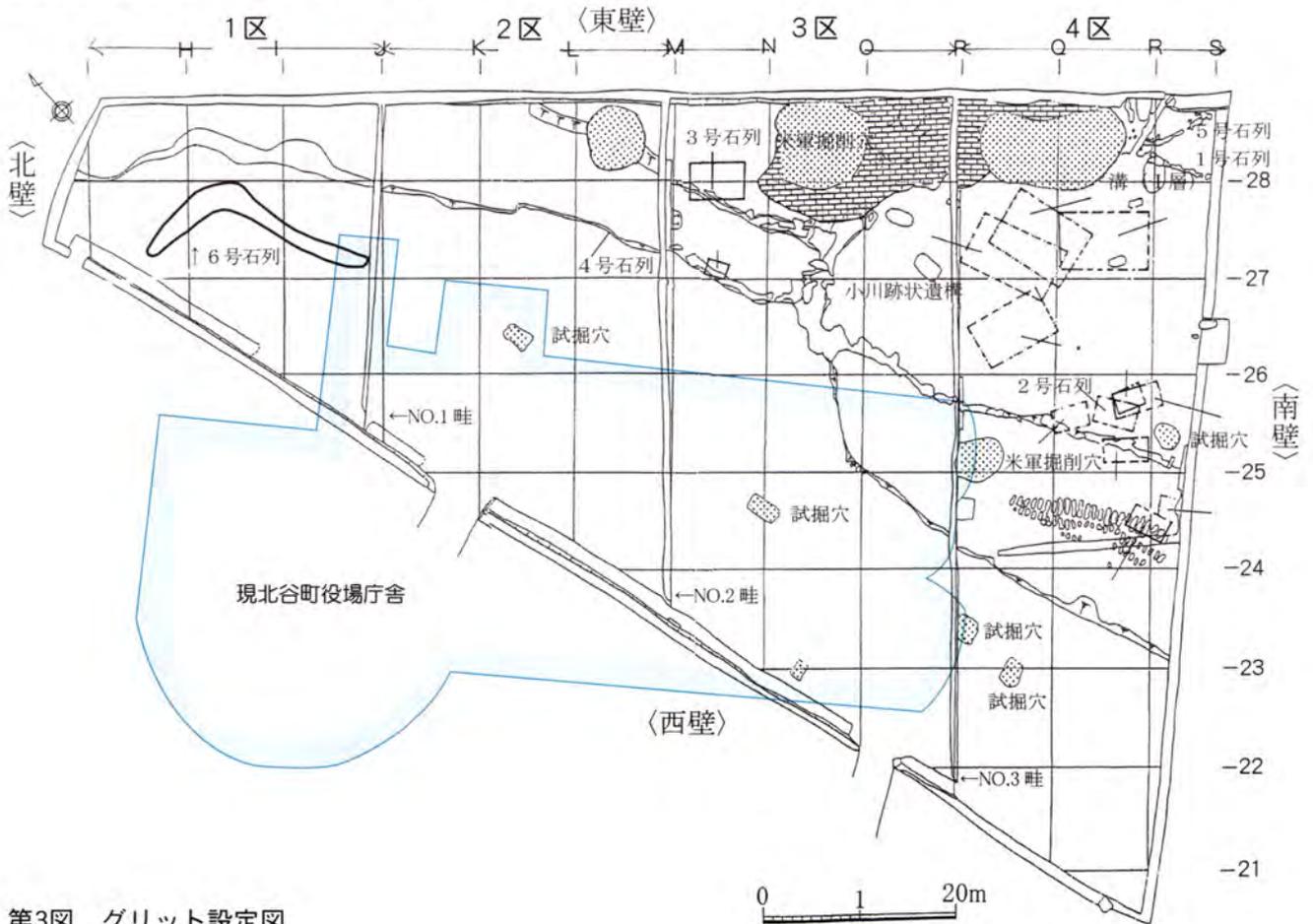
このように後兼久原遺跡が位置する沖積平野部には、グスク時代や各時期の遺跡があり、先史時代以来人々が生活しやすい環境であったことがうかがわれる地域である。

《参考文献》

- 中村 愿・與那覇政之ほか 1997.10『後兼久原遺跡展』北谷町教育委員会
『北谷村誌』1961年 北谷町役場
『北谷町史 第二巻 資料編1 1986年 前近代・近代文献資料』
『北谷町史 第三巻 資料編2 民俗 上』1992年 北谷町役場
『北谷町史 第三巻 資料編2 民俗 下』1994年 北谷町役場
『北谷町史 第六巻 資料編5 北谷の戦後』1998年 北谷町役場
『北谷町の自然・歴史・文化』1996 北谷町教育委員会
仲松弥秀・島袋伸三・名護清和 1985『北谷町海岸・海域地名－調査報告書』北谷町役場
安里嗣淳・島 弘・岸本義彦 1987『砂辺サークバル遺跡』沖縄県教育庁文化課
中村 愿・田場勝也 1994『北谷町の遺跡－詳細分布調査報告書－』北谷町教育委員会
中村 愿ほか 1993『玉代勢原遺跡』北谷町教育委員会
宮脇 昭ほか 1986『北谷町の植生』北谷町
山城安生ほか 1998『伊礼伊森原遺跡』北谷町教育委員会



第2図 後兼久原遺跡の位置と調査範囲



第3図 グリット設定図

第Ⅲ章 層 序

今回の調査による層の広がりとは平成7年度の試掘結果から、第Ⅰ・Ⅱ章でも述べたように遺跡は、調査区東側の標高約30mの丘陵から一段低くなった、標高約20mの小さく迫り出す台地状を呈する部分と、その境にあたる緩斜面から平地部にかけてグスク時代の遺物包含層が堆積する。

層序は客土を含めて8枚ある。グスク時代の層は第Ⅲ～Ⅵ層で、第Ⅳ層は、ヌノメカワニナ（淡水産貝）を含む灰白色を呈するシルト質土層の間層である。第Ⅲ層はa～hの8枚、第Ⅴ層はa・bの2枚、第Ⅵ層はa・bの2枚に細分され、第143図に示したように、第Ⅲ層d～第Ⅵ層の第一期（11世紀後半～13世紀）、第Ⅲ層a～cの第二期（14世紀後半～16世紀）、第Ⅰ・Ⅱ層の第三期（近世）に分けられる。

調査範囲内の堆積は、調査区に迫り出した台地部にあたる岩盤部分、4区で検出された溝状遺構（近世）・1号石列（近世）、5号石列（グスク時代）、3区では小川跡状遺構（別図1-C）（グスク時代～近・現代）・2～4号石列（近世）で途切れた部分がある。そのため、これらの遺構の位置を指標にして述べる。層序を第8～24図、堆積範囲の略図を第4図～第7図、グスク時代の遺構配置を第25図に示す。尚、表土剥ぎの際、安全対策のために段掘りを行った調査範囲の東西南北壁（第18～24図）とNo.1～3畦（第14～17図）は米軍客土下部からの堆積を示したものである。以下、各層について記述する。

客土

戦後の米軍による大規模な造成土で、発掘調査範囲の全面に認められる。層厚は東側で約1.2m、西側では約2.5mと厚くなる。造成は、O～S-28にまたがっている台地部や旧表土・第Ⅱ層を削平しており、大別すると調査区南壁に見られた旧隊舎跡のアスファルトの上・下で2度行われたようである。

調査範囲内には、米軍による掘削穴（4ヶ所）や送水管と思われる鉄製パイプが埋設されていた。米軍掘削穴はM-28で約8m×8m、O-27・28で約10m×10m、Q・R-27・28では約16m×8mで、いずれも深さが約6～8mもある大穴で廃材等が投棄されていた。Q・R-27・28では第Ⅲ層・第Ⅴ・Ⅵ層の広がりを切っていた。また、Q-25では約4m×3.5mの米軍掘削穴に木箱が埋められていた。鉄製パイプを埋設した溝のうちR・S-28の東壁からN-22の西壁にかけて延びていた幅約60cm、深さ約70cmの溝はR・S-28で第Ⅴ層に達していた。S-24南壁から北に延びる幅1.1m深さ約60cmの溝は地山に達している。

第Ⅰ層

旧表土。調査区の東側は米軍の造成で失われ、28ラインから西側に堆積が残る。残存部の厚さは約30cmで、3枚（a・b・c）に細分される。4区の西側では近世農耕に伴うものと考えられる段差が第Ⅰ層a・bにあり、3～4区にかけて第Ⅰ層cで溝状遺構が検出された。

第Ⅰ層a：暗茶褐色土層。層厚は約30cmで、4区の25ラインから西側に堆積する。S-22杭付近にある段差（第19図）とQ-23北壁に見られる中央の落ち込み（第17図）が幅約3.3m、深さ約1.1mの地山を挟む溝でつながっており、この中は暗灰褐色粘質土が堆積していた。

第Ⅰ層b：濃暗茶褐色土層。層厚は約20cmで、4区の西側（S-22～24）に堆積する。本層

には表土剥ぎの際に検出された4区南壁23ライン東側から北側にのびている段差(第3図)は、O-26杭の位置で東に向きを変え2号石列と接するようにつづいている。この段差は近世の畑地に関連したものと考えられる。

第I層c：淡褐色土層。層厚は約20～30cmで、28ラインから西側に堆積している。3・4区にかけて28ラインとほぼ平行して溝状遺構が検出された部分は、層厚は約60cmである。

第II層

近世の層で、厚さ約20～50cmで7枚に細分されるが、土色で大きく分けると上部(a～c)の黄褐色と下部(d～g)の灰白色の2つに分けられる。1～4・6号石列、小川跡状遺構が検出された。

第II層a・bは26ラインから東側、第II層c・dは調査範囲のほぼ全域に堆積する。第II層e・fは主に1区に堆積し、第II層gは2・4号(第3図)石列から西側に堆積する。第II層fは第IV層に類似した土質で、この時期にも湿地があったと考えられる。

第II層a：淡黄褐色土層。層厚は約20～40cm。調査範囲の東側に堆積している。

第II層b：黄褐色土層。層厚は約20cmで、調査範囲の東側に堆積している。

第II層c：黄褐色土層。層厚は約20～50cmで、調査範囲のほぼ全域に堆積し、東側から西側に厚さを増している。2～4号石列部ではやや厚く堆積している。

調査区の東側ではマンガンを多く含み西側では少ない。

第II層d：3号石列を境に東側(丘陵側)では淡灰白色を呈し、西側(平地部)ではやや褐色を呈する混砂土層で、厚さ約20～40cmである。

第II層e：暗褐色土層でやや粘質である。厚さ約15～20cmである。

第II層f：淡暗灰白色のシルト質土層。層厚は約15～20cm。1区で第IV層の上位にあり、中央部から北側に堆積する。第IV層に類似し、ヌノメカワニナを含むことから湿地であったと考えられる。

第II層g：淡暗灰色土。層厚は約15～30cm。1～4区の西側に堆積する。

第III層

グスク時代の遺物包含層で、調査範囲内の堆積は3・4区東側(O～S-28)にまたがる台地の周囲で、丘陵側から平地部にかけて広がっている。厚さ約20～90cm、a～hの8枚に細分され、第III層a～c、第III層d・e、第III層f～hのまとまりで異なる様相を呈していた。

R・S-28では第III層bと第V層の間に地山の土で人工的ではないかと考えられる橙黄褐色土層の堆積がある。

第III層a～cは、O～S-28にある台地の周囲で2～4区にかけて広がるが、この台地を境に北側では淡褐色、南側は暗黒褐色を呈している。前者は3号石列の東側(丘陵側)にあたり、緩やかな斜面から平地にかけて堆積し、同石列からL-28中央部までの広がり北・西側には見られない。後者は2号石列の東側(丘陵側)にある。第III層a～cの堆積の内第III層cは、R・S-28で検出された5号石列(第III層b)を境に北側になく(第24図㊸)、同石列の南側では堆積している(第18図㊹)。この5号石列北側は、この部分のみで見られる橙黄褐色土層(地山の土)が堆積していた。この層は第III層bと第V層の間にあり、同層の上面で第III層bの遺構が検

出され、同層の下に堆積する第Ⅴ層にふたたび第Ⅲ層の土が堆積する柱穴がある。上面が橙黄褐色土層に切られたような状態であったことから人工的な整地が行われたのではないかと考えられた。

第Ⅲ層cの広がり、1号石列や溝状遺構の部分で削平され途切れ、5号石列の南側の一部には見られず第Ⅲ層a・bのみが堆積する。第Ⅲ層cはやや西側の緩やかな傾斜が始まる部分から始まり、2・3号石列によって西側への広がり途切れている。28ライン周辺の第Ⅲ層a・bのみが堆積する平坦部は、Q-27中央部から南東側とS-27で第Ⅴ層上面と地山上面がほぼ同レベルとなる部分である。

第Ⅲ層d・eの堆積は、2・4号石列に沿うように南北に幅約15~20mで帯状に広がっている。丘陵側から始まり同石列部分までの広がり、2号石列の3区側(第11図⑮)、4号石列の下位(第12図⑳)に堆積が見られるが、同石列から西側は途切れている。

第Ⅲ層f~hは、5号石列南側の一段低くなったS-28の一画にのみ堆積する。第Ⅲ層fの上位は第Ⅲ層cである。

以下、各層について述べる。

第Ⅲ層a：赤みがかった暗黒褐色を呈する。層厚約15cmで西側へ薄くなる。3区では丘陵側からの広がりが3号石列で途切れ、4区では、前述のようにS-28の1号石列部分で切れ、Q~S-27から再度堆積している。5号土坑が検出された。

第Ⅲ層b：暗黒褐色土層。層厚約20cmである。3区では3号石列で途切れており、4区では、前述のようにS-28の1号石列部分で一端切れ、Q~S-27から再度堆積し2号石列によって切られている。4区では、R・S-27にかけて約3~4mの幅で南北方向に広がる貝殻を多く含んだ遺物集中部が検出された。下面では地山まで至っていた。遺構は1~4・8号炉址、4号土坑や柱穴群などが検出された。

第Ⅲ層c：暗黒褐色土層。層厚は約20cmである。4区では、5号石列の北側には見られないが、同石列の南側に堆積(第5図)する。この部分は、前述のように1号石列部と第Ⅰ層cの溝状遺構によって切れ、Q・R-27西側部分から再度堆積が始まる。下面では第Ⅴ層、東側やS-27西側では地山上に堆積している。遺構は7・9号炉址(炭素14年代測定結果は $660 \pm 50 \text{BP}$)^(註1)、1・2号土坑、柱穴群などが検出された。

第Ⅲ層d：褐色土層。層厚は約20cm。削るとさらさらとした感触の土質である。3・4区では、2・3号石列より東側に幅約15m程度で堆積する。O-26・27で検出された小川跡状遺構から北側では4号石列の東側(丘陵側)に堆積するが(第12図㉑・㉒)、その範囲は北側にいくにつれて狭まりM-28東壁の中央部付近までである。西側への堆積はNo.2畦(第15図㉓)で見ると3号石列で途切れ、小川跡状遺構から南側の大半は2号石列で途切れているが、P-25東壁(第11図⑮)・P-26北壁(第11図⑯)では2号石列の下位にあり、ここでは第Ⅲ層dが第Ⅲ層eより西側に広がる。本層から遺構は検出されていない。

第Ⅲ層e：やや灰色がかった褐色土。層厚は約10cm。3・4区では第Ⅲ層dと同様な堆積範囲であるが、2区東壁では第Ⅲ層dよりも北側に広がっておりK-28までである。

西側への広がりには3号石列部（第15図㉔）では僅かに石列を越えるが、ほぼ同石列付近で途切れる。4本柱プラン、3号土壙墓、1号砂鉄貯蔵穴、3号土坑が検出された。

第Ⅲ層 f：多量の炭を含む暗黒褐色土層。層厚は約10cm。S-28で5号石列南側（第18図35の①）の一画にのみ堆積する。本層出土の木炭による炭素14年代測定の結果は750±50BPであった^(註2)。

第Ⅲ層 g：茶褐色土層。層厚は約15cm。堆積範囲は第Ⅲ層 f よりも狭い。

第Ⅲ層 h：黒褐色土層。層厚は約20cm。第Ⅲ層 f・gと同様にS-28で5号石列の南側の一画にのみ堆積する。1号石列付近で切られている。表面がアバタ状を呈するグスク土器（胎土A）が集中して出土した。本層の下位には第Ⅵ層に類似した暗灰褐色砂質層が堆積し、この両層の間に大土坑につながる第Ⅴ層と判断される暗灰褐色砂混じり層がある（第18図㉕の1）。

橙黄褐色土層：R・S-28の両グリットにまたがって検出された5号石列から北側のみに検出された橙黄褐色を呈する土（巻首図版3-下段、図版11）。層厚は約20cm。本層は、地山の土と同質のものであるが第Ⅲ層 b と第Ⅴ層の間に堆積する。本層上面には第Ⅲ層 b の遺構があり、本層の下面には第Ⅲ層 c 又は第Ⅲ層 b のものと考えられる柱穴が第Ⅴ層まで掘り込まれていた。この柱穴の上部は橙黄褐色土によって切られたような状態を呈していた。このような検出状況と同石列南側にある第Ⅲ層 c が、北側には見られない（第18図㉕-1、第24図㉔-2）ことから5号石列の北側を整地した土ではないかと考えられる。検出状況から第Ⅲ層 b の時期と考えられる。本層の上面では1号炉址、楕円状土坑、柱穴群などが検出された。

第Ⅳ層

本層はシルト質の灰白色土層で、ヌノメカワニナを多く含む間層である。上下でa・bに細分され、後者はやや暗褐色を呈する。厚さ約10~20cmで、調査範囲の南東側の緩やかな傾斜地が平地になるところから、調査範囲の大半に堆積（第6図）する。1区ではほぼ全面にあり、2・3区では4号石列部で途切れるが西側にも堆積している（第14図㉓、第15図㉔）。4区では、遺構集中部にはみられず2号石列東側で、南北方向に幅約5~10mの範囲で堆積しているが、同石列部で途切れ、4区の西壁で堆積が確認される。本層は第Ⅱ層の2・4号石列や第Ⅰ層の農耕に伴うものと考えられる段差によって部分的に堆積が失われたと考えられる。

本層にはヌノメカワニナが多く含まれていることから、一帯が湿地帯のような自然環境であったことが推察される。また本層に含まれるこの貝の向きがさまざまな状態にあるのは、人為的に持ち込まれたものではなく、ある程度の時間を経ているようであるとの御教示を頂いた^(註3)。

第Ⅴ層

本層は、黄褐色土粒（地山の土）を含み、石英や砂が混じる灰褐色土である。層厚は約10~20cm。3・4区にまたがって迫り出す台地部周辺にあり、1~4区に堆積している。土質から場所によってはa・bに細分される。

1~3区では2・4号石列から東側に堆積し、4区では2号石列の西側にも堆積し（第7図）、

東側の広がり、R-28からQ・R-27へ広がり、Q-27でもっとも厚く堆積し〔米軍掘削用穴の南東壁面（巻首図版3-下）〕、27ラインに沿うように南側へも広がる。R-27では南側で地山が浅く溝状に窪んだ部分にやや厚く堆積し、27ライン付近から西側で一度途切れるが、Q～S-25一带に堆積があり、再度、2号石列部で途切れ、これより西側ではS-25南壁にかかる2号高床式建物址の柱穴で堆積が確認された。

第V層a：黄褐色土粒（地山の土）を含み石英や砂を含む暗灰褐色土で、第IV層との混じり。層厚は約10cm。3区では、N-27中央部付近までが西側への広がりとなる。4区ではQ～S-25にも堆積が確認される。北側の堆積範囲は1区のI-28の中央部付近までとなる。

第V層b：黄褐色土粒（地山の土）を含み、石英や砂が混じる灰褐色土層。3・4区で層厚は約10～30cm。3区では丘陵側から始まった堆積が（第24図㊸）、西側へは4号石列部分で途切れ（第15図）、小川跡状遺構の南側ではO・Pの27ライン付近までとなる。4区では、5号石列北側（R・S-28）に堆積する橙黄褐色土の下位に堆積し、そこからQ・R-27へ続いており、同グリットで地山が緩やかに窪むところに堆積している。同石列南側で検出された大土坑（第56図）にも第V層は流れ込んでいる。S-28南壁では第Ⅲ層hと第Ⅵ層の間に僅かに堆積する。

第Ⅵ層

2枚（a・b）に細分される。層厚は約10～20cmで、薄い所では10cm以下の部分もある。堆積範囲は第V層と同様な広がり、丘陵側からの堆積は、4区ではR-28からQ-27側に広がっている（第7図）。この広がり、米軍掘削穴の西側壁面で確認された。

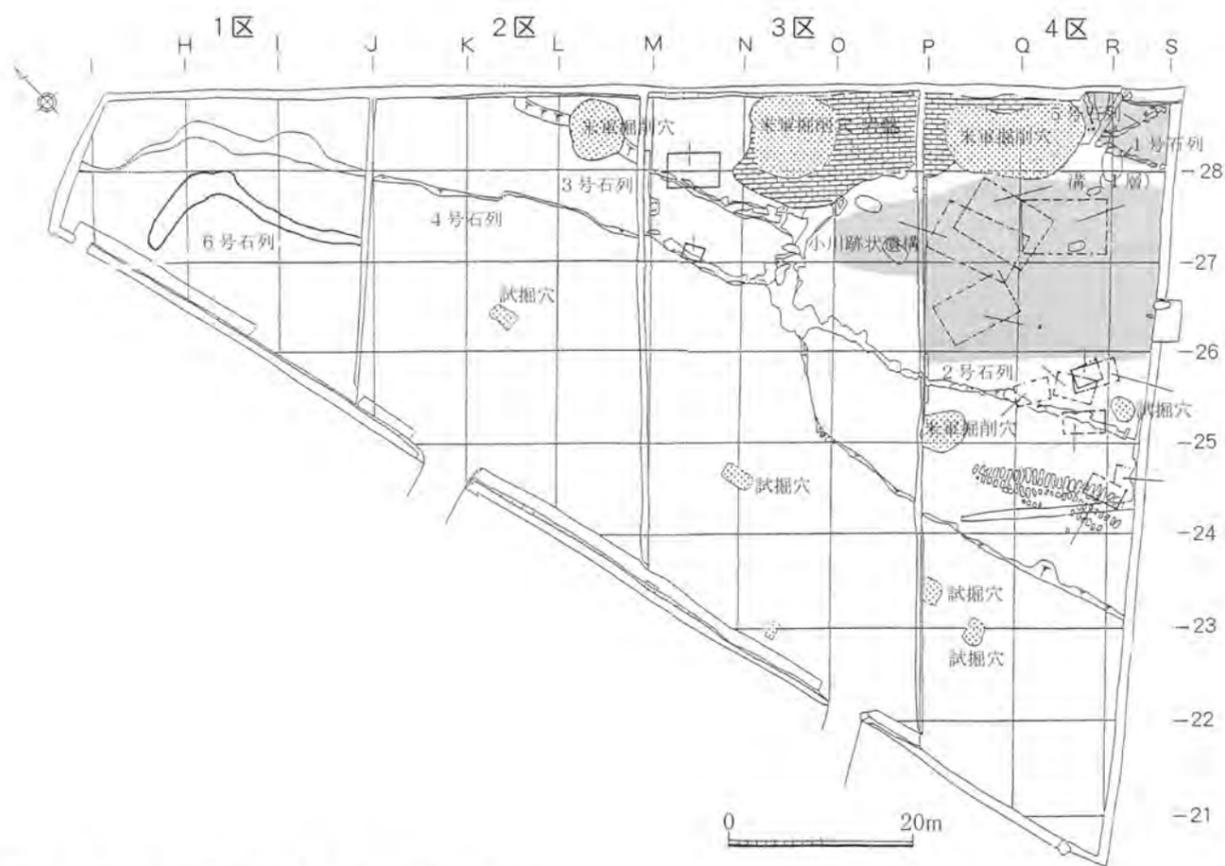
S-28南壁で第Ⅲ層hの下位に暗灰色砂質層は本層に対応するものと考えられ、厚さ6～8cmと薄く堆積しており、色調・砂質の特徴からQ・R・S-24～26にみられる高床式建物址の柱穴群の覆土に類似する。これらは第Ⅵ層bに対応するものと判断される。

第Ⅵ層a：暗灰色砂層で第V層との混じり。層厚は約10cm。3区（N-27・28）に堆積し、北側への広がり、Mライン付近までで、2区には堆積していない。

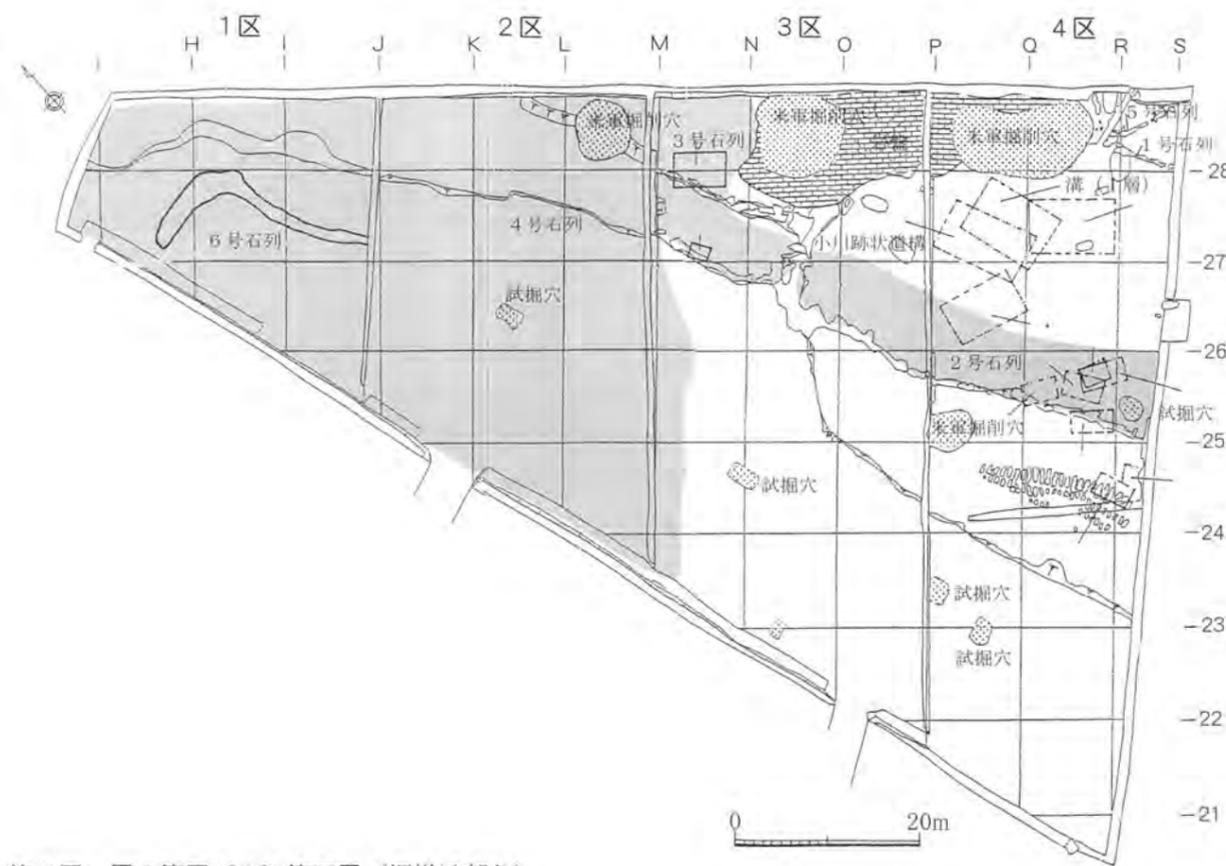
第Ⅵ層b：暗灰黒色砂層。層厚は約20cmで、3区では第Ⅵ層aと同様な堆積状況である。台地部北側にあたるN-28の中央部付近から2区K-28東壁中央部付近まで堆積し、西側の堆積はN-28中央部付近からN-27中央部付近にあり3号石列と、No.2畦が交差する位置では部分的な堆積が認められる。遺構は、1・2号平地住居、1～7号高床式建物址、1号住居址に伴う5・6号炉址、畠址とそれに伴う鋤痕、2・3号砂鉄貯蔵穴が検出された。

地山

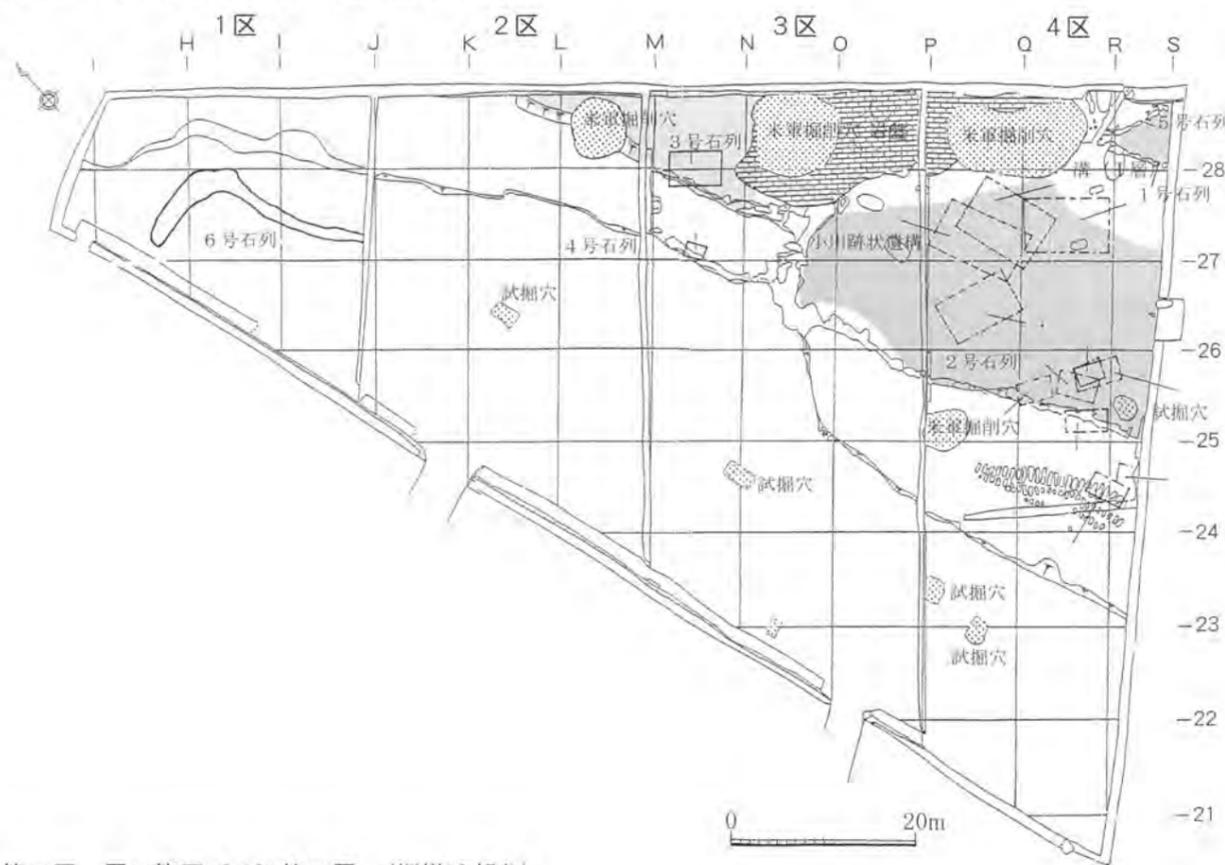
3・4区の両方にまたがっている台地部に石灰岩岩盤があり、その周辺は黄褐色土で、岩盤から離れるに従って砂質となるが、西側では上部が粘質土混じりである。庁舎建設の基礎のために掘り下げた範囲の壁面では、下部は海生コーラルであった。平成7年度の試掘調査で、遺跡の西側に古い砂丘（第2図）が形成されていると判断された堆積に関連したものと考えられる。



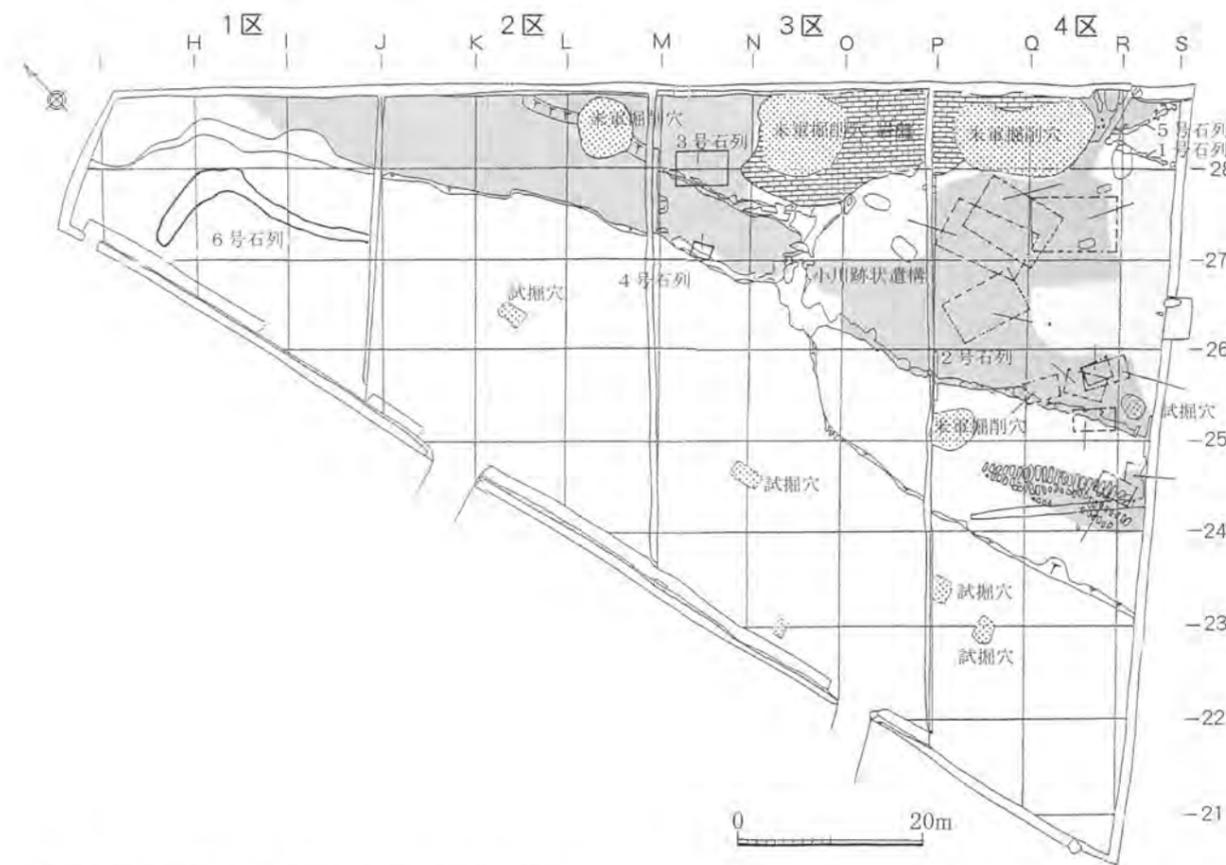
第4図 層の範囲<1>第Ⅲ層b(網掛け部分)



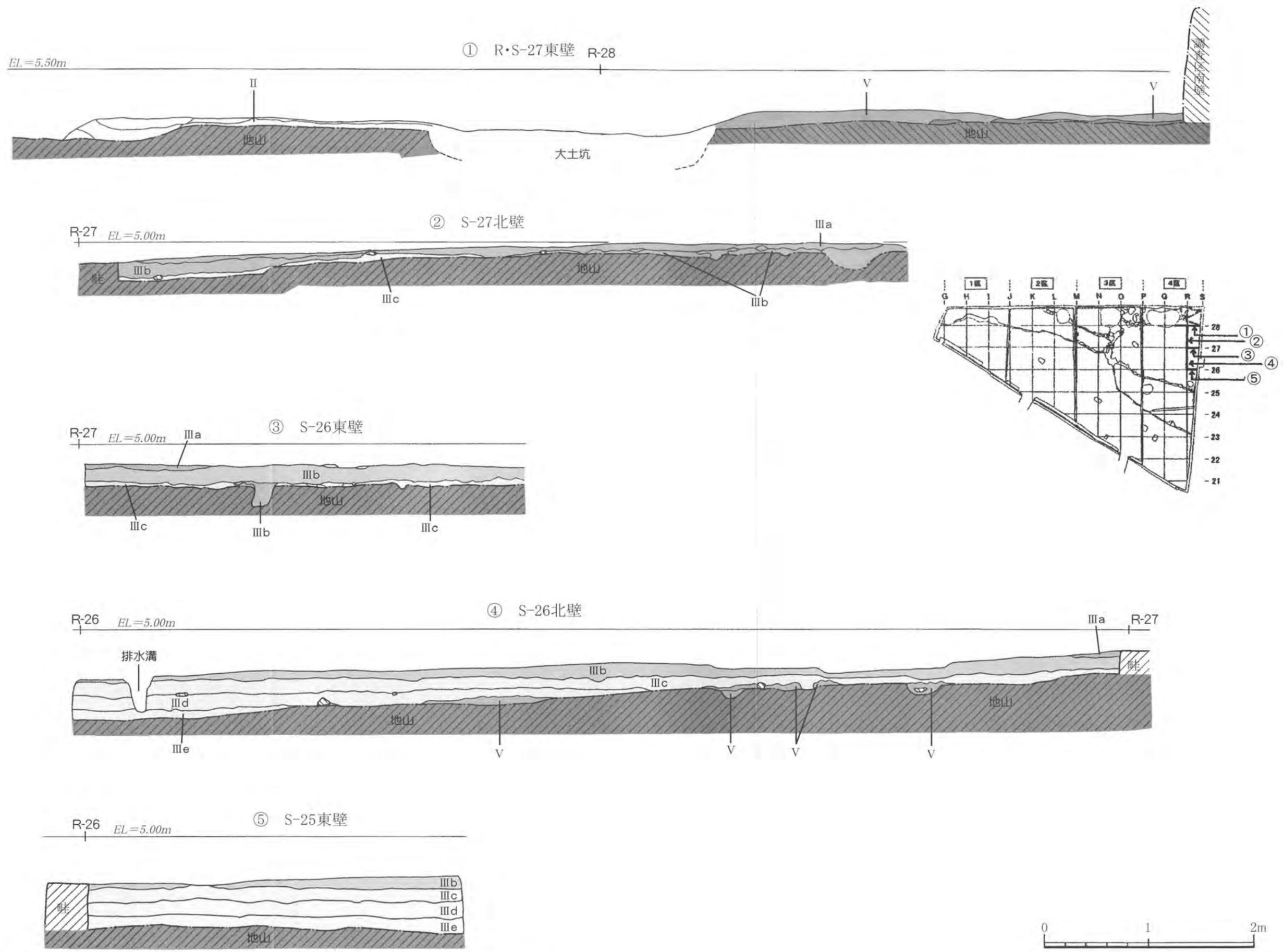
第6図 層の範囲<3>第Ⅳ層(網掛け部分)



第5図 層の範囲<2>第Ⅲ層c(網掛け部分)

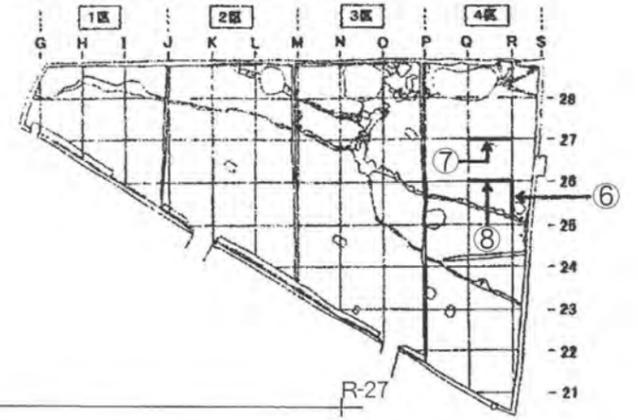
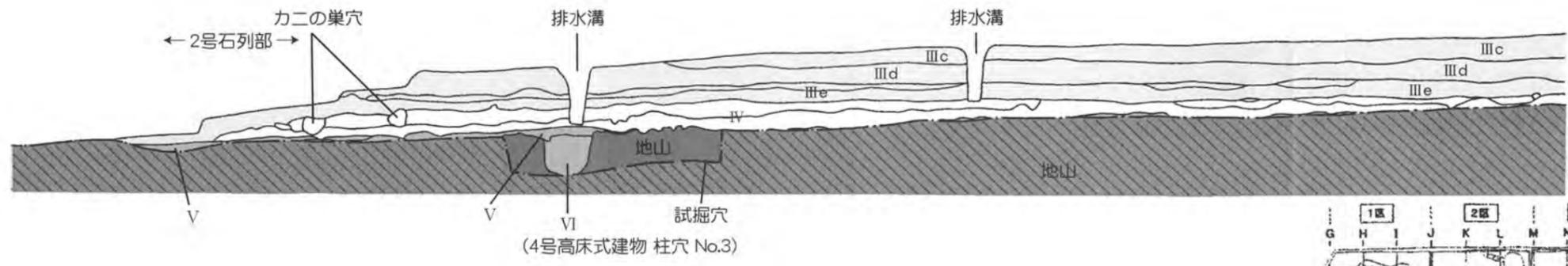


第7図 層の範囲<4>第Ⅴ・Ⅵ層(網掛け部分)

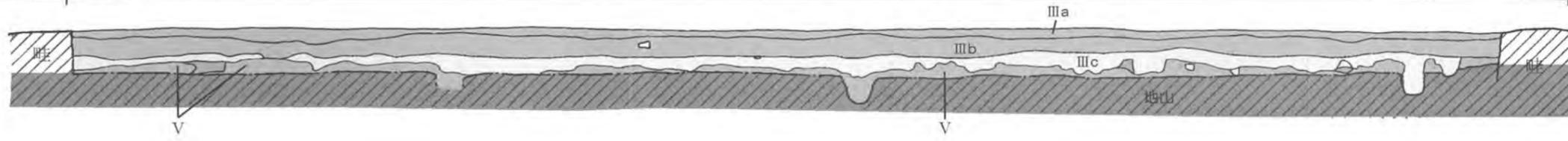


第8図 層序<1> 4区 ①R·S-27東壁、②S-27北壁、③S-26東壁、④S-26北壁、⑤S-25東壁

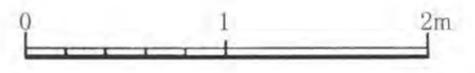
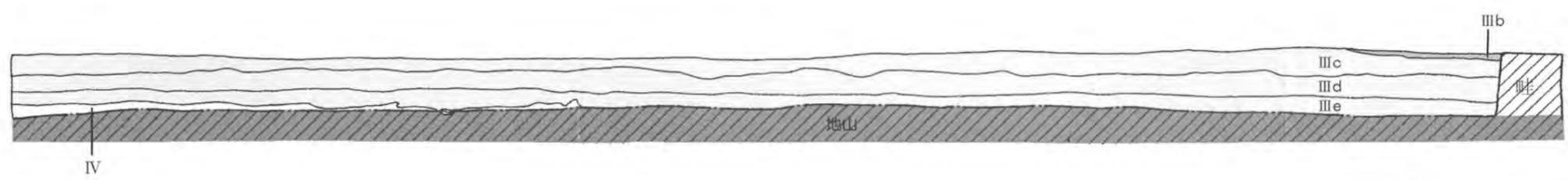
R-27 EL=5.00m ⑥ S-25北壁 R-26



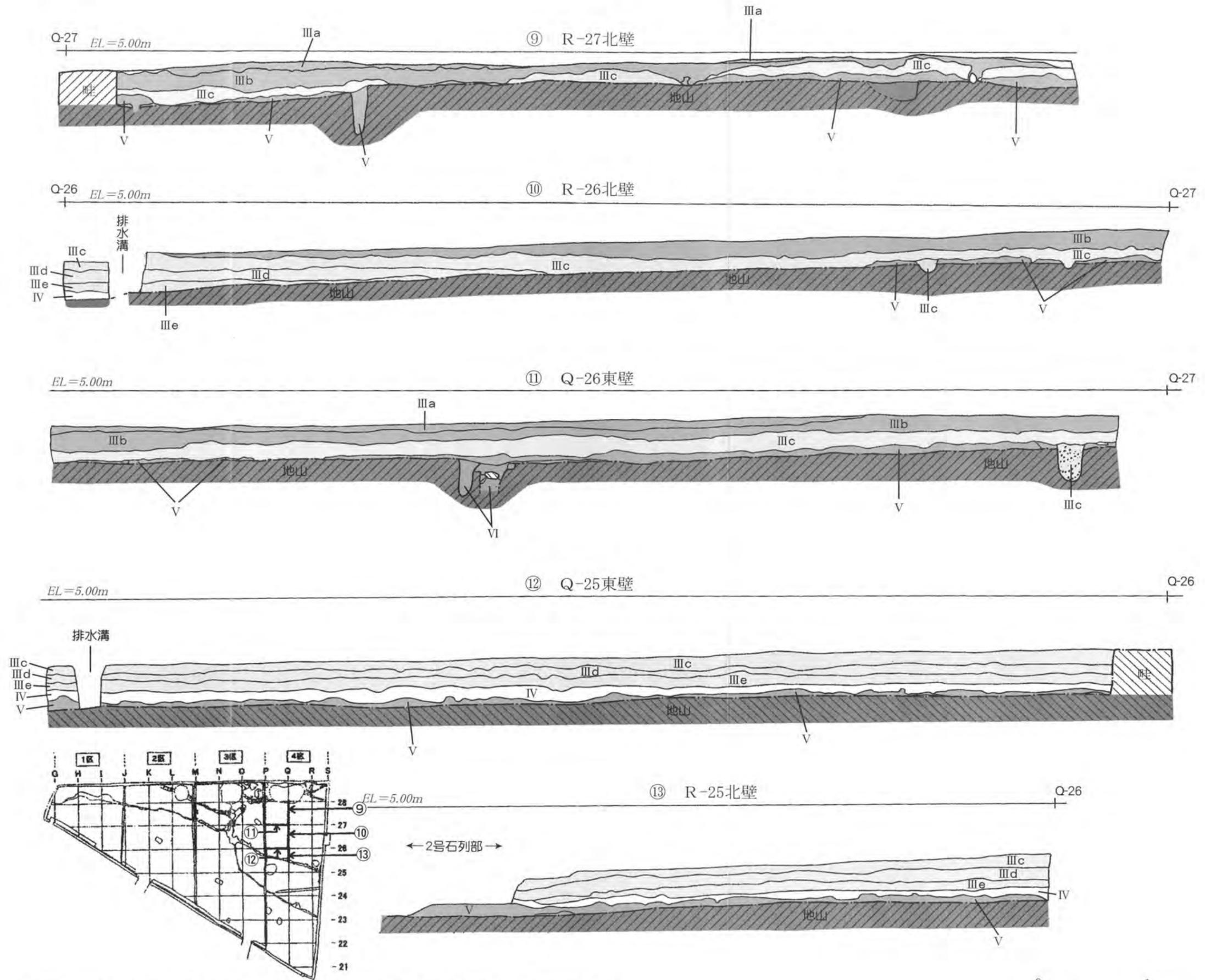
Q-27 EL=5.00m ⑦ R-26東壁 R-27



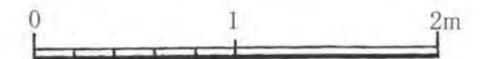
Q-26 EL=5.00m ⑧ R-25東壁 R-26

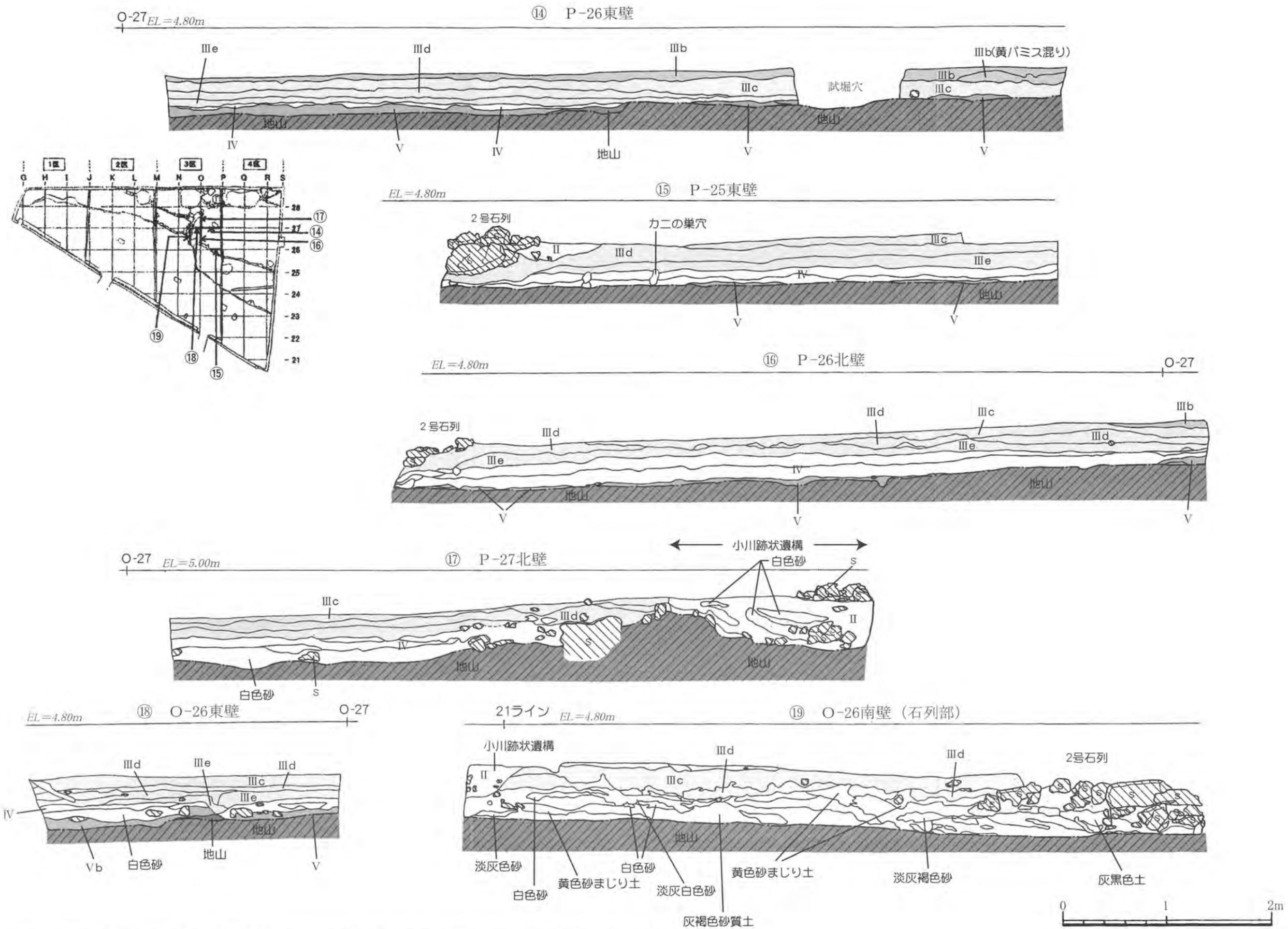


第9図 層序<2> 4区 ⑥S-25北壁、⑦R-26東壁、⑧R-25東壁



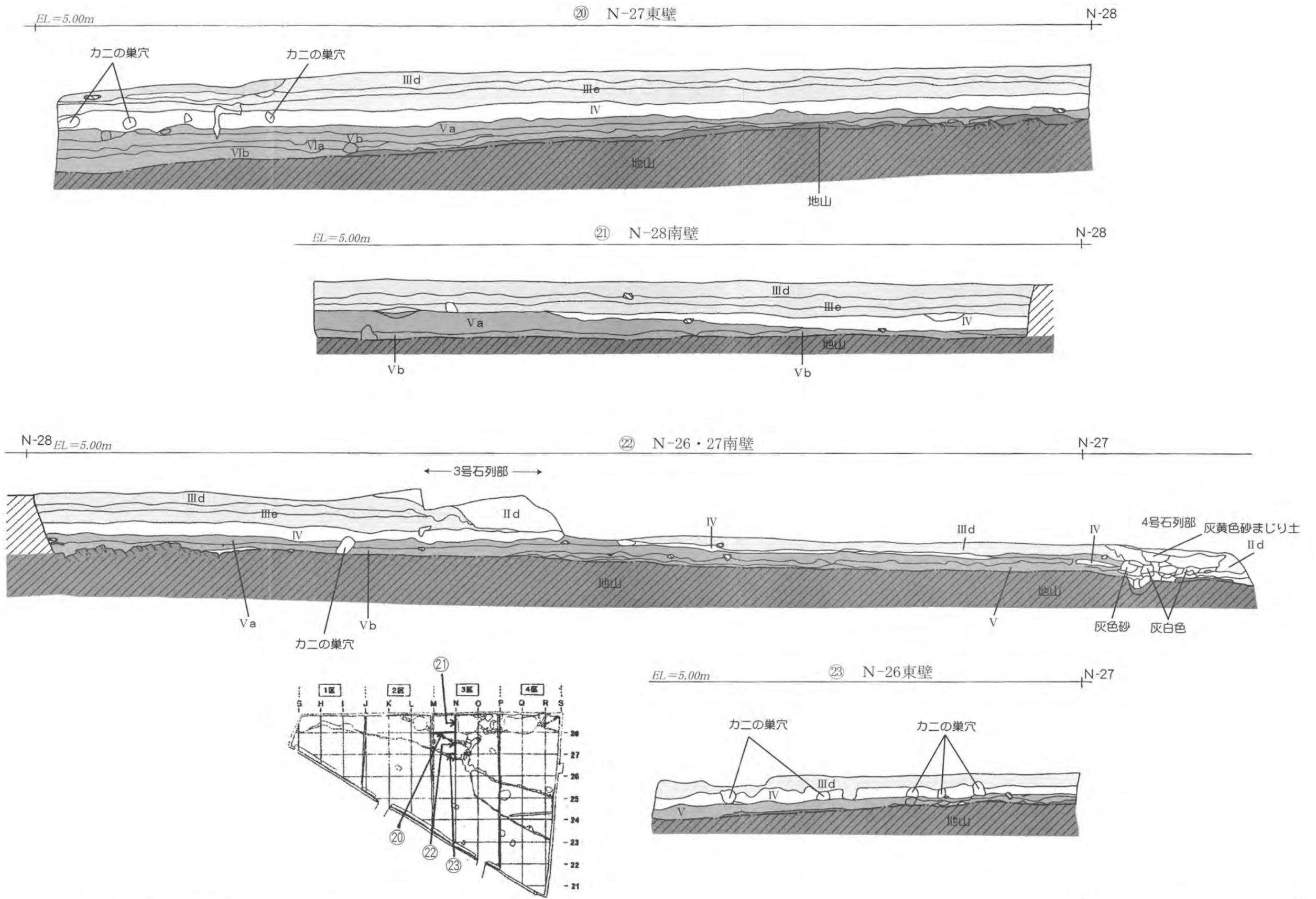
第10図 層序<3> 4区 ⑨R-27北壁、⑩R-26北壁、⑪Q-26東壁、⑫Q-25東壁、⑬R-25北壁





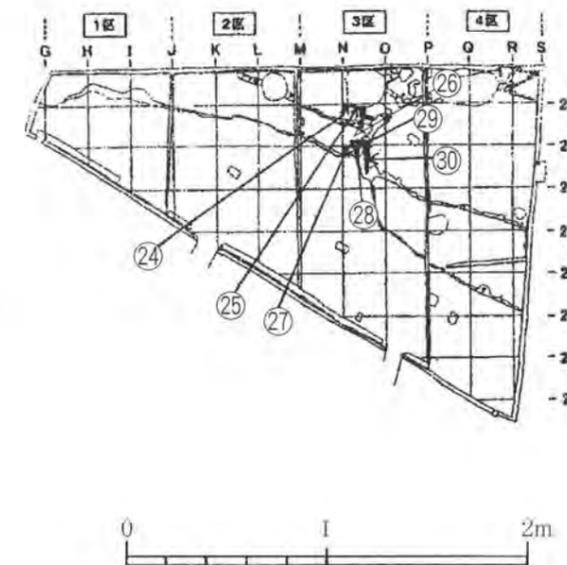
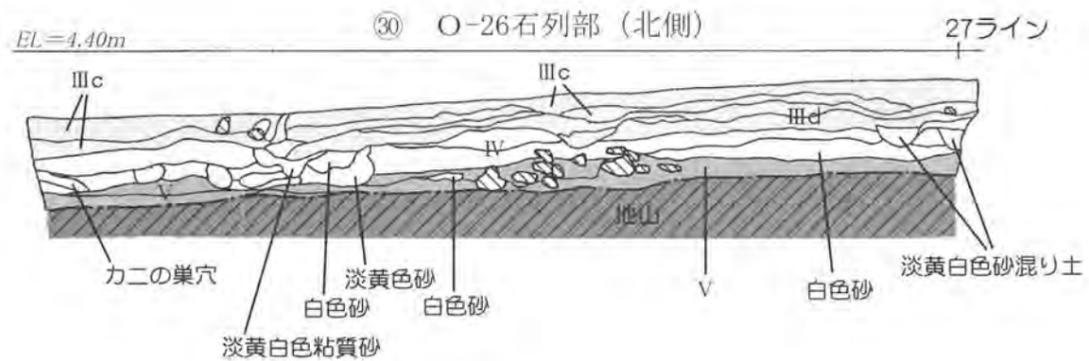
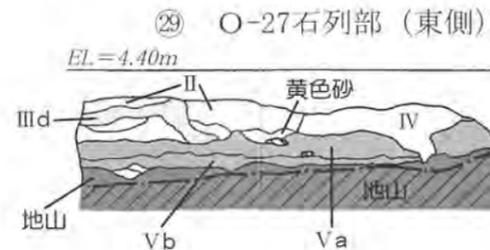
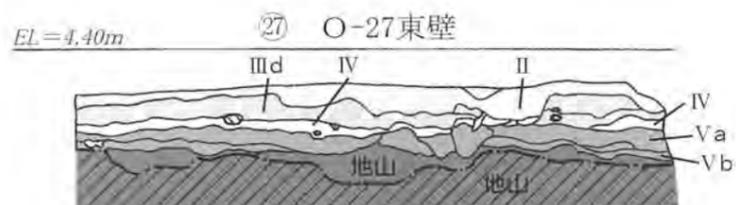
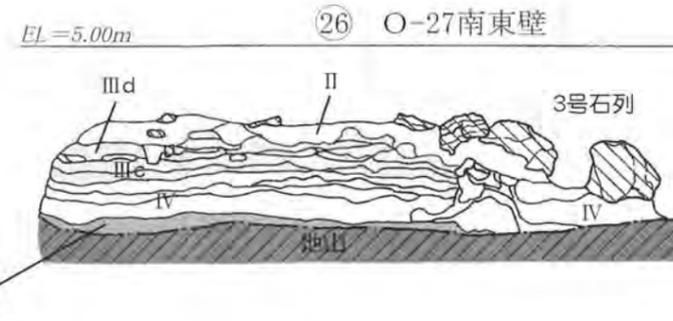
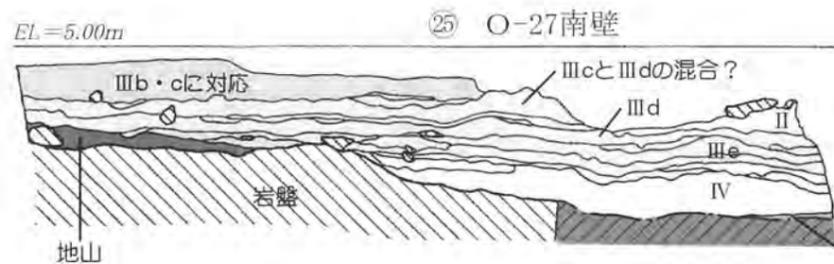
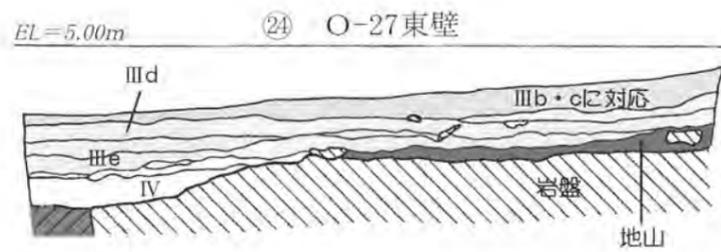
第11図 層序<4> 3区 小川跡状遺構跡より南側、⑭P-26東壁、⑮P-25東壁、⑯P-26北壁、⑰P-27北壁、⑱O-26東壁、⑲O-26南壁(石列部)

※ IIIb~Vb・地山以外の層名は、小川跡状遺構に伴うもの。

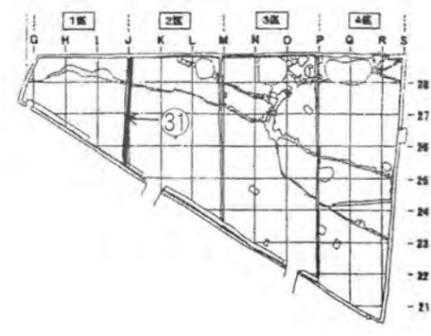
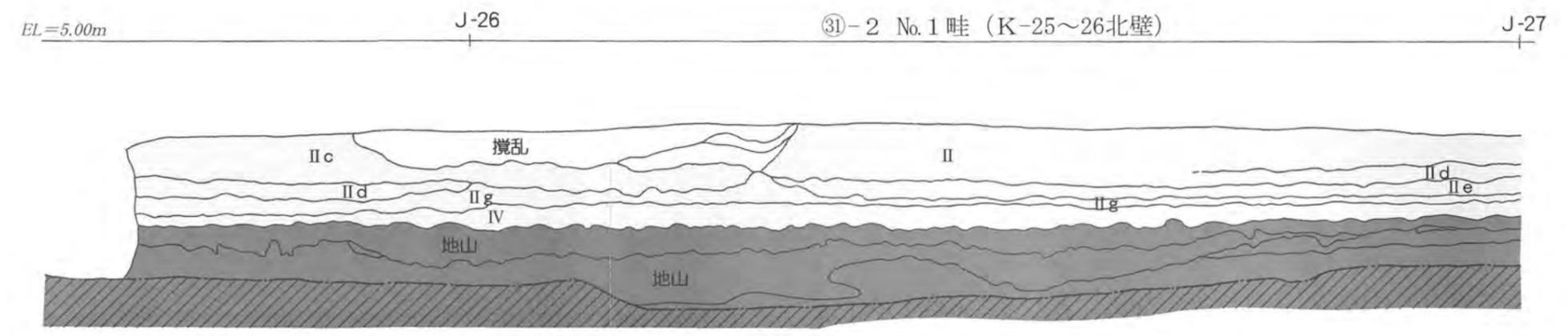
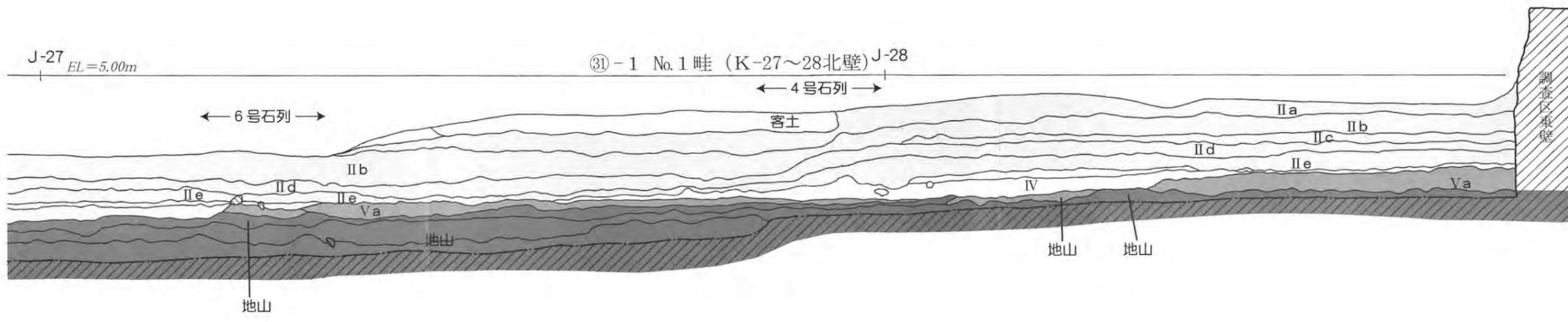


第12図 層序<5> 3区 1号平地住居址周辺、②0N-27東壁、②1N-28南壁、②2N-26・27南壁、②3N-26東壁

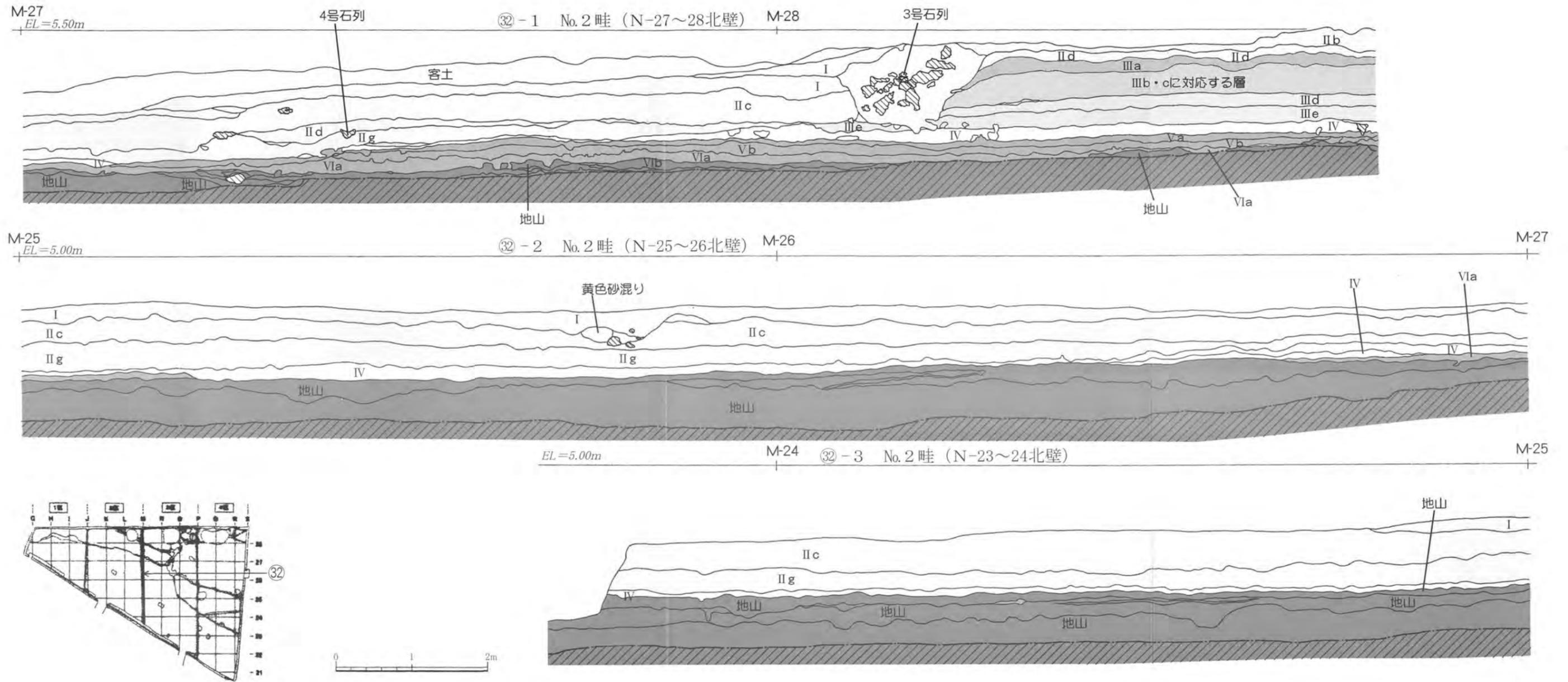




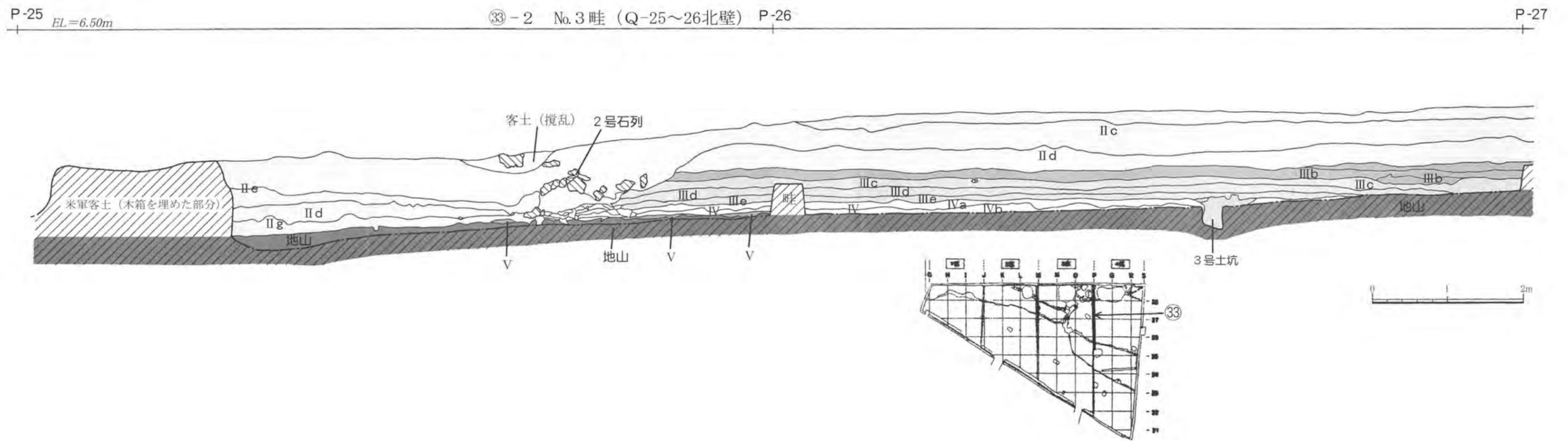
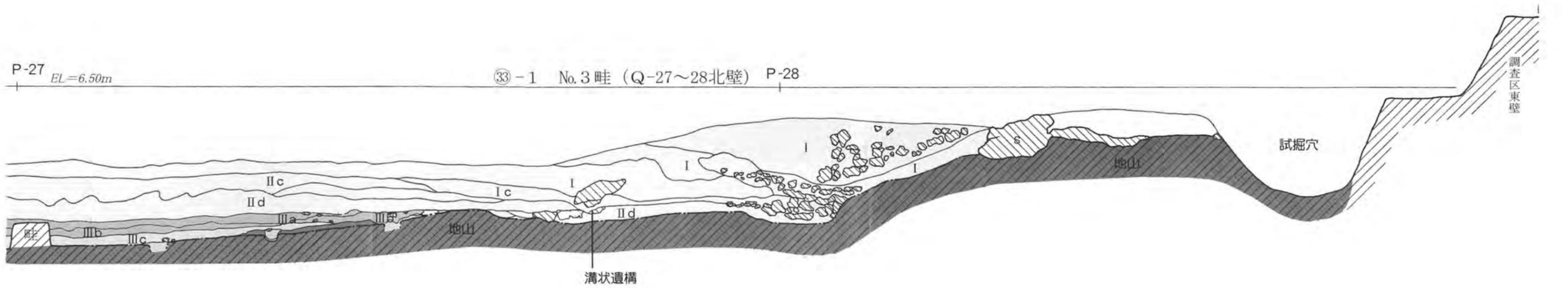
第13図 層序<6> 3区 小川跡状遺構より北側、②4O-27東壁、②5O-27南壁、②6O-27南東壁、②7O-27東壁、②8O-27石列部 (北側)、②9O-27石列部 (東側)、③0O-26石列部 (北側)



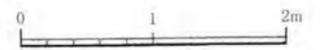
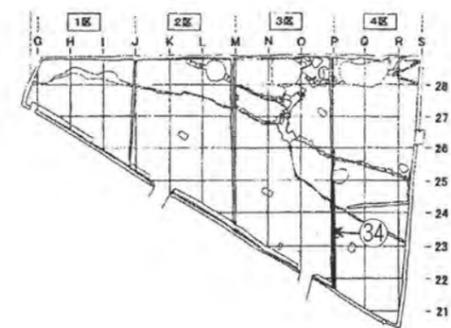
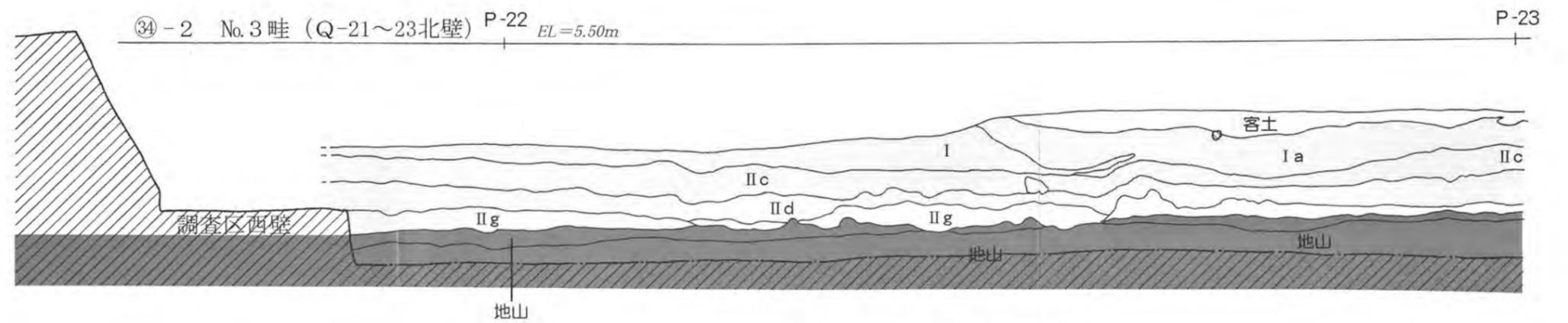
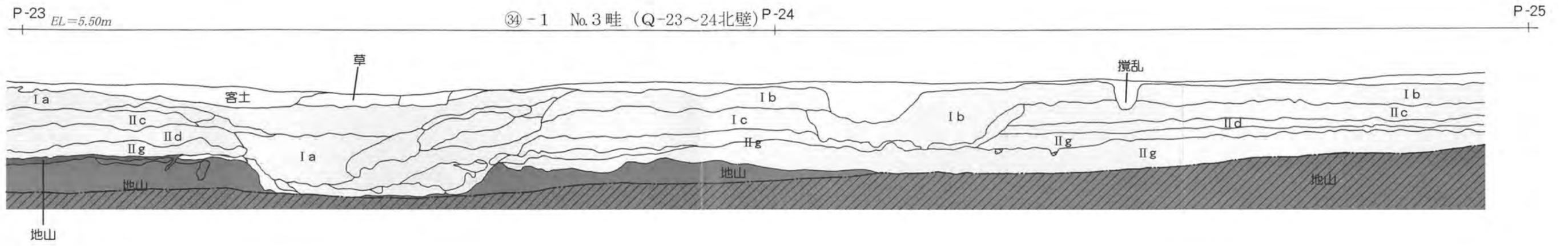
第14図 層序<7> ③1 No. 1 畦 (K-25~28北壁)



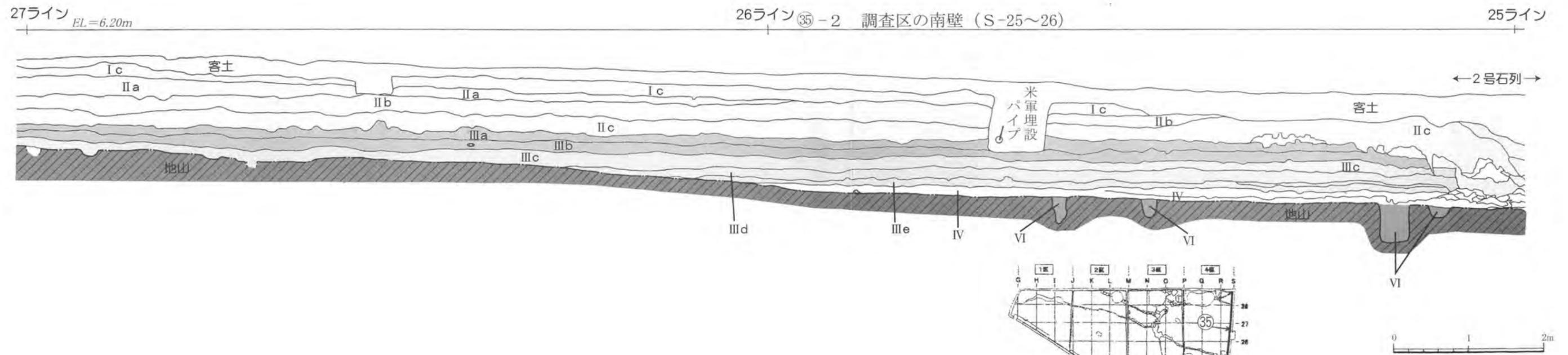
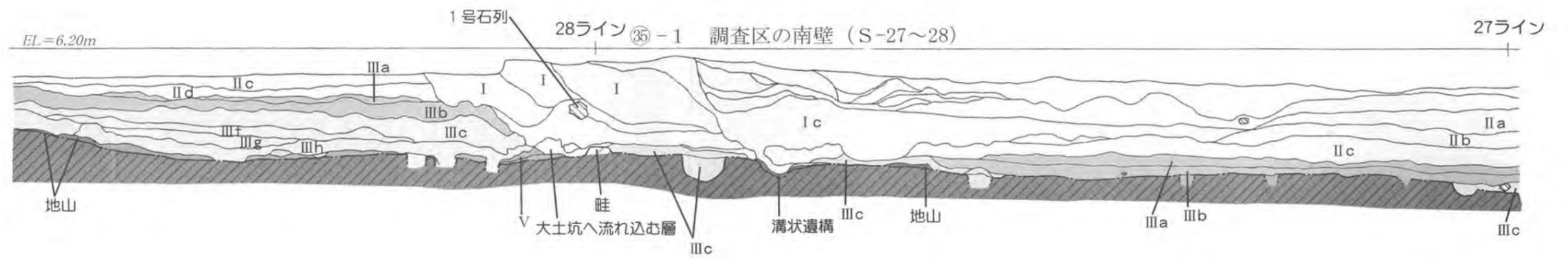
第15図 層序<8> ③No. 2 畦 (N-23~28北壁)



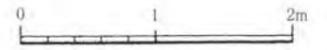
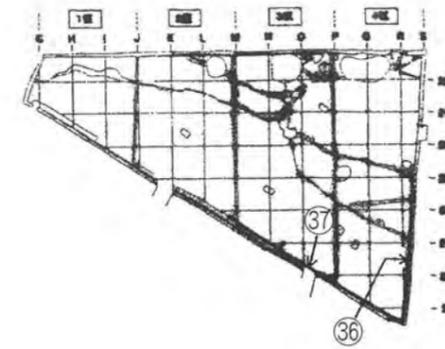
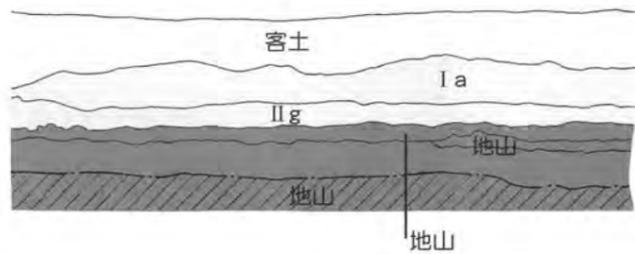
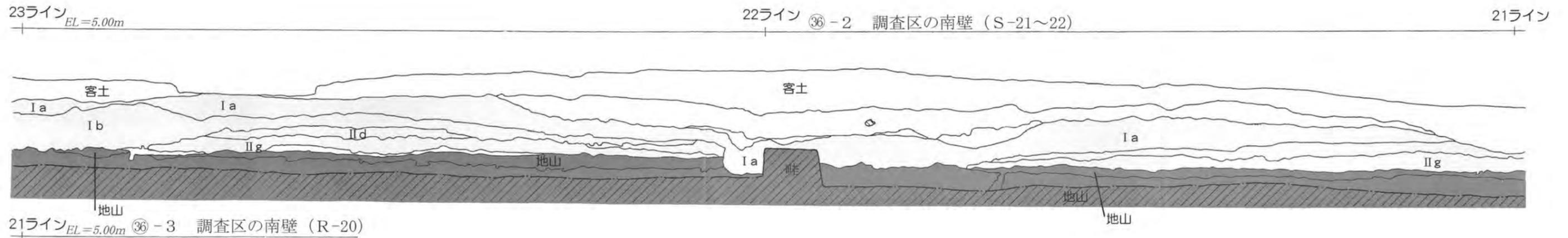
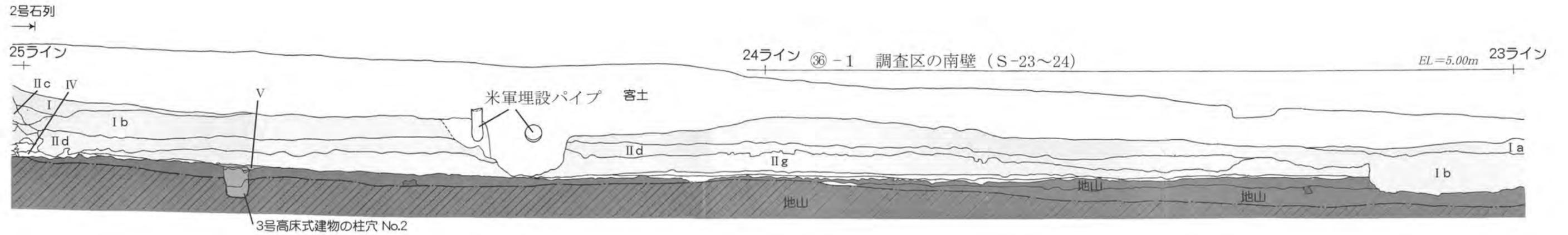
第16図 層序<9> ③No. 3 畦 (Q-25~28北壁)



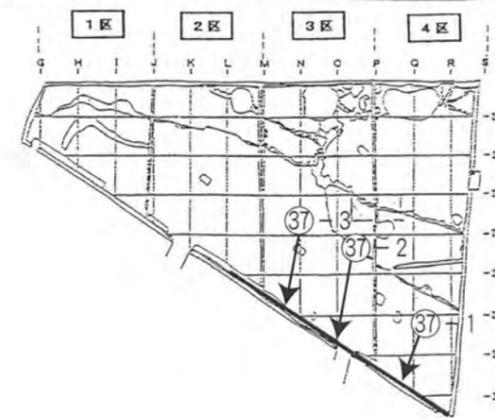
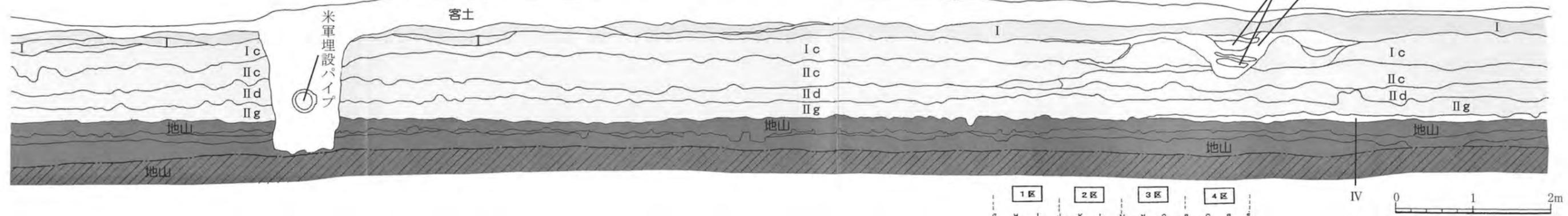
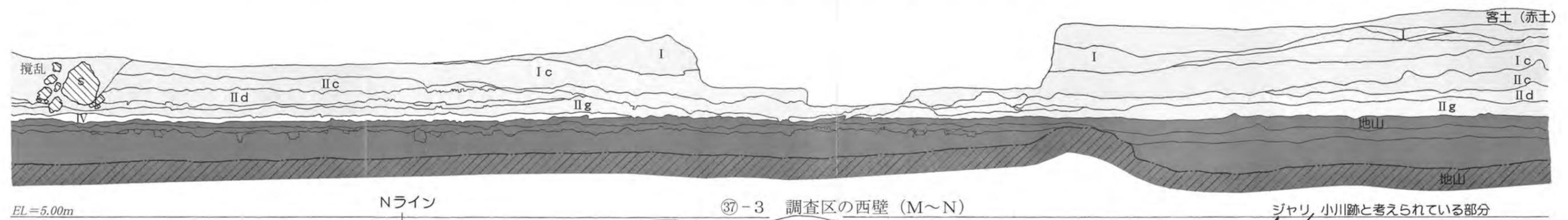
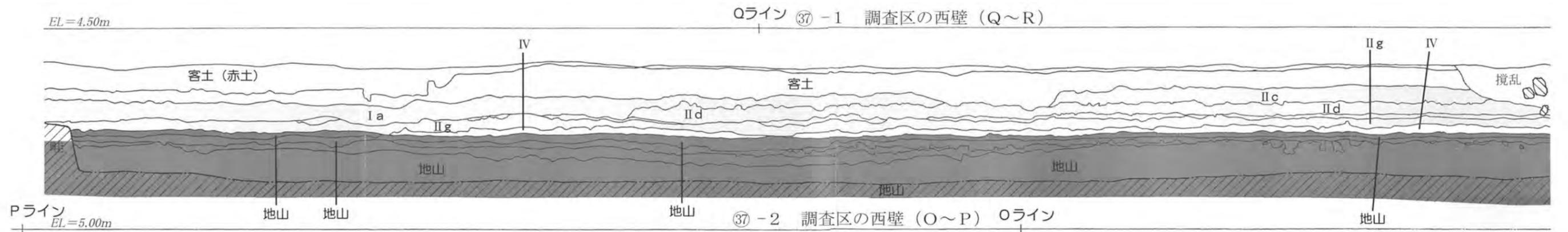
第17図 層序<10> ③4No. 3 畦 (Q-21~24北壁)



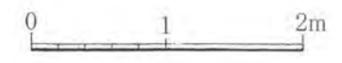
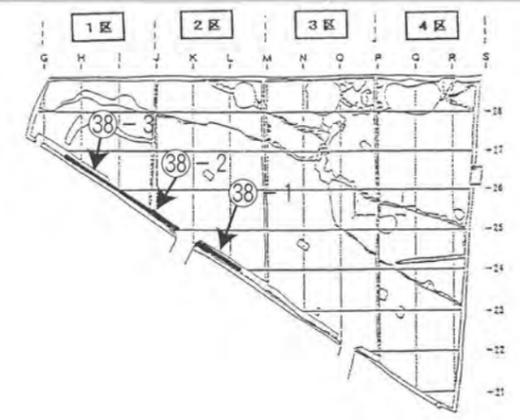
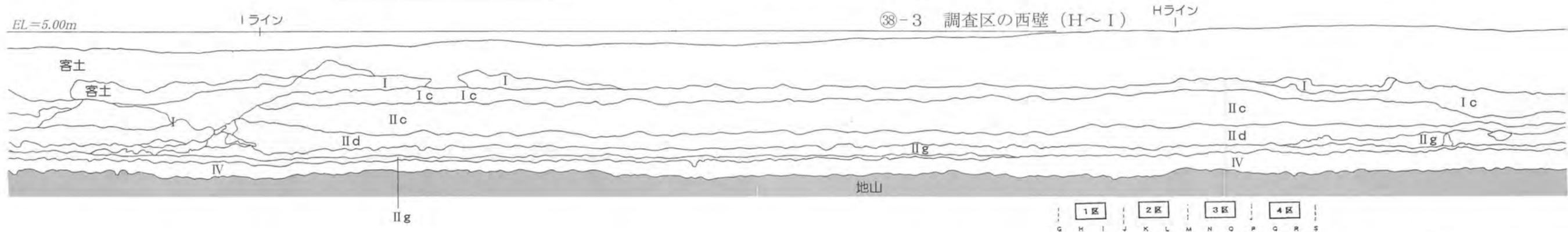
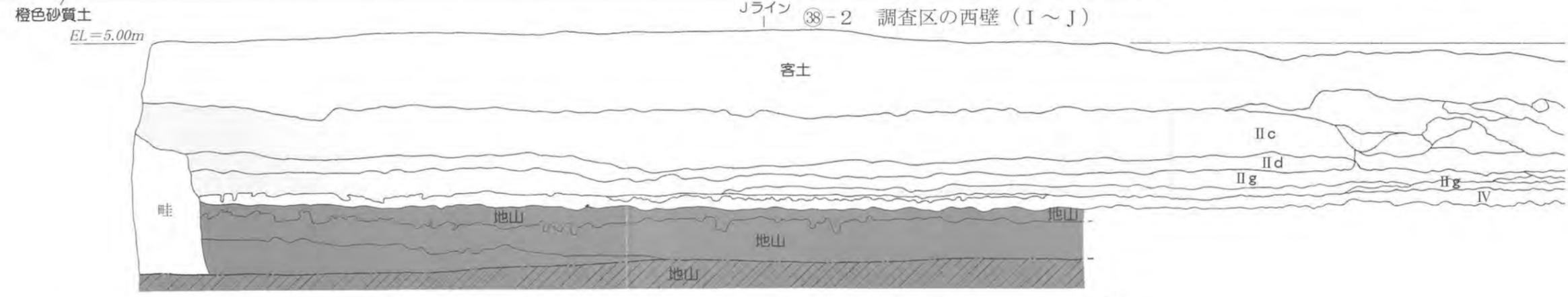
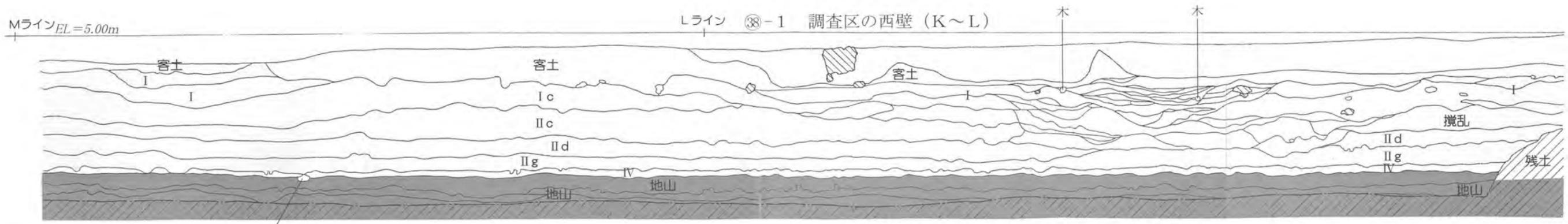
第18図 層序<11> ㉔-1 調査区南壁 (S-27~28)、㉔-2 調査区南壁 (S-25~26)



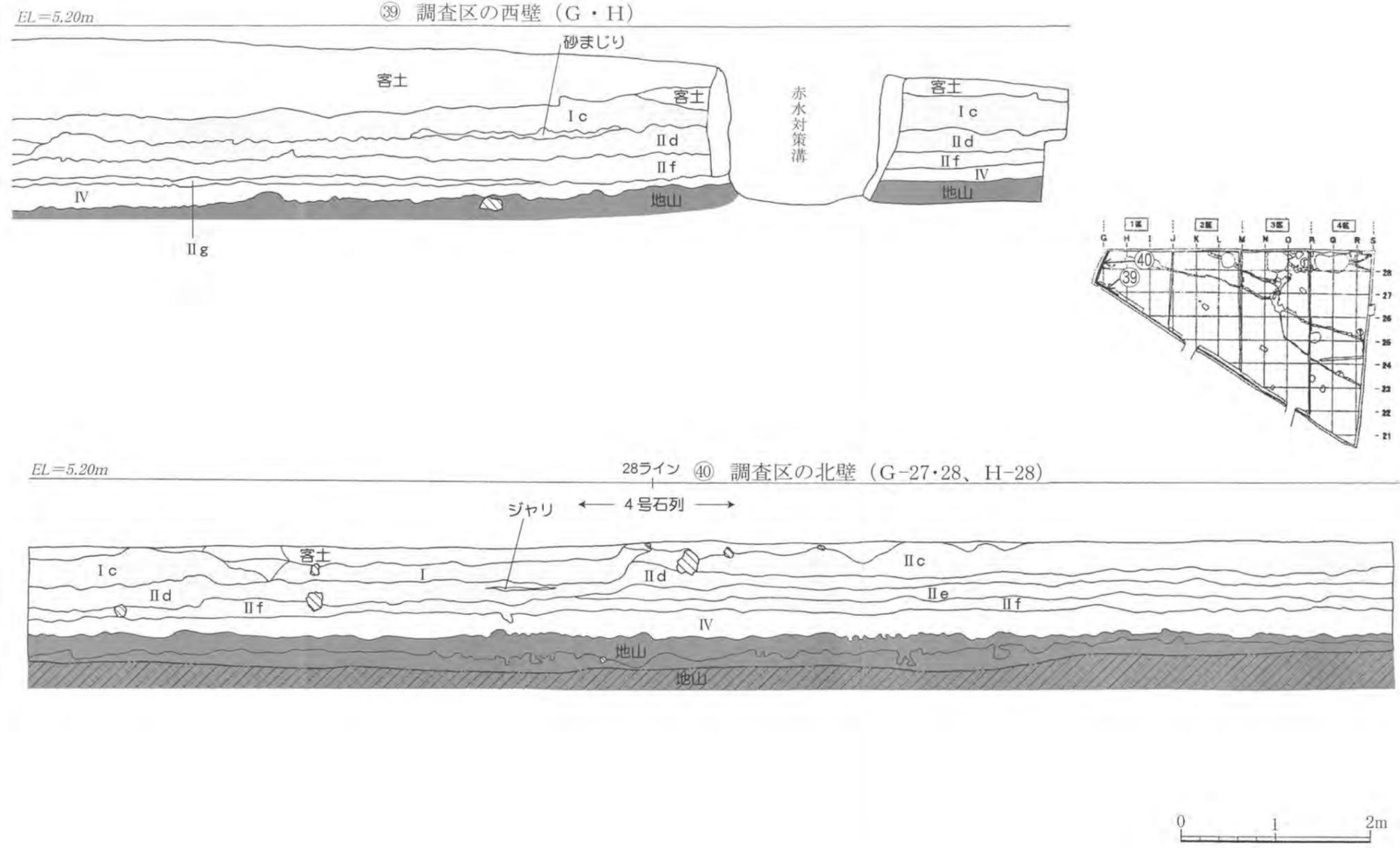
第19図 層序<12> ③⑥-1 調査区南壁 (S-23~24)、③⑥-2 調査区南壁 (S-21~22)、③⑥-3 調査区南壁 (R-20)



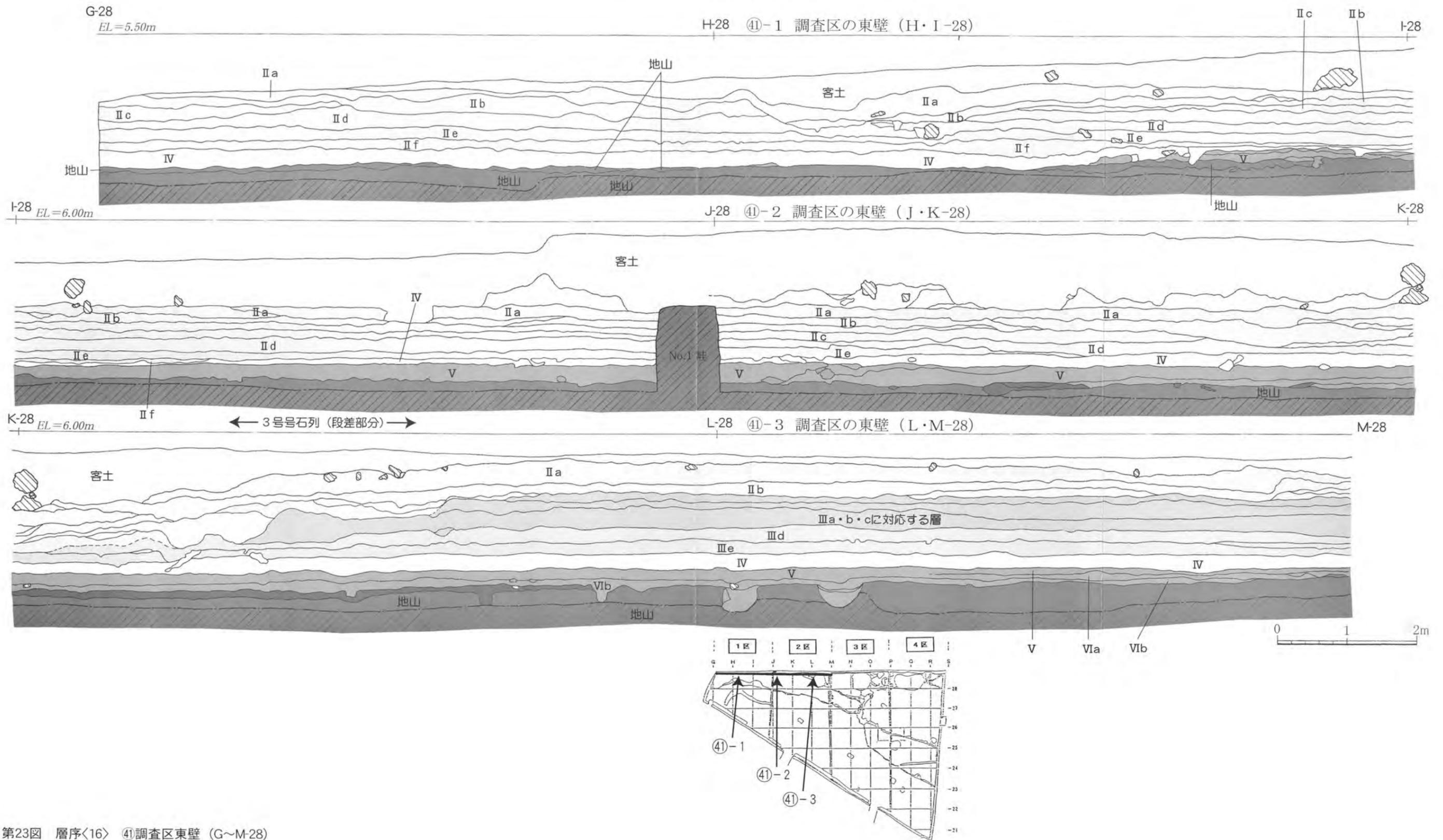
第20図 層序<13> ③⑦-1 調査区西壁 (Q~R)、③⑦-2 調査区西壁 (O~P)、③⑦-3 調査区西壁 (M~N)



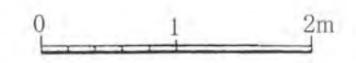
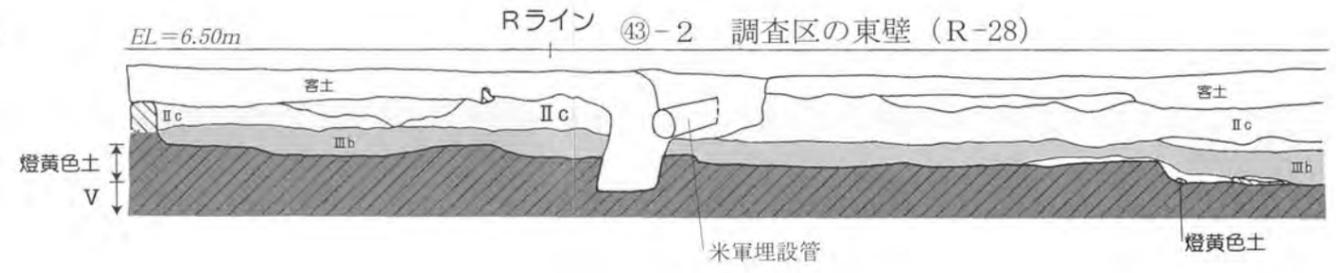
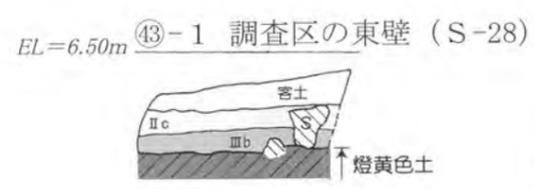
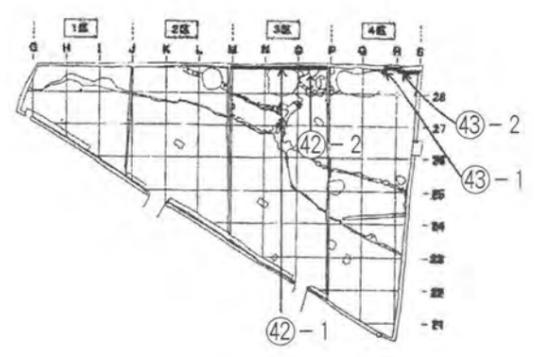
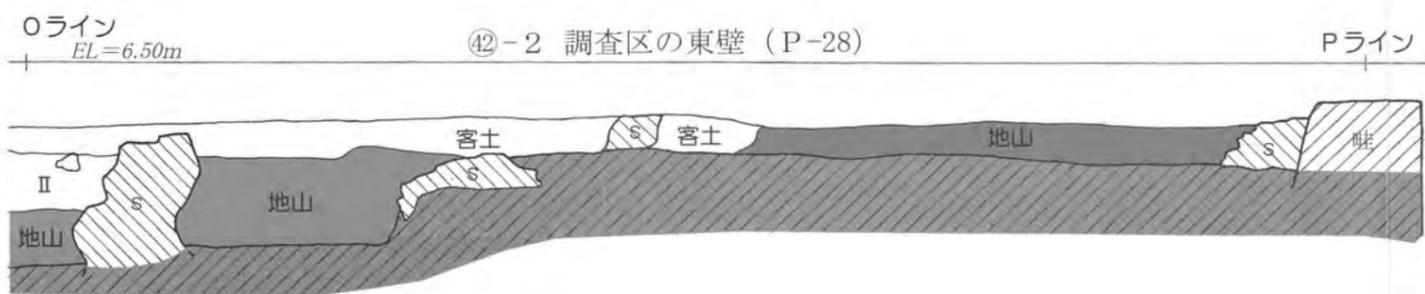
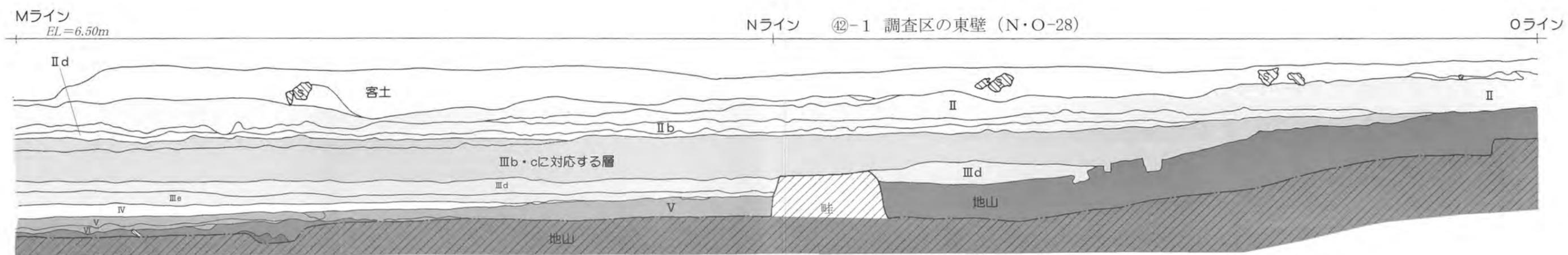
第21図 層序<14> ㊸-1 調査区西壁 (K~L)、㊸-2 調査区西壁 (I~J)、㊸-3 調査区西壁 (H~I)



第22図 層序<15> ③9調査区西壁 (G・H)、④0調査区北壁 (G-27・28、H-28)



第23図 層序<16> ④1調査区東壁 (G~M-28)



第24図 層序<17> ④2調査区東壁 (N~P-28)、④3調査区東壁 (R・S-28)

小結

調査範囲内でのグスク時代の第Ⅲ～Ⅵ層は、これまで述べたように丘陵側から広がるが、第Ⅲ層 a～eは第Ⅱ層の石列（2・4号石列）や小川跡状遺構で切られている。第Ⅲ層 f～hはS-28の一面にのみ堆積し、第Ⅴ・Ⅵ層も丘陵側から平坦地へ広がっているが、3区で検出された小川跡状遺構で途切れる部分があり、4区ではR-28からQ-27にかけて地山が窪んだ部分に比較的厚く堆積し、平地部での堆積は薄く、浅く窪んだ部分に残る状況が見られた。

第二期の第Ⅲ層 a～cは、迫り出した台地部の北側では淡褐色を呈し、遺物の出土が少なく遺構も検出されていないが南側では、暗黒褐色系の土色を呈し、第Ⅲ層 b・cでは遺構や遺物が集中していた。このことから、この時期は台地南側の緩斜面から平地に集落が展開したと推察される。炉址（1～4、7・8・9号炉）、土坑（1・4・5号土坑）楕円状土坑、長楕円状土坑、柱穴群などが検出され、5号石列の北側では、整地が行われたのではないかと考えられる橙黄褐色土が第Ⅲ層 bと第Ⅴ層の間に堆積していた。

第一期の第Ⅲ層 d・eは緩斜面から平地にかけた一部で、2・4号石列の下位で途切れている。第Ⅲ層 dに遺構は無く、第Ⅲ層 eでは4本柱プラン、3号土壙墓、1号砂鉄貯蔵穴、3号土坑が検出されており、いずれも台地の南側にあたる。

第Ⅲ層 f～hは、R・S-28で検出された5号石列の南側の一面にのみ堆積し、遺構は検出されていない。この一面ではアバタ状を呈する（胎土[㊤]）グスク土器が集中して出土した。

第Ⅳ層は、台地部斜面から平地側の大半に堆積し、ヌノメカワニナが生息する湿地帯の様相を示していた。このことから、一帯が湿地化によって第Ⅴ・Ⅵ層期の集落が移動したのではないかと考えられた。^(註3)

第Ⅴ・Ⅵ層期は、層厚の違いはあるが、台地部の周辺に堆積する。台地の北側にあたる3区では1号平地住居址と1号高床式建物址の配置が良好な状態で検出され、台地の南側にあたる4区では2号平地住居址、2～7号高床式建物址、鋤痕をともなった畠址が3号高床式建物に切られた状態で検出された。1号平地住居址は屋内炉（5号）と屋外炉（6号）を各1基を伴っていた。さらに、1・2・4号土壙墓、砂鉄貯蔵穴2基が検出された。これらの遺構とともに検出された柱穴群の多くは4区で検出された。

第Ⅴ章で述べる遺物の出土状況については、混在している状況が見られるものの、その出土状況や7号炉址（第Ⅲ層 c）・第Ⅲ層 f・5号高床式建物址の柱穴[㊤]（No.10070a）の炭素14年代測定結果^(註1)などから第一期は11世紀後半～13世紀（第Ⅲ層 d～第Ⅵ層）、第二期は14世紀後半～16世紀（第Ⅲ層 a～c）と考えられる。第一期の第Ⅲ層 d～第Ⅵ層のうち、第Ⅲ層 d・eと第Ⅲ層 f～hは第Ⅴ・Ⅵ層に対応すると考えられる（第144図）。

本遺跡では、緩斜面の土地利用が第Ⅲ層 b（第二期）に、5号石列北側の平地部から一段上がった場所を橙黄褐色土（地山の土）で整地したのではないかと考えられる堆積に見られ、第三期の第Ⅱ層では2～4号石列の大部分で第Ⅲ層 a～eを切って構築されており、緩斜面地を柵状に区画していた。第Ⅰ層では同石列が埋まった後の段差を利用するかのように、2号石列の西側で、さらに段を設けるような状況が伺え、台地の先端部下では小川跡状遺構が2・3号石列の間にあり、同石列周辺の堆積状況から、グスク時代～現代まで小川が流れていたと見られる。

〈註〉

註1 273pの炭素14年代測定結果。

註2 註1に同じ。

註3 千葉県立中央博物館の黒住耐二氏より御教示いただいた。

第IV章 遺 構

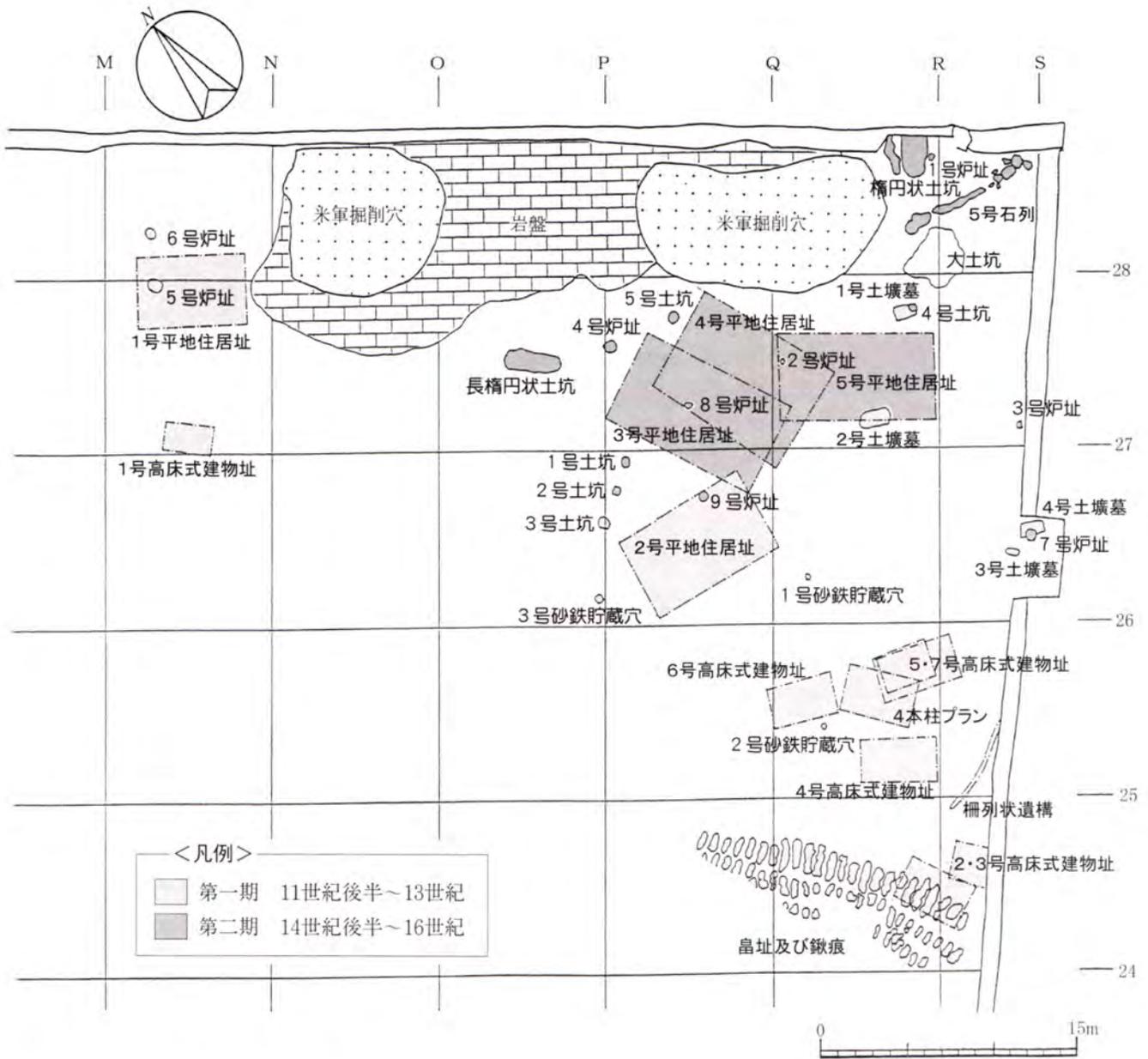
本遺跡ではグスク時代と近世の遺構が検出された。グスク時代の遺構には、掘立柱建物跡（平地住居址・高床式建物址・4本柱プラン）・炉址・砂鉄貯蔵穴・畠址・土壙墓・大土坑・土坑・長楕円状土坑・楕円状土坑・柵列状遺構・柱穴群・5号石列で集落の様相を示す状況が見られ、近世の遺構は、1・2～4・6号石列・小川跡状遺構・溝状遺構などの農耕に関わると考えられるものが検出された。グスク時代の遺構は、11世紀後半～13世紀の第一期と14世紀後半～16世紀の第二期の2つの時期に分けられる（第25図）。

これらの遺構のうち、掘立柱建物跡は3区で屋内と屋外に炉址を伴って検出された平面プランが長方形を呈するものを平地住居址（1号）とし、これを基に他の住居プランを検出した。高床式建物址としたものは、平地住居址の中柱と同等または、それより大きな柱穴が、長方形の平面プランを呈するもので、沖縄・奄美に見られる高倉の民俗例を想起させることから高床式建物址とした。砂鉄貯蔵穴は、地面に掘られた穴の中に、砂鉄が詰まった状態で検出されたものと、穴の中から少量の砂鉄が出土したものをこれに含めた。畠址は、畝の間の溝状を呈する長楕円状の窪みが、同一方向に並ぶもので、鋤痕を伴って検出されたことから畠址とした。径約10cm程度の小さい柱穴が列状に並ぶものを柵列状遺構とした。長径約3.6m、深さ約1.3mの大形の穴を大土坑とした。以下、グスク時代と近世を分けて、各遺構について記述する。

第1節 グスク時代の遺構

グスク時代の遺構（第25図）は、調査区の南東隅にあたる3・4区の間に入り出した石灰岩岩盤の周囲で検出され、第一期の遺構はこの岩盤の南北両側、第二期の遺構は南東側にあり第VI層よりもやや丘陵側に集中していた。

岩盤の北側では、1号平地住居址と1号高床式建物址が良好なセットの状態で見出され、岩盤南東側では丘陵側に柱穴群が集中し、2～5号平地住居址、炉址、土壙墓、大土坑、土坑、楕円状土坑、長楕円状土坑、5号石列が見られ、砂鉄貯蔵穴・畠址・2～7号高床式建物址は遺構集中部から南西側にやや離れた位置で見出された。これらの遺構には2号高床式建物址が畠址に掘り込まれた状況や土壙墓に柱穴や炉・土坑が掘り込まれた状況が見られた。

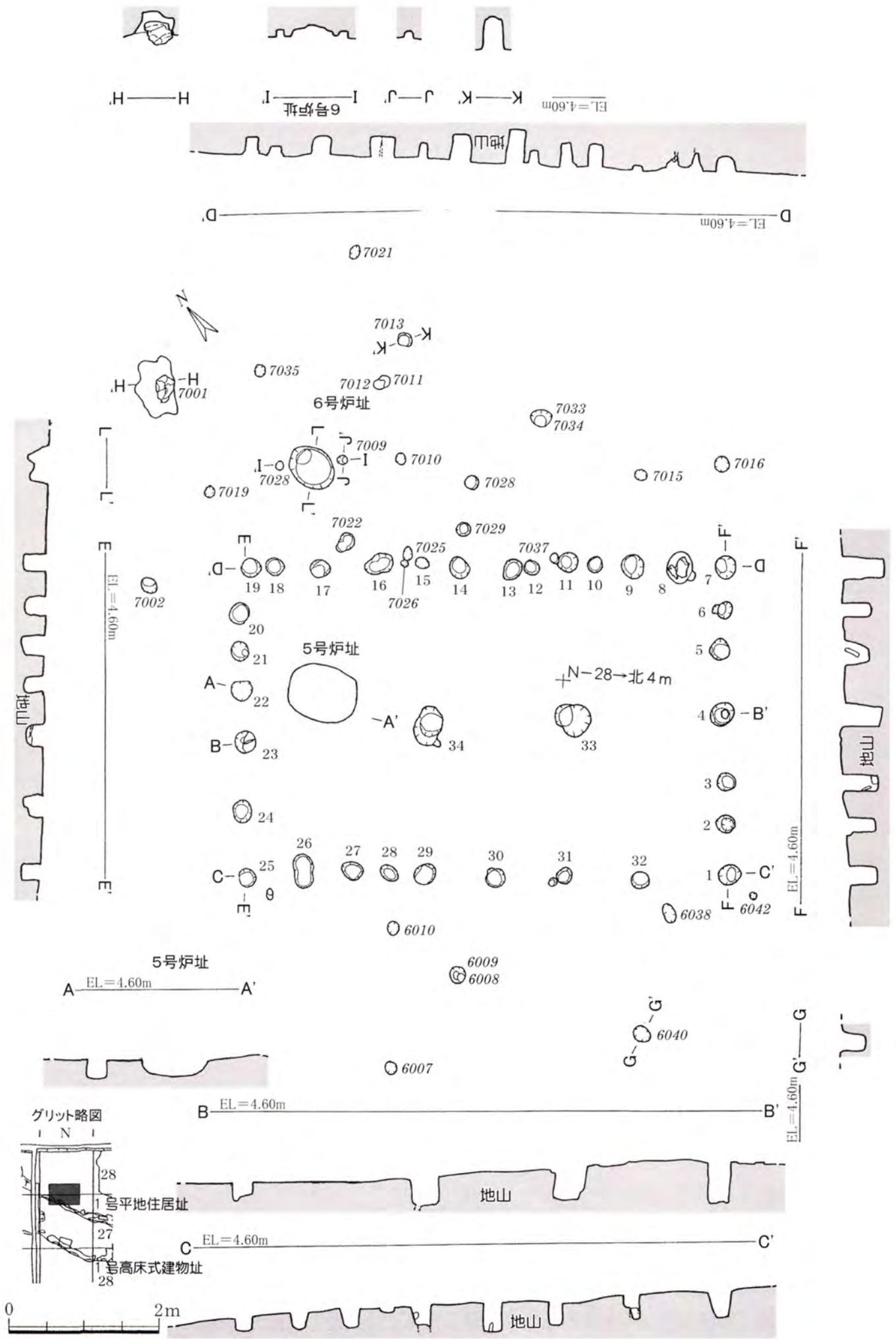


第25図 グスク時代の遺構配置

1. 平地住居址

A. 1号平地住居址 (第26図、図版14、巻首図版1)

1号平地住居址は3区N-27・28第Ⅵ層bより単独に配置された状況で検出された。平面形は長軸が北西-南東方向で6.4m、短軸が北東-南西方向で4mの長方形を呈し、やや黄金分割に近い均整のとれた建物址である。建物に伴う柱穴は周囲が32穴、中柱が2穴で構成される。柱穴間は長軸の北東側では、最短27cm、最長84cm、平均53.1cm。長軸の南西側は、最短48cm、最長116cm、平均80.5cmである。両長軸の柱穴数を見てみると北東側が多く、南西側は少ない。このことから入口は南西側と思われる。一方、短軸では柱穴数は同数で、柱穴間は北西側は、最短50cm、最長92cm、平均68.8cm。南東側は、最短50cm、最長88cm、平均66.8cmである。中柱間は1.95mで、南東側中柱から南東壁側までは1.95m、北西側中柱から北西壁側まで



第26図 1号平地住居址 (3区)

注：プラン以外の柱穴 (イタリック体) については、別刷2-Cに計測値を示した。

第1表 1号平地住居址柱穴及び炉址計測一覧

柱穴 No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号	柱穴 No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	28	27	36	6037	19	26	25	30	7003
2	25	22	38	6052	20	27	24	27	7005
3	24	22	47	6051	21	24	23	30	7006・7007
4	35	28	54(10)	6050	22	25	24	26	6031-a, b, c
5	28	26	32	7040	23	28	26	24	6032
6	22	19	40	7018	24	29	24	23	6020・6021
7	29	26	55	7017	25	23	23	22	6019
8	39	33	25	7044・7045・7046	26	43	23	22	6016・6017・6018
9	30	29	10	7042	27	26	25	26	6014・6015
10	19	17	30	7014	28	24	19	6	6013
11	26	24	32	7038	29	28	25	27	6011・6012
12	20	18	19	7036	30	24	22	39	6047
13	29	23	44	7035	31	20	19	32	(6048)・6049
14	26	25	37	7030・7031	32	24	20	32	6036
15	22	13	20	7027	33	48	32	40	6022・6023・6024
16	40	24	28	7024・7023	34	51	32	36	6025・6026・6027・6028・6029・6034
17	26	22	25	7008	35	94	78	20	5号炉 (6033)
18	24	22	15	7004	36	72	52	14	6号炉 (7043)

は2.3mである。この距離を配したのは、屋内炉の存在に起因すると思われる。中柱から北東壁側へは、共に2.07mで、北西側中柱から南西壁側へは1.86m、南東側中柱から南西壁側へは2.07mである。炉は屋内と屋外に見られ、ともに北西側に位置する。その周辺では、床面が黒色を帯びている。北西側には柱穴No.7016から柱穴No.7033・7034の南西側方向に明瞭な雨垂れラインが見られた。

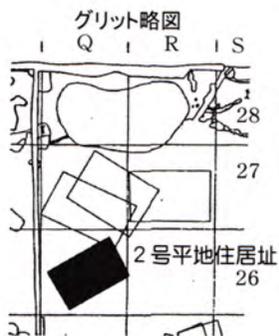
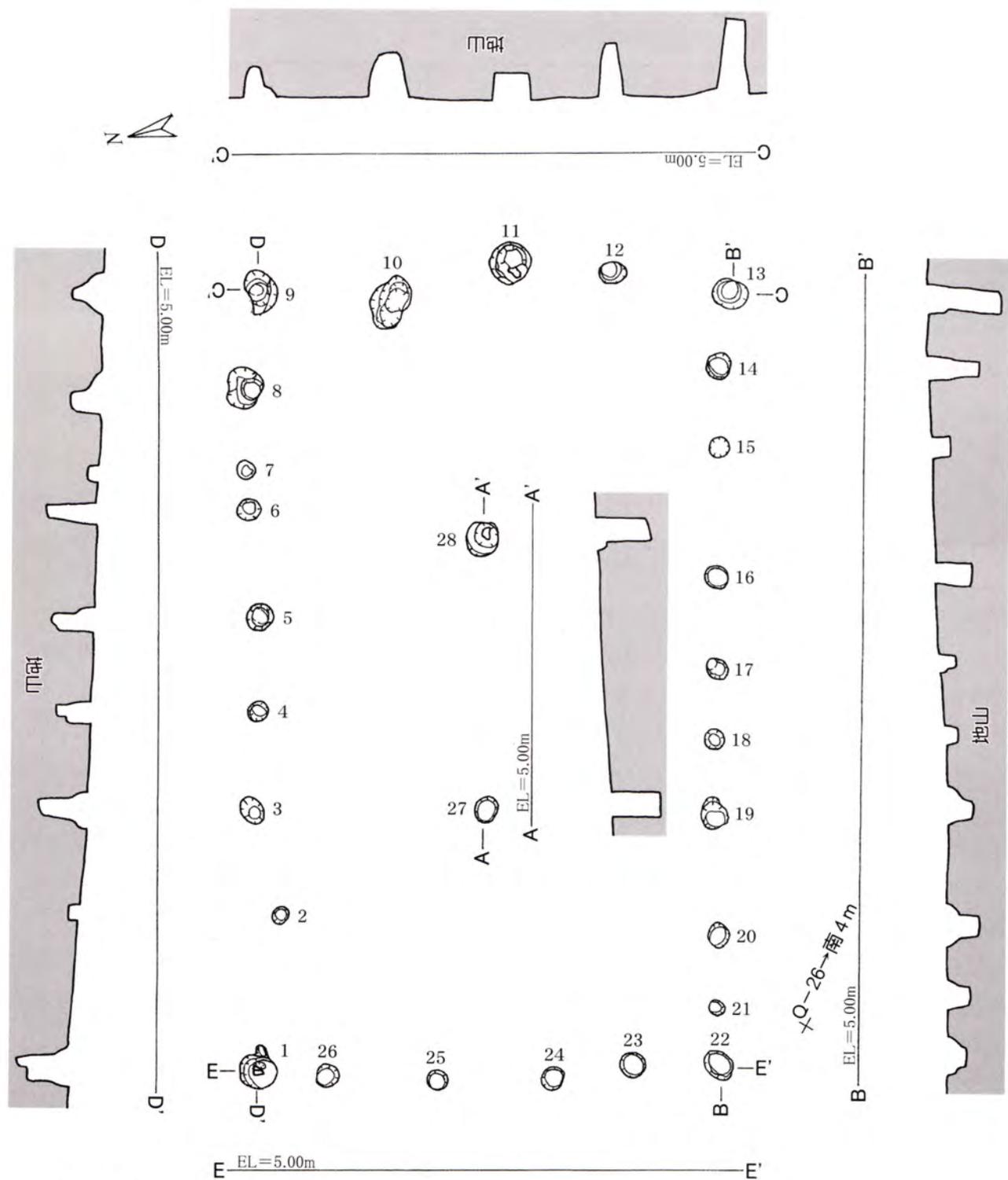
B. 2号平地住居址 (第27図、図版13)

本遺構は、4区Q・R-26にまたがって地山面で検出された第VI層(第一期)の遺構である。

平面形は、長軸が概ね東西方向で約8m、短軸が概ね南北方向に約4.9mの長方形を呈する。面積は約39.2㎡である。建物に伴う柱穴は2本の中柱をもち、周囲が26本と見られる。

柱穴の配置は、四隅の柱穴以外でみると北側の長軸の並びが7本、南側は8本、西側が4本、東側は3本である。中柱の間隔は約2.9mで、これは本住居址の約1/3分の長さにあたり、中柱から両長・短軸の柱穴の並びとの間隔はほぼ同じである。

南側長軸(B-B')の柱穴の並びには、東・西隅側に3穴のまとまりがあり、内側の柱穴(柱穴No.15・20)から約1.3mの間隔を空けて、中央の4本のまとまりに分かれる。この約1.3mの間隔が開く部分が入口ではないかと想定され、南側に2ヶ所の入口を持っていたと考えられる。この南側の中央で、まとまりを持つ4本の柱穴の両端(柱穴No.16・19)は、中柱の対にあたる位置で深さがあり、その間には2本がほぼ均等に配されている。これに対する、北側の並びも同様で、中柱の対にあたる柱穴(柱穴No.3・6)は深さがあり、その間には南側と同様に2本を配している。東西側の短軸(C-C'・E-E')は、2本の中柱の並びで長軸方向を基準にすると、東側の柱穴の並びは、中柱の軸線上に1本(柱穴No.11)があり、この軸線上にある柱穴を境に隅の柱穴との間をほぼ均等に分けるように各1本、対して、西側は軸線からやや離して2本(柱穴No.24・25)が位置し、この2本と隅の柱穴間に1本を配している。2本の中柱を結ぶ長軸方向を基準にして短軸の柱穴との配置をみると「Y」字状を呈して見える。



第27図 2号平地住居址 (4区)

第2表 2号平地住居址柱穴計測一覧

柱穴 No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号	柱穴 No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	46	41	56	897-a, b	15	22	22	20	890-a, b
2	18	14	13	836	16	22	22	40	862-a, b
3	35	19	54	832	17	23	20	20	9027
4	21	19	38	843	18	20	18	15	9012-a, b
5	29	26	45	847-a, b	19	36	24	25	9011-a, b
6	25	22	55	886-a, b	20	46	24	36	9009-a, b
7	18	17	11	849	21	31	15	24	9008-a, b
8	43	35	45	881	22	34	24	20	9006
9	46	34	45	857	23	44	24	29	9003-a, b
10	52	31	32	867-a, b	24	36	22	18	9004-a, b
11	44	43	30	876	25	22	22	22	899
12	27	23	57	9051-a・b・c・d	26	22	22	26	898-a, b
13	46	28	78	612	27	26	24	52	878
14	26	23	59	891	28	38	34	59	854

4隅の柱穴は、南東隅が最も深く、ついで対角にある北西隅が深い。それに対する南西隅と北東隅の柱穴はそれほど深くない。柱穴は東側と北側の並びに深いものが見られる。

住居址の主な柱穴プランは検出されたが、本住居址に伴う炉址は不明である。個々の柱穴の計測値を第2表に記した。

C. 3号平地住居址 (第28図)

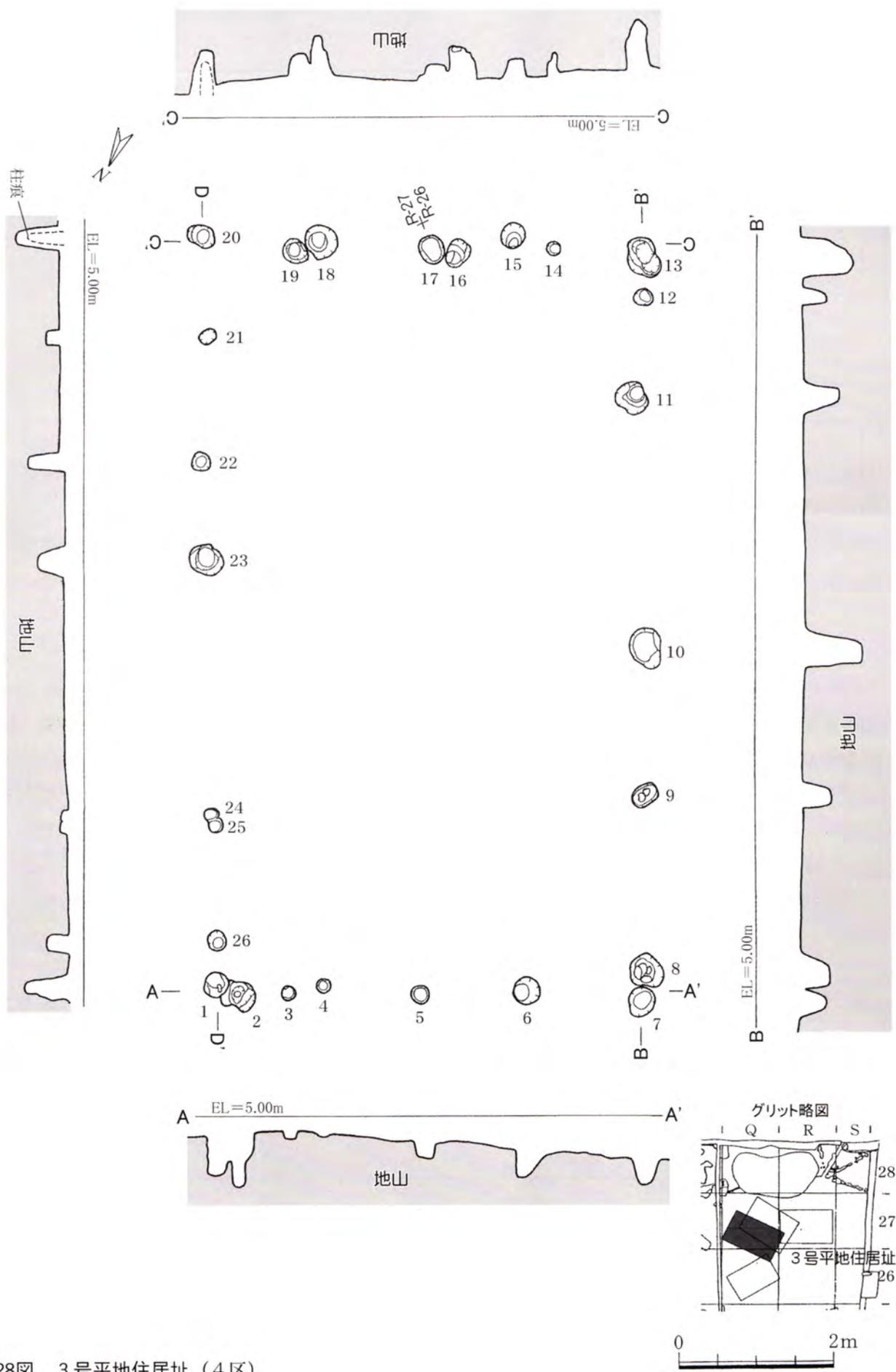
3号平地住居址は4区Q-26・27とR-26・27の第Ⅲ層より検出された第二期の遺構である。平面形は長軸が南北方向で10m、短軸は東西方向で6.4mの長方形を呈する。面積は64㎡。建物に伴う柱穴は26本である。中柱や炉は不明。個々の柱穴の計測値は第3表に記した。

第3表 3号平地住居址柱穴計測一覧

柱穴 No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号	柱穴 No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	32	30	56	331-c	14	34	30	28	888
2	44	32	68	331-b	15	34	32	24	9052
3	20	18	12	313	16	34	28	40	9026
4	18	18	8	317	17	32	30	24	9035
5	25	24	20	322	18	42	36	52	30-a, b
6	35	34	36	305	19	34	28	32	29
7	36	34	32	306	20	32	30	56	1018
8	46	40	40	307	21	24	18	18	3144
9	36	28	36	3004	22	26	24	44	431
10	30	28	84	9018 (9016~9018)	23	46	38	34	414-a
11	44	32	48	881	24	22	18	10	366-a
12	26	20	32	859-a, b	25	20	16	10	366-b
13	30 (56)	40	70	867-a, b, c	26	28	24	28	332

D. 4号平地住居址 (第29図)

4号平地住居址は4区Q-26・27とR-26・27の第Ⅲ層より検出された第二期の遺構である。平面形は長軸・短軸とも3号平地住居址と同角方向である。長軸は9.4m、短軸は5.6mの長方形を呈する。面積は52.64㎡。建物に伴う柱穴は35本である。中柱や炉址は不明。個々の柱穴の計測値は第4表に記した。



第28図 3号平地住居址 (4区)

第4表 4号平地住居址柱穴計測一覧

柱穴 No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号	柱穴 No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	27	24	42	371	19	44	32	27	603
2	34	30	46	487	20	20	18	10	770
3	44	38	17	365	21	20	18	17	1125
4	32	30	36	354	22	25	20	12	1119・1110
5	42	40	69	356-a, b	23	30	18	32	1030
6	20	18	22	338	24	22	20	30	233-a, b
7	24	22	20	339	25	22	18	22	1027-a, b
8	44	30	19	362-a, b	26	20	19	29	1036
9	44	30	23	367-a, b	27	25	20	12	12
10	48	34	21	369	28	42	38	45	1035
11	48	38	44	387	29	24	16	20	1074・75
12	24	22	25	401-a, b	30	30	26	16	1159
13	28	22	30	420	31	12	10	12	1082
14	20	18	14	3009	32	22	20	26	1013
15	18	16	24	9034	33	22	18	28	1
16	30	24	32	874	34	22	20	28	461
17	34	28	40	9026	35	22	19	20	406
18	36	34	59	9032					

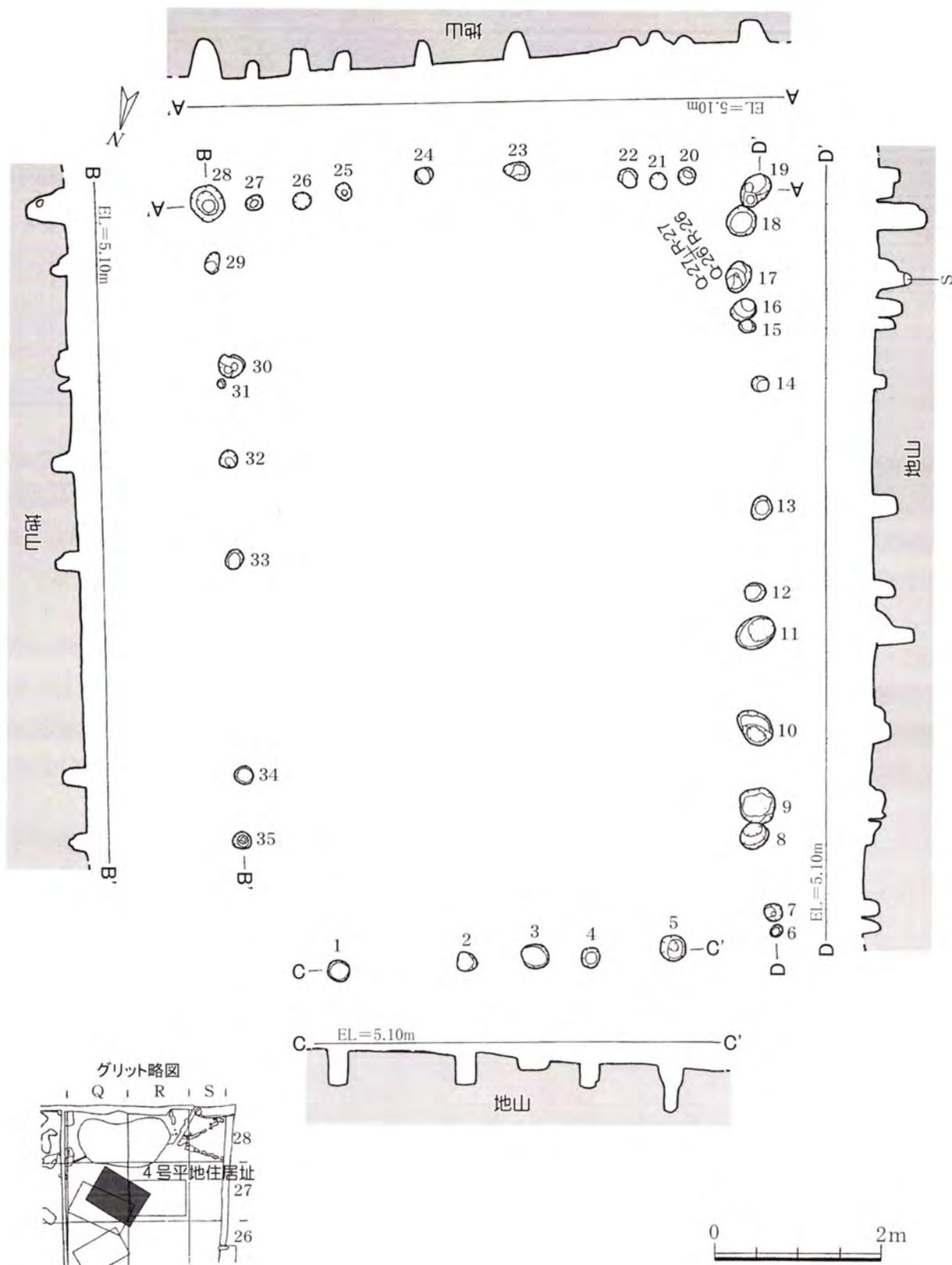
E. 5号平地住居址 (第30図)

本遺構は、4区R-27で第Ⅲ層b・c掘下げ後の第Ⅴ層と地山上面で検出した第二期の遺構である。平面形は、長軸が北西-南東方向に約9.4m、短軸は北東-南西方向に約5mの長方形を呈し、面積は約47㎡である。中柱と考えられる柱穴が2本あり、周囲の柱穴は25本とみられ、1・2号平地住居址に比してやや大きく細長い。

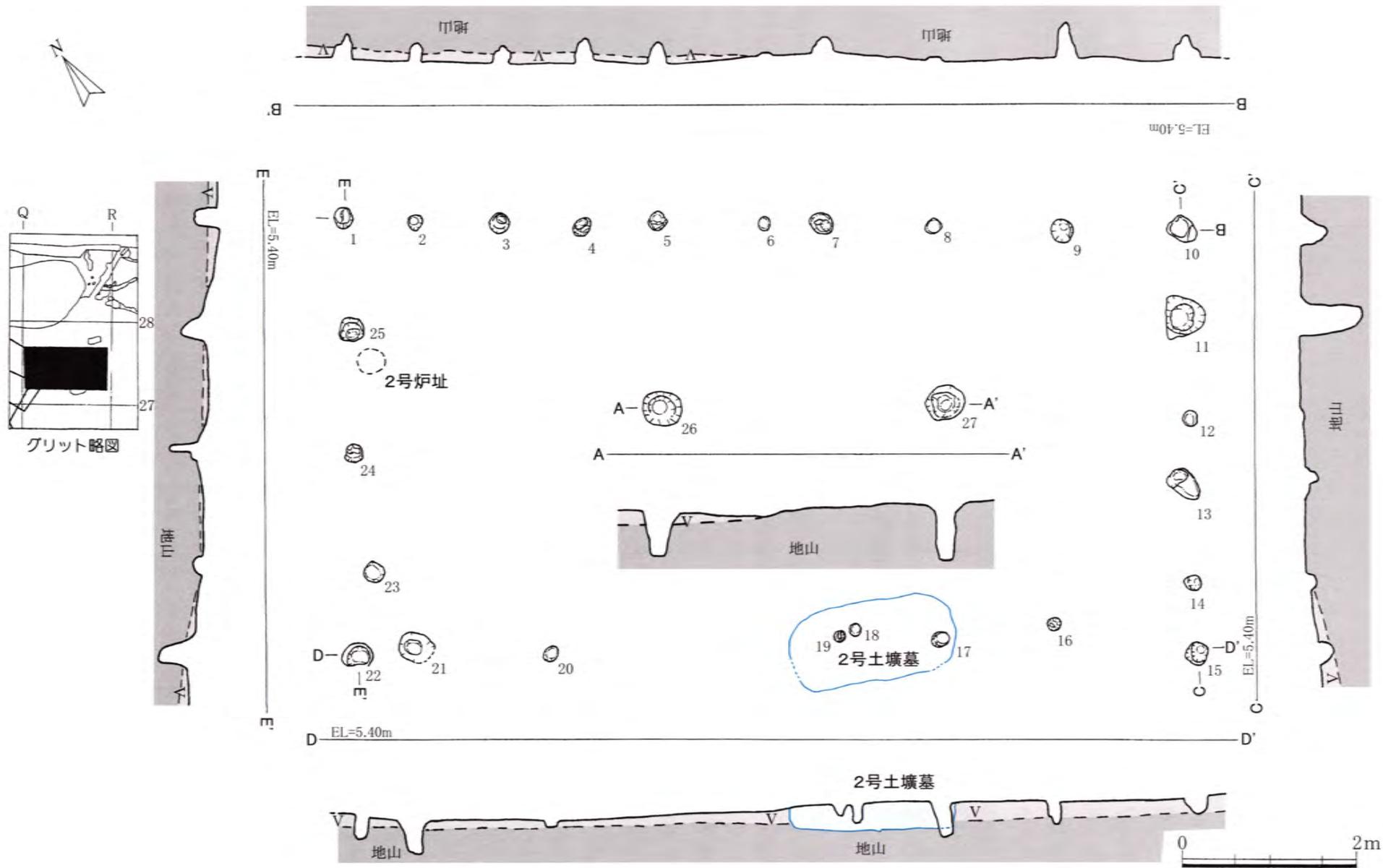
柱穴の配置を見ると、四隅の柱穴以外では、北東側の長軸の並びは8本、南西側は6本、南東側は4本、北西側は3本である。中柱の間隔は3.2mである。中柱から両短軸の柱穴の並びとの間隔は北西側がやや広くなる。両短軸は概ね等間隔であるが、北東側長軸の並びは、北西側でやや狭く南東側がやや広い。南西側の並びは2号土壌墓の上を通り、同土壌墓から北西側の柱穴の間合いに空きがある。また、本住居址の中に2号炉があるが、その位置が北西側の柱穴の並びに近すぎることから、本住居址に伴うものではないと考えられ、屋内・屋外炉ともに不明である。個々の柱穴の計測値を第5表に記した。

第5表 5号平地住居址柱穴計測一覧

柱穴 No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号	柱穴 No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	25	22	28	1	15	28	24	20	1128
2	18	17	22	222	16	16	14	26	93
3	23	23	20	3	17	20	18	41	-
4	23	19	28	242	18	14	12	22	55
5	22	20	25	7	19	14	12	12	54
6	14	11	5	1043	20	17	15	11	37
7	26	23	21	1161	21	40	33	41	32
8	17	14	5	8	22	33	30	28	29
9	27	25	41	1065	23	25	22	11	26
10	34	24	29	1145	24	20	18	40	1006
11	50	45	71	1142	25	30	28	33	1158
12	17	14	6	-	26	46	39	52	1035
13	39	28	16	1132	27	45	38	68	72
14	20	17	12	1130					



第29図 4号平地住居址 (4区)



第30図 5号平地住居址 (4区)

小結

平地住居址は、3・4区で検出された5基のうち、1・2号は2本の中柱を有する第一期の遺構である。3～5号平地住居址は第二期の遺構で、1号平地住居址よりも大きく2号平地住居址の大きさに近いもので、そのうち5号平地住居址は2本の中柱が見られるが3・4号の中柱は判然としない。2～5号平地住居址でプランに重なりが見られ、3号平地住居址の柱穴No.12・14は2号平地住居址の柱穴にあたり、前者が2号平地住居址の柱穴No.8、後者は柱穴No.10である。2号平地住居址の柱穴No.8・10はいずれも2つの柱穴があると見られ、柱穴No.8は住居址の外側にあたる部分に、柱穴No.10は住居址の内側に当たる部分が3号平地住居址のものと見られる。4号平地住居址の柱穴No.21・32は5号平地住居址のプランにあたり、前者は柱穴No.26、後者は柱穴No.1。さらに、4号平地住居址の柱穴No.17は5号平地住居址の中柱で柱穴No.22となる。

1号平地住居址と次章に述べる1号高床式建物址はセット関係と判断され、前者は山手側に後者は海手側の位置にある。この位置関係は4区においても法則的にみられた。

本遺跡で検出された平地住居址の類例は、伊佐前原第一遺跡^(註1)やターシーモー北方遺跡^(註2)などがあり、民俗例では、宮古島の上比屋山遺跡の祭祀住居が最も近いものと考えられる。

〈註〉

註1 當銘清乃ほか 2001『伊佐前原第一遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター

註2 仲宗根 求ほか 2001『ターシーモー北方遺跡』読谷村教育委員会

2. 高床式建物址

高床式建物址は総数7基が検出された。3区で1号平地住居址とのセット関係が確認された1号高床式建物址と、4区でまとめて検出された6基(2～7号)である。4本柱1基(1号)6本柱2基(2・7号)、8本柱(6号)、9本柱2基(4・5号)、未発掘部にかかる不明の3号である。これらは、全て第一期の遺構である。

平地住居址と高床式建物址にみられる丘陵側に住居址、海手側に高床式建物址の位置関係は、4区においてもみられたが、第Ⅲ層の様子は不明である。

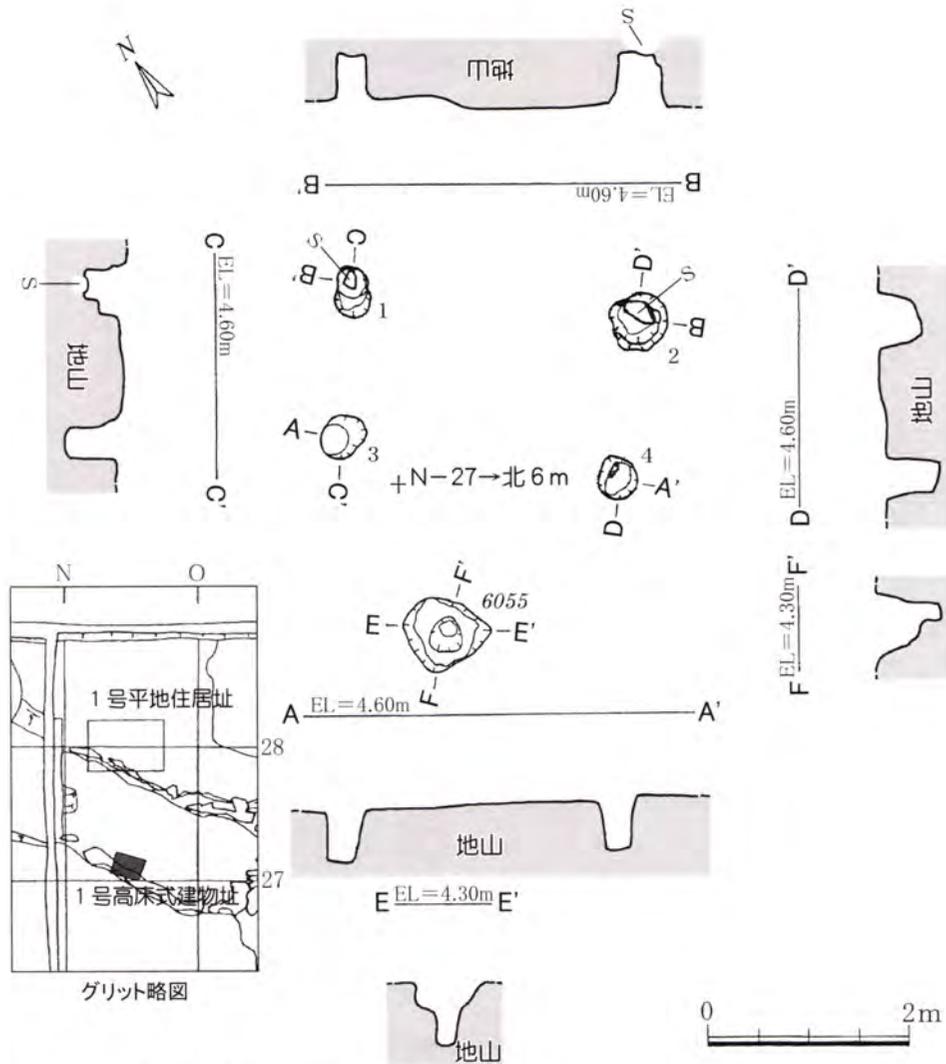
A. 1号高床式建物址(第31図、図版14、巻首図版1)

1号高床式建物址は3区N-27の南側中央部に位置する。1号平地住居址の北西側約8.49mに配され、第Ⅵ層bより単独に配置された状況で検出された第一期の遺構である。両遺構は同時存在の可能性があり、セット関係と思われる。建物の長軸は北西-南東向きで、短軸は北東-南西向きである。柱間は長軸の北東側は2.88m、南西側は2.78m、短軸の北西側は1.4m、南東側は1.5mの4本柱で構成される。また、本遺構の南西壁側中央から南西へ1.6m離れた位置に柱穴が1穴(柱穴No.6055)ある。柱穴は柱が垂直に建つように掘り込まれている。本遺構との関わりは今のところ不明である。

柱穴観察一覧を第6表に示した。

第6表 1号高床式建物址柱穴計測一覧

柱穴No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号
	長径	短径	深さ	
1	56	37	52	6005
2	56	55	42	6004
3	42	40	52	6053
4	53	40	50	6054



第31図 1号高床式建物址 (3区)

B. 2号高床式建物址 (第32図)

2号高床式建物址は4区S・R-24の南西側に位置する。第VI層より、3号高床式建物址及び畠址と切り合った状況で検出された第一期の遺構である。建物の長軸は南北向き、短軸は東西向きである。柱間は長軸の東壁側の北側は2.02m、南側は1.78m、西壁側の北側は2.08m、南側は2.02mである。短軸の北壁側は2.46m、真中は2.36m、南壁側は2.3mである。本遺構は畠址及び、3号高床式建物址の切り合い関係から畠址よりは新しく、3号高床式建物址よりは古いことが判明した。柱穴観察一覧を第7表に示した。

第7表 2号高床式建物址柱穴計測一覧

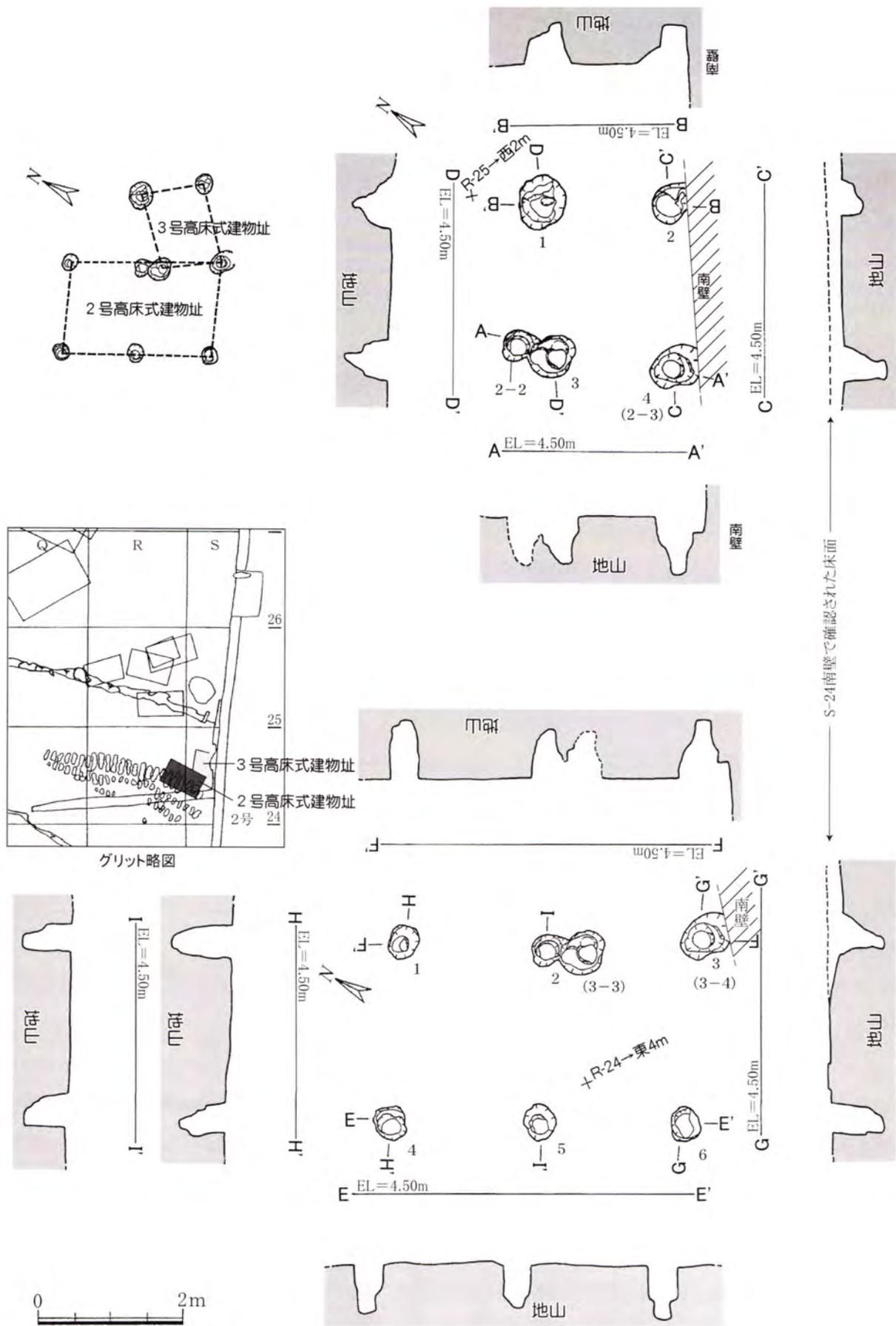
柱穴 No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号
	長径	短径	深さ	
1	46	44	80	10238
2	44	42	72	10230-a, b
3	44	44	68	10241
4	48	42	58	10401
5	48	64	82	10402
6	44	44	66	10403

C. 3号高床式建物址 (第32図、巻首図版2)

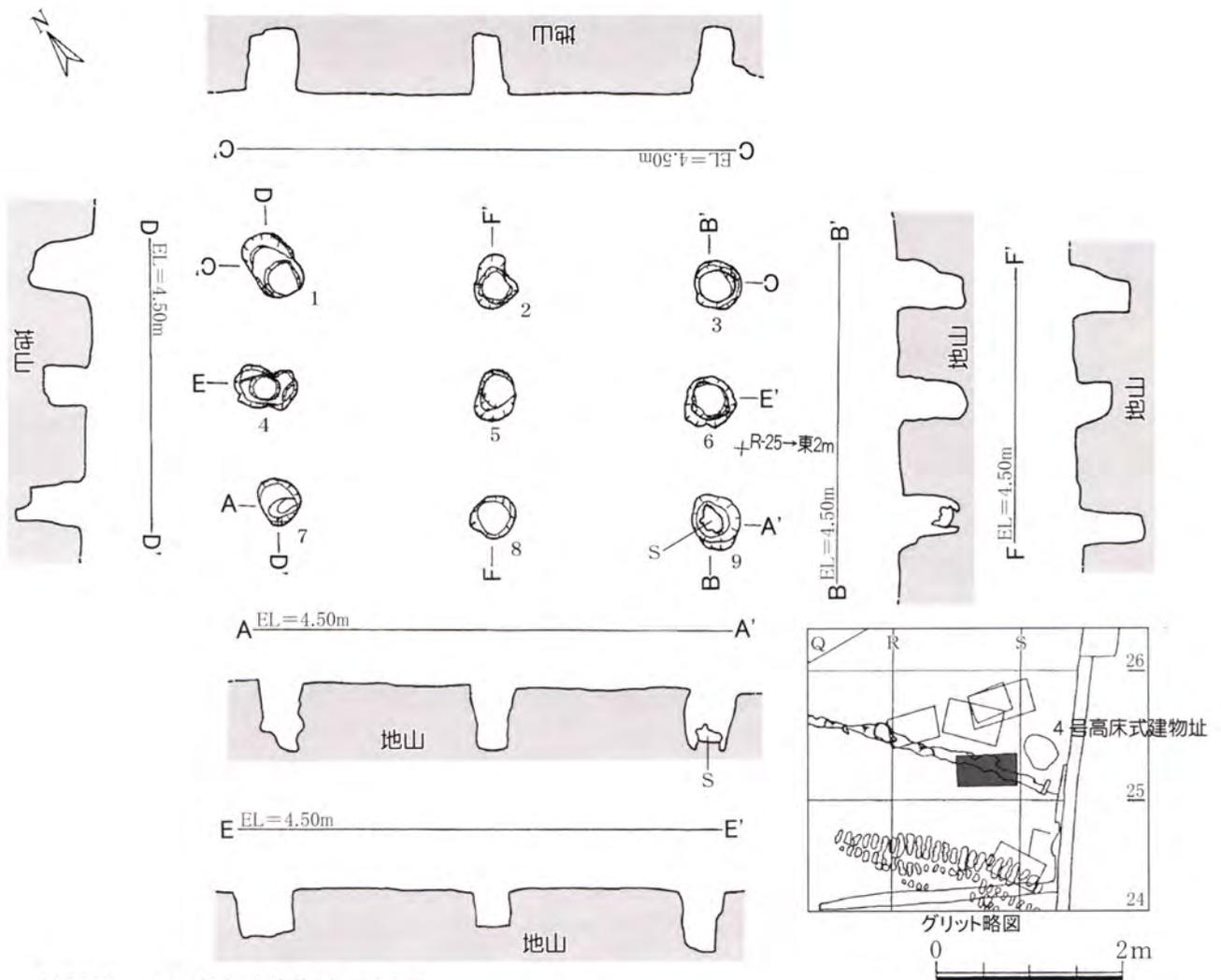
3号高床式建物址は4区S-24の北西側に位置し、南半分は調査区外にあたる為、平面プラ

第8表 3号高床式建物址柱穴計測一覧

柱穴 No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号
	長径	短径	深さ	
1	70	70	64	10400
2	66	62	66	10240
3	60	60	54	10230c・10232・10233・10234・10235・10236・10237・10239
4	75	64	82	10241



第32図 2・3号高床式建物址 (4区)



第33図 4号高床式建物址（4区）

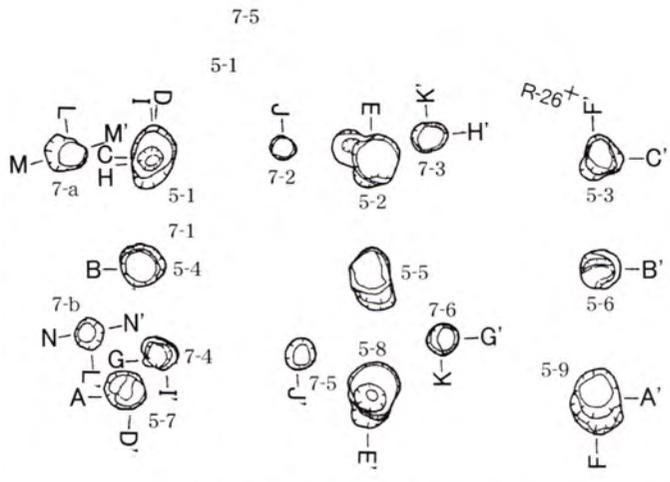
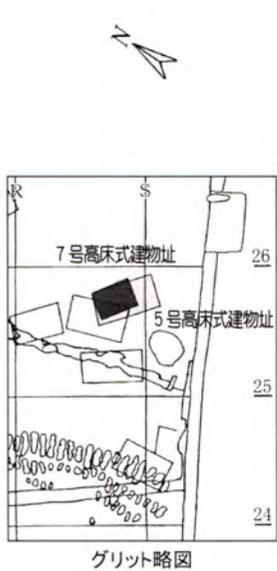
ンは確認できない。本遺構の北西壁側は2号高床式建物址の柱穴を切っている第一期の遺構である。現況では4穴確認できるが、その柱穴間は、北西壁側は2.14m、東壁側は1.74m、西壁側は1.78m、南側は2.28mである。柱穴観察一覧を第8表に示した。

D. 4号高床式建物址（第33図、図版8）

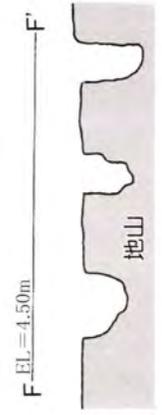
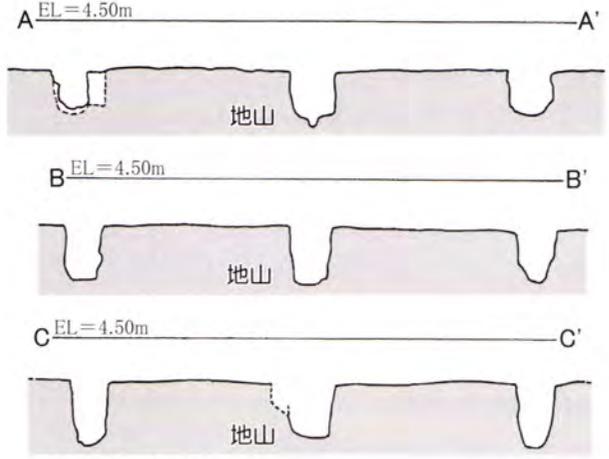
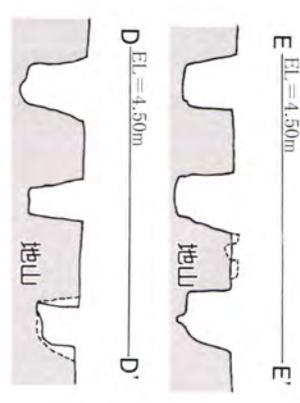
4号高床式建物址は4区R-25の南西側に位置する。第VI層より単独に配置された状況で検出された第一期の遺構である。建物の長軸は北西-南東向きで、短軸は北東-南西向きである。柱間は長軸の北東壁側の北西側と南東側、真中の南東側、南西壁側の北西側と南東側は各2.5mで、真中の北西側は2.62mである。短軸の北西壁側の北東側と南西側は共に1.22m、真中は北東側が1.2m、南西側は1.28m、南東壁側の北東側は1.2m、南西側は1.28mである。9本柱で構成される。柱穴観察一覧を第9表に示した。

第9表 4号高床式建物址柱穴計測一覧

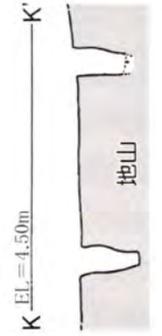
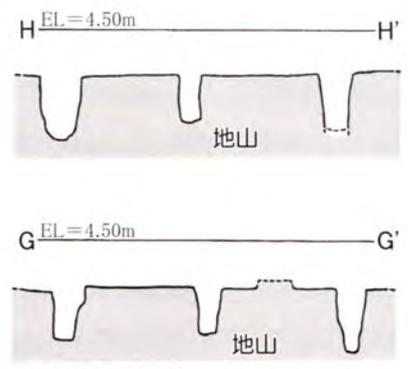
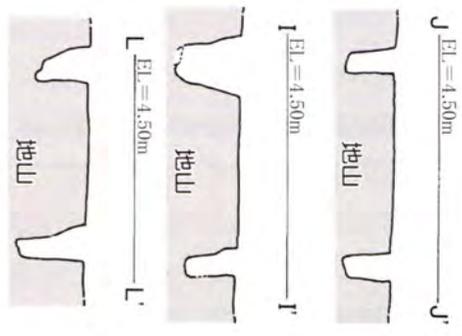
柱穴No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号
	長径	短径	深さ	
1	74	44	64	10049-a, b, c
2	64	34	48	10051-a, b, c
3	50	42	70	10052-a, b
4	58	46	66	10058-a, b, c, d
5	52	40	36	10057-a, b, c
6	50	44	68	10053-a, b
7	50	50	68	10060-a, b
8	50	50	72	10061-a, b
9	60	50	60	10062-a, b, c



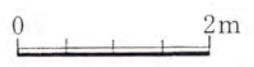
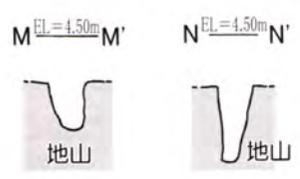
<注> 5・7号高床式建物址と重複しているのので、区別するために、柱穴番号の前に遺構番号を入れた。



5号高床式建物址



7号高床式建物址



第34図 5・7号高床式建物址 (4区)

E. 5号高床式建物址（第34図、図版8）

5号高床式建物址は、4区R・S-25にまたがって地山面で検出された第VI層（第一期）の遺構である。平面形は、長軸が北西-南東方向で約4.7m、短軸が北東-南西で約2.5mの長方形を呈する9本柱である。面積は約11.8㎡。

柱間は、長軸の東側列と中央列が約2.3mであるが、西側は僅かに長い。短軸では中央の柱穴（No.5-4~6）から東側が約1.2m、西側が約1.4mである。柱穴内（No.5-6・7）からは石灰岩礫が検出された。柱穴No.5-6は上面で約5cm大、柱穴No.5-7では深さ約20cmに約10cm大の礫であった。

このプランには、7号高床式建物址が重なっており、柱穴No.5-1が両者の北西隅の柱となるが前後関係は判然としない。柱穴観察一覧を第10表に示した。

F. 6号高床式建物址（第35図）

6号高床式建物址は、4区Q・R-25にまたがって地山面で検出された第VI層（第一期）の遺構である。平面形は、長軸が北西-南東方向で4m、短軸は北東-南西で2.2mの長方形を呈する8本柱である。面積が8.8㎡。

柱間は長軸では約1.3m、短軸では約2.2mである。柱穴内からは、柱穴No.3以外で石灰岩礫が検出され、柱穴の深さ約10~20cmに約10~15cm大のもの、深さ約40cmでは約20~30cmのもの、底面からは約10~15cmのものであった。柱穴No.1・2・4は柱を固定するくさび石として使用したものではないかと推察される。柱穴No.2では中央部にやや扁平な石灰岩礫が間に土を挟んで数個重なって検出された。

本遺構にはプランから外れるものと重複の可能性のある柱穴No.2、4、5~8があることから、数基のプランが重なっている可能性も考えられる。柱穴観察一覧を第11表に示した。

G. 7号高床式建物址（第34図）

7号高床式建物址は、4区R-25の地山面で検出された第一期の遺構である。平面形は、長軸が北西-南東方向で2.8m、短軸は2.1mの長方形を呈する6本柱である。面積が5.9㎡。

柱間は長軸では約1.5m、短軸では約2mである。柱穴No.7-5のみ、石灰岩礫が柱穴のほぼ中央の深さ約20cmから、長さ約20cm、厚さ約2cmの扁平な石灰岩礫が出土した。

このプランは、北西隅の柱穴が5号高床式建物址の柱穴と重複する（柱穴No.5-1と7-1）。

第10表 5号高床式建物址柱穴計測一覧

柱穴No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号
	長径	短径	深さ	
1	65	40	70	10010, 10011, 10012, 10013
2	59	58	58	10018, 10019a~d
3	43	42	73	10070-a, b
4	45	45	56	10023-a, b, c
5	64	45	62	10022-a, b, c, d
6	48	40	54	10071-a, b, c
7	57	42	44	10030a, b
8	64	48	61	10014, 10024, 10025, 10026
9	69	47	48	10072-a, b, c

第11表 6号高床式建物址柱穴計測一覧

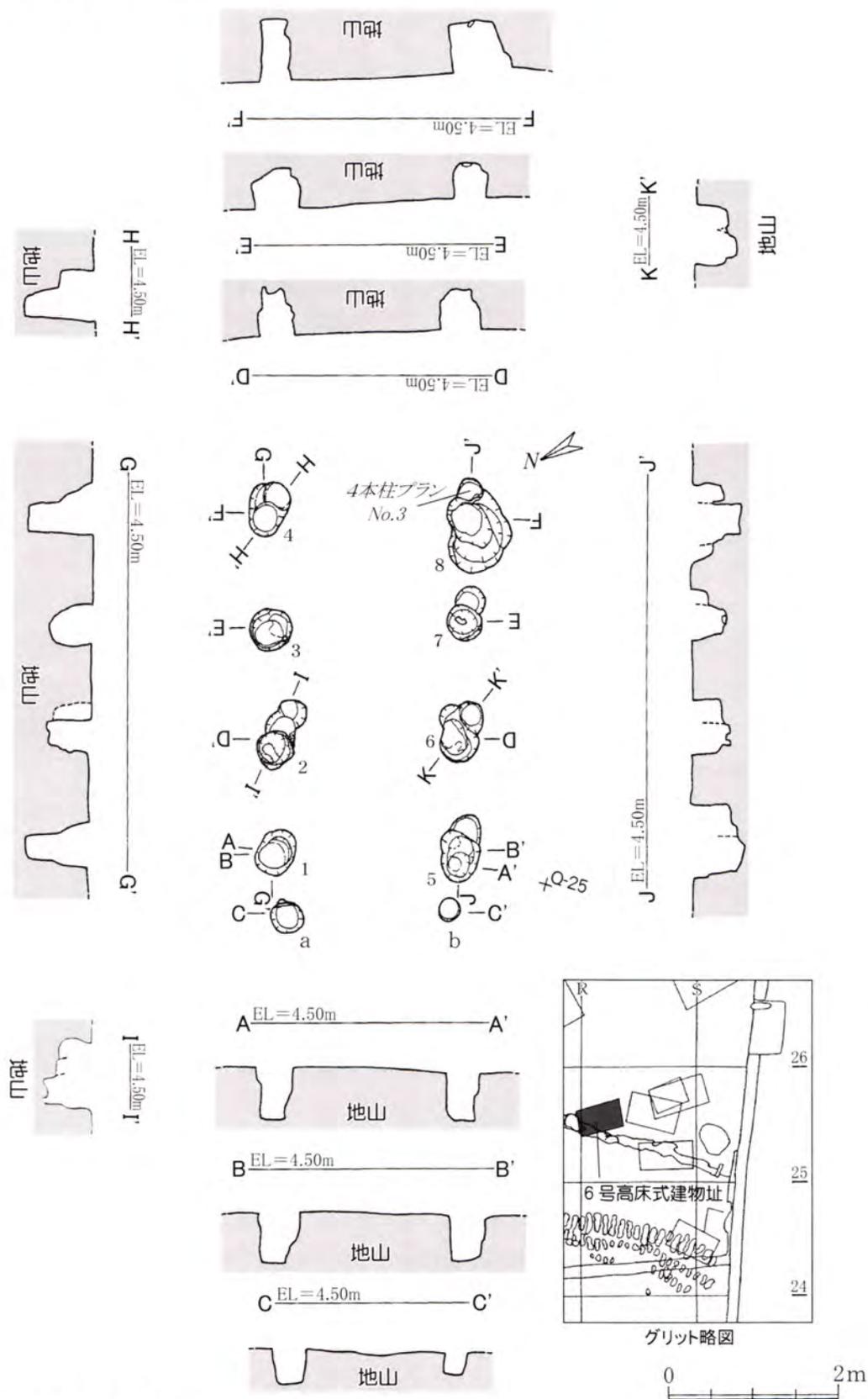
柱穴No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号
	長径	短径	深さ	
1	53	48	74	055, 056, 057
2	60	42	58	10001, 10002, 10003, 10004, 10004-a・b
3	52	48	50	10001, 10002, 10003, 10004, 10004-a, 10005-b
4	60	38	76	10001, 10002, 10003, 10004, 10004-a, 10006-b
5	88	40	62	10001, 10002, 10003, 10004, 10004-a, 10007-b
6	66	48	50	10043-a・b, 10045
7	60	40	40	10039, 10040, 10041, 10038-a, b
8	92	70	62	10065, 10067, 10064, 10066, 10063, 10035-a, b
a	40	35	41	058, 059, 060, 061
b	27	26	24	065-a, b

第12表 7号高床式建物址柱穴計測一覧

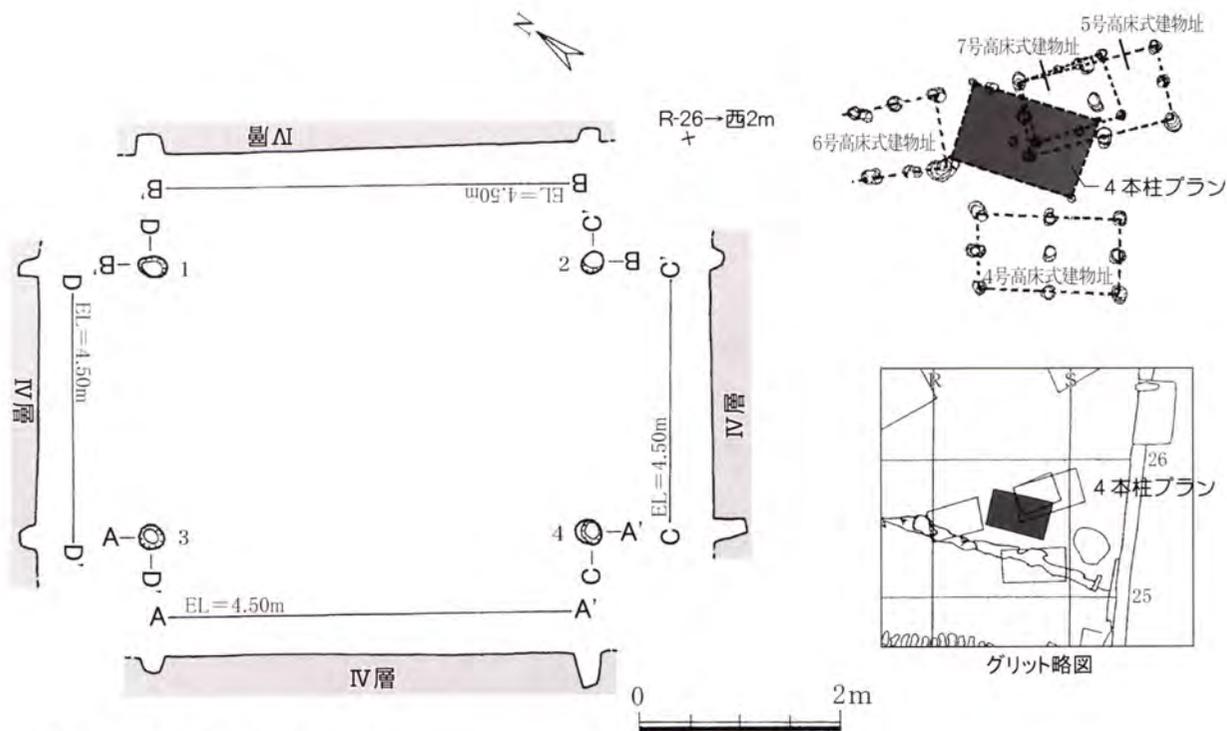
柱穴No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号
	長径	短径	深さ	
7-1	65	40	70	10010, 10011, 10012, 10013
7-2	30	25	50	10017
7-3	35	33	50	10020
7-4	34	28	55	10028-a, b
7-5	30	29	50	10027-a, b
7-6	30	30	65	10021-a, b
7-a	40	37	55	10009-a, b
7-b	40	36	80	10032-a, b, c

<注> 5号高床式建物址と重複しているので、区別するために、柱穴の前に遺構番号を入れた。

柱穴 a・bはこのプランの並びからやや外れるもので、建て替えまたは付随するものの可能性も考えられる。大きさや柱の本数から5号高床式建物址よりも7号高床式建物址と関連するものではないかと思われる。柱穴観察一覧を第12表に示した。



第35図 6号高床式建物址 (4区)



第36図 4本柱プラン（4区）

小結

高床式建物址はいずれも第一期の遺構である。1・4号高床式建物址にプランの重なりは見られないが、2号高床式建物址では、同遺構の柱穴が畠址を切り、2号高床式建物址は3号高床式建物址の柱穴に切られていたことから、畠址・2号・3号高床式建物址の順に古いことが判明した。5～7号高床式建物址では部分的に重なる状況が見られた。5号高床式建物址については、柱穴③の炭素14年代測定は1002±50BPであった。また、畠址に掘り込まれ2号高床式建物址の南側では、第IV章第1節14で述べる柵列状遺構も検出された。高床式建物址は第III層のものは不明であるが、大きさや配置が類似する柱穴がS-27に見られる。高床式建物址の類例は、北谷町サークル遺跡^(註1)や読谷村の吹出原遺跡^(註2)、ターシーモー北方遺跡、伊佐前原遺跡^(註3)などがある。

〈註〉

註1 安里嗣淳・島 弘ほか 1987『砂辺サークル遺跡』沖縄県教育庁文化課

註2 仲宗根 求ほか 1990『吹出原遺跡』読谷村教育委員会

仲宗根 求ほか 2001『ターシーモー北方遺跡』読谷村教育委員会

註3 當銘清乃ほか 2001『伊佐前原第一遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター

3. 4本柱プラン（第36図、図版8）

本遺構は、4区R-25第IV層上面で検出された第III層e（第一期）の遺構である。平面形は、長軸が南北方向で約4.4m、短軸は約2.7mの長方形を呈し、南北の間合いが長い。柱穴の径は20～26cm、深さは15cm前後が2本、20cmが1本、34cmが1本である。南西隅（柱穴No.4）が深い。また、柱穴No.3は、6号高床式建物址の柱穴No.

8に掘り込まれていた。第IV層上面で検出された第III層e（第一期）のプランは本遺構のみで、平地住居址・高床式建物址の柱穴に比して径・深さともに小さく、4本のうち、3本の深さが20cm以下と浅いことから、住居址・高床式建物址以外の遺構ではないかと思われる。

第13表 4本柱プラン柱穴計測一覧

柱穴No.	計測値 (cm)			調査時の柱穴番号
	長径	短径	深さ	
1	30	20	19	8002
2	25	24	15	8004
3	25	22	16	8001
4	25	24	34	8003

4. 炉址

炉址は、3・4区で合計9基が検出された。第二期のものは4区では、第Ⅲ層bが5基（1～4・8号）、第Ⅲ層cが2基（7・9号）の7基で、第一期は第Ⅵ層から1号住居址に伴う2基（5号・6号）が検出された。

炉址は、平面形から円形・楕円形・隅丸方形がある。炉址には、焼痕があり炭が堆積するもの（1～4号）、炭が底に堆積するが焼痕をもたないもの（7～9号）、焼痕をもたず炭の堆積が僅かなもの（5・6号）がある。

大きさは、円形は径が約50cm程度、隅丸方形は約70cm程度と約40cm、楕円形は50cm程度のものと、70cm以上のものである。いずれも、深さは、ほとんどが約20cm程度であるが、浅いものは10cm以下（7・8号）で、もっとも深いものは約40cmであった（4号）。

1号平地住居址に伴う5・6号炉址以外のもについては、他の住居址との関連は判然としない。以下、各炉址について記述する。

A. 1号炉址（第37図、図版17）

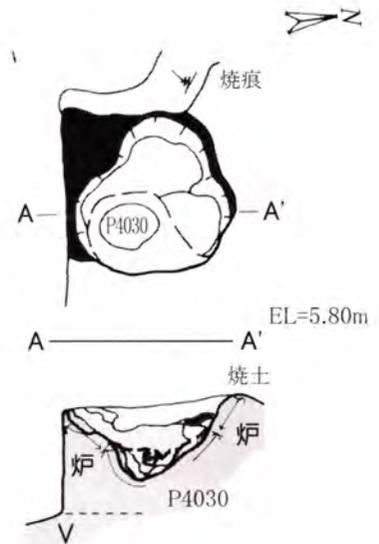
本炉址は、R-28で5号石列の北側に堆積する橙黄褐色土層の上面で検出された第Ⅲ層b（第二期）の遺構である。橙黄褐色土層は整地土ではないかと考えられるもので、上面からは第Ⅲ層bの遺構が検出され下位には第Ⅴ層が堆積する。平面形は、隅丸方形で鍋底状を呈する。大きさは約40cm×40cm、深さは最深部で約20cmである。炉の縁には厚さ約2～3cmの赤褐色の焼痕があり、南西側の床面にも見られる。底には厚さ約2cmで炭が堆積する。炉内の土は大粒の炭を多く含んでいた。本炉址は、同じ検出面の柱穴No.4030を切っていたことから同柱穴より後に形成されている。

B. 2号炉址（第38図、図版17）

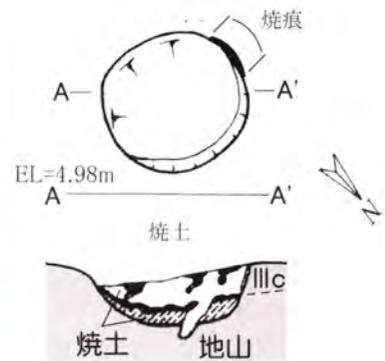
本炉址は、R-27の北側で、第Ⅲ層c上面で検出された第Ⅲ層b（第二期）の遺構である。平面形は、円形で鍋底状を呈する。大きさは直径約46cm、深さ約15cmである。床面から炉の北側の縁にかけて焼痕がある。焼痕の厚さは炉の縁で厚さ約1cm。炉内では約2～4cmで炭が堆積し、その上面には部分的に焼土塊が見られた。

C. 3号炉址（第39図、図版17）

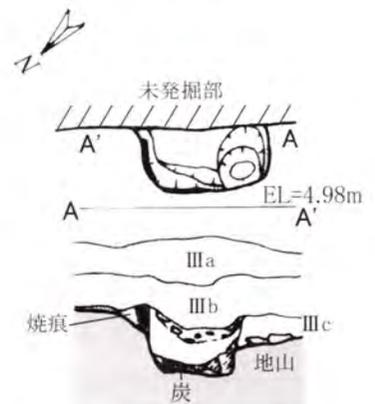
本炉址は、S-27で第Ⅲ層c上面で検出された第Ⅲ層b（第二期）の遺構である。本炉址は南壁にかかっており、第Ⅲ層bからの掘り込みが確認された。検出された平面形から隅丸方形と考え



第37図 1号炉址



第38図 2号炉址



第39図 3号炉址



られる。検出部の最大径は約22cm、深さ18cmである。ほぼ垂直に掘り込まれ、床面は平坦である。北側部分の縁に厚さ約1cmの焼痕がある。底には厚さ約2cmで炭が堆積していた。

D. 4号炉址 (第40図、図版17)

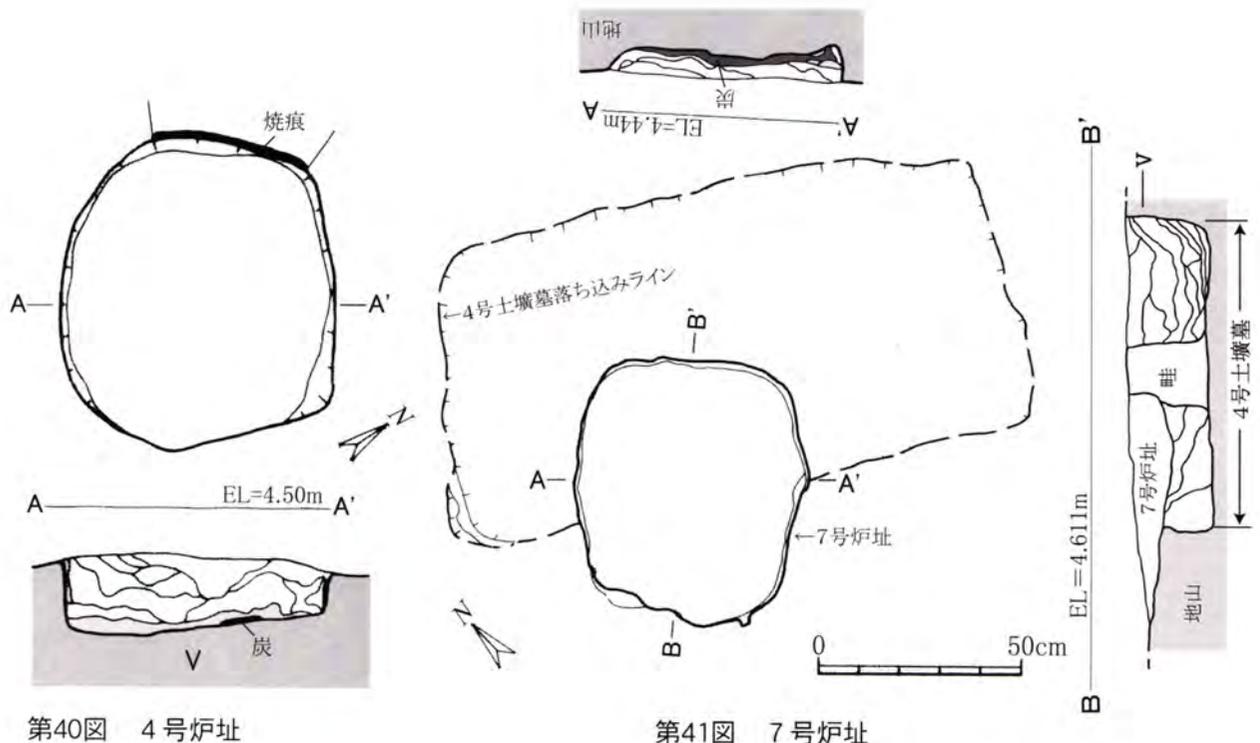
本炉址は、P・Q-27にまたがり、第V層上面で検出された第Ⅲ層b(第二期)の遺構である。平面形は、隅丸方形を呈し、ほぼ垂直に掘りこまれ、床面は平坦である。大きさは約74cm×58cm、深さ約40cmである。北側の縁から床面にかけて焼痕があり、縁での厚さは約2cm、底には厚さ約2cmの炭が堆積する。形態の類例が伊礼伊森原遺跡^(註1)で検出されている。

E. 5号炉址 (第26図、図版14、巻首図版1)

本炉址は、N-28で検出された1号平地住居址内の北側に位置する屋内炉で、第VI層(第一期)の遺構である。平面形は楕円形、断面は半円形を呈する。床面は平坦である。長径約94cm、短径約78cm、深さ約20cm。炉内には焼痕は見られず、炭を含む。堆積層は灰黒色を呈し、炉周辺は炉内に溜まった灰を掻き出したためと思われる灰黒色の砂層が住居内の北側に広がる。

F. 6号炉址 (第26図、図版14、巻首図版1)

本炉址は、N-28の1号平地住居址内で検出された5号炉址(屋内炉)をそのまま東側にスライドした場所に位置する屋外炉で第VI層の遺構(第一期)である。平面形は楕円形、断面は半円形を呈する。床面は平坦である。長径約72cm、短径約52cm、深さ約14cm。炉内には焼痕は見られないが炭は多く含む。5号炉同様炉の周辺は灰黒色砂層が広がる。炉を挟んで北側と東側に柱穴がある。北側は直径約8cm、東側は直径約11cmと小さい。炉を挟んで対に位置する状況から関連するのではないかとと思われる。母屋の外にあるので屋外炉としたが、炉の三方に柱穴がみられることから仮屋があったとも考えられる。



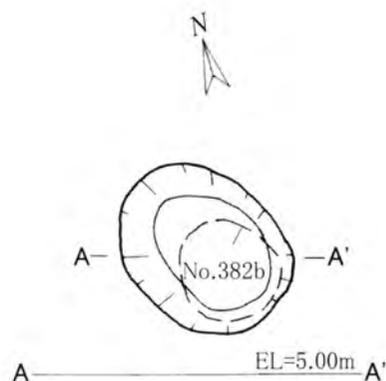
第40図 4号炉址

第41図 7号炉址

G. 7号炉址 (第41図、図版16)

本炉址は、S-26で4号土壇墓を切った状態で検出された、第Ⅲ層c(第二期)の遺構である。平面形は、隅丸方形を呈し、大きさは約64cm×58cm、最深部での深さは約9cmである。

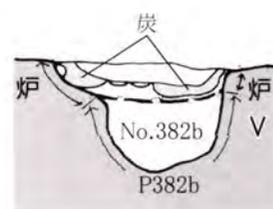
浅く掘り窪めたもので、東側と北側の壁面はほぼ垂直で、西側はやや外側に開いている。焼痕はみられないが、大粒の炭が厚さ約2cmで床面全体に堆積する。本炉址の炭による炭素14年代測定の結果は660±50BP^(註2)であった。



H. 8号炉址 (第42図)

本炉址は、Q-27中央部で、第Ⅴ層上面で検出された第Ⅲ層b(第二期)の遺構である。

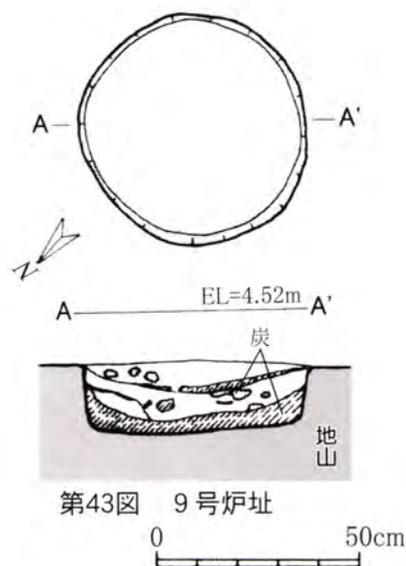
平面形は楕円形を呈し、浅く掘り窪めたものである。長軸は約46cm、短軸は37cm、深さ約9cmである。焼痕はみられないが、炉のほぼ全体に厚さ約2~3cmで炭が堆積する。本炉址床面で柱穴No.382-b(覆土は第Ⅴ層)が検出された。同柱穴を拡ろげて利用した炉である。



第42図 8号炉址

I. 9号炉址 (第43図、図版17)

本炉址は、Q-26の中央部よりやや東側の地山面で窪みに僅かに堆積する第Ⅴ層を切った状態で検出された、第Ⅲ層c(第二期)の遺構である。平面形は円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれており、底は平坦である。大きさは径約56cm、深さ約18cmである。焼痕はないが、2回の炭の堆積があり、下の炭の層では厚さ約4cm、上の層では厚さ約2cm堆積する。上下の炭の間層には灰白色土(第Ⅳ層)と黄褐色土(地山の土)の塊が含まれ、土器片が出土した。



第43図 9号炉址

小結

本遺跡では、砂鉄貯蔵穴が検出され、羽口や鉄滓・鍛造薄片などが出土したことから鍛冶を行っていたと考えられるが、検出された炉址には鍛冶炉と判断されるものはなく、今回の調査範囲では未発見である。

(註)

註1 山城安生ほか 1998『伊礼伊森原遺跡』北谷町教育委員会

註2 地球科学研究所の炭素14年代測定結果による。273p参照。

5. 砂鉄貯蔵穴

砂鉄貯蔵穴は、3・4区で合計3基が検出された。平面形が円形を呈するもの（1・2号）と隅丸方形を呈するもの（3号）がある。深さはいずれも10cm以下である。

1号は、厚さ2cmの覆土の下に砂鉄のみが詰まった状態であった。2号は、土混じりで1号に比べて砂鉄の量が少ない。両者ともに直径約30cmで深さが約10cm程度である。3号は、深さ約8cmで、遺構半裁後の完掘作業の際に、遺構内の覆土から磁石により僅かに砂鉄反応があり検出された。いずれも他の遺物の出土は無い。

砂鉄は、牧港貝塚^(註1)でも検出されているが、砂鉄貯蔵穴は、県内初の発見である。以下、それぞれについて記述する。

A. 1号砂鉄貯蔵穴（第44図、図版17）

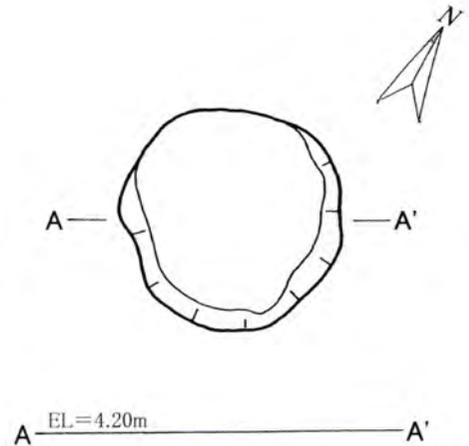
本遺構は、R-26西側隅の地山面で検出された。

平面形は円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれ、底は平坦である。大きさは直径約27cm、深さ約10cmである。遺構内の堆積は、上部の覆土以外はすべて砂鉄であった。覆土上面では南側の一部に第Ⅲ層eがあり、砂鉄を覆って黄褐色土の小塊（地山の土）を含んだ褐色土が厚さ約2cmで堆積していた。覆土の状況から第Ⅲ層e（第一期）の遺構と考えられる。出土した砂鉄は約7kgである。大澤正巳氏の分析では、出土した砂鉄は「粒子がとても小さいことと量的にも少ないことから製鉄（製錬）の原料には向かない（裏付けができない）。製鉄の原料となる砂鉄の粒子の大きさは3mmはあるが、後兼久原遺跡の砂鉄は1mm程。」との所見をいただいた^(註2)。

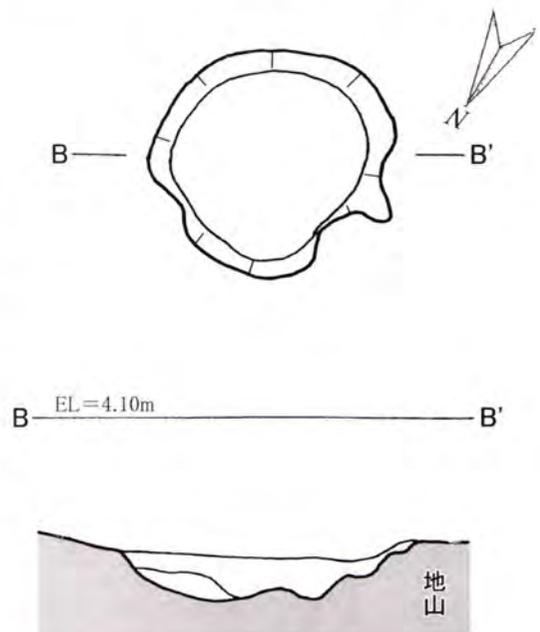
B. 2号砂鉄貯蔵穴（第45図）

本遺構は、R-25で3号高床式建物址の約20cm西側の地山面で検出された。

平面形は円形で、鍋底状を呈する。大きさは直径約27cm、深さ約8cmである。遺構内の堆積は、黄褐色



第44図 1号砂鉄貯蔵穴



第45図 2号砂鉄貯蔵穴



土粒（地山の土）を含む褐色土に混じって砂鉄が含まれた状態であった。出土した砂鉄は、約1.3kgである。高床式建物群と共に検出された第VI層の遺構（第一期）である。

C. 3号砂鉄貯蔵穴（第46図、図版17）

本遺構は、P-26南西隅で地山面で検出された。

平面形は隅丸方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれ、底は平坦である。大きさは約50cm×48cm、深さ8cmである。黄褐色土粒（地山の土）を含む暗褐色土に砂鉄が含まれていた。

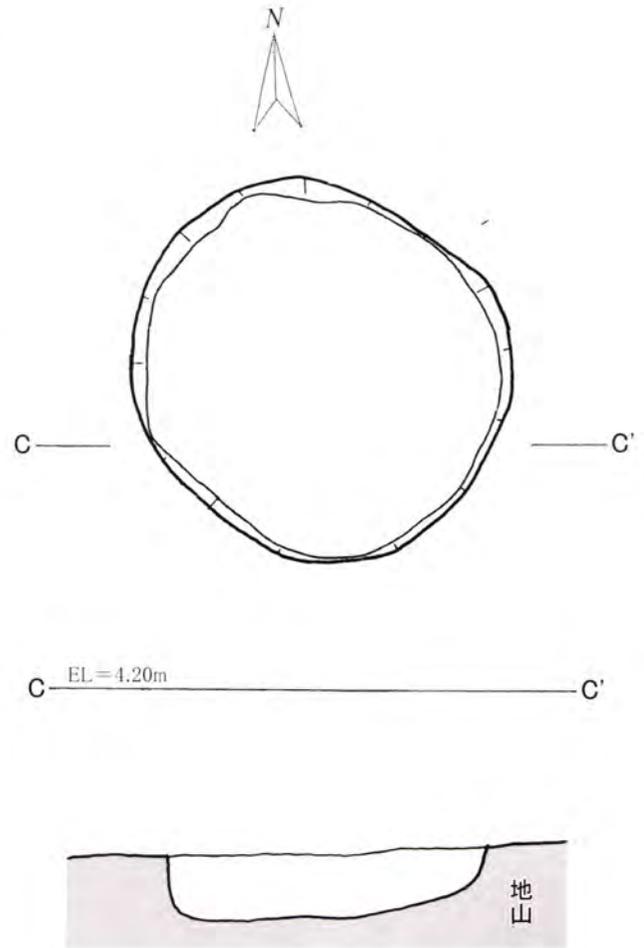
坑内西側の覆土約153gについて磁石をあて、80gの砂鉄が検出された。

本遺構は、第IV層堆積範囲内にあり第V層掘下げ後の地山面で検出された第VI層（第一期）の遺構と判断される。

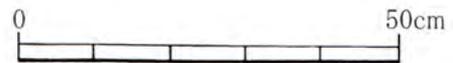
〈註〉

註1 大城 慧ほか 1985『牧港貝塚』沖縄県教育委員会

註2 大澤正巳氏の分析による。付篇4参照。



第46図 3号砂鉄貯蔵穴



6. 土坑

土坑は、3・4区で合計5基が検出された。いずれも、第Ⅲ層期の遺構である。平面形は円形・隅丸方形があり、円形は3基（1・4・5号土坑）、隅丸方形は2基（2・3号土坑）である。円形・隅丸方形ともに、径が約50cm程度のものと約70cm程度のものがある。

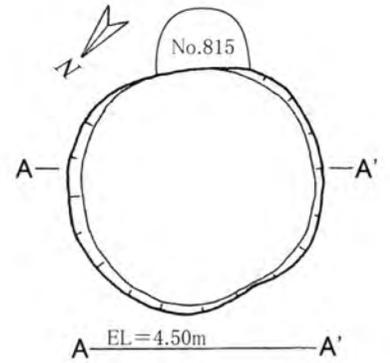
以下、それぞれについて記述する。

A. 1号土坑（第47図、図版18）

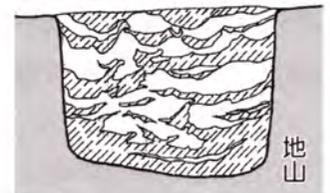
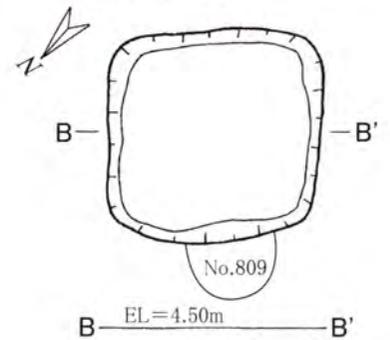
本土坑は、Q-26北東隅の地山面で検出された第Ⅲ層c（第二期）の遺構である。

平面形は円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれ、底は平坦である。大きさは直径約52cm、深さ約42cmである。

坑内の堆積は、5回に分けられ、暗黒褐色土の上に黄褐色土が互層をなしていた。本土坑は、第Ⅴ層が堆積するピットNo.815を切って掘り込まれていた。



第47図 1号土坑



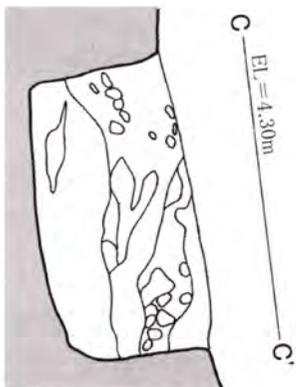
第48図 2号土坑

B. 2号土坑（第48図、図版18）

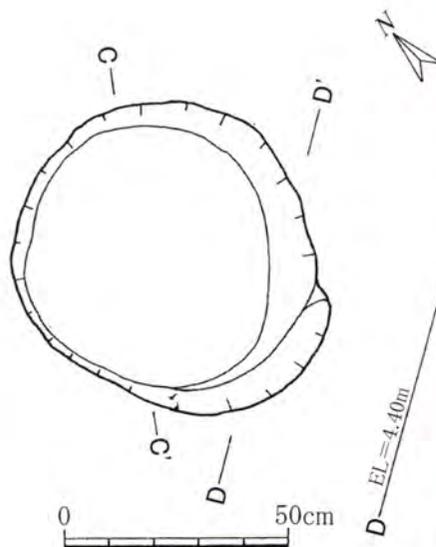
本土坑は、Q-26北東隅の地山面で検出された、第Ⅲ層c（第二期）の遺構である。

平面形は方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれ、底は平坦である。大きさは約48cm×48cm、深さ約36cmである。坑内では、暗褐色土と黄褐色土が交互に堆積していた。

本土坑は、第Ⅴ層が堆積する柱穴No.809を切って掘り込まれていた。



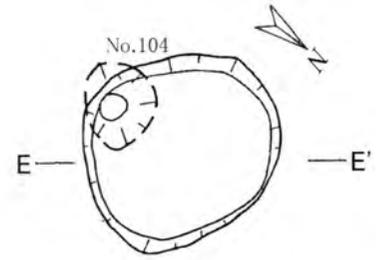
第49図 3号土坑



C. 3号土坑 (第49図、図版18)

本土坑は、P・Q-26にまたがって検出された。No.3畦壁面で第Ⅲ層eから掘り込まれたことが確認された第一期の遺構である。

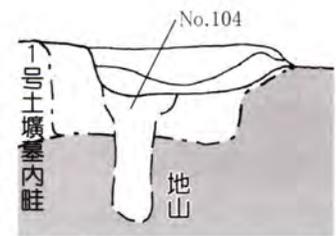
平面形は隅丸方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれ、底は平坦である。大きさは約70cm×64cm、深さ約36cmである。土坑内の堆積土は、第Ⅲ層eに第Ⅳ層と黄褐色土(地山の土)の塊を含んでいた。



E — EL=5.10m — E'

D. 4号土坑 (第50図、図版15)

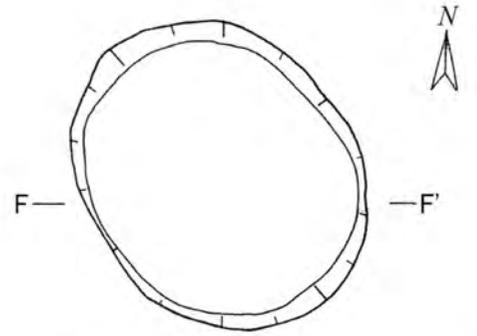
本土坑は、R-27南東隅の第Ⅲ層b(第二期)の遺構である。平面形は円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれ、底はほぼ平坦である。大きさは直径約32cm、深さ約22cmである。底には炭混じりの暗褐色土が堆積する。1号土壙墓を切って検出された。土坑内の東側床面で柱穴No.104が検出されたことから土壙墓(第52図)だけでなく、柱穴も切っていた。この柱穴内の土は、第Ⅲ層cに類似した土であった。



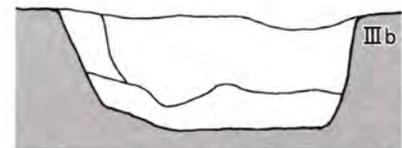
第50図 4号土坑 (第52図参照)

E. 5号土坑 (第51図)

Q-27北側中央付近の貝殻集中部(第Ⅲ層b)で検出された第Ⅲ層a(第二期)の遺構である。平面形が円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれ、底はほぼ平坦である。大きさは直径約74cm、深さ約27cmである。本遺構内の土は炭や貝殻片を含んでいた。



F — EL=5.20m — F'



第51図 5号土坑

0 ————— 50cm

7. 土壙墓

4基の土壙墓が検出された。R-27で2基(1・2号)、S-26で2基(3・4号)、いずれも調査区域の南東側(4区)にあり、遺構・遺物が集中して出土した地域である。土壙墓内からは各1体の埋葬人骨が検出されている。1・2・4号土壙墓から検出された人骨は成人男性で、いずれも頭位は南東に向くが、3号土壙墓の人骨は幼児で、頭位は逆の北西に向く。これらの土壙墓のうち、2号土壙墓からは木棺と考えられる痕跡が検出され、1号土壙墓もそれと考えられる状態が検出された。3号土壙墓以外の3基には上位の第Ⅲ層の土坑や炉址、柱穴が掘られていた。以下、それぞれについて述べる。

A. 1号土壙墓(第52図、図版15、巻首図版4上左)

本土壙墓は、R-27南東隅で検出された。土壙墓の平面形は長方形を呈し、大きさは約137cm×72cm、深さ約22cmである。その長辺が南東-北西に向く。北西側以外は、やや垂直に掘り込まれ、床面は平坦である。壙の形態は4号土壙墓に類似している。

壙の掘り込みに沿って幅約3cmの暗褐色土が確認され(同図BB'断面図)、床面からは壙の長辺の両壁に沿って暗褐色土が筋状に検出された。これにより木棺使用の埋葬が考えられる。

埋葬された1号人骨は、壮年男性^(註1)で残存状態は最も良好であった。仰臥屈葬で、頭位は南東に向いている。右腕は脇を閉めており、右鎖骨の上に手のひらがくる様に曲げ、左手は体に沿って伸ばしている。両足は強く曲げて、踵を座骨の前に揃え、左右に開き膝が浮いた状態で検出された。また、同人骨の右腕は太いとのことであった^(註2)。

本遺構は上記グリットで、第Ⅲ層b掘下げ後の地山面で、4号土坑(第Ⅲ層b)とNo.104柱穴(第Ⅲ層c)に類似した土が堆積)に切られた状態で検出された。同土坑は、それ以前に墓を切っていたNo.104柱穴の上であり同柱穴と1号土壙墓の両方を切っていた(第50図)。さらに、人骨の頭骸骨左側をも一部抉っていた。また、本遺構の東側に第Ⅰ層の溝状遺構(第63図)が走っており東側壁の一部がそれによって失われていた。

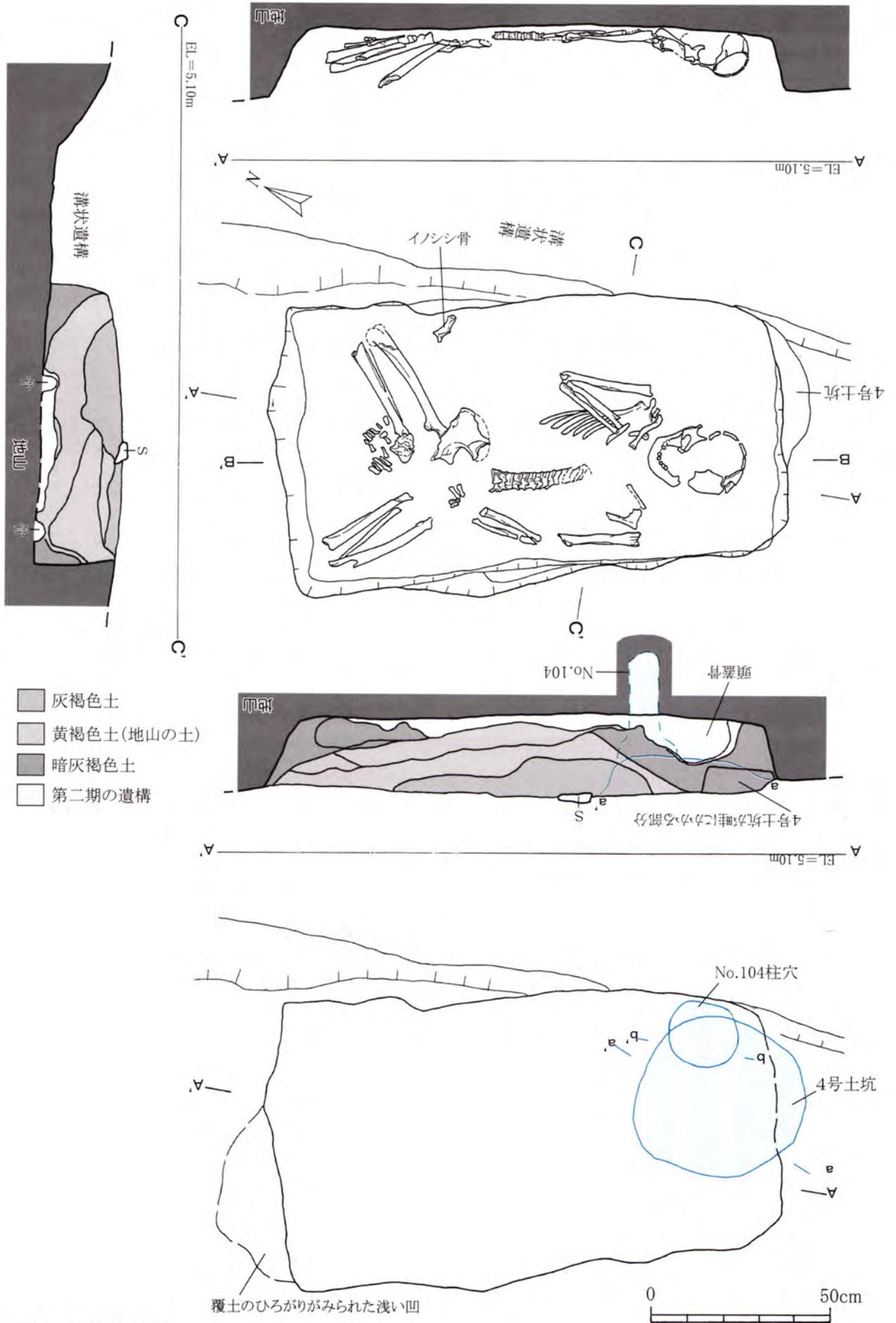
本土壙墓内の覆土に第Ⅲ層は見られず、覆土上部に第Ⅴ層が、その下の層は黄褐色土(地山の土)が人骨全体を覆って土壙中央部にかけて落ち込むように堆積し、下部では全体に暗灰褐色土が堆積していた。上記の遺構の検出面や切合及び覆土の堆積状況から、第Ⅴ層(第一期)の遺構と推察される。

覆土の上部からはグスク土器(Ⅱ群土器)胴部片が5点(胎土①A類3点、②類1点、③類1点)と約10cm大の石灰岩小礫が、頭骸骨のやや西側の位置で検出され、下部の床面近くからイノシシの骨が出土した。

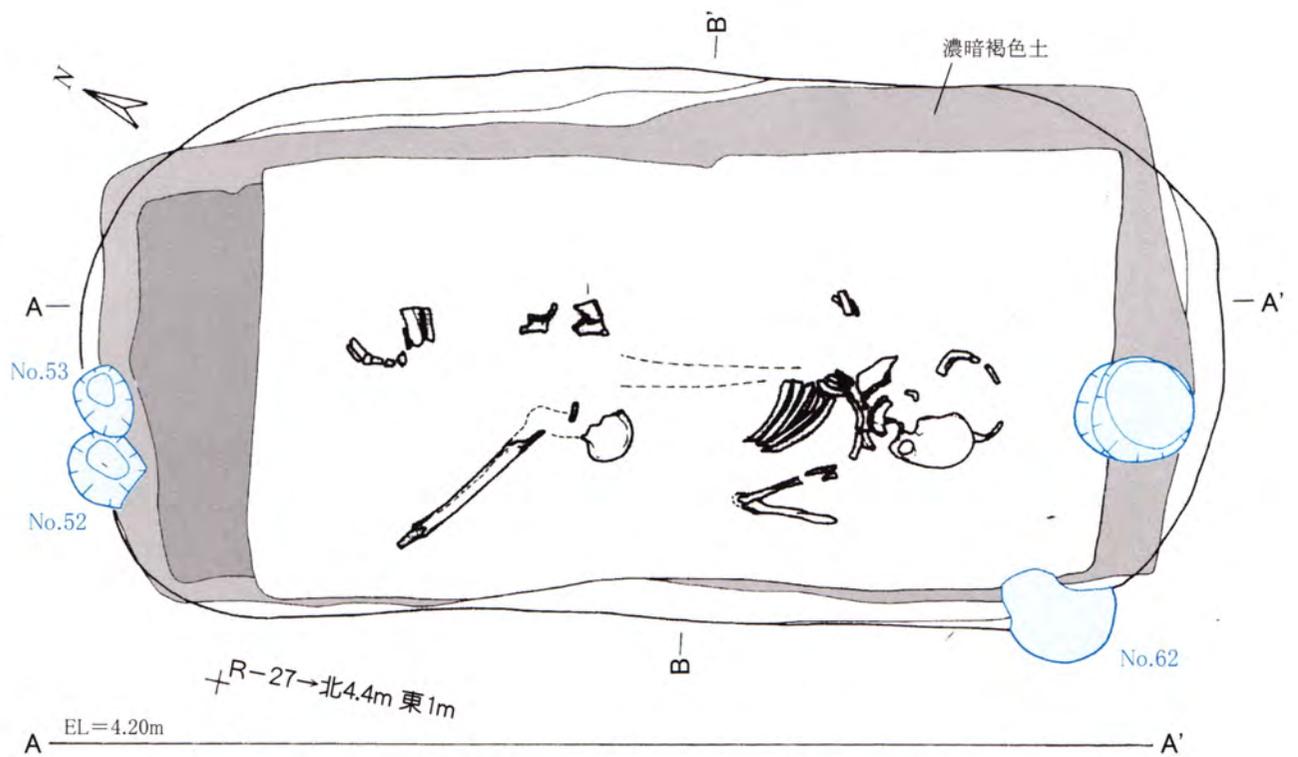
B. 2号土壙墓(第53図、図版15、巻首図版上右)

本土壙墓は、R-27南西側で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸186cm、短軸94cm、深さ約26cmである。その長軸が南東-北西に向く。ほぼ垂直に掘り込まれ、床面は平坦である。

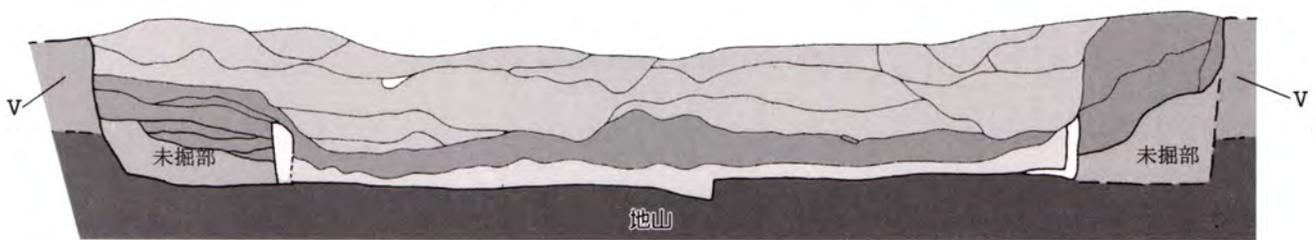
壙内を約10cm掘下げた際に、約134cm×72cmの長方形を呈する面が確認された。さらに掘



第52図 1号土壙墓

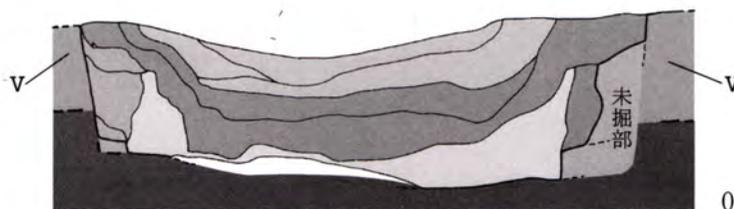


A EL=4.20m A'

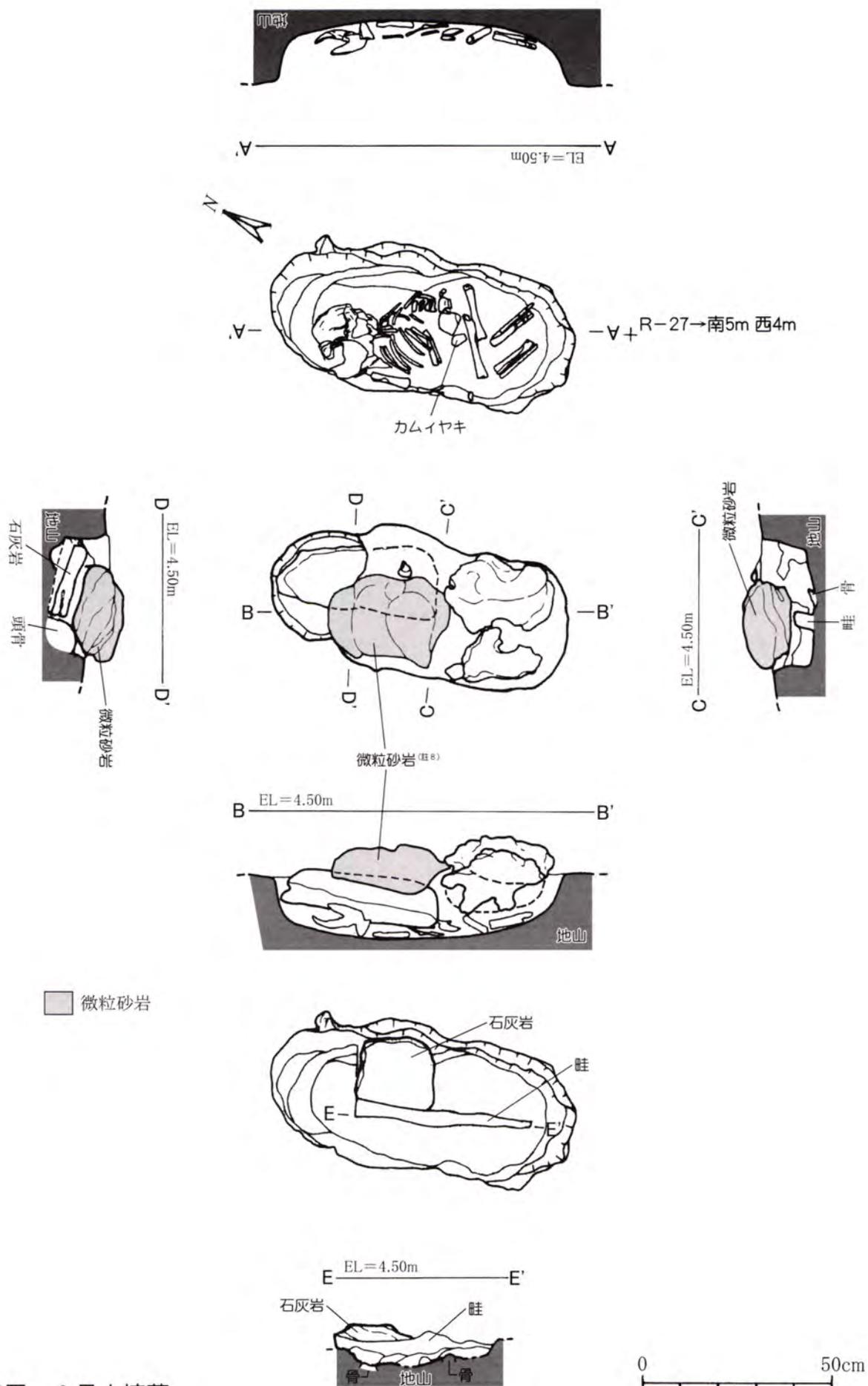


- 暗灰白色土
- 暗灰茶褐色土
- 濃暗褐色土
- 第二期の柱穴
- 暗褐色土(木棺)

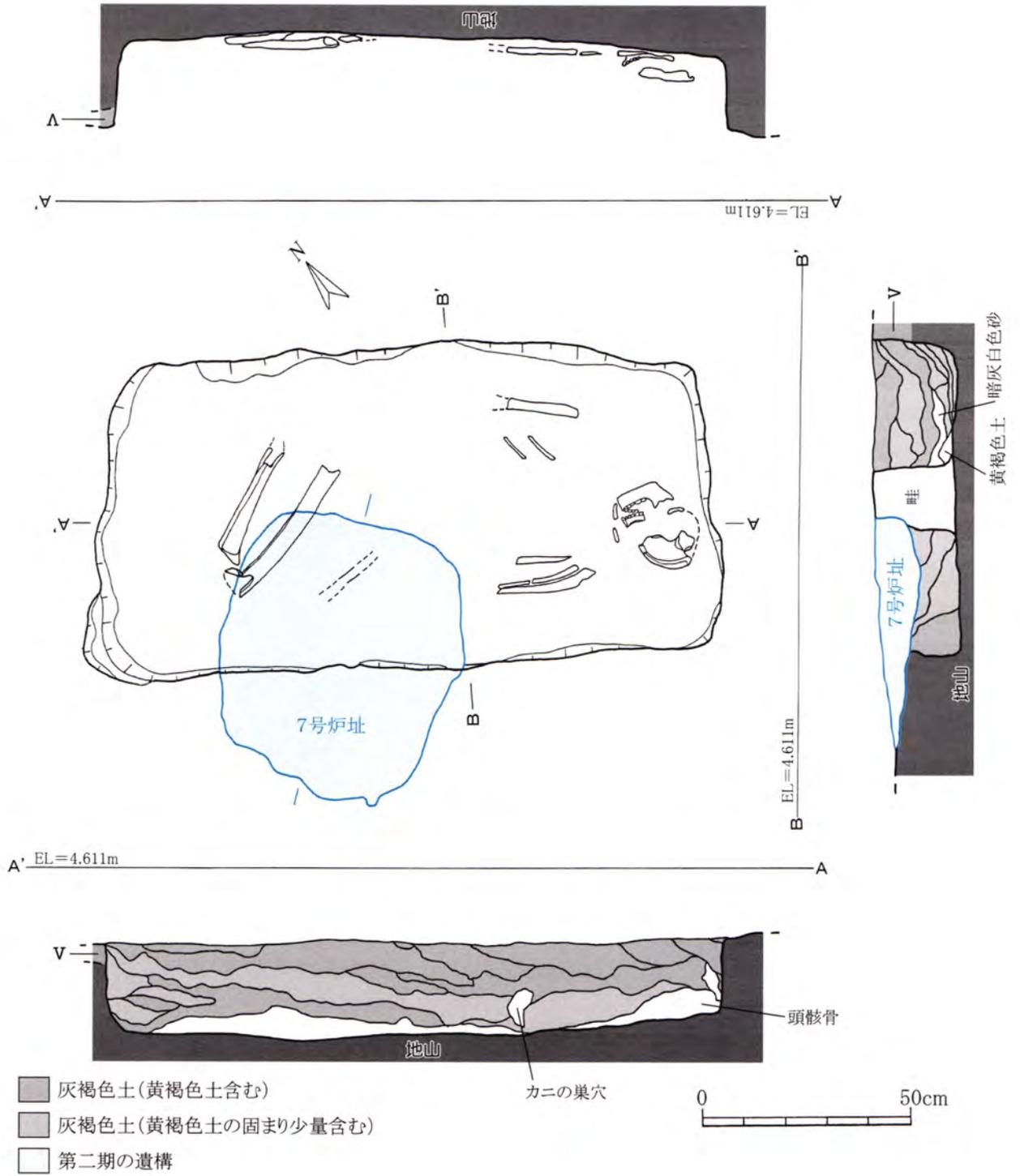
B EL=4.20m B'



第53図 2号土墳墓



第54図 3号土墳墓



第55図 4号土墳墓

下げると約10cmの深さでほぼ垂直に落込んでおり、その壁面を断面で見ると、約2～3cm幅で暗褐色土が同じく垂直に堆積していることが確認された。これを木棺の朽ちた部分と推察した。その大きさは、ほぼ1号土壙墓の大きさとほぼ同じである。

この中に埋葬された2号人骨は、性別は男性^(註3)で残存状態は良くない。姿勢は仰臥屈葬と推測され、頭位は南東に向き、左腕は拳が肩の高さなるように曲げ、左足を左側に向けた状態であった。

本遺構は上記グリットで、第Ⅲ層c掘下げ後の第Ⅴ層上面で検出され、第Ⅲ層cのピットが周縁に3本・内側の位置に3本が掘られ土壙墓を切っていた。また本土壙墓の東南東側に灰白色の細粒砂が部分的に薄く堆積しており、土壙墓検出面でも中央部分にも薄く堆積していた。

土壙墓内の覆土に第Ⅲ層の堆積は無く、覆土は黄褐色土（地山の土）の塊を多く含んだ第Ⅴ層が主である。そして木棺と考えられる痕跡と壙壁面の間に濃暗褐色の土が幅約10cmで带状に巡っていた。

上記の遺構の検出面や切合及び覆土の堆積状況から、第Ⅴ層（第一期）の遺構と考えられる。

覆土からは、グスク土器（Ⅱ群土器）の胴部片11点（胎土の⑧類2点、⑨類5点、⑩類1点、⑪類4点、）が出土した。

C. 3号土壙墓（第54図、図版16、巻首図版下左）

本土壙墓は、S-26のほぼ中央部で検出された。平面形は楕円形を呈する、長軸約83cm、短軸約39cm、深さ約14cmと浅く、北西-南東側に長軸をもつもので、南東側以外はほぼ垂直に掘り込まれていた。

埋葬された3号人骨は幼児骨である^(註4)。伏臥屈葬で、頭位は1・2・4号人骨とは反対の北西に向け、体全体を押さえるように礫が置かれていた特異な埋葬状態であった。頭骸骨の位置には縦約20cm、横約15cm、厚さ約5cmの扁平な石灰岩礫、背中には長さ約30cm、幅約20cm、厚さ約25cmの楕円形の微粒砂岩^(註5)、両足には約30cm大の縦長の不定形な石灰岩礫2個を2列に並べて配されていた。このような特異な埋葬形態は、死因や死生観に起因するものではないかと考えられる。

本遺構は上記グリットで薄く堆積している第Ⅲ層d掘下げ後の地山面で検出された。第Ⅲ層e（第一期）の遺構と推察した。

土壙墓内の覆土は、僅かに黄褐色土の小塊を含んだ暗褐色土であった。骨盤近くからカムイヤキの胴部片（第29図30）が1点出土した。

D. 4号土壙墓（第55図、図版16、巻首図版下右）

本土壙墓はS-26で検出された。平面形は長方形を呈し、大きさは約143cm×55cm、深さ約18cmである。その長辺が南東-北西に向き、ほぼ垂直に掘り込まれており、床面は平坦である。壙の大きさは1号土壙墓より僅かに大きい形態は類似している。

埋葬された4号人骨は4体中でもっとも残存状態が悪い。性別は男性である^(註6)。仰臥屈葬で、頭位は南東に向き、左腕を体につけるように強く曲げ、右腕は上腕骨のみが検出され体に沿う位置にあった。

本遺構は上記グリットで、7号炉址（炭素14年代測定では660±50BPの結果を得た^(註7)、第Ⅲ層cの遺構）に切られた状態で第Ⅴ層上面と地山面がほぼ同レベルとなるところで検出された。そのため、土壙墓の北側や東側の壁面では第Ⅴ層の堆積が確認され西側や南側壁の一部では地山となる。

土壙内の覆土に第Ⅲ層は無く、上部に黄褐色土（地山の土）の塊を含んだ第Ⅴ層があり、ついで、少量の黄褐色土の塊を含み、かつ部分的に白色細砂が混入する灰褐色土が堆積し、下部は上部と同様な覆土が人骨の下半身側に堆積していた。床面近くに暗灰白色砂が部分的に見られた。1・2号土壙墓に見られる土壙壁面に沿って巡る暗褐色土の堆積は検出されていない。上記の遺構の検出面や切合及び覆土の堆積状況などから、第Ⅴ層（第一期）の遺構と考えられる。

覆土からは、グスク土器7点（胎土◎類4点、①類1点、②類2点）、カムイヤキ2点（底部破片1点、胴部破片1点）が出土した。

小 結

上述のように4基の土壙墓のうち、1・2・4号土壙墓は北西－南東方向に向いた土壙墓内に成人男性が頭位を南東に向けて仰臥屈葬で埋葬されていた。

形態は1・4号土壙墓が長方形、2号土壙墓は隅丸長方形で、その大きさは2号土壙墓が最も大きく4号土壙墓は1号土壙墓より僅かに大きい。1号土壙墓は2号土壙墓で検出された木棺と考えられる痕跡の大きさとほぼ同様であった。1号土壙墓では前述した暗褐色土の検出状態から木棺使用の埋葬が考えられた。4号土壙墓では壙の形態は1号土壙墓に類似しているが壙の壁面に沿って巡る暗褐色土は検出されていない。

4基の土壙墓の覆土に第Ⅲ層は無く、土壙墓に炉址や土坑、ピットが掘り込まれていることなどから第一期の遺構と考えられる。

3号土壙墓は長軸が北西－南東に向き、幼児人骨を伏臥屈葬で頭位を北西にむけ体全体を押さえるように礫が置かれ特異な埋葬状態で第Ⅲ層e（第一期）の遺構と推察される。

〈註〉

註1 松下孝幸氏の所見による。付篇1参照。

註2 註1に同じ。

註3 註1に同じ。

註4 註1に同じ。

註5 微粒砂岩は方言名「ニービのフニ」

註6 註1に同じ。

註7 地球科学研究所の炭素14年代測定結果による。273p参照

註8 註5に同じ。

8. 大土坑 (第56図、図版18)

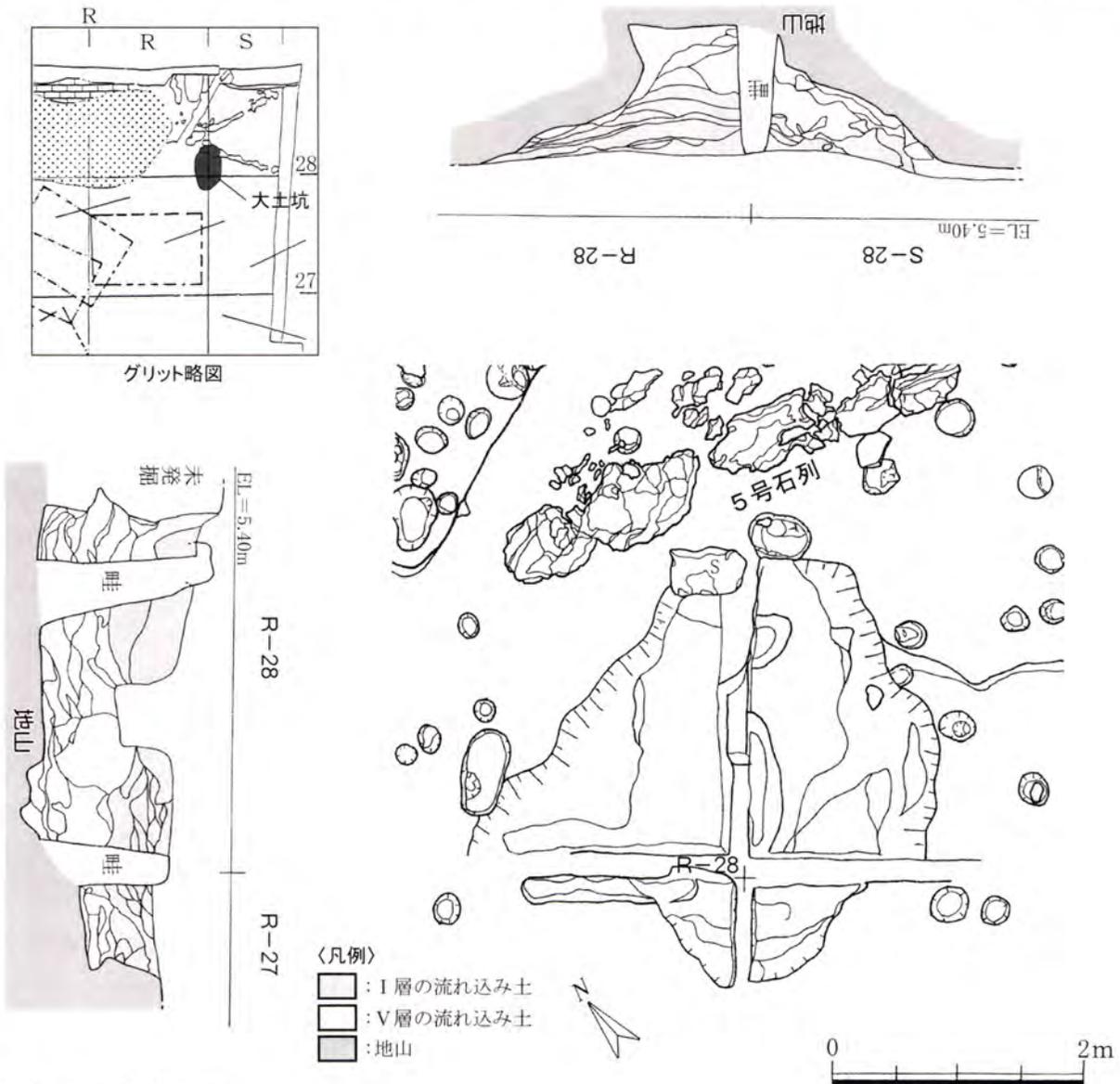
本遺構は5号石列の南側にあり、R・S-27・28にまたがり、その大半はR・S-28にある。

平面形は不定形で、Rライン・28ラインともに坑口の検出幅は約3.6m、最深部の深さは東側の坑口地山面から約1.3mである。坑の下部にあたる深さ約70cm付近では、略南北方向の幅が約1.2mとなりRライン方向に約3.5mと細長いが、底面では2.6m程度になる。壁面に水流による抉れがあり、底面は、ほぼ平坦である。

本遺構内には、粘質の黒色土や砂利混じり土・砂層が堆積し、流水に起因する堆積状況である。両方向の堆積状態から大きく3つに分けられ、深さ約40~50cmの第I・II層の流れ込みと、5号石列下から流れ込む地山上に堆積する第V層のもの、両者の間に堆積する第III層に分けられる。

本遺構には、滑り落ちるような状態の大型石灰岩礫があることから5号石列との関連をみるために、礫を残した状態で検出を止めた。

R・S-28には、グスク時代の5号石列があり、その北側には整地が行われたと考えられる



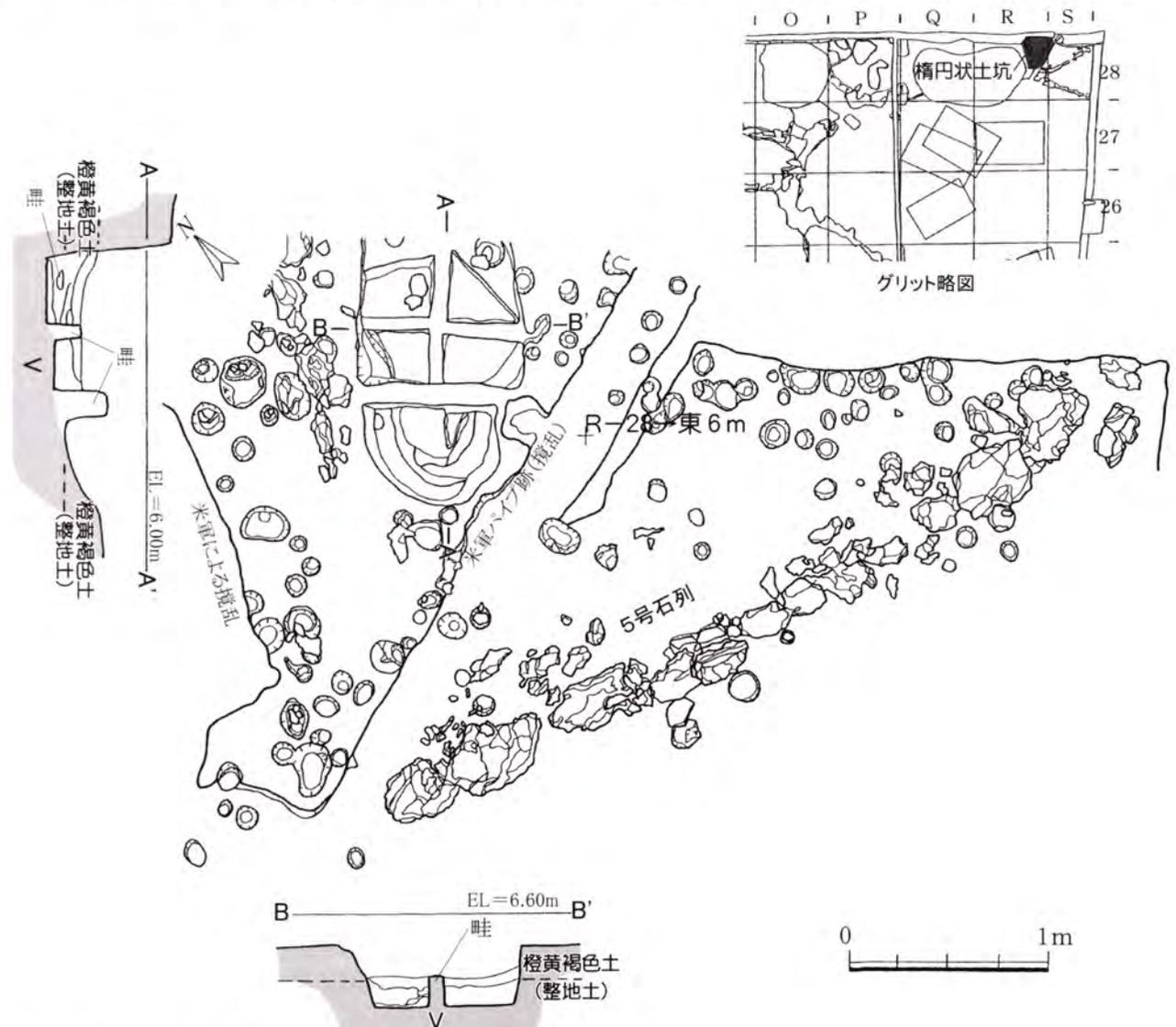
第56図 大土坑 (4区)

橙黄褐色土が堆積しており、この層の下位に第V層が確認された。第V層は褐色土で、黄色土粒と砂混じりが大きな特徴である。同様な土の堆積が、本遺構内の北東側の5号石列部から流れ込んでおり、さらに、S-28の南壁28ライン部で第VI層と第III層hの間の第V層が、本遺構に流れ込んでいることから第VI層のものと判断される。

本土坑は、形状と堆積状況から滝壺を想起させるが、本遺構の背後に大きな落差のある地形は見られない。しかし、北西側約20mに背後の台地が迫り出していることから、そこに形成の要因があるのではないかと推察され、人為的な可能性は低いと考えられる。

9. 楕円状土坑 (第57図、図版18)

4区R-28北東に位置し、第III層bより検出された第二期の遺構である。本遺構の平面形は北東半分が調査区外であるため確認できないが、現況で確認できる南西半分は平面形が「U」の字状を呈する。長軸方向は北東-南西で1.28m、短軸方向は北西-南東で0.76~0.84m、深さ0.28mを測る。掘り方は南西側の部分は斜めに掘り込まれ、北西側と南東側はほぼ垂直である。



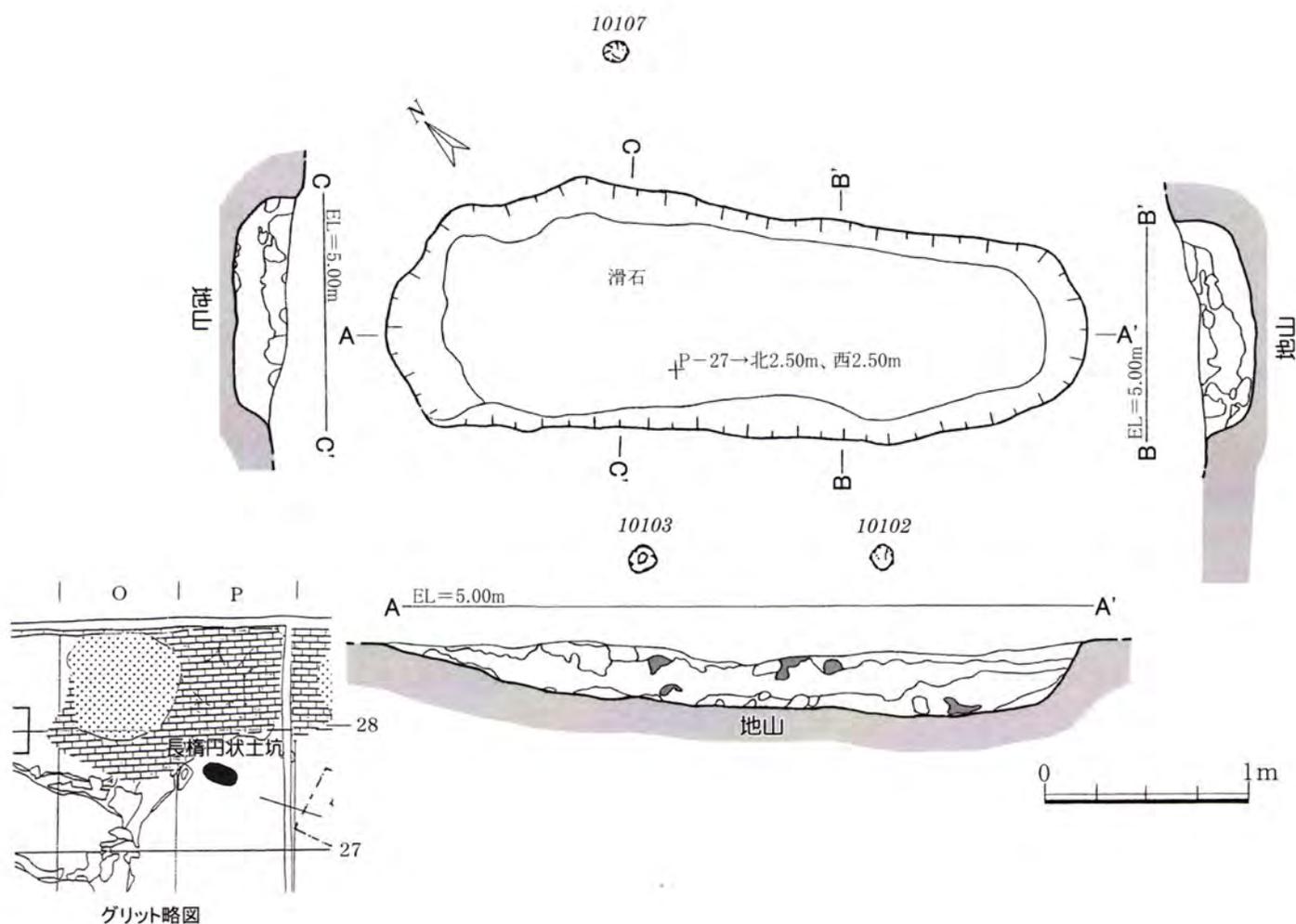
第57図 楕円状土坑 (4区)

南西側の部分には淡水産貝（ヌノメカワニナ）のみが密集した状態で検出された。本土坑の性格は不明である。

10. 長楕円状土坑（第58図、図版18）

3区P-27の北西に位置し、北東の台地からの緩やかな斜面地に掘り込まれ、第Ⅲ層bより検出された第二期の遺構である。平面形は長楕円を呈する。長軸方向は北西-南東で約3.43m、短軸方向は北東-南西で0.8~1.2mを測る。

掘り込みは北西から緩やかに傾斜し、南東で最深部となり0.5mを測る。本遺構の長軸を挟むようにして北西寄りに1対の柱穴が見られる。柱穴は北東が直径11cm、深さ9cm、南西が直径12cm、深さ11cmである。この柱穴は本遺構より等距離に位置していることから関連性と思われるが性格は不明である。



第58図 長楕円状土坑

11. 畠址（第59図、巻首図版3）

畠址は高床式建物址の南西側に位置し、Q～S-24の第VI層より検出された第一期の遺構である。南北約20mに凹凸した不整合面な状況が、南東側から北西側に3列並ぶことが確認された。凹部（溝状）の軸線は同一方向で、南東-北西向きである。凹部の長軸は南東側列が0.9～2m、中央列及び北西側列は0.5～1.2m。短軸はいずれの列も0.3～0.6mである。

深さは2～11cmで、間隔は0.5～0.7m毎に配される。凹部は北東側から掘削されている傾向があり、鋤痕も確認された。鋤痕は5～7cmの半月状を成し点在している。本遺構の南東側の一部が2号高床式建物址との切り合いから、畠が高床式建物址より古いことが判った。

これまで報告例のある畠（畑）遺構は畝間状溝遺構と小ピット列群遺構の2種類ある。前者では宜野湾市の上原濡原遺跡^(註1)で、複数回にわたって耕作する常年の畑址と考えられている。時期は縄文晩期である。後者は名護市の宇茂佐古島遺跡^(註2)や宜野湾市のタマタ原遺跡^(註3)・伊佐前原第一遺跡^(註4)など数十例あり、ヘラや掘棒などを農具とし穀類種子を蒔く穴か根茎作物を植える穴の耕作痕と考えられている。時期はグスク時代で15～16世紀が多い。

本遺跡の遺構については自然科学分析を行っていないが、凹凸面の配列状況や無数の鋤痕が見られることから畠址と考えられるが今後の類例の増加を待ちたい。時期的には12世紀から13世紀でグスク時代初期である。ここで問題となるのは畝間状溝遺構と小ピットとの関連である。上原濡原遺跡の遺構と直接的に結びつけるには無理であろう。また、畝間を持つ遺構は近世後の農法であるという見解もある。小ピットの農法とは生産物の違いによるものであろうか。やはり、同時期の資料の増加を待ち、農法の変遷、生産手段の変化などを比較検討する必要がある。

畝間状溝遺構で興味深い見解がある。東和幸氏「波板状凹凸面に関する第3の見解」^(註5)のなかで、これら遺構の解釈が幾つかあり、それには自然発生説と人工説の2種類にまとめられるが、どの説でもない無意識にできた遺構であるという見解である。それは、凹凸面の間隔が牛や馬の歩幅と一致すること、凹面とその部分の硬化は牛馬の圧力によってでき、頻繁に歩行した道に生じた牛馬歩行痕跡としている。

〈註〉

(註1) 呉屋義勝 1995 「上原濡原遺跡発掘調査記録」 宜野湾市教育委員会。

(註2) 比嘉久ほか 1997 「宇茂佐古島遺跡」 名護市教育委員会。

(註3) 註1に同じ。

(註4) 當銘清乃ほか 2001 『伊佐前原第一遺跡』埋蔵文化財センター。

(註5) 東和幸 2002 「波板状凹凸面に関する第3の見解」『考古資料と民具資料の総合的研究』財団法人鹿児島県育英財団平成13年度研究助成報告書。

12. 鋤痕 (第59図、巻首図版3)

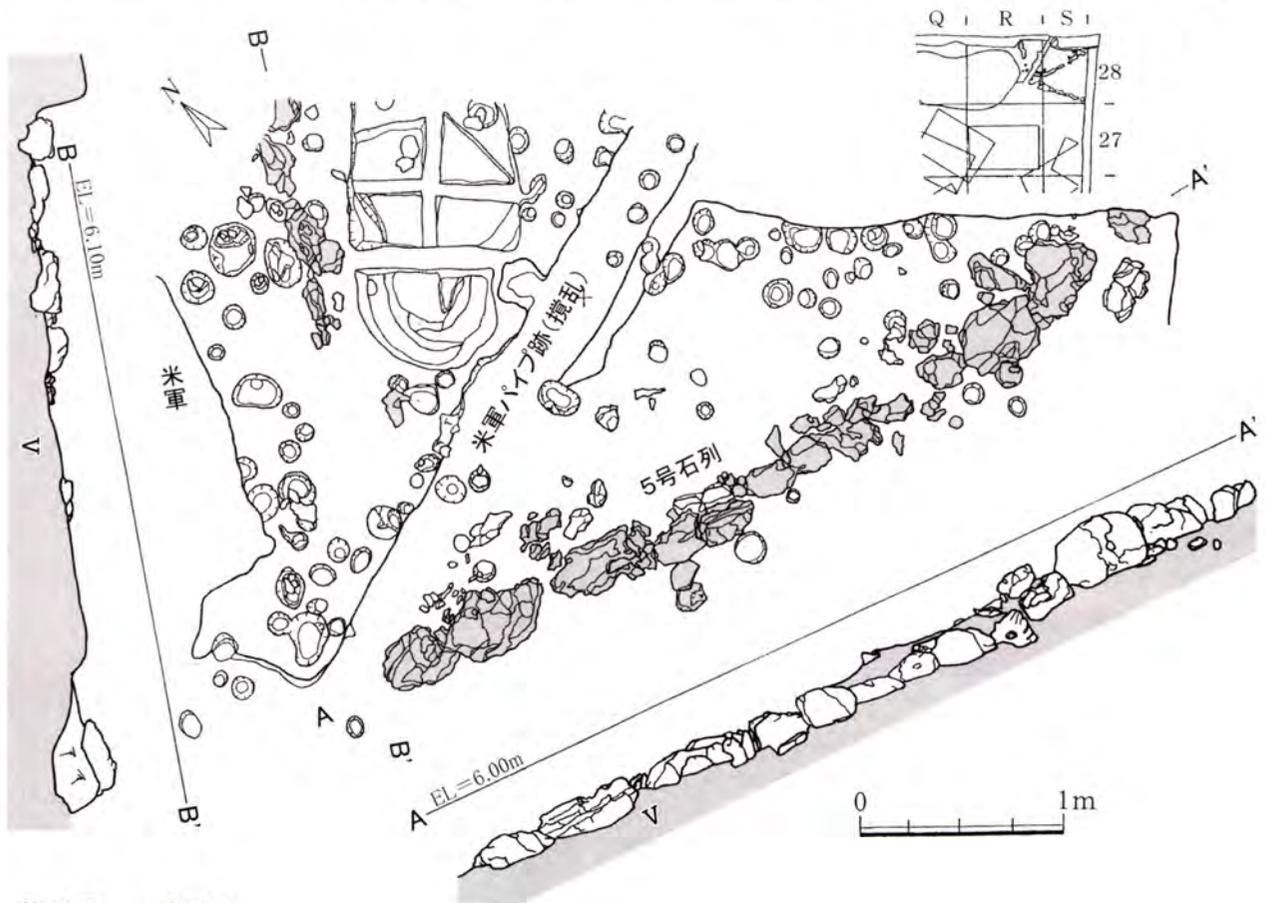
畠址一帯に約988基の鋤痕が確認された。明瞭な鋤痕は平面形が半月状を呈している。その他は長方形やそれに近い弧状を呈するのがある。断面は「レ」の字状となるものや「UまたはV」字状などがみられる。鋤痕は主に凹みに多く分布し、耕す方向は北東側か南西側から刃を立てている傾向がある。

13. 5号石列 (第60図、図版12)

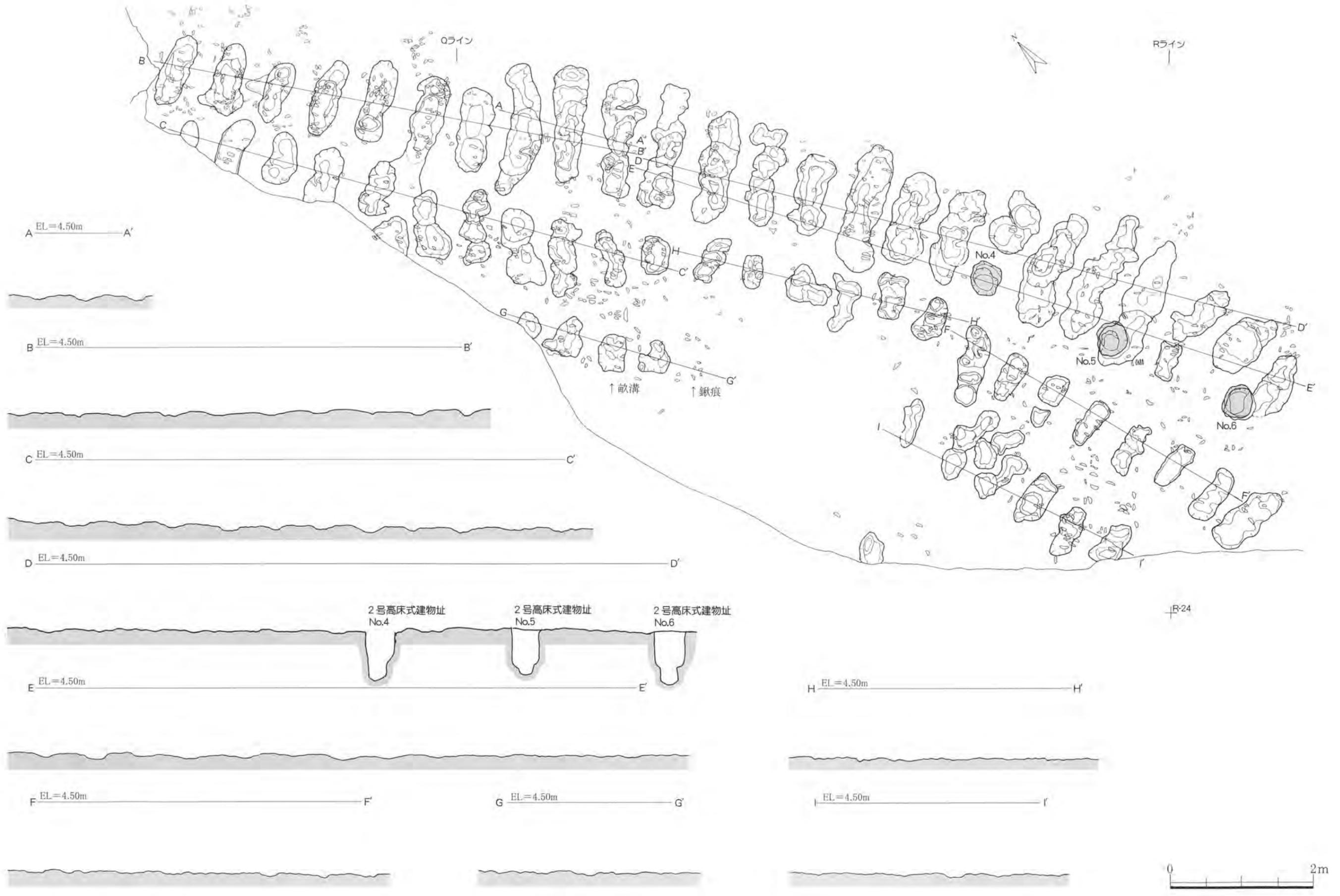
本石列が今回の調査で検出されたグスク時代の石列である。調査区の南東隅にあたるR・S-28で検出された。

本石列は、平面観が略L字状を呈している。北西-南東方向と北東-南西方向に並ぶものがあり、前者は主にS-28に、後者はR-28にある。いずれも石灰岩の自然礫である。北西-南東方向の列は長さ約8mで、調査区の東壁面に一部露出する石灰岩礫があることから東側にさらに延びるようである。北西側は約30cmの段差となり石列の西側が低くなって破壊されている。北西-南東方向の礫は、北西側と南東側の両端に長さ約80cm大や1m大の大形があり、その間に約50~80cm大のものが並ぶ。

北東-南西方向のものは長さ約2.5mで、調査区の東壁側に続くようである。礫は約40~50cm大のものが並び、その間に約20cm大のものがある。両者の並びは約2mの間合いがあるが、両者とも自然礫であることや並びに類似性がみられることから一対ではないかと考えられる。



第60図 5号石列



第59図 畝址及び鋤痕

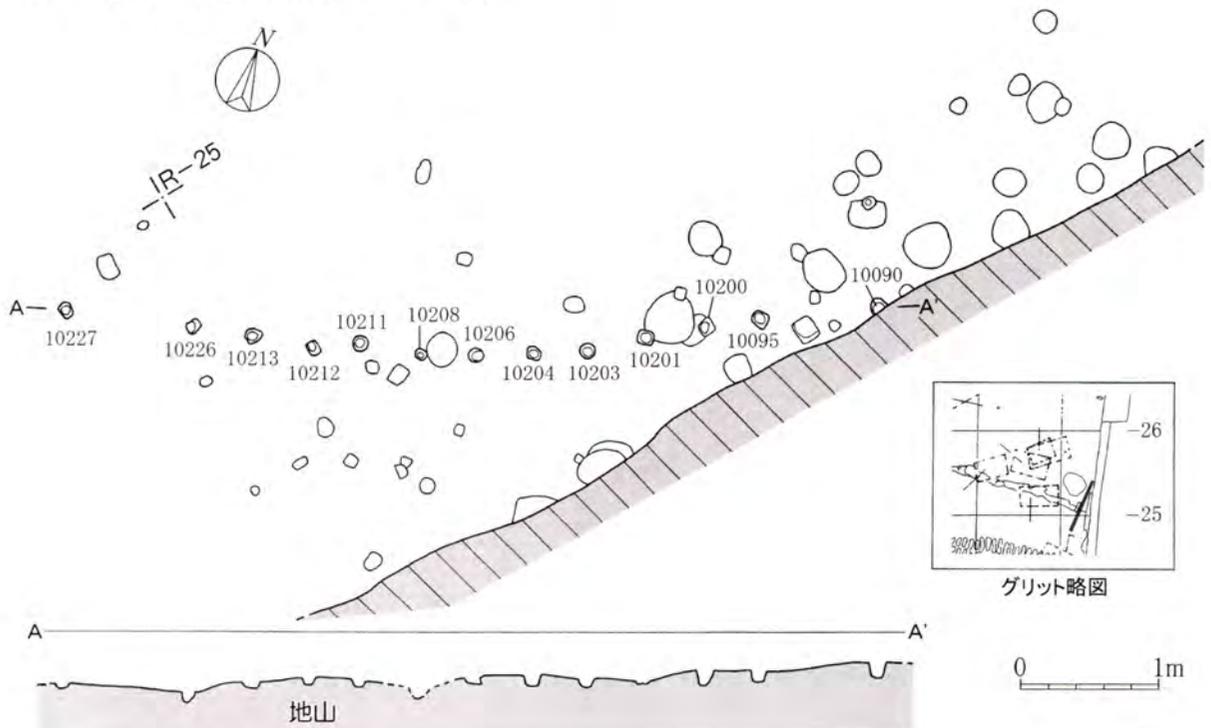
石列の基部は第V層にあり、石列の北側には第V層の上位に、橙黄色土（地山の土）が堆積し、その上面で第Ⅲ層bの遺構が検出された。この部分に第Ⅲ層cは堆積していない。石列を境に西側では第Ⅲ層cが堆積する。Q・R-28にある米軍掘削穴の南壁面で（巻首図版3下）、橙黄褐色土の下位に堆積する第V層に掘り込まれた第Ⅲ層b又は第Ⅲ層cのものと考えられる柱穴が観察され、この柱穴の上部が切られたような状態を呈していた。これらの状況から、本石列は第Ⅲ層b（第二期）の遺構と考えられ、本石列から北側は、整地が行われたのではないかと考えられる。

14. 柵列状遺構（第61図）

4区S-24・25の南端に位置し、第VI層より検出された。列は東西に延びる。S-25では調査区南壁面にかかり、調査区外に延びると予想される。S-24では7号高床式建物址の北側まで延び柵の西端になる。確認できる柱穴は13穴で、形状は①円形②四角形③五角形の3種類見られた。その中で最も多いのは四角形で7穴、他の2つは3穴であった。柱穴のサイズは円形が直径約10~11cm、四角形は略10×12cm、五角形は一辺が5~8cmである。直径14cm程の木材を縦割加工して打ち杭として使用したと思われる。列の間隔はNo.10090とNo.10227に囲まれた11穴は38~45cmの範囲内で、No.10090とNo.10095、No.10226とNo.10227は52~86cmとなっている。現況の総距離は5.49mである。

第14表 柵列状遺構柱穴計測一覧

柱穴 no.	計測値 (cm)			形状
	長径	短径	深さ	
10090	11	—	11	円形
10095	11	10	10	四角形
10200	10	10	3	四角形
10201	10	10	3	四角形
10203	10	10	6	円形
10204	10	8	8	五角形
10206	11	10	8	四角形
10208	8	8	8	四角形
10211	11	8	5	円形
10212	8	8	6	四角形
10213	12	12	4	五角形
10226	12	8	7	四角形
10227	12	9	4	五角形



第61図 柵列状遺構

15. 柱穴群

検出された柱穴群は、総数1,600本余りが検出されそのほとんどが4区で検出された。4区の山手側（26ラインから東側）に集中し、これより西側ではその頻度が低く、2号平地住居址や2～7号高床式建物址、畠址の周辺では少ない。この違いは第Ⅲ層と第Ⅵ層の違いでもあり、26ライン東側では第Ⅲ層の柱穴の検出が多い。

3区では第Ⅵ層より検出された1号平地住居址と1号高床式建物址にかかわるものと、P-27で4区からの広がりを持つ第Ⅲ・Ⅵ層のものがわずかに検出され、2区はK・L-28東壁で第Ⅵ層に見られる落ち込みのみで1区には見られない。

柱穴は大別すると径が約10～20cm未満が最も多く、ついで約20～30cm未満となる。径が約20cm大のものは深さが30cm未満、径が約30～40cm大のものは、深さが30cm以上50cm未満、径が約50cm大のものは、深さも50cm以上の傾向が見られる。

平面形態は円形・楕円形がほとんどであるが、わずかに方形のものも見られた。その大半が柱痕の痕跡が見られないものである。柱痕状の痕跡が断面で見られたものは84本で、平面の検出面では円形・楕円形・方形を呈するものがある。その径は約15cmから約25cm、深さは約20cm前後から約35cmで、もっとも深いものは幅約26cm、深さ約62cmである。また柱穴内の上位や中位、下位からは石灰岩礫や微粒砂岩などが出土し、扁平な石灰岩礫が底から検出されたものもある。また、土器・青磁・白磁・石器・滑石・羽口・鉄滓・自然遺物などが出土した。また、S-25一帯で約10cm大の牛の足跡状を呈するものも見られた。

尚、落ち込みには平面検出時に番号を付した中で、わずかな窪みと判断されたものや、カニの巣穴状に斜め方向に深くなり、穴内の土の密度が低いものも見られたことから、半裁作業後にそれと見られるものは除外した。別刷2-A・Bに柱穴群検出状況と別刷2-C・Dに柱穴観察一覧を記し、各住居址・高床式建物址の柱穴はそれぞれに示しているが、1号平地住居址の周辺に見られるものについては別刷2-Cに示した。

第2節 近世の遺構

本遺跡から検出された近世の遺構は1～4号・6号石列、小川跡状遺構、溝状遺構がある。以下、各遺構について述べる。

1. 石列

本遺跡から検出された近世の石列は1～4・6号石列である。1～4号石列は土留め状のもので、緩斜面を柵状に区画している。1・3号石列が丘陵側の上段にあたり、2・4号石列が下段にあたる。6号石列は、4号石列西側のほぼ平坦な場所にあり、やや様相を異にするもので、1区でのみ検出された。全体的には概ね北西-南東方向に並ぶ。

1号石列は4区南東隅のR・S-28で大型礫が並ぶものである。2号石列は3・4区にあり、3号石列は2・3区、4号石列は1～3区にわたっている。

2・4号石列は、O・P-26・27ではO～Q-28の岩盤の西側先端部で検出された長さ約12

m、幅約1mの小川跡状遺構の両側に沿っており、そこを基点にするようにして分かれ、北側は2列あり、東列が3号石列、西列が4号石列、南側は1列で2号石列となる。これらの石列には途切れる部分があり、そこは段差のみとなる。石列は石灰岩の自然礫を利用しており、おおむね30～50cm程度の大きさであるが、小川跡状遺構近くでは、やや大型のものも見られる。石列は検出された順に番号を付した。以下、各石列について述べる。

A. 1号石列 (第62図、図版11)

本石列は4区のR・S-28で検出された土留め状の石列である。北西-南東方向に並んでおり、石列の北西側は、米軍の埋設管の溝で途切れ、その北側も廃棄用穴が掘削されており不明である。南東側は調査区外となるが、小礫が南壁に残っていることから、さらに続いていると思われる。

石列の長さは約6mで、約60～70cm大の石灰岩の自然礫を主に使用しているが、北西側の先端の礫は長さ約1.5mと大型である。他の石列よりも大型の礫が使用されている。本石列の東側と西側の高低差は約50cmで西側が低い。

本石列の背後(東側)の落ち込みには、R-28から第Ⅰ層の土が流れ込んでおり(第62図、図版11)、石列の東・西側の両方で落ち込みによって途切れている(第18図③-1)。石列の基部には第Ⅱ層(黄褐色系)が堆積していることから第Ⅱ層の遺構と判断した。

B. 2号石列 (別刷1-D、図版6)

本石列は、3区(O-26・27、P-25・26・28)、4区(Q・R・S-25)に渡って検出された。O～Q-28にある岩盤の西側先端部を基点にするようにして、本石列のO-26・27で西側にのびる約10mは小川跡状遺構に沿っており、そこから南側に向きを変え4区(S-25)に至るが、調査区南壁(24ライン)手前で途切れ同壁と接する部分は段差となる。

3区側の石列の残りは比較的良好であるが、4区では段差のみとなる部分がある。この段差を含めた全体の長さは約40mで、さらに、南側につづいていると推察される。石列の東側と西側の高低差は、約50～60cmである。

本石列をS-25南壁(第18図③-2、第19図③-1)で見ると第Ⅲ層は寸断され、本石列から続く段差となっている。この状況は、S-25北壁(第16図③-1)においても見られる。また、Q・R-25では石列の下位に第Ⅳ層が堆積していた。3区側ではP-25東壁(第11図⑤)やP-26北壁(第11図⑥)では第Ⅲ層dの上であり、石列の背後には第Ⅱ層が堆積していることから本石列は第Ⅱ層(第三期)の遺構と判断される。P-27の北壁(第11図⑦)やO-26の東壁(第11図⑧)で第Ⅳ層の下位に白色砂の堆積があり、後述する小川跡状遺構に関連するものと推察される。

C. 3号石列 (別刷1-C、図版4・5)

本石列は、2区(L・M-28)、3区(N-27、O-27)に渡って検出された。北側は2区の調査区東壁面(L-28中央部)に至り、南側は小川跡状遺構に沿っている4号石列に接し、ほぼ、北東-南西方向に並ぶ。

石列は3区（O・N-27）において比較的残りが良好で、その部分の長さは約18mであるが、2区側の礫は失われており段差のみとなる。同区のL-28調査区東壁面中央部（第23図④-3）で、3号石列の段差部分には落ち込みが見られる。2区側の段差を含めた長さは約33mである。石列の東側と西側の高低差は、約50cmである。

本石列がN-27南壁（第12図②）では石列下には第Ⅱ層dが堆積し、No.2畦と交差する28ライン部分（第15図③-1）では、石列部分の第Ⅱ層は第Ⅲ層a～dを切っている。このことから本石列は第Ⅱ層dの遺構と判断される。

D. 4号石列（別刷1-B、図版3・4）

本石列は、1区（G～J-28）、2区（K～M-27）、3区（N-27、N-26、O-26）に渡って検出された。O-26・27では西側にのびる約10mは小川跡状遺構に沿っており、O-26で北西側に向きを変え1区〔調査区北壁の28ライン部分（第20図④）〕に至る。

3区側の石列の残りは比較的良好であるが、2区では部分的に失われ、1区では約20cmの段差のみとなる。この段差をふくめた1区までの全長は約75mである。石列の東側と西側の高低差は、約50cmである。

本石列がNo.2畦と交差するN-27北壁（第15図③-1）では、石列は第Ⅱ層gにのっており、No.1畦ではJ-28杭の部分で第Ⅱ層dの段差となっている。このことから本石列は第Ⅱ層の遺構と判断される。

E. 6号石列（別刷1-A、図版2）

本石列は、1区（H-27・I-27・J-27）で4号石列からつづく段差の約5m西側で同石列に平行して検出された。J-27では、ほぼ東西方向に並びH-28杭付近で南側に向きを変えているが、2区では検出されていない。全長は約27mである。

本石列周辺はほぼ平坦で、他の石列に比して石灰岩礫の密度が低く、土留めの状態を呈しておらず、様相を異にしていた。また、H-28杭から約4m南西側の位置からI-28東壁中央部付近に向かう飛び石状に並ぶものも検出された（図版2上）。本石列周辺では灰白色のシルト質土である第Ⅳ層に類似する第Ⅱ層f（淡暗灰白色のシルト質土層）が堆積し、同石列下位は第Ⅳ層で、石列はシルト質の土層中から検出されている。No.1畦では、K-27北壁（第14図③-1）で、第Ⅳ層上に堆積する第Ⅱ層eに本石列につながる小礫があることから、湿地の中に位置したものと考えられ第Ⅱ層eの遺構と判断される。

本石列は、湿地の中に位置し区画のために配したものではないかと思われ、水田の可能性が考えられたが検出されていない。

小 結

石列は緩斜面地を柵状に区画し、概ね北西-南東方向に向き、1～4号石列は、第Ⅲ層を切っており、上記に示した検出状況から第Ⅱ層の遺構で、第Ⅱ層d堆積以後に構築されたと考えられ、2・4号石列が小川跡状遺構に沿う部分があることから、農耕に伴うもので、水系を利用したものではないかと考えられる。6号石列は第Ⅱ層eの遺構と判断され、ほぼ平坦な場所で第Ⅳ層上

にあり同層に類似するシルト質土層の第Ⅱ層 f の堆積状況から湿地帯にあったことが推察される。

2. 小川跡状遺構 (別刷1-C、図版4上)

本遺構は、O～Q-28にある岩盤の西側先端部下のO-26・27で検出された。高さ約60cmの2・4号石列(第三期)の間にある幅約1m、長さ約12mの溝状を呈する部分である。同石列部より西側や岩盤部から東側については不明である。O-28の岩盤側では、水が流れ込んだために生じたと思われる窪みに白色の砂を含む黄褐色土が堆積し(第11図⑰)、2・4号石列間の溝底には細かい砂の堆積や第Ⅱ層(黄褐色系)が流水による攪乱された状態で堆積していた。溝底は地山面である。

この石列間の溝状を呈する部分のうち、3号石列の南端が接するところでは、石列の崩壊によるものと考えられる石灰岩礫の集中があり、この溝状部分が埋め尽くされ、方形状の大型石灰岩も本遺構内に落込んだ状態であった。この小川跡状遺構からは銭貨の出土がみられる。

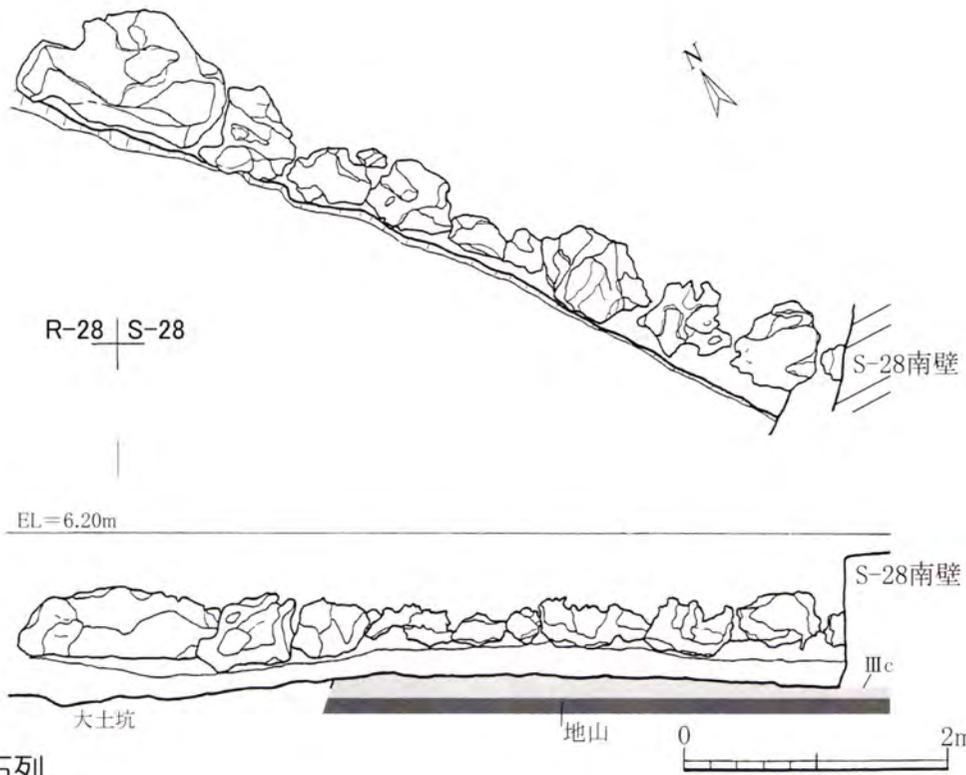
本遺構周辺の堆積をみると同遺構の両側にある2・4号石列はグスク時代の包含層(第Ⅲ層)を切って構築されているが、P-27北壁(第11図⑰)・O-27東壁(第11図⑱)に見られるように同石列の内側(南側)には第Ⅳ層の下位に白色砂の堆積が見られることから、グスク時代にも流れがあったと推測される。第Ⅳ層が石列の下位に堆積している。第Ⅱ層には、この石列の間を流れている。さらに、第Ⅰ層期にはP-27からS-27にかけて検出された幅約40cm、深さ約10cmの溝状遺構(第Ⅰ層期)が、1号石列形成後の段差に沿い、小川跡状遺構の南側手前(P-27)で途切れた状態で検出されていることから、第Ⅰ層期にもこの部分に水の流れがあったと推測される。

本遺構の場所は、第Ⅱ章でも述べたように、戦前は、俗称で「テンプス山」と呼称される独立した小丘と背後の丘陵の間を、子供が飛び越えられる程度の小川が略北上して流れ、遺跡のほぼ中央部に所在する現在の拝所付近から、北西方向に向きを変えて小川が流れていたという。調査区の西壁(M～N)(第10図⑬、第20図⑳-1)で、底に粗砂や砂利が堆積する窪みは、戦前の小川跡ではないかと考えられ、聞き取りによる小川の場所は、本遺構の位置と大きくは異なっていないと考えられる。

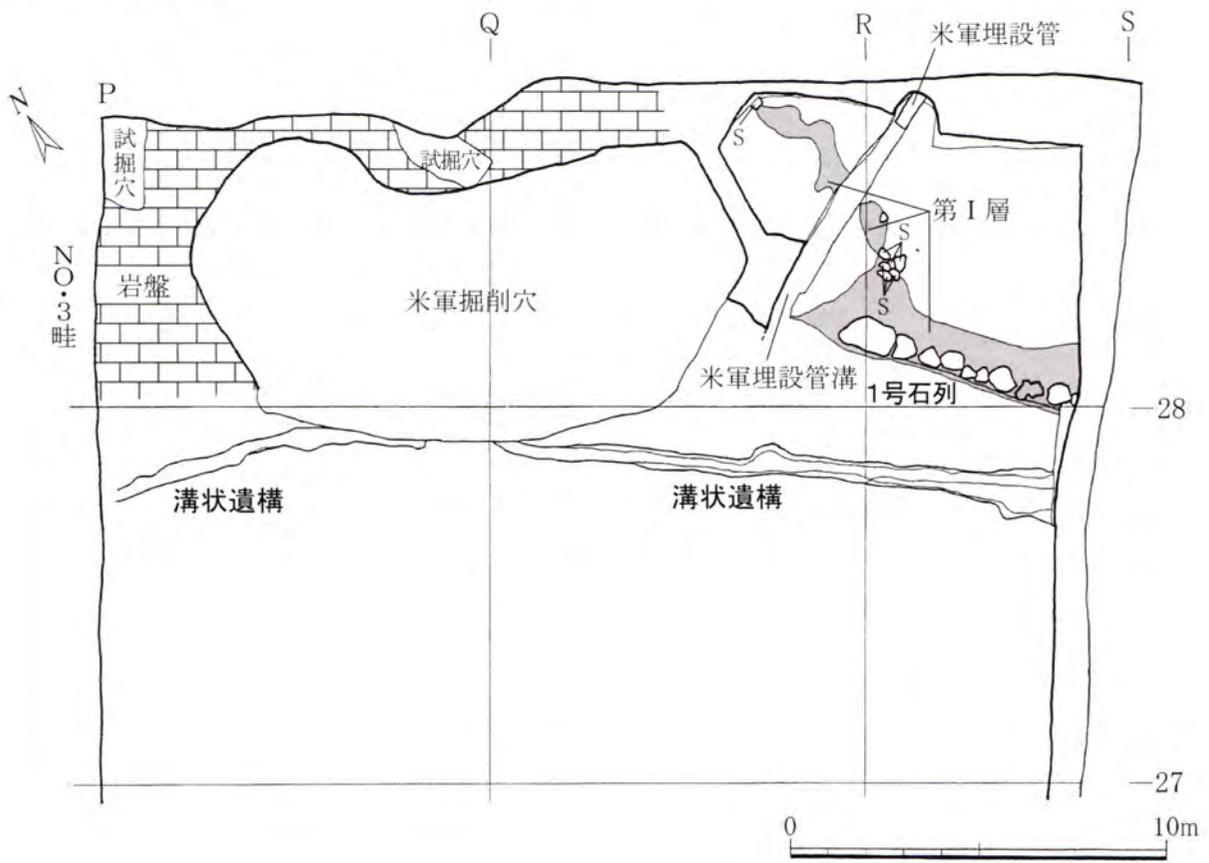
3. 溝状遺構 (第63図、図版11・13)

本遺構は、P-27からS-27(3・4区)にかけて28ラインにほぼ平行して、南東-北西方向に検出された幅約40cm、深さ約10cmの第Ⅰ層の遺構である。この溝はR・S-28では第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ層を切って地山に達しており、Q-27北壁(第16図㉓)では第Ⅱ層dに達している。R-27では本遺構によって1号土壙墓(第52図)の東側壁の一部が失われていた。

S-27では、1号石列形成後の段差に沿う位置にあり、Q・R-27・28にある米軍掘削穴によって途切れるが、O-27の小川跡状遺構の南側までであった。検出された長さは約28mとなる。この溝には、No.3畦(第17図)では大形の石灰岩が立位で溝に滑り落ちたような状態が見られた。



第62図 1号石列



第63図 溝状遺構

第V章 出土遺物

本遺跡のグスク時代の出土遺物は土器・カムイヤキ・白磁・青磁・染付・瑠璃釉・褐釉陶器・黒釉陶器・タイ産陶器・タイ産半練土器・滑石製品・石器・鍛冶関連遺物（砂鉄・鉄滓・鍛造剥片・羽口）・金属製品・土錘・玉類・石製品・骨製品・貝製品・銭貨・瓦・木製品・自然遺物が出土した。また、近世の遺構も検出されていることから沖縄産陶器・本土産陶磁器・煙管について報告する。以下、それぞれについて述べる。

第1節 土器

総数19,576点の出土である。後期系のいわゆるくびれ平底土器とグスク系土器が出土した。いずれも破片のみで全形を窺えるものはない。

以下、くびれ平底土器をⅠ群、グスク系土器をⅡ群に大別し、器種（口縁部）と底部、鍋形に付く把手（縦・横耳）や鏝状の凸帯（以下、「鏝」）、Ⅰ・Ⅱ群の胎土の分類について述べる。特徴的なものを図示し、個々についての観察一覧を第15表①～③、Ⅰ・Ⅱ群土器出土量を第18表に示した。

Ⅰ群

後期系のいわゆるくびれ平底土器である。総数61点（口縁部4点、胴部54点、底部3点）の出土である（第18表）。

口縁部は直線的に開くもの（第64図1・2）、やや外反するもの（第64図3・4）があり、同図2は器壁が薄く、他の3点はやや厚い。底部は、底が厚いものものと薄いものがあり前者にはくびれが強いもの（第71図128）と弱いものがあり（第71図130）、後者は内底面が平坦になる（第71図129）。

本群は胎土の相違から以下の2種に分けられるが、いずれも石灰質の白色粒（貝殻片や粗粒のサンゴ礫）や滑石を含んでおらず、Ⅱ群に比して焼成が良く締まっている特徴がある。胴部片については、このⅡ群との差異をもとに底部資料を基準にして分類した。

胎土

- ㊦. 器表面はアバタ状を呈さず、胎土の粘性が弱く手触りが、ガサガサなもので、石英・赤色粒・暗褐色粒を含むもの。
- ㊧. 器表面はアバタ状を呈さないもので、胎土の粘性が強く手触りが、ツルツルなもので、石英・暗褐色粒・赤色粒を含むもの。

胎土㊦は胎土㊧より石英が多く、後者には赤色粒が少ないものものも見られる。胎土㊦・胎土㊧はⅡ群土器の胎土に類似しており、前者は胎土㊣、後者は胎土㊤に類似している。

Ⅱ群

グスク系土器である。総数19,515点（口縁部539点、胴部18,411点、底部565点）の出土であ

る。

口縁部資料から鍋・鉢・壺・碗形があり、鍋形には把手（縦・横耳）をもつ、いわゆる滑石製石鍋を模倣したものと鏝状の凸帯を貼り付けて圍繞させる羽釜模倣と考えられる土器が出土した。

鉢形では、口縁部が「く」の字に屈曲するものがある。底部資料は、底面からの立ち上がりから4つに分けられる。第18表にⅠ・Ⅱ群土器出土量、第19表にⅠ・Ⅱ群土器胎土・層位別出土一覧、第24表にⅡ群土器器種別（口縁部）出土一覧、第25表にⅡ群土器底部出土一覧、第C～E表にⅡ群土器の口縁部・底部・把手の出土一覧を示した。

〈口縁部〉

A類. 鍋形

- 1 口縁部が直口または、僅かに内傾するもので、胴部の膨らみが弱く胴部から比較的直線的に口縁部に至るもの。胴上部から口縁部にかけて僅かに内傾するものもここに含める。（第65図、第67図）
- 2 口縁部が内彎するもので、胴部の膨らみが強く、最大径が胴上部または中央部にあるもの。（第66図、第68図86～93）
- 3 口縁部が内傾するもので、胴部が僅かに膨らみ、胴上部に鏝状の凸帯を貼り付けて圍繞させる羽釜模倣と考えられる土器である。（第68図68～85）

次に、A類（鍋形）に付く把手（縦耳・横耳）・鏝についての分類を示す。

i. 把手

ア. 縦耳

- a. 平面・縦断面形ともに長方形を呈するもの。
 - ① 平面・縦断面形ともに長方形を呈する形の整ったもの。（第65図2、第67図36～40）
 - ② 平面・縦断面形ともに角が丸みをおびた長方形を呈するもの。（第65図6、第67図41・46、第68図86・87～89）
 - ③ 平面・縦断面形は長方形を呈するが、長さが短く、方形的なもの。（第67図42～45・52～61、第68図90～92）
- b. 平面形は長方形を呈しているが、縦断面形が略三角形状を呈するもの。
 - ① 口唇部からそのまま斜めに下るもの。（第67図49・50）
 - ② 口唇部と把手上部の平坦面が連続し、把手上部より下部の厚さがあるもの。（第67図47・48・62）
- c. 平面形が円形状を呈し、縦断面形は不定形で、突起状を呈するもの。（第67図60）

イ. 横耳

- a. 平面形は略楕円、縦断面形が不定形のもので、瘤状に貼付けるもの（第67図63）
- b. 平面・縦断面形ともに不定形で、口唇部の平坦面と把手上面が平行し、把手の先端部からナデ痕が放射状に残るもの。（第67図64）
- c. 薄手の小さな把手で、上面観が半月状のもの。（第67図65～67）
- d. 厚手の重厚な把手。

① 上面観が略扇状のもの。この把手の基部と考えられるものもここに含めた。(第69図104~106、108)

② 隅丸長形状のもの。(第69図107)

把手のイ d ①の類例は、吹出原遺跡^(註1)・玉代勢原遺跡^(註2)、イ d ②は伊礼伊森原遺跡^(註3)銘苅原遺跡^(註4)ヒヤジョー毛遺跡^(註5)などの出土例があり、鍋形につくと考えられる把手である。吹出原遺跡の全形が伺える報告例でみると、口縁部が内彎する平底の鍋形土器で、その中央部よりやや上に2個つくようである。

ii. 鐔

a. 縦断面形が鋭角の三角形を呈するもの。(第68図68・69・72・76・78~85)

b. 縦断面形が略「U」字状を呈するもの。(第68図70・74・75)

B類. 鉢形

1 口縁部が、「く」の字状に屈曲し、胴部がやや膨らむもの(第69図94)。

2 口縁部が、「く」の字状に屈曲するもの。(第69図95・96・100)

3 口縁部で僅かに窄まり、直口又は僅かに開くもの。(第69図97・98)

4 口縁部で僅かに屈曲し、外側に直線的に開くもの。(第69図102)

C類. 壺形

1 頸部の付け根で「く」の字状に屈曲し、外反するもの。内面の角はやや丸みのあるものと、強い角のものもある。(第70図109~113・122・123)

2 直口するもの。やや外反するものも含める。(第70図114~118・124~127)

3 頸部が外反するもの。(第70図119~121)

D類. 碗形

胴下半で丸みをもち口縁部が僅かに外傾するもので、口唇外端に僅かに縁をもつもの(第69図99・103)。

E類. 器種不明

肥厚口縁状を呈するもので、肥厚部の下側はナデによって段をつくるもの。

〈底 部〉

底部は、大きく4つに分けられる。全形が伺えるものがないため、器種は判然としないが、形状から推定されるものは観察表に示した。

F類. 底面から緩やかに立ち上がり、胴部へ大きく開くもの。

1. 立ち上がりが丸みの強いもので、底径の広い丸底状を呈するもの。底面部の破片で、形状からA類(鍋形)1と考えられるものもここに含める。(第71図139~142、145~155)

2. 立ち上がりが、直線的なもので胴部へ大きく膨らむもの。(第71図135~137・160、第72図164~173・175・177・179・120) 底面からの立ち上がり際がやや丸みをもつものと、胎土や混和材、形状から底面に葉脈痕をもつものもここに含める。(第71図156~162)

3. 2よりも立ち上がりが強く丸みをもち、やや閉まり気味で胴部へ開くもの。(第71図135・

第72図174・176・178)

G類. 立ち上がりが、ほぼ直立するもの。(第71図132、134)

H類. 立ち上がりが、僅かにくびれ、緩やかに胴部へ大きく開くもの。(第71図131・133)

I類. 不明。(第72図163)

F類1は、立ち上がり部分にはナデが丁寧に施されるが僅かに角をもつものもある。F類2は立ち上がり部分には、削りやナデが施され、立ち上がりの角度は底面を基準にした外側器表面との外角が30°～40°程度であるが、50°のものもある。これらは削り痕が明瞭に見られる。また、そのうち底面に剥離材の痕跡として考えられている、砂粒圧痕や葉脈痕が見られるものがあり、厚手と薄手がある。F類3は、立ち上がりの角度は概ね60°で、薄手のものはみられない。G類は、立ち上がりの角度が約80°のものである。I類は、II群の底部の中では底が厚く、I群の可能性も考えられるが、II群の底面部分の破片に同様なものが見られることからここに含めた。

つぎに、II群の胎土を以下の5種に大別した。第19表に胎土・層位別出土一覧、第24表に器種(口縁部)・胎土別の出土一覧、第25表に底部の胎土別出土一覧を示した。

胎土

- ①: 器表面がアバタ状を呈し、胎土の粘性が弱く手触りがガサガサしたもので、石灰質の白色粒・赤色粒・暗褐色粒を含むもの。
- ②: 器表面がアバタ状を呈し、胎土の粘性が強く手触りがツルツルしたもので、石灰質の白色粒・赤色粒・暗褐色粒を含むもの。
- ③: 器表面がアバタ状を呈さず、胎土の粘性が弱く手触りがガサガサしたもので、石灰質の白色粒を含まず、石英・赤色粒・暗褐色粒を含むもの。
- ④: 器表面がアバタ状を呈さず、胎土の粘性が強く手触りがツルツルしたもので、石灰質の白色粒を含まず、石英・赤色粒・暗褐色粒を含むもの。
- ⑤: 滑石を含むもので、石英・赤色粒・暗褐色粒を含むもの。

このうち、胎土①・②に含まれる白色粒には、貝殻片や粗粒のサンゴ礫などが見られる。胎土③～⑤では胎土③で石英が目立つ。胎土⑤は、滑石の混入量に多寡があり、器表面・断面ともに多量にみられるもの、器表面に多いもの、器表面断面ともに少ないものなどの違いが見られ、器表面がアバタ状を呈していないものがほとんどで、石灰質の白色粒は見られない。第E表に示したように胎土別の出土量は②類が51.4%と最も多く、①類26.4%、④類14%、③類の5.9%、⑤類2.3%である。

胎土②は第Ⅲ層b(3,016点)・c(1,746点)に多く出土し、胎土①は第Ⅲ層g(2,157点)で突出しており、同層に集中して出土した土器の70%にあたる。

小結

本遺跡で出土した土器の大半が第Ⅲ層からの出土で、a～hの8枚に細分された第Ⅲ層でまとめると15,444点で79%、第Ⅴ・Ⅵ層は約1,701点で9%、第Ⅳ層は1,191点で6%であった(第19表)。層位別の出土数では第Ⅲ層b(4,846点)が最も多く、ついで第Ⅲ層g(3,071点)、第

Ⅲ層 c (2,550点) となりこれらの層は2,000点以上の出土で、1,000点以上2,000点未満では、第Ⅲ層 h (1,256点)、第Ⅴ層 (1,253点)、第Ⅳ層 (1,191点)、第Ⅲ層 a (1,160点)、第Ⅲ層 e (1,138点) の順となり、1,000点以下は、第Ⅲ層 d (785点)、第Ⅲ層 f (638点)、第Ⅵ層 (448点) である。

グリット別の出土状況を第18表で見ると、第Ⅴ・Ⅵ層では高床式建物群が位置する Q・R-25・26、Q-27に多い。第Ⅲ層では、5号石列南側の一面に堆積する第Ⅲ層 f～h で4,965点、その内、第Ⅲ層 g が3,071点と特に集中し、その62%は胎土④が出土しており、グリット別出土量は、S-28が6,140点と突出している。他のグリットでは Q・R-27に多く、これ以外のグリットでは1,000点以下の出土となり、Q・R・S-27の第Ⅲ層 b で検出された、遺物集中部の広がりを裏付けている。

Ⅱ群の出土状況を第22表で器種別に見ると、A類（鍋形）が346点で64.2%と最も多く、C類（壺形）は144点で26.7%、B類（鉢形）は30点で5.8%、D類（碗形）は4点で0.8%、E類（器種不明）は15点で2.5%、いずれも第Ⅲ層 b・第Ⅲ層 g・第Ⅴ層に多い傾向がある。

A類（鍋形）はA類1が最も多く、A類1・2が第Ⅲ層 a～第Ⅵ層のすべてに出土し、前者は第Ⅲ層 b・c、第Ⅴ層の順に多く、後者は第Ⅲ層 g・b・h となる。A類3は、各層ともに出土量は少なく第Ⅲ層 h では出土していない。A類1の出土が最も多いが、胎土別では胎土⑥が出土量の39%を占めてA類2に多く、次いで胎土⑩が26%、胎土③は18%、胎土⑤は10%で、いずれもA類1に多い。胎土④は7%でA類2が多い。A類1では胎土④、A類2は胎土③～⑤が少なく、A類3は胎土④が見られない。

A類1は、口唇部を平坦にし丁寧に仕上げるものと整形時の粘土のはみ出しがのこるものがあり、前者には縁を作るものと内側に口唇幅を広くするものがある。A類2には、口唇部の縦断面形が丸みをおびるものや舌状を呈するものと、A類1と同様に平坦にするものがある。A類3は口唇部を平坦にし外端に縁をもつものともたないものがある。A類1～3でみられる滑石混入の胎土⑥類は、丁寧なナデによる器面調整が施されたものに見うけられ、A類1では縁をもつものにその傾向がある。

A類に付く把手は、A類1に把手の縦耳アと横耳イ a～c が見られ、いずれも口唇部を平坦にするもので口唇部と把手上部の平坦面が平行するように貼り付けるものが多く、口唇部に僅かに被せるものや下げるものもある。A類2の口唇部の縦断面が丸みを帯びるものや舌状を呈するものに付く把手は判然としない。A類3に付く鏝は、器壁の厚さが薄手のものに鏝aが多く、鏝はやや斜めに下がるものとほぼ水平なものがあり、鏝bは、ほぼ水平である。

把手を第23表でみると、縦耳のア a は、第Ⅲ層 a～第Ⅵ層のすべてで出土し、第Ⅲ層 b・c がやや多く、細分別ではア a ③・②の順に多く、ほとんどの層で出土するが、ア a 1は僅かである。ア a ②・③はともに胎土③が多く、前者は第Ⅲ層 g の出土と胎土④、後者は第Ⅲ層 h の出土と胎土⑤が見られない。ア b は第Ⅲ層 a～d、第Ⅳ・Ⅴ層で出土しているが少なく、胎土④・⑤・⑩が見られない。ア c は第Ⅲ層 b・d で各1点の出土で、胎土⑥と胎土⑦である。ア a ②ア b に胎土⑥が見られた。

横耳（イ）は、第Ⅲ層 b～f、第Ⅳ～Ⅵ層で出土し、第Ⅲ層 a・g・h では見られない。イ a・b は胎土③～⑤、イ c は胎土④～⑥、イ d ①は胎土⑥のみ、イ d ②は胎土⑥・⑦である。

鏝は、鏝aが第Ⅲ層a～c・e・f・第Ⅳ～Ⅵ層に出土し、第Ⅲ層g・hでは出土していない。胎土は③～⑤があり、胎土③は第Ⅴ層からの1点のみで、胎土④は薄手のものにみられる。鏝bは第Ⅲ層c・d・gに出土し、胎土は③～⑤である。第Ⅳ～Ⅵ層の出土は鏝aのみである。鏝a・bともに第Ⅲ層hには出土せず、胎土①が見られない。

把手・鏝ともに、胎土③に多い傾向があり、滑石を混入する胎土⑤には縦耳アa・b、横耳イa・b、鏝a・bがあり、縦耳アc、横耳イdには見られない。

B類(鉢形)は、第Ⅲ層b・c・g・h、第Ⅴ層で出土している。出土量は少ないが、その中ではB類3が多く、他は僅かである。胎土別では、ほとんどが胎土③で、B類1は胎土④が1点のみの出土で、B類2～4に胎土③～⑤は見られない。B類1・2が第Ⅴ層で出土し、B類3は第Ⅲ層b・c・g・hで出土し第Ⅲ層gに多く、B類4は第Ⅲ層gのみである。本類の中でもB類1(第69図94)は、土師器の模倣の可能性を持つものではないかと推察されるもので、柱穴(ピットNo.3104)でA類1(第65図2)と共伴して出土した。

C類(壺形)は、第Ⅲ層a～Ⅵ層で出土し、第Ⅲ層b・g・hの順で多く出土し、C類1・2の出土が多く、僅かに前者が多い。C類は胎土③が89%を占めており胎土⑤は見られない。C類3は胎土①・③のみである。本類の中で、第70図109は、器色が暗黒褐色を呈し、他の土器よりも堅く焼き締まっており留意されるものである。

D類(碗形)は僅かに4点の出土で、第Ⅲ層b(2点)、第Ⅲ層h(1点)、第Ⅱ層(1点)に出土し、うち3点が胎土③である。

底部の出土状況を第21表でみると、F類が34.4%、H類は2.62%、G類は1.81%で、立ち上がり部分を失っている器種不明のI類が61.17%である。層位別では第Ⅲ層bが最も多く、次いで第Ⅲ層g・c・h・e・第Ⅴ層の順となる。分類別でみると、F～G類の中ではF類1が多い。

胎土別では、胎土①が51%で最も多くG・I類に多く、ついで、胎土③が22%でF類2・3、胎土④が18%でF類1・I類に、胎土⑤が6%、胎土⑥は3%でいずれもF類1に多い。F類1・I類にはすべての胎土があり、H類は胎土①・③のみである。胎土①は、F類3には見られない。胎土⑥はF類2・H類で出土がない。F類2には砂粒圧痕と葉脈痕をもつものがあり、前者には胎土①・③、後者は胎土③・④である。

I群は、口縁部が第Ⅲ層b、第Ⅲ層c・d、第Ⅳ層で各1点、底部は第Ⅲ層d(2点)・第Ⅵ層(1点)、胴部片は53点で第Ⅲ層b～e・g(35点)、第Ⅳ～Ⅵ層(16点)で出土し、不明・攪乱・第Ⅱ層から僅かに見られる(第20表)。本群は甕形のみ出土で、底部の第71図128は1号平地住居址の近くN-27の第Ⅵ層bで出土し、同図129・130はいずれも第Ⅲ層dから出土しており前者はS-26、後者はR-25からの出土である。口縁部は第64図1はQ-26の第Ⅲ層c、同図2はS-26の第Ⅲ層d、同図3はH-28の第Ⅳ層、4はR-27第Ⅲ層bからの出土である。

〈註〉

註1. 仲宗根 求ほか 1990『吹出原遺跡』読谷村教育委員会

註2. 中村 愿 1993『玉代勢原遺跡』北谷町教育委員会

註3. 山城安生ほか 1998『伊礼伊森原遺跡』北谷町教育委員会

註4. 金城正紀ほか 1997『銘苅原遺跡』那覇市教育委員会

註5. 金城正紀ほか 1994『ヒヤジョー毛遺跡』那覇市教育委員会

第15表 土器観察一覧① a

挿図版	番号	分類			把手 鈔分類	部位	口 底器 径高 (cm)	胎土 分類	素 地	観察事項	出土地・層位	
		大	中 (器種)	小								
第65図・図版20	1		鍋 (A類)	1	—	口 縁	26.6	E	外面は淡茶褐色、一部黒味を帯びる。内面淡褐色。微細な滑石、石英、暗褐色粒を含む。	口唇部を平坦にし、外面に幅約6mmの縁をもつ。外面と口唇部は滑石粉末が顕著で光沢があり、外面の手触りはツルツル。内面は外面ほどではない。	R-27V	
	2		鍋 (A類)	1	ア a ①	口 縁	22.6	D	外面暗褐色、内面淡褐色。石英・赤色粒。	口唇外端に粘土のはみ出しがある。把手は、口唇部の平坦面から僅かに下がる。把手下面には隙間がある。器面のナデ調整は、口縁直下は約1.5cm幅で横ナデ、それ以下は縦位が主であるが斜めもある。手触りは、器面には褐鉄鋼が付着。	Q-27V 柱穴内No.3104	
	3		鍋 (A類)	1	—	口 縁	24.0	B	外面は暗褐色。内面は赤褐色。	外面は斜位のナデが目立ち、内面の口縁下は横ナデを施す。アバタ状で手触りはツルツル。	P-27Ⅲc 最下	
	4		鍋 (A類)	1	—	口 縁	25.8	D	内外面ともに赤褐色。部分的に褐色を帯びる。赤色粒・暗褐色粒混入。	口唇部は平坦にし、外端部に幅約5mmの縁をもつ。内面に横位の擦痕。手触りはややツルツル。	R-28I	
	5		鍋 (A類)	1	—	口 縁	30.4	B	内外面ともに茶褐色。砂粒混入。	口唇外端がやや丸みを帯びる。口縁下は横ナデを施す。手触りはツルツル。	Q-26Ⅲe 最下	
	6	Ⅱ群		鍋 (A類)	1	ア a ②	口 縁	—	E	内外面ともに暗黒褐色。把手の下部は赤褐色。微量の滑石混入・石英・赤色粒。	把手は角が丸味を帯びる。手触りはツルツル。	Q-27Ⅲc 柱穴331-C内
	7			鍋 (A類)	1	—	口 縁	—	E	内外面ともに淡褐色。断面中央部は灰褐色。滑石混入・石英・砂粒。	口縁直下の把手の剥離痕や器形から、ア a ①が付くと考えられる。口唇外端に細い棒状のもので、僅かに窪ませて幅約2mmの縁をつくる。手触りはツルツル。内面に褐鉄が付着。	R-28大土坑
	8			鍋 (A類)	1	—	口 縁	—	E	外面赤褐色。内面褐色。断面の中は灰色。多量の滑石混入。	口縁直下の把手の剥離痕や器形から、ア a ①が付くと考えられる。	O-27V
	9			鍋 (A類)	1	—	口 縁	—	E	内外面ともに淡褐色。断面の中は褐色。滑石粉混入・細かい石英・赤色粒。暗褐色粒。	口唇部は平坦で、外端に幅約2mmの縁を持つ。手触りはツルツル。外面は一部に僅かであるが光沢がある。	Q-27Ⅲb 最下
	10			鍋 (A類)	1	—	口 縁	—	E	外面暗褐色、内面淡レンガ色。滑石・微粒な石英・砂粒混入。	口唇部は平坦。丁寧である。外端に幅4mmの縁をもつ。手触りはツルツル。	R-27V
	11			鍋 (A類)	1	—	口 縁	—	E	外面暗褐色。内面ややくすんだ褐色。滑石混入。	口唇部は平坦に仕上げ、外端部に縁をもつ。外端部は約5mm、手触りはツルツル。	Q-27Ⅲc
	12			鍋 (A類)	1	—	口 縁	—	D	赤褐色。部分的に黒みを帯びる。石英・細かい砂粒混入。	口唇部は平坦で、内端側に口唇の幅を広くする。器面調整は丁寧である。手触りはややツルツル。	R-27Ⅲa5/10

第15表 土器観察一覧①b

挿図 図版	番号	分類		把手 鈔分類	部位	口 底器 径高 (cm)	胎土 分類	素 地	観 察 事 項	出土地・層位	
		大	中 (器種)								小
第65 図・ 図版 20	13		鍋 (A類)	1	—	口 縁	— — —	Ⓑ	外面は暗褐色。内 面は茶褐色。 石英。	口唇部外端に粘土のはみ出し残る。 気泡状の小さなアバタがある。手 触りはツルツル。外面のナデ調整 は斜位、内面は横位。	R-26Ⅲ e
	14		鍋 (A類)	1	—	口 縁	— — —	Ⓓ	内外面ともに茶褐 色。口唇部付近は 黒味を帯びる。白 色粒。	口唇部は平坦に仕上げ、縁の整形 も比較的丁寧であるが、口縁部は うねる。手触りはツルツル。	Q-26Ⅲ b
	15		鍋 (A類)	1	—	口 縁	— — —	Ⓔ	外面は淡褐色。内 面は白っぽい。滑 石・石英混入。	口唇部を平坦にし、外端に約6mm の縁を持つ。第③図15と同一個 体の可能性がある。	Q-27Ⅲ a
	16		鍋 (A類)	1	—	口 縁	— — —	Ⓔ	外面赤褐色、内面 ややくすんだ淡褐 色。 滑石混入。	口唇部は平坦に仕上げる。手触り はツルツル。器形から鈔が付く可 能性もある。発掘時の傷が残る。	Q-25V b
	17		鍋 (A類)	1	—	口 縁	— — —	Ⓔ	内外面ともに暗褐 色。 多量の滑石混入。 石英微粒子。暗褐 色粒が散見される。	口唇部は平坦に仕上げる。横ナデ を施すが口縁直下に指圧痕を残す。 手触りはツルツル。器形から鈔が 付く可能性もある。	Q-27V
第66 図・ 図版 21	18		鍋 (A類)	2	—	口 縁	21.8 — —	Ⓐ	外面赤褐色、内面 淡茶褐色。赤色粒・ 貝粒混入。	内面にハケ目痕。外面に横ナデを 施すが指圧痕を残す。アバタ状で 手触りはガサガサ。	S-28Ⅲ g
	19	Ⅱ 群	鍋 (A類)	2	—	口 縁	19.8 — —	Ⓐ	外面淡暗褐色、内 面は黒褐色。白色 粒混入。	内面にハケ目痕。外面は横位の後 に縦位のナデを施すが、指圧痕は 残る。アバタ状で手触りはガサガ サ。	S-28Ⅲ g
	20		鍋 (A類)	2	—	口 縁	17.4 — —	Ⓓ	外面淡褐色。内面 淡茶褐色。赤色粒・ サンゴ礫混入。	内外面ともに横ナデでを施すが、 指圧痕は残る。手触りはツルツル。	R-26Ⅲ b
	21		鍋 (A類)	2	—	口 縁	19.4 — —	Ⓑ	外面は淡褐色、内 面は淡橙褐色。サ ンゴ礫混入。	内外面ともに横ナデを施す。比較 的丁寧である。アバタ状で手触り はツルツル。	S-28Ⅲ g
	22		鍋 (A類)	2	—	口 縁	17.1 — —	Ⓑ	内外面ともに淡橙 褐色。赤色粒・サン ゴ礫混入。	内面はナデを施すが、外面では口 唇部から胴部に向かう指圧痕が目 立つ。アバタ状で手触りはツルツ ル。	S-28Ⅲ f S-28Ⅲ g
	23		鍋 (A類)	2	—	口 縁	— — —	Ⓐ	内外面ともに淡橙 褐色。サンゴ礫混 入。	口縁部内外面直下に指圧痕を残し、 それより下位に刷毛目がある。ア バタ状でガサガサ。薄手である。	S-28Ⅲ g
	24		鍋 (A類)	2	—	口 縁	— — —	Ⓑ	外面は淡茶褐色、 内面は淡橙色。	横ナデを施す。アバタ状で手触り はツルツル。	S-28Ⅲ g
	25		鍋 (A類)	2	—	口 縁	— — —	Ⓑ	外面は淡橙色、内 面は淡黄白色。	横ナデを施すが、指圧痕は残る。 アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲ h

第15表 土器観察一覧①c

挿図 図版	番号	分類		把手 鏢 分類	部位	口 底 器 高 (cm)	胎土 分類	素 地	観 察 事 項	出土地・層位	
		大	中 (器種)								小
第 66 図 ・ 図 版 21	26		鍋 (A類)	2	—	口 縁	— — —	Ⓑ	内外面ともに淡褐色。部分的に橙褐色を帯びる。砂粒混入。	口唇部は平坦に仕上げる。横ナデを施す。 アバタ状で手触りはツルツル。	R-26Ⅲc
	27		鍋 (A類)	2	—	口 縁	— — —	Ⓒ	内外面ともに淡茶色、部分的に淡赤褐色。砂粒混入。	内外面の口唇の約1cm以下から刷毛目が残る。その上位はナデであるが、指圧痕を残す。手触りはガサガサ。	S-28Ⅲg
	28		鍋 (A類)	2	—	口 縁	— — —	Ⓒ	内外面ともに茶褐色。砂粒混入。	内外面に刷毛目がある。指圧痕が残る。手触りはガサガサ。	S-28Ⅲb0/5
	29		鍋 (A類)	2	—	口 縁	— — —	Ⓑ	外面赤褐色であるが、下部は暗黒褐色。内面は淡褐色。サンゴ礫混入。	外面はヘラ削りで調整する。内面はナデ。 アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲg
	30		鍋 (A類)	2	—	口 縁	— — —	Ⓑ	外面は褐色。内面淡茶褐色。赤色粒混入。	横ナデを施すが、指圧痕が残る。 アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲg
	31		鍋 (A類)	2	—	口 縁	— — —	Ⓑ	内外面ともに淡褐色。サンゴ礫混入。	口唇部下の約1cmに指圧痕が残る。 アバタ状で手触りはツルツル。	R-25Ⅲd5/10
	32	Ⅱ 群	鍋 (A類)	2	—	口 縁	— — —	Ⓐ	内外面ともに淡黄褐色。砂粒混入。	内外面ともに横ナデ。比較的丁寧である。 アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28Ⅲg
	33		鍋 (A類)	2	—	口 縁	— — —	Ⓐ	内外面ともに淡黄白色。部分的に黒ずむ。サンゴ礫混入。	内外面ともに横ナデを施す。アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28Ⅲg
	34		鍋 (A類)	2	—	口 縁	— — —	Ⓒ	外面は褐色。サンゴ礫混入。	口縁直下に器表面の剥離痕が見られ、把手の剥離の可能性もある。内面には石灰分が付着。手触りはガサガサ。	R-27Ⅲb最下
	35		鍋 (A類)	2	—	口 縁	— — —	Ⓔ	外面暗褐色、内面ややくすんだ淡褐色。細かい滑石混入・石英・赤色粒。	口唇部を平坦にし、外端に約4mmの縁を持つ。口唇部・外面は滑石の手触感があり、ツルツル。内面は弱い。	S-28Ⅲg
第 67 図 ・ 図 版 22	36		鍋 (A類)	1	アa①	口 縁	— — —	Ⓓ	外面は暗褐色。内面は茶褐色。赤色粒・石英混入。	把手の上面が斜めになり口唇部と接する。 把手下部にススの跡が見られる。手触りはツルツル。(把手は、縦4.6cm 横2.6cm 厚さ1.2cm)	R-26Ⅴ0/5
	37		鍋 (A類)	1	アa①	口 縁	— — —	Ⓓ	内外面ともに暗褐色。赤色粒混入。	把手部の内面口唇端部ははみ出しあり。口唇部に把手の上面が僅かに被る。手触りはツルツル。(把手は、縦4.2cm 横2.4cm 厚さ1cm)	Q-27Ⅲb
	38		鍋 (A類)	1	アa①	口 縁	— — —	Ⓓ	内外面ともに茶褐色。赤色粒混入。	把手上面の粘土が口唇部に被る。手触りはツルツル。(把手は、縦3.5cm 横2.5cm 厚さ1.2cm)	R-27Ⅲb最下

第15表 土器観察一覧① d

挿図 図版	番号	分類		把手 鈔 分類	部 位	口 底 器 高 (cm)	胎 土 分 類	素 地	観 察 事 項	出 土 地 ・ 層 位		
		大	中 (器種)								小	
第 67 図 ・ 図 版 22	39		鍋 (A類)	1	ア a ①	口 縁	— — — —	Ⓑ	内外面ともに茶褐色であるが、外面は部分的に暗茶褐色。赤色粒・白色粒を含む。	口唇外端に僅かに粘土がはみ出す。把手部の口唇内端が縁状になる。小さな気泡状のアバタがあるが、手触りはツルツル。(把手は、3.3cm 横2cm 厚さ1.3cm)	Q-27Ⅲb最下	
	40		鍋 (A類)	1	ア a ①	口 縁	— — — —	Ⓔ	内外面ともに淡褐色。口唇部で僅かに黒みを帯びる。滑石が微量に混入。	把手の上面は口唇部に被らない。手触りはガサガサ。	Q-25Vb	
	41		鍋 (A類)	1	ア a ②	口 縁	— — — —	Ⓑ	内外面ともに褐色。赤色粒混入。	把手側面に指圧痕を残す。アバタ状で手触りはツルツル。(把手は、縦3cm横1.8cm 厚さ1cm)	S-28Ⅲf	
	42		鍋 (A類)	1	ア a ③	口 縁	— — — —	Ⓒ	内外面ともに赤褐色。少量の赤色粒。	把手下面から右側面に煤が付着。手触りはガサガサ。(把手は、縦3cm横2.2cm厚さ0.8cm)	R-26Ⅲc 最下	
	43		鍋 (A類)	1	ア a ③	口 縁	— — — —	Ⓑ	内外面ともに暗褐色。外面は部分的に黒みを帯びる。石英・砂粒混入。	ナデ調整は比較的丁寧であるが、手触りはツルツル。(把手は、縦2.7cm 横2cm 厚さ0.9cm)	R-27Ⅲa5/10	
	44		鍋 (A類)	1	ア a ③	口 縁	— — — —	Ⓓ	内外面ともに茶褐色。部分的に黒みを帯びる。微量の石英・赤色粒混入。	ナデ調整が丁寧で、手触りはツルツル。(把手は、縦2.8cm 横2cm 厚さ1.1cm)。	Q-26Ⅲc 最下	
	45	Ⅱ群	鍋 (A類)	1	ア a ③	口 縁	— — — —	Ⓑ	内外面ともに褐色。少量の赤色粒。	細かいアバタで、手触りはツルツル。(把手は、縦2.6cm 横2cm 厚さ1cm)	Q-26Ⅲc 最下	
	46		鍋 (A類)	1	ア a ②	口 縁	— — — —	Ⓔ	外面は茶褐色、内面は褐色。滑石・石英。	口唇内外端部粘土はみ出し、縁状を呈する。手触りはガサガサ。(把手は、縦3.5cm 横1.6cm 厚さ1.3cm)	Q-25Vb	
	47		鍋 (A類)	1	ア b ②	口 縁	— — — —	Ⓒ	内外面ともに燈褐色。把手付近は黒みを帯びる。石英混入。	把手の上面は口唇部と平行。(把手は、縦3.2cm 横1.9cm 厚さ1.3cm) 手触りはガサガサ。	Q-27Ⅲb	
	48		鍋 (A類)	1	ア b ②	口 縁	— — — —	Ⓒ	内外面ともに褐色であるが、外面は黒みを帯びる。石英・砂粒。	口唇内側に斜めの面がある。手触りはガサガサ。(把手は、縦2.8cm 横2cm 厚さ1.4cm)。	R-26Ⅲc 最下	
	49		鍋 (A類)	1	ア b ①	口 縁	— — — —	Ⓔ	内外面ともに淡褐色。微量の滑石混入・赤色粒。	ナデ調整は丁寧。手触りはツルツル。(把手は、縦2.4cm 横2cm 厚み1cm)。	R-26Ⅲb	
	50		鍋 (A類)	1	ア b ①	口 縁	— — — —	Ⓔ	内外面ともに淡白褐色。微量の滑石混入・赤色粒。	口唇部外端に幅約5mmの縁をもつ。把手の上面と縁の面が連続する。把手の下面に煤が付着。ナデ調整が丁寧。手触りはツルツル。(把手は、縦3.2cm 横2.5cm 厚み1.3cm)	R-27V	
	51		鍋 (A類)	1	ア a ③	口 縁	口 縁 部	— — — —	Ⓒ	内外面ともに燈褐色。石英。	口唇部は平坦。口縁部に方形の把手を貼り付ける。把手の上面は口唇部と平行。手触りはガサガサ。(把手は、縦1.5cm 横1.5cm 厚さ1cm)	P-27Ic

第15表 土器観察一覧①e

挿図 図版	番号	分類		把手 鑿 分類	部位	口 底 器 高 (cm)	胎土 分類	素 地	観察事項	出土地・層位	
		大	中 (器種)								小
第67図・図版22	52		鍋 (A類)	1	アa③	口 縁	—— —— ——	①	内外面ともに赤褐色。砂粒混入。	把手下部付近は黒みを帯びる。アバタ状で手触りはガサガサ。(把手は、縦2.2cm横1.6cm厚さ1cm)	P-27Ⅲa
	53		鍋 (A類)	1	アa③	口 縁	—— —— ——	②	内外面ともに茶褐色。赤色粒混入。	口唇部外端に幅約5mmの縁をもつ。把手の上面が口唇に僅かに被さる。把手付近は黒みを帯びる。手触りはツルツル。(把手は、縦2.4cm横2cm厚さ1cm)	S-28Ⅲf
	54		鍋 (A類)	1	アa③	口 縁	—— —— ——	③	内外面ともに淡茶色。少量の赤色粒混入。	アバタ状で手触りはツルツル。(把手は、縦2.5cm横2.3cm厚さ0.8cm)	R-25Ⅲc0/5
	55		鍋 (A類)	1	アa③	口 縁	—— —— ——	④	外面は明淡茶色、内面は淡茶色。砂粒混入。	口唇部に把手上面が被る。アバタ状で手触りはツルツル。(把手は、縦2.3cm横1.8cm厚さ0.8cm)	R-27Ⅲc
	56		鍋 (A類)	1	アa③	口 縁	—— —— ——	⑤	内外面ともに淡茶色。赤粒混入。	アバタ状で手触りはツルツル。(把手は、縦2.7cm横2.3cm厚さ0.8cm)	R-26Ⅲc
	57		鍋 (A類)	1	アa③	口 縁	—— —— ——	⑥	内外面ともに褐色。石英・砂粒混入。	把手の上面は斜めで口唇部と接する。手触りはガサガサ。(把手は、縦2.3cm横2cm厚み1cm)	S-28Ⅲb
	58	Ⅱ群	鍋 (A類)	1	アa③	口 縁	—— —— ——	⑦	内外面ともに赤茶淡褐色。滑石が数粒見られる。	外端に縁をもつ。把手の上面は口唇部に僅かに被るがほぼ平行。手触りはガサガサ。(把手は、縦2.5cm横2cm厚さ1cm)	P-27Ⅲb
	59		鍋 (A類)	1	アa③	口 縁	—— —— ——	⑧	外面は明燈色、内面は褐色。微量の滑石・石英混入。	口唇部は黒みを帯びる。手触りはガサガサ。(把手は、縦2.4cm横2.3cm厚さ1cm)	O-26Ⅱ
	60		鍋 (A類)	1	アa③	口 縁	—— —— ——	⑨	内外面ともに淡い橙褐色。部分的に褐色を呈す。	アバタで、手触りはツルツル。(把手は、縦2cm横2.5cm厚さ1cm)	S-28Ⅲg
	61		鍋 (A類)	1	アa③	口 縁	—— —— ——	⑩	内外面ともに赤褐色。石英混入。	把手はやや瘤状である。手触りはガサガサ。(把手は、縦3cm横2.5cm厚さ0.8cm)	R-26Ⅲd
	62		鍋 (A類)	1	アb②	口 縁	—— —— ——	⑪	外面赤褐色であるが、部分的に暗褐色。内面暗褐色。滑石混入。	口唇外端に粘土はみ出し、縁状を呈する。手触りはガサガサ。(把手は、縦2.8cm横2cm厚さ0.8cm)	P-25Ⅳ
	63		鍋 (A類)	1	イa	口 縁	—— —— ——	⑫	外面は赤褐色。内面は褐色。石英・滑石を極少量含む。	外面に比して、内面の調整はやや雑。手触りはガサガサ。(把手は、縦2.2cm横3.1cm厚さ1cm)	R-28大土坑
64		鍋 (A類)	1	イb	口 縁	—— —— ——	⑬	褐色。把手付近は黒みを帯びる。多量の白色粒(サンゴ礫)混入。	把手の上面は口唇部と平行し、放射状にナデ跡を残す。手触りはツルツル。(把手は、縦1.4cm横4.6cm厚さ1.4cm)	Q-26Ⅳ	

第15表 土器観察一覧① f

挿図 図版	番号	分類		把手 鏝 分類	部位	口 底 器 高 (cm)	胎土 分類	素 地	観察事項	出土地・層位	
		大	中 (器種)								小
第 67 図 ・ 図 版 22	65		鍋 (A類)	1	イc	胴部	— — —	Ⓑ	内外面ともに淡褐色。石英混入。	把手先端を部分的に欠損する。アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲf
	66		鍋 (A類)	1	イc	口縁	— — —	Ⓐ	内外面ともに燈茶褐色。赤粒・サンゴ礫混入。	口唇部と把手の上面は褐色。アバタ状で手触りはガサガサ。(縦1.4cm横4.6cm厚さ1.4cm)	O-27Ⅲc
	67		鍋 (A類)	1	イc	胴部	— — —	Ⓐ	外面は燈褐色、内面は茶褐色。サンゴ礫混入。	アバタ状で手触りはガサガサ。(縦1.4cm横3.5cm厚さ1cm)	O-26Ⅳ
第 68 図 ・ 図 版 23	Ⅱ 群	68	鍋 (A類)	3	鏝a	口縁	29.4 — —	Ⓔ	内外面ともに暗褐色。石英。砂粒・微量の滑石混入。	口唇下約3cmに鏝が付く。外器面では鏝より下位に刷毛目が残る。内面は横ナデを施すが指圧痕を残す。手触りはガサガサ。	Q-27Ⅴ
		69	鍋 (A類)	3	鏝a	口縁	21.0 — —	Ⓔ	内外面ともに燈褐色。少量の砂粒と滑石を混入	鏝よに先端や下面は黒味を帯びる。手触りはガサガサ。	Q-25Ⅱ R-27Ⅲc
		70	鍋 (A類)	3	鏝b	胴部	— — —	Ⓒ	内外面ともに燈褐色。断面中央部は茶褐色。砂粒・赤粒混入。	鏝が厚い。鏝下面以下がやや黒味を帯びる。手触りがガサガサ。	S-25Ⅲd
		71	鍋 (A類)	3	—	口縁	21.2 — —	Ⓔ	内外面ともに褐色。滑石混入	下部が横方向の貼付けと考えられる痕跡がある。手触りはツルツル。第④図7の口縁と考えられる。	S-28Ⅲg
		72	鍋 (A類)	3	鏝a	口縁	— — —	Ⓓ	内外面ともに淡褐色。胎土は細かく少量の赤粒混入。	鏝の線端から下面は黒味を帯びる。手触りはツルツル。	Q-27Ⅴ
		73	鍋 (A類)	3	鏝a	口縁	— — —	Ⓒ	内外面ともに赤褐色。砂粒と石英混入。	鏝aの中ではやや厚手。手触りはガサガサ。	S-28Ⅲa
		74	鍋 (A類)	3	鏝b	胴部	— — —	Ⓔ	外面は茶褐色、内面は暗黒褐色。部分的に褐色。滑石混入。	丁寧なナデを施す。鏝の下面は黒味を帯びる。手触りはツルツル。	S-28Ⅲg
		75	鍋 (A類)	3	鏝b	胴部	— — —	Ⓔ	外面は茶褐色、内面暗褐色。滑石混入。	鏝の下位は黒味を帯びる。手触りはツルツル。	Q-26Ⅲc 最下
		76	鍋 (A類)	3	鏝a	胴部	— — —	Ⓓ	内外面ともに明燈褐色。石英と砂粒混入。	鏝aの中では厚手。手触りはツルツル。	S-28Ⅲf
		77	鍋 (A類)	3	鏝 (不明)	胴部	— — —	Ⓔ	外面は褐色、内面は暗褐色。滑石混入。	丁寧なナデを施し、鏝の下側に横ナデ痕が明瞭に残る。手触りはツルツル。鏝は欠損し、痕跡が残る。	S-28Ⅲg

第15表 土器観察一覧①g

挿図 図版	番号	分類			把手 鏝 分類	部位	口 底 器 高 (cm)	胎土 分類	素 地	観 察 事 項	出土地・層位	
		大	中 (器種)	小								
第 68 図 ・ 図 版 23	78		鍋 (A類)	3	鏝 a	胴部		⑤	内外面は淡褐色。 断面中央部は暗灰色。 滑石と赤色粒混入。	器表面に滑石粒が露出。手触りはガサガサ。	O-26Ⅲe	
	79		鍋 (A類)	3	鏝 a	胴部		⑤	内外面ともに赤褐色。 砂粒と滑石を少量混入。	鏝 a の中では、やや水平に張りつける。手触りはガサガサ。	O-26Ⅵb	
	80		鍋 (A類)	3	鏝 a	胴部		④	内外面ともに燈褐色。 暗褐色粒・砂粒。	鏝の上・下面が黒味を帯びる。手触りはツルツルである。	S-25Ⅲe	
	81		鍋 (A類)	3	鏝 a	胴部		⑤	内外面ともに燈褐色。 細かい滑石混入。	鏝の上面は黒味を帯びる。手触りはガサガサ。	R-28Ⅱ最下	
	82		鍋 (A類)	3	鏝 a	胴部		③	内外面ともに燈褐色。 石英混入	薄手である。手触りはガサガサ。	R-26Ⅲc	
	83		鍋 (A類)	3	鏝 a	胴部		③	内外面ともに暗褐色。 石英・赤色粒・砂粒混入。	鏝上面が黒味を帯びる。手触りはガサガサ。	R-27Ⅲb最下	
	84	Ⅱ群		鍋 (A類)	3	鏝 a	胴部		⑤	燈褐色。砂粒と少量の滑石を混入。	薄手である。鏝下側に貼付けの痕跡を残す。手触りはガサガサ。	R-25Ⅳb
	85			鍋 (A類)	3	鏝 a	胴部		④	外面は赤褐色、内面は褐色。 石英砂粒混入。	薄手である。鏝下側に貼付けの痕跡を残す。鏝の張り出しは短い。手触りはツルツル。	H-28客土
	86			鍋 (A類)	2	ア a ②	口縁		⑤	外面は赤褐色、内面は淡い褐色。 全体的に黒みを帯びる。 多量の滑石粒混入。	滑石が表面に露出するほど多量。手触りはガサガサ。(把手は、縦3.3cm 横1cm 厚さ0.8cm)	Q-25Ⅵb
	87			鍋 (A類)	2	ア a ②	口縁		⑤	内外面ともに淡茶色。 赤色粒・滑石混入。	把手側面の調整も丁寧である。把手付近はススが付着。手触りはガサガサ。(把手は、縦3.4cm 横2cm 厚さ1.5cm)	Q-26Ⅲe最下
	88			鍋 (A類)	2	ア a ②	口縁		③	内外面ともに褐色。 赤色粒混入。	把手の上面は口唇部に被る。把手側面に指圧痕残す。把手直下面は黒みを帯びる。アバタ状で手触りはツルツル。(把手は、縦3cm 横1.3cm 厚さ0.8cm)	R-27Ⅲb最下
	89			鍋 (A類)	2	ア a ②	口縁		⑤	内外面ともに茶褐色。 赤色粒・微量の滑石混入。	把手は小さい。手触りはツルツル。(把手は、縦2cm 横1.3cm 厚さ0.8cm)	Q-26Ⅲb
90			鍋 (A類)	2	ア a ③	口縁		④	外面は淡茶褐色、内面は茶褐色。 石英・赤色粒・黒色粒混入。	把手上面は口唇部に被る。手触りはガサガサ。(縦2.4cm 横2cm 厚さ0.8cm)	R-26Ⅲb20/25	

第15表 土器観察一覧①h

挿図 図版	番号	分類			把手 鑿 分類	部 位	口 底 器 高 (cm)	胎土 分類	素 地	観 察 事 項	出 土 地 ・ 層 位
		大	中 (器種)	小							
第 68 図 ・ 図 版 23	91		鍋 (A類)	2	アa③	口 縁	— — —	③	内外面ともに茶褐色。 口唇部と内面が灰褐色を呈す。	内面は二次的焼成を受けたと考えられ、くすんだ灰色がかっている。アバタ状で手触りはツルツル。(把手は、縦2cm横2cm厚さ0.7cm)	P-27IV
	92		鍋 (A類)	2	アa③	口 縁	— — —	③	淡茶褐色。 赤粒・多量のサンゴ礫混入。微量の滑石含む。	口唇部を欠損する。アバタ状で手触りはガサガサ。把手上面に滑石の微粒子のまとまりがある。塗布か？(把手は、縦1.4cm横3.5cm厚さ1cm)	P-26Ⅲd
	93		鍋 (A類)	2	アa①	胴 部	— — —	④	内外面ともに燈褐色。 石英・赤色粒混入。	把手部の内部に軽石状のものが混入。手触りはツルツル。(把手は、横2.7cm厚さ1cm)	Q-27Ⅲb
第 69 図 ・ 図 版 24	104	II 群	鍋?	イ	イd①	把 手	— — —	③	内外面ともに褐色。 サンゴ礫、粗めの砂粒を多く含む。	上面観が略扇状の厚手の把手。横位の貼り付け。上・下面ともにナデであるが、下面はやや雑で擦痕が残る。アバタ状で手触りはツルツル。鍋形と考えられる。	P-27Ⅲe
	105		鍋?	イ	イd①	把 手	— — —	③	内外面ともに暗燈褐色。部分的に暗褐色を呈す。サンゴ礫混入。	下面に整形時の指圧痕が溝状に残るほど雑で、把手端部のナデの土を被せている。アバタ状で手触りはツルツル。鍋形と考えられる。	Q-27Ⅲb 最下
	106		鍋?	イ	イd①	把 手	— — —	③	内外面ともに暗燈褐色。部分的に黒みを帯びる。多量の砂粒混入。	横位と考えられる。アバタ状で手触りはツルツル。鍋形と考えられる。	R-26Ⅲc
	107		鍋?	イ	イd②	把 手	— — —	③	上面は燈褐色。下面は暗褐色。石英質の微砂粒・赤粒混入。	平面形は長方形を呈する。厚手でしっかりとしたつくりである。横位の貼り付け。手触りはツルツル。鍋形と考えられる。	S-25Vb
	108		鍋?	イ	イd①?	胴 部	— — —	③	外面は褐色。赤色粒・黒色粒を含む。	第⑤図104と同様な、把手の付け根部分と考えられる。貼付部は横ナデで仕上げる。手触りはツルツル。鍋形と考えられる。	R-25IV

第16表 土器観察一覧②a

挿図 図版	番号	分類			部 位	口 底 器 高 (cm)	胎土 分類	素 地	観 察 事 項	出 土 地 ・ 層 位
		大	中 (器種)	小						
第 69 図 ・ 図 版 24	94		鉢 (B類)	1	口 縁	27.2	④	外面茶褐色。内面赤褐色。石英を僅かに含む。	丁寧でしっかりとしたつくり。外反部分は横ナデが施されるが、屈曲部に指圧痕が残る。胴部は縦位のナデである石灰質と僅かに褐鉄が付着する。内面の調整痕は石灰質に覆われ不明瞭。表面の手触りはツルツル。	Q-27V 柱穴内No.3104 第65図2と羽口を伴う。
	95	II 群	鉢 (B類)	2	口 縁	24.0	③	外面淡赤褐色。部分的に茶褐色を帯びる。内面は淡褐色。胎土は細かく赤色粒混入。	口縁部は外反する。両面とも、指圧痕を残す。細かいアバタ状で手触りはツルツル。	S-28V
	96		鉢 (B類)	2	口 縁	17.8	③	内外面ともに淡褐色。部分的に燈褐色を帯びる。	器面調整は、ナデで仕上げる。アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲh

第16表 土器観察一覧②b

挿図 図版	番号	分類			口 底 器 高 (cm)	胎土 分類	素 地	観 察 事 項	出土地・層位	
		大	中 (器種)	小						
第 69 図 ・ 図 版 24	97		鉢 (B類)	3	口 縁	20.4	①	内外面ともに暗褐色、部分的に燈褐色を呈する。	内外面ともに横ナデを施す。アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28Ⅲg S-28Ⅲh
	98		鉢 (B類)	3	口 縁	18.8	①	外面は燈褐色、内面は淡黄白色。サンゴ礫・石英混入。	内外面ともに横ナデを施す。アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28Ⅲh
	99		碗 (D類)	—	口 縁	15.0	③	内外面暗茶褐色。断面部は暗黒褐色。砂粒混入。	口縁部外端を僅かに丸くし、縁状に成形する。手触りはガサガサ。	S-26Ⅲb
	100		鉢 (B類)	2	口 縁	—	②	外面は暗褐色、内面は淡茶褐色。	内外面ともに横ナデを施すが、屈曲部の外面には指圧痕が残り、内面は強い稜を残す。口縁部にも横ナデを施す。アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲb
	101		鉢 (B類)	3	口 縁	—	②	内外面ともに淡黄白色。赤色粒・サンゴ礫混入。	内外面ともに横ナデを施すが、指圧痕を残す。アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲg
	102		鉢 (B類)	4	口 縁	—	②	外面は淡褐色、内面は淡黄白。サンゴ礫混入。	口縁直下に径約5mmの補修穴がある。横ナデが施される。アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲg・V
	103	Ⅱ 群	碗 (D類)	—	口 縁	—	②	淡褐色。胎土は細かく、サンゴ礫を多量に含む。	口唇部内面を斜めにし、僅かに外反させる。外面は雑な仕上げであるが、それに比して内面はやや丁寧である。アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲh
第 70 図 ・ 図 版 25	109		壺 (C類)	1	口 縁	30.6	④	内外面・断面ともに暗黒褐色。	頸部が5cmと長い。しっかりとしたつくりで、焼締められたもの。酸化還元炎焼成されたものか？手触りはツルツル。	S-28Ⅲh
	110		壺 (C類)	1	口 縁	24.2	②	内外面ともに淡黄白色。赤色粒・サンゴ礫混入。	内外器面ともにナデ。アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲg
	111		壺 (C類)	1	胴 部	—	①	暗赤褐色。石英・砂粒混入。	口唇部は欠損。頸部は横ナデ。アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28Ⅲb S-28g
	112		壺 (C類)	1	口 縁	17.2	①	外面は赤褐色、内面は淡褐色で、外面には部分的に黒暗褐色を帯びる。	横ナデが施されているが、頸部外面には指圧痕を残す。肩部への内面に明瞭な稜を残す横ナデがある。アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28Ⅲg S-28Ⅲh
	113		壺 (C類)	1	口 縁	—	①	外面は燈褐色、内面は淡黄白色。赤粒・サンゴ礫混入。	口唇部を欠損する。内外面ともに横ナデを施す。頸部の付け根部分の内面には強い稜がある。アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28Ⅲh
	114		壺 (C類)	2	口 縁	15.1	①	外面茶褐色、内面淡褐色。サンゴ礫混入。	外面はナデ調整を施すが、頸部の付け根に指圧痕を残す。内面は板目ナデ。手触りはガサガサ。	S-28Ⅲg

第16表 土器観察一覧②c

挿図 図版	番号	分類			口 底 器 高 (cm)	胎土 分類	素 地	観察事項	出土地・層位	
		大	中 (器種)	小						部 位
第 70 図 ・ 図 版 25	115		壺 (C類)	2	口 縁	16.1	④	外面は燈褐色、内面は茶褐色。白色粒・赤粒・暗褐色粒。	頸部は横ナデを施すが、僅かに指圧痕を残す。手触りはツルツル。	P-26Ⅲe
	116		壺 (C類)	2	口 縁	14.2	⑥	内外面ともに淡褐色。外面肩部に暗灰色を帯びる。内面の下部に僅かに煤けた部分がある。胎土は細かく、赤色粒・サンゴ礫も少量混入。	頸部は横ナデ、肩部には斜めの擦痕も残る。アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲg
	117		壺 (C類)	2	胴 部		⑥	外面は灰色を呈しているが、部分的に赤褐色や暗黒褐色を帯びる。内面は淡褐色。白色粒混入。	頸部は内外面とも横ナデ。肩部は斜位のナデ。アバタ状で手触りはツルツル。外面のアバタは僅かで、内面はやや目立つ。	P-27Ⅲb最下 Q-26V上面
	118		壺 (C類)	2	胴 部		③	外面は暗褐色、内面は燈褐色。石英・砂粒混入。	外面は横ナデであるが、指圧痕を残す。内面の頸部は横ナデ、肩部は斜位のナデが交差する。手触りはガサガサ。	S-28Ⅲg
	119		壺 (C類)	3	口 縁	10.2	⑥	内外面ともに暗灰褐色。部分的に茶褐色を帯びる。胎土は細かく石英混入。	アバタ状で手触りはツルツル。内外面はナデ。小型壺ミニチュア。	S-27Ⅱ
	120		壺 (C類)	3	口 縁		①	外面は燈褐色、内面は淡褐色。胎土は細かい	ナデ調整を施すが、僅かに指圧痕を残す。アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28Ⅲg
	121	Ⅱ 群	壺 (C類)	3	口 縁		⑥	内外面ともに淡燈褐色。赤色粒混入	薄手で、横ナデを施すが指圧痕が僅かに残る。手触りはツルツル。	S-28Ⅲg
	122		壺 (C類)	1	口 縁		④	内外面ともに淡黄白色。断面中央部は灰色。	口唇部を平坦にする。横ナデ。	R-26地山
	123		壺 (C類)	1	口 縁		⑥	内外面ともに淡黄白色。赤色粒・サンゴ礫混入。	口唇部を欠損する。ナデが施されるが頸部の表面は指圧痕が残る。アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲg
	124		壺 (C類)	2	口 縁		①	内外面ともに淡燈色。サンゴ礫混入。	口縁部を平坦にする。内面に横位のナデ。アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28Ⅲg
	125		壺 (C類)	2	胴 部	12.4	③	内外面ともに淡赤褐色。石英混入。	横ナデが施され比較的丁寧である。アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28Ⅲb O-27Ⅲe
	126		壺 (C類)	2	口 縁		①	内外面淡燈褐色。赤色粒・サンゴ礫混入。	頸部は横ナデ。内面の頸部の付け根に器表面の剥離が見られる。アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28Ⅲf
127		壺 (C類)	2	胴 部		①	内外面ともに淡燈色。サンゴ礫混入。	横ナデを施す。内面は丁寧。アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28Ⅲg	

第17表 土器観察一覧③ a

挿図版	番号	分類		部位	口径 底器 径高 (cm)	角度	底の厚さ	胎土 分類	素地	観察事項	出土地・層位		
		大	中 (器種)									小	
第71図・図版26	128		甕	I群	底部	5.2	-	-	①	内外面ともに茶褐色。断面内側は灰色。	くびれ平底。底が厚い。丁寧でしっかりしたつくり。手触りはツルツル。	N-27VIb	
	129		甕	I群	底部	5.8	-	-	②	外面暗茶褐色。内面灰褐色。断面は部分的に燈色。砂粒・赤色粒混入。	くびれ平底。内底面は平たい。底が薄い。手触りはガサガサ。	S-26III d	
	130		甕	I群	底部	5.4	-	-	③	内外面ともに淡燈色。赤色粒混入。	くびれ平底。底面端部が丸みをもつ。底が厚い。内面は発掘時の緞で削られている。手触りはツルツル。	R-25III d	
	131		-		H類	底部	14.0	30	1.2~2.3	④	外面赤褐色、内面は褐色。砂粒混入。	立ち上がりで僅かにくびれる。アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28III h
	132		鍋	G類	底部	19.2	80	1.0	⑤	内外面ともに灰褐色。多量の滑石混入。	立ち上がり部の外器面は縦のナデ。手触りはツルツル。	S-28III g	
	133		-		H類	底部		30	0.7~1.5	⑥	内外面ともに淡茶褐色。内底は部分的に焼けている？赤粒・サンゴ礫混入。	立ち上がりで僅かにくびれる。外底に砂粒圧痕がある。底部脇に溝状に窪んだ部分がある。そこからの立ち上がり部分は削りで、擦痕がある。内底はナデ。アバタ状で手触りはツルツル。	S-28III g
	134	II群	鍋	G類	底部		70	1	⑦	外面は淡褐色。内面は茶褐色。多量の滑石混入。	胴部はほぼ直立するが底の縁を斜めにする。手触りはツルツル。	P-26IV	
	135		-		F類2	底部		40	0.9	⑧	外面ススが附着？。内面淡茶褐色。サンゴ礫混入。	立ち上がり部に粘土を胴部側に被せた痕がある。アバタ状で手触りはツルツル。	N-28III e 上面
	136		-		F類2	底部		45	0.9	⑨	両面とも淡茶褐色。断面中央部は灰色を帯びる。橙色も見られる。サンゴ礫・褐色粒混入。	外器面の立ち上がりは横位の削り後、縦位のナデ。白色粒は内面に目立つ。手触りはツルツル。アバタは僅か。	P-26III b
	137		-		F類2	底部		40	0.8	⑩	内外面ともに暗黒褐色。白色粒混入。	外器面立ち上がりはナデ。アバタ状でツルツル。	R-27III b 最下
	138		-		FA類3	底部		50	1.2	⑪	内外面ともに褐色。赤色粒・白色粒混入。	立ち上がり部はナデ。底面は細かいアバタが目立つ。アバタ状で手触りはガサガサ。	S-28III f
	139		鍋 (A類)	F類1	底部		-	1	⑫	外底は淡茶褐色。内底は淡灰褐色。多量の滑石混入。	滑石を多量に含む。手触りはガサガサ。	P-26IV Q-27V	
	140		鍋 (A類)	F類1	底部		-	0.5	⑬	外面赤茶褐色。内面暗黒褐色。多量の滑石混入。	手触りはツルツル。	P-26表採	

第17表 土器観察一覧③b

挿図 図版	番号	分類		部位	口 底器 径高 (cm)	角度	底の厚さ	胎土 分類	素 地	観察事項	出土地・層位	
		大	中 (器種)									小
第71図・ 図版26	141		鍋 (A類)	F類1	底部		—	0.7	㊦	外底は赤褐色。 内底は暗褐色。 多量の滑石混入。	手触りはツルツル。	Q-25Vb
	142		鍋 (A類)	F類1	底部		—	0.8~1.4	㊦	外・内面とも赤茶褐色。 内面は部分的に褐色を帯びる。赤色粒・多量の滑石混入。	手触りはガサガサ。滑石を含むが土はザラつく。	P-27Ⅱd
	143		鍋 (A類)	G類	底部		80	0.6	㊦	内外面ともに茶褐色。多量の滑石混入。	底部小破片。外器面には発掘時の傷がある。手触りはツルツル。	R-27Ⅲa5/10
	144		鍋 (A類)	F類	底部		70	0.8	㊦	外面赤褐色。内面褐色。多量の滑石混入。	手触りはツルツル。	R-28大土坑
	145		鍋 (A類)	F類	底部		40	1.6	㊢	内外面ともに暗茶褐色。赤色粒・滑石混入。	手触りはツルツル。	Q-27V
	146		鍋 (A類)	F類	底部		30	1.5	㊦	外面は淡赤褐色、内面は赤褐色。滑石混入。	立ち上がりは横ナデ。手触りはツルツル。	S-25Ⅲh
	147	Ⅱ群	鍋 (A類)	F類	底部		40	0.8	㊦	外面赤褐色。内面暗黒褐色。多量の滑石混入。	手触りはツルツル。	S-26Ⅲd
	148		鍋 (A類)	F類	底部		—	1	㊦	外底は茶褐色。内底は灰褐色。細かい滑石混入。	手触りはツルツル。	P-27Ⅲe
	149		鍋 (A類)	F類	底部		30	0.6	㊦	内外面ともに暗褐色。多量の滑石混入。	手触りはツルツル。	Q-27Ⅲb
	150		鍋 (A類)	F類	底部		—	1.1~1.3	㊦	外面は茶褐色、内面は赤褐色。滑石混入。	手触りはツルツル。	S-28Ⅲb
	151		鍋 (A類)	F類	底部		—	0.8	㊦	外底は暗黒褐色。内底は赤褐色。多量の滑石混入。	手触りはツルツル。	R-26V
	152		鍋 (A類)	F類	底部		40	1.5	㊦	内外面ともに赤褐色。多量の滑石混入。	立ち上がりは横ナデ。手触りはツルツル。	S-25Ⅳb
	153		鍋 (A類)	F類	底部		—	1.5	㊦	内外面ともに赤褐色。断面中央部は灰褐色。多量の滑石混入。	手触りはツルツル。	Q-27Ⅲb

第17表 土器観察一覧③c

挿図版	番号	分類		部位	口径 底器高 (cm)	角度	底の厚さ	胎土 分類	素地	観察事項	出土地・層位
		大 (器種)	小								
第71図・図版26	154	鍋 (A類)	F類1	底部	— — —	—	1.6	⑤	内外面ともに淡 暗赤褐色。石英 赤色粒・細かい滑 石混入。	手触りはツルツル。	P-27Ⅲa
	155	鍋 (A類)	F類1	底部	— — —	60	1.7	⑤	外面暗黒褐色。 内面淡茶褐色。 断面中央は灰褐 色。滑石・赤色粒 混入。	立ち上がり部の外器面は 横位の削り。手触りはツ ルツル。	R-24層不明
	156	—	F類2	底部	— — —	—	0.8	⑥	外底黒褐色。内 底淡茶褐色。	底面に葉脈痕(クワズイ モ?)。アバタ状で手触 りはツルツル。	R-27Ⅲa
	157	—	F類2	底部	— — —	—	1.1	⑥	外面暗褐色。内 面茶褐色。 サンゴ礫混入。	底面に葉脈痕(クワズイ モ?)。糊痕? アバタでツルツル。	P-27Ⅲe 攪 乱
	158	—	F類2	底部	— — —	—	1	⑥	外底赤褐色色。 内底淡茶褐色。 胎土は細かく、 白色粒混入。	僅かに葉脈痕。手触りツ ルツル。	Q-27Ⅲb
	159	—	F類2	底部	— — —	—	0.9	⑥	外面淡赤褐色、 内面淡褐色。 石英粒と貝片混 入。	底面に葉脈痕(クワズイ モ?)。アバタでツルツ ル。	O-27Ⅲe
	160	—	F類2	底部	— — —	30	1	⑥	胎土細かい。サ ンゴ礫混入。外 面赤褐色で底面 中央部付近は暗 褐色内底茶褐色。	底面に葉脈痕(クワズイ モ?)。	R-27 2号土壇墓 木棺の痕跡外側 (頭骨南東側)
	161	—	F類2	底部	— — —	—	0.7~1.0	⑥	外面淡燈褐色。 内面茶褐色。 胎土細かい赤色 粒混入。	底面に葉脈痕(オオハマ ボウ?)。内面は煤けて いる。	S-28Ⅲg
162	—	F類2	底部	— — —	—	1.0	⑦	外底褐色。内底 暗茶褐色。胎土 は細かく赤色粒 混入。	底面に葉脈痕(クワズイ モ?)。手触りはザラザ ラ。	P-26Ⅲc5/10	
第72図・図版27	163	—	I類	底部	底部	—	2.0	⑦	外面燈褐色・部 分的に暗灰色を 帯びている。内 底は灰褐色。赤 色粒混入。	手触りはガサガサ。	Q-27Ⅲb
	164	—	F類2	底部	15.4	38	1	⑥	内外面ともに茶 褐色。断面中央 部は燈色。	立ち上がりは削り。内底 に擦痕が見られる。底面 が整っており、スレてい る。アバタ状で手触りは ツルツル。底面のアバタ が顕著。	不明
	165	—	F類2	底部	12.0	45	0.9	⑥	内面淡褐色。外 面淡灰色を主と し、底面や立ち 上がり部分が暗 灰色を帯びる。 白色粒僅かに混 入。	器面調整は内外ともにナ デ。底面に剥離材と考え られる砂粒の圧痕が密に ある。アバタで手触りは ツルツル。	S-28表採

第17表 土器観察一覧③d

挿図 図版	番号	分類			口 底器 径高 (cm)	角度	底の厚さ	胎土 分類	素 地	観 察 事 項	出土地・層位
		大	中 (器種)	小							
第72図・図版27	166		F類2	底部	13.0	30	1	㊸	内外面ともに淡褐色。断面中央部は灰色を呈す。	外面に横位の削りが見られる。立ち上がりに、部分的にナデによって溝状に窪む部分がある。底面は砂粒圧痕。アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲb最下部・Ⅲg上面
	167		F類2	底部	14.2	30	0.9	㊸	内外面ともに茶褐色。白色粒・赤色粒混入。	ベタ底。内底ナデ痕を残す。手触りはガサガサ。	Q-26Ⅲb5/10
	168		F類2	底部	14.0	40	0.6	㊸	内外面ともに淡燈褐色。部分的に褐色と黒褐色を帯びる。	底面に砂粒圧痕あり、密である。手触りはガサガサ。	S-28Ⅲg
	169		F類2	底部	17.2	50	1.2	㊸	内外面ともに茶褐色。断面中央部は黄茶色。赤色粒・黒色鉱物混入。	器面調整は内外とも丁寧。手触りはガサガサ。	S-28Ⅲf
	170		F類2	底部	19.6	45	1.4	㊸	外面燈色。内面は褐色を帯びる。断面中央部は部分的に灰色を帯びる。白色粒混入。	底が厚い。アバタ状で手触りはツルツル。	H-27Ⅱh
	171	鍋 (A類)	F類2	底部	14.0	40	0.8	㊸	外面淡褐色。内面淡褐色。部分的に黒味をおびる。白色粒が僅かに混入。	胴部の外器面の立ち上がり部分は横位の削りとナデ。内器面は比較的丁寧な全面斜位のナデ。底面に砂粒圧痕がある。アバタ状で手触りツルツル。	S-28Ⅲh
	172		F類2	底部	14.6	35	1	㊸	外面淡褐色。内面淡褐色。白色粒・褐色粒が僅かに混入。	外器面の立ち上がりは削りとナデ、内底面はナデ。外面に指圧痕をナデ消す。底面に砂粒圧痕がある一部は密に残る。中央部は少ない。アバタ状で手触りガサガサ。底面の縁が部分的に暗灰色を帯びる。	S-28Ⅲf
173		F類2	底部	12.8	35	1.1	㊸	内底は淡茶褐色で、底面から立ち上がり部は暗黒褐色。白色粒を含む。	外器面の立ち上がりは削り後にナデ。内底面は雑なナデ。手触りはツルツル。アバタは少ない。底面から立ち上がり部分は煤けている。	S-28Ⅲf	

第17表 土器観察一覧③ e

挿図版	番号	分類			部位	口径 底器 径高 (cm)	角度	底の厚さ	胎土 分類	素地	観察事項	出土地・層位
		大	中 (器種)	小								
第72図・図版27	174		鍋	A類3	底部	— — —	70	1.0	Ⓔ	内外面ともに暗褐色。 多量の滑石混入	内外器面ともにナデで外器面の立ち上がり部は横ナデ。手触りはツルツル。	R-25Ⅲ e
	175		—	A類2	底部	— — —	30	0.6	Ⓒ	内外面ともに黄茶色。少量の赤粒・砂粒混入。	立ち上がりは削り後にナデ。焼成は硬質。手触りはガサガサ。	S-28Ⅲ g
	176		—	A類3	底部	— — —	60	0.7	Ⓒ	両面とも淡褐色で、断面外側は燈色。微粒の赤色粒・黒色鉱物を多量に混入。	外器面は斜め、内面は横のナデ。手触りはガサガサ。底部から丸みをもって立ち上がりさらに閉じ気味になる。	S-28Ⅲ b 最下
	177	Ⅱ群	—	A類2	底部	— — —	50	1.6	Ⓓ	外面茶褐色。内面燈色。赤色粒混入。	アバタ状で手触りはツルツル。	S-28Ⅲ f
	178		—	A類3	底部	— — —	40	0.9	Ⓓ	外面淡褐色。内面は褐色を帯びる。サンゴ礫混入。	内外器面ともにナデ。アバタ状で手触りはツルツル。底面端部に手ズレ？。	P-27Ⅲ e
	179		—	A類2	底部	— — —	20	1.1	Ⓓ	外面燈褐色。内面茶褐色。サンゴ礫・赤粒混入	内外器面ともにナデ。アバタ状で手触りはツルツル。	Q-26Ⅴ 上面
	180		—	A類2	底部	— — —	60	0.9	Ⓓ	内面淡い茶灰色。外面黒味を帯びた灰褐色。サンゴ礫・赤色粒混入。	器面は内外両面ともナデで仕上げ、外面はやや光沢のあるナデである。アバタ状で手触りはツルツル。	Q-26Ⅲ c

第17表 土器観察一覧③ f

挿図版	番号	分類			部位	口径 底器 径高 (cm)	胎土 分類	素地	観察事項	出土地・層位
		大	中 (器種)	小						
第64図・図版19	1		甕	—	口縁	— — —	Ⓕ	暗褐色粒・石英を含む。赤色粒は少ない。器表面は褐色。	口唇部外側に器面調整時の粘土のはみ出しがある。	Q-26Ⅲ c
	2	Ⅰ群	甕	—	口縁	— — —	Ⓕ	微粒の暗褐色粒・石英を含む。器表面は淡暗褐色。	直口状のもの。口唇外側に縁状の粘土が見られるが、表面の右側に向かって次第に低くなっている。	H-28Ⅳ
	3		甕	—	口縁	— — —	Ⓕ	暗褐色粒・石英・赤色粒を含む。器表面は暗褐色。	口唇部は中央部以外は欠損しているが、残存部から口唇部が外反する。	S-26Ⅲ d
	4		不明	—	口縁	— — —	Ⓖ	暗褐色粒・赤色粒・石英を含む。表面は燈褐色、内面は暗黒褐色。	口唇下2cmの部分のナデによって肥厚口縁状に見える。	R-27Ⅲ b

第19表 I・II群土器 胎土・層位別出土量

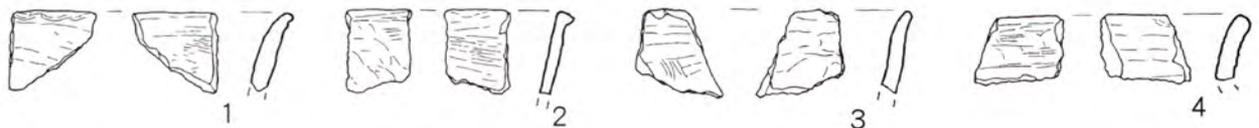
分類 層位	II群					I群			總合計	
	A	B	C	D	E	合計	F	G		合計
不	183	80	77	48	18	406		1	1	407
攪	1	8	3	9		21	1		1	22
表	13	13	15	23	8	72				72
I	24	89	7	17	1	138				138
II	132	191	125	128	24	600		1	1	601
IIIa	88	738	56	263	15	1160				1160
IIIb	625	3014	247	862	92	4840		6	6	4846
IIIc	217	1746	58	457	60	2538		12	12	2550
IIId	120	440	67	113	30	770	1	14	15	785
IIIe	235	596	98	169	34	1132		6	6	1138
III f	256	278	38	61	5	638				638
III g	2157	721	67	103	22	3070		1	1	3071
III h	665	517	3	64	7	1256				1256
IV	238	624	119	165	39	1185		6	6	1191
V	150	729	130	169	67	1245		8	8	1253
VI	57	247	35	76	29	444		4	4	448
小計	5161	10031	1145	2727	451	19515	2	59	61	19576

第20表 I群土器 胎土別出土量

分類 層位	胎土(F)				胎土(G)				合計
	口緣	胴部	底部	小計	口緣	胴部	底部	小計	
不							1	1	1
攪		1		1					1
表									
I									
II						1		1	1
IIIa									
IIIb					1	5		6	6
IIIc	1			1		11		12	12
IIId	1		1	2		12	1	13	15
IIIe						6		6	6
III f									
III g						1		1	1
III h									
IV	1			1		5		5	6
V						8		8	8
VI						3	1	4	4
小計	3	1	1	5	4	53	2	59	61

第21表 II群土器 器種別(底部)出土量

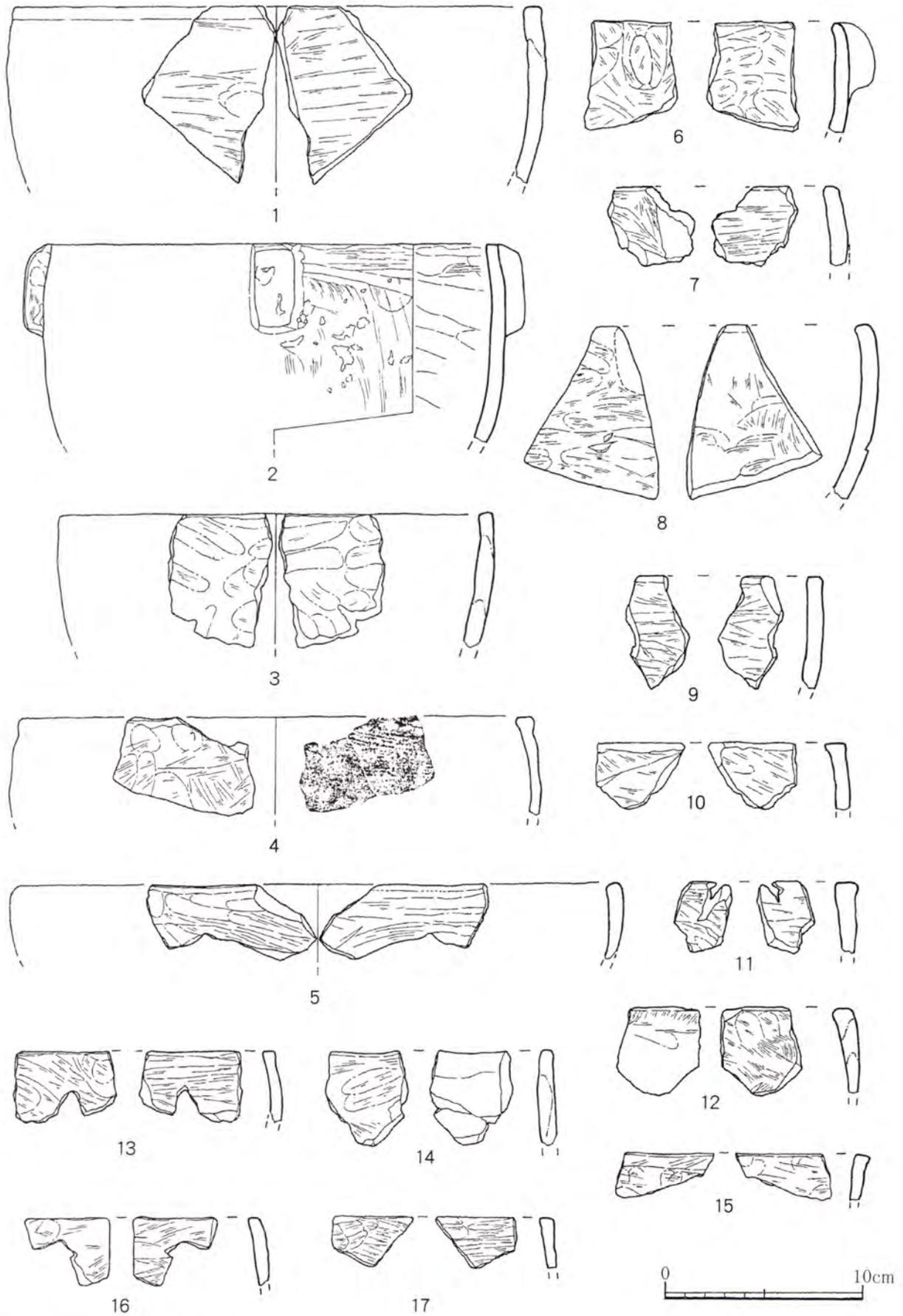
分類 層位	底部																			總合計																																			
	F類										G類				H類				I類																																				
	1					2					3					胎土					胎土				胎土																														
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	A	B	C	D		E	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E																								
不	1	1	3	1	1	7				2					1															4				4	4	65																			
攪																																																							
表			1		1	2				1																						1	1	4																					
I																																																							
II			1		1	2			1	3	1				5		1	2												3	3	5	1	1	13	13	23																		
IIIa	2			1	1	4				1					1															13	2	2		17	17	24																			
IIIb	5	2	5	4	3	19	4	6	2					12		4	3																	7	38	108																			
IIIc	1	2	7	6		16	1	2	3					6		2	1																	3	25	51																			
IIId	1	2	1	1	5				2					3		2																		2	10	29																			
IIIe	1	5	2	2	1	11	1	3	1					5		4																		1	21	45																			
III f			1			1	1	1	1	1				4			1																	1	6	18																			
III g	2					4	3	1	1					5		5	1																	2	15	79																			
III h	2					2	2	1						3		1																		1	6	47																			
IV			2	1	1	4	2							2			1																	1	7	25																			
V	1	1	4	3	2	11	1	1	1					3		3																		3	17	32																			
VI	1	1	1	3		6								1		1	1																	2	8	15																			
小計	16	13	31	22	12	94	15	22	11	4				52		24	10																	1	35	181	45	8	4	3	60	60	9	4		13	13	203	53	47	5	3	311	311	565



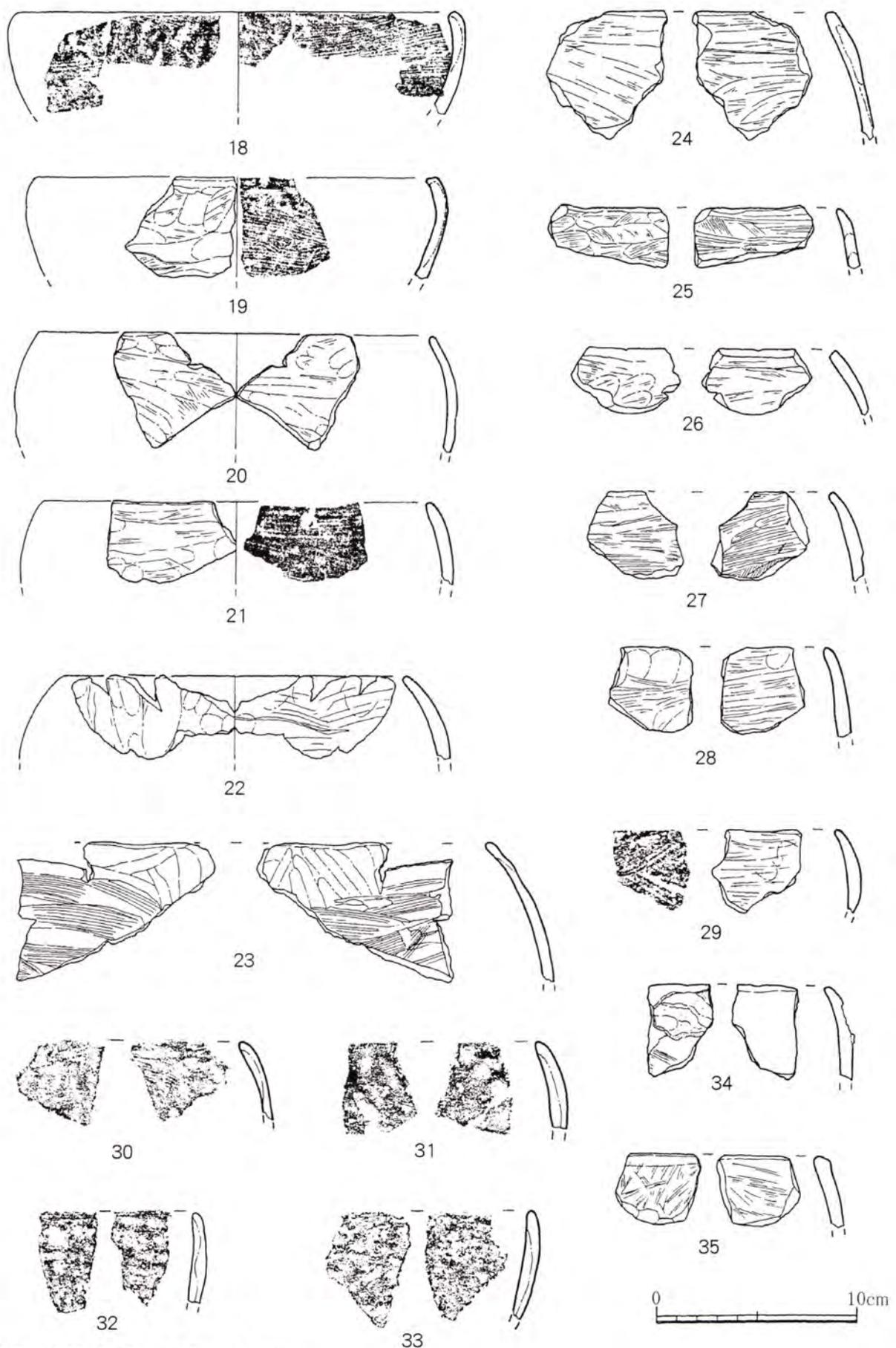
第64図 土器<1> I群 口緣部



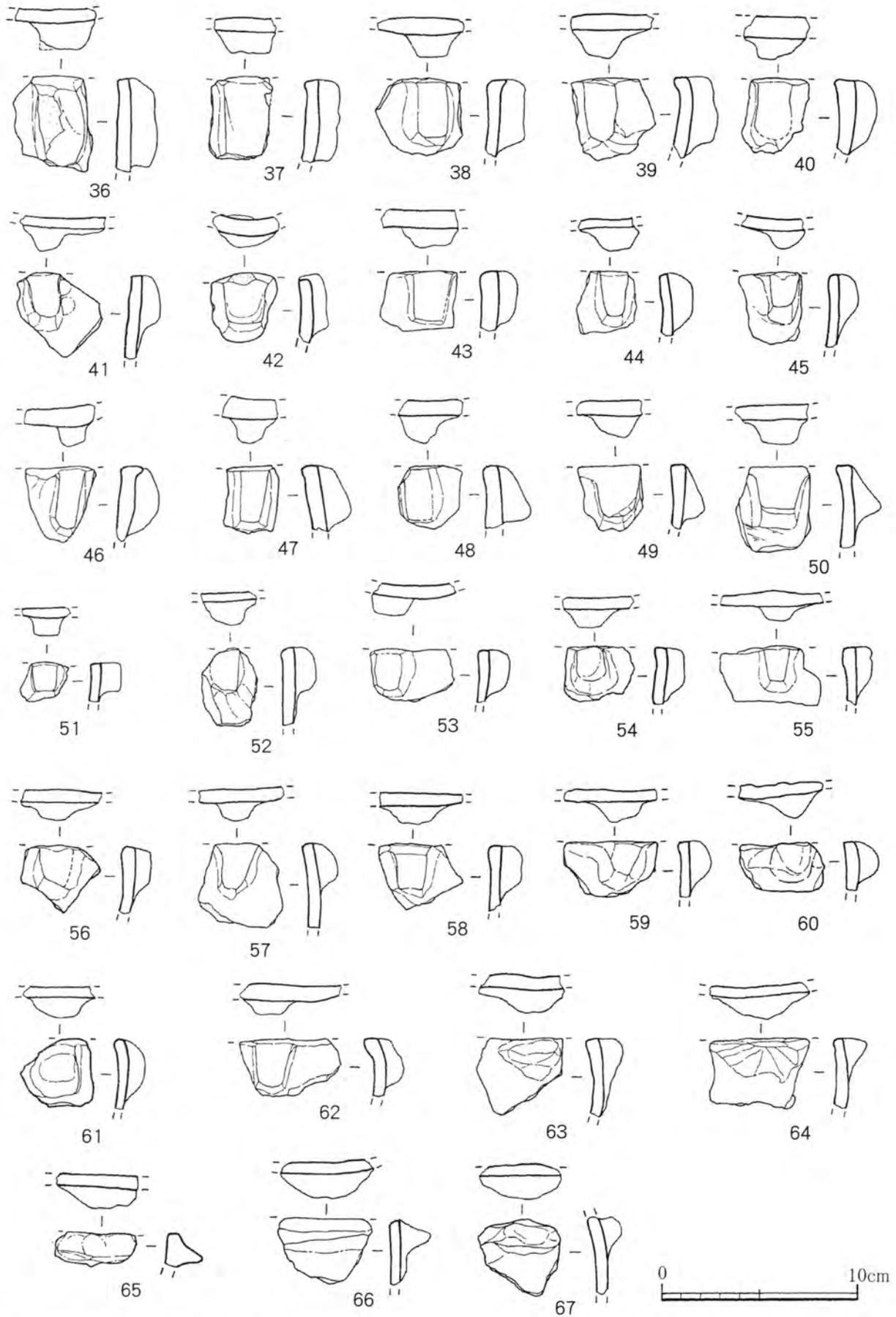
図版19 土器<1> I群 口緣部



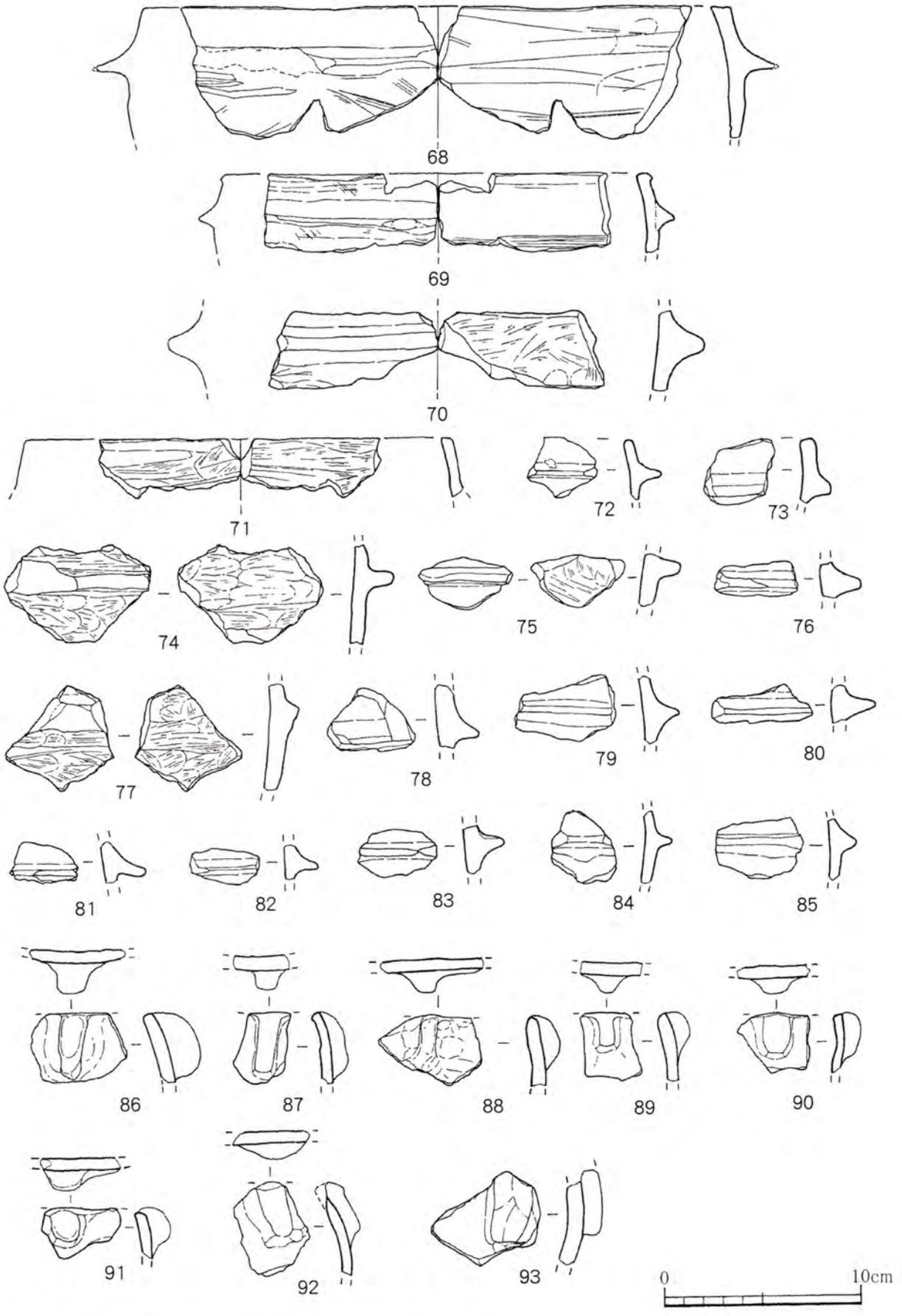
第65図 土器<2> II群 A類1



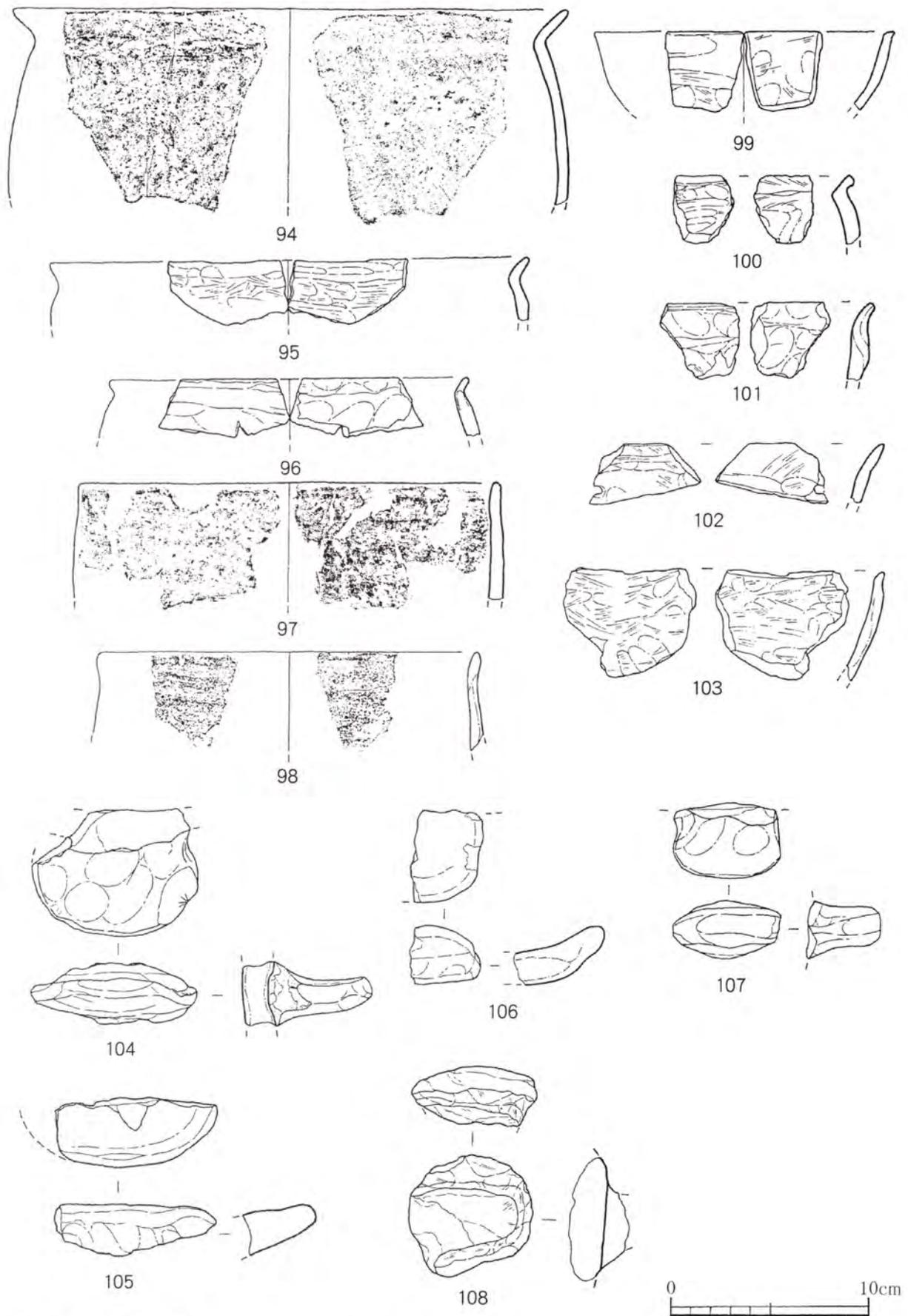
第66図 土器<3> II群 A類2



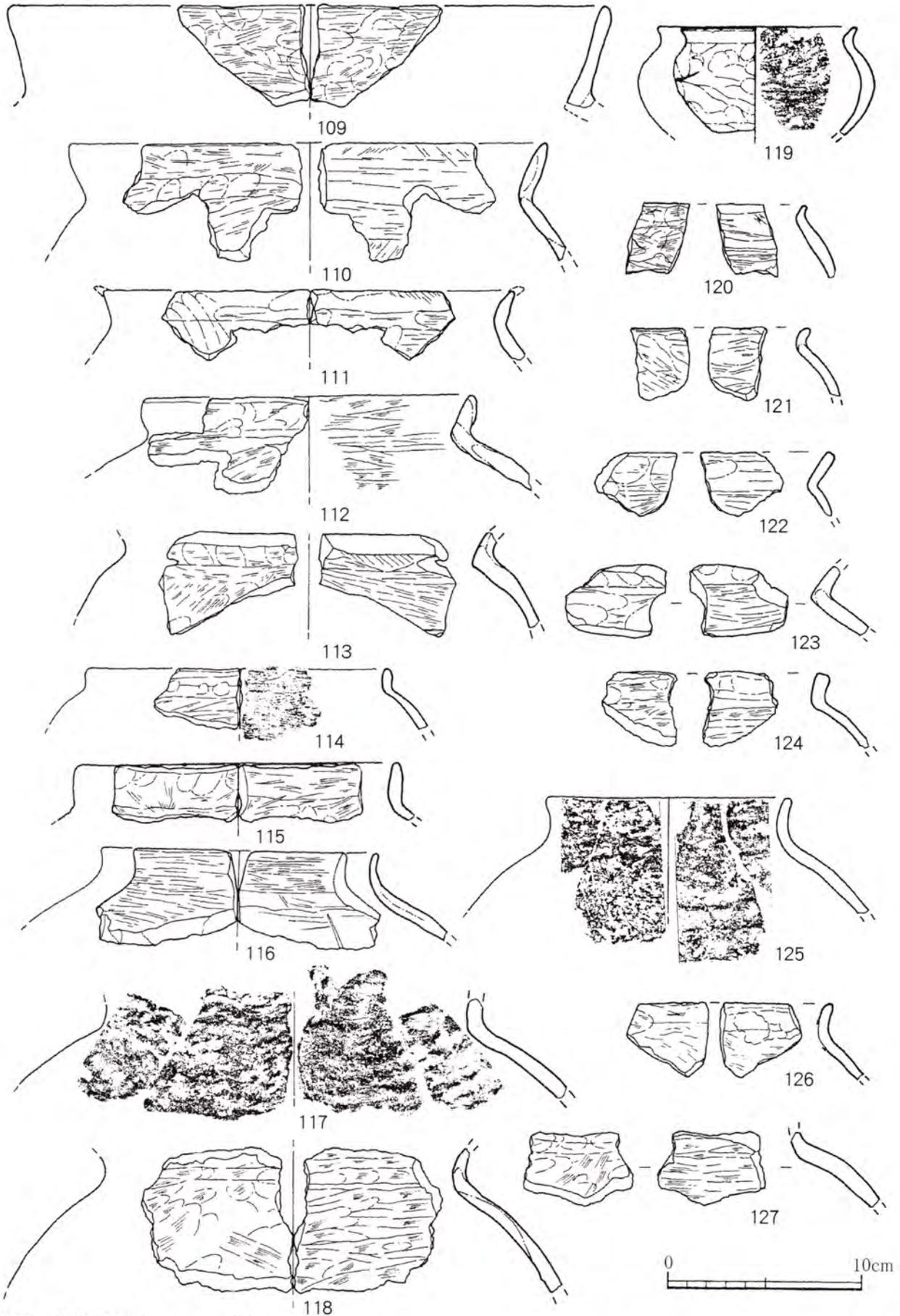
第67图 土器<4> II群 A類1 (把手)



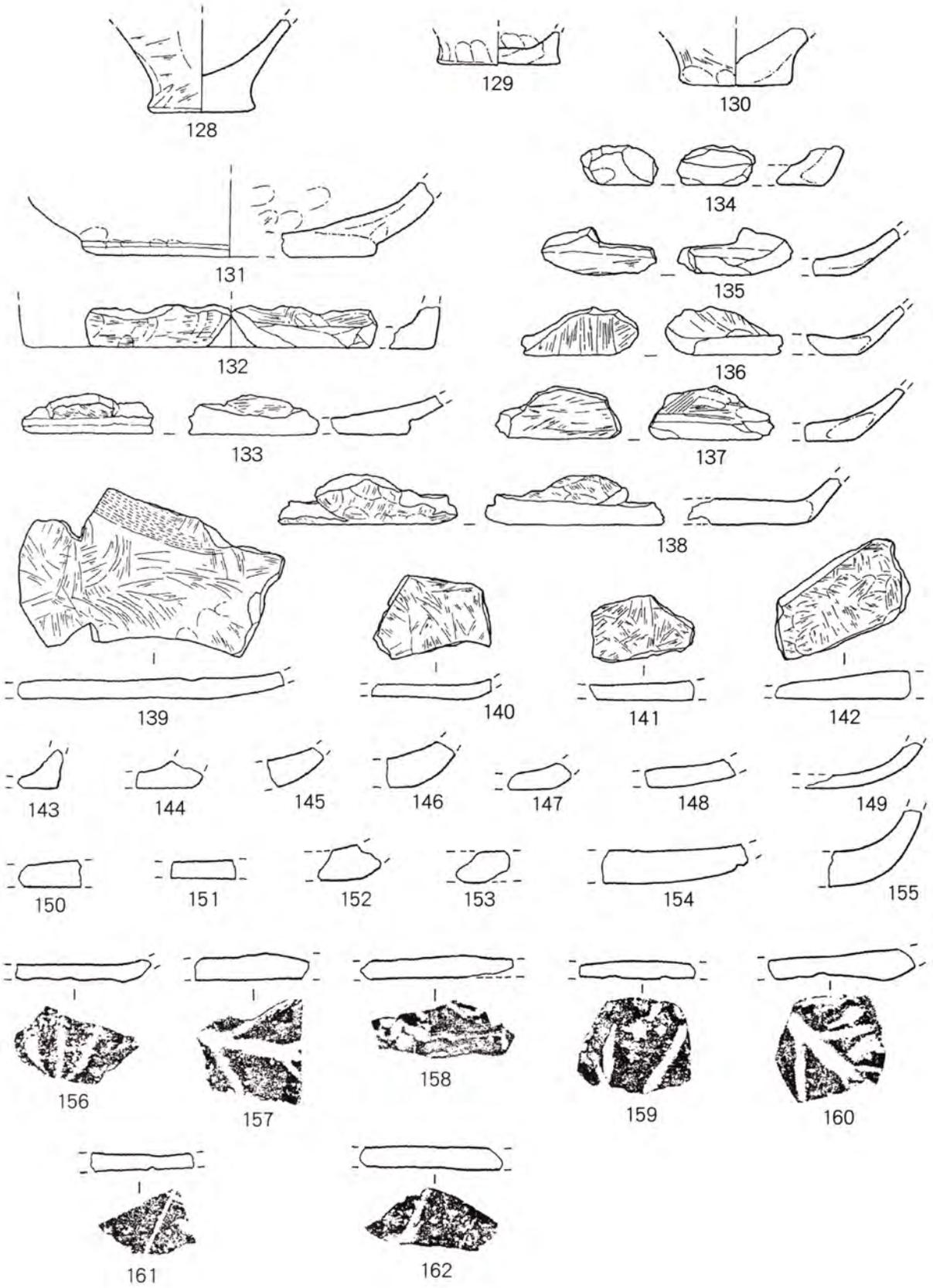
第68図 土器<5> II群 A類3 (鏢)、A類2 (把手)



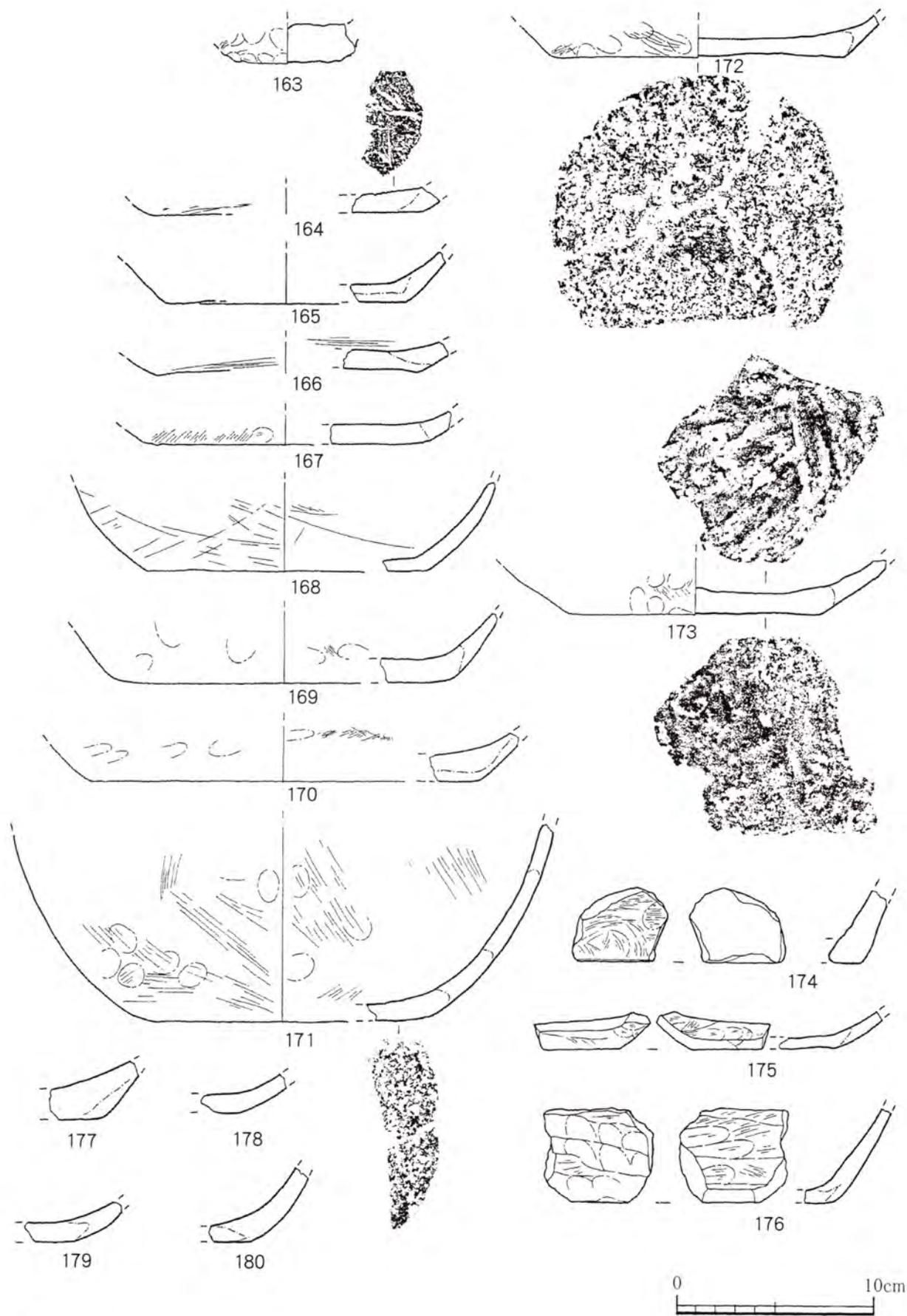
第69图 土器<6> II群 B類、D類、A類 (把手)



第70図 土器<7> II群 C類



第71图 土器<8> I群 底部、II群 底部



第72图 土器<9> II群 底部

第2節 カムイヤキ

カムイヤキ^(註1)は総数649点出土している。得られた器種は壺形・碗形・鉢形の3種類で、壺形が最も多く出土している。今回、壺形の中には把手とそれが貼り付けられる胴部片の資料が得られた。カムイヤキの例では壺の胴部中央に取り付けられている。以下、器種ごとに略述するが、壺形は部位ごとに述べる。個々の観察一覧を第26表①～④、出土量を第51表に示した。

1. 壺形

〈口縁部〉

壺形の口縁部は形状からⅠ～Ⅲ類に分類した。

Ⅰ類：口縁部がラッパ状に大きく外反するものである。口唇部形状からA～Dの4種類に細分した。

A種：口縁部内端は方形状を呈する（第73図1）。

B種：口唇部の内外端を摘み出す（第73図2・14）。

C種：口唇部の内端は丸み、外端を摘み出す（第73図3・4）。

D種：口唇部内端のみを摘み出す（第73図5・15）。

Ⅱ類：口縁部は外反するがⅠ類に比し短頸である。口縁部の形状からA～Cの3種類に細分した。

A種：口唇部内端を摘み出す（第73図6）。

B種：口唇部は丸みを帯びる（第73図9）。

C種：口唇部は平坦である（第73図16）。

Ⅲ類：口縁部は立ち上がり短頸である。（第73図10・12・13）

Ⅳ類：口縁部がやや外反する長頸壺である。（第73図7・8）

〈胴部〉

胴部は有文資料と無文資料、特殊記号、把手の貼付痕が残る資料がある。有文をA種、無文をB種、特殊記号をC種、把手の貼付痕が残る胴部片をD種とした。

A種：有文資料である。文様の施文方法からa・bの2種類に分けた。

a－波状文を施すもの（第74図17・21・23）。

b－波状文と沈線を施すもの（第73図11・第74図19・22・26）。

B種：無文資料である。器面調整からa～fの6種類に分けた。

a－外面は撫で調整。内面は格子目の叩きの後に撫で調整を施す（第74図18・20・24）。

b－外面は平行または斜位に叩き後に撫で調整を施す。内面は格子目の後に撫でまたは線状痕の調整を施す（第74図25・28・29・32・第75図36・37）。

c－外面は格子目状の叩きを施し、内面は篋削りで調整（第74図28）。

d－内外面とも格子目の叩きを施す（第74図30・31）

e－外面は綾杉状の叩き。内面は格子目の叩きを施す（第75図38）。

f－外面は線状痕、部分的に格子目が残る。内面は格子目の叩きの後に撫で調整を施す（第73図16）。

C種：特殊記号を施文するもので、外面に「×」印が施される（第75図34）。

D種：把手が貼り付く部分の胴部片で、卵形状に窪む（第75図35）。

〈把手〉

第75図33は把手の破片資料で1点出土している。前述の同図35の貼痕に合致しないことから、把手を有する壺は最少で2個体あることが判った。

〈底部〉

底部は底面からの立ち上がりが丸みを帯びながら大きく開くものと、直線的に立ち上がり開くものがある。前者をⅠ類に、後者をⅡ類とした。また、立ち上がりが不明である第75図45・第76図48・58・62は分類から除いた。

Ⅰ類：胴部下部は丸みを帯びながら大きく開く（第75図40～44）。

Ⅱ類：底面から直線的に立ち上がり開く（第73図11・第75図46・47・第76図49～57・59～62）。

2. 碗形

碗形は口縁部資料と底部資料の2点出土している。

第76図63は口縁部資料である。胴部は逆「ハ」の字状に開き口縁部へ移行する。口縁部は内側に傾ける。内面は轆轤痕が残る。口径15.2 cm。

第75図39は碗の底部資料と思われる。外底はやや上げ底を呈し、底部から立ち上がり逆「ハ」の字状に開く。

3. 鉢形

鉢形は1点出土している。

第76図64は口縁部資料である。胴部は丸み、頸部で「く」の字状に屈曲する。口縁部は肥厚する。口径は16.5 cm。

小結

本遺跡出土のカムィヤキの壺は口縁部が大きく外反するⅠ・Ⅱ類が多く、Ⅲ・Ⅳ類は少ない。口径は大まかに7.8～12.6 cmの範囲と14.8～19.4 cmの範囲の2種類に纏まり、前者は小型から中型の壺が想定され、10 cm以内に収まる第73図12～14の3点は小壺と思われる。後者はやや大きめの壺と思われる。

図上復元を試みた第73図16は中型の壺と思われる。外面は格子目の叩きが部分的にみられるが主体は線状痕で全面的に施されている。このような器面調整は今のところ類例がなく、カムィヤキ以外も考えられる^{註2}。

第75図33と35は把手に関する資料である。伊佐前原第一遺跡^{註3}などで出土例があり、形状も類似する。

碗は伊佐前原第一遺跡で出土例がある。鉢は稲福遺跡^{註4}や喜屋武グスク^{註5}出土の大型の鉢ではなく、ヒヤジョー毛遺跡^{註6}や伊佐前原第一遺跡で出土例がある小型の鉢に酷似する。

第26表① カムイヤキ観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	口 底 器 径 高 (cm)	素地	器形・文様・その他の特徴	出土地	層位
第 73 図 ・ 図 版 28	1	壺	I A	14.8 — —	外・内面とも灰褐色。 芯部は褐色。	口縁部が外反する。 内側の口唇部直下に段を有する。	R-26	Ⅲ c
	2	"	I B	18.0 — —	外・内面は灰白色。 芯部は褐色で、白色微砂粒を含む。	口縁部が外反する。	R-27 S-25	Ⅲ b Ⅲ eの2点接合
	3	"	I C	15.0 — —	外・内面は淡灰褐色。 芯部は褐色。	口縁部は外反する。	Q-27 R-26	Ⅲ b Ⅲ cの2点接合
	4	"	I C	19.8 — —	外・内面、芯部とも灰白色。	口縁部が外反する。	S-25	Ⅲ e
	5	"	I D	11.8 — —	内・外面は灰白色。 芯部は褐色。	口縁部が外反する。 内側の口唇部直下に段を有し凹線を有する。	O-24	Ⅱ
	6	"	Ⅱ A	19.4 — —	外・内面は黒褐色。 芯部は茶褐色。	口縁部は外反する。 外面は叩き痕、内面は格子目文。	N-28	Ⅲ e
	7	"	Ⅳ	17.8 — —	外・内面は灰白色。 芯部は褐色で、白色微砂粒を含む。	長頸壺。内面に格子目の叩きの後、器面調整を施している。	P-26 Q-27 R-26 S-26	Ⅲ c Ⅲ b Ⅲ c Ⅲ dの4点接合
	8	"	Ⅳ	15.2 — —	外・内面は灰白色。 芯部は褐色で、白色微砂粒を含む。	長頸壺。 内面に格子目の叩きを施した後、轆轤回転による調整を施している。	P-27	Ⅱ d
	9	"	Ⅱ B	15.6 — —	外・内面は灰褐色。 芯部は茶褐色と灰褐色で、白色微砂粒を含む。	口縁部が外反する壺。 外・内面に格子目の叩き痕。	P-26 Q-27 R-27・28 S-28	Ⅳ Ⅲ b Ⅲ b Ⅲ gの4点接合
	10	"	Ⅲ	12.6 — —	外・内面、芯部とも灰白色。 芯部の中心は褐色。	短頸壺。	グリット 不明	
	11	"	A b	— — —	外・内面は灰色。 白色微砂粒を含む。	肩部は平行沈線文を割りつけた後に、2条の波状沈線文を描く。 内面は格子目の叩き痕が残る。	R-27 R-27	Ⅲ b Ⅲ a
	12	"	Ⅲ	7.8 — —	外・内面、芯部とも灰白色で、白色鉱物と赤色鉱物を含む。	口縁部は外反する。 外側に波状文。	R-27	Ⅲ Ⅲ bの2点接合
	13	"	Ⅲ	5.8 — —	外内面は灰色。 芯部は茶褐色で、白色微砂粒を含む。	口縁部は外反する。 外面に波状文。	Q-27Ⅲ a	Ⅲ a
	14	"	I B	9.2 — —	外・内面は暗灰色。 芯部は褐色で、白色微砂粒を含む。	口縁部は外反する。 外側の口唇部直下には、段を有し凹線を有する。	R-27	Ⅲ c
	15	"	I D	12.5 — —	外・内面は灰白色。 芯部は褐色で、白色微砂粒を含む。	口縁部は外反する。	R-26	Ⅲ c
	16	"	—	11.5 — —	外・内面、芯部とも灰白色。	短頸壺。 外面に線状痕、内面に叩き痕。	Q-27	Ⅲ c
第 74 図 ・ 図 版 29	17	"	A a 胴部	— — —	外・内面は淡茶白色。 芯部も淡茶白色で、白色微砂粒を含む。	外面は波状沈線文が施され、内面は轆轤痕が認められる。	グリット 不明	—
	18	"	B a 頸部	— — —	外面は暗灰色、内面灰白色。 芯部は褐色で白色微砂粒を含む。	内面に当て具を施した後、轆轤回転による器面調整を施している。	P-26 Q-26	Ⅲ e Ⅲ dの2点接合
	19	"	A b 胴部	— — —	外・内面は青灰色。 芯部は灰褐色で、白色微砂粒と赤色粒子を含む。	外面は平行沈線文の間に2条の波状文が描かれている。内面は当て具痕が残る。	S-26	4号土壙墓出土

第26表② カムィヤキ観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	口径 底器 (cm)	素地	器形・文様・その他の特徴	出土地	層位
第74図・ 図版29	20	壺	Ba	— — 頸部	外・内面は灰色。 芯部は褐色で白色微砂粒と微量 に赤色粒子を含む。	内面に格子目の叩きを施した後、 轆轤回転による器面調整を施し ている。	S-28	Ⅲg
	21	"	Aa	— — 胴部	外面は暗灰色で内面は暗灰色。 芯部は暗灰白色で白色微砂粒を 含む。	外面は波状文で、内面は格子目 の叩きが残っている。	N-28	Ⅲe
	22	"	Ab	— — 胴部	外・内面は青白色。 芯部は灰褐色で白色微砂粒と赤 色粒子を含む。	外面は波状文で、内面は当て具痕。 先に平行線を割り付けた後、波状 文を描いている。内面には端部が弧 状となる格子目の当て具痕が施され、 轆轤によるナデ調整を施している。	Q-26 R-26 R-27 S-27	Ⅲc Ⅲb V Ⅲbの4点接合
	23	"	Aa	— — 胴部	外・内面とも灰色。 芯部は暗灰褐色で、細かい白色 微砂粒を含む。	外面に波状沈線文が描かれてい るが、ナデ消しが不徹底の為、 平行叩きが残っている。内面には 轆轤回転痕が残る。	N-28	Va
	24	"	Bb	— — 胴部	外・内面は暗灰褐色。 芯部は茶色で白色微砂粒、赤色 粒子を含む。	外面に平行状の叩き、内面には 格子目の当て具が施された後、 器面調整を施している。	S-26	DotNo.6
	25	"	Bb	— — 頸部	外面灰褐色、内面灰白色。 芯部は褐色で白色微砂粒を含む。	内面に叩きの後、轆轤による器 面調整を施している。	R-27	Ⅲb
	26	"	Ab	— — 胴部	外・内面は青白色。 芯部も青白色で白色微砂粒とわ ずかに赤色粒子を含む。	外面に沈線文と波状文が施され る。内面は格子目の当て具痕が 見られる。	R-27	Ⅲb
	27	"	Bc	— — 胴部	外・内面は灰白色。 芯部は褐色で白色微砂粒を含む。	外面に格子目の叩きの後、器面 調整が行なわれ、内面はヘラ削 りとナデ調整を施されている。	Q-26 R-27 S-28	Ⅲc V Ⅲbの3点接合
	28	"	Bb	— — 胴部	外面は黒灰色で、内面は灰白色。 芯部は褐色。	外面は平行叩き痕で、内面は平 行状の当て具痕が施される。	S-28	Ⅲb
	29	"	Bb	— — 胴部	外・内面は灰色。 芯部は暗灰褐色。	外面に平行叩き痕が施され、内 面は轆轤による回転擦痕と一部 に叩きが残る。	O-26	Ⅲe Vbの2点接合
	30	"	Bd	— — 胴部	外・内面灰白色。 芯部は褐色で、白色微砂粒を含 む。	外・内面格子目文。	S-26	3号土壙墓
	31	"	Bd	— — 胴部	外面は黒灰色、内面は暗灰褐色。 芯部は茶褐色で白色微砂粒を含 む。	外面に格子目の叩き、内面には 斜位に平行状の叩きの後、器面 調整を施している。	O-26 O-27	Ⅱ Ⅲcの2点接合
32	"	Bb	— — 胴部	外・内面は灰白色から黒灰色を 呈する。 芯部は茶色と黒灰色が見られる。	外面は平行叩き痕で、内面は格 子目の叩きの後、篋削りやナデ 調整が施される。	R-24 S-25	不明(2点) Ⅳ(3点)の5点 接合	
第75図・ 図版30	33	"		— — 把手	色調は灰色。 芯部は褐色。	壺の胴部に設けられている。把 手の残片である。	P-26	Ⅲe
	34	"	C	— — 胴部	外・内面は灰色。 芯部は暗灰色で、白色微砂粒を 含む。	表面に「X」のヘラ記号が刻ま れたものである。	Q-27	Ⅲb
	35	"	D	— — 胴部	外・内面は暗灰色。 芯部は暗灰褐色で、白色微砂粒 を含む。	把手を横位に取り付けたと思われ る部分である。胴部壁は内側に楕 円形に凹められている。内面は平 行叩きの重複痕がみられる。	P-26	Ⅳ
	36	"	Bb	— — 胴部	外・内面は暗灰色。 芯部は褐色で、白色微砂粒を含 む。	外面に平行の叩き痕、内面は叩 き痕が施され、轆轤回転による 調整痕が見られる。	R-27	Ⅲb

第26表③ カムイヤキ観察一覧

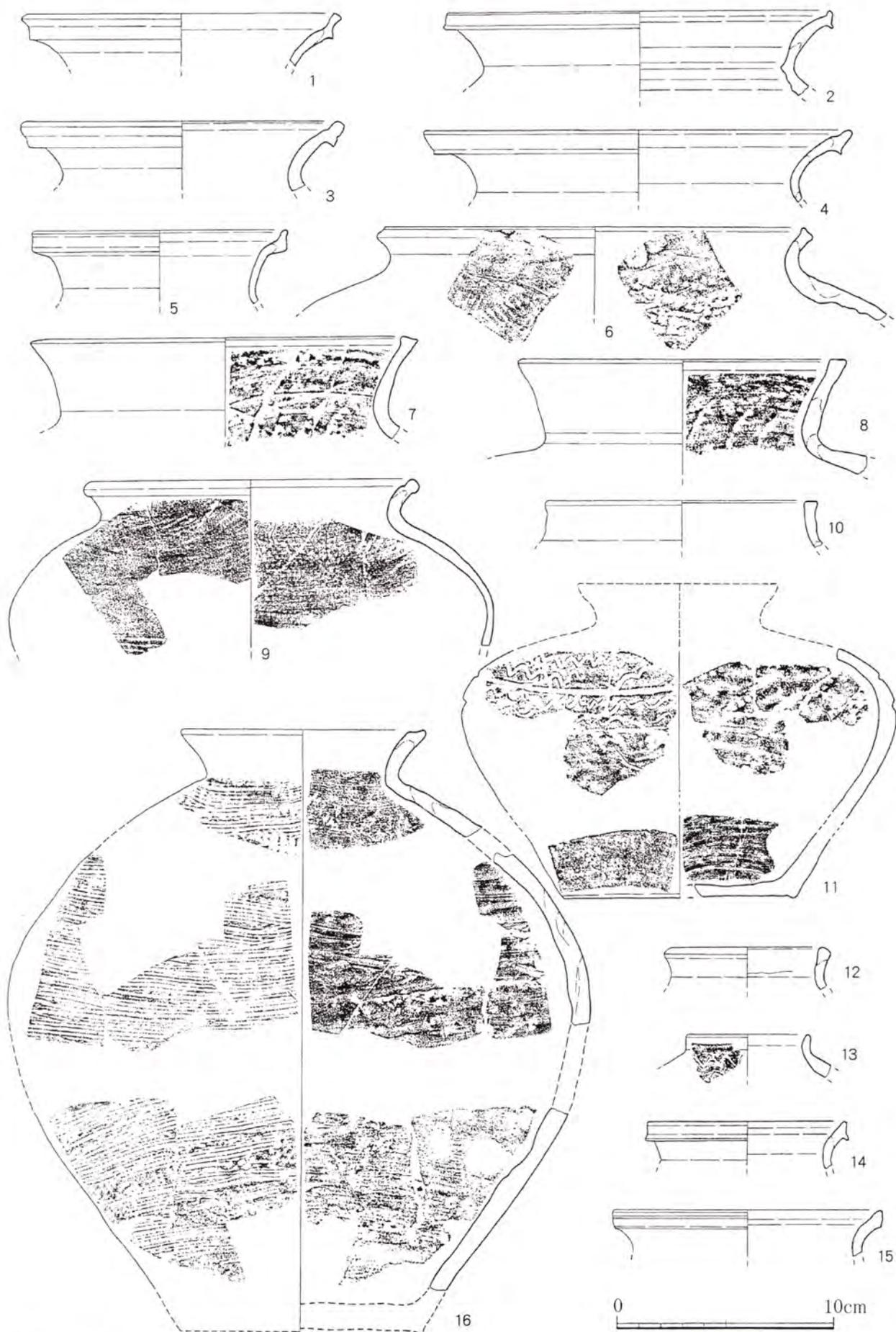
挿図 図版	番号	器種	分類	口径 底器 高 (cm)	素地	器形・文様・その他の特徴	出土地	層位
第75図・ 図版30	37	壺	Bb	— — 胴部	外・内面は青灰色。 芯部は灰色で、白色微砂粒、赤色粒子を含む。	内面に格子目の叩きを施し、器面調整を施している。	R-26 R-27 R-28 S-26	Ⅲd Ⅲb・V Ⅱ Ⅲc(2点)の6点接合
	38	"	Be	— — 胴部	外・内面は暗灰色。 芯部は灰色で褐色も見られる。	外面に綾杉状の叩き痕、内面には格子目の叩きが施され、ナデ調整を施している。	R-26	柱穴No.689
	39	碗	—	— 5.2 —	外・内面とも黒褐色。 芯部は茶褐色で白色微砂粒を含む。	上げ底。 外・内面ともナデ調整が施される。	O-27 R-27	Ⅲe Ⅲbの2点接合
	40	壺	I	— 7.0 —	外面は紫を帯びる灰褐色で、内面は淡灰白色。 芯部は茶褐色で白色微砂粒を含む。	内面に轆轤痕が残る。 底部は高台状を呈する。	R-25	IVb
	41	"	I	— 7.0 —	外・内面は黒褐色。 芯部は茶褐色。中心は黒褐色で、白色微砂粒を含む。	上げ底。	P-25	Vb
	42	"	I	— 8.6 —	外面は暗茶褐色、内面は茶色。 芯部は茶色で白色微砂粒、黒色粒子、及び赤色粒子をわずかに含む。	小壺の底部。上げ底。 内面に使用痕が残る。	N-28	Ⅲe
	43	"	I	— — —	外面は黒灰色で、外面の一部と内面は灰白色。 芯部は黒褐色で、白色鉱物を含む。	外面に平行状の叩き目、内面に格子目の叩きが施される。	S-27	Ⅲb
	44	"	I	— 14.6 —	外・内面、芯部とも暗灰白色。 芯部も暗灰白色で、器壁の厚い芯部には暗茶色も見られ、白色微砂粒を含む。	内面に横位と斜行の平行叩き痕が残るが、外・内面ともナデ調整が施される。内面に接合面痕跡が見られる。	O-27	Ⅲe
	45	"	—	— 14.0 —	外・内面は暗灰褐色。 芯部は褐色で白色微砂粒、赤色粒子を含む。	内面に叩き痕と笠状の調整痕が残る。器壁は厚い。	O-26	Ⅱ
	46	"	Ⅱ	— — 胴部	外・内面は灰白色。 芯部は褐色で、白色微砂粒、赤色粒子を含む。	外面に沈線や轆轤痕が残る。 内面には当て具痕を施し、ナデ調整を施している。	P-26	Ⅳ
47	"	Ⅱ	— 21.6 —	外・内面は灰白色。 芯部は褐色で、白色微砂粒と微量に赤色粒子を含む。	内面に当て具痕が施され、外・内面にナデ調整が行われている。 外面に沈線が見られる。	R-25 R-27	Ⅲe Ⅲbの2点接合	
第76図・ 図版31	48	"	—	— 9.0 —	外・内面は灰褐色。 芯部は褐色で細かい白色微砂粒を含む。	内底面から胴部に立ち上がる部分は笠削りにより凹みを呈する。	k-27	Ⅱ
	49	"	Ⅱ	— 10.2 —	外面は灰白色、内面は淡灰白色。 芯部は褐色で白色微砂粒を含む。	内面に明瞭な轆轤痕が残る。	Q-25	Vb
	50	"	Ⅱ	— 10.8 —	外・内面は淡灰白色。 芯部は細かい白色微砂粒を含む。	上げ底壺。 内面に接合の痕跡が見られる。	P-26	Ⅳ
	51	"	Ⅱ	— 11.0 —	外・内面は青灰色。 芯部も青灰色で、白色微砂粒、赤色粒子を含む。	内面に轆轤による擦痕が見られる。	R-27	Ⅲb
	52	"	Ⅱ	— 11.6 —	外面は暗灰色、内面は灰白色。 芯部は褐色で白色微砂粒を含む。	轆轤によるナデ仕上げが見られる。	P-26	Ⅳ
	53	"	Ⅱ	— 11.4 —	外・内面は灰白色。芯部は褐色。	内面に轆轤痕によるナデ調整を施している。	R-26	Ⅲc Ⅲeの2点接合
	54	"	Ⅱ	— 13.6 —	外・内面は灰色。 芯部は褐色。	外面に粗いナデ仕上げを施している。	N-27	Ⅱ
	55	"	Ⅱ	— 16.8 —	外面は暗灰褐色で、内面は淡灰白色。 芯部は褐色の中に暗灰褐色が見られ、白色微砂粒を含む。	外・内面とも叩きの後、轆轤回転による調整を施している。	O-26	Ⅱ

第26表④ カムイヤキ観察一覧

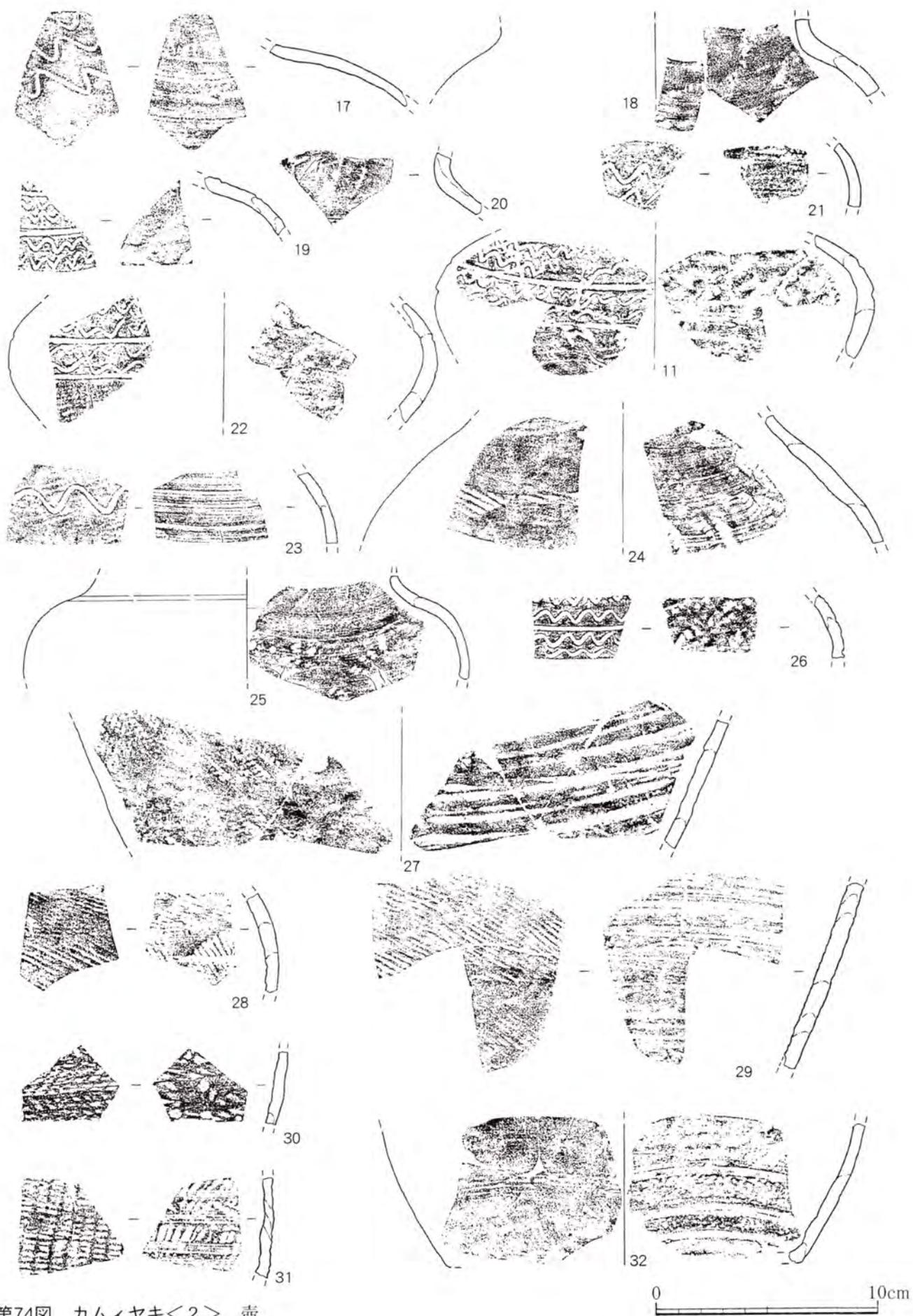
挿図 図版	番号	器種	分類	口径 底器 (cm)	径高 (cm)	素地	器形・文様・その他の特徴	出土地	層位
第76 図・ 図版 31	56	"	Ⅱ	— 底 部 —	— —	外面は暗灰色。 芯部は茶色で中心に暗灰色で白色微砂粒を含む。	外・内面に叩きが施されているが、ナデ調整によって内面が消えている。	O-26	Ⅲ
	57	"	Ⅱ	— 底 部 —	— —	外面は暗灰色、内面は灰白色。 芯部は灰褐色で、白色微砂粒を含む。	外・内面に叩きの後、器面調整を施している。	R-24	Vb
	58	"	—	— 底 部 —	— —	外面は黒褐色、内面は灰白色。 芯部は褐色で中心部分は暗灰色で白色微砂粒を含む。	底面部分。 内底面から胴部に立ち上がる部分は篋削りによる凹みを呈する。	S-26	4号土壙墓覆土内 柱穴No.2155
	59	"	Ⅱ	— 18.4 —	— —	外・内面は灰白色。芯部は褐色だが、器壁の厚い芯部では灰色も見られる。白色微砂粒を含む。	外・内面に格子状の叩き目を施し、その後、器面調整を施している。	P-26 R-25 S-25 S-26	Ⅳ(2点) Ⅳ・Ⅳb Ⅲd Ⅳ(2点)の7点接合
	60	"	Ⅱ	— 底 部 —	— —	外面は暗灰褐色、内面は黒味を帯びる茶褐色。 芯部は茶褐色で、極細い白色微砂粒を含む。	内面に格子目の叩きを施している。	R-27	Ⅲb
	61	"	Ⅱ	— 底 部 —	— —	外面は暗灰色で、内面は暗灰白色。 芯部は茶色で、白色微砂粒を含む。	内面に斜位の叩きの後、篋削りを施している。	P-26	Ⅲe
	62	"	—	— 12.6 —	— —	外・内面は淡灰褐色。 芯部は褐色で、中心は灰褐色。	上げ底。 内底に回転擦痕が見られる。	グリット 不明	
	63	碗	—	— 15.2 —	— —	外・内面は黒褐色。 芯部は褐色で白色微砂粒を含む。	内溝口縁。 外・内面に叩き痕、内面には轆轤調整痕	P-26 Q-27 R-26 S-25	Ⅳ Ⅴ Ⅴ Ⅳbの4点接合
64	鉢	—	— 16.5 —	— —	外・内面は淡灰褐色。 芯部は茶褐色。	内面に轆轤痕。	Q-26	柱穴内	

〈註文献〉

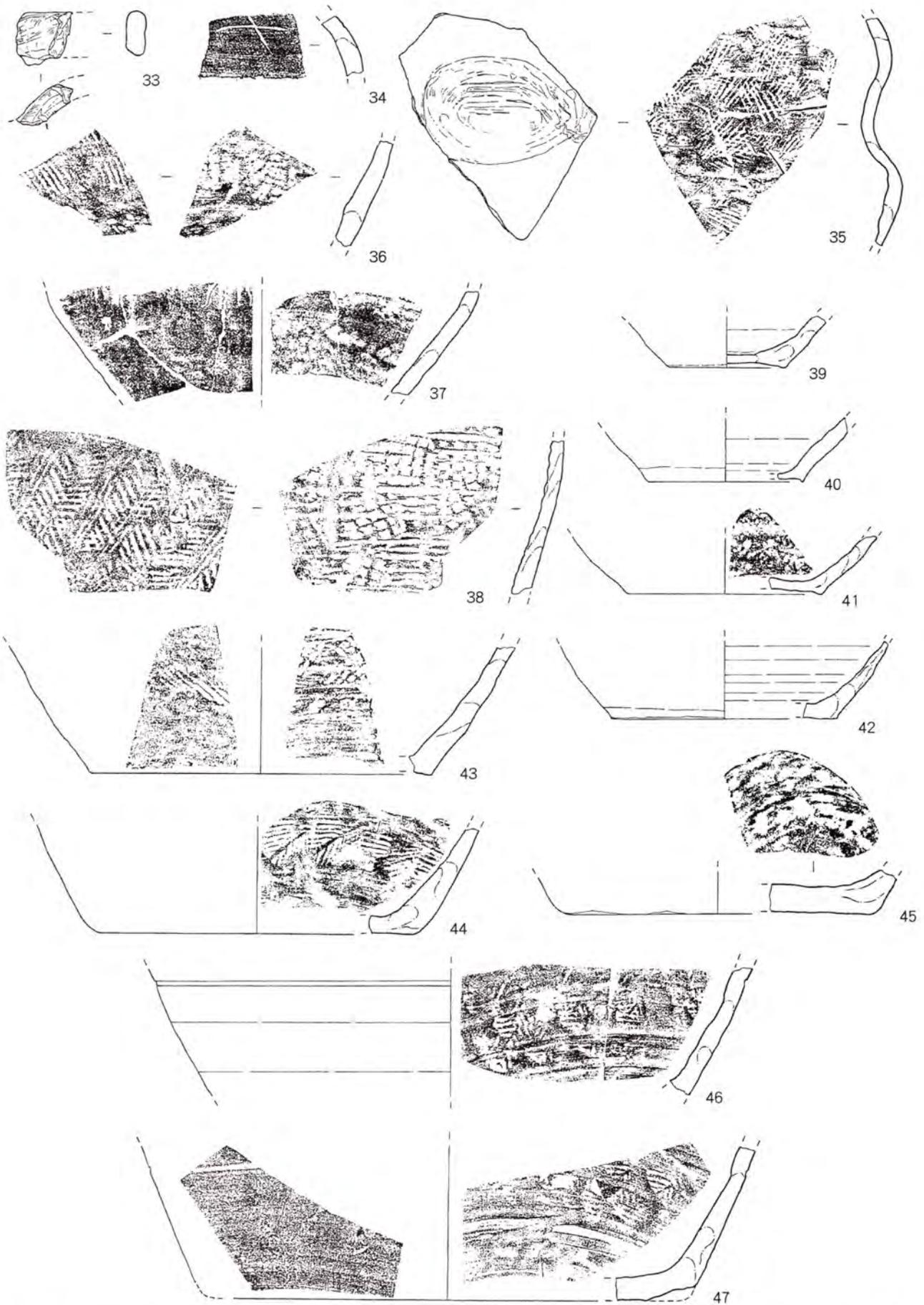
- 註1：本資料は類須恵器または南島須恵器と呼称されていたものである。今回、器形・器色・素地・器面調整などの特徴から徳之島伊仙町のカムイヤキ窯で焼かれた資料と酷似することから「カムイヤキ」と呼称する。
- 註2：整理段階ではカムイヤキに含めていたが、器面調整で大きく異なることから他の窯の可能性があるのでないかという疑問が生じた。たまたま、伊仙町の四本氏と会う機会があり、訊ねたところカムイヤキにそのような特徴を有する資料は無いということであった。また、同町の新里氏からは熊本県の下り山窯跡群の可能性があるとご教示いただいた。記して両氏に謝意を申し上げる。
- 註3：鶴元寿光・當銘清乃・土肥直美 他 2001「伊佐前原第一遺跡—宜野湾北中城線（伊佐～普天間）道路改築工事に伴う緊急発掘調査報告書（Ⅲ）」『沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第4集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 註4：當眞嗣一・大城慧・比嘉春美 1983「稲福遺跡発掘調査報告書（上御願地区）」『沖縄県文化財調査報告書』第50集 沖縄県教育委員会
- 註5：座間味政光・大城剛 1988「喜屋武グスク—公園計画に係る遺跡詳細範囲確認調査概報—」 具志川市教育委員会
- 註6：金武正紀・城間千栄子 1994「ヒヤジョー毛遺跡—那覇新都心土地区画整理に伴う緊急発掘調査報告Ⅰ—」『那覇市文化財調査報告書』第26集 那覇市教育委員会



第73図 カムイヤキ<1> 壺

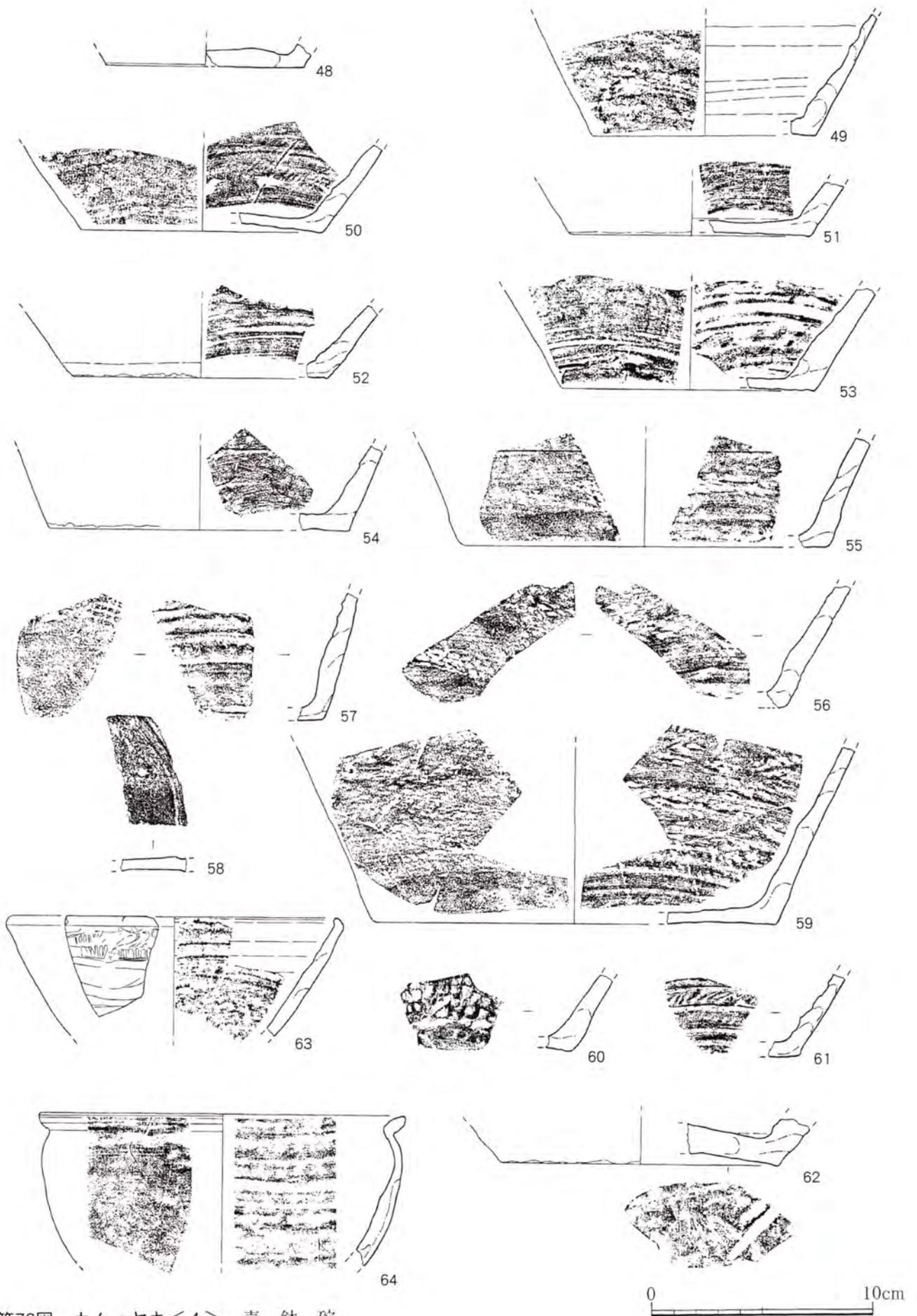


第74図 カムィヤキ<2> 壺



第75図 カムイヤキ<3> 壺

0 10cm



第76図 カムイヤキ<4> 壺、鉢、碗

第3節 白磁

白磁は総数384点出土している。確認された器種は碗・皿・杯・壺の4種が得られ、碗が最も多く出土し、次いで、皿・杯と続く。壺は1点出土しているが、小破片のためここでは図化せず割愛した。

白磁は器種別に分類概念を述べ、個々の詳細は第27表①～⑥に観察一覧、第52表に出土量を提示した。

1. 碗

白磁碗は口縁部の形態などから玉縁口縁碗・外反口縁碗・内彎口縁碗・直口口縁碗の4種類に分類した。

I類：玉縁口縁碗

口縁部を玉縁状に肥厚する碗で、胴部がわずかに脹らみ口縁部は逆「ハ」の字状に開く。底部は高台割りが浅いのと深いのがある。また、高台は「ハ」の字状に開く。口縁部の肥厚形態からA～Cの3種類に細分した。

A種：玉縁の肥厚は薄く、肥厚帯幅が小さい（第77図1・2・10・11）。

B種：玉縁の肥厚は薄く、肥厚帯幅は大きい（第77図3・15）。

C種：玉縁の肥厚は厚く、肥厚帯幅は大きい。肥厚帯下部の成形からa・bの2種類に細分した。

a－肥厚帯下端を篋で削り取る（第77図4・6・7・13・14・17～22）。

b－肥厚帯を篋削りで成形する（第77図5・8・9・12・16・23・24）。

〈底部〉

底部は高台の成形からA・Bの2種類に分けた。

A種：高台は方形状を呈する（第77図25・26・第78図29・38）。

B種：高台は「ハ」の字状に開き畳付内端がたたみにつく。（第77図27・第78図28・30～32）。

II類：外反口縁碗

口縁部の形態や文様から櫛描文碗・端反碗・無文外反碗の3種類に分けられる。それぞれをA～Cの3種類に細分した。

A種：櫛描文碗。外面に櫛描文を施す（第78図34～36）。

B種：端反碗。無文である。底部は高台内が深く畳付幅が小さい（第78図37・33）。

C種：無文外反碗。口縁形態や施釉方法からa～cの3種類に分けた。

a－薄手の外反碗で、口唇部の釉を掻き取り露胎とする「口禿碗」である。底部は高台を持つ。（第78図39～46）。

b－薄手で大きく外反する（第80図70・71）

c－口縁下部で窄まり外反する厚手の碗。内底は印花文を圏線で囲むものと圏線のみものものがある（第79図58～67・第80図68・69）。

III類：内彎口縁碗

口縁部が内彎する碗で、ビロースクタイプと称されている^(註4)本資料は口唇部が丸みを持ち、

口唇内端が内向する特徴からピロースタイプⅡと思われる。底部は高台内が浅く、「ハ」の字状に開く（第78図47～50・第79図51・52）。

Ⅳ類：直口口縁碗

薄手の碗である（第79図53～57図）。

〈碗底部〉

底部は高台の形状からⅠ～Ⅴの4種類に分類した。

Ⅰ類：高台は方形状で「ハ」の字状に開き畳付内端が畳につく（第80図72・73・76）。

Ⅱ類：形状はⅠ類に類似するが高台外端を面取りする（第80図75・77）。

Ⅲ類：高台は方形状で外端を面取りする（第80図74）。

Ⅳ類：高台は方形状で内外端を面取りする（第80図78）。

Ⅴ類：高台は方形状である（第80図79）。

2. 皿

白磁皿は口縁部の形態から外反口縁皿・直口口縁皿・内彎口縁皿の3種類に分類した。

Ⅰ類：外反口縁皿

口唇部の特徴によりA・Bの2種類に細分した。

A種：口唇部の釉を掻き取り露胎とする「口禿口縁皿」である（第80図80～82）。

B種：口唇部は丸みを帯びる（第81図88）。

Ⅱ類：直口口縁皿

口唇部の釉を掻き取り露胎とする「口禿口縁皿」である。（第80図83）。

Ⅲ類：内彎口縁皿

内彎する浅い皿で、高台に4ヶ所抉りを入れる。（第80図84～86・第81図87）。

〈皿底部〉

底部は高台の形状からⅠ～Ⅴの5種類に分類した。

Ⅰ類：高台は方形状で「ハ」の字状に開く（第81図89・90・93）。

Ⅱ類：高台は内外端から面取りする（第81図91）。

Ⅲ類：高台は三角形状で畳付幅が狭い（第81図94・95・96）。

Ⅳ類：高台は方形状である（第81図92）。

Ⅴ類：高台は無く「碁笥底」となる（第81図97）。

3. 杯

小杯と思われる底部資料である。高台は尖る。（第81図98）

小結

本遺跡出土の白磁は12世紀代の玉縁口縁碗^(註5)・櫛描文碗・端反碗・直口口縁碗、13世紀代のピロースタイプ碗・口禿碗・口禿皿など、古手の資料の種類がまとまって見られるが、端反碗

は第Ⅱ層・Ⅲ層bからの出土であった。今回、12世紀代の玉縁口縁碗・櫛描文碗・直口口縁碗が第Ⅵ層より出土している。これと同様な報告例はヒヤジョー毛遺跡^{註1}がある。その中の櫛描文碗であるがヒヤジョー毛遺跡^{註2}や佐敷グスク^{註3}などで出土例があるが少なく、それぞれ施文方法に違いが見られる。窯の違いか若しくは数種の施文方法が存在するのか今のところ不明である。また、玉縁口縁碗の出土が多いのは興味深い。13世紀代では口禿碗と口禿皿のセットが見られた。次に厚手の外反口縁碗（Ⅱ類C種c）や内彎皿が出土している。14世紀後半から15世紀である。

第27表① 白磁観察一覧

挿図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土地	層位
第77図・図版32	1	玉縁口縁碗	I A	14.8 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	有り	玉縁口縁碗。	N-25	V
	2		"	13.2 — —	"	淡灰緑色	"	玉縁上に釉垂れが見られる。	O-26	Ⅲ e
	3		I B	15.8 — —	"	淡灰白色	"	玉縁口縁碗。	R-24 R-28 N-27	Ⅱg Ⅲc Vb
	4		I C a	16.2 — —	"	"	無し	"	R-25	Ⅳ
	5		I C b	17.8 — —	"	灰白色 両面失透釉	"	肥厚帯下部を丁寧に調整する。	P-27	Ⅲb
	6		I C a	17.4 — —	淡黄白色 微粒子	淡黄白色	有り	肥厚帯下部を削り取り窪みを有する。	P-26 Q-26 R-27	Ⅳ Ⅲc V
	7		"	16.2 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色 両面ともに 失透釉	無し	外面口縁直下に釉垂れの跡が見られる。	R-26	Ⅲc
	8		I C b	15.4 — —	"	淡灰白色	"	肥厚帯下部を丁寧に調整する。	P-27	Ⅲb
	9		"	16.2 — —	"	灰緑色 両面ともに 透明釉	"	"	P-26 P-27 Q-27 R-28	Ⅳ Ⅲ Ⅲ a Ⅲ a
	10		I A	口縁部 — —	"	淡灰白色	"	玉縁直下に釉垂れが見られる。	N-27	Ⅳ
	11		"	口縁部 — —	"	淡灰白色 両面ともに 透明釉	"	玉縁口縁碗。	O-26	Ⅲ
	12		I C b	口縁部 — —	灰白色 微粒子	灰白色	荒い部分が見られる	"	O-24	V
	13		I C a	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色 両面ともに 透明釉	無し	玉縁の肥厚は折り曲げて造っている。	S-28	Ⅲ b
	14		"	口縁部 — —	淡黄白色 微粒子	淡黄白色	両面に見られる。	玉縁口縁碗。	P-27	Ⅲ a
	15		I B	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色 両面ともに 透明釉	貫入は細かい	玉縁の肥厚は折り曲げて造っている。広東系 ^{註1} 。	Q-27 V	V

第27表② 白磁観察一覧

挿図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位	
第77図・図版32	16	玉縁口縁碗	I C b	口縁部 — —	灰白色 微粒子	灰白色 両面ともに 透明釉	無し	玉縁口縁碗。	S-25	Ⅲ b	
	17		I C a	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	無し	肥厚帯下部を削り取り窪みを有する。	P-26	Ⅳ	
	18		"	口縁部 — —	淡黄白色 微粒子	淡黄白色	両面に みられる。	"	玉縁の肥厚部分にアバタ状の気泡が見られる。	Q-26	Ⅲ c
	19		"	口縁部 — —	"	"	無し	"	肥厚部中央に釉垂れが見られる。	R-26	Ⅲ c
	20		"	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	無し	"	"	S-28	Ⅲ h
	21		"	口縁部 — —	"	"	無し	"	"	Q-27 R-26	Ⅲ b Ⅲ b
	22		I C a	14.9 — —	灰白色 微粒子	灰白色	内面は 細かい	"	玉縁中央部に釉垂れが見られる。	Q-25 Q-26	Ⅲ b Ⅲ c
	23		I C b	15.5 — —	"	灰白色 両面に失透 釉	無し	無し	肥厚帯下部を丁寧に調整する。	R-26	Ⅲ c
	24		"	16.0 — —	淡黄白色 微粒子	黄白色	貫入は 細かい	玉縁の肥厚が大きい。 外面にアバタ状の気泡が見られる。	Q-27 S-28	柱穴 Ⅲ h	
	25		A	— 6.6 —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	無し	底部。	R-27	Ⅲ b	
	26		"	— 6.4 —	"	淡灰白色 内面に透明 釉	貫入は 細かい	底部。	S-27	Ⅲ b	
	27		B	— 6.6 —	淡黄白色 微粒子	淡灰黄色 内面に透明 釉	無し	底部。	R-27	Ⅲ b	
	第78図・図版33		28	"	— 6.9 —	"	黄白色	内面は 細かい	高台から高台脇にかけてカンナ目が廻っている。内底に圏線。	R-28	Ⅲ b
			29	A	— 6.6 —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	有り	内底に圏線が廻る。	R-27	Ⅵ b
30		B	— 6.6 —	淡黄白色 微粒子	淡黄白色	貫入は 細かい	玉縁碗底部。 高台脇に轆轤痕が残る。 内底に圏線が廻る。	Q-27 Q-27 R-26	Ⅲ b Ⅳ Ⅲ c		
31		"	— 7.0 —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	内底に陰圏線。	P-26 S-27	V b Ⅲ		
32		"	— 7.4 —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	"	内底に圏線が廻る。	O-27	Ⅱ		
33		端反碗	— 5.6 —	白色 微粒子	淡灰白色 高台外面ま で施す	"	底部。	S-27	Ⅲ b		
34		櫛描文碗	Ⅱ A	16.8 — —	灰白色 微粒子	灰緑色	"	外面は一本櫛で描かれている。 内面上位に二本の圏線が廻る。	P-26 Q-25 Q-27 R-25	Ⅵ b V b Ⅲ b Ⅳ b	

第27表③ 白磁観察一覧

挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位	
第78図・ 図版33	35	櫛描文碗	"	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	乳白色	無し	外面は一本櫛で描かれている。	Q-26	Ⅲ c	
	36		"	16.8 — —	"	淡灰白色	"	外面は一本櫛によって描かれている。内面上位には圏線が廻る。	S-28	柱穴内 Ⅲ b	
	37	端反碗	Ⅱ B	口縁部 — —	"	乳白色 両面ともに 透明釉	"	端反碗。	O-25	Ⅱ	
	38	口縁部 玉緑 碗	A	— 5.8 —	"	淡灰白色 外面は透明 釉	"	玉緑碗底部。	N-28	不明	
	39	口禿碗	Ⅱ C a	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡青白色 両面ともに 失透釉	"	口禿口縁碗。 口縁部はやや外反気味。	P-26 Q-27	Ⅲ e Ⅲ b	
	40		"	14.2 — —	"	淡灰白色	"	口禿口縁碗。 口唇の釉の掻き取りは外面より内面の方が幅が広い。	R-26	V	
	41		"	14.0 — —	"	"	"	口禿口縁碗。 口唇の釉の掻き取りは外面より内面の方が幅が広い。	S-28	Ⅲ g	
	42		"	口縁部 — —	"	淡灰白色 両面ともに 失透釉	"	口禿口縁碗。	O-26	V	
	43		Ⅱ C a	口縁部 — —	灰色微粒 子	灰緑色	貫入は 荒い	口禿口縁碗。	S-28	Ⅱ	
	44		"	— 底部 —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	無し	内底に圏線が確認できる。	R-27	V	
	45		"	— 5.2 —	白色微粒 子	"	"	畳付内端が畳につく。	O-26	Ⅱ	
	46		"	— 5.2 —	淡灰白色 微粒子	"	無し	"	Q-26	Ⅲ c	
	47		内彎口縁碗	Ⅲ	口縁部 — —	"	淡灰白色 腰まで施釉	"	ピロースタイプⅡ。	R-27	Ⅲ b
	48			"	口縁部 — —	灰白色 黒色鉱物 含む	灰白色	"	口唇部は尖りぎみ。	S-27	Ⅲ b
49	"	口縁部 — —		"	"	"	ピロースタイプⅡ。	S-28	Ⅲ b		
50	"	口縁部 — —		淡灰白色 微粒子	淡青白色	"	"	不明	不明		
51	"	— 16.0 —		"	"	"	"	Q-26	Ⅳ		
第79図・ 図版34	52	"	— 16.8 —	"	淡灰白色	有り	"	O-26	Ⅱ		
	53	"	— 6.0 —	"	淡灰白色 両面ともに 透明釉	無し	高台脇から外底まで露胎。	R-26	V		

第27表④ 白磁観察一覧

挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位
第79図・ 図版34	54	直口口縁碗	IV	13.4 — —	淡黄白色 微粒子	淡黄白色	貫入は 細かい	薄手の直口口縁碗。	M-27 M-28	IV VI a
	55		"	口縁部 — —	灰白色 微粒子	淡灰白色	"	外面に轆轤痕が残る。	Q-27	III b
	56		"	口縁部 — —	淡黄白色 微粒子	黄白色	"	薄手の直口碗。	R-24	VI
	57		"	口縁部 — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	外面に轆轤痕が残る。 直口口縁碗。	Q-27 R-27	III b III b
	58	外反口縁碗	II C c	16.5 6.0 6.5	"	"	"	内底は印花文を圏線で囲む。	N-28 O-27 Q-26 Q-27 R-27	III c II III b・III c III a・III b・ III c V・柱穴内 III a
	59		"	口縁部 — —	"	灰白色 外面腰部ま で施釉	"	外反口縁碗。	P-25 Q-260 Q-27	II III a III b
	60		"	口縁部 — —	"	"	"	"	Q-26 R-27 S-26	III a III b III b
	61		"	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	"	"	S-27	III d
	62		"	口縁部 — —	灰白色 微粒子	灰緑色 両面ともに 透明釉	"	"	Q-27	III b
	63		"	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰青色 両面ともに 透明釉	貫入は 細かい	"	R-28 S-27	III a II c
	64		II C c	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	有り	"	S-26	III a
	65		"	15.6 — —	灰白色 微粒子	灰白色	無し	"	Q-27	III a
	66		"	口縁部 — —	"	"	"	"	R-27	III c
	67		"	16.6 — —	"	灰緑色 両面ともに 透明釉	"	外反口縁碗。	Q-26 Q-27	III c III b
第80図・ 図版35	68	"	口縁部 — —	"	灰白色	"	"	R-26	III c	
	69	"	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色 両面ともに 透明釉	"	"	Q-27	III a	
	70	II C b	口縁部 — —	"	淡灰白色	"	薄手の外反口縁碗。	Q-27	III c	
	71	"	口縁部 — —	乳白色 微粒子	乳白色	"	"	不明	不明	

第27表⑤ 白磁観察一覧

挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位	
第80図・ 図版35	72	碗 底部	I	— 5.6 —	淡灰白色 微粒子	灰白色 高台脇から 内面にかけて 失透釉	無し	内底に圈線が廻る。	O-25 O-26	II II	
	73		"	— 5.3 —	"	淡灰白色	"	高台脇から外底にかけて露胎。	Q-26 R-28 S-25	III d III e	
	74		II	— 5.7 —	乳白色 微粒子	乳白色	貫入は 細かい	内底は蛇の目釉剥ぎ	不明	不明	
	75		"	— 5.4 —	淡黄白色 微粒子	無し	不明	内底に「堂」の文字。 内外底は露胎。広東系。	R-27	III b	
	76		I	— 5.3 —	淡灰白色 微粒子	灰白色 高台脇から 内面にかけて 失透釉	無し	内底に印花文。 外面腰部から外底にかけて露胎。	Q-27	III b	
	77		II	— 7.4 —	白色微粒 子	淡灰白色	"	内底は蛇の目釉剥ぎを行った後、中央部に再度釉を掛ける。	S-26	VI上面	
	78		III	— 5.8 —	"	淡青白色 外面胴部下 から内面に 施釉	貫入は 細かい	内底は蛇の目釉剥ぎ	S-25 R-25 R-26	III c III c 地山	
	79		IV	— 5.7 —	乳白色 微粒子	乳白色	貫入は 細かい	高台際にカンナ痕有り。	不明	不明	
	80		口 禿皿	I A	11.8 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	無し	口唇部及び口縁内面の釉を剥ぐ。	Q-27	III b
	81			"	口縁部 — —	灰白色 微粒子	"	"	"	R-26	III c
82	"	口縁部 — —		白色微粒 子	"	"	口縁部内面上部から外面上面の釉を剥ぎ取る。	Q-27	II		
83	II	13.6 — —		"	透明釉	"	"	S-28	III h		
84	III	8.0 4.4 2.4		乳白色 微粒子	乳白色	"	見込みに重ね焼き痕が残る。	Q-27	III b		
第81図・ 図版36	85	内 灣 口 縁 皿	"	9.8 4.2 2.6	淡灰白色 微粒子	透明釉	"	"	R-25	III c	
	86		"	7.6 3.6 1.7	白色微粒 子	白色釉	"	全面施釉。	N-26	II	
	87		"	8.8 3.8 2.0	淡灰白色 微粒子	濁灰白色	"	見込みに重ね焼きの目跡が残る。	O-27 O-27 P-26 R-27	II・III c IV III a	
	88		口 外 縁 皿	I B	口縁部 — —	"	淡灰白色 両面とも失 透釉	"	"	S-27	III a
第81図・ 図版36	89	皿 底部	I	— 5.0 —	"	淡青白色 両面ともに 透明釉	"	外底の一部にも釉がかかる。	Q-27	III b	
	90		"	— 4.6 —	淡黄白色 微粒子	淡灰黄色	有り	内底は蛇の目釉剥ぎ。	S-26	不明	

第27表⑥ 白磁観察一覧

挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位
第 81 図 ・ 図 版 36	91	皿 底 部	Ⅱ	— 9.4 —	淡黄白色 微粒子	淡灰黄色	有り	皿の底部。	S-26	Ⅲ a
	92		Ⅳ	— 7.4 —	灰白色 微粒子	灰白色 内面は透明 釉	〃	皿底部。	O-28	Ⅱ
	93		Ⅲ	— 5.0 —	白色 微粒子	〃	〃	皿底部。	R-27	Ⅲ a
	94		Ⅰ	— 5.2 —	白色 微粒子	淡緑色 両面ともに 透明釉	無し	内底に圈線が廻る。	Q-26	Ⅲ c
	95		Ⅲ	— 8.0 —	淡灰白色 微粒子	〃	〃	高台内側に砂粒が付着。	Q-27	Ⅲ b
	96		〃	— 9.4 —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色 畳付けの部 分が無釉	〃	畳付周辺に砂粒が付着。	Q-27	Ⅲ b
	97		Ⅴ	— 4.2 —	白色 微粒子	白色	〃	碁笥底の皿。	R-27	Ⅲ b
	98	小 杯		— 5.2 —	〃	淡白色	〃	腰部が丸く立ち上がる。	S-27	Ⅲ a

〈註〉

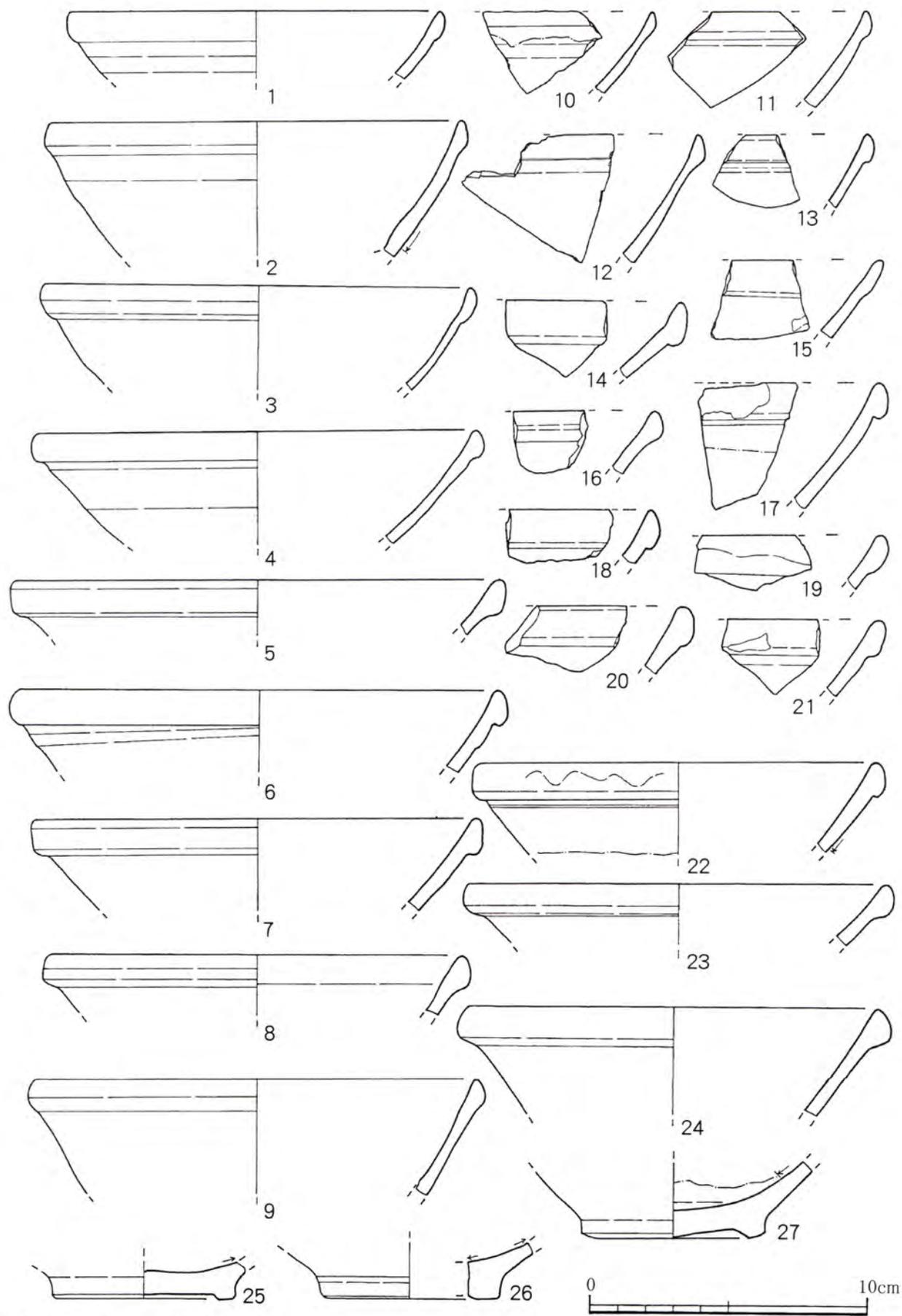
註1 金武正紀・城間千栄子 1994「ヒヤジョー毛遺跡－那覇新都心土地区画整理に伴う緊急発掘調査報告Ⅰ－」『那覇市文化財調査報告書』第26集 那覇市教育委員会

註2 註1に同じ

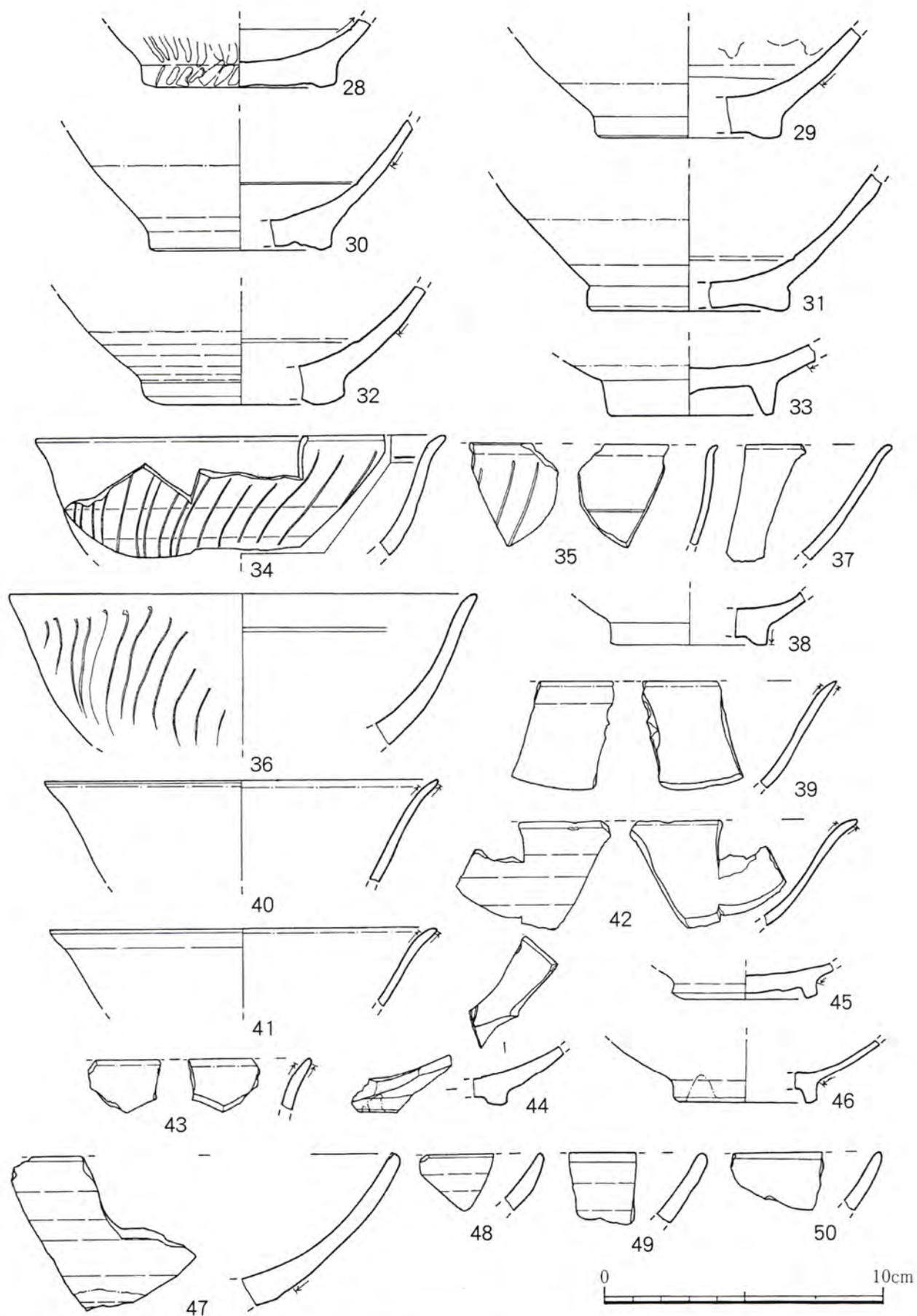
註3 當眞嗣一・岸本義彦・宮里末廣 1980「佐敷グスク－佐敷グスク発掘調査報告－」佐敷村教育委員会

註4 福岡市教育委員会の森本朝子、田中克子氏の教示

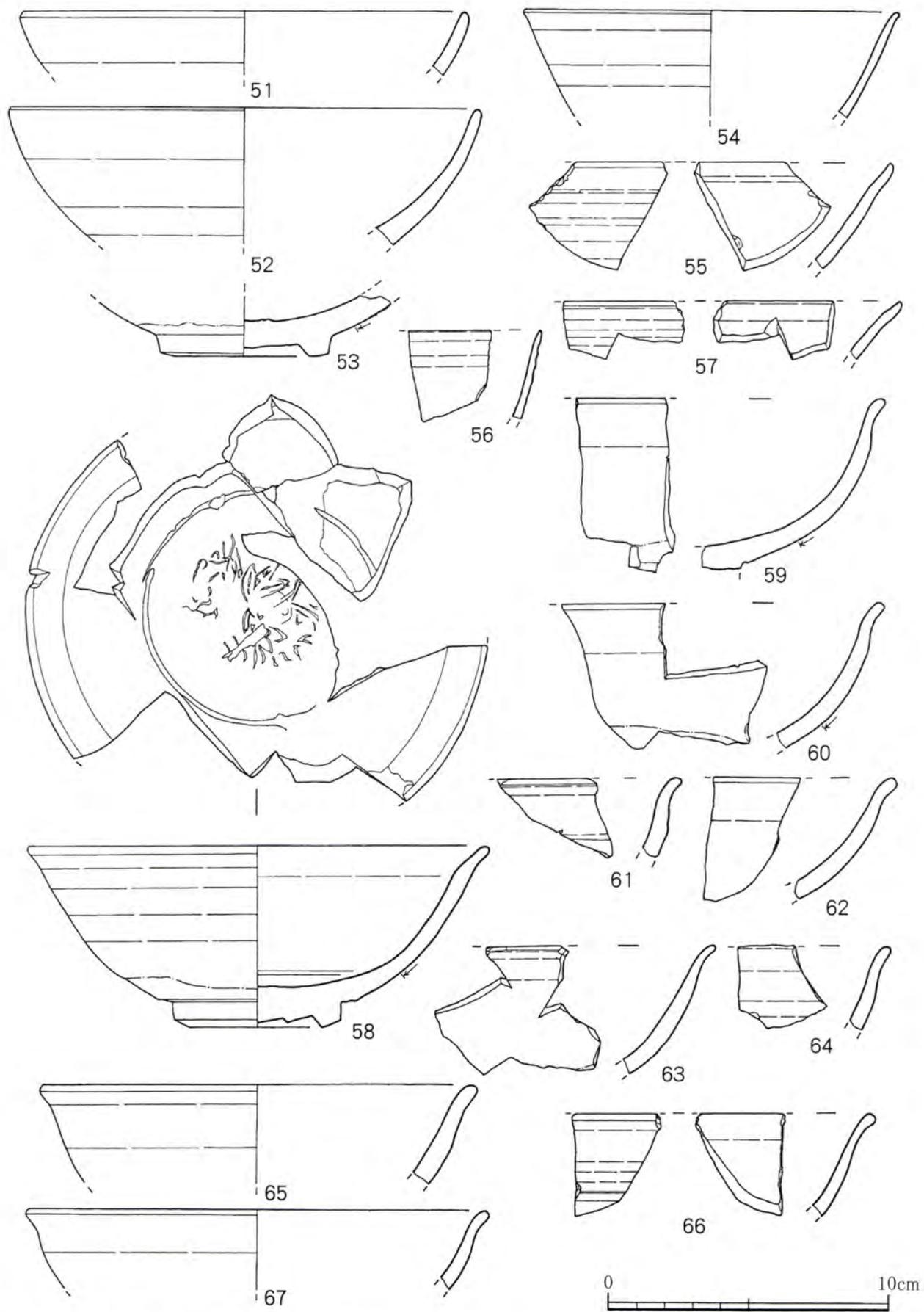
註5 玉縁口縁碗のうち、第77図1・2・10・11は11世紀後半の可能性が高い。



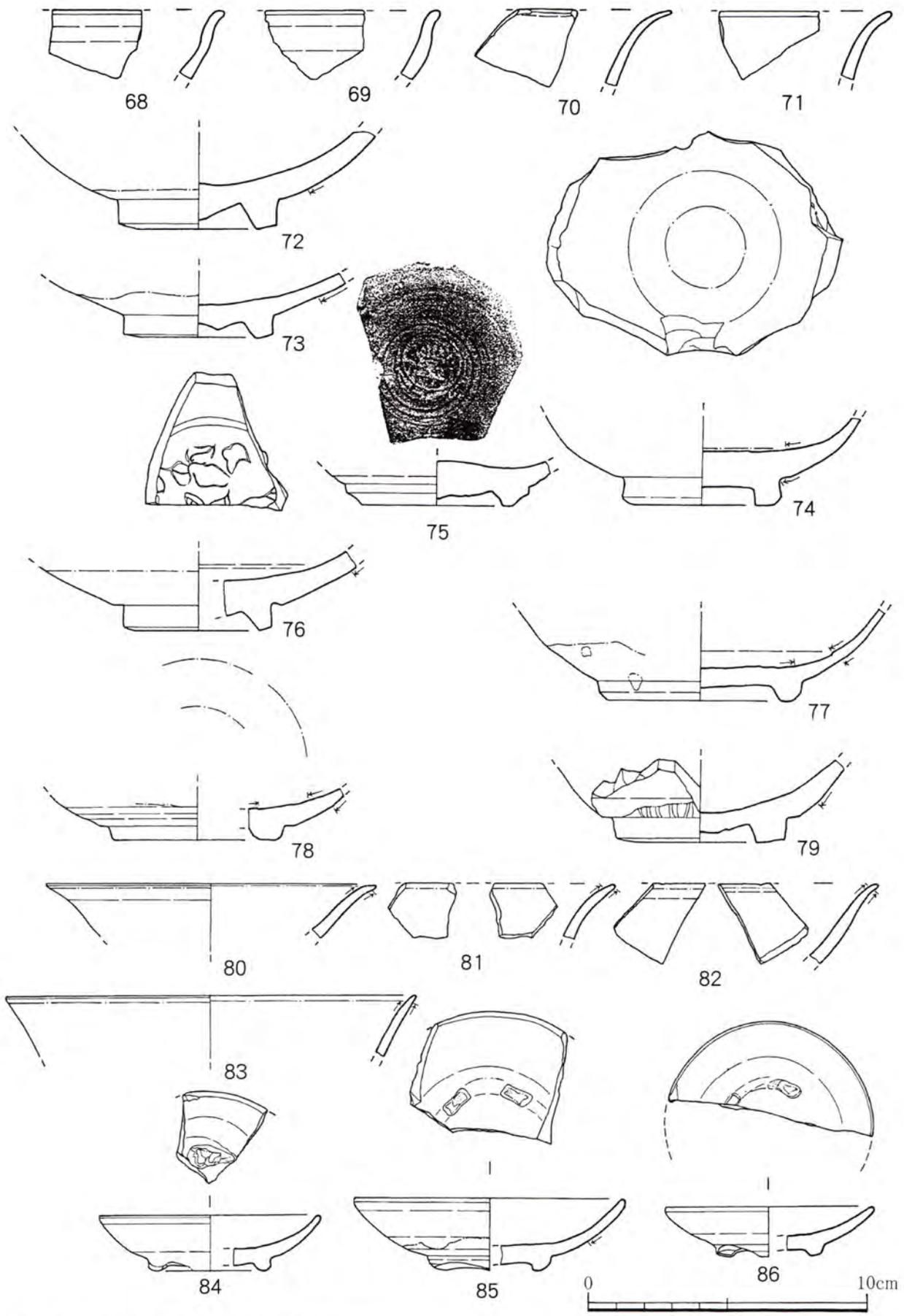
第77図 白磁<1> 玉縁口縁碗



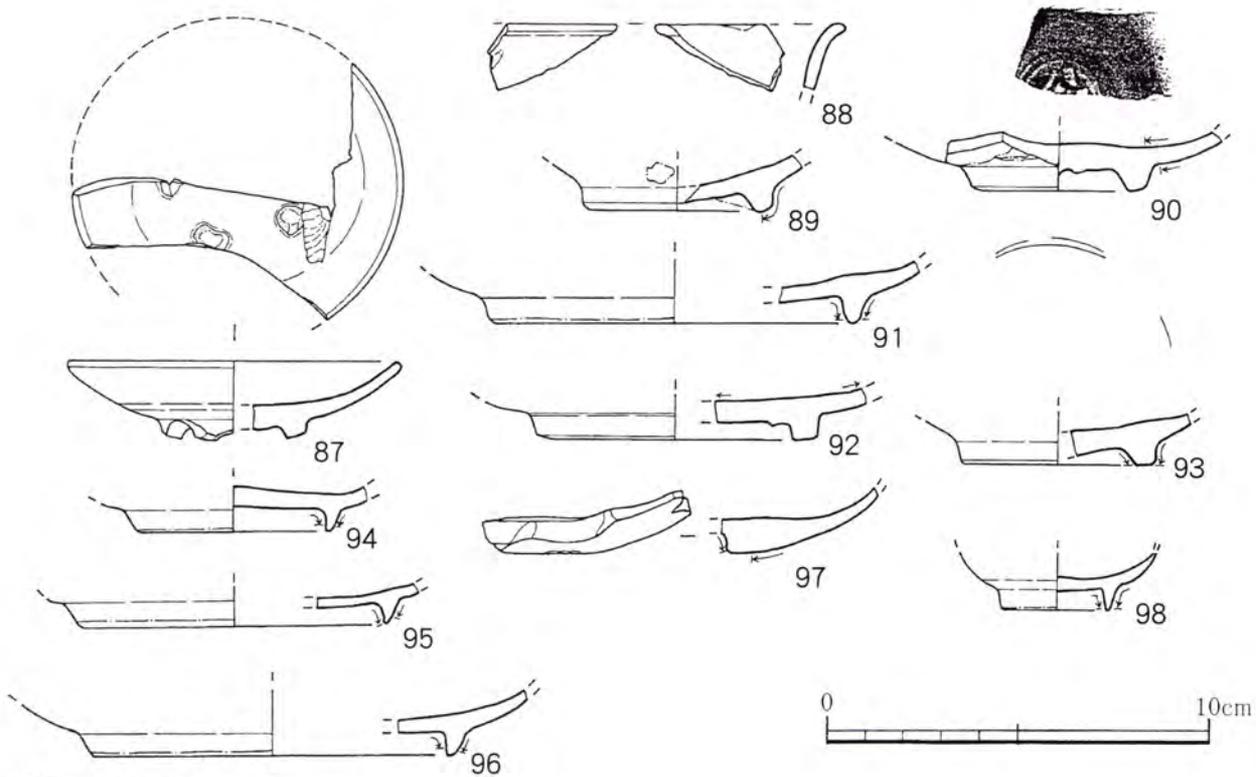
第78図 白磁<2> 玉縁口縁碗、外反口縁碗、内彎口縁碗



第79図 白磁<3> 内彎口縁碗、直口口縁碗、外反口縁碗



第80図 白磁<4> 外反口縁碗、碗底部、皿



第81图 白磁<5> 皿

第4節 青磁

本遺跡出土の青磁の器種は碗・皿・盤・杯・鉢・瓶・香炉の7器種が確認された。量的には碗が最も多く出土し、皿・盤・杯・鉢と続く。出土量は第53～55表に示した。また、個々の詳細については第28表①～⑤に観察一覧を示した。以下、器種ごとに記述する。

1. 碗

碗は最も多く出土している。文様の特征から、劃花文碗・蓮弁文碗・雷文帯碗・弦文帯碗・有文碗・無文碗の6種類に分類した。各碗の分類概念の述べ、細分可能なものは細分を行った。

(1). 劃花文碗 (第82図1)

直口口縁で口唇部は細くなりやや尖る。文様は内面に片切り彫りによる花文を描いている。

(2). 蓮弁文碗 (第82図2～16・第83～第86図)

蓮弁文碗は鎬蓮弁文碗・無鎬蓮弁文碗・線刻細蓮弁文碗の3種類に分類できる。前者から順次Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類とした。

Ⅰ類：鎬蓮弁文碗。腰部から口縁部に直線的に開き、口唇部はやや尖る。外面に片切り彫りによる幅広で鎬の明瞭な蓮弁文と間弁を描く。高台内削りは浅く、内底に印花文や陰圏線を施す。(第82図2～16)

Ⅱ類：無鎬蓮弁文碗。外面に篋描きによる幅広で鎬のない蓮弁文を描く。口縁形態と文様などからA～E種の5種類に分類した。

A種：腰部が張る直口口縁である。文様は篋描きによる幅広の蓮弁文を描き、弁先は開くのと接するものがある。(第83図17～23)

B種：口縁形態はA種に類似する小振りの碗である。文様は篋描きによる幅広の蓮弁文を描き、弁先は接する。(第83図24・26)

C種：腰部から口縁部へ直線的に大きく開く。文様は叉状工具による2本の蓮弁文を外面に描き、内面は篋描きによる草花文を描く。(第83図25)

D種：腰部から口縁部へ直線的に開く。文様は篋削りによる幅広の蓮弁文を描き、内面は胴部に3本の圏線を廻らし、上部と下部に花文を描く。(第83図27)

E種：腰部が張る直口口縁である。文様は篋描きによる剣先蓮弁文を描く。内面に花文を描くものと無文がある。(第83図28～30)

F種：腰部の張る直口口縁である。文様は篋描きによる蓮弁文を描く。内面に花文を描くものと無文がある。(第83図31～35)

Ⅲ類：線刻細蓮弁文碗。直口口縁で、篋描きによる蓮弁文を描く。口縁形態と文様などからA・B種の2種類に分類した。

A種：腰部がやや張る直口口縁である。文様は篋描きによる蓮弁文で、蓮弁と弁先との単位

に乱れが生じている。内面に花文を描くものと無文がある。(第84図36～52)

B種：器形はA種に類似する。文様は篋描きによる蓮弁文で弁先を持たないものと圏線で表現するものがある。(第84図53～57・第85図58～61)

底部 (第85図62～第86図78)

底部は文様からA～D種の4種類に分類した。

A種：幅広蓮弁文を描く。(第85図62・69・70)

B種：ラマ式蓮弁文を描く。(第85図63・71)

C種：2本の蓮弁文を描く。(第85図64)

D種：線刻蓮弁文を描く。(第85図65～68・72・第86図73～78)

(3). 雷文帯碗 (第86図79～89)

直口口縁碗で、口縁内面または外面に雷文帯を廻らす。施文方法からA種・B種に分類した。また、底部は1点図化した。内面は内底際までスタンプ文、内底に印花文を施す(第86図89)。

A種：篋描きによる雷文帯を外面に廻らし、内面は花文を施すものと無文がある。(第86図79～85)

B種：スタンプの雷文帯を内外面上部に廻らす。内面は雷文帯の下部に花文や動物の文様を施す。(第86図86～89)

(4). 弦文帯碗 (第87図90～93)

弦文帯碗には直口と外反口縁がある。文様は外面上部に3～7本の沈線を廻らす。内面は沈線を廻らすのと花文を施すものがある。口縁形態や文様からA・B種の2種類に分けた。

A種：直口口縁で、文様は3本～7本の沈線を廻らす。内面は沈線もしくは花文を施す。(第87図90・91・93)

B種：外反口縁で、文様は外面上部に3本の沈線を廻らし、内面は胴部から腰部にかけて花文を施す。(第87図92)

(5). 有文碗 (第87図95・96)

外反口縁で内外面とも片切彫りによる花文を施す。

(6). 無文碗 (第87図94・97～101・第88図～第90図)

無文碗は口縁部の形態や文様によりA～D種に分類した。

A種：直口口縁で、口唇部に小さな抉りを入れる輪花碗である。(第87図94)

B種：外反口縁で、内底に印花文や圏線のどちらかを単独で施すものと両方を有するものがある。(第87図97～101・第88図～第89図123)

C種：口縁部が肥厚する外反口縁。(第89図124～126)

D種：直口口縁で、わずかに口縁直下に圏線のみ施すものがある。(第90図127～139)

＜碗底部＞（第91図～第93図）

無文碗の底部である。底部の施釉方法によりA～D種の4種類に分類した。また、内底の釉剥ぎの有無をa・bに、内底及び内面の文様の有無をイ～ハに細分した。

A種：全面施釉。（第91図140）

B種：高台部無釉。施釉は高台外面まで施釉する。

a：釉剥ぎ無し

イ－無文（第91図141～156）

ロ－印花文や圏線を描く（第91図157・158・第92図159～162）

b：目跡あり

イ－無文（第92図163～165）

C種：高台内は蛇の目釉剥ぎ。

a：釉剥ぎ無し

イ－無文（第92図166・167）

ロ－印花文や圏線を描く（同図169・170・第93図171・172）

ハ－内面に蓮弁文を描く（第92図168）

b：目跡あり

ロ－印花文や圏線を描く（第93図173）

D種：高台内無釉。畳付から高台内面まで施釉

a：釉剥ぎ無し

イ－無文（第93図174～176）

ロ－印花文や圏線を描く（第93図177～181）

b：目跡あり

イ－無文（第93図182）

ロ－花文や印花文及び圏線を描く（第93図183）

2. 皿

皿は主に器形から、櫛描文皿・口折皿・外反皿・稜花皿・直口皿の5種類に分類した。各皿の分類概念を述べ、細分可能なものは細分を行った。

（1）櫛描文皿（第94図184～187）

高台のないベタ底皿で、若干上げ底となっているものもある。口縁部は底部から微弱に反る。内底の文様の有無によりa・bに細分した。

a：内底に櫛描の花文を施す。（第94図184～186）

b：無文である。（第94図187）

（2）口折口縁皿（第94図188～197）

口折口縁皿は腰部から胴部上部まで緩やかに立ち上がり、口縁部が折れ平鍔となる。高台は畳付が細く、外底は無釉である。外面に蓮弁文を施すのと無文がある。内底は無文と圏線内に双魚文を施すものがある。口縁形態と文様をA～C種、施文方法をa・b…として分類した。

- A種：口縁部は平鍰とするが鍰端を上方へ若干摘み上げる。無文である。(第94図188～190)
- B種：口縁部は平鍰である。文様は外面に蓮弁文を施す。施文方法からa・bに細分した。
- a：叉状工具により2本線の蓮弁文を施す。(第94図191)
- b：篋削りによる蓮弁文を描く。(第94図192～195)
- C種：口縁部の平鍰は若干窪み、口唇部は小さな抉りが入り稜花状となる。文様は外面に蓮弁文を施す。施文方法からa・bに細分した。
- a：外面は細い丸彫りで鍰直下から底部へ掻き下ろし、口唇部の抉りで弁先を表現する。内面はやや幅広の丸彫りで掻き下ろす。(第94図196)
- b：外面は篋削りによる蓮弁文で、内面はa種より弁の間隔が狭い。(第94図197)

(3) 外反口縁皿

外反口縁皿は腰部で丸みをもち、口縁部は外反する。高台は畳付を面取りするのと丸みをもつものがある。内底は無文と圏線または圏線内に印花文を施す。口縁形態と文様からA・B種に分類した。

- A種：腰部で丸みをもち、口縁部へ延びながら外反する。文様の有無によりa・bに細分した。
- a：内面に花文、内底に圏線または圏線内に印花文を施す。(第94図199・203・204・第95図205・206)
- b：無文である。(第94図198・200～202・第95図216～225)
- B種：腰部で丸みをもち、口縁部は外反する(第96図226)

(4) 稜花口縁皿

外反口縁皿と器形は類似するが、口唇部に小さな抉りを入れる。文様の有無によりa・bに細分した。

- a：内面に花文を施す。(第95図207～212)
- b：無文である。(第95図213～215)

(5) 直口口縁皿

直口する皿で、口縁部がやや内彎気味のものと同く開くものがある。口縁形態と文様からA・B種に分類した。

- A種：やや内彎気味で深い皿である。外面に花文と思われる文様を施す。(第96図227・228)
- B種：腰部が張り口縁部は直口する皿である。文様の有無によりa・bに細分した。
- a：内面に丸彫りによる蓮弁文を施すものと、内底に圏線と印花文を施す。(第96図230・231・233)
- b：無文である。(第96図229・232・234～236)

<皿底部>

皿底部は施釉方法からA～D種に分類した。また、内底の釉剥ぎの有無をa・bに、文様の有

無をイ・ロに細分した。

A種：高台部無釉。施釉は高台外面まで施釉する。

a：釉剥ぎ無し

イ－外面は蓮弁文で内底に印花文を施すものと内底に花文を施す。(第96図237・238)

ロ－無文。(第96図240)

b：目跡あり

イ－印花文を施す。(第96図239)

ロ－無文。(第96図241)

B種：外底は無釉。(第96図242・243)

C種：外底は蛇の目釉剥ぎもしくは目痕である。

a：釉剥ぎ無し

イ－無文(第96図244)

ロ－内底に印花文や花文を施す。(第96図245・246・249)

b：目跡あり(第96図247・248)

D種：高台部無釉。施釉は腰部まで施釉する。内底は目跡や蛇の目釉剥ぎを施す。

(第96図250・第97図251)

3. 杯

杯は底部が碁笥底となるものである。畳付の有無によりa・bに細分した。

a：畳付をもたない。(第97図252)

b：畳付が平坦に成形される。(第97図253・254)

4. 盤

盤は器形や口縁形態から鐳縁盤と直口口縁盤に分けられる。前者をI類、後者をII類とした。

I類：鐳縁口縁盤。鐳のある盤である。内面に蓮弁文を施す。鐳の形態や文様からA・B種に分類し、施文方法をa～fとした。

A種：鐳端部を上方に摘み上げる。内面に蓮弁文を施す。施文方法からa～fに分けた。

a：内面に幅広の丸篋で蓮弁文を施す。(第97図255～259)

b：内面に4本櫛で蓮弁文を施す。(第97図260)

c：内面に3～5本櫛で蓮弁文を施す。(第98図263)

d：内面に5本以上の櫛で蓮弁文を施す。(第97図261・262・第98図264～266)

e：内面は篋描きによる花文を施す。(第98図267)

f：内面は無文である。(第98図270)

B種：鐳は平坦に仕上げ、口唇部に抉りを入れる稜花盤である。文様は鐳上面及び内面に篋描きによる文様を施す。(第98図268・269)

II類：直口口縁盤。口縁形態や文様からA・B種に分類した。

A種：直口口縁。文様の有無によりa・bに分けた。

a : 数本櫛による蓮弁文を施す。(第98図271)

b : 無文である。(第98図273)

B種 : 口唇部に小さな抉りを施す。内面は口縁直下に圈線を廻らし、その後抉りの入った口唇下部から細い篋により搔き下ろし蓮弁文を表現する。(第98図272)

<盤底部>

盤底部は3点図化した。(第98図274~276)

5. 鉢

直口口縁の大鉢である。外面の口縁には片切り彫りによる雷文帯を配し、その直下に圈線、胴部は片切り彫りによる花文を施す。内面も片切り彫りによる花文を施す。(第99図277)

6. 瓶

瓶は小瓶。口縁部の破片資料で外反する。(第99図278)

7. 香炉

3足香炉と思われる。直口口縁で、口縁直下と胴部、胴下部の3ヶ所に圈線を廻らす。(第99図279)

8. 福建省泉州窯系青磁

中国福建省の泉州窯系の青磁で、従来は東南アジア産の青磁として報告されていた。しかし、産地の判明により泉州窯系青磁として報告¹⁾されるようになった。ここではその青磁を扱う。得られた器種は皿である。口縁形態によりA種・B種に分けた。

A種 : 外反口縁皿。(第99図280)

B種 : 直口口縁皿。(第99図281・282)

<底部>

皿底部で高台は豊付を平坦にし、外底は中央部が盛り上がる。内面は施釉、外面及び外底は無釉となっている。(第99図283)

小結

青磁の時代幅は13世紀前半から15、6世紀後半までが考えられ連続している。この中の古手である劃花文碗、鎬蓮弁文碗、櫛描皿は13世紀前半から14世紀前半の時期であるが、第Ⅲ層から第Ⅳ層まで出土している。しかし、第Ⅴ・Ⅵ層は少なく白磁の玉縁口縁碗、滑石製石鍋、カムイヤキが多い。第Ⅲ層上部は伝世品などが考えられる。この種が共伴するのは第Ⅲ層下部である。尚、櫛描碗は確認されていない。14世紀から15、16世紀の時期の無鎬蓮弁文碗、線刻蓮弁文碗、雷文帯碗等は第Ⅲ層上部で占めている。

佐敷タイプ碗と思われる玉縁状口縁碗(無文碗Ⅲ種及び底部図173)とセット関係と思われる

第28表① 青磁観察一覧

挿図版	番号	名称	分類	口径 底器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土地	層位
第82図・図版37	1	劃花文碗		— —	灰白色 微粒子	淡灰緑色	無し	内面口縁直下に圈線を廻らし、その下方に劃花文を施す。	S-27	Ⅲa
	2	鎬蓮弁文碗	I	17.4 —	灰白色 粗粒子	灰緑色	無し	口唇部は尖る。外面に片切り彫りによる蓮弁文を描く。	R-27	Ⅲb
	3		"	15.4 —	灰白色 微粒子	淡青緑色	無し	外面に片切り彫りによる蓮弁文を描く。	R-27	Ⅲb
	4		"	16.6 —	灰白色 微粒子	淡灰緑色	無し	鎬が退化して明瞭でない。外面に片切り彫りによる蓮弁文を描く。内外面に気泡がみられる。	Q-26 Q-27	Ⅲd Ⅲb
	5		"	16.0 —	灰白色 微粒子	淡青緑色	無し	外面に片切り彫りによる蓮弁文を描く。	Q-27 R-27	Ⅲb Ⅲb・ピ 1016
	6		"	16.6 —	白色 微粒子	淡灰緑色	無し	"	Q-26	Ⅲd
	7		"	口縁部 —	灰色 微粒子	淡緑色	無し	"	S-28	Ⅲh
	8		"	15.2 —	灰白色 粗粒子	灰緑色	無し	口唇部は尖る。外面に片切り彫りによる蓮弁文を描く。発色が鈍く不鮮明。	N-27	Ⅲe
	9		"	口縁部 —	灰白色 微粒子	淡青緑色	無し	片切り彫りによる蓮弁文を描く。	S-28	Ⅲh
	10		"	16.2 —	灰色 微粒子	オリーブ釉	有り	"	S-28	Ⅲb
	11		"	口縁部 —	灰白色 微粒子	淡黄色	無し	篋描きによる雑な蓮弁文。外面に片切り彫りによる蓮弁文を描く。	S-27	Ⅲb
	12		"	— 5.2 —	白色 粗粒子	淡青緑色	無し	外面は片切り彫りによる蓮弁文を描く。見込みから立ち上がる部分は浅い窪みを有する。見込みに印花文。高台内は浅く畳付の一部分まで施釉する。	O-27 R-25	表採 Ⅲd・Ⅲe
	13		"	— 4.6 —	灰白色 微粒子	灰緑色	無し	鎬蓮弁文碗底部。見込みより立ち上がる部分で浅い窪みを廻らす。見込みに印花文。高台内は浅く、畳付と高台内の一部分まで施釉。	S-27	Ⅲa
	14		"	— 5.8 —	灰白色 微粒子	淡青緑色	無し	鎬蓮弁文碗。底部。見込みから立ち上がる部分で浅い窪みを廻らす。高台内は浅い。全面に施釉するが、高台内中心部に溶着痕。外面に片切り彫りの蓮弁文を描く。	S-28	Ⅱ
	15		"	— 5.0 —	白色 粗粒子	灰白緑色	有り	鎬蓮弁文碗。底部。見込みから立ち上がる部分で浅い窪みを廻らす。釉の発色が不鮮明。高台内は浅い。	P-27	Ⅱ
	16		"	— 5.6 —	淡灰白色 微粒子	淡灰緑色	有り	鎬蓮弁文碗。底部。見込みから立ち上がる部分で浅い窪みを廻らす。	Q-28	Ⅱe
第83図・図版38	17	無鎬蓮弁文碗	ⅡA	13.3 —	灰白色 微粒子	淡灰緑色	有り	外面には篋描きの蓮弁文。蓮弁文はやや不鮮明。	S-26	V
	18		"	14.2 —	灰白色 粗粒子	淡緑灰色	有り	篋描きによる蓮弁文を描く。発色が悪く、文様はやや不鮮明。	Q-27	Ⅲb
	19		"	15.4 —	淡灰白色 粗粒子	淡緑色	無し	外面に篋描きによる蓮弁文を描く。	Q-28	攪乱

第28表② 青磁観察一覽

挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位
第83図・ 図版38	20	無鎬蓮弁文碗	"	口縁部 — —	灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	弁先が開く幅広蓮弁文を描く。	R-26	Ⅲc・Ⅲb
	21		IIA	14.0 — —	淡灰色 微粒子	灰緑色	無し	外面は篋描きによる蓮弁文を描く。文様はやや不鮮明。	I-28	Ⅲc
	22		"	14.8 — —	淡灰白色 微粒子	淡青緑色	無し	外面に篋描きによる蓮弁文を描く。	S-25	VI地山
	23		"	14.3 — —	白色 粗粒子	灰緑色	無し	"	不明	表採
	24		IIB	10.0 — —	淡灰色 微粒子	淡灰色	有り	"	R-26	Ⅲb
	25		"	16.6 — —	白色 微粒子	淡緑色	無し	内面は刻花文を描く。	R-26	Ⅲc
	26		IIC	11.4 — —	灰色 粗粒子	暗灰緑色	無し	口唇部はやや尖る。外面に篋描きによる蓮弁文を描く。釉に気泡がみられる。	S-27	Ⅲc
	27		IID	17.0 — —	灰白色 微粒子	若草色	無し	外面には蓮弁文。弁先を先に描き、縦線を下ろして蓮弁文を描く。内面は口縁下と胴下部に刻花文を描き、胴部中央には三本の横線を廻らす。	Q-27	Ⅲa
	28		II E	13.0 — —	灰白色 微粒子	淡緑色	有り	口縁直下に圏線を廻らしその下部より弁先を描き、弁先の谷間より縦線を下ろし蓮弁文とする。内面に刻花文。	O-26 Q-27	II Ⅲb
	29		"	15.9 — —	灰色 微粒子	暗緑色	無し	外面口縁直下に弁先の弧文を描き、その谷間より下方に縦線を下ろし蓮弁文を描く。	R-26	Ⅲc
	30		"	15.8 — —	灰色 粗粒子	淡灰緑色	有り	口縁直下に弁先を描き、その谷間より縦線を下ろし蓮弁文を描く。	S-26 S-27	Ⅲd Ⅲb
	31		II F	14.4 — —	灰白色 粗粒子	淡灰青色	有り	外面に蓮弁文を有する。個々の蓮弁文の単位文がくずれつつある。	Q-26	Ⅲb
	32		"	口縁部 — —	灰白色 粗粒子	灰緑色	有り	幅広の蓮弁文。内面も文様を有する。	P-26	Ⅲc
	33		"	16.0 — —	灰色 粗粒子	淡灰緑色	有り	口縁直下に弁先を描き、その谷間より下方に縦線を下ろし蓮弁文を描く。釉の発色は悪い。	S-25	IV
	34		"	口縁部 — —	灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	弁先は一個一個描く。縦線は弁先の谷間より描き下ろす。	P-26	Ⅲc
35	"	口縁部 — —	淡灰白色 粗粒子	淡灰緑色	有り	弁先を連続して廻らし、弁先の谷間より縦線を下ろす。	R-27	Ⅲa		
第84図・ 図版39	36	線刻細蓮弁文碗	ⅢA	14.8 — —	灰白色 微粒子	灰緑色	無し	口縁直下に弁先を連続して描き、その谷間から縦線を下ろし蓮弁文を描く。内面に刻花文。	S-27	Ⅲa
	37		"	13.4 — —	灰白色 粗粒子	淡灰緑色	有り	口縁直下に弁先を描き、その谷間からすこしずれて縦線を下ろし蓮弁文を描く。	O-27	Vb
	38		"	13.2 — —	淡灰白色 粗粒子	灰緑色	有り	口縁直下に弁先を描き、縦線を下ろし蓮弁文を描く。	Q-27	Ⅲb

第28表③ 青磁観察一覧

挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位
第 84 図 ・ 図 版 39	39	線 刻 細 蓮 弁 文 碗	"	15.8 — —	灰色 粗粒子	暗灰緑色	無し	弁先を先に描き、その谷間より縦線を下ろし蓮弁文を描く。	S-26	Ⅲb
	40		"	12.0 — —	淡茶灰色 粗粒子	灰緑色	無し	口縁直下に弁先を描き、縦線を下ろし蓮弁文を描く。	S-27	Ⅲa
	41		"	14.4 — —	灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	口縁直下に弁先を描き、その谷間より縦線を下ろし蓮弁文を描く。	P-27	Ⅲb
	42		ⅢA	14.4 — —	灰色 粗粒子	灰緑色	有り	口縁直下に弁先を描き、その下部より縦線を下ろす。蓮弁文は雑である。	S-27	Ⅲa
	43		"	口縁部 — —	灰白色 粗粒子	明緑色	有り	弁先は連続して廻らす。蓮弁文は雑である。	Q-27	Ⅲa・Ⅲb
	44		"	口縁部 — —	白色 微粒子	暗灰緑色	有り	弁先は連続して廻らし、縦線は弁先の谷間や山の部分から描き下ろす。	S-25	Ⅲc
	45		"	12.8 — —	灰白色 粗粒子	淡青緑色	有り	口縁直下に弁先を描き、縦線を下ろし蓮弁を描く。	R-26	Ⅲc
	46		"	13.8 — —	灰白色 粗粒子	灰黄色	無し	外面に轆轤痕が残る。	R-26	V
	47		"	14.2 — —	灰色 粗粒子	灰緑色	有り	弁先は一個一個描く。縦線は弁先の谷間より下ろす。釉の発色は悪い。	R-26	Ⅲb
	48		"	口縁部 — —	灰白色 粗粒子	淡青緑色	有り	弁先は連続している部分とそうでない部分がみられる。縦線は弁先の谷間より描き下ろす。内面は口縁直下に三本の横線を廻らし胴部に劃花文を描く。	Q-27	Ⅲc
	49		"	12.8 — —	白色 微粒子	淡黄緑色	有り	弁先は連続して描いている部分とそうでない部分がある。縦線は弁先の谷間から描き下ろす。又、胴部に二本の横線を廻らす。	R-27	Ⅲa
	50		"	12.4 — —	灰色 粗粒子	暗灰色	有り	弁先は一個一個描く。縦線は弁先と間を空けて描き下ろす。	Q-27	Vb
	51		"	13.0 — —	灰白色 粗粒子	淡灰緑色	有り	弁先は連続して描く部分とそうでない部分がみられる。縦線は弁先の谷間から描き下ろすが弁先と接してはいない。	S-27	Ⅲa・Ⅲb
	52		"	13.4 — —	白色 粗粒子	黄白色	有り	弁先は一個一個描く。縦線は描き始めがまばらである。	O-27	Vb
	53		ⅢB	口縁部 — —	灰色 粗粒子	灰緑色	無し	弁先は一個一個描く。縦線は、口縁直下より描いている。	O-27 R-25	Vb Ⅲc
	54		"	口縁部 — —	灰白色 粗粒子	灰緑色	有り	弁先のみられない蓮弁文。	O-27	Ⅱ
55	"	口縁部 — —	淡灰色 微粒子	灰緑色	有り	弁先は不明。発色は悪い。	Q-27	Ⅲc		
56	"	15.0 — —	粗粒子	淡灰緑色	有り	弁先がはっきりしない。縦線のみ描く。釉の発色が悪い。	Q-27	Ⅲb		
57	"	口縁部 — —	灰色 粗粒子	淡青緑色	有り	弁先のみられない蓮弁文。	S-27	Ⅲb		

第28表④ 青磁観察一覧

挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位
第85図・ 図版40	58	線刻細蓮弁文碗	"	14.6 — —	淡灰色 微粒子	灰緑色	有り	線彫りによる蓮弁文を施すが弁先が不鮮明である。	R-27	Ⅲb
	59		"	13.8 — —	淡灰色 微粒子	灰緑色	有り	線刻蓮弁文を施すが弁先は不鮮明。	S-27	Ⅲb
	60		"	15.4 — —	灰色 粗粒子	淡灰色	有り	口縁部外面は釉や弁先が不明。縦線を下ろし蓮弁を描く。	R-26 S-27	Ⅲc Ⅲb
	61		"	13.0 — —	灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	口縁直下に横線を廻らし、任意に縦線を下ろして蓮弁文を描く。	O-26	Ⅱ
	62	碗 底部	A	— 5.6 —	淡灰白色 微粒子	灰緑色	無し	内底に花文。外面に幅広の蓮弁文を描く。高台内は蛇の目釉剥ぎ。	R-28	Ⅲa
	63		B	— 6.4 —	灰白色 微粒子	淡灰緑色	有り	外面に蓮弁文がみられるがラマ式蓮弁の可能性もある。高台内は蛇の目釉剥ぎ。見込みに圏線と印花文を施す。	P-27	Ⅲc
	64		C	— 6.0 —	淡灰白色 微粒子	淡緑色	無し	内面に花文?を施す。外面は蓮弁文を描く。高台内は蛇の目釉剥ぎ。	S-28	Ⅲb
	65		D	— 5.0 —	淡茶色 粗粒子	淡茶褐色	有り	内底に花文。外面には篋書きの蓮弁文。釉は高台外面まで施釉。	S-28	Ⅱ
	66		"	— 5.8 —	白色 粗粒子	灰緑色	有り	内底は目跡。印花文を施す。外面は蓮弁文。高台内は目跡。	O-25	Ⅱ
	67		"	— 5.5 —	灰色 粗粒子	灰緑色	有り	内底見込みに印花文?。外面には細蓮弁文。高台内途中まで施釉。釉の発色は悪く、文様が判然としない。	R-27	Ⅲb
	68		"	— 7.2 —	白色 微粒子	緑色	有り	見込みに花文を描く。外面には蓮弁文を描く。高台内は蛇の目釉剥ぎ。	S-26	Ⅲd
	69		A	— 6.0 —	淡灰白色 微粒子	淡灰緑色	無し	内底に花文。外面に篋書きによる蓮弁文。高台には指で押さえた痕が残る。	R-27	Ⅲa
	70		"	— 6.4 —	灰白色 微粒子	淡緑色	無し	見込みに圏線を廻らし印花文を施す。外面に蓮弁文。高台内は蛇の目釉剥ぎ。	R-26	Ⅲc
	71		B	— 4.8 —	灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	見込みに圏線を廻らし印花文を施す。外面には蓮弁文。高台途中まで施釉。一部、外底に掛かっている。	R-26	Ⅲc
72	D	— 6.4 —	灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	見込みに花文を描く。外面には蓮弁文。高台は蛇の目釉剥ぎ。	Q-27	Ⅲc		
第86図・ 図版41	73	"	— 4.4 —	灰色 粗粒子	淡青緑色	有り	見込みに花文が施される。外面には細蓮弁文。高台外面まで施釉。	S-27	Ⅲb・Ⅲc	
	74	"	— 5.6 —	灰白色 粗粒子	灰緑色	有り	外面に蓮弁文を施すが、釉の発色が悪く不明瞭である。断面部分で細蓮弁文と確認できる。高台内途中まで施釉。	不明	不明	
	75	"	— 5.0 —	灰白色 粗粒子	灰緑色	有り	外面に蓮弁文を描く。高台内途中まで施釉。	Q-27	Ⅲb	
	76	"	— 4.6 —	灰色 粗粒子	暗灰緑色	有り	外面は細蓮弁文を施す。高台内は蛇の目釉剥ぎ。高台内に、砂胎土が付着。	S-26	V	

第28表⑤ 青磁観察一覧

挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位
第86図・図版41	77	碗 底部	"	— 4.8 —	灰褐色 粗粒子	淡茶緑色	無し	外面は細蓮弁文を施す。高台外面まで施釉。	Q-27	Ⅲb
	78		"	— 5.8 —	灰白色 粗粒子	灰緑色	有り	見込みに文様のみられるが、全容は不明。外面は細蓮弁文を施す。	Q-27	Ⅲb
	79	雷文帯碗	a	16.8 — —	灰白色 微粒子	淡緑色	無し	口縁直下に雷文帯を廻らす。内面にも文様を施すが、判然としない。	S-27	Ⅲb
	80		"	14.0 — —	灰白色 微粒子	淡緑色	無し	口縁直下に雷文帯を廻らす。発色が悪く、文様が不鮮明。	R-25	Ⅲc
	81		"	15.2 — —	灰白色 微粒子	灰緑色	無し	口縁直下に雷文帯を廻らす。胴体部はラマ式蓮弁と思われる。発色が悪い。	N-27	Ⅱd
	82		"	14.4 — —	灰白色 微粒子	淡緑色	有り	雷文帯とラマ式蓮弁文を施す。	R-26	Ⅲb・Ⅲc
	83		"	16.6 — —	淡灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	口縁直下に雷文帯、胴体部はラマ式蓮弁と思われる。	Q-26	Ⅲb
	84		"	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡緑色	有り	口縁直下に雷文帯。胴体部にも文様を施す。内面には唐草状の文様。	Q-27 S-27	Ⅲa Ⅲa
	85		a	16.0 — —	灰白色 微粒子	淡灰緑色	有り	外面口縁直下に雷文帯を廻らす。内面は雷文帯を廻らし、その下部に馬?を描く。	Q-27 R-26	Ⅲa Ⅲc
	86		b	口縁部 — —	灰白色 粗粒子	淡灰緑色	有り	口縁直下に雷文帯。内面にも文様あり。	不明	Ⅲa
	87		"	口縁部 — —	淡灰色 微粒子	茶緑色	無し	外面に雷文帯。内面口縁下部に雷文。胴体部に文様を施すが不明。	Q-27	Ⅲb
	88		"	口縁部 — —	淡灰色 粗粒子	暗緑色	有り	口縁直下に雷文帯を廻らす。胴体部は蓮弁文?	Q-27	Ⅲc
	89		"	胴部 — —	灰白色 粗粒子	暗緑色	有り	内底から外底までは2.9cmと厚く、大振りの碗。内面に篋彫りによる花文?を施し、内面底に蓮花文?を施す。外底は蛇の目釉剥ぎ。	R-27	Ⅱc
	第87図・図版42		90	弦文帯碗	A	15.0 — —	灰色 粗粒子	灰緑色	有り	外面口縁直下に八本の圈線を廻る。
91		"	14.8 — —		灰白色 粗粒子	淡青緑色	無し	外面口縁下部に三本の圈線を廻らす。この圈線二本の斜線で内面に文様を施す。	N-27	Ⅱd
92		B	16.4 — —		灰色 粗粒子	灰緑色	有り	外面に3条の横線を廻らす。内面にも文様があり、構図は不明。釉の発色が悪い。	Q-27	Ⅲb
93		A	口縁部 — —		灰色 粗粒子	淡緑色	有り	外面口縁下部に6本の圈線が廻る。	R-27	Ⅱ
94		輪花碗	"	口縁部 — —	灰色 微粒子	暗緑色	有り	やや内彎気味である。口唇部に刻みを入れ、輪花状を呈する。	R-28	Ⅱ
95		有文碗	"	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡緑色	有り	片切り彫りによる花文を両面に描く。	R-28	Ⅲa

第28表⑥ 青磁観察一覧

挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位
第 87 図・ 図版 42	96	有文 碗		口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	暗緑色	有り	外面は片切り彫りによる花文を、内面は口縁部直下に雷文帯?とその下部に花文を描く。	S-27	Ⅲb
	97		B	— — —	灰白色 粗粒子	淡青緑色	無し	口唇直下および内面の一部分は露胎している。	Q-26 R-25	Ⅲb Vb
	98		"	14.0 4.4 6.3	灰色 粗粒子	灰色	?	焼成不良。	R-26 S-26 S-27	Ⅲc Ⅲc Ⅲb
	99		"	15.4 5.4 —	灰色 粗粒子	暗緑色	有り	口縁が小さく外反する。 内底に印花文を描く。	Q-27 R-27 S-26	Ⅲa Ⅲa Ⅲc
	100		"	15.6 5.8 6.3	淡灰色 粗粒子	淡黄緑色	細かい	見込みに圈線描くが書ききっていない。高台は竹の節。施釉を内面より高台まで施し、部分的に畳付と高台内まで施される。	S-27	Ⅲb
	101		"	15.6 5.2 6.8	灰白色 微粒子	灰緑色	有り	内底に印花文を施した後、目跡とする。	Q-26	Ⅲb
第 88 図・ 図版 43	102		"	16.8 — —	灰白色 粗粒子	灰緑色	無し	外面に轆轤痕が残る。	S-28	Ⅲf Dot49
	103		"	13.8 — —	灰白色 粗粒子	淡緑色	無し	口縁部は大きく外反する。無文。	R-27	Ⅲb
	104		"	17.4 — —	白色 微粒子	緑色 やや厚め	無し	頸部を強く押し付け口縁部は外反する。	R-26 S-27	Ⅱ Ⅲb
	105		"	15.6 — —	灰白色 粗粒子	淡灰緑色	無し	釉の発色は悪く、口唇部分に気泡が見られる。	S-27	Ⅲb
	106		B	17.8 — —	灰色 粗粒子	淡緑色	有り	外面に轆轤痕が残る。	Q-27	Ⅲb
	107		"	15.0 — —	灰白色 粗粒子	灰緑色	有り	薄手で大振りの碗。	R-26	地山
	108		"	16.4 — —	淡灰色 粗粒子	灰緑色	無し	微弱ながら口縁は外反する。	Q-27	Ⅲb
	109		"	15.4 — —	灰白色 粗粒子	青白色	有り	口縁は肥厚する。	Q-27	Ⅲb
	110		"	15.8 — —	灰色 粗粒子	灰緑色	有り	"	S-26	Ⅲa
	111		"	14.6 — —	灰白色 微粒子	淡青緑色	有り	厚い釉を外・内面に施釉。	R-26	V
	112		"	14.4 — —	灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	口縁は若干肥厚する。	S-28	Ⅲb
	113		"	15.6 — —	灰色 粗粒子	淡灰緑色	無し	見込みに圈線が確認できる。	S-26	Ⅲc
	114		"	16.4 — —	灰色 粗粒子	灰緑色	無し	外面口縁直下と内面に圈線が廻る。	R-26	Ⅲc

第28表⑦ 青磁観察一覧

挿図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土地	層位
第88図・図版43	115	無文碗	"	15.0 — —	淡灰色粗粒子	淡灰青色	有り	外面に轆轤痕が残る。	S-28	Ⅲb
	116		"	14.8 — —	灰色粗粒子	灰緑色	有り	口縁部は外反する。	R-25	Ⅲd
	117		"	16.0 — —	灰色粗粒子	灰緑色	無し	"	S-26	Ⅲc
第89図・図版44	118		"	20.0 — —	灰白色微粒子	灰黄色	有り	薄手で外反する。	O-27	Ⅱ
	119		"	18.6 — —	灰白色微粒子	明緑色	粗い貫入有り	口縁下部で窄まり外反する。	S-26	Ⅲc
	121		"	17.2 — —	淡灰色粗粒子	透明釉	有り	外面に轆轤痕が残る。	S-27	Ⅲb
	122		"	16.9 — —	灰色粗粒子	灰緑色	無し	口縁部は外反する。	S-27	Ⅲb
	123		"	19.6 — —	灰白色粗粒子	淡緑色	有り	口縁部は若干肥厚する。	N-28	Ⅲa
	124		C	16.6 — —	灰白色粗粒子	灰緑色	有り	口縁部は肥厚する。	Q-26 Q-27	Ⅲc Ⅲc
	125		"	18.0 — —	灰色粗粒子	淡灰緑色	有り	大振りの碗で口縁は肥厚する。	S-26 S-27 R-27	Ⅲb Ⅲa Ⅲc
	126		"	20.6 — —	灰白色粗粒子	灰緑色	有り	口縁部は若干肥厚し、玉縁状を呈す。 焼成不良。	R-25 R-26 R-27	Ⅲc Ⅲb Ⅲb
第90図・図版45	127		D	15.0 — —	灰色粗粒子	暗灰緑色	有り	外面に轆轤痕が残る。	O-27	Ⅱ
	128		D	13.4 — —	灰白色粗粒子	黄灰白色	無し	焼成が悪い。	O-26 O-27	Ⅱ Va
	129		"	11.8 — —	橙色粗粒子	淡橙色? (透明釉の可能性有り)	細かい	口縁は内灣気味。外面に轆轤痕が残る。	R-28	攪乱
	130	"	17.8 — —	灰色粗粒子	暗灰緑色	有り	外面口縁直下に圈線が廻る。	Q-27	Ⅲa・Ⅲb	
	131	"	12.4 — —	灰色微粒子	灰緑色	有り	"	P-25 R-26	Ⅱ Ⅲc	
	132	"	15.6 — —	灰白色粗粒子	灰緑色	無し	外面に轆轤痕が見られる。	S-28	Ⅲb	
	133	"	15.6 — —	灰白色粗粒子	淡灰緑色	無し	焼成が悪く、口縁にアバタのが見られる。	R-26	Ⅲc	
	134	"	14.0 — —	灰色粗粒子	灰緑色	有り	口縁下部は窄まる。	Q-27	Ⅲb	

第28表⑧ 青磁観察一覧

挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位
第90図・図版45	135	無文碗	"	15.4 — —	白色 粗粒子	淡緑色	有り	口唇部はやや丸みを帯び、外面に1本の圈線を廻らす。	不明	Ⅲa
	136		"	14.6 — —	灰白色 微粒子	淡緑色	有り	口唇部は尖る。外面に1本の圈線を廻らす。	R-26	Ⅲb
	137		"	13.0 — —	灰白色	茶緑色	有り	外面に轆轤痕が残る。	R-27	Ⅲb
	138		"	15.4 — —	淡灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	口縁直下に一条の圈線が廻る。	R-26	Ⅲb
	139		"	16.7 — —	灰白色・ 茶褐色 粗粒子	灰緑色	有り	口縁部下に窪みが見られる。	Q-27	Ⅲa・Ⅲb
第91図・図版46	140	碗底部	A	— 6.1 —	淡灰色 粗粒子	淡緑色	有り	内底見込みを圈線で囲み中央に印花文を配す。畳付の幅が広い。	R-26	Ⅲc
	141		B a イ	— 5.8 —	灰白色 粗粒子	淡灰青色	無し	高台外面から外底まで露胎する。	Q-27	Ⅲb
	142		"	— 5.8 —	灰色 粗粒子	灰黄緑色	有り	畳付から外底は露胎。	不明	Ⅲa
	143		"	— 5.0 —	灰色 粗粒子	灰緑色	有り	内底に轆轤痕。	J-27	Ⅲd
	144		"	— 5.8 —	灰白色 粗粒子	淡灰緑色	無し	畳付から外底面は露胎。釉の発色は悪い。	Q-27	Ⅲb
	145		"	— 7.0 —	赤褐色 粗粒子	黄緑色	有り	畳付の外端を斜めに削り取る。外底は露胎する。	S-26	Ⅲb
	146		"	— 4.8 —	淡茶色 粗粒子	茶褐色	有り	竹の節高台。	R-26	V
	147		"	— 5.2 —	灰白色 粗粒子	淡青緑色	有り	畳付けの両端を面取り。	P-27	Ⅱ
	148		"	— 4.8 —	赤褐色 粗粒子	灰白色	有り	焼成不良。	Q-27	Ⅲb
	149		"	— 5.5 —	灰白色 粗粒子	淡灰色	細かい 貫入有 り	畳付の外端を面取りする。外底は露胎する。	S-26	Ⅵ
	150		B a イ	— 6.0 —	淡黄白色 粗粒子	淡緑色	有り	大振りの碗で釉が1mm と厚い釉を施す。	S-27	Ⅲa・Ⅲb
	151		"	— 5.6 —	灰白色 粗粒子	暗緑色	有り	外面胴部に重ね焼きの際の熔着痕?が付着。	O-27	Ⅲb
	152		"	— 6.2 —	赤褐色 粗粒子	濁灰白色	無し	釉の発色は悪く、外底は露胎する。	R-27 S-27	Ⅲc Ⅲb
	153		"	— 4.8 —	赤褐色 粗粒子	灰黄色	無し	内底の文様は確認できないが中央に凸部を残す。焼成不良。	不明	不明

第28表⑨ 青磁観察一覧

挿図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土地	層位
第91図・図版46	154		"	— 5.0 —	灰色粗粒子	灰緑色	無し	外底も部分的に施釉。	S-28	Ⅲh
	155		"	— 6.1 —	淡灰色粗粒子	明緑色	有り	厚い釉を施す。	O-27	—
	156		"	— 5.0 —	灰白色粗粒子	淡灰緑色	有り	畳付け外端の素地は面取りされ、外底は平坦に仕上げる。	Q-27 R-26 R-27 S-26	Ⅲb Ⅲc Ⅲa Ⅲd
	157		B a □	— — —	灰色粗粒子	灰緑色	有り	内外面に圏線を描く。	R-26 S-26	Ⅲc Ⅲc
	158		"	— 5.8 —	灰色粗粒子	暗灰色	有り	内底は花文?を中央に、周囲は一条の圏線。	R-26	地山
第92図・図版47	159		"	— 5.5 —	灰白色粗粒子	淡灰緑色	無し	内底面に圏線と双魚文と思われる文様が施される。	Q-27	Ⅲb
	160		"	— 5.6 —	灰白色粗粒子	淡灰白色	無し	内底に十字花文。	R-27	Ⅲc
	161		"	— 6.1 —	灰白色微粒子	暗灰緑色	無し	内底は花文を描く。畳付は僅かに面取りされる。	P-27 R-25	Ⅲd Ⅲc
	162		"	— 6.2 —	灰白色粗粒子	淡灰緑色	有り	内底は印花文を圏線で囲む。	Q-26	Ⅲd
	163		B b イ	— — —	灰白色粗粒子	淡灰緑色	無し	内底は目跡。	—	—
	164		"	— 5.4 —	灰白色粗粒子	淡緑色	無し	内底は目跡で、熔着痕が残る。	N-28 O-27 Q-27	Ⅲe Ⅲd Ⅲb
	165		"	— 5.8 —	赤褐色粗粒子	黄白色	有る	内底は目跡。	P-27	Ⅲb
	166		C a イ	— 6.9 —	灰白色粗粒子	草緑色	有り	外底は蛇の目釉剥ぎ。	Q-26	Ⅲb
	167		"	— 7.0 —	橙色粗粒子	灰緑色	有り	外底は蛇の目状に掻き取るが雑である。	不明	不明
	168		C a □	— 6.4 —	赤褐色粗粒子	淡灰褐色	有り	内体面に笠彫りの蓮弁文。内底は圏線。	Q-26 R-27	Ⅲb Ⅱ
	169		"	— 4.8 —	灰白色微粒子	灰緑色	有り	内底に印花文を描く。	Q-27	Ⅲb
	170		C a ハ	— 5.1 —	淡灰白色粗粒子	淡灰黄色	有り	畳付の両端を面取りする。内底の文様の構図は不明。	S-27	Ⅲb
第93図・図版48	171		C a □	— 6.1 —	灰白色微粒子	草緑色	有り	内底は圏線。	R-26	Ⅲb
	172		"	— 6.4 —	淡灰色粗粒子	灰緑色	有り	内底は印花文を圏線で囲む。畳付の幅が広い。	R-26	Ⅲc

第28表⑩ 青磁観察一覧

挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位
第93 図・図版 48	173	碗 底部	"	— 6.0 —	灰白色 微粒子	淡緑色	無し	内底は印花文。外底は蛇の目釉剥ぎ。	P-27	Ⅲc
	174		D a イ	— 5.1 —	淡灰白色 粗粒子	灰緑色	有り	畳付は平坦で、その外端は面取りする。	P-27	Ⅲd
	175		"	— 7.2 —	赤褐色 粗粒子	灰緑色	無し	内底は盛り上がる。	R-27	Ⅲb
	176		D a イ	— 6.1 —	灰白色 粗粒子	淡灰緑色	無し	畳付の外端を深く面取りする。	P-26	Ⅱ
	177		D a 口	— 5.8 —	灰白色 粗粒子	淡青緑色	有り	内底は印花文を圏線で囲む。	Q-27	V
	178		"	— 6.2 —	灰白色 粗粒子	淡緑色	無し	内底に圏線。	不明	不明
	179		"	— 4.8 —	灰色 粗粒子	淡緑色	有り	内底面にねじり花の文様を描く。	P-27	Ⅲa
	180		"	— 5.9 —	灰白色 粗粒子	淡青緑色	無し	内底は印花文。高台内は露胎。	Q-27	Ⅲb
	181		"	— 5.7 —	灰白色 微粒子	淡緑灰色	有り	"	Q-27	Ⅲb
	182		D b イ	— 4.9 —	灰白色 粗粒子	淡青緑釉	有り	内底は目跡。	Q-27	Ⅲb
	183		D b 口	— 7.0 —	赤褐色 粗粒子	灰緑色	有り	内底は印花文。	不明	不明
第94 図・図版 49	184	櫛 描文皿	a	— 4.6 —	灰白色 粗粒子	淡灰緑色	有り	ベタ底。内底に櫛描文。	Q-27	Ⅲa・Ⅲb
	185		"	— 6.0 —	灰白色 粗粒子	淡灰白色	有り	ベタ底。底に櫛描きのジグザグ文。	S-28	Ⅲg
	186		"	口縁部 — —	黄白色 粗粒子	淡灰色	有り	櫛描文皿口縁部。	K-27	Ⅱ
	187		b	— 7.0 —	灰白色 微粒子	露胎	無し	ベタ底で無文。	R-26	Ⅲb・Ⅲc
	188	口 折口 縁皿	A	13.4 — —	灰白色 微粒子	淡青緑色	無し	口折皿。体部上位を「L」字状に折り曲げる。	P-26	Ⅲe
	189		"	12.0 — —	灰色 粗粒子	淡灰黄緑色	無し	"	S-28	攪乱
	190		"	— 5.4 —	淡灰色 粗粒子	淡灰緑色	粗い	内底は貼り付けによる双魚文。内面腰部に圏線を廻らす。	O-27	Ⅲa
191	B a		12.8 — —	灰白色 微粒子	淡灰緑色	有り	内面の折れ部分は、明確な稜が走る。外面は2本線による蓮弁文を描く。	N-27 O-28	Ⅲe Vb	

第28表⑪ 青磁観察一覧

挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位
第94図・ 図版49	192	口折口縁皿	"	12.4 — —	灰色 粗粒子	淡緑灰色	有り	外面に幅広蓮弁文。	R-27	Ⅲa
	193		B b	12.8 — —	灰白色 微粒子	淡緑色	有り	口折皿。体部上位を「L」字状に折り曲げる。 外面は幅広蓮弁文を描く。	R-27	Ⅲa
	194		"	口縁部 — —	灰白色 微粒子	淡緑色	無し	外面に蓮弁文。やや厚い施釉。	R-27	Ⅲb
	195		"	口縁部 — —	灰白色 粗粒子	淡緑色	無し	屈折した口縁部が短く端部は小さく尖がる。 外面には片切り彫りの蓮弁を描く。	S-27	Ⅲb
	196		C a	13.0 — —	白色 粗粒子	淡緑色	有り	稜花皿。外面に丸彫りによる蓮弁文を描く。内面は蓮弁文を描く。	P-26	攪乱
	197		"	口縁部 — —	白色 粗粒子	淡緑色	無し	内外面に蓮弁文を描く。	—	—
	198	外反口縁皿	A a	12.4 — —	灰白色 粗粒子	淡灰青色	有り	外反口縁皿。口縁部は腰部から逆「ハ」の字状に開く。	S-26	Ⅲc
	199		A b	10.6 — —	灰色 粗粒子	灰緑色	有り	口縁部は腰部で屈曲し逆「ハ」の字状に開く。片切り彫りで花文を描く。	P-26	Ⅲb
	200		"	— 5.6 —	灰白色 微粒子	暗灰緑色	有り	厚い釉を全面施釉の後、外底の釉を蛇の目状に掻き取っている。	Q-27 R-25 R-26	Ⅲa Ⅲc Ⅲc
	201		"	— — —	灰白色 粗粒子	灰緑色	有り	腰部は丸みをもつ。やや厚い釉を全面に施釉。	R-25	Ⅲc
202	A a		— 5.8 —	灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	腰部は丸みをもつ。外底の釉を蛇の目状に掻き取っている。	R-25	Ⅲc	
203	A b		— 5.8 —	淡灰色 粗粒子	明緑色	有り	内面には花文?。内底中央に圏線。	Q-26	Ⅲc	
204	A a		— 5.0 —	淡黄灰白 色 粗粒子	緑灰色	有り	内底に印花文。全体に厚い釉を施す。	P-27	Ⅱ	
205	"		口縁部 — —	灰白色 粗粒子	灰緑色	有り	口縁上端の膨らみは微弱。花文を描く?。	S-26	Ⅲb	
第95図・ 図版50	206	"	— — —	淡黄灰色 粗粒子	灰黄色	有り	内面口唇直下に二条の圏線が廻る。	Q-27	Ⅲb	
	207	稜花口縁皿	a	11.8 — —	灰色 粗粒子	灰緑色	有り	稜花皿。内面に花文。内底には圏線。	S-26	Ⅲd
	208		"	13.2 — —	赤褐色 微粒子	灰黄色	有り	稜花皿。青海波文様?	R-27	Ⅲb
	209		"	13.0 — —	淡灰白色 粗粒子	淡灰緑色	有り	稜花皿。内面に1本の花文。	R-25	不明
	210		"	口縁部 — —	灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	稜花皿。内面に篋描きの唐草文?。	S-27	Ⅲa

第28表⑫ 青磁観察一覧

挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位	
第95図・ 図版50	211	稜花口縁皿	"	12.0 — —	灰色	灰褐色	有り	稜花皿。内面に花文を描く。	R-26	Ⅲb	
	212		"	11.6 — —	灰色 粗粒子	灰緑色	有り	内面に花文を描く。	S-26	Ⅲc	
	213		b	11.0 — —	赤褐色 粗粒子	淡茶色	有り	稜花皿。口縁内面に2本の圈線。	Q-27	Ⅲb	
	214		"	口縁部 — —	灰白色 粗粒子	黄灰白色	有り	稜花皿。焼成不良。	Q-27	Ⅲc	
	215		b	12.6 — —	灰色 粗粒子	灰緑色	有り	稜花皿。	Q-27	Ⅲa	
	216	外反口縁皿	A b	11.2 — —	灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	口縁部は外反する。	Q-26	Ⅲd	
	217		"	11.9 — —	淡灰色 粗粒子	暗緑色	無し	内外面とも釉は厚い。"	Q-27	Ⅲb	
	218		"	12.8 — —	淡灰白色 粗粒子	淡灰緑色	有り	釉の発色は悪い。"	J-28	Ⅳ	
	219		"	12.6 — —	灰色 粗粒子	淡灰緑色	細かい	内外面とも釉は厚い。"	S-28	Ⅲb	
	220		"	13.0 — —	淡灰白色 微粒子	淡青灰色	有り	口縁部は外反する。	P-27	Ⅲb	
	221		"	— — —	灰白色 微粒子	明緑色	無し	"	S-27	Ⅲa	
	222		"	12.4 — —	灰色 粗粒子	淡緑色	有り	内外面とも釉は厚い。"	Q-27	Ⅲc	
	223		"	12.0 — —	灰白色 粗粒子	淡灰緑色	有り	釉の発色は悪い。"	R-26	Ⅲb	
	224		"	13.2 — —	灰色 粗粒子	淡緑色	有り	"	S-26	Ⅲa	
	225		"	11.4 — —	白色 微粒子	淡緑色	無し	"	Q-27	Ⅲb	
	第96図・ 図版51	226	直口口縁皿	B	13.0 — —	灰白色 微粒子	草緑色	無し	口唇部は尖る。"	Q-27	Ⅲb
		227		A	10.7 — —	灰白色 粗粒子	淡緑白色	有り	内彎する杯。外面の文様は不明。	S-27	Ⅲa
		228		"	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰色	有り	外面に文様を描く。	Q-27	Ⅲb
		229		B b	9.2 — —	灰色 粗粒子	灰緑色	有り	口縁は内彎する杯。畳付内外端を面取りする。	S-27	Ⅲa

第28表⑬ 青磁観察一覧

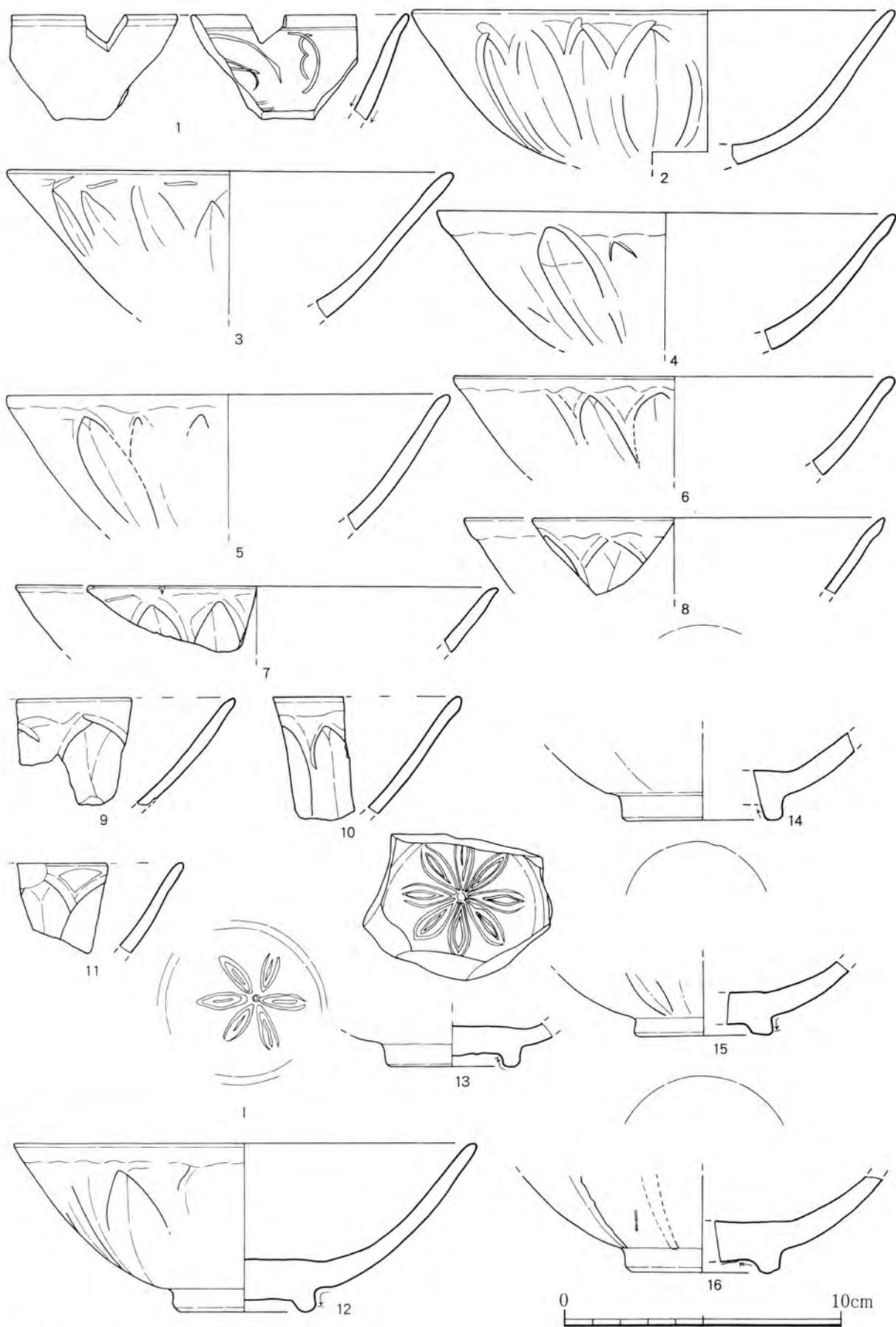
挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位
第96 図・ 図版 51	230	直口 口縁 皿	B a	8.4 — —	灰色 微粒子	灰緑白色	無し	内体面に篋描きの蓮弁文。	S-27	Ⅲb
	231		"	10.0 5.4 3.1	灰白色 粗粒子	緑灰色	有り	見込みに圏線と印花文。	Q-27	Ⅲa・Ⅲb
	232		B b	10.2 — —	淡灰白色 微粒子	灰緑色	有り	口縁が直口。高台が浅く畳付の幅が狭い。	Q-27 R-27	Ⅲa・Ⅲb Ⅲa
	233		B a	8.0 — —	灰白色 粗粒子	緑灰色	有り	内体面に篋描きの蓮弁文。	S-25	Ⅲb
	234		B b	— — —	淡灰色 粗粒子	淡灰緑色	有り	口縁部は内彎する。	R-27	Ⅲb
	235		"	口縁部 — —	灰白色 粗粒子	淡灰緑色	有り	"	Q-26	Ⅲb
	236		"	— 4.6 2.4	淡灰色 微粒子	淡灰緑色	有り 細かい	内面より高台外面まで施釉。	S-26 S-27	Ⅲc・Ⅲb Ⅲb
	237		A a イ	— 4.6 —	灰白色 微粒子	灰緑色	有り	外体面は蓮弁文。内面にも文様あり。内底は印花文。	R-27 S-27	Ⅲa・Ⅲb Ⅲb
	238	A a イ	— 4.6 —	灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	内底は文様？。	R-26	Ⅲc	
	239	"	— 6.1 —	灰白色 粗粒子	淡青緑色	有り	内底に牡丹と菊の文様が見られる。	S-27	Ⅲb	
	240	A a 口	— 4.8 —	灰白色 粗粒子	灰白色	無し	外面に轆轤痕。焼成不良。	Q-27	Ⅲb	
	241	"	— 4.7 —	白色 微粒子	淡灰緑色	細かい	内底は目跡。内面腰部より高台外面まで施釉。	R-28	Ⅲa	
	242	B	— 6.8 —	淡灰白色 微粒子	灰緑色	無し	内底は印花文、外底蛇の目釉剥ぎ。	Q-26	Ⅲc	
	243	"	— 5.4 —	白色 粗粒子	淡緑色	無し	外底面は露胎する。	N-27	Ⅱd	
	244	C a イ	— 6.2 —	淡灰白色 粗粒子	灰緑色	有り	外底は蛇の目釉剥ぎ。	Q-27	Ⅲb	
	245	C a 口	— 4.8 —	灰白色 粗粒子	淡灰青色	有り	内底は花文。外底は蛇の目釉剥ぎ。	S-28	Ⅱ	
	246	"	— 6.6 —	白色 粗粒子	淡青緑色	有り	内底に重ね焼きの際の熔着痕。印花文。外底は蛇の目釉剥ぎ。	Q-27	Ⅲb	
	247	C b	— 7.4 —	白色 粗粒子	淡灰緑色	有り	内底は目跡。	Q-27	Ⅲb	
248	C a 口	— 7.2 —	灰白色 粗粒子	淡黄灰色	無し	内底は蛇の目釉剥ぎ。外底は目跡。	J-28	Ⅳ		

第28表⑭ 青磁観察一覧

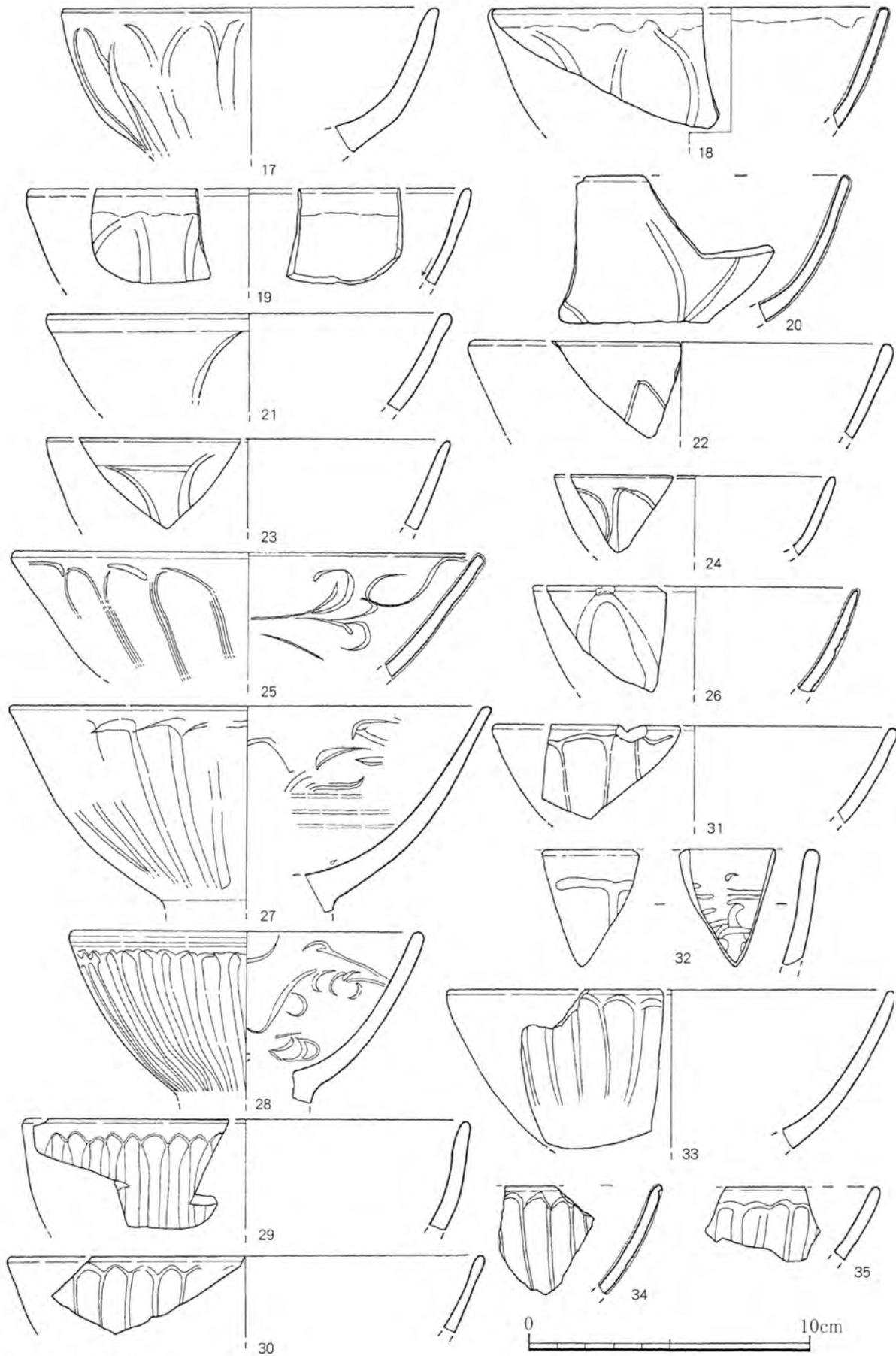
挿図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土地	層位
第96図・図版51	249	皿底部	C b	— 5.4 —	灰白色粗粒子	淡緑色	有り	内底は印花文。	R-24	不明
	250		D	— 4.2 —	灰白色粗粒子	灰緑色	有り	内底は目跡と圏線。	不明	不明
第97図・図版52	251	杯	"	— 6.4 —	白色微粒子	淡灰緑色	無し	内底は蛇の目釉剥ぎ。外面は腰部まで施釉する。	N-28	表採
	252		a	10.0 2.8 —	灰白色微粒子	青緑色	有り	碁笥底。釉は腰部まで施釉。	R-27	Ⅲb
	253		b	— 4.4 —	灰白色微粒子	灰緑色	有り	碁笥底だが、畳付が平坦に作られている。やや厚い釉を底部際まで施釉。	R-26	Ⅲd
	254		b	— 7.4 —	灰白色粗粒子	淡緑色	有り	"	S-28	Ⅲb
	255	鏝縁口縁盤	I A a	22.8 — —	灰白色	暗灰緑色	有り	内面に篋描きによる幅広蓮弁文を描く。	S-26	Ⅲb
	256		"	口縁部 — —	淡黄白色粗粒子	淡黄青色	有り	"	Q-28	攪乱
	257		"	口縁部 — —	灰白色微粒子	暗灰色	有り	"	S-26	Ⅲb
	258		"	口縁部 — —	灰色粗粒子	淡緑色	有り	鏝端をつまみ上げる。焼成不良。	Q-27	Ⅲc
	259		I A a	— — —	淡灰白色粗粒子	淡青緑色	有り	"	O-27	Ⅲc
	260		I A b	22.8 — —	灰色粗粒子	暗灰黄色	有り	内面に4本櫛による蓮弁文を描く。	R-25 R-26	Ⅲd Ⅲc
	261		I A d	口縁部 — —	白色粗粒子	灰黄緑色	有り	内面に数本単位の蓮弁文を廻らす。	Q-26 Q-27	Ⅲc Ⅲc
262	"	22.4 9.4 6.0	淡灰色微粒子	淡緑色	有り	3～4本単位の櫛描蓮弁文を廻らす。見込みの文様は不明瞭。高台内面まで釉を施すが、中心部までは及ばない。	Q-27 R-27 S-27	Ⅲb Ⅲb・Ⅲc Ⅲb		
第98図・図版53	263	鏝縁口縁盤	I A c	口縁部 — —	白色粗粒子	淡青緑色	有り	内面に数本単位の櫛描蓮弁文を描く。	R-25	Ⅱ
	264		I A d	口縁部	灰白色粗粒子	暗緑色	有り	"	Q-26	Ⅵ
	265		"	— — —	白色粗粒子	淡緑色	有り	"	O-27	Ⅱ
	266		"	口縁部 — —	灰白色微粒子	暗灰色	無し	"	Q-26	Ⅲc
	267		I A e	口縁部 — —	灰白色微粒子	灰緑色	無し	内面に花文を描く。	S-26	Ⅲb

第28表⑮ 青磁観察一覧

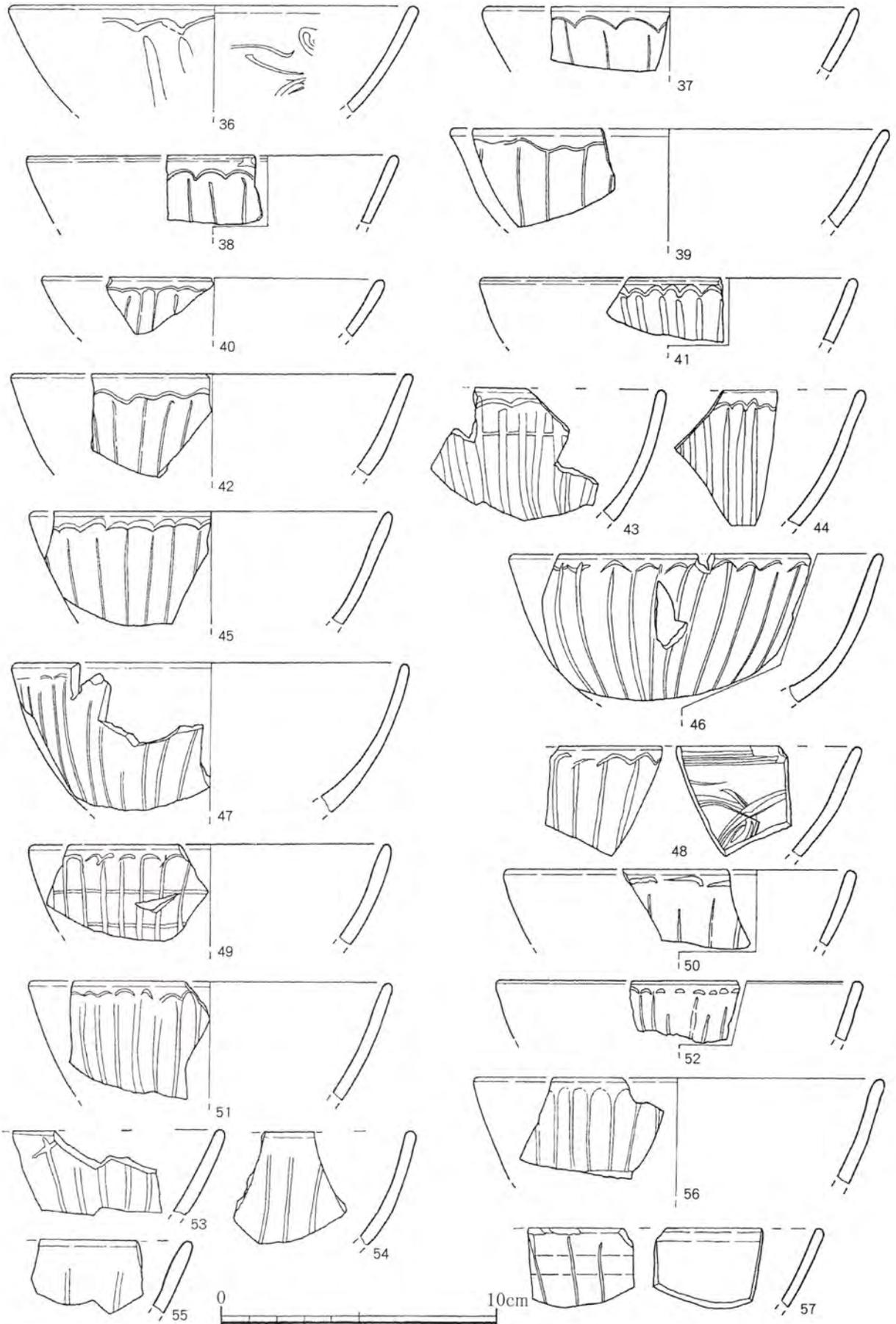
挿図 図版	番号	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様 その他の特徴	出土 地	層位
第98図・ 図版53	268	鈔 縁口 縁盤	I B	口縁部 — —	灰白色 粗粒子	淡緑色	有り	稜花盤。内面上部にラマ式蓮弁文?を描く。	O-27	II
	269		"	口縁部 — —	灰白色 微粒子	暗灰黄色	無し	稜花盤。内面上部にラマ式蓮弁文?を描く。胴部は花文と思われる。	S-27	III a
	270		I A f	21.0 — —	灰色 粗粒子	暗緑色	有り	無文鈔縁盤。	R-25 S-27	III c III b
	271	直口 口縁盤	II A a	口縁部 — —	灰白色 微粒子	単緑色	有り	直口口縁盤。内面に数本単位の櫛描蓮弁文を描く。	R-27	III a
	272		II B	22.6 — —	淡灰白色 微粒子	淡緑色	有り	内面に3本櫛による蓮弁文を廻らしている。	S-25	III b
	273		II A b	20.0 — —	灰白色 微粒子	灰緑色	無し	口縁部は逆「ハ」の字状に開く。無文。	Q-27	III b
	274	鈔 縁口 縁盤		— 底部 —	灰白色 微粒子	淡緑色	有り	内底は花文を描く。	Q-28	III b
275			— 13.8 —	灰白色 微粒子	淡緑色	有り	盤の底部で内底面に花文を描く。外底は蛇の目釉剥ぎ。	Q-27	III c	
276			— — —	灰色 粗粒子	淡灰緑色	有り	内底に花文(菊?)を描く。	R-26	III c	
第99図・ 図版54	277	鉢		22.8 — —	灰色 微粒子	淡緑色釉	無し	雷文帯。外面は口縁直下に雷文帯を施し、その下に区画の横線を廻らす。胴部には片切彫りによる文様が施される。内面は草花文?を施す。	S-26	III d
	278	花瓶		5.6 — —	灰白色 微粒子	淡緑色	有り	花瓶口縁部の破片。	Q-27	III a
	279	香炉		7.6 — —	灰白色・ 橙白色 粗粒子	灰緑色	有り	内面の胴下半部から内底は露胎。足を持つ香炉。	R-26	III b
	280	泉州窯 青磁皿	A	15.0 — —	灰色 微粒子	灰緑色	無し	薄手の皿で口縁部は外反する。	P-27	III b
	281		B	口縁部 — —	淡茶灰白 色 粗粒子	灰緑色 失透釉	有り	薄手の内灣口縁皿で素地に灰褐色の鉱物を含む。	R-28	III b
	282		"	13.7 — —	灰白色 粗粒子	淡灰黄色	有り	釉は薄くかけられ外面中央部から下部にかけて露胎。	R-28	III a
283			— 5.2 —	灰色・黒色 鉱物 混入 粗粒子	内面は 淡灰黄色	有り	薄手の皿の底部。高台断面が四角形を呈し、疊付の幅が広い。外面は胴部から外底部にかけて全体が露胎。	O-27	II	



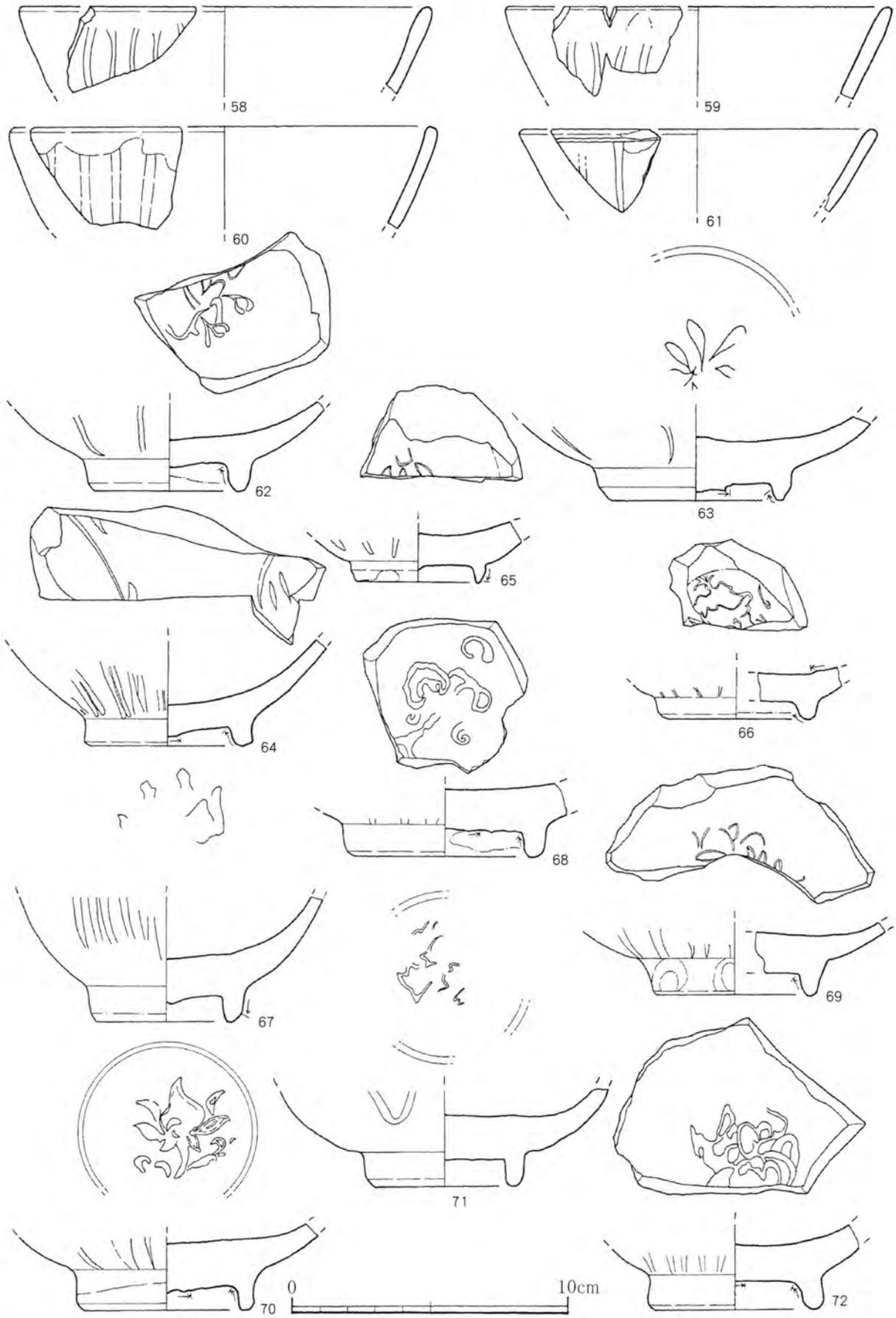
第82図 青磁<1> 碗 (劃花文、鎬蓮弁文)



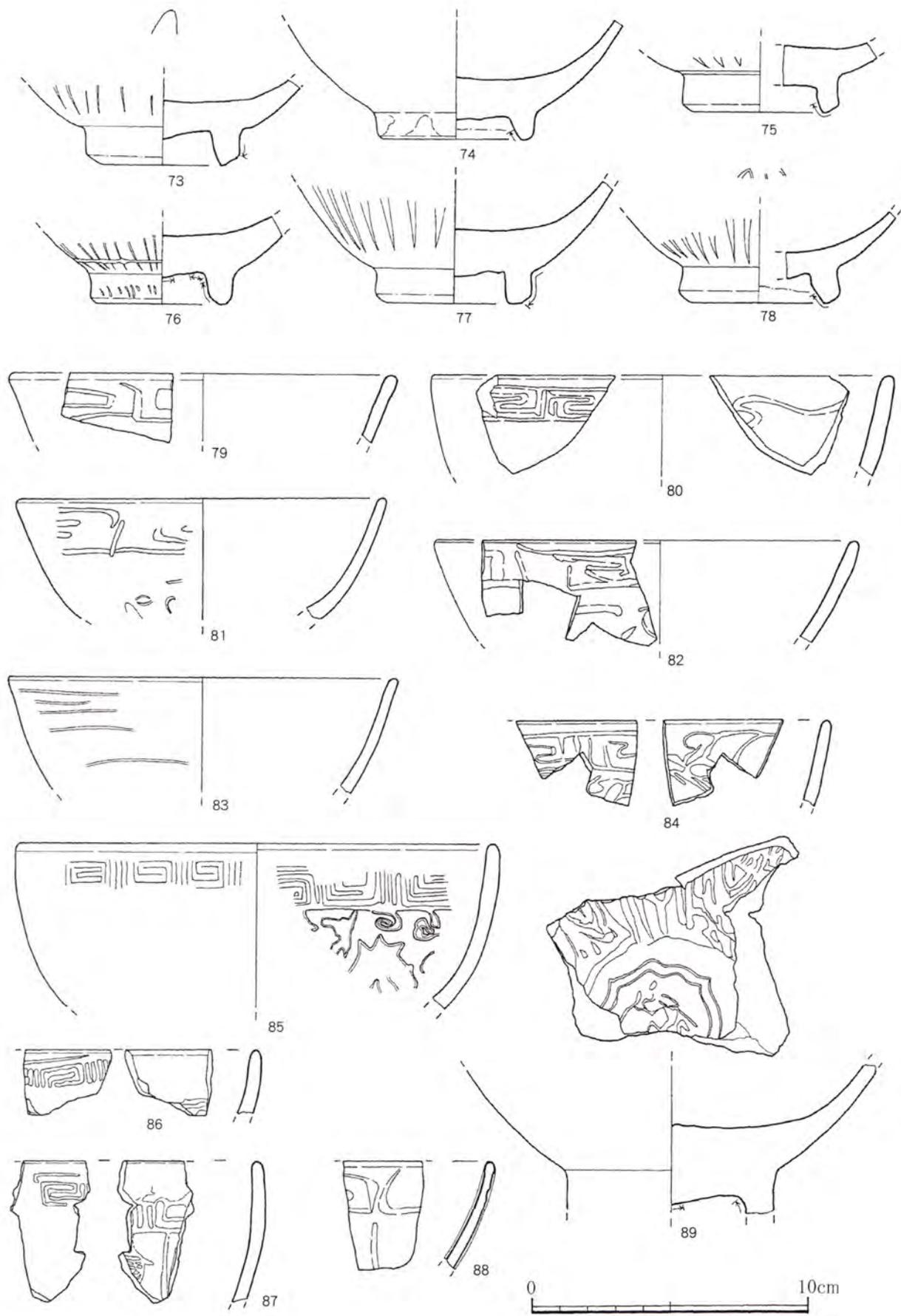
第83图 青磁<2> 碗 (蓮弁文)



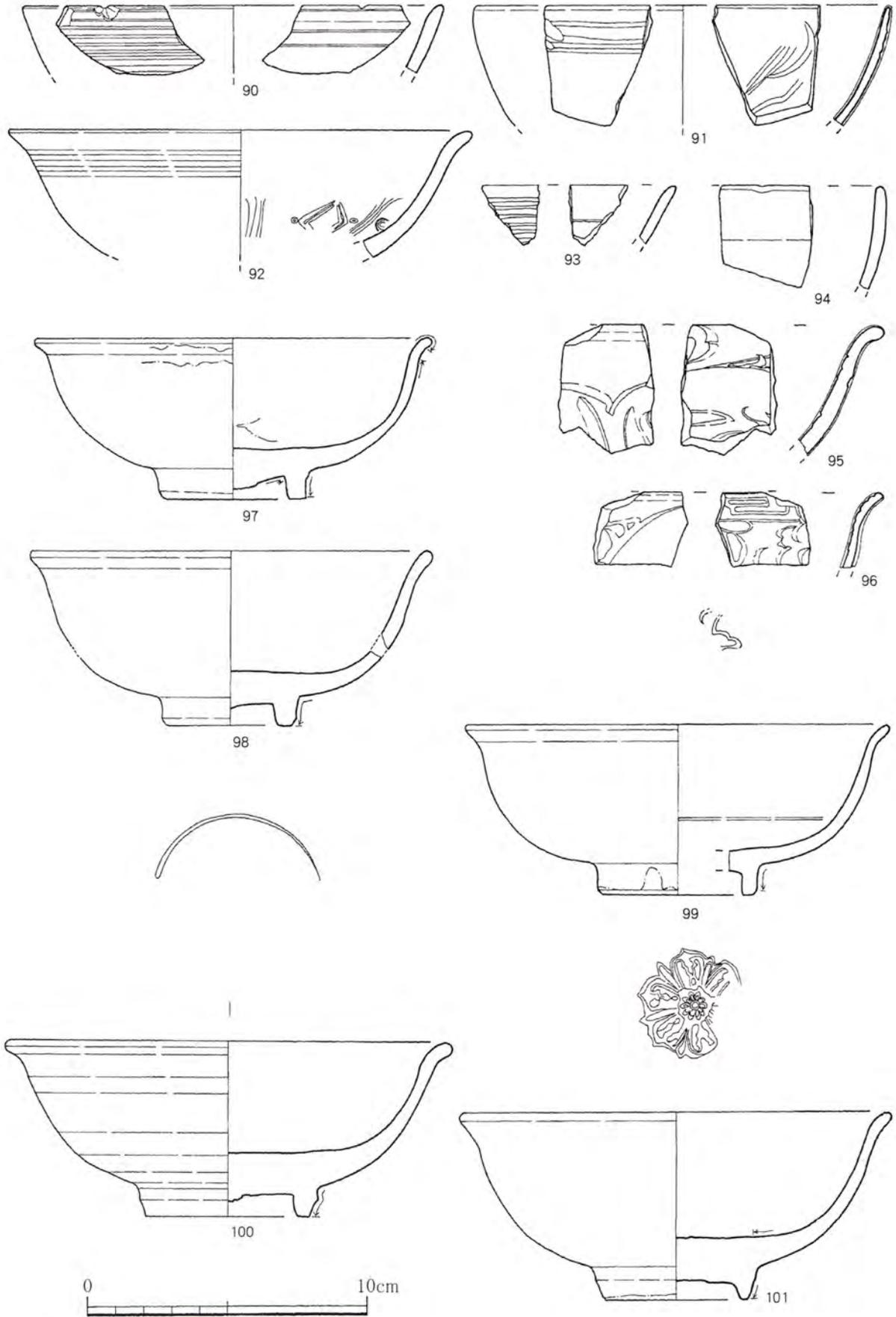
第84図 青磁<3> 碗(蓮弁文)



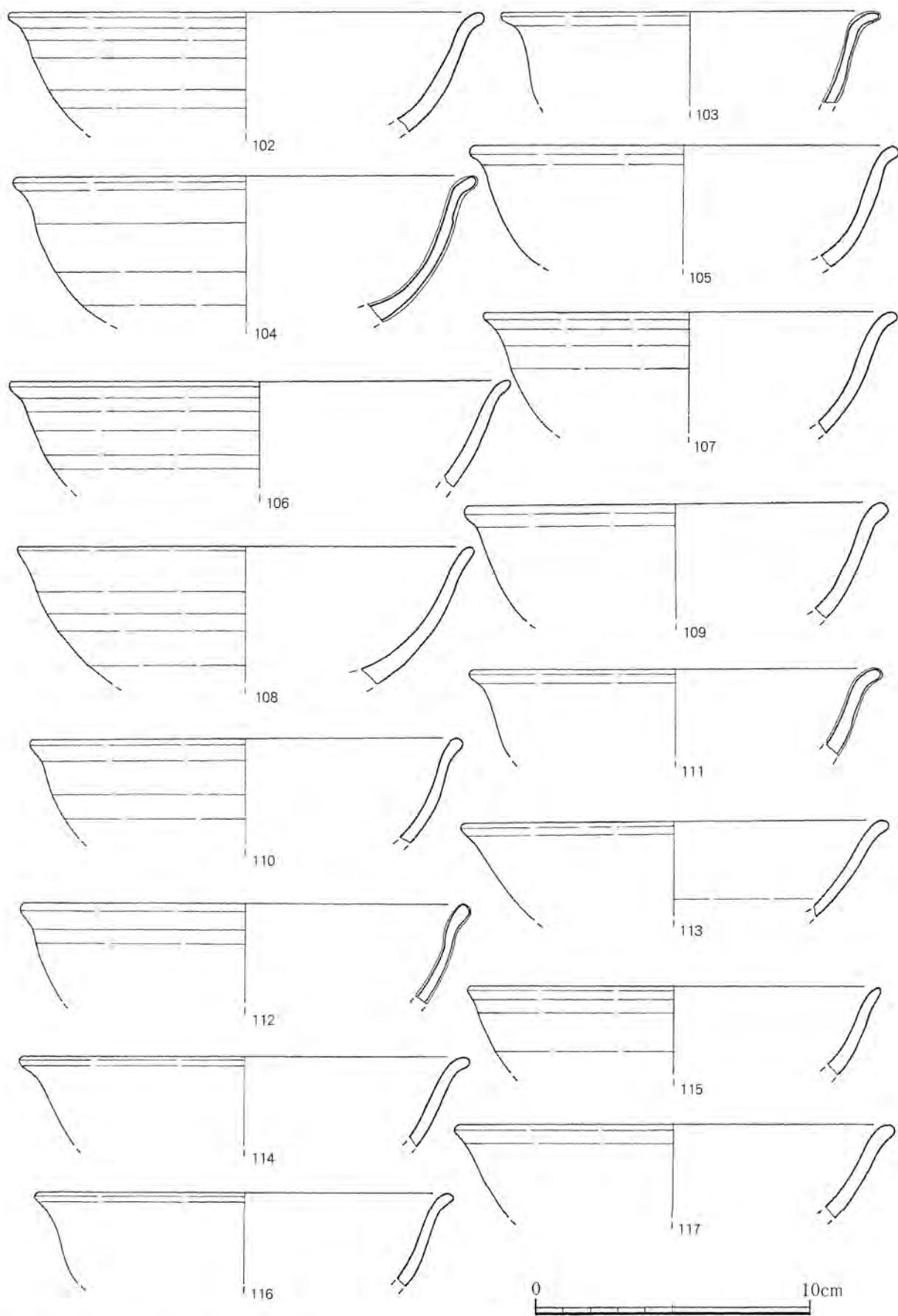
第85図 青磁<4> 碗 (蓮弁文)



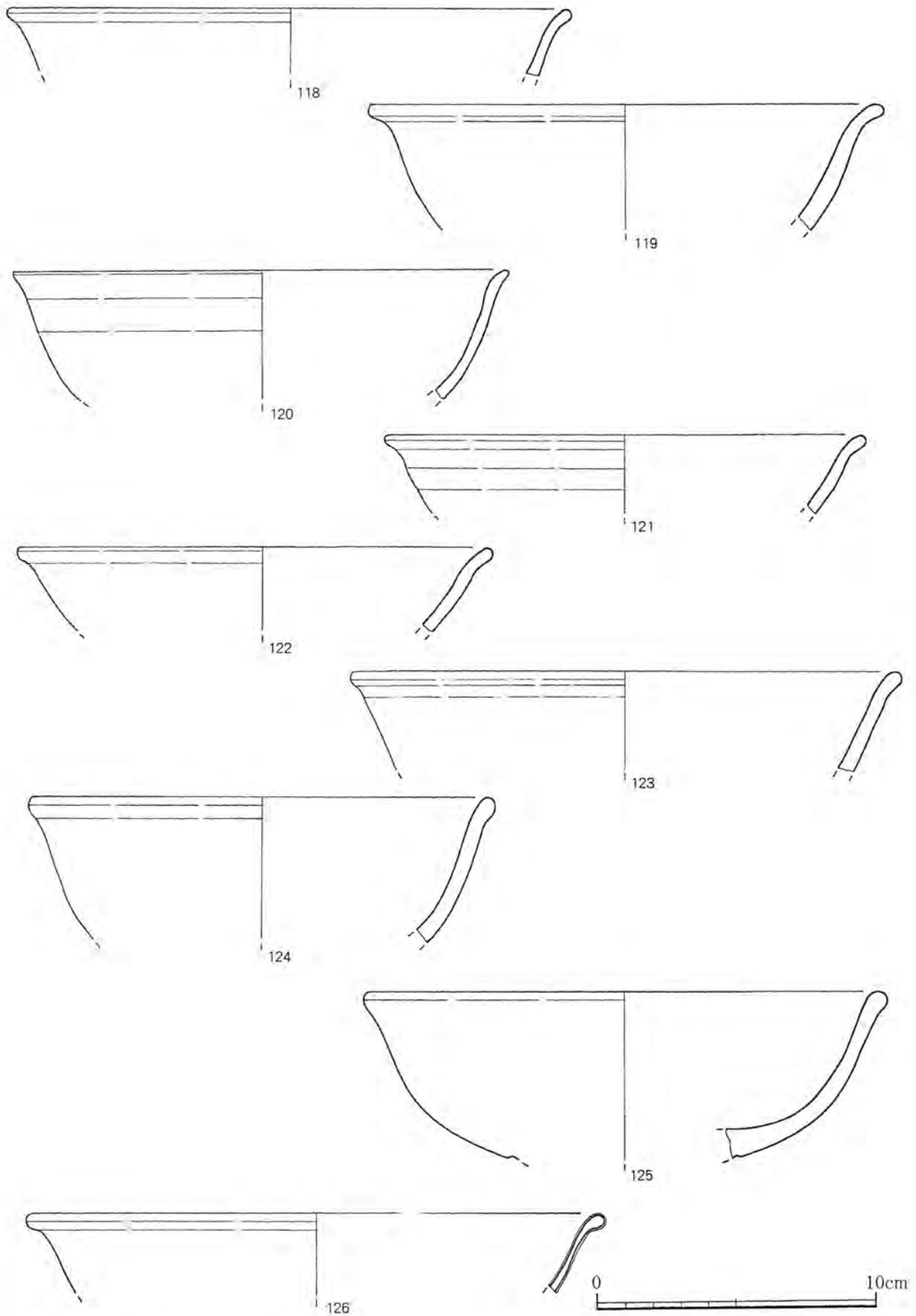
第86図 青磁<5> 碗 (蓮弁文、雷文帯)



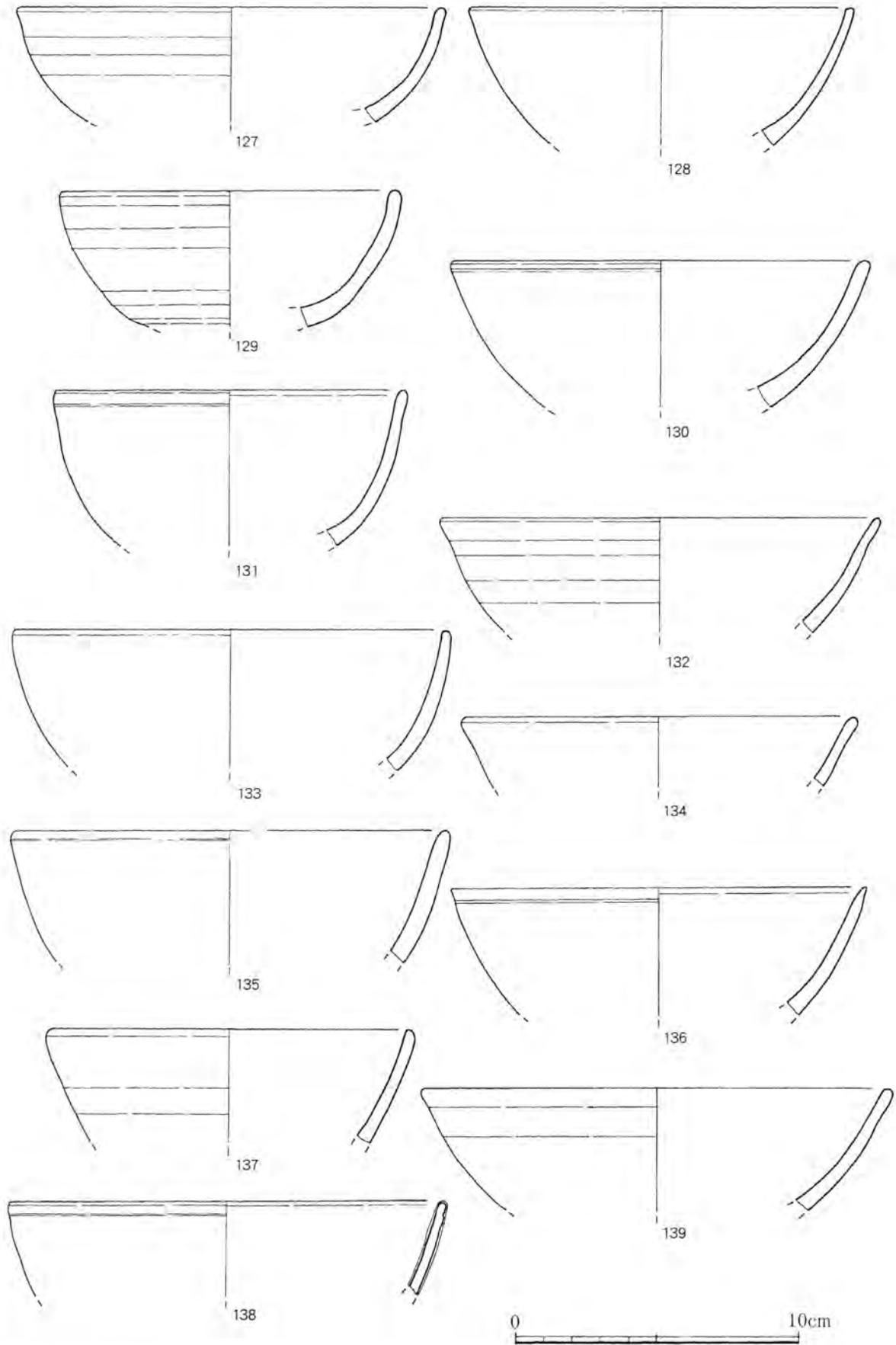
第87図 青磁<6> 碗 (弦文帯、無文)



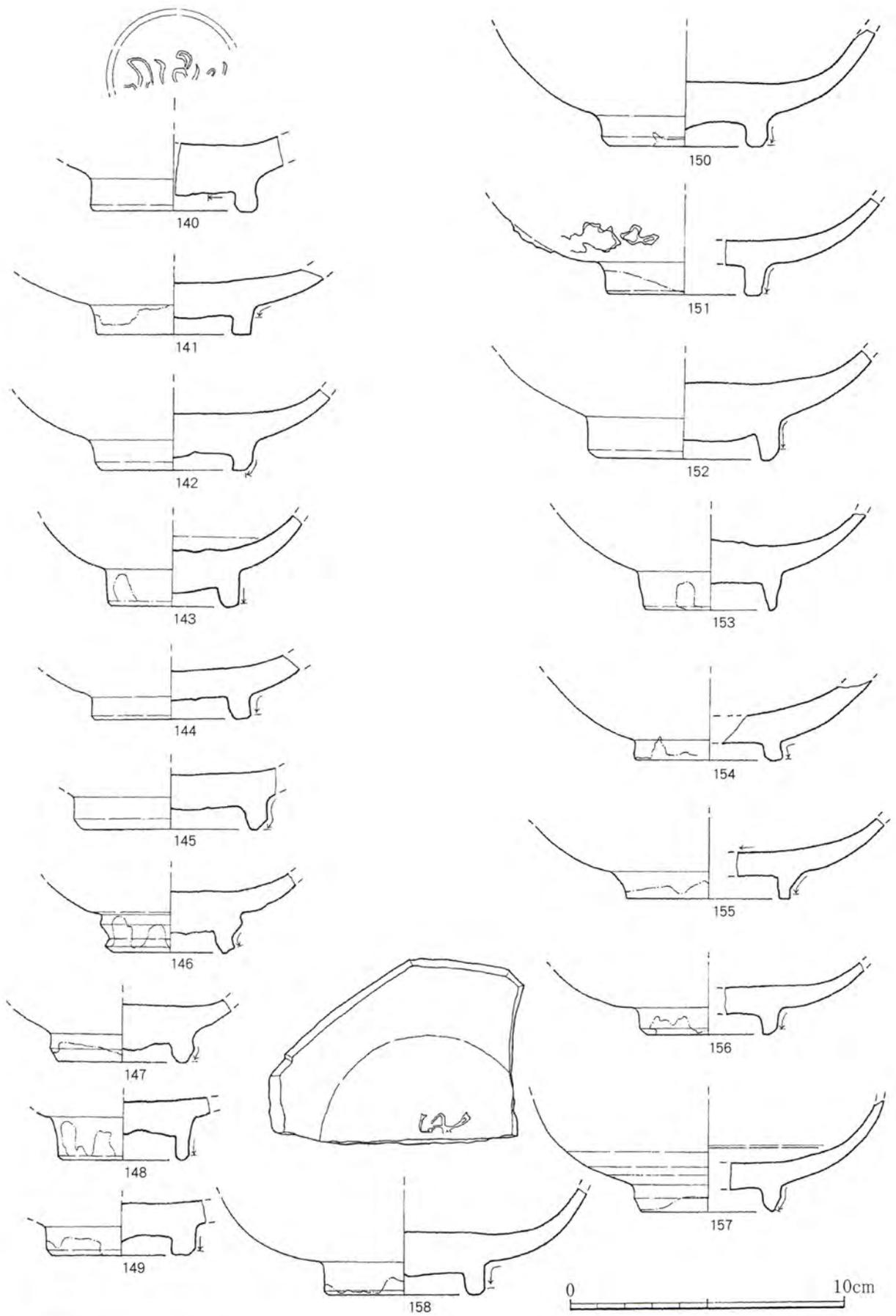
第88図 青磁<7> 碗 (外反口縁)



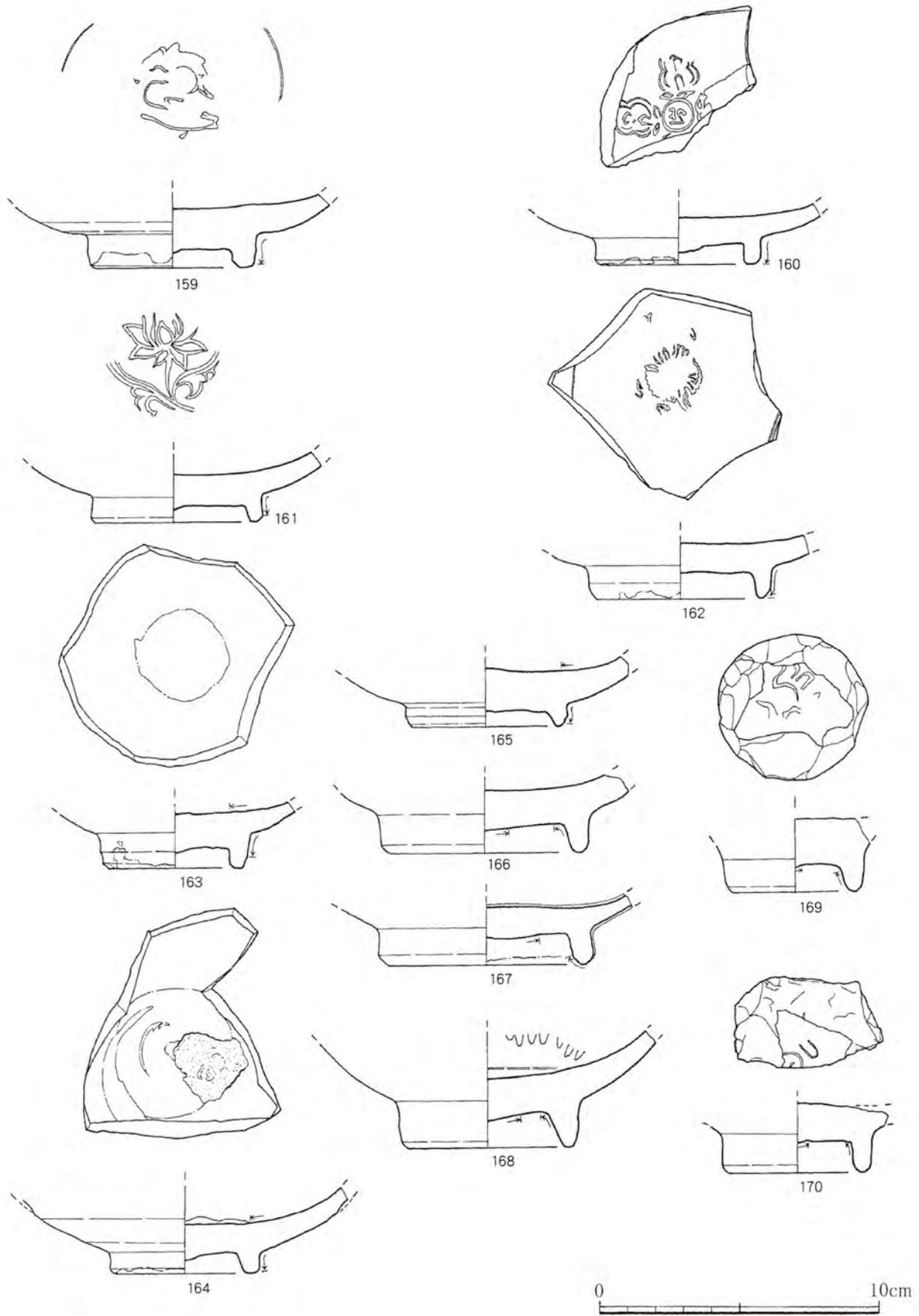
第89図 青磁<8> 碗 (外反口縁)



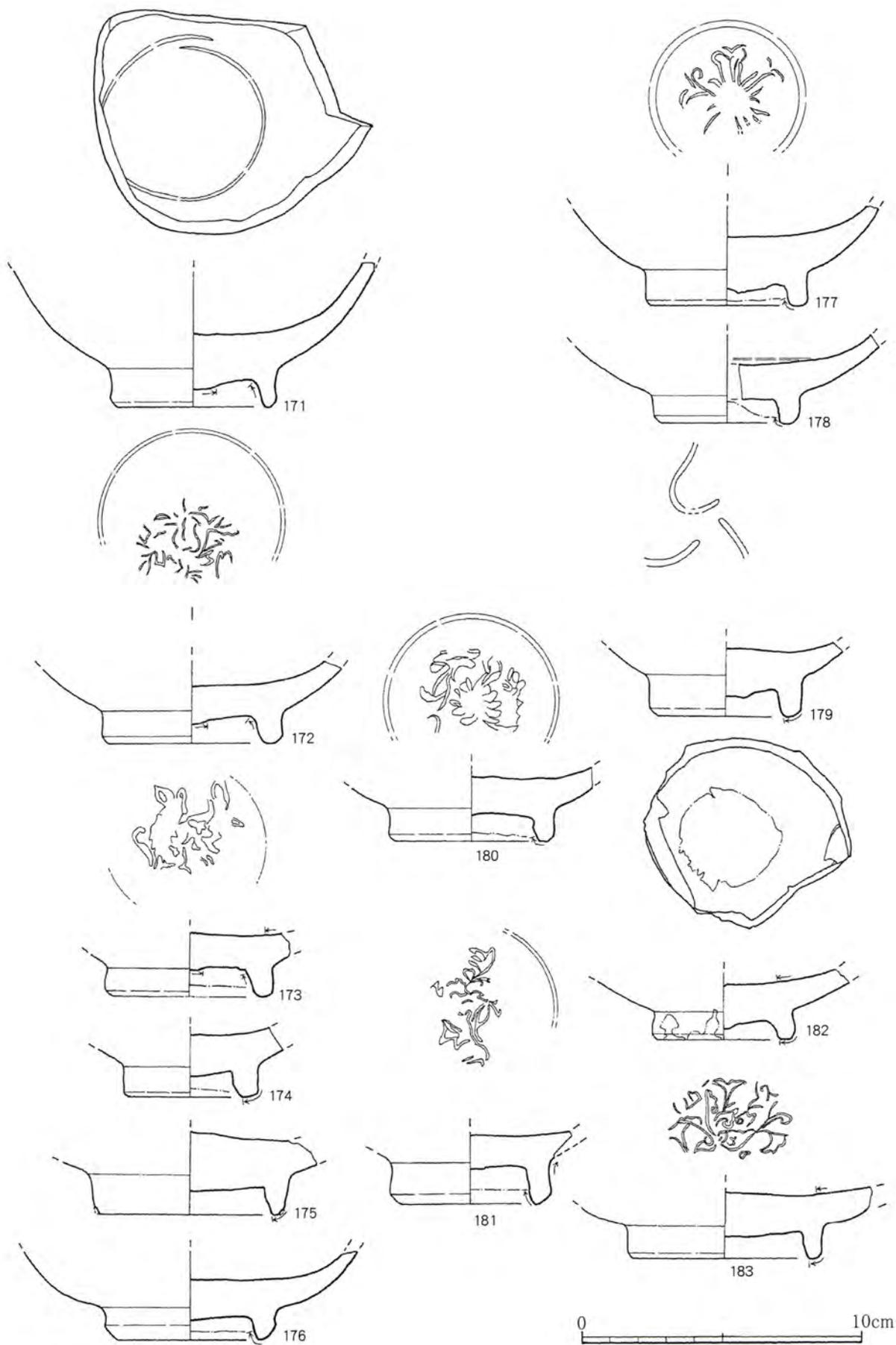
第90図 青磁<9> 碗 (直口口縁)



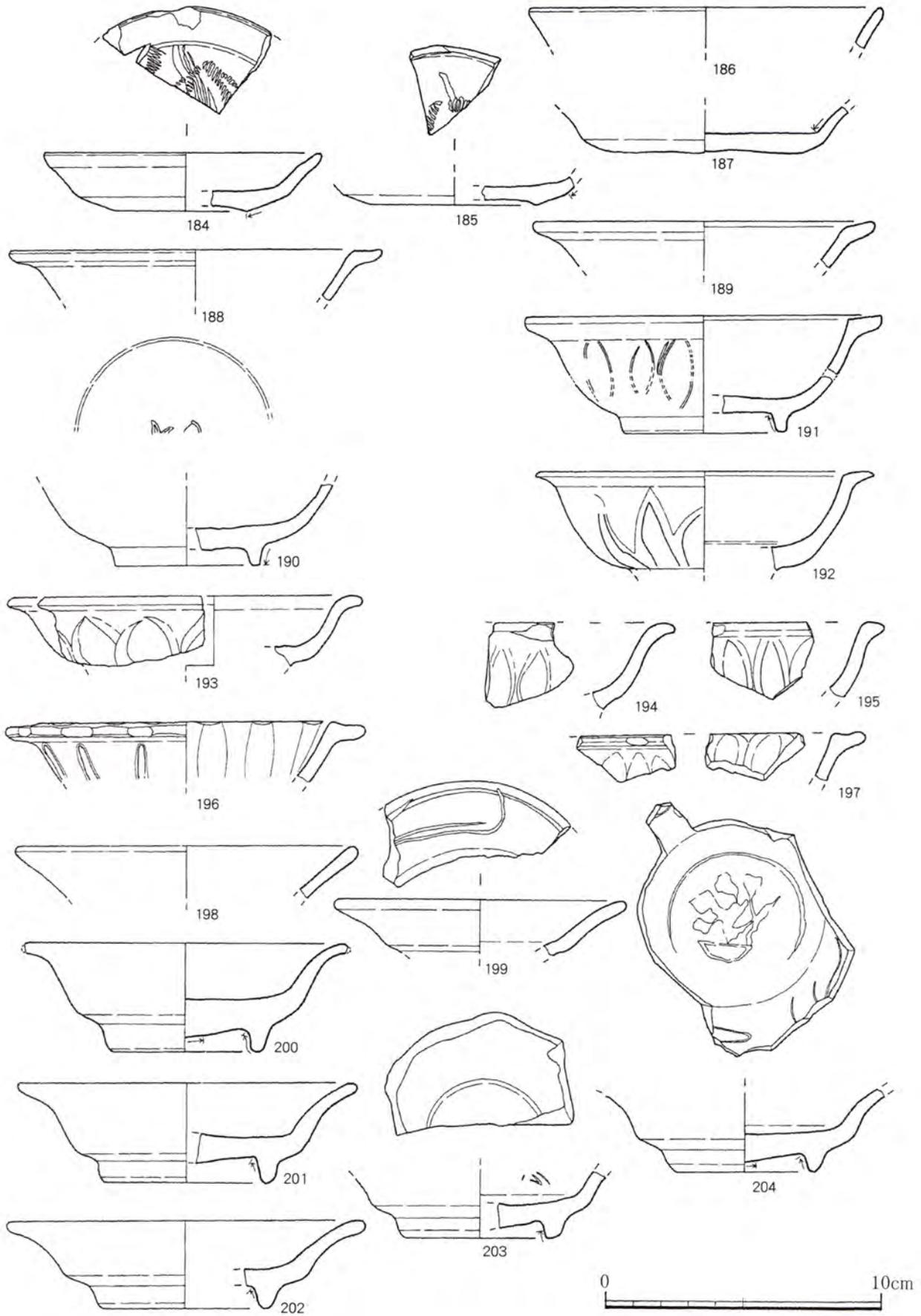
第91图 青磁<10> 碗 (底部)



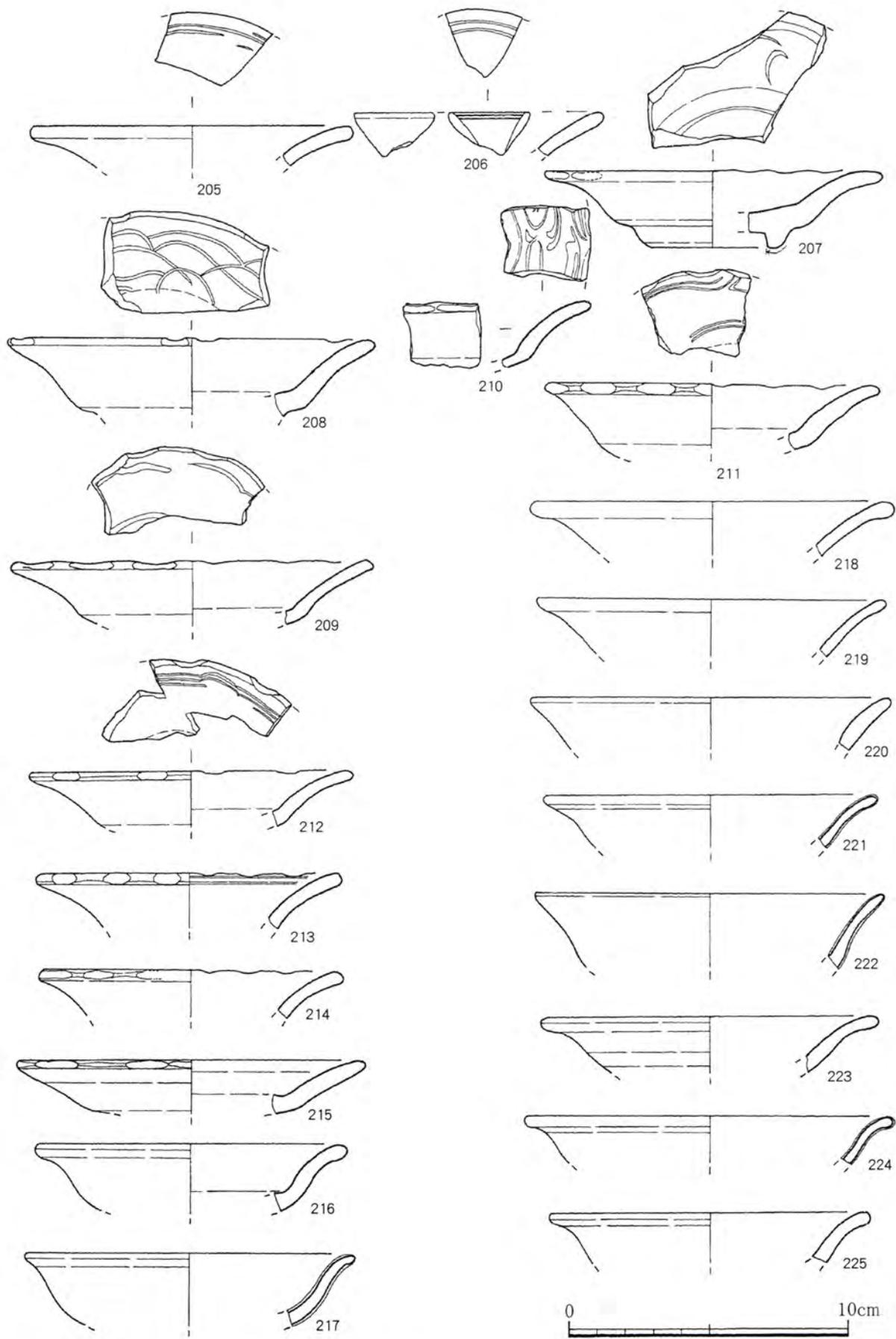
第92图 青磁<11> 碗 (底部)



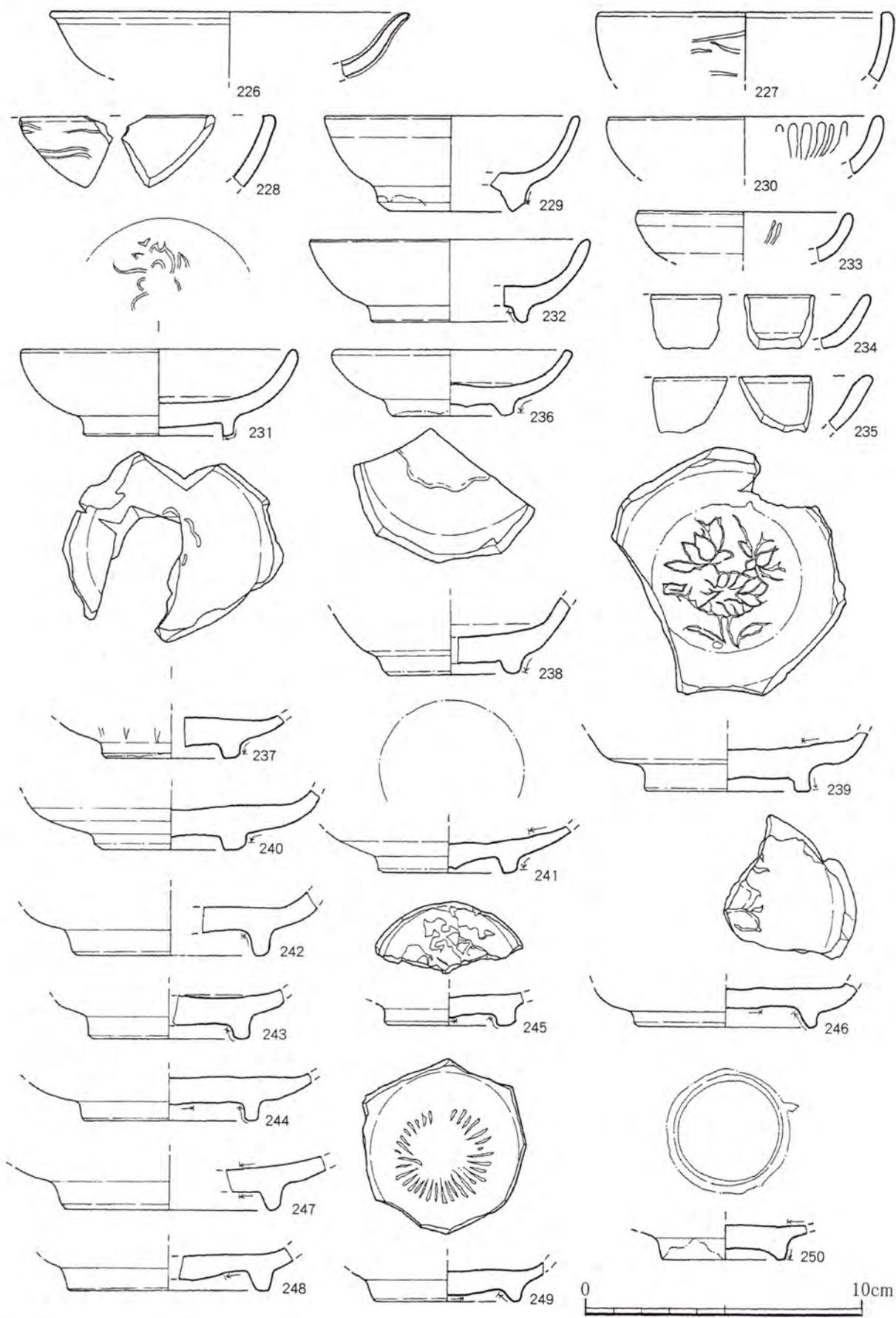
第93图 青磁<12> 碗 (底部)



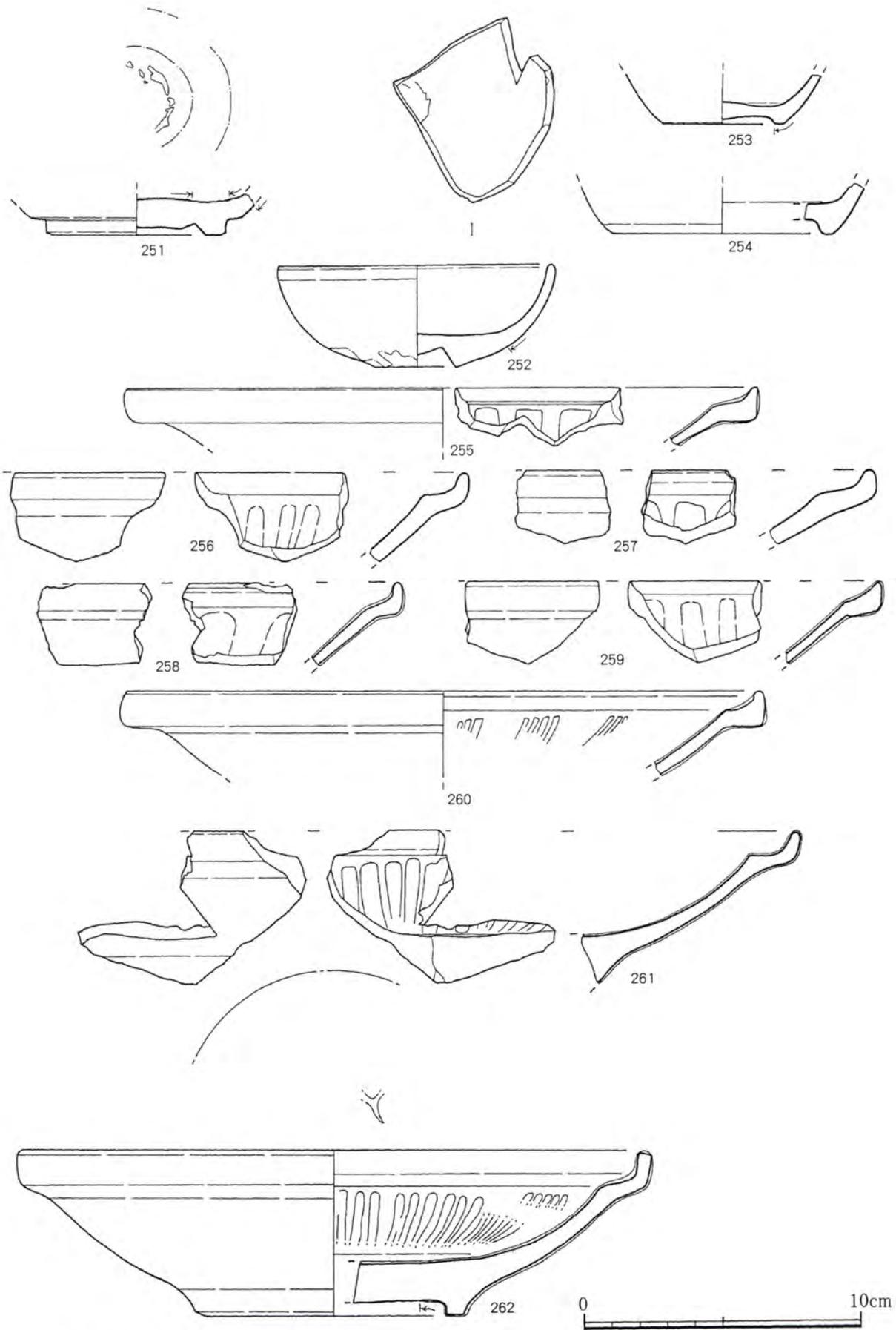
第94図 青磁<13> 皿（橢描文、口折口縁、腰折）



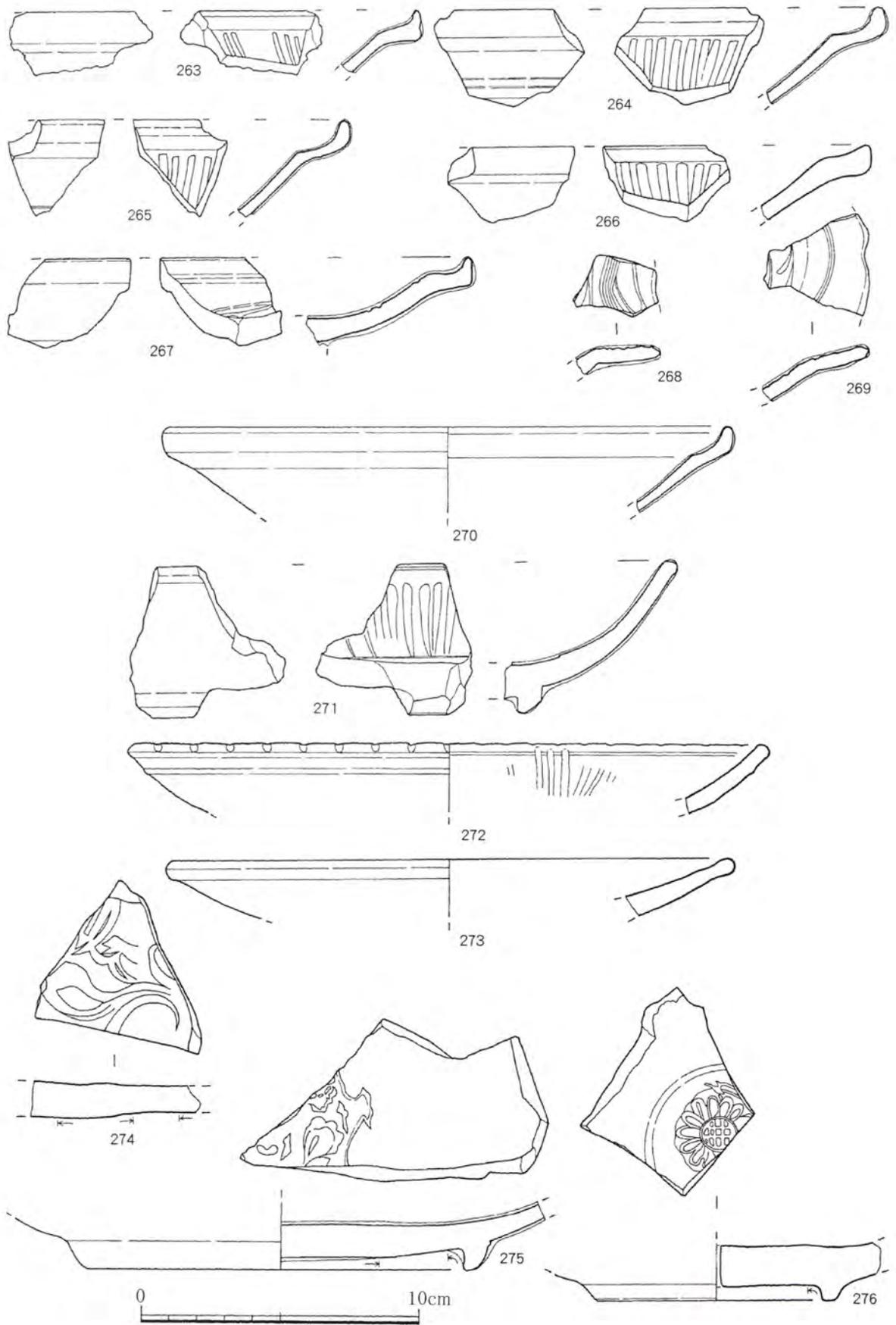
第95図 青磁<14> 皿 (稜花、腰折、外反口縁)



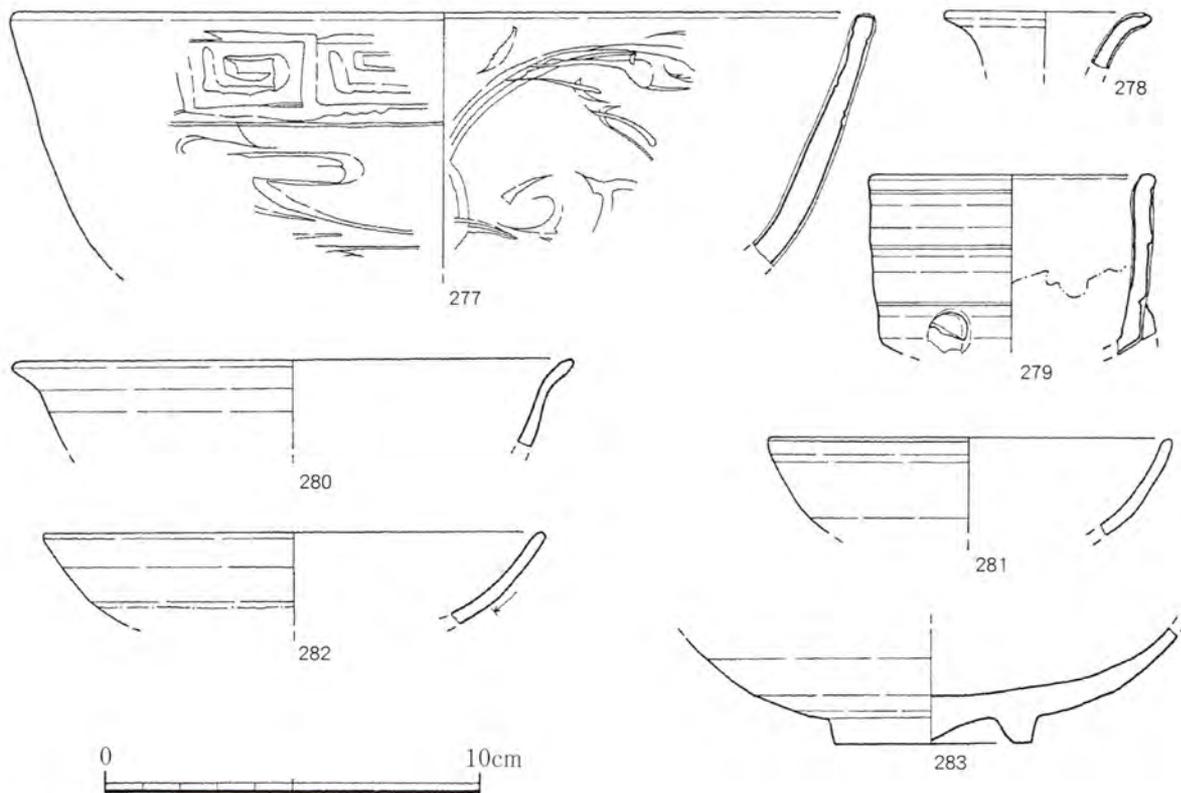
第96図 青磁<15> 皿 (直口口縁、底部)



第97图 青磁<16> 皿(底部)、杯、盘



第98図 青磁<17> 盤 (口折口縁、直口口縁)



第99図 青磁<18> 鉢、瓶、香炉、泉州窯青磁

玉縁状口縁を成す皿の底部（図239）の出土がみられた。出土例として佐敷グスクが挙げられる。

皿では口折皿の底部資料で見込みに双魚文を施す資料が得られた。この資料の特徴としては双魚文に釉がかかっていないことである。

杯は、今帰仁城跡と類似する。

泉州窯系青磁は皿が得られ、器形で直口と外反の2種に分けられた。いずれも釉は濃緑色で外面の胴部まで施釉し、器面に混入物がみられる。第Ⅲ層上部の出土である。

〈註〉

註1：當眞嗣一・大城慧ほか 1994「屋良グスク-屋良城跡公園整備計画に伴う範囲確認調査」『嘉手納町文化財調査報告書』第1集 嘉手納町教育委員会

第5節 染付

染付は総数209点得られた。器種は碗・皿・鉢・杯・壺の5種類であった。その中で碗が最も多く、次いで皿の順に減少している。時期的には15世紀後半から18世紀中頃に位置付けられ、16世紀代が多い（第56表）。

染付の分類は器種別の部位別に行った。以下、それぞれの概略について述べ、第29表①～⑤に個々の遺物について記述した。

(1). 碗

・口縁部

口縁部の形状から直口口縁と外反口縁の2種類に分けられ、前者をⅠ類、後者をⅡ類とした。

Ⅰ類：直口口縁。外面の文様よりA～Eの5種類に細分した。内面には圏線を描くものと無文がある。

A種：外面に圏線と如意雲状の文様を描く（第100図1・3～5）。

B種：外面に圏線と波濤文・宝相華文を描く（第100図2・6・7）。

C種：外面に圏線と唐草文を描く（第100図8～10）。

D種：外面に圏線と雷文帯を描く（第100図12）。

E種：不明（第100図11）。

Ⅱ類：外反口縁。外面の文様よりA～Eの5種類に細分した。内面は圏線・四方禪文・列点文？などを描く。

A種：外面に圏線と唐草文を描く（第100図13・14・17・18・第101図19～21・23・26・28・30・32・33）。

B種：外面に圏線と牡丹・宝相華文を描く（第100図15・16）。

C種：外面に圏線と草花文？を描く（第101図22・25・27・29）

D種：外面に圏線と草花文または唐草文を描き、内面に四方禪文を描く（第101図24）。

E種：外面に波濤文と草花文または唐草文を描き、（第101図31）。

・胴部

胴部片は外面に草花文を施す。見込み際には圏線を巡らしている。（第101図34～37）。

・底部

底部は高台作りからⅠ～Ⅵ種類に細分した。

Ⅰ類：高台内削りは深く、高台外面より内面が高い（第101図38・C41～43・53・56・57）。

Ⅱ類：高台内削りは深い、高台内外面とも高さは同じ（第101図39・C47・50・51・54）。

Ⅲ類：高台内削りは深い、高台内面より外面が高くなる（第102図45・46・48・52）。

Ⅳ類：高台内削りは浅い（第102図40・49）。

Ⅴ類：高台内削りは浅く、高台内面より外面が高くなる（第102図55）。

VI類：不明（第102図44）。

(2). 皿

皿は口縁部の形状から I・II類の2種類に分類した。

・口縁部

I類：外反口縁で外面は唐草文を施す（第103図58・59・61）。

II類：直口口縁で外面は無文、内面口縁下部に圈線が廻る（第103図60）。

・底部

底部は高台の形状から I～V類の5種類に分類した。

I類：基筒底を呈し、口縁部はII類の形状を成す。見込みに草花文や青花水藻推魚文を施す（第103図62～64）。

II類：高台内削りは浅く、高台径が広いものと狭いものがある。前者を a とし、後者を b とした。

a－高台径が広い（第103図66・69・71・74）。

b－高台径が狭い（第103図65・72・73）。

III類：高台内削りは不明、底部は厚い（第103図67）。

IV類：高台内削りは浅い（第103図68）。

V類：不明（第103図70）。

(3). 鉢

鉢は口縁部は直口で胴部中央部に小さな凸部を持ち、それは外面の文様の構図上、胴上部と下部の区画帯となっている。胴上部は草花文や花鳥折枝で、胴下部は如意頭文を施す（第103図75～82）。

(4). 杯

杯は胴部から大きく開き口縁部が外反する浅めのもの（第103図84）と高台から口縁部へ垂直に近い状態で延びるため深くなるもの（第103図83）の2種類ある。

(5). 壺

壺は2点得られ、1点図化した。頸部片で外面に文様を施すが構図は不明（第103図85）。

小結

染付の出土状況についてみると第III層 a・b層で7割を占めている。特に4区Q・R・S－27ラインに集中している。時代は15世紀後半から16世紀後半が主体となっている。産地は江西省の景德鎮窯と福建・広東省系に分けられ両者ともほぼ半数となっている。

第29表① 染付観察一覧

挿図版	番号	器種	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉調	貫入	器形・文様・その他の特徴	出土地	層位
第100 図・ 図版 55	1	碗	I A	14.4 — —	淡灰白色 粗粒子	焼成不良 で 不明瞭	無し	文様は不明。	O-24	II
	2		I B	12.6 — —	白色 微粒子	淡青白色	両面 に荒い	外面上部に波濤文を施す。	S-26	III b 10/20
	3		I A	13.0 — —	白色 微粒子	淡灰白色	無し	外面は花文。	R-28	表採
	4		I A	11.0 — —	白色 微粒子	淡青白色	無し	内・外面の口縁部に界線。	S-27	III a 5/10
	5		I A	11.0 — —	白色 粗粒子	白色	無し	外面に雲?の文様。	S-27 R-27	III b III b 10/15 2点接合
	6		I B	10.0 — —	白色 粗粒子	濁淡灰白 色	無し	外面の口縁部は波濤文で胴部はアラベスク。 内面の口縁部は界線を施す。福建?	不明	III a 0/10
	7		I B	10.0 — —	白色 微粒子	淡灰白色	無し	外面口縁に波濤文、胴部に唐草文(アラベスク)?	S-28	III b
	8		I C	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	無し	外面に唐草文。	S-27	III b
	9		I C	口縁部 — —	白色 微粒子	淡青白色	粗い	"	S-27	III c
	10		I C	口縁部 — —	白色 微粒子	白色	無し	外面に草花文?。	O-27	II
	11		I E	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	無し	内・外面に気泡が見られる。 文様は不明。	L-27	II
	12		I D	口縁部 — —	白色 微粒子	淡青白色	無し	外面に雷文帯。	O-26	II
	13		II A	口縁部 — —	淡灰白色 粗粒子	淡灰白色	両面 有り	内面口縁部に圈線。 外面に渦文風唐草?が見られる。	R-26	III b 20/25
	14		II A	口縁部 — —	淡灰白色 粗粒子	淡青白色	無し	口唇部は鉄釉(サビ)を帯びる。 外面に唐草文?	Q-27	III b
	15		II B	14.6 — —	淡灰白色 粗粒子	淡青白色	無し	口唇部は鉄釉(サビ)を帯びる。 外面に牡丹?の文様を施す。	P-26	III c
	16		II B	11.6 — —	淡灰白色 粗粒子	淡灰白色	無し	外面は宝相華唐草文。	R-26	III b
	17		II A	口縁部 — —	白色 微粒子	淡灰白色	無し	内面の口縁部に四方樺文。	S-28	III a 5/10
	18		II A	14.2 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	無し	"	S-27	III a 5/10
	図第 版101 56図		19	II A	口縁部 — —	白色 微粒子	淡青白色	両面 有り	口唇部は鉄釉(サビ)を帯びる。 文様は唐草文。	O-26

第29表② 染付観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉調	貫入	器形・文様・その他の特徴	出土地	層位
第 101 図・ 図版 56	20	碗	II A	口縁部 — —	淡灰白色 粗粒子	淡青白色	両面 に荒い	外面に唐草文。	Q-26	III b 10/20
	21		II A	口縁部 — —	白色 粗粒子	淡青白色	両面 有り	"	S-26	III b 10/20
	22		II C	口縁部 — —	白色 微粒子	淡青白色	無し	文様は不明。	不明	不明
	23		II A	口縁部 — —	白色 微粒子	淡灰白色	両面 有り	外面に唐草の文様を施す。	R-28	II
	24		II D	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡青白色	無し	内面に四方禪文。	Q-27	III b
	25		II C	口縁部 — —	淡灰白色 微粒子	淡灰白色	内底 に有り	口唇部は茶褐色を帯びる。 文様は不明。	Q-27	III a
	26		II A	口縁部 — —	淡白色 粗粒子	淡青白色	無し	外面に花文?を描く。	III区	表採
	27		II C	口縁部 — —	白色 粗粒子	淡灰白色	内底 に有り	文様は不明。	Q-27 S-27	III b III a 2点接合
	28		II A	口縁部 — —	白色 微粒子	淡青白色	無し	外面に草花文?を施す。	S-28	III b
	29		II C	口縁部 — —	白色 微粒子	淡青白色	無し	文様は大半が欠失し、不明。	R-27	III a 5/10
	30		II A	口縁部 — —	白色 粗粒子	淡青白色	無し	内面口縁部に圈線。 外面に唐草文を施す。	S-26	III a 5/10
	31		II E	口縁部 — —	白色 微粒子	淡青白色	両面 有り	内彎口縁	O-27	II
	32		II A	口縁部 — —	白色 微粒子	白	無し	外面は唐草文。	Q-27	III a 0/10
	33		II A	口縁部 — —	白色 微粒子	淡青白色	無し	外面に唐草文。	P-26	II
	34		胴部	— — 胴部	白色 粗粒子	白	無し	外面に花文。	R-28	III b
	35			— — 胴部	灰白色 粗粒子	灰緑色	無し	外面は草花文。	グリット 不明	不明
	36			— — 胴部	白色 粗粒子	淡青白色	無し	外面は唐草文。	Q-27	III a 5/10
	37			— — 胴部	淡灰白色 微粒子	淡青白色	無し	外面に梅?の文様。	S-27	III b
38	底部	— — 4.8 —	淡灰白色 粗粒子	淡灰白色	無し	畳付は露胎。 宝相華文	S-26	III b 0/10		

第29表③ 染付観察一覧

挿図版	番号	器種	分類	口径 底器高 (cm)	素地	釉調	貫入	器形・文様・その他の特徴	出土地点	層序
第102図・図版57	39	碗	II	— 5.6 —	淡灰白色 粗粒子	淡灰白色	無し	畳付は露胎。 内底は松竹梅の文様。	R-27	III a 5/10
	40		IV	— 6.0 —	白色 粗粒子	淡黄白色	無し	畳付は露胎。 外面は唐草文。	P-25	III d
	41		I	— 5.0 —	白色 微粒子	淡青白色	両面 有り	畳付から外底まで露胎。 文様は不明。	O-27	III b 5/10 II 2点接合
	42		I	— — —	白色 粗粒子	淡青白色	無し	碗底部。 文様は不明。	R-27	III a 5/10
	43		I	— 5.8 —	白色 粗粒子	淡青白色	両面 有り	畳付けから外底にかけ露胎。 内底にねじ花?の文様。	Q-27	III b
	44		VI	— — —	白色 粗粒子	淡青白色	両面 有り	底面のみ資料である。 内底見込みに「福」の文字を施す。	R-26	III c 最下
	45		III	— 5.6 —	白色 微粒子	淡青白色	無し	畳付は露胎する。 見込み部分に「福」字を描く。	O-27	II
	46		III	— — —	白色 粗粒子	淡青白色 外底黄白色	無し	高台は高いが、畳付が欠損。 見込みに十字花文を施す。	N-27	III d
	47		II	— 6.0 —	淡青白色 粗粒子	淡青白色	無し	畳付から高台内側まで露胎。 内底には如意頭が、外面には宝相華文が見られる。	III 区	表採
	48		III	— 5.0 —	淡灰白色 粗粒子	淡青白色	無し	焼成前に剥がれた高台部分を貼り付けて 修復した跡がある。 外面は芭蕉文、内面には花の文様を施す。	S-27	III b
	49		IV	— 5.8 —	白色 粗粒子	淡青白色	無し	畳付と外底の一部に露胎を見る。 見込みに梅月の文様。	Q-26	III b 10/20
	50		II	— 5.6 —	白色 微粒子	淡灰白色	無し	畳付は露胎。	P-24	II
	51		II	— 4.6 —	白色 微粒子	淡青白色	無し	畳付は露胎。 外面は唐草文。	Q-28	II
	52		III	— 5.4 —	白色 粗粒子	淡青白色	無し	畳付は露胎。 見込みに梅月の文様。	不明	不明
	53		I	— 5.0 —	淡灰白色 粗粒子	灰白色	有り	畳付から高台内面まで露胎。 外面、内底とも圏線のみ確認できる。	S-27	III b
	54		II	— 6.0 —	淡灰白色 粗粒子	淡灰白色	無し	畳付から高台内面まで露胎。 内底は蛇の目状に釉を掻きとる。 外面に圏線のみ確認できる。	不明	不明
	55		V	— 5.0 —	白色 粗粒子	淡青白色	無し	畳付は露胎。 内底の釉は蛇の目状に掻きとられる。	O-26	II
	56		I	— 6.0 —	白色 微粒子	淡青白色	両面 荒い	畳付は露胎。 腰部に蓮弁文。	Q-28	II
	57		I	— 5.4 —	淡灰白色 粗粒子	淡灰白色	内底に 有り	畳付から外底にかけ露胎。 内底の釉は蛇の目状に掻きとられる。 文様は不明。	S-27	III b

第29表④ 染付観察一覧

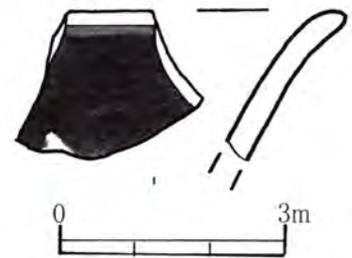
挿図 図版	番号	器種	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉調	貫入	器形・文様・その他の特徴	出土地点	層序	
第 103 図・ 図版 58	58	皿	I	8.6 4.6 2.1	白色 粗粒子	淡青白色	無し	疊付を除き総釉。 内底は十字花文で、外面は唐草文。	Q-26	Ⅲ b	
	59		I	9.6 — —	淡灰白色 粗粒子	淡青白色	無し	内面口縁部に圈線。 外面は宝相華唐草文。	S-27	Ⅲ a	
	60		I	7.8 — —	白色 微粒子	淡青白色	無し	外面は唐草文と花の文様。	Q-27	Ⅲ a 5/10	
	61	皿 底部	II	12.0 — —	白色 粗粒子	淡黄白色	無し	内面口縁部に界線。 文様は確認できない。	Q-27	Ⅲ a	
	62		II	— 4.0 —	白色 微粒子	淡青白色	無し	疊付から高台内側まで露胎。 見込み部の文様は不明。	R-27	Ⅲ c	
	63		II	— 3.6 —	淡灰白色 粗粒子	淡青白色	両面 に荒い	疊付は露胎。 見込み部に青花水藻推魚文。	S-26	Ⅲ b 10/20	
	64		II	— 3.4 —	白色 粗粒子	淡青白色	両面 に荒い	疊付は露胎。 見込み部に「寿」の文字。	R-27	Ⅲ b	
	65		II b	— 4.4 —	白色 粗粒子	淡黄白色	内底 有り	疊付は露胎。 見込みの部分に草花文。	Q-27	Ⅲ b	
	66		II a	— 6.0 —	白色 粗粒子	淡青白色	無し	疊付は露胎。 内底に花文、外底に文字。	O-27	II	
	67		III	— 6.4 —	白色 粗粒子	淡灰白色	両面 有り	高台下部が欠損。 内底には樹上に鳥の文様、外底は不明。	Q-27	Ⅲ c 最下	
	68		IV	— — —	白色 微粒子	淡黄白色	両面 に荒い	疊付は露胎。 見込み部分に十字花文。	O-28	Ⅲ d 攪乱	
	69		II a	— — —	白色 微粒子	淡黄白色	外底 有り	疊付は露胎。 内底に玉取り獅子文？	P-27	Ⅲ b	
	70		V	— — —	白色 粗粒子	淡青白色	内底 有り	底面だけの資料である。外底は露胎。 見込みの部分に花文？を描く。	O-27	II	
	71		II a	— 5.8 —	白色 微粒子	淡灰白色	無し	疊付から高台内面にかけ露胎。 外面に唐草文、内面には山？の文様。	S-28	Ⅲ i	
	72		II b	— 5.4 —	白色 微粒子	淡青白色	無し	疊付は露胎。 見込みの文様は不明。	R-27	Ⅲ a 5/10	
	73		II b	— 4.6 —	灰白色 粗粒子	灰白色	無し	疊付から外底にかけて露胎。 見込みに十字花文を施す。	R-27	Ⅲ b 最下	
	74		II a	— 6.0 —	白色 粗粒子	淡青白色	無し	疊付から外底にかけ露胎。疊付に砂が付着。 内底に玉取り獅子文？が見られる。	O-27	II	
	75	鉢	口 縁部	—	9.0 — —	白色 微粒子	白色	無し	外面胴部に隆圈線。 外面に草花文。	Q-27	Ⅲ c 最下
	76			—	— — —	白色 微粒子	淡青白色	無し	外面に隆圈線。 外面に草花文。	R-27	Ⅲ b 最下

第29表⑤ 染付観察一覧

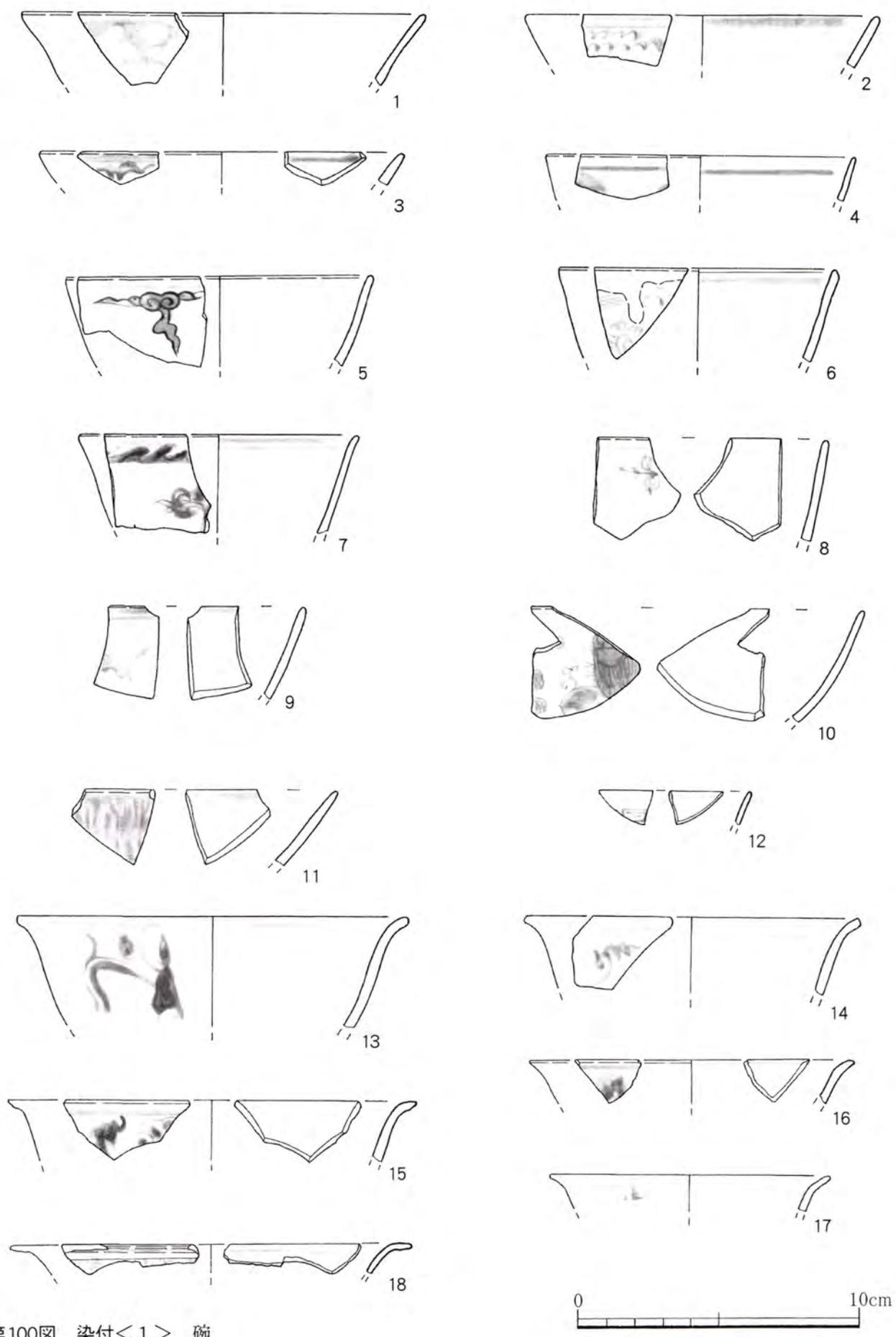
挿図版	番号	器種	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉調	貫入	器形・文様・その他の特徴	出土地点	層序
第103 図・ 図版 58	77	鉢	胴部	— — —	白色 微粒子	淡青白色	無し	小鉢の胴部片。 外面に隆圈線。	Q-27	Ⅲ b
	78			6.0(胴径) — —	白色 粗粒子	淡青白色	無し	小鉢の底部。 外面に隆圈線。	S-27	Ⅲ b
	79		口縁部	5.4 — —	白色 微粒子	無し	無し	外面に草花文。	Q-27	Ⅲ b
	80			— — —	白色 微粒子	淡灰白色	無し	薄手の小鉢外面に隆圈線。 隆圈線から上部に草花文、下部に如意頭文。	不明	Ⅲ a
	81		胴部	— — —	白色 微粒子	淡青灰色	無し	小鉢の胴部片。 外面に隆圈線。 外面に如意頭文状。	S-27	Ⅲ a 0/5
	82			6.2(胴径) — —	白色 微粒子	淡灰白色	無し	小鉢の底部は片。 内底に二本の圈線。 外面に如意頭の文状。	S-27	Ⅲ a 5/10
	83	杯	底部	3.4 — —	白色 微粒子	白 色	無し	畳付から高台内面まで露胎。	P-27	Ⅲ b 0/5
	84			6.4 — —	白色 微粒子	淡灰白色	無し	外面は草花文。	不明	不明
	85	壺	胴部	— — —	白色 粗粒子	淡灰白色	無し	壺の肩部。 外面に波濤文帯。	S-27	Ⅲ a

第6節 瑠璃釉

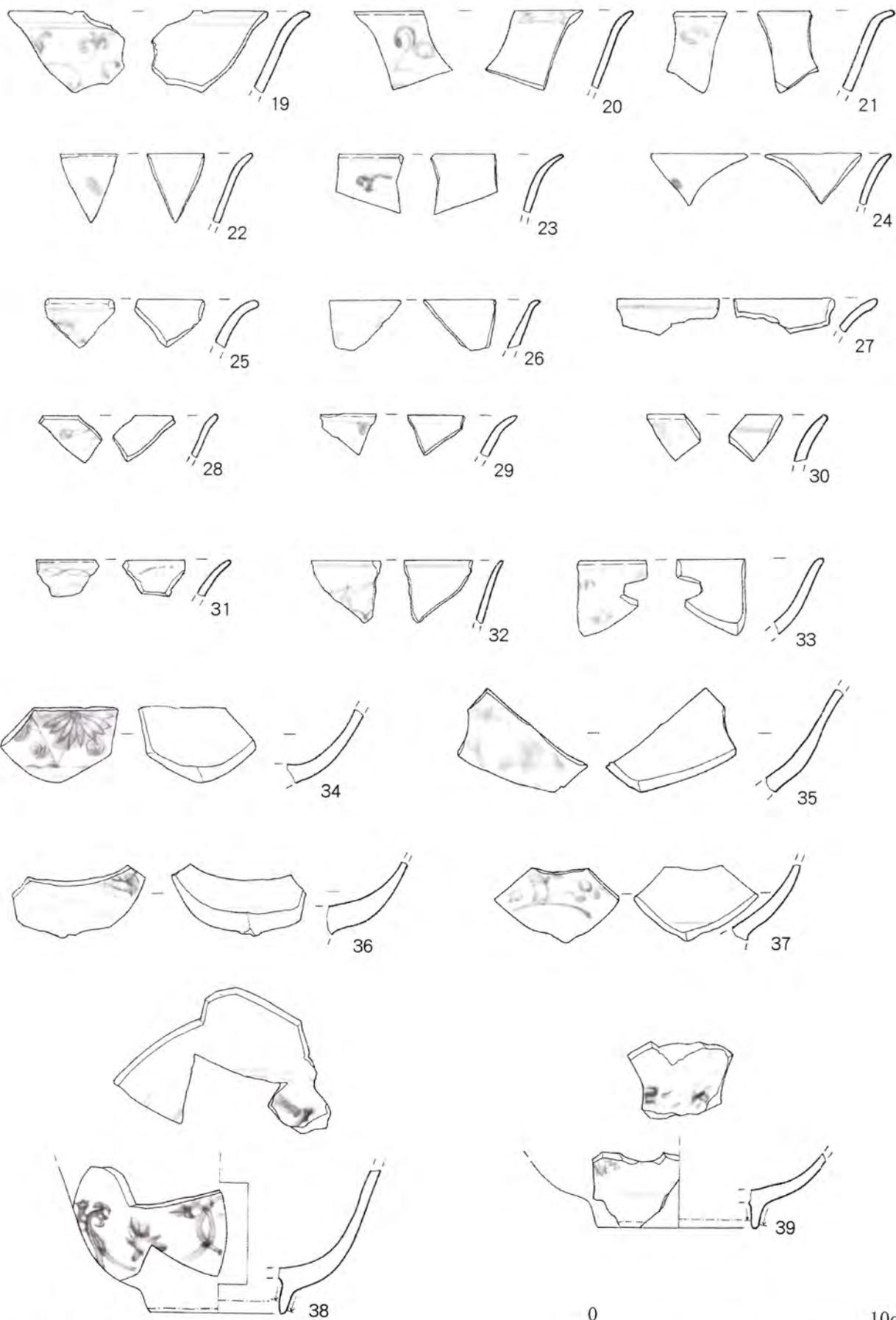
第104図（図版34）に示したもので、外反する碗の口縁部資料である。外面は瑠璃釉を施し、内面は淡青白色を呈する。両面に細かい貫入が観察され、素地は淡黄白色の微粒子である。16世紀前半～中葉で景德鎮窯。出土地不明。



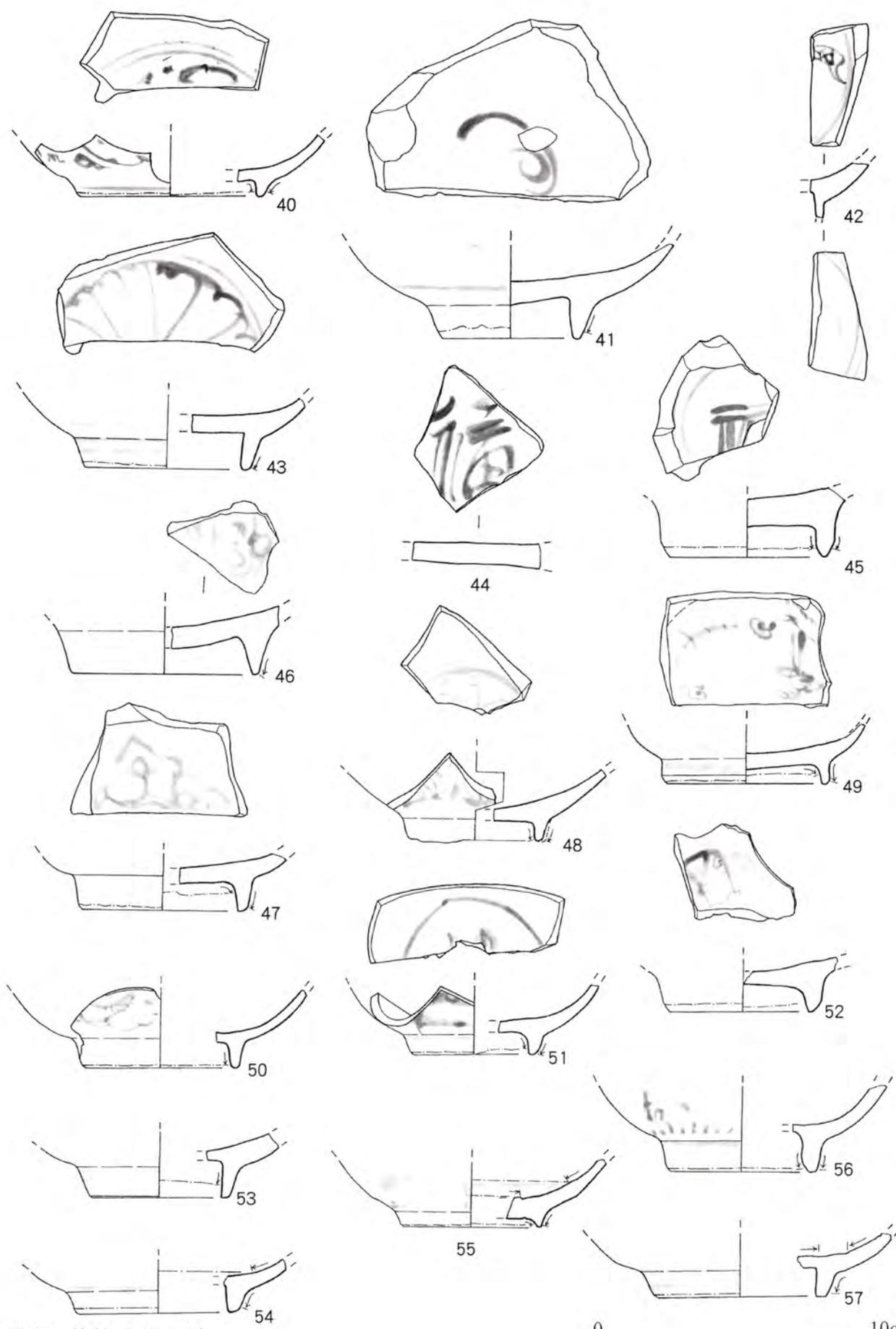
第104図 瑠璃釉



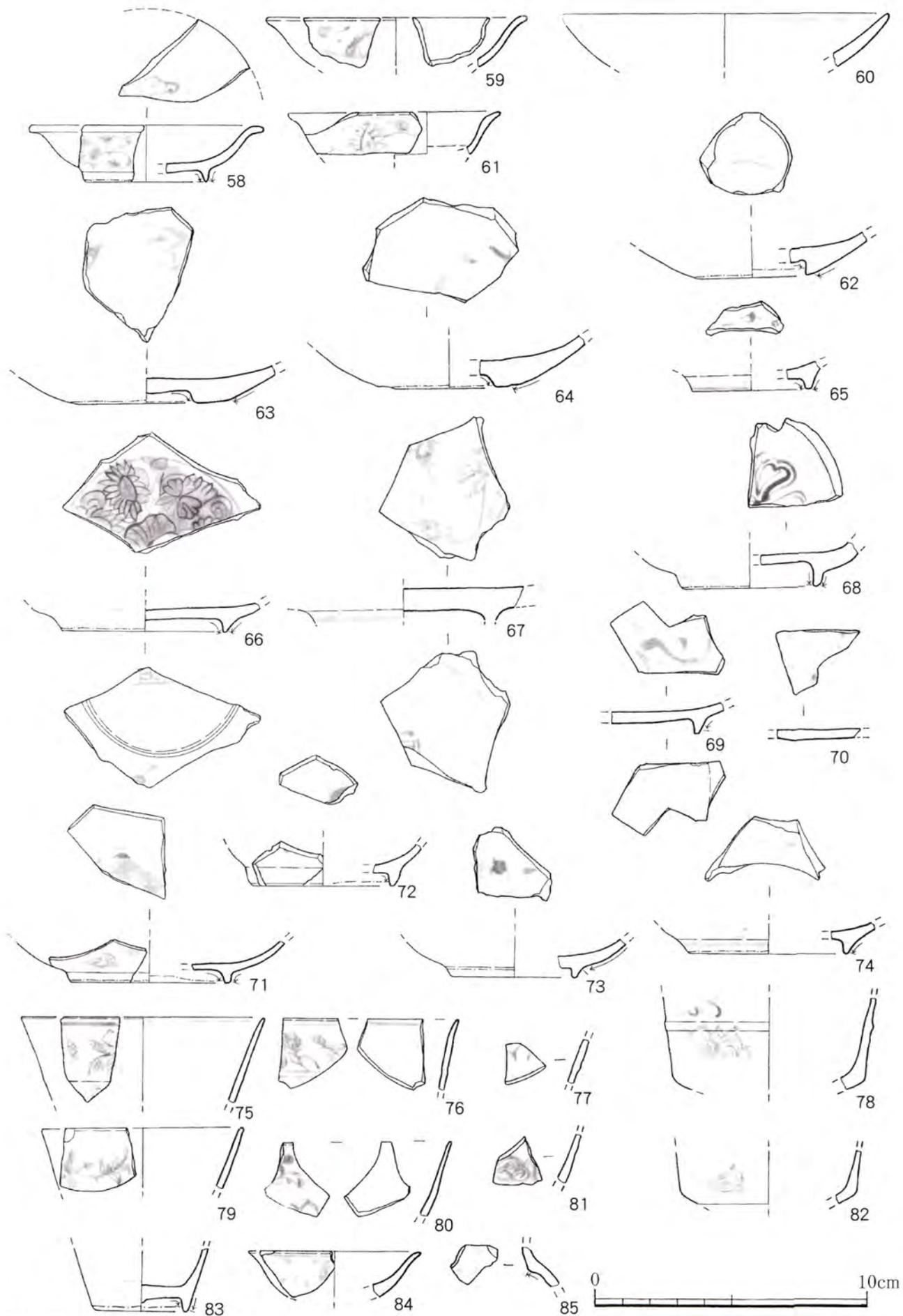
第100図 染付<1> 碗



第101図 染付<2> 碗



第102図 染付<3> 碗



第103図 染付<4> 皿、鉢、杯、壺

第7節 中国産陶器

中国産陶器は褐釉陶器・黒釉陶器・三彩の3種類である。この中で褐釉陶器が最も多く、次いで黒釉陶器、三彩となっている。以下、褐釉陶器・黒釉陶器・三彩の順に記述する。また、第30表①～③の観察一覧に個々の詳細、第57表に出土量を示した。

1. 褐釉陶器

褐釉陶器で確認された器種は、壺・茶入れの2種類で、壺が主体である。器種ごとに記述することにする。

A. 壺

壺は口縁形態や頸部の特徴により分類を行った。また、底部資料の分類に際しては形態や形状などで行った。

<口縁部資料>

I類：口縁部断面は方形状に肥厚する。頸部は緩やかに屈曲し、肩部が怒り肩をする大型壺が想定される。(第106図1)。

II類：頸部が緩やかに屈曲し、口縁部を内傾させる。肩部は怒り肩をする大型壺が想定される。口縁部の肥厚からA・Bの2種類に細分した。

A種：口縁部断面は三角状に肥厚する(第106図2)。

B種：口縁部断面は方形状に肥厚する(第106図3・4)。

III類：口縁下部より緩やかに開きナデ肩を呈する中型壺が想定される。口縁部の肥厚からA～Dの4種類に細分した。

A種：口縁部断面は玉縁状に肥厚する(第106図6～8)。

B種：口縁部断面はやや三角形状に肥厚する(第106図9)。

C種：口縁部が肥厚する(第106図5)。

D種：口縁部は方形状に肥厚する(第106図10)。

IV類：頸部はII類に類似するが、中型壺が想定される。口縁部の肥厚からA・Bの2種類に細分した。

A種：口縁下部で窄まり、口唇内端部を突出気味に成形する(第106図11)。

B種：口縁部断面は三角形状に肥厚する(第106図12)。

<耳及び胴部資料>

第106図13～15は横耳となる。図14はやや肩の張るもので、図15はナデ肩となる壺が想定される。図16は肩部内面に青海波文を施す。類似するものとして、ヒヤジョー毛遺跡資

料が挙げられる^(註1)。

<底部資料>

底部資料は底部の形態や形状で分類を行った。

I類：底面の中央部が盛り上がる（第106図17～20）。

II類：底部は高台を持つ。高台外面は面取りが見られる（第106図21）。

III類：器壁が薄く底面から立ち上がり、胴部へ開きながら移行する。底部の成形よりA・Bの2種類に細分した。

A種：底面よりそのまま立ち上がる（第106図22・23・第107図24～28）。

B種：底面からの立ち上がりは、微弱にくびれてから胴部へ移行する（第107図29・30）。

IV類：器壁は厚く底面から立ち上がり、胴部へ開きながら移行する。底部の形状よりA～Cの3種類に細分した。

A種：底面からの立ち上がりは、微弱にくびれてから胴部へ移行する（第107図31）。

B種：底面からの立ち上がり胴部へ移行するが、底部外面で凹みを廻らす。（第107図32）。

C種：底面からそのまま立ち上がる（第107図33・34）。

V類：器壁は厚く、底面から丸みを持ちながら胴部へ移行する（第107図35）。

B. 茶入れ

茶入れは口縁部形態などからI・IIの2種類に細分した。

I類：口縁部断面が玉縁状に肥厚する（第107図36）。

II類：口縁部断面は三角形状に肥厚し、外端部を下方に突出させる（第107図37）。

<胴部資料>

器形がII類になるものである（第107図40）。

<底部資料>

底部は底面から大きく開きながら胴部へ移行する。底面はベタ底と上げ底状がみられる（第107図38・39・41）。

2. 黒釉陶器

黒釉陶器は黒色の釉葉の掛かった焼き物をまとめた。今回得られたのは、天目茶碗である。口縁部と胴部資料の2点を図化した。

第107図42は胴部が逆「ハ」の字状を呈し、口縁部は口縁下部で垂直もしくは内傾気味に成形する。

第107図43は高台に近い胴部資料で、高台脇をやや水平に削る。胴下部まで施釉する。

第30表① 中国産陶器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	口径 底径 高 (cm)	素地	釉色	器形・文様・その他の特徴	出土地	層位
第 106 図・ 図版 59	1	壺	I	19.2 — —	淡茶色土 白色・赤色の 粒子を含む	褐色釉	内外面施釉。口唇部は平坦で幅広となる。	R-26	Ⅲb
	2		ⅡA	14.0 — —	灰色土 白色粒子を 含む	茶黒色	内外面に施釉。内面、口唇直下に露胎部分 が見られる。	S-25	Ⅲe (0/5)
	3		ⅡB	15.6 — —	淡橙色土 白色・赤色 粒子を含む	淡茶褐色	内外面に褐色釉を施釉。内面にハケぬりの跡。	Q-25 R-27	Vb Ⅲb (10/15) 2点接合
	4		ⅡB	— — —	橙色土 白色・赤色 粒子を含む	淡褐色	内外面に施釉。	Ⅳ区	表採
	5		ⅢC	— — —	橙色土 白色微粒子 を含む	淡褐色	内外面に施釉。口唇部は肥厚する。	I-28	攪乱
	6		ⅢA	10.6 — —	淡茶色土 白色・赤色の 粒子を含む	淡黄褐色	口縁の肥厚は玉縁状。口唇内面から外面を 施釉。口唇部は釉が禿げ落ちている。	Q-27	Ⅲb
	7		ⅢA	10.6 — —	淡茶色土 黒色・白色の 粒子を含む	淡黒色	口縁の肥厚は玉縁状。口唇部と内面口縁直 下は釉を薄く塗る。	P-27	Ⅲd
	8		ⅢA	10.0 — —	灰色土 黒色・白色の 粒子を含む	淡緑褐色	口縁の肥厚は玉縁状。口縁直下より厚めに 施釉。口縁は薄く施釉する。	R-27,28	Ⅱ下
	9		ⅢB	9.0 — —	灰色土 白色・黒色の 粒子を含む	淡黒褐色	外面から内面口縁直下まで施釉。口唇部は 釉を掻き取る。	O-27	Ⅱ
	10		ⅢD	8.2 — —	灰色土 黒色粒子を 含む	黒褐色	内面頸部から外面まで施釉。	O-26	Ⅲ
	11		ⅣA	8.6 — —	紫色土 白色粒子を 含む	茶褐色	外面と内面の部分的に施釉。	R-27	Ⅲb (10/15)
	12		ⅣB	8.0 — —	淡橙色土 白色粒子を 含む	黒褐色	内外面に施釉。	R-28	Ⅲb
	13	壺耳	—	— — —	赤褐色土 白色粒子を 含む	黒褐色	横耳と思われる。器面はナデ調整である。	S-28	Ⅲb
	14		—	— — —	橙色土 白色・赤色粒子 を含む	茶褐色	外面と内面上部まで施釉。頸胴部に横耳を 有する。	O-27	Ⅱ
	15		—	最大胴径 17.0	灰色土 白色・黒色の 粒子を含む	黒褐色	外面に施釉。外面に横耳の跡が残る。	R-26	Ⅲc
	16	壺胴部	—	— — —	淡灰白色土 白色微粒子を 含む	淡緑褐色	内面に青海波の叩きを施す。外面に横位 の平行状の叩きを有する。	N-27 N-26	Ⅱ 2点接合
	17	壺底部	I	— — —	橙色土 白色・赤色粒 子を含む	内面は茶褐 色、外面は 褐色	上げ底。外底の一部分に砂粒が付着してい る。内外面とも施釉。	N-27	Ⅲc
	18		I	— 10.2 —	灰色土 白色粒子を含 む	淡緑褐色	内面に轆轤痕が確認できる。内外面とも露 胎。	Q-27	Ⅲa
	19	I	— 15.0 —	灰色土 白色・赤色粒 子を含む	淡褐色	上げ底。外底に砂粒付着。外面と内面に施 釉。外底に露胎。	Q-27	Ⅲb	

第30表② 中国産陶器観察一覧

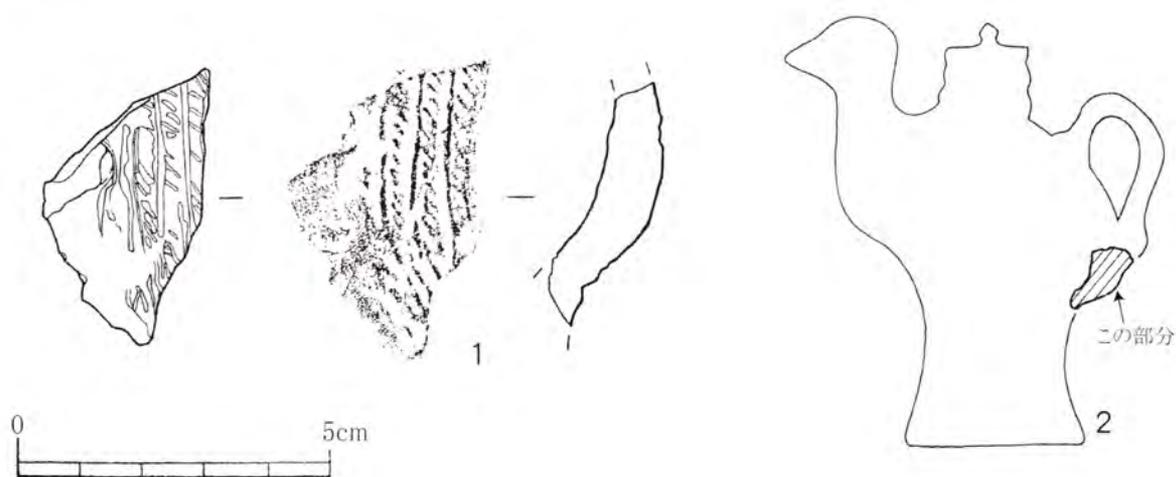
挿図 図版	番号	器種	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	器形・文様・その他の特徴	出土地	層位
第106 図・ 図版59	20	壺	I	— 14.9 —	灰色土 白色粒子を 含む	淡褐色	内外面に釉が施されているが、外底に砂が 付着している部分が見られる。	P-27	Ⅲbサイカ
	21		II	— 15.5 —	淡橙色土 白色粒子を 含む	内面は 淡褐色	底部立ち上がりの脇に飽調整の跡が残る。 内面は施釉で外面は露胎している。外底は 微弱な高台を有する。	L-27 M-27	II 2点接合
	22		ⅢA	— 12.6 —	橙色土 白色・赤色粒子 を含む	淡茶黒色	胴下部まで釉を施すが、部分的に底面近く まで及んでいる。内面は露胎。	O-27 R-26 S-26	II Ⅲb 柱穴494 3点接合
	23		ⅢA	— 15.4 —	淡橙色土 白色・赤色粒子 を含む	褐色	上げ底気味の底部。底部から立ち上がりで 微弱にくびれさせた後に外側に開き気味に 外傾させている。内外面露胎。	P-25 Q-26	Ⅲ下 VI 2点接合
第107 図・ 図版60	24	底 部	ⅢA	— 10.2 —	橙色土 白色・赤色粒子 を含む	淡緑褐色	内外面に、轆轤回転擦痕が残る。釉は、底 部際まで流れる。内面・外底は露胎する。	R-26 Q-26	Ⅲc Ⅲb 2点接合
	25		ⅢA	— 11.0 —	橙色土 白色・赤色粒子 を含む	淡褐色	施釉は外面底部際まで流れる。外底及び、 内面は露胎。	R-26 R-27 Q-27	Ⅲb Ⅲc Ⅲb 3点接合
	26		ⅢA	— 11.4 —	淡灰色 白色・黒色粒子 を含む	不明	上げ底気味の底部。内外面露胎。	S-28	Ⅲb
	27		ⅢA	— 14.8 —	淡灰色土 白色粒子を 含む	淡緑褐色	内外面に施釉。外底面に砂が付着している。	O-27	II
	28		ⅢA	— 12.0 —	橙色土 白色・赤色粒子 を含む	不明	内外面露胎する。	R-28	楕円状土坑 Ⅲb
	29		ⅢB	— 11.2 —	灰色土	不明	底面からの立ち上がりは一端内側に閉じ気 味に成形した後、外側に開かせている。外 底面は雑に仕上げる。内外面露胎。	S-27	Ⅲb
	30		ⅢB	— 9.6 —	橙色土 白色粒子を 含む	淡褐色	底部からの立ち上がりは、一端くびれた後、 外側に開き気味に外傾。施釉は外面一部に 見られる。	O-27 P-27	II (3個) Ⅲb (0/5) 4点接合
	31		IVA	— 7.8 —	淡紫色 白色・赤色微 粒子を含む	淡褐色	底面からの立ち上がりは一端くびれさせた 後に外側にゆるく開いている。内面の轆轤 痕が残る。内外面施釉。	R-26	Ⅲcサイカ
	32		IVB	— 10.2 —	橙色土 白色・赤色 粒子を含む	不明	上げ底気味の底部。外面の仕上げは雑であ る。内外面露胎。	O-26	Ⅲ
	33		IVC	— 15.6 —	同上	同上	ベタ底。外面に施釉。外底、内面露胎。	R-25	Ⅲeサイカ
	34		IVC	— — —	淡灰色土 白色微粒子	不明	内外面露胎。内面に指圧による調整痕が見 られる。	P-25	II
35	V	— 9.0 —	橙色土	淡褐色	底面よりやや膨らみながら立ち上がる器形 を呈す。内外面は露胎である。	S-28	II		
36	小壺	I	6.8 — —	灰色微粒子	褐色	小壺の口縁部。内外面に施釉。内面に轆轤 痕。	R-26	Ⅲb	
37	茶入れ壺	II	8.8 — —	淡灰色微粒子	褐色	口縁部は肥厚。肩部はややいかり肩	R-27 Q-27	Ⅲbサイカ Ⅲb 2点接合	
38	茶入れ	II	— 6.2 —	淡紫色微粒子	褐色	頸部から肩にかけ「く」の字に曲がる。外 面は総釉で、内面は露胎する。	Q-26	Ⅲ (5/10) Ⅲeサイカ 2点接合	

第30表③ 中国産陶器観察一覧

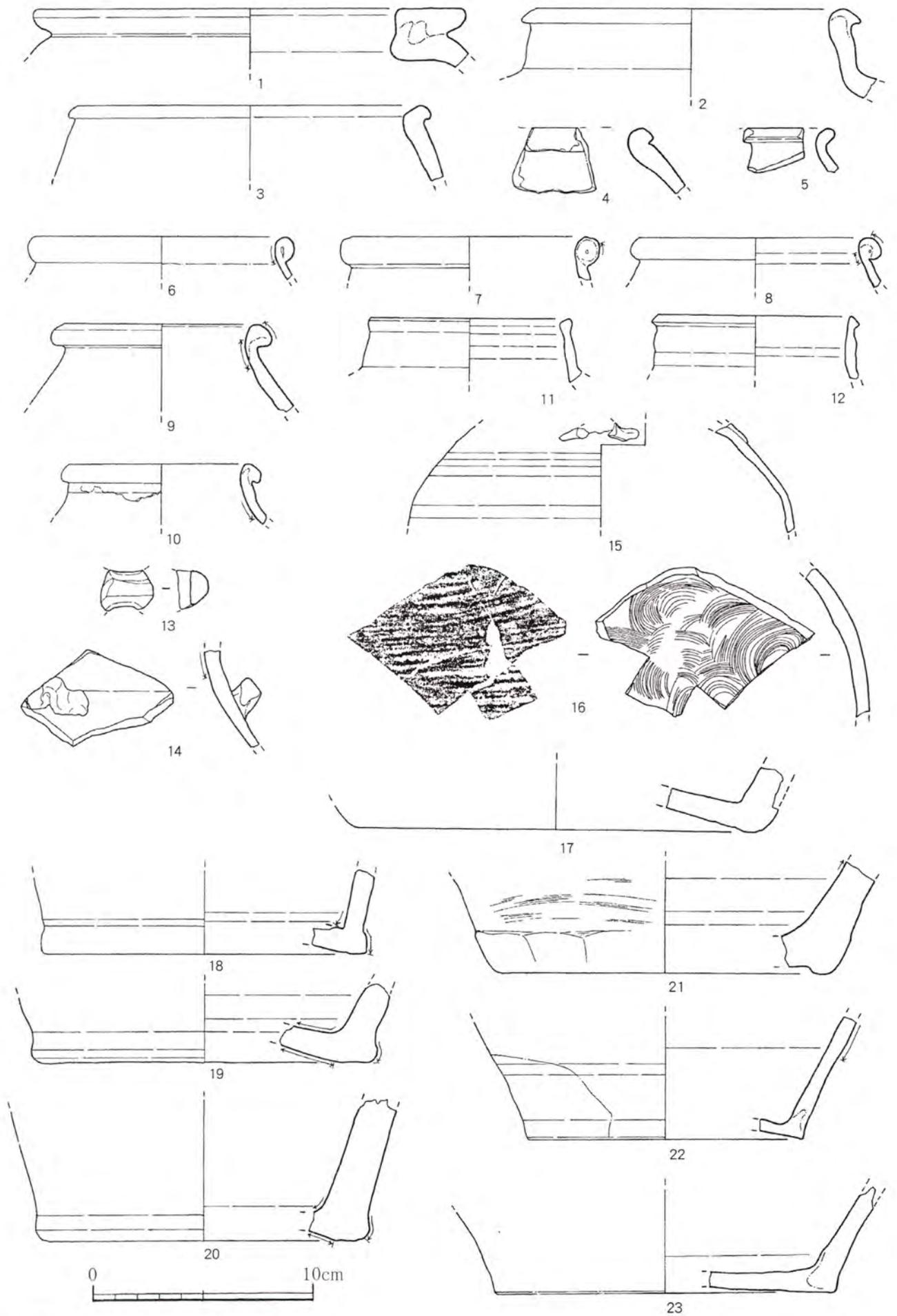
挿図 図版	番号	器種	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	器形・文様・その他の特徴	出土地	層位
第 107 図・ 図版 60	39	小壺	—	— 6.4 —	淡灰色微粒子	褐色	薄手の小壺。底部立ち上がり際に轆轤による調整の跡が残る。釉は、内面総釉で外面胴部の一部と底部脇までたれているのが確認できる。	P-26	Ⅲe下
	40	茶入れ？ 壺	—	— 6.2 —	暗紫色微粒子	褐色	内面は総釉。外面は、底面まで釉がたれている。	R-26	Ⅲcサイカ
	41	茶入れ？ 壺	—	— 6.4 —	紫色微粒子	褐色	上げ底。内面には轆轤回転擦痕が観察できる。内面は底部近くまで釉が施されている。外面、内面露胎する。	R-28 R-27	Ⅱサイカ Ⅲb (10/15) 2点接合
	42	天茶 目碗	—	14.4 — —	淡灰色土	黒色	口縁部のひねりは弱い	Q-27	Ⅲb
	43	天茶 目碗	—	— (4.7) —	灰色土	黒色の後に 茶色釉？	外面、腰部から内面に施釉されている。内外面に禾目あり。釉色は黒褐色。	R-28	柱穴 4009

第8節 三彩

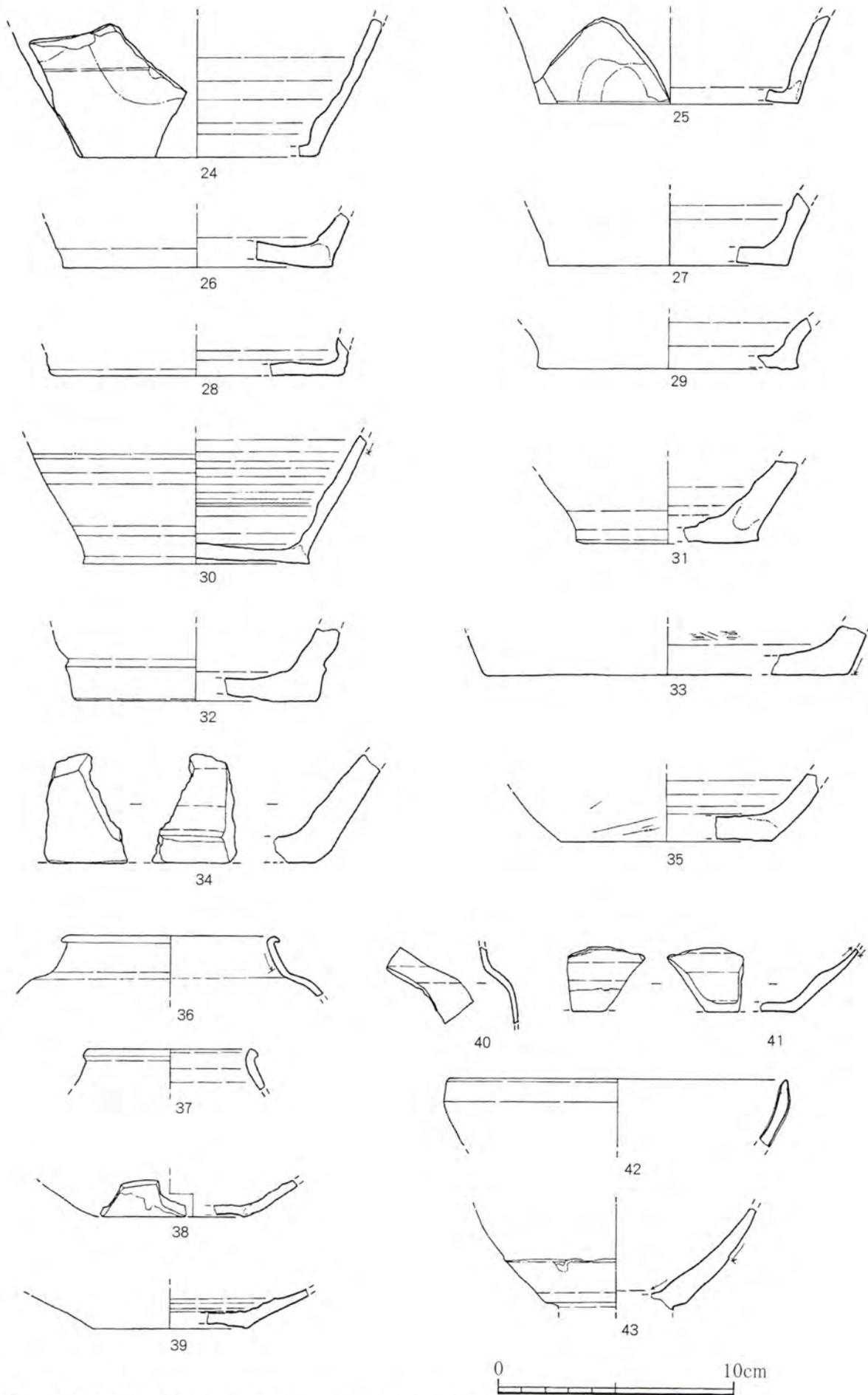
三彩は1点の出土で、器種は水注である。第105図1は鴨型水注の把手の下部に位置する（第105図・図版62-2）と思われる破片資料で、把手の貼り付けが残る。文様からすると右羽の先にあたると思われる。内面は無釉、外面は白化粧を施した後に緑釉を施釉するが色は褪せている。S-27出土。



第105図 三彩 瓶（1.破片 2.鴨型水注模式図）



第106图 中国産陶器<1> 褐釉陶器



第107図 中国産陶器<2> 褐釉陶器（壺、茶入れ）、黒釉陶器

第9節 タイ産陶器

タイ産陶器は褐釉陶器と無釉陶器の2種類得られた。前者が主体である。以下、褐釉陶器・無釉陶器の順に記述し、個々の詳細は第31表の観察一覧、第57表に出土量を示した。

1. 褐釉陶器

褐釉陶器で得られた器種は壺と小壺又は瓶と思われる資料がある。

(A) 壺

壺は得られた口縁部すべて頸部から緩やかに大きく外傾し、ラッパ状を呈している。口縁部は肥厚する。

<口縁部資料>

口縁部は3点得られ、Ⅰ～Ⅲ類に分類した。

Ⅰ類：口縁部は口唇部外端が突出し肥厚する（第108図1）。

Ⅱ類：口縁部は三角形状を呈し、口唇部内端は上方へ突出する（第108図2）。

Ⅲ類：口縁部は口唇部内外端を突出が強調され「T」字状を呈する（第108図3）。

<頸部及び胴部資料>

第108図4は頸部資料である。図2と同一個体と思われる。頸下部は緩やかに折れ曲り肩部へ移行する。

図5は胴部資料である。胴部が最も張る部分と思われる。外面に一条の凹線が廻る。

<底部資料>

第108図6は底部資料である。底面から丸みを持つように胴部へ移行する。

(B) 小壺又は瓶

小壺又は瓶と思われる頸部資料である。口縁部は大きく外反し、ナデ肩となる器形が想定される（第108図7）。

2. 無釉陶器

壺の胴部資料である。

第108図8は外面に渦巻文のスタンプが施されている。文様は外側から内側に巻く方向とその逆の方向となり帯状に配すると思われる。文様の上部には一条の凹線が廻る。

第108図9は外面に格子目状の叩きが密に施されている。一部に自然釉と思われる淡褐色釉がみられる。胎土などからタイ産以外の可能性も考えられる資料である。

第31表 タイ産陶器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	部位	口径 底器高 (cm)	素地	釉色	器形・文様・その他の特徴	出土地	層位
第108 図・ 図版 61	1	壺	口縁部	最小胴径 16.0cm	淡灰色土 白色粒子を 含む	黒褐色	内外面施釉。口縁部はラッパ形を呈する。	Q-26	Ⅲcサイカ
	2			18.8 — —	同上	同上	外面口縁部から内面まで施釉。	R-26	Ⅲ
	3			18.4 — —	淡灰色土 中心部は紫色	茶褐色	外面と内面頸部まで施釉。口縁部はラッパ形を呈する。	Q-27 R-26 R-27	Ⅲb Ⅲb Ⅲ(5/10)
	4		頸部	最小胴径 10.5cm	同上	同上	内面と頸部まで施釉。	R-26	Ⅲb (20/25)
	5		胴部	最大胴径 17.6cm	灰色土 黒色微粒子を 含む	無釉?	外面に陰圏線を廻らす。内面にロクロ痕残る。内外面露胎。	Q-27	Ⅲb
	6		底部	— 12.8 —	灰色土 白色微粒子を 含む	淡褐色	内外面に回転擦痕が残る。釉は、外面底部脇まで流れ、外底、内面とも露胎。	O-26	Ⅱ
	7	く壺 はも 瓶し	頸部	最小胴径 4.0cm	灰色土 白色・黒色 粒子を含む	無釉?	外面、回転ロクロ痕。内面、頸部に叩きが見られる。	不明	不明
	8	壺	胴部	— — —	淡褐色土 白色・褐色 粒子を含む	無釉	外面は格子目状の叩きが密に施されている。一部に自然釉と思われる淡褐色の釉が見られる。	Q-27	Ⅲb

第10節 タイ産半練土器

1. 半練土器

タイ産半練土器は蓋のみが確認された。撮みの付く落とし蓋と考えられるが、撮みは検出されていない。

第108図12は径が12.8cm。蓋の端部破片で、端部上面の突起の部分が欠損する。器色は橙白色で混入物は赤色粒を多く含む。器面調整は雑である。S-27第Ⅲ層b。

第108図13は径が14.2cm。蓋の端部破片である。端部は突起が断面三角形を呈する。器色は橙色で混入物は赤色粒、石英、黒色粒などを含む。断面は中央部が淡灰色である。器面調整は丁寧で、撫でや篋削りで調整されている。Q-26第Ⅲ層c。

2. 不明資料

本資料は胎土・混入などがグスク土器とも異なり、器面調整及び胎土・混入物より、タイ半練土器に類似するため、本項で報告する。

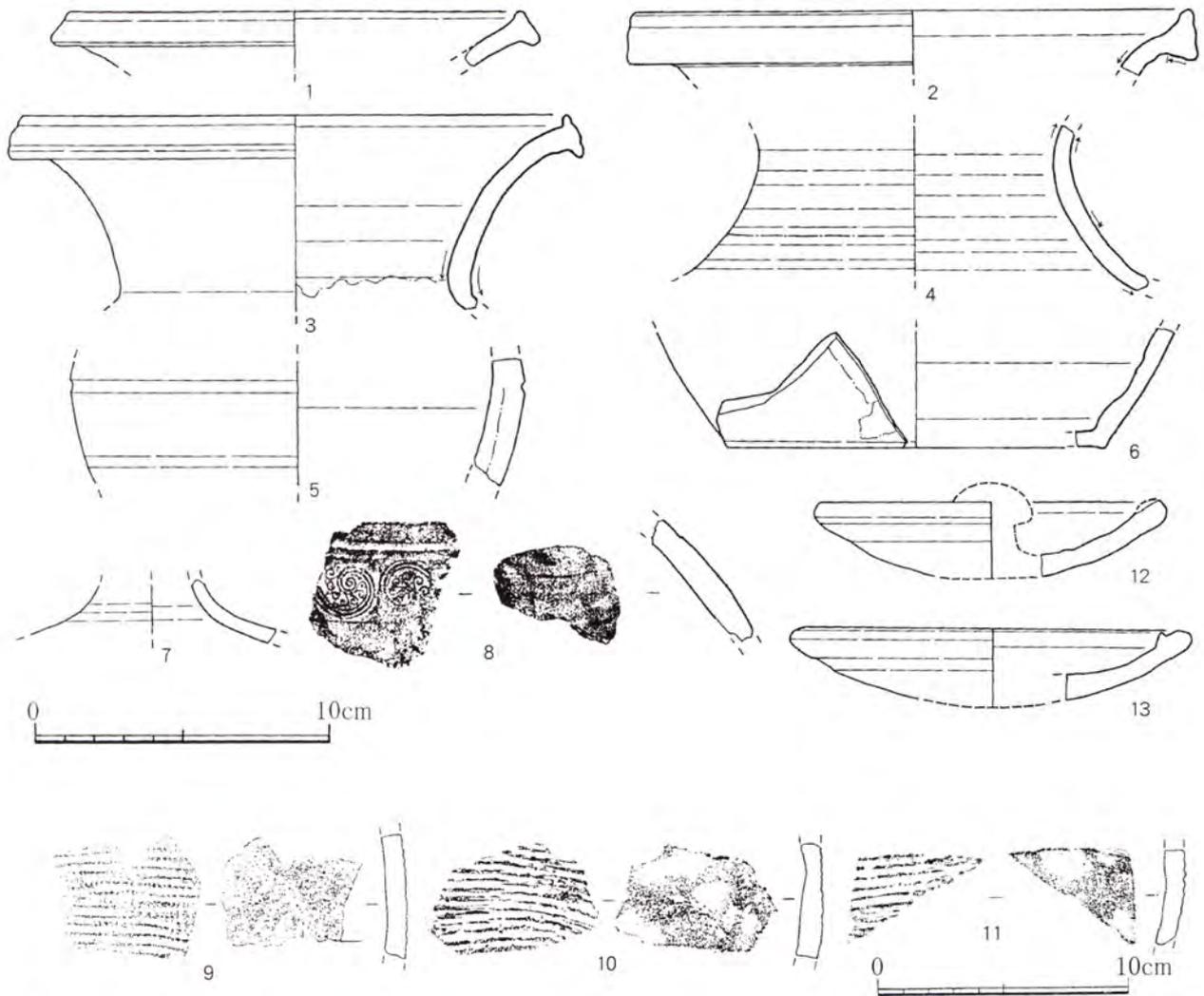
第108図10・11は胴部片で同一個体で接合可能な資料である。外面は格子目状の叩きと平行状の叩きが施されている。内面は指圧痕が残り、内面に指をあて、外面から叩いたと思われる。器色は淡橙灰色で混入物は白色微砂粒、黒色微砂粒、石英などを含む。10はR-24第Ⅴ層b、11はS-25第Ⅳ層bで出土。いずれも古い時期で出土し、器面に叩き目が見られ、白色微砂粒が混入することからカムイヤキの可能性も考えられる資料である。

小結

タイ産陶器は褐釉陶器のⅠ～Ⅳ類壺と半練土器の蓋が得られている。このような身と蓋がセットで出土している例はヒヤジョー毛遺跡や首里城跡などがある。出土状況はⅢ層上部に集中する。

第32表 タイ産半練土器観察一覧

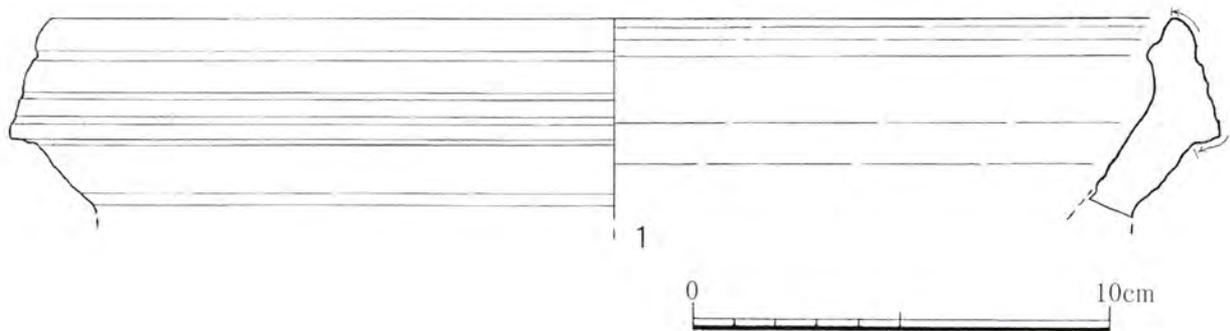
挿図 図版	番号	器種	分類	口径 底径 器高 (cm)	器色	混入物	器形・文様・その他の特徴	出土地	層位
第 108 図・ 図版 61	9	壺	胴部	— — —	灰色	白色 黒色粒 子を含む	器面調整後、渦巻文を廻らす。その上部に 一条の圈線を廻らす。内面は撫で調整。	Q-27	Ⅲb(5/10)
	10			淡橙灰色	赤色粒 黒色粒 石英を含む	外面は格子目状や平行状の叩きが密に施さ れる。内面は指圧痕が残る。	R-24	Vb	
	11			"	"	"	S-25	IVb	
	12	蓋		蓋径 12.8	橙白色	赤色粒を 多く含む	蓋の立ち上がりはやや強く、端部の上面の 突起は欠損している。器面調整は雑である。	S-27	Ⅲb
	13			蓋径 14.2	橙色	赤色粒 黒色粒 石英を含む	蓋の立ち上がりは弱い。端部の上面の突起 は断面三角形である。 器面調整は丁寧で、撫でや篋削りによる調 整である。	Q-26	Ⅲc



第108図 タイ産陶器（褐釉陶器、無釉陶器）、タイ産半練土器

第11節 本土産陶器

第109図（図版64）1は備前陶器で播鉢の口縁部で1点得られた。口縁部は上方に摘み上げた形状を成す。口縁部外面は三条の凹線が巡る。色調は口唇部から口縁部外面下まで赤褐色を呈し、断面部はその部分が灰色となっている。その他の部分は明赤褐色を呈する。口径26.9cm。素地は粗粒子で、白色の細かい砂粒を多く含み、2～3mmの砂粒も観られる。また、赤色の細かい鉱物も混入されている。R-27第Ⅲ層5～10cmで出土。



第109図 本土産陶器 播鉢

第12節 本土産磁器

ここで扱う本土産磁器は明治以降のものである。得られた器種は碗・小碗・急須の蓋である。文様は有文と無文があり、前者の施文技法は型紙染付・銅版絵付・その他に分けることができる。以下、施文技法ごとに略述し、個々の特徴は観察一覧を第34表、出土量を第33表に示した。

1. 型紙染付（第110図・図版62-1～5）

型紙染付は、沖縄では一般に「スンカンマカイ」と呼称されている。器種は碗と皿の2種類である。碗の口縁部は外反するもの（図1～3）と直口するもの（図5）がある。文様は外面全体に施し、構図に種類がみられる。内面は口縁上部に圏線を廻らし、口縁部とその間に文様を施すのと圏線のみがある。皿は直口口縁で、両面に文様を施す（図4）。

2. 銅版絵付（第110図・図版62-7～10・12）

銅版絵付は全て小碗で口縁部は直口である（図7～10）。文様は外面に草花文を施す。底部は外面に草花文と腰部に圏線を2本、壘付に1本、高台内付け根に1本廻らす（図12）。

3. その他（第110図・図版62-6・13）

図6はクロム青磁の小碗で口縁部は直口し、文様は外面に鉋による刻文を施す。図13は急須の蓋で、外面は深緑色の釉を施し、撮みの付け根から蓋の端部に向けて白色の釉を浮文に放射状

に施す。

4. 無文 (第110図・図版62-11・14)

図11は小碗で口縁部は直口である。口唇部の内面は外面に向けて窄めるため口唇部は尖る。内外面乳白色である。図14は急須の蓋で外面は瑠璃釉を施す。

第33表 本土産磁器出土量

地区	I区		3区						4区						地区不明				合計		
	J-28		N-26	N-28	P-22 ・23	P-25	P-26	Q-24	Q-28	R-25	R-26	R-27	R-28	S-25	S-26	III a	表採	III a		III a	表採
グリット	II	IIh	II	不明	II	II	II	II	I	攪乱	II	II	III a (5/10)	II	表採	III a (5/10)	III a	表採	攪乱	不明	
碗	口	2				1	1	1		2	1		1		1	1	1	2	1	1	16
	胴	1	1	1		1				2	1	1		1				1			10
	底										1										1
小碗	底																		1		1
急須	蓋			1							1										2
壺	胴								1												1
不明	蓋					1															1
合計	1	2	2	1	1	2	1	1	1	4	4	1	1	1	1	1	1	4	1	1	32

第13節 陶質土器

陶質土器は4区で5点得られ、そのうち器種のわかるものは火炉と土瓶の2種類である。以下、2点について記載する。

1. 火炉 (第111図・図版62-2)

火炉の胴部片に有孔の把手を横位に貼り付けられた資料である。孔は把手の中央やや胴部側に位置している。孔径は1cm。把手の幅は4cm、厚さは7~1.2cm。器色は両面とも淡燈色。R-25第II層の出土。

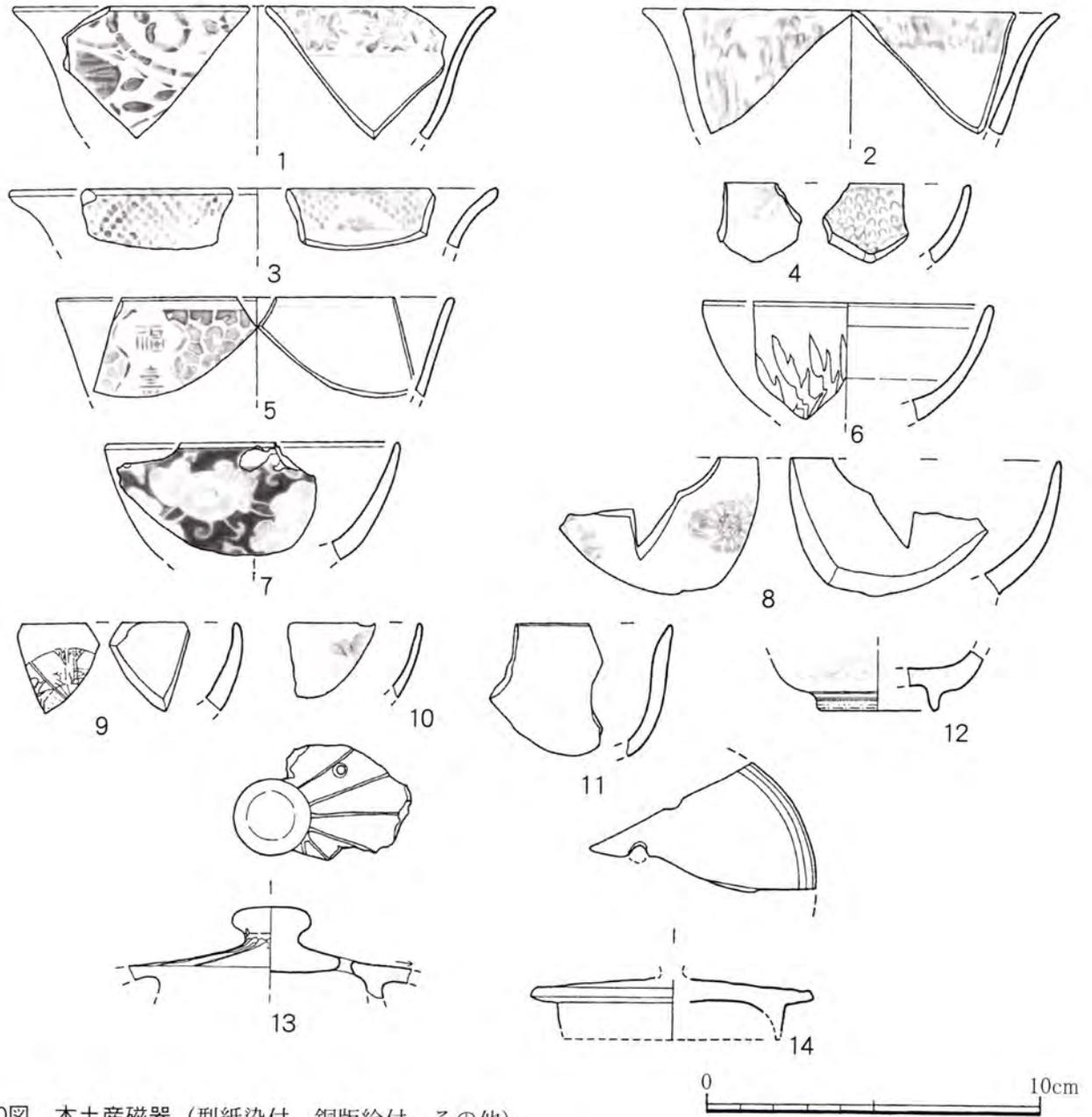
2. 土瓶 (第111図・図版62-1)

土瓶の胴部に注口の付根が残る破損資料である。胴部は「く」の字状に屈曲し、その直上に注口を貼り付けている。器色は淡燈色。R-25第II層出土。

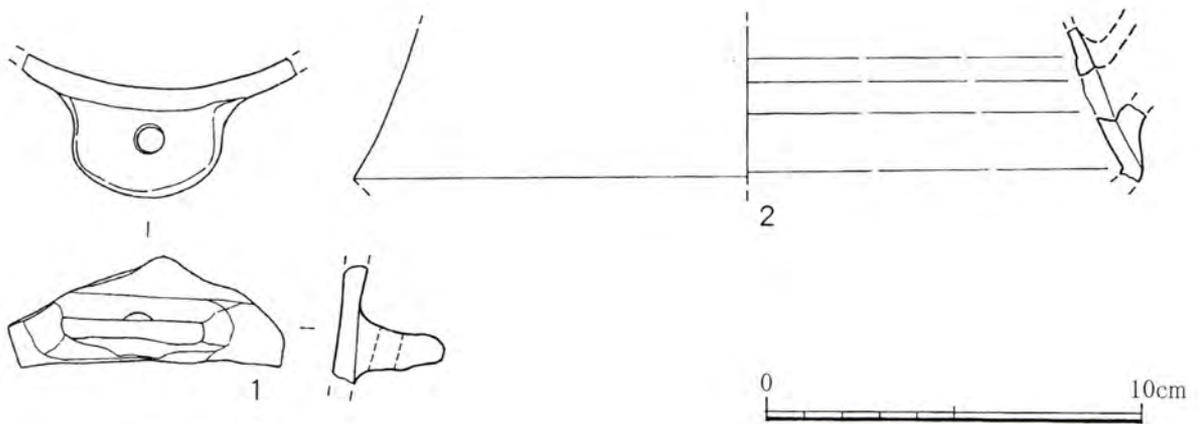
第34表 本土産磁器観察一覧

単位：cm

挿図 遺物	番号	器種	部位	口径 底径 器高	施釉	文様その他の特徴	出土地 層位
第 110 図・ 図版 62	1	碗	口縁部	14 — —	内外面とも 施釉	外反口縁。外面は口縁直下に竹状の短線で弧を描き、その中に花文を施す。また、胴部に花文と竹状の短線がみられる。内面は口縁下部に圈線を廻らし、花文を帯状に配する。	J-28 II h
	2	碗	口縁部	12.4 — —	内外面とも 施釉	外反口縁。外面に草花文、内面は口縁下部に圈線を廻らし、草花文を帯状に配する。文様は滲んで不鮮明である。	表採
	3	碗	口縁部	14.2 — —	内外面とも 施釉	外反口縁。外面は点文で埋め、胴部に菱形の空間を設ける構図と思われる。内面は口縁下部に圈線を廻らし、点文で山形の空間を設け、花文?を帯状に配する。	S-27 I c
	4	碗	口縁部	11.6 — —	内外面とも 施釉	直口口縁。外面に「福・壽」の吉祥文字を縦に施す。	表採
	5	皿	口縁部	— — —	内外面とも 施釉	直口口縁。外面は花文。内面はウロコ状の文様を施す。	表採 S-25
	6	小碗	口縁部	8.6 — —	内外面とも 施釉	直口口縁。外面は匏による刻文を施す。	R-25 II
	7	小碗	口縁部	8.6 — —	内外面とも 施釉	直口口縁。外面は草花文を施す。	J-28 II h
	8	小碗	口縁部	— — —	内外面とも 施釉	直口口縁。口縁部内外は淡青色である。胴部に花文を施す。花文は緑色。	I-28 攪乱
	9	小碗	口縁部	— — —	内外面とも 施釉	直口口縁。口縁部内外は淡青色で廻らす。胴部に花文を施す。花文は茶緑色。	P-25 II
	10	小碗	口縁部	— — —	内外面とも 施釉	直口口縁。外面口縁下部から胴部に花文を施す。口縁下部の文様は緑色、胴部は茶緑色。	P-26 II
	11	小碗	底部	— — —	豊付のみ露 胎	高台内削りは深い。豊付幅は0.2cmと狭く露胎である。外面は胴部から腰部まで草花文を施す。高台際に2本、高台外面に1本、外底高台付根に1本圈線を廻らす。	表採
	12	小碗	口縁部	— 3.6 —	内外面とも 施釉	直口口縁。口唇部は尖る。	不明
	13	急須の 蓋	蓋	— — —	外面施釉	撮みの径は2.3cm、高さは1.1cm、くびれた部分の径は1.6cm。撮みの付根から外に向って白色の釉を浮文線を放射状に施す。甲から内側に穿孔されている。径は甲の部分は0.4cm、内側は0.6cm。	N-28 I
	14	急須の 蓋	蓋	— 8.4 —	外面施釉	撮みを欠損。甲から内側に穿孔されている。径は0.6cm。蓋の端部に凹みを廻らしている。	R-25 II



第110図 本土産磁器（型紙染付、銅版絵付、その他）



第111図 陶質土器 急須、耳

第14節 沖縄産陶器

沖縄産陶器は施釉陶器（上焼）と無釉陶器（荒焼）に大別できる。資料のほとんどは小破片で、全形が窺えるものは第112図11に示した小碗の1点のみである。以下、それぞれの概略について述べる。個々の特徴を第36表に観察一覧。出土量を第35表に示した。

1. 施釉陶器（第112図・図版63）

確認できた器種は碗・小碗・酒器の3種類である。施釉される釉色は白釉・黒釉・鉄釉などが見られ、中には内面と外面に異なる釉色を施す技法も見受けられる。以下、器種別に述べる。

A. 碗

3種類の中では最も多く得られているが、量的にはそれ程多くはなく、破片資料がほとんどである。ここで見られる施釉技法の主体は素地に白土を塗る白化粧であり、その場合、透明釉を施している（第112図1～10）。この中には文様を有する資料があり、外面に呉須、飴釉を用いて花卉文を描き（第112図4）、また、内外面とも呉須で文様を施している（第112図5）。他2点は器の内外にそれぞれ異なる釉色を施す掛け分けである。内面に灰釉、外面は飴釉を施す（第112図6・10）。

B. 小碗

小碗は底部より立ち上がり腰部にやや丸みを持つ資料（第112図12）と腰部から口縁部直下まで面取りされている資料（第112図11）の2種類ある。両者とも素地に白化粧土を施釉後、透明釉を施しているが後者の方はやや灰色味を帯びている。見込みには蛇の目釉剥ぎを施している。

C. 酒器

カラカラと呼ばれるもので、酒を入れた容器である。第112図15は肩部資料で、おそらく円筒状の器形と思われる。外面は飴釉で、内面は肩部まで飴釉が施されている。素地は灰色である。第112図13は口縁部資料で、素地に白化粧土を施釉後、文様は呉須を用いて口縁部縁や内側に施している。酒の注入口となっており、口縁部は上方に撮み上げられている。

2. 無釉陶器（第112図・図版63）

無釉陶器は量的には少なく、種類も瓶子・鉢・壺の3種類である。以下種類別に述べる。

A. 瓶子

口縁部はラッパ状に開き、頸部でくびれて胴部は膨らむと思われる（第112図16）。

B. 鉢

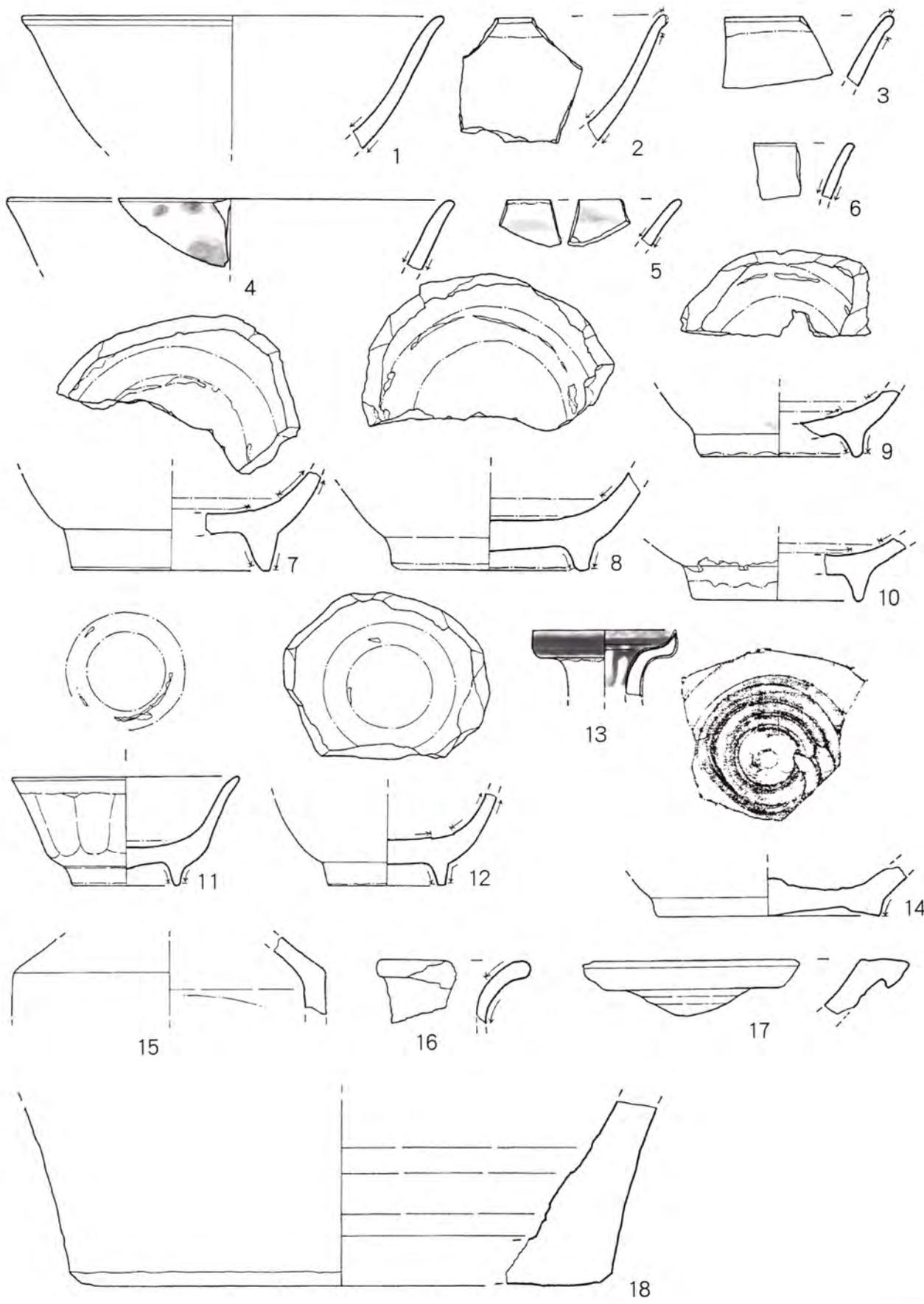
口縁部を逆「L」字状に折り曲げるものである。挿鉢か水鉢かは判然としない（第112図17）。

C. 壺

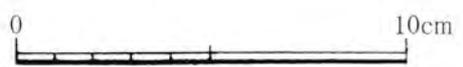
底部資料である。推算底径18.0cm。底部は外端部を面取りされている。素地は橙褐色、内面に回転轆轤痕が観られる（第112図18）。

第35表 沖縄産陶器出土量

地区		1区		2区		3区							4区					不明			合計					
		J-28	K-27	O-24	O-26	O-27		P-22・23	P-25		P-27・28	P-27	Q-25		Q-28		R-25		S-24	S-25		Ⅲa	表採	不明		
器種	層序	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲc	Ⅱ	Ⅱ	Ⅳ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲb	表採	攪乱	Ⅱ	表採	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳb	Ⅲa	表採	不明	合計	
	部位																									
沖縄産施釉陶器	碗	口								1				1	1						1			5	10	
		胴底	1	1										1				1					2	4	10	
		口～底															1		2							7
	その他	口					1										1									2
		胴底	3		1	1	1	1	1		1	1	2	1			2					1	2	7	25	
		底肩											1							1			1			3
沖縄産無釉陶器	すり鉢	口														1									1	
		胴					1						1													2
		肩														1										1
合計		4	1	1	1	3	1	1	1	1	2	5	4	1	4	6	1	2	1	1	1	1	5	16	64	



第112図 沖縄産陶器（施釉陶器、無釉陶器）



第36表 沖縄産陶器観察一覧

単位: cm

挿図 図版	番号	種類	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器形・文様・その他の特徴	出土地	層位
第 112 図・ 図版 63	1	沖縄 産 施 釉 陶 器	碗	口縁部	14.6	—	—	透明釉で化粧土は乳白色。全面に細かい貫入あり。	Ⅱ区	北壁セク ション除 去時・層 不明
	2		碗	口縁部	—	—	—	白化粧に透明釉。内外面に貫入あり。口唇部から口縁直下まで、透明釉がかかっていない。	不明	Ⅲa
	3		碗	口縁部	—	—	—	口縁直下に釉がかかっていないため白化粧が見える。	Ⅲ区	北壁セク ション除 去時
	4		碗	口縁部	15.2	—	—	白化粧に透明釉。呉須と飴釉で花文を施す。	不明	不明
	5		碗	口縁部	—	—	—	白化粧を施した後、両面に呉須を用いて施文したものである。小破片のため文様は確認出来ない。	P-25	Ⅱ
	6		碗	口縁部	—	—	—	外面より内面口縁直下まで鉄釉。あとは、灰釉を施す。内外面に細かい貫入がみられる。	4区	東側表採
	7		碗	底部	—	7	—	白化粧に透明釉。畳付を除き総釉、蛇の目釉剥げあり。内底には、重ね焼きの白土が付着。	I-28	攪乱
	8		碗	底部	—	6.9	—	白化粧に透明釉。内外面に貫入有り。畳付を除き総釉。内底に蛇の目釉剥ぎを掻き取り、重ね焼きの跡が残る。	R-25	Ⅱ下部
	9		碗	底部	—	5.8	—	化粧土は淡灰白色で透明釉。内外面に貫入あり。畳付を除き総釉。内底に蛇の目釉剥ぎ有り。重ね焼きの跡が残る。外面に呉須の施文が見られる。	R-25 Q-25	Ⅱ下部 Ⅱ
	10		碗	底部	—	—	—	外面には、鉄釉、内面には、石英釉を施したあと、内底を蛇の目状に掻きとっている。重ね焼きの跡が残る。	不明	不明
	11		小碗	口縁～ 底部	7.9	3.8	—	化粧土は灰白色で透明釉。内外面に貫入あり。畳付を除き総釉。蛇の目剥状に掻き取る。重ね焼きの跡が見込みに残る。	I-28	攪乱
	12		小碗	底部	—	4.0	—	畳付を除き総釉。内底に蛇の目釉剥ぎ有り。重ね焼きの跡が残る。	Q-28	岩盤上 表採
	13		酒器	口縁部	5	—	—	外面は白化粧に透明釉。内面はコバルト釉と鉄釉を施す。	Q-25	Ⅱ
	14		酒器	底部	—	7.8	—	外面は白化粧、透明釉。内底は、ロクロ痕を残す。	P-25	Ⅱ下部
	15		酒器	胴部	—	—	—	内面は上部に鉄釉、下部は無釉。	S-24	I最下
	16	沖縄 産 無 釉 陶 器	瓶子	口縁部	—	—	—	口縁部をラッパ状に外反させ、頸部でしまる。	I-28	攪乱
	17		鉢	口縁部	—	—	—	外面上部にロクロ調整痕が残る。口縁部の一部に自然釉がかかる。	I-28	攪乱
	18		壺	底部	—	18.0	—	外面の一部に自然釉が掛り光沢を帯びる。底面から立ち上がる脇の部分は面取りされ、内面はロクロによるナデ調整が施されている。	Q-28	表採

第15節 滑石製品

滑石製品は総数89点出土した。製品は石鍋と二次製品に分けられる。出土量を第37表に示した。

1. 石鍋（第113図・図版64）

ここでは石鍋とその形状を保持するものを扱った。

第113図1～3・8は器形や色調などから同一個体と思われる。これらを基に図上復元を試みたのが第113図9である。器形は口縁部が内彎するもので、口唇部は平坦に造られる。口縁部直下より縦に方形の耳を持つ。胴部は口縁部に比し薄くなる。底部は外底端部を面取する。面取りは中心部に向かって削っている。口縁部と底部の外表面は鑿による調整痕がみられる。鑿調整は器面の上から削り下ろし、その長さが2.8～3.3cmに達し、それが数段ある。鑿刃の幅は3～8mmで幅広と細い両方を使用し、右から左へ進めて削り下ろしている。推算口径27.2cm、器高19.9cm、底径23.5cm。

図1・2は口縁部資料である。図1は図面左側の断面部を見ると、内外面からの切り込み痕がある。切り込みは完全ではなく途中までの工程であとは折って切り離している。また、図面右側の断面は内外面から断面中心部が山形になるよう削っている。色調は外面が淡白銀色で内面は淡灰白色である。4区・Q-27・柱穴内出土。

図2は外面に4段の削り痕がみられる。色調は外面が淡灰銀色で内面は淡灰白色である。4区・Q-27・第V層。

図3は縦耳の口縁部資料である。耳は口唇部内側から外面までの幅は4.2cm。耳の外面の幅は2.2～3cm、両側面の幅は1.5～2.3cmを測る。本資料は図の左側の断面部に内外面からの切り込み痕がみられる。これは図1に類似する。また、図の右側は錐状工具による穿った痕跡がみられる。このような状況からすると、耳を意識して身から切り離したと思われる。おそらく、図1も耳周辺に位置したものである可能性がある。耳の外面は斜位に削り痕が残る。側面部は鑿痕が縦方向に残る。色調は外面が黒色、内面は淡灰色である。かなり重量感がある。3区・N-28・第VI層b。

図4は縦耳の破片資料である。本資料も図3同様に耳を意識して身より切り離している。耳の両側面から斜め内側に向かって切り込みを入れている。色調は断面が淡白銀色で、外面は煤で黒い。4区・Q-27・柱穴内。

図5は胴部資料である。直径6mmの孔が穿たれている。外面は擦痕がみられ、煤で黒い。内面は色調が淡白銀色である。器厚は1.4cm。4区・N-27・第III層e。

図6～8は底部資料である。図6は外底がベタ底状である。色調は外面が煤で黒く、内面は淡灰色である。3区・N-28・第VI層。

図7は外底がベタ底である。外面は幅6mm程の鑿による調整痕が上から下へと削り、その行為を左から右に進めている。それが2段みられる。色調は外面が黒く、内面は淡灰色である。4区・Q-26・第IV層b。

図8は底部外面から外底に向かって、約1.5cm幅の鑿で面取りを行っている。面取り幅は4.4cm。

外底部まで鑿で削って調整していると思われる。色調は外底から外面は煤で黒く、内面は剥落面で淡灰色である。底径23.5cm。2区・L-28・第VI層b。

2. 二次製品 (第114図・図版65)

ここで扱う資料は石鍋を二次加工したものである。殆どが用途不明の製品であった。

第114図10は撮状を呈するもので破損品と思われる。撮み状の上面形は2×2cmの隅丸方形で、厚さが5～8mmである。棒状部も4面に加工され、不整形な四角柱を呈する。色調は淡灰銀色である。3区・O-27・攪乱。

図11はやや円柱状に整形する資料で、全面丁寧に削る。色調は淡灰銀色である。3区・N-28第III層b。

図12は破損資料で、内面部に窪みを造る。窪み部や内外面に削り痕がみられる。色調は淡灰色である。4区・Q-25・第III層e。

図13は蓋状を呈する。内面の窪みは研磨され丁寧に仕上げている。縁は2mm幅で平坦に仕上げる。厚さは7mm～1cm。色調は淡灰銀色である。4区・S-28・第III層b。

図15・16はバレン状製品と思われる。両資料とも破損している。図15は突に孔が穿たれている。孔径は不明。胴部の器壁は薄く、縁は内外面より削り尖る。3区・N-28・第V層b。

図16は器壁の薄い耳を有する石鍋を加工したものである。縦耳で孔が横切るように穿たれ、径は約5mmを測る。現存資料の長さは3.6cm、幅2.4cm。胴部の縁は内面から外面に削る。色調は淡灰銀色である。3区・P-26・第IV層。

図14・17～22は孔を有している。図14は内外面とも削りを施している。平面観は隅丸状を呈し、縁は細くなる。孔径は8mm。色調は淡灰銀色を呈し、黒粒の粒子が散在している。3区・N-27・第V層b。

図17は内面から外面に削っている。孔は数回穿っている。1回穿ったあと、更に外面から穿っている。色調は灰色である。4区・R-28・第III層a。

図18は断面が山形状を呈し、孔が2ヶ所穿たれ一つは破損している。もう一つは孔径が5mm。正面図の右側断面及び尖る部分は丁寧に削っている。また、下方部も平坦に整形する。色調は淡灰銀色である。4区・Q-27・柱穴内。

図19は口縁部資料と思われる。口唇部幅は1cm。同直下に径5mmの孔を穿つが破損している。内面下部に削り痕がみられる。色調は外面が煤で黒く、内面は淡灰色である。4区・S-28・第IV層。

図20は胴部資料で、径5mmの孔を穿つ。図の上部断面は削り痕が残る。器壁は1.1cm。色調は外面が黒く、内面は白銀色である。4区・R-25・第VI層。

図21は口縁部資料と思われる。口唇部幅は1.2cm。孔が3ヶ所穿たれているのが確認できるが、いずれも破損している。孔は全て斜めに穿たれている。正面図の左側は削り痕が残る。色調は淡灰銀色である。4区・R-27・第V層b。

図22は口縁部資料と思われる。口唇部の幅は1～1.5cm。外面に鑿調整痕を残す。孔は破損している。口縁部の右側は口唇部から削りを入れ尖らしている。色調は外面が黒く、内面は淡灰銀色である。4区・R-25・第IV層。

小結

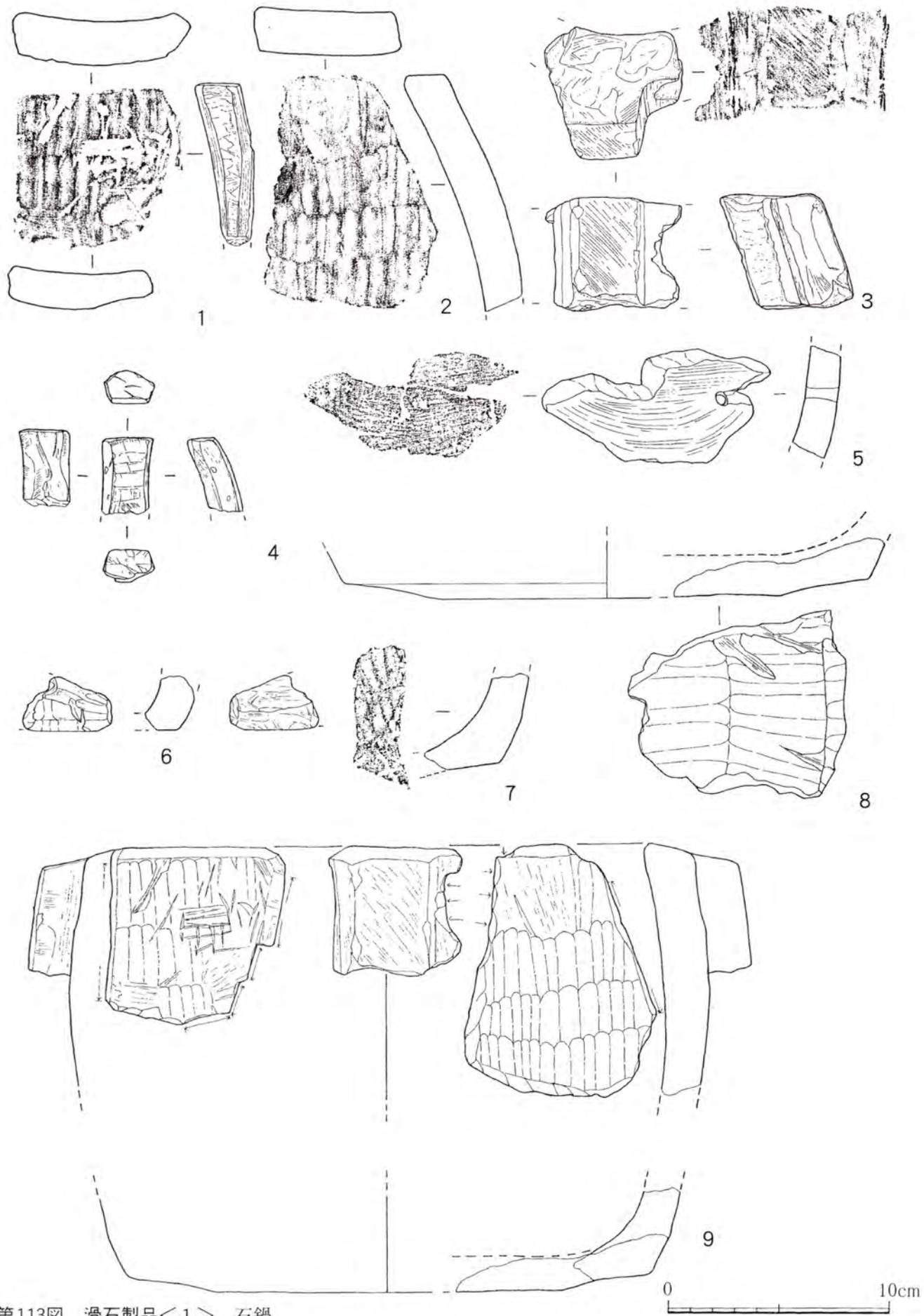
滑石製品は石鍋の器形が復元できる資料と、二次製品があった。

石鍋は方形状の縦耳を持ち、造りも丁寧で器壁1.40cmの厚い、重量感がある大型の資料（第図9）と、器壁が1～1.5cmの中型、器壁の薄い小型の3種類みられる。大型は第V・VI層、中型は第IV・V層、小型は第III層～VI層で見られる。

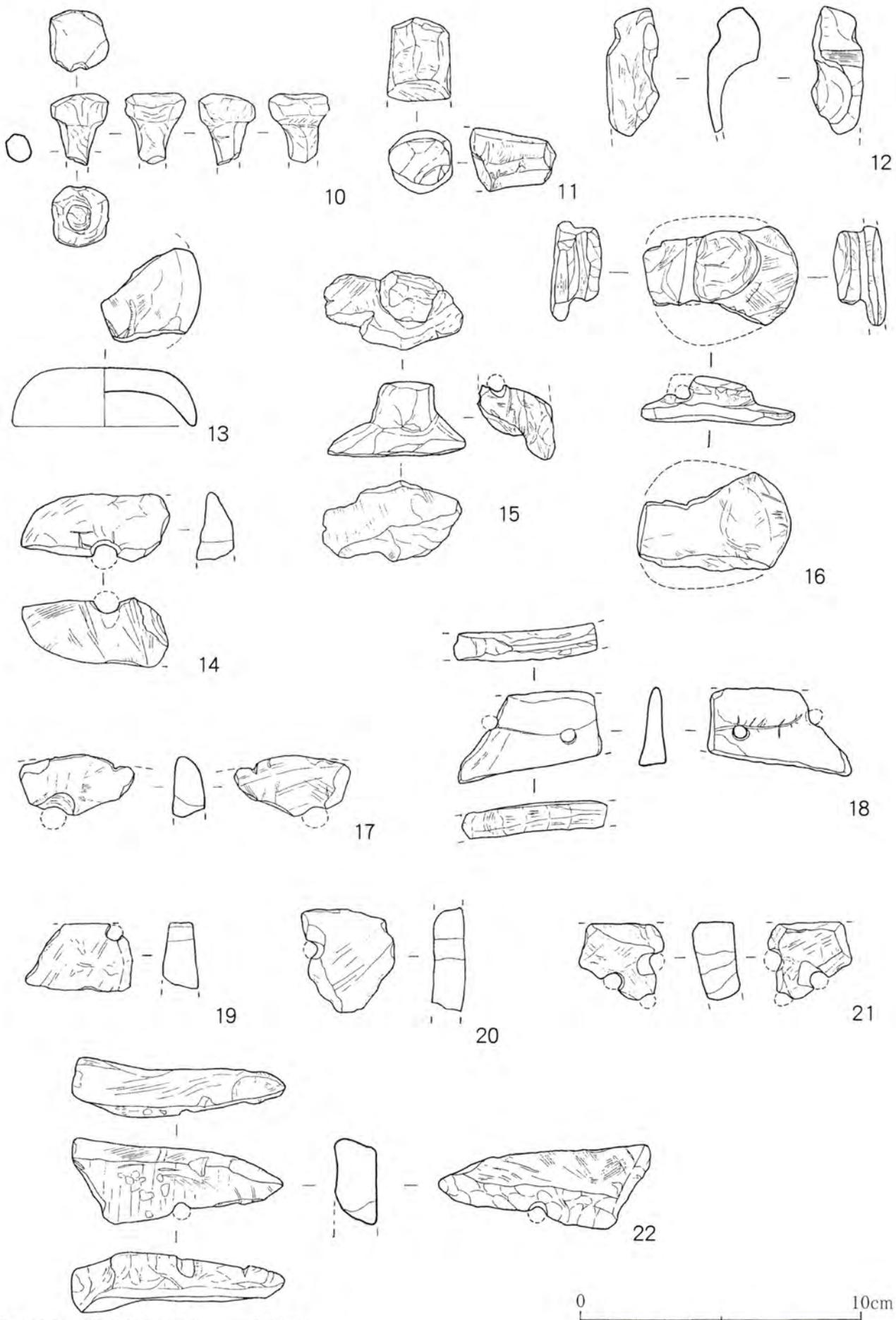
二次製品で扱ったパレン状製品（第114図15・16）の用途であるが、石鍋の底部にできた穴を補修するためのものであると、大分県教育委員会の高橋信武氏よりご教示いただいた。高橋氏によると、底部にできた穴は内底側からパレン状製品の突起部分で穴を塞ぎ、外底部に飛び出た突起に釘やピンなどを外底に沿って打ち付け固定して使用するようである。突起の孔のサイズで使用した釘やピンのサイズも推測できる。また、外底部は火を直接受けるため、突起部分が煤や黒味を帯びているということである。第114図10・11も補修孔に関する資料の可能性もある。

第37表 滑石製品出土量

器種 出土	鍋				二次製品					合計
	口縁部		胴部	底部	器状	板状		撮	破片	
	口縁	突起				有孔	無孔			
攪乱								1	1	2
II		1							1	2
III			2			1			1	4
III a			1			1			1	3
III b	1	1	1	1	1				2	7
III c			1						1	2
III d	2							1	1	4
III e	2		2		1		1		4	10
III f	1									1
IV	1		1	1				1	1	5
V	3		7	3		3		1	6	23
VI		1	5	2		1			1	10
柱穴内						1				1
不明		1	6	1					7	15
合計	10	4	26	8	2	7	1	4	27	89



第113図 滑石製品<1> 石鍋



第114図 滑石製品<2> 二次製品

第16節 石 器

石器は破片も含めて105点得られ、8種類の石器が出土した。種類別では磨石がもっとも多く、ついで敲石、砥石、石皿、石斧、凹石・器種不明・球石の順となる。

分類は各種類ごとに形態（I・II類など）で分け、使用痕（A・Bなど）、さらに使用部位について（①・②など）可能なものを細分した。残存状況については全体形が残るものを完形品、全体形の3分の1程度を失うものを破損品とし、これよりも部分的に欠けたものを欠損品、全体形が判然としないものを破片とし、折れた状況を示しているものを折損品として分けた。

個々の詳細は第41表の観察一覧、層位別出土状況を第39表、素材別出土状況を第40表①～⑦に示した。以下、各器種別の分類について述べる。

1. 石 斧

石斧は8点の出土である。完形品3点、折損品2点、破片3点である。素材は輝緑岩・斑れい岩・緑色片岩である。

下記の2類に分けられる。

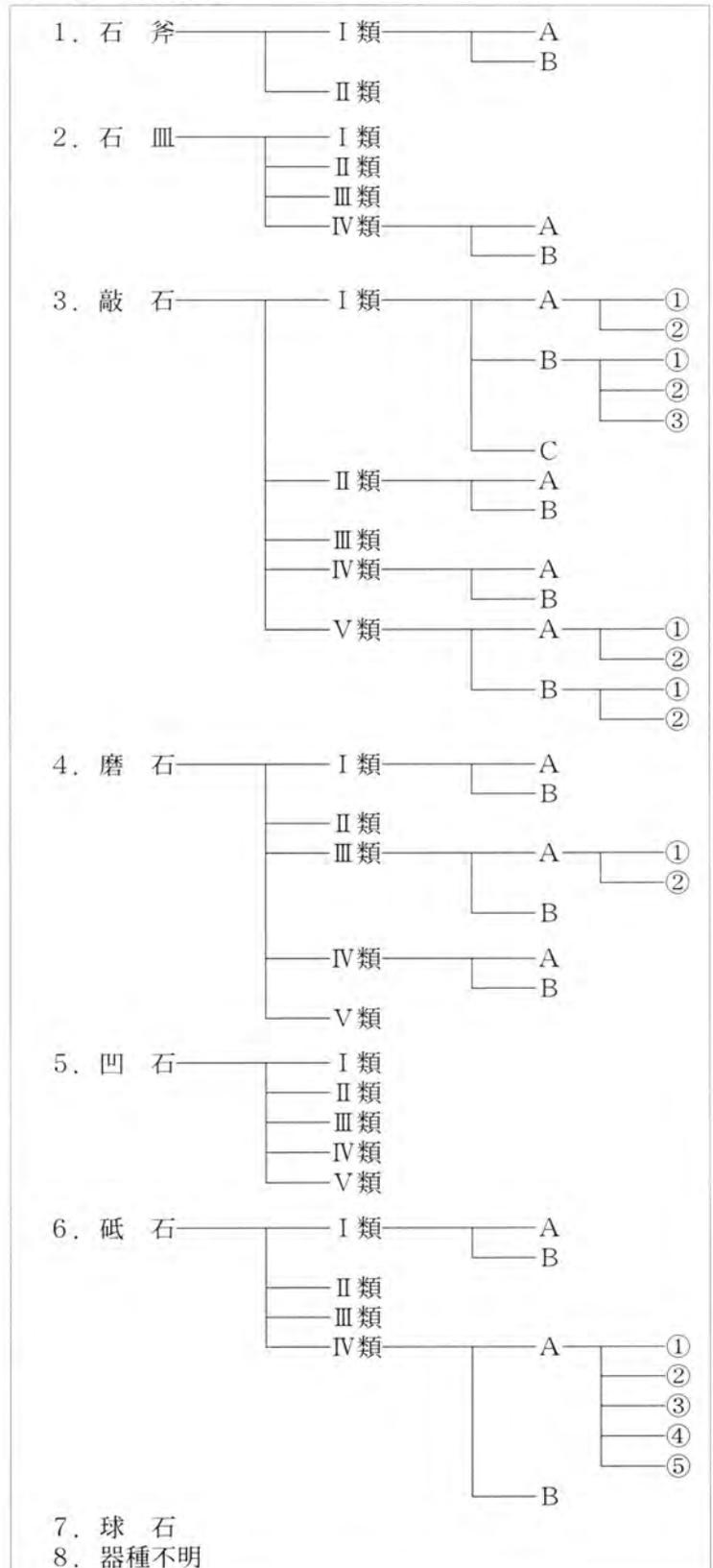
I類：両刃のもの。平面形が短冊形を呈するもの。

A ほぼ全体に研磨が施されて成形されたもの（第116図の3・6・7）。

B 刃部やその周辺に研磨を施すが、表裏面や側面に成形のための細かい敲打調整痕を残すもの（第116図の4・5・8・10）。

II類：片刃状の礫を利用し表裏面に擦れがあるもの。平面形は方形を呈するもの。（第116図の12）。

第38表 石器分類



2. 石 皿

石皿は、9点の出土である。完形品2点、破損品3点、破片4点である。材質は輝緑岩・斑れい岩・流紋岩・砂岩・礫質砂岩・片状砂岩・シルト岩である。

平面形態から下記の3類に分けられる。

- I類：全体形は不明であるが、磨痕や擦れ痕が1面又は、2面にあるもの（第124図59～61、第129図94）。
- II類：平面形・縦断面が長方形を呈し、表裏面に擦れが見られ敲打痕を持つもの。（第132図104）
- III類：平面形が不定形で縦断面形が長楕円形に類するもの。表裏面に磨痕があり表裏のうち1面に敲打痕があるもの。（第117図19・21）
- IV類：平面・縦断面形が楕円形、またはそれに類するもの。
 - A 表裏面に顕著な磨痕があるもので、形態から台座石の可能性のあるもの（第115図1）。
 - B 表面に擦れが見られ、右側面に磨痕があるもので、形態から台座石の可能性のあるもの（第115図2）。

3. 敲 石

敲石は19点の出土である。完形品7点、欠損品1点、破損品1点、折損品1点、破片9点である。素材は輝緑岩・輝石安山岩・チャート・角閃石・角閃石安山岩・斑れい岩・ひん岩・砂岩・礫質砂岩・片状砂岩・シルト岩である。

平面形から、下記の4類に分けられた。

- I類：平面形が楕円形を呈し、縦断面形が楕円形又はそれに類するもの。
 - A 敲打痕のみのもの。
 - ①裏面や側面の頂部に敲打痕があるもの（第121図41）。
 - ②右側面に敲打痕があるもの（第130図99）。
 - B 打欠痕のみのもの。
 - ①側面の4ヶ所に敲打による打欠痕があるもの（第129図92）。
 - ②側面の2ヶ所に敲打による打欠痕があるもの（第116図9）。
 - ③下部に敲打による打欠痕があるもの（第116図11、第121図44）。
 - C 敲打痕と磨痕があるもので、側面に敲打痕があり、表面に磨痕があり裏面が擦れている磨石破片の転用と考えられるもの（第117図20）。
- II類：平面形が円形を呈し、縦断面形は長楕円形を呈するもの。
 - A 表面中央に敲打痕があるもの（第125図62）。
 - B 敲打痕が表裏面と側面の3ヶ所にあり、磨痕が表裏面と側面の1ヶ所にあるもの（第129図93）。
- III類：平面形が方形を呈し、断面形が長方形を呈するもので、表裏面に敲打痕があるもの（第125図66）。
- IV類：平面形が不定形なもので、縦断面形が長楕円形を呈するもの。
 - A 側面の1ヶ所に打欠痕があるもの（第121図43、第130図100）。
 - B 側面の2ヶ所に打欠痕があるもので、表裏面に擦れが見られ小型の石皿を転用したと思わ

れるもの（第129図91）。

V類：全体形が不明なもの。

A 敲打痕のみのもの。

①敲打痕が表面中央部に僅かにあるもので、石皿の破片を転用したと思われるもの（第121図42）。

②下端に敲打痕があるもの（第121図40、第130図96）。

B 打欠痕のみのもの。

①左側の2ヶ所に打欠痕があるもの（第130図97）。

②下部に打欠痕があるもの（第130図95、第130図98）。

4. 磨石

磨石は42点の出土である。完形品6点、破損品3点、破片33点である。素材は輝緑岩・角閃石・輝石安山岩・斑岩・斑れい岩・閃緑岩・花崗はん岩・緑色岩・砂岩・礫質砂岩・片状砂岩・シルト岩で、未鑑定が2点である。

平面形態から下記の4類に分けられる。

I類：平面形、縦断面形ともに楕円形を呈するもの。

A 表裏面・下側面に磨痕がある（第119図28・32）。

B 表面に磨痕、側面に敲打痕、右側の打欠痕の縁辺部に潰れがあるもの（第119図30）。

II類：平面形が不定形で縦断面形が楕円形に類するもので、全体に弱い磨痕があるもの（第119図29）。

III類：使用痕はみられるが全体形が不明なもの。

A 磨痕のみのもの。

①表面に磨痕があるもの（第118図25・27、第120図34～38、第122図45～48、第123図50～58、第125図65、第128図80・81・83・85）。

②表面に磨痕があるもので石皿の転用品と思われるもの（第128図49）。

B 磨痕と敲打痕があるもので、磨痕が表裏面にあり、側面に敲打痕があるもの（第118図23・24・26、第128図90）。

IV類：平面形と縦断面形が長方形又はそれに類するもの。

A 表面に磨痕があるもの（第121図39）。

B 表裏面又は一方に磨痕があり、側面が擦れているもので砥石としての転用が考えられるもの（第128図82・84・86～88）。

V類：平面形がバチ形を呈し、縦断面形が長方形を呈するもの。表裏面に磨痕があるもので、砥石としての転用が考えられるもの（第128図89）。

5. 凹石

凹石は5点の出土である。完形品5点である。素材は砂岩のみである。

平面形態から下記の4類に分けられる。

I類：平面形が楕円形又はそれに類するもので、縦断面形が長楕円形を呈し、敲打による凹痕が

表面の中央部にあり、裏面中央部に敲打痕があるもの（第131図101）。

- Ⅱ類：平面形が円形を呈し、縦断面形が楕円を呈するもの。敲打による凹痕が表面の中央部にあり、裏面の中央部に擦れた凹痕を持つもの（第125図63）。
- Ⅲ類：平面形が方形又はそれに類するもので、縦断面形が長方形を呈し、表裏面・左右側面に凹痕があるもの（第132図103）。
- Ⅳ類：平面形が方形を呈し、縦断面形が楕円形を呈するもの。磨痕が表裏面にあり、敲打の集中部が表面中央にあり裏面の中央部と側面に敲打痕があるもの（第125図64）。
- Ⅴ類：平面形が長方形を呈するもの。縦断面形が、長楕円形に類するもの。表面の中央部に凹痕があり、側面に敲打痕があるもので、裏面に縦長の窪みがあるもの（第131図102）。

6. 砥石

砥石は13点の出土である。完形品は3点、欠損品1点、破損品1点・破片8点である。素材は片状砂岩・凝灰岩・黒色千枚岩・緑色千枚岩である。

平面形態から、下記の4類に分けられる。

I類：平面形がバチ形を呈するもの。

A 砥面と敲打痕があるもので、表・裏・左・右の4面に砥面があり、敲打痕が下端部にあるもの（第127図74）。

B 表・裏・左・右の4面に砥面があり、その1面に溝があるもので、敲打痕が上下端部にあるもの（第127図78）。

Ⅱ類：平面形、縦断面形ともに長さのある長方形を呈するもので、表面に砥面があるもの（第126図72）。

Ⅲ類：表面に砥面があり、擦れが裏面にあるもので石皿の転用と考えられるもの（第126図70）。

Ⅳ類：全体形が不明なもので、破片での使用が考えられるもの。

A 砥面のみのももの。

①表・裏・左・右の4面に砥面があるもの（第126図73、第127図79）。

②表・左・右の3面に砥面があるもの（第127図76、第126図67）。

③表・右・裏の3面に砥面があるもの（第127図75）。

④表裏面の2面に砥面があるもの（第126図68・69）。

⑤表面に砥面があるもの（第126図71）。

B 砥面と敲打痕があるもので、表・左・右の3面に砥面があり、表面中央と右側面に敲打痕があるもの（第127図77）。

7. 球石

球石は2点の出土である。いずれも完形品である。素材は輝緑岩である。平面形、縦断面形ともに円形を呈するもの。弱い敲打痕がみられるが擦れた感があるもの（第119図31・33）。

8. 器種不明

器種不明は7点の出土である。完形品2点、破損品1点、破片4点である。素材は粘板岩・砂

第39表 石器層位別出土量

分類 層序	石斧		石皿				敲石										磨石					凹石					砥石					球 器 種 不 明 石	小計			
	I類		I	II	III	IV類	I類			II類	III	IV類		V類		I類	II	III類	IV類	V	I	II	III	IV	V	I類	II	III	IV類							
	A	B	類	類	類	A	B	A			B	類	A	B	A		B	類	類	類	類	類	A	B	類	類	類	A						B		
						①	②	①	②	③	C	A	B	類	A	B	①	②	①	②	類	類	類	類	類	A	B	類	類	①	②			③	④	⑤
第II層			2	1					1	1			1		1	1									1	1								1	18	
第III層a															1				1															2		
第III層b	1	1	1	1	1	1					1	1		1					2										1				1	2	22	
第III層c			1															4	2	1			1	1					1			1		1	13	
第III層d															1														2					3		
第III層e		1				1											3			1					1						1			9		
第III層f																																				
第III層g																																				
第III層h										1										1			1												3	
第IV層		1	1	1							1	1		1			5	1	1	1													2	16		
第V層															1		2																1	4		
第VI層		1																												1				2		
柱穴10234																													1					1		
柱穴9006																												1						1		
柱穴419						1																1												2		
柱穴1003 a										1																								1		
柱穴3101 a													1																					1		
不明	1						1													1													1	4		
攪亂	1																	1																2		
表採																1																		1		
小計	3	4	1	4	1	2	1	1	1	1	2	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	7	105
合計	8		9				19										42					5					13					2	7	105		

第40表 石器分類別の素材別出土量

分類 層序	石斧		石皿				敲石										磨石					凹石					砥石					球 石	器 種 不 明	小計	
	I 類		I	II	III	IV 類	I 類			II 類			III	IV 類		V 類		I 類	II	III 類		IV 類	V	I	II	III	IV 類								
	A	B	類	類	類	A	B	A			B			C	A	B	類	A	B	A		B		類	類	類	類	類	A		B				
						①	②	①	②	③				類	A	B		類	類					類	類	類	類	類	①	②	③				④
輝緑岩	2	2	1						1								1																	2	18
チャート									1						1		1																		3
角閃石																		1																	3
角閃石安山岩								1		1																									2
輝石安山岩																																			2
斑岩																																			1
斑れい岩	1	2																																	8
閃緑岩																																			1
花崗はん岩																																			1
ひん岩																																			1
流紋岩																																			1
緑色岩																																			2
粘板岩																																			1
砂岩																																			2
礫質砂岩																																			4
片状砂岩																																			1
シルト岩																																			2
凝灰岩																																			7
黒色片岩																																			1
緑色片岩																																			1
黒色千枚岩																																			2
緑色千枚岩																																			1
未鑑定																																			2
小計	3	4	1	4	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	7
合計	8		9				19										42					5					13					2	7	105	

岩・片状砂岩・黒色片岩・黒色千枚岩である。

第117図14は破損品であるが、上部中央と左右にある抉れが孔の可能性のあるもの。図16は破損品で、右側の折損部にほぼ垂直な孔があるもので表面と下側面に研磨面があり上側面・裏面が擦れている。図17は平面形が長方形を呈するもので、表裏面に剥離によって生じたと考えられる長軸方向に長い窪みを有するもので、その周囲と側面に研磨面があるもの。図18は平面形が長方形に類するもので、表面と左右側面に研磨面があるもの。図15は表面に磨痕があり、下側に反っているもので、裏面が擦れている。図22は上辺に対して直角方向に擦れが見られ、表裏面の剥離痕以外にもその痕跡が認められるものである。第116図13は縁辺部が面取りされ、丁寧な研磨が全体に施されている。

第41表① 石器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	石質	残存 状況	計測値	観察事項	出土地	層位
						長さ (cm) 幅 (cm) 厚さ (cm) 重さ (g)			
第116 図・ 図版 67	3	石斧	I類A	輝緑岩	完形	10.7 5.7 2.5 263	両刃石斧。比較的丁寧な研磨をほぼ全体に施すが、強い稜を残すほどではない。刃部裏面に小さな剥離痕があり、刃先はやや丸みを帯びている。	R-24	不明
	6	石斧	I類A	輝緑岩	破片	4.3 4.4 3.0 80	基部の破片。丁寧な研磨が施されている。裏面上部の剥離痕は擦れている。	O-27	Ⅲb
	7	石斧	I類A	斑れい岩	破片	4.1 5.3 2.9 97	基部の破片。表裏面は比較的丁寧に研磨が施されているが、上端面、左・右側面は弱い。	Q-28	不明
	4	石斧	I類B	輝緑岩	破片	5.6 4.6 2.5 82	両刃石斧の刃部破片。比較的丁寧な研磨を施しているが、表面の左側縁辺部には細かい敲打調整痕や小さな剥離痕を残す。	R-25	IV
	5	石斧	I類B	斑れい岩	折損	8.9 5.5 3.6 297	両刃石斧の折損品。研磨は刃部周辺から側面にかけては比較的丁寧であるが、表裏面の平坦部や左右の側面には、細かい敲打調整痕を残す。刃先は潰れ擦れている。表面から右側面にかけて煤けており火を受けたと思われる。	R-28	VI
	8	石斧	I類B	輝緑岩	折損	7.0 4.6 3.3 168	基部の折損品。研磨は丁寧であるが、左側面の中央部、右側面の裏面より縁辺部や上端面の中央部に敲打痕を残す。破損部の縁は潰れ摩滅している。	O-26	Ⅲe
	10	石斧	I類B	斑れい岩	完形	10.9 5.4 2.0 243	刃部周辺の研磨は丁寧である。表裏面に敲打調整痕を残しており、表面は中央の窪んだ部分と右側上部、裏面は凸部のみが研磨されている。側面は表裏面に比して僅かである。刃部は潰れ、左側の角に剥離痕がある。左右の側面にある剥離痕は摩滅している。	S-28	Ⅲb
	12	石斧	Ⅱ類	緑色片岩	完形	5.7 4.9 1.2 67	扁平な片刃状を呈する礫を使用したもので、裏面中央部から上端側にかけて強い磨痕があり、表面は擦れている。刃部や他の側面に研磨は見られないが擦れている。刃部は裏面側に使用による剥離痕がある。	R-25	Ⅲc
第124 図・ 図版 75	59	石皿	I類	輝緑岩	破片	13.1 8.4 5.6 837	表面中央部で縦方向に磨痕がある。裏面は擦れた感がある。	O-27	Ⅱ攪乱
	60	石皿	I類	シルト岩	破片	13.3 13.8 11.4 1.693	表面のみに磨痕がある。	Q-27	Ⅲb
	61	石皿	I類	礫質砂岩	破片	13.2 9.6 9.3 1.399	右側の剥離面に擦れがある。	J-28	IV

第41表② 石器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	石質	残存 状況	計測値	観察事項	出土地	層位
						長さ (cm) 幅 (cm) 厚さ (cm) 重さ (g)			
図第 版129 80図	94	石皿	I類	流紋台	破片	12.9 10.3 6.8 930	表面・右側面に磨痕があり後者がやや強い。	O-27	II
図第 版132 83図	104	石皿	II類	砂岩	完形	8.3 7.6 4.3 540	表裏面に僅かに敲打痕がある。	O-27	II
第 117 図・ 図版 68	19	石皿	III類	砂岩	破損	8.8 6.2 1.9 147	表裏面に僅かに敲打痕がある。表面では上・下の縁側、裏面では中央部から左半分にある。	N-27	IV
	21	石皿	III類	片状砂岩	破損	11.0 7.2 1.7 143	表面のほぼ全体に磨痕があり、中央部に敲打痕がある。裏面は、剥離面であるが擦れている。	O-27	IIIb
第 115 図・ 図版 66	1	石皿	IV類A	砂岩	完形	27.1 12.7 7.3 3800	表面のほぼ全面に強い磨痕があり、裏面中央部のやや窪んだ部分に弱い磨痕がある。側面は摩滅している。表裏面が赤褐色を呈しており、煤けた部分も見られることから火を受けたと思われる。	Q-27	柱穴 No.419
	2	石皿	IV類B	斑れい岩	破損 (接合)	5.9 9.0 4.4 2000	表面、右・左側面の残存部に磨痕がある。左・右側面は中央部にやや強い磨痕がある。	Q-27	IIIb
図第 版121 72図	41	敲石	I類A①	砂岩	完形	8.9 5.7 5.4 369	表面と側面のすべての頂部に敲打痕がある。	Q-25	IIIeサイカ
図第 版130 81図	99	敲石	I類A②	角閃石安山岩	完形	6.4 4.3 2.8 110	裏面中央部に、僅かに敲打痕がある。裏面には擦れが見られる。	Q-27	IIIb
図第 版129 80図	92	敲石	I類B①	ひん岩	完形	6.1 4.9 1.9 94	表裏面に磨痕があり。左右の側面に細かい敲打痕がある。	不明	不明
第 116 図・ 図版 67	9	敲石	I類B②	角閃石安山岩	欠損	9.7 4.0 2.6 173	表裏面の磨痕は右側面よりに、表面の左側と裏面の下端側にやや強い磨痕がある。右側面中央部に細かい敲打の集中がある。剥離痕は摩滅している。	O-27	II
	11	敲石	I類B③	輝緑岩	折損	8.0 4.0 2.2 147	長楕円状の礫を使用した折損品。	R-27	柱穴No. 1003-a
図第 版121 72図	44	敲石	I類B③	チャート	完形	8.3 7.1 3.6 318	右下側に敲打による剥離がある。	S-28	IIIh dot116
図第 版117 68図	20	敲石	I類C	砂岩	破片	7.0 4.3 2.6 95	表面のほぼ全面に顕著な磨痕があり、裏面の破損面の中央部に磨痕がある。破片を再利用した二次加工品と思われる。	O-27	II
図第 版125 76図	62	敲石	第II類A	片状砂岩	破片	9.2 6.2 3.2 195	表面中央に敲打痕がある。	Q-27	IIIb
図第 版129 80図	93	敲石	II類B	斑れい岩	完形	7.7 7.9 1.8 190	表面と上・左・右側面に敲打による剥離痕があり、裏面は敲打痕が中央部に集中している。	Q-26	IV下部
図第 版125 76図	66	敲石	III類	シルト岩	完形	7.8 7.7 4.3 386	表裏面に中央部に敲打痕がある。周辺は僅かに擦れた感がある。	Q-27	IIIb

第41表③ 石器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	石質	残存 状況	計測値		観察事項	出土地	層位
						長さ (cm)	幅 (cm)			
図第 版121 72図	43	敲石	IV類A	チャート	破損	6.6 6.5 4.5 230		下側の頂部に敲打による打欠痕がある。	L-27	IIg
図第 版130 81図	100	敲石	IV類A	礫質砂岩	破片	11.2 8.7 8.3 890		左側面と下面に擦れた感（僅かな磨痕）がある。	Q-27	IV
図第 版129 80図	91	敲石	IV類B	砂岩	完形	14.7 12.1 4.2 965		左側面頂部近くと右下側面に打欠痕がある。表裏面中央部に弱い磨痕がある。	Q-27	柱穴No. 3101-a
第 121 図・ 図版 72	42	敲石	V類A①	砂岩	破片	4.7 10.8 2.9 247		表面中央部に僅かに敲打痕がある。	R-27	IIIb (10/15)
	40	敲石	V類A②	チャート	破片	6.4 3.4 2.5 70		下端に敲打痕がある。	R-25	IVb
第 130 図・ 図版 81	96	敲石	V類A②	礫質砂岩	破片	6.3 6.6 6.4 317		表面と下・右側面敲打痕がある。	O-27	II
	97	敲石	V類B①	輝緑岩	破片	5.8 8.5 3.3 249		下部と右側面の縁に敲打による剥離がある。	O-27	IIIe攪乱
	95	敲石	V類B②	角閃岩	破片	9.2 6.2 2.7 237		上・左側面の縁辺部に敲打痕がある。	Q-27	表採
	98	敲石	V類B②	砂岩	破片	13.7 6.7 6.1 673		左側面に弱い磨痕がある。	O-27	II
第 119 図・ 図版 70	28	磨石	I類A	片状砂岩	完形	6.7 5.1 4.1 209		表裏面・下側面に磨痕があり、表面は中央部に僅かにみられる。	N-28	V
	32	磨石	I類A	片状砂岩	完形	7.7 5.3 4.7 266		表・下側面・裏面に掛けて幅約3cmで磨痕がある。	P-26	III d
	30	磨石	I類B	砂岩	破損	7.4 5.2 3.8 200		表面に磨痕があり、左側面に細かい敲打痕がある。右側には叩きによる打欠痕がある。	O-26	III
	29	磨石	II類	砂岩	完形	4.7 5.3 3.9 124		全体に磨痕がある。	R-27	III b
図第 版118 69図	27	磨石	III類A①	輝石安山岩	破損	10.3 11.8 4.1 500		表面中央から右側に顕著な磨痕がある。上部右側の剥離痕は摩滅している。裏面は擦れた感がある。	P-27	II
第 120 図・ 図版 71	34	磨石	III類A①	斑れい岩	破片	8.4 9.0 2.5 217		表面に磨痕がある。	P-27	III c (0/5)
	35	磨石	III類A①	花崗はん岩	破片	7.8 5.1 5.2 190		表面左側よりに磨痕がある。煤けた感があり火を受けたと思われる。	Q-26	IV下部

第41表④ 石器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	石質	残存 状況	計測値	観察事項	出土地	層位
						長さ (cm) 幅 (cm) 厚さ (cm) 重さ (g)			
第120 図・図版 71	36	磨石	Ⅲ類A①	閃緑岩	破片	9.8 8.0 5.9 555	表面に弱い磨痕がある。	O-26	V
	37	磨石	Ⅲ類A①	輝緑岩	破片	8.9 6.2 3.5 197	表面に磨痕がある。裏面の破損部の稜は摩滅している。	R-25	IV
	38	磨石	Ⅲ類A①	砂岩	破片	18.9 10.4 12.1 242	表面に全体に磨痕がある。	R-28	Ⅲb
第122 図・図版 73	45	磨石	Ⅲ類A①	角閃石	破片	7.9 8.3 5.3 413	表面に磨痕があり、僅かに左側面にも続いている。	R-28	攪乱
	46	磨石	Ⅲ類A①	—	破片	15.0 7.6 3.6 573	表面に全体に磨痕がある。左右側面・裏面は擦れている。	O-27	II
	47	磨石	Ⅲ類A①	斑れい岩	破片	8.6 9.7 6.4 669	左右の面に顕著な磨痕がある。	R-26	Ⅲc
	48	磨石	Ⅲ類A①	砂岩	破片	9.6 5.5 4.7 177	表面に磨痕がある。	O-27	II 攪乱
第123 図・図版 74	50	磨石	Ⅲ類A①	礫質砂岩	破片	11.2 4.4 4.1 110	表面に磨痕がみられる破片。	R-25	IV
	51	磨石	Ⅲ類A①	砂岩	破損	7.1 6.5 3.0 184	表面の右半分に磨痕がある。裏面、縁辺部は擦れている。	O-27	Ⅲb (0/5)
	52	磨石	Ⅲ類A①	緑色岩	破片	7.8 4.4 2.4 107	表面に磨痕がある。	O-27	Ⅲb
	53	磨石	Ⅲ類A①	輝緑岩	破片	6.6 7.5 2.0 205	表面と右側面に磨痕があるが、右側面は僅かである。	Q-26	Ⅲb (10/15)
	54	磨石	Ⅲ類A①	輝緑岩	破片	7.5 6.4 3.4 220	表面中央部から上側に磨痕がある。	P-27	Ⅲb
	55a	磨石	Ⅲ類A①	輝緑岩	破片	4.1 5.3 2.1 53	表面に弱い磨痕がある。	N-27	Ⅲe
	56	磨石	Ⅲ類A①	輝緑岩	破片	6.2 8.0 6.5 377	左・右・下面に磨痕があり、左側面は他の面より僅かに強い。	Q-27	V
	57	磨石	Ⅲ類A①	輝緑岩	破片	9.6 5.3 3.7 309	表面に磨痕がある。打欠痕の稜が丸みを帯びて擦れている。	O-27	II
	58	磨石	Ⅲ類A①	緑色岩	破片	6.1 3.5 1.9 48	表面に磨痕がある。	Q-27	Ⅲb

第41表⑤ 石器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	石質	残存 状況	計測値		観察事項	出土地	層位
						長さ (cm)	幅 (cm)			
図第 版123 74図	55b	磨石	Ⅲ類A①	輝緑岩	破片	6.6	60	右側面に磨痕を残す器表面がある。	Q-26	Ⅲcサイカ
						4.6				
図第 版125 76図	65	磨石	Ⅲ類A①	砂岩	破片	4.7	113	表面に磨痕がある。	I-28	IV
						6.1				
第 128 図・ 図版 79	80	磨石	Ⅲ類A①	砂岩	破片	7.4	43	表面に磨痕がある。上部の縁辺部は潰れて擦れている。上下側面の中央部分は擦れた感がある。	N-27	Ⅲe
						2.6				
						2.3				
						4.1				
第 118 図・ 図版 69	81	磨石	Ⅲ類A①	砂岩	破片	8.1	105	表面に磨痕がある。	Q-26	IVb
						3.1				
						6.7				
						6.8				
第 128 図・ 図版 79	83	磨石	Ⅲ類A①	輝緑岩	破片	6.8	127	表面に磨痕がある。裏面の稜部は擦れている。	Q-26	Ⅲe
						3.5				
						5.8				
						5.9				
第 128 図・ 図版 79	85	磨石	Ⅲ類A①	はん岩	破片	2.6	97	表面に磨痕がある。	P-27	Ⅲc (0/5)
						5.8				
						5.9				
						2.6				
図第 版122 73図	49	磨石	Ⅲ類A②	砂岩	破片	12.2	681	表面に磨痕がある。裏面は擦れている。	J-27	IV
						6.9				
第 118 図・ 図版 69	23	磨石	Ⅲ類B	輝緑岩	破片	7.8	440	表・裏・上・下に磨痕があり、裏・表面下側にやや強い磨痕がある。上部側面に僅かな敲打痕がある。俗に言うクガニ石の破片と思われる。	O-27	II
						7.8				
						5.1				
						4.4				
第 118 図・ 図版 69	24	磨石	Ⅲ類B	—	破片	5.5	337	左・右側面に磨痕があり、右側面には細かい敲打痕もある。	S-25	IV
						7.3				
						6.5				
						3.7				
第 118 図・ 図版 69	25	磨石	Ⅲ類B	斑れい岩	破片	7.2	378	表面に顕著な磨痕があり、左側面に細かい敲打痕がある。	R-26	Ⅲc
						9.5				
						4.5				
						3.7				
第 118 図・ 図版 69	26	磨石	Ⅲ類B	輝石安山岩	破片	4.4	245	破損部以外の全体に磨痕があるが、右側面から表裏面にかけてはやや強い。上面に僅かな敲打痕がある。	R-27	?
						6.9				
						6.0				
						2.4				
図第 版128 79図	90	磨石	Ⅲ類B	砂岩	破片	6.1	99	表面から左側面にかけて磨痕がある。	Q-26	Ⅲcサイカ
						4.3				
図第 版121 72図	39	磨石	IV類A	角閃石	完形	11.7	863	表面中央に僅かに磨痕があり全体的に擦れている。	O-26	II
						8.2				
第 128 図・ 図版 79	82	磨石	IV類B	砂岩	完形	5.5	33	表・裏面に磨痕がある。左右側面は擦れている。	Q-27	Ⅲb
						1.9				
						1.8				
第 128 図・ 図版 79	84	磨石	IV類B	砂岩	破片	7.9	100	表裏面に磨痕があり、裏面は顕著で平坦面をなしている。砥石として二次利用したものと考えられる。右側は小さく打ち欠いて整形しているようである。縁辺は潰れ、左右の剥離痕は擦れている。	R-25	IV下部 (b)
						4.8				
						1.9				
第 128 図・ 図版 79	86	磨石	IV類B	片状砂岩	破片	6.2	118	右側面に磨痕がある。表裏面の破損部や縁辺部の稜も擦れている。	Q-26	Ⅲc
						5.5				
						2.4				

第41表⑥ 石器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	石質	残存 状況	計測値	観察事項	出土地	層位
						長さ (cm) 幅 (cm) 厚さ (cm) 重さ (g)			
第128 図・ 図版 79	87	磨石	IV類B	砂岩	破片	4.3 4.2 2.2 60	表裏面に磨痕がある。	Q-27	Ⅲb
	88	磨石	IV類B	砂岩	破片	7.0 4.4 3.3 188	表面に磨痕があり、右側面は擦れている。	S-28	Ⅲh
	89	磨石	V類	砂岩	完形	8.6 6.2 3.0 268	表面中央部より下側の凸部と裏面の平坦面に磨痕があり、裏面が強い。	O-27	Ⅲe攪乱
図第 版131 82図	101	凹石	I類	砂岩	完形	13.4 11.4 6.4 1.280	表面中央部に敲打による凹痕があり、深い。下・右側面、裏面中央部に敲打痕がある。裏面には打欠による剥離痕がある。	Q-27	柱穴 No.419
図第 版125 76図	63	凹石	II類	砂岩	完形	7.1 6.8 3.2 214	表面中央部に敲打による深い凹痕がある。表面右側が僅かに擦れている。裏面中央の凹痕は擦れている。	S-28	Ⅲh
図第 版132 83図	103	凹石	III類	砂岩	完形	8.2 6.9 6.7 542	上部側面以外に凹痕がある。	N-27	II
図第 版125 76図	64	凹石	IV類	砂岩	完形	9.0 8.1 5.8 607	表裏面ともに磨痕があり、表面下部と裏面が顕著である。表面中央部とほとんどの縁辺部に細かい敲打痕がある。	P-27	Ⅲc
図第 版131 82図	102	凹石	V類	砂岩	完形	20.7 12.4 8.7 2.500	裏面・左右側面・上部の側面中央部に敲打痕がある。裏面は敲打による浅い凹痕である。表面の中央より左側に溝状の窪みがある。	O-26	II
第127 図・ 図版 78	74	砥石	I類A	凝灰岩	欠損	8.7 6.8 4.7 230	表・裏・左・右の4面に砥面がある。砥面は強く反っている。下部側面右側に敲打痕がある。表面の砥面には砥いだ時に生じた段差がある。段差は、	R-28	II
	78	砥石	I類B	凝灰岩	完形	8.1 3.9 3.9 146	表・裏・左・右の4面が砥面。砥面は反っている。表面中央部には長軸方向で幅約5mmの溝状の砥面がある。下部側面に細かい敲打痕がある。全体的に煤けており火を受けたとみられる。	Q-25	Ⅲeサイカ
第126 図・ 図版 77	72	砥石	II類	緑色千枚岩	完形	21.5 4.9 2.2 380	表面に砥面があり、裏面では僅かに残る器表面に砥面が認められる。	Q-26	柱穴 No.9006
	70	砥石	III類	黒色千枚岩	完形	14.5 9.2 3.4 686	表面のほぼ全面に砥面がある。右側の打欠痕に摩滅が見られることからこの大きさに整えて使用したとみられる。(2号平地住居址 柱穴No.22出土。)	S-24	柱穴 No.1023
	73	砥石	IV類A①	凝灰岩	破片	6.2 5.4 4.4 168	表・裏・右の3面に砥面がある。	P-27	Ⅲd
第127 図・ 図版 78	79	砥石	IV類A①	凝灰岩	破片	3.8 4.1 2.6 60	表・裏・左・右の四面に砥面がある。砥面は僅かに反っている。	R-26	Ⅲdサイカ
	76	砥石	IV類A②	凝灰岩	破片	6.3 5.1 4.1 133	表・左・右側面に砥面がある。砥面は平坦である。左側縁辺部から表面にかけてキズ痕がある。	O-27	Ⅲc
図第 版126 77図	67	砥石	IV類A②	片状砂岩	破片	7.7 5.5 5.8 275	表面と右側面に砥面がある。表面には幅約2mmのキズ状の溝がある。右側面には僅かに敲打痕がある。	Q-27	Ⅲb

第41表⑦ 石器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	石質	残存 状況	計測値		観察事項	出土地	層位
						長さ (cm)	幅 (cm)			
図第 版127 78図	75	砥石	IV類③	凝灰岩	破片	7.5 6.7 5.7 340		表・裏・左・右の4面に砥面がある。右側面の砥面は表面側の縁辺部にある。表裏面の砥面は反っている。下部の右側が部分的に火を受けたとみられる。	N-27	II (0/5)
第 126 図・ 図版 77	68	砥石	IV類A④	片状砂岩	破片	8.3 4.5 1.1 64		表裏面に砥面があり、裏面は弱い。左右の側面は擦れている。	P-27	IIIe
	71	砥石	IV類A④	片状砂岩	破片	4.7 4.2 1.0 27		表面に砥面があるが、凸凹の凹面までは至らないが、凸部に砥面がある。	O-26	II
	69	砥石	IV類A⑤	片状砂岩	破片	8.0 3.7 9.0 38		表裏面に砥面がある。表面の砥面には、きわめて弱い稜が残る。裏面は表面に比べ砥面が部分的である。	M-28	VIa
図第 版127 78図	77	砥石	IV類B	凝灰岩	破損	7.2 7.1 4.1 119		表・左・右の側面に砥面がある。砥面は僅かに反っている。表面の中央部と下側、右側縁辺中央で僅かに敲打痕が見られる。砥面は、黒く煤けており火を受けたとみられる。	R-27	IIIc
第 119 図・ 図版 70	31	球石	—	輝緑岩	完形	5.3 5.7 5.2 283		表面中央・上・右側面縁辺部に僅かに敲打痕がある。部分的に黒く煤けており火を受けたと思われる。	Q-27	IIIb
	33	球石	—	輝緑岩	完形	5.8 5.4 5.0 272		表面中央部、上・右側面に僅かに敲打痕が見られる。	S-25	Vb
第 117 図・ 図版 68	14	器種不明	—	砂岩	破片	6.9 5.5 1.5 52		上・左・右側面部の三ヶ所に抉れがあり、擦れていることから、小さな孔の可能性がある。	R-25	IV
	16	器種不明	—	粘板岩	破損	3.4 1.9 0.5 7.0		折損品で、右側の折損部中央に、ほぼ垂直にあけられた孔がある。下の側面に強い研磨痕があるが、上の側面にはない。表面の全体に磨痕がみられ、裏面は擦れている。	S-26	IIIc
	17	器種不明	—	黒色片岩	完形	5.2 3.0 0.5 13		表・裏面には長軸方向に走る浅い溝状の窪みの周囲にある凸部や平坦面、上・左・右側の剥離痕以外の部分に磨痕がある。	R-24	層不明
	18	器種不明	—	黒色千枚岩	完形	5.4 2.6 0.8 19		表面、上・下・左・右側面に磨痕がある。裏面は擦れている。	Q-27	IIIb
図第 版116 67図	13	器種不明	—	砂岩	破片	7.2 1.6 1.2 268		全体に非常に丁寧な研磨が施されている。縁辺部は幅約5mmで面取りされている。	J-28	IV
第 117 図・ 図版 68	22	器種不明	—	黒色千枚岩	破片	6.0 6.4 2.3 80		上部右側の斜辺部の稜に対して直角に擦れた痕がある。右側先端は弱い。表裏面にもこれと同様な方向の縦のスジが破損部以外に見られる。破片を利用し、植物等のやわらかい物の削器ではないかと考えられる。	S-28	IIIb
	15	器種不明	—	片状砂岩	破片	8.6 5.0 2.0 97		表面全体が擦れており、下側にやや反りあがる。	Q-27	II

小結

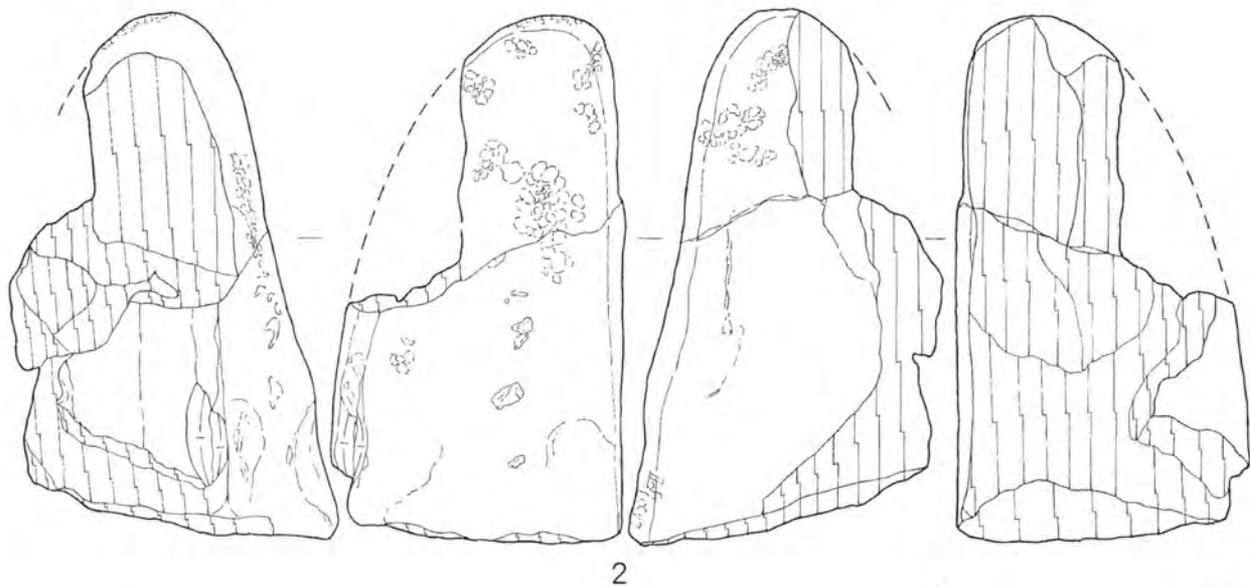
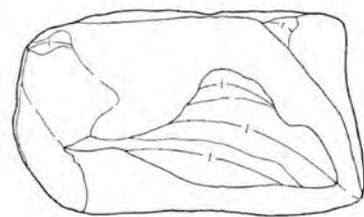
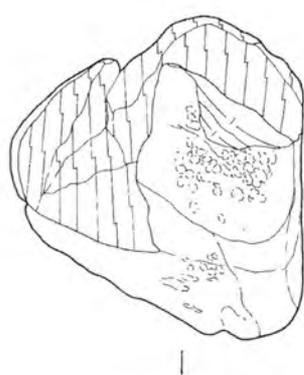
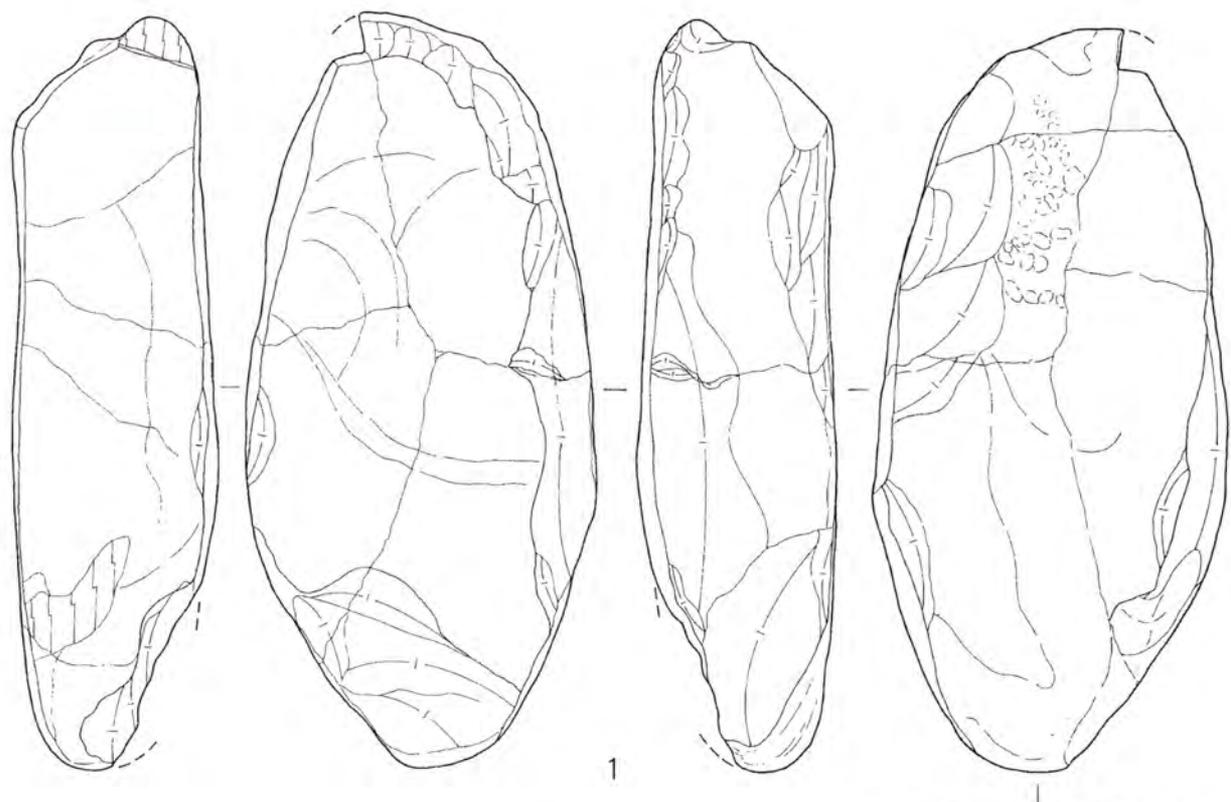
石器を層位別に見ると、第39表で示すとおり第Ⅲ層 a は磨石のみ 1 種類 2 点、第Ⅲ層 b が最も多く凹石以外の 7 種類 22 点、第Ⅲ層 c では石皿・敲石以外の 5 種類 13 点、第Ⅲ層 d は磨石と砥石の 2 種類 3 点、第Ⅲ層 e では石斧・敲石・磨石・砥石の 4 種類 9 点、第Ⅲ層 f・g からの出土はない。第Ⅲ層 h では敲石・磨石・凹石の 3 種類 3 点、第Ⅳ層では石斧・石皿・敲石・磨石・器種不明の 5 種類 16 点、第Ⅴ層からは磨石・球石の 2 種類 4 点、第Ⅵ層では石斧・砥石の 2 種類 2 点である。

素材別では、第40表に示すとおり 22 種類あり、砂岩が 28 点と最も多く、ついで輝緑岩 18 点、片状砂岩 12 点、斑れい岩が 8 点、凝灰岩が 7 点でその他は 3 点以下である。砂岩は石皿・敲石・磨石・凹石・器種不明に見られ磨石が 13 点と多く、凹石は 5 点すべて砂岩である。輝緑岩は石斧・石皿・敲石・磨石に見られ磨石が 9 点で多い。片状砂岩は石皿・敲石・磨石・砥石に見られ磨石 5 点、砥石 4 点で他は各 1 点である。斑れい岩は石斧・磨石ともに 3 点で他は各 1 点である。凝灰岩は 7 点すべて砥石である。

石斧は平面形が短冊形の両刃石斧で、片刃のものは刃部に研磨痕は見られず、使用による剥離痕があることから伐採以外の用途が考えられる。

石皿には、全形が伺える厚手で大型のものが無いことから、鍛冶に関連した台座石に転用されたのではないかと考えられる。Ⅳ類には火を受けたと見られるものがある（第115図1）。敲石は細かい敲打の集中はあまり見られない。磨石のほとんどが破片であるが、その中でⅣ・Ⅴ類は砥石への転用が考えられる。砥石は完形品 3 点であるが、その性格上破損又は破片であってもそのまま利用されたことが考えられる。砥面が反っているものがみられるが使用によるものか石皿破片かは判然としない。また砥面に溝を有するものや砥面に被加工物を砥いだことによるキズ痕が残るものがあり、その痕跡から鉄製品であったと考えられる。凹石はⅠ・Ⅱ類・Ⅲ類①はいわゆる凹石であるが、Ⅲ・Ⅴ類は第Ⅱ層出土で性格が異なることも考えられるもので、凹痕があるものとしてここに含めた。球石は、第Ⅲ層 c・第Ⅵ層で出土している。器種不明は孔を持つものや、それと思われる痕跡がみられるものと研磨が施された薄い板状のものがある。

石器の出土傾向を第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層で見ると石皿・敲石は O・Q-28、磨石は Q-26 にやや多い。敲石は第Ⅲ層 b と第Ⅳ層に多い。その他のものにまともは見うけられない。柱穴出土のものは観察表で示した 6 点である。そのうち柱穴 No.419 で石皿（Ⅳ類 A）第115図1 と凹石（Ⅰ類）第131図101 が共伴している。出土状況はほぼ水平な状態で検出され、柱穴の根固め等に使われた状態ではなかった。石器が出土した柱穴のうち第126図72 は 2 号平地住居址柱穴 No.22 からの出土で、住居プランとの関連するものは 1 点のみで他はつかめていない。



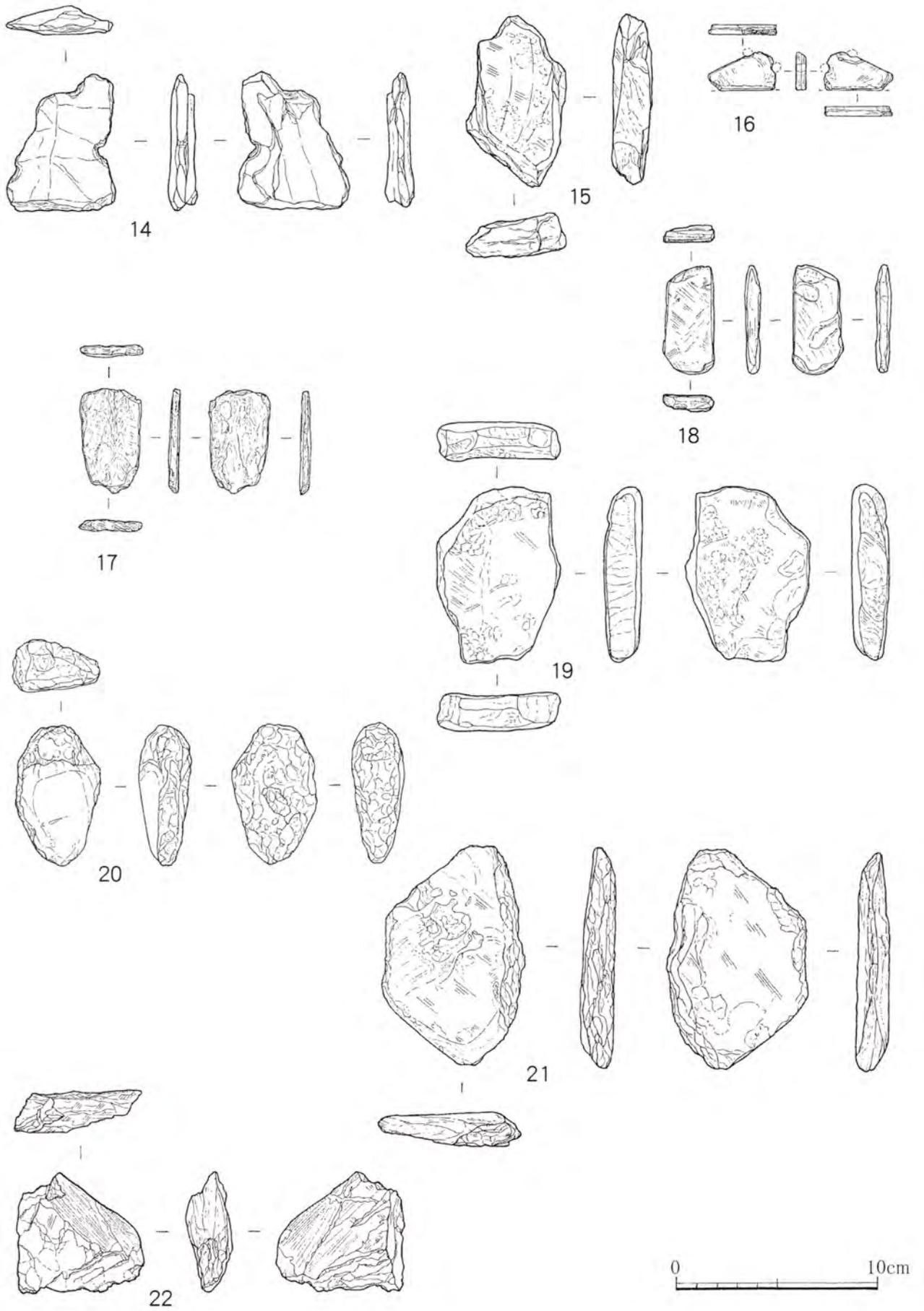
2



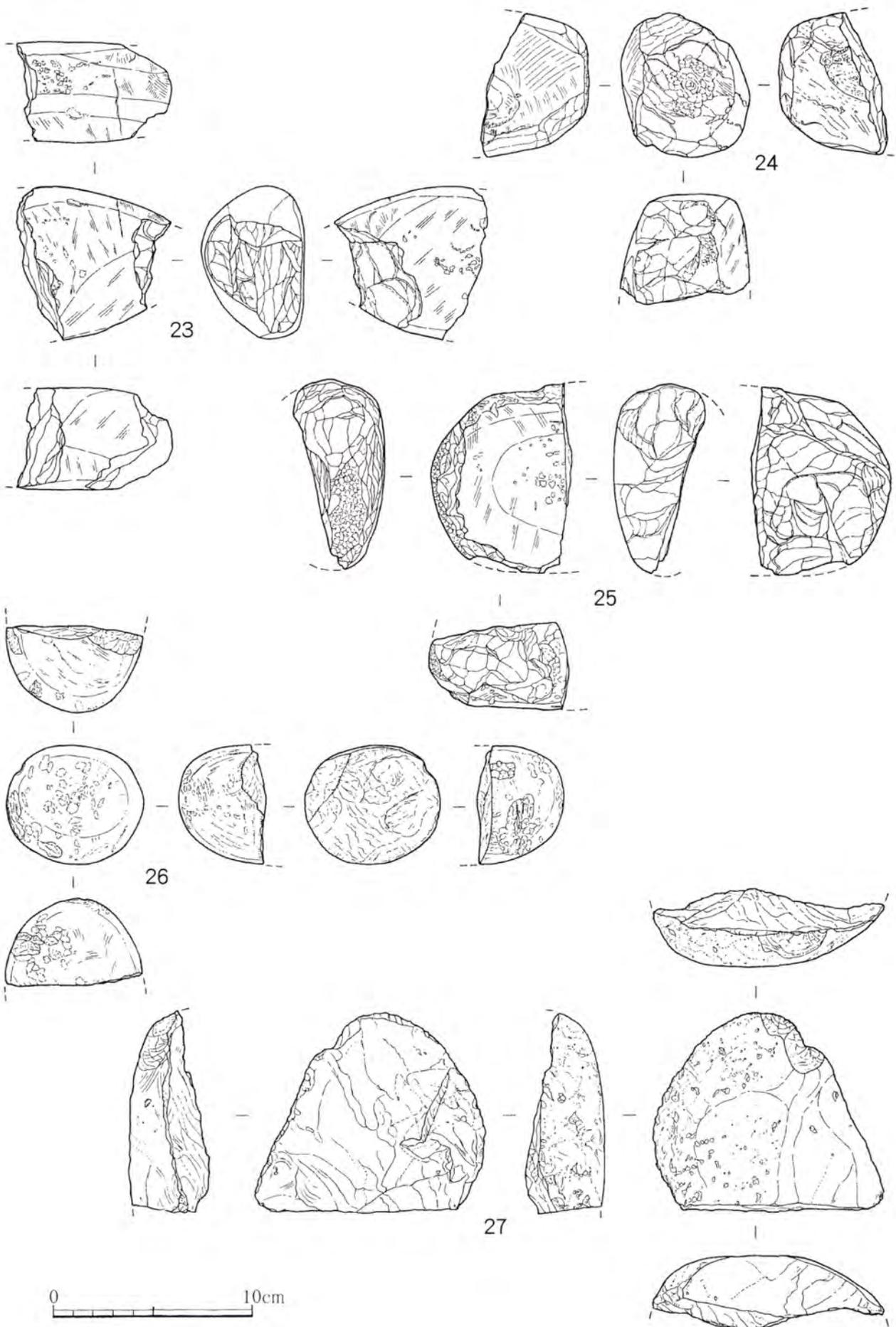
第115图 石器<1>



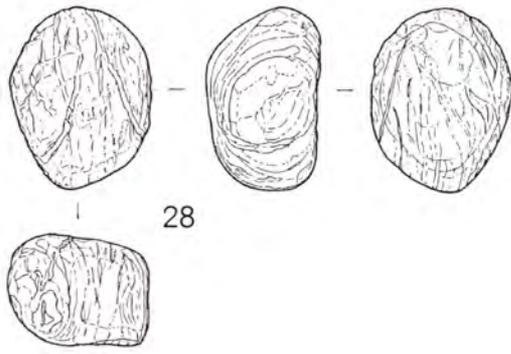
第116图 石器<2>



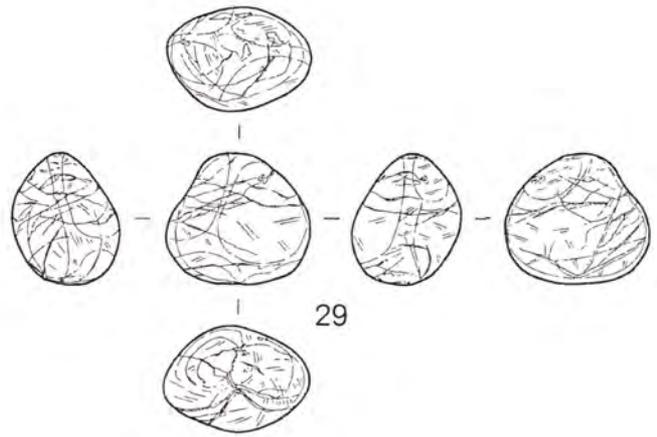
第117図 石器<3>



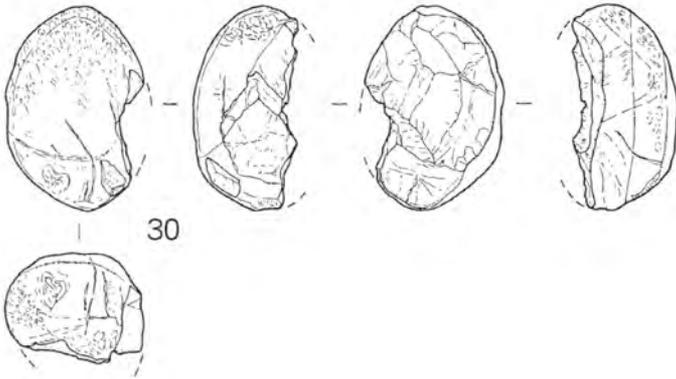
第118図 石器<4>



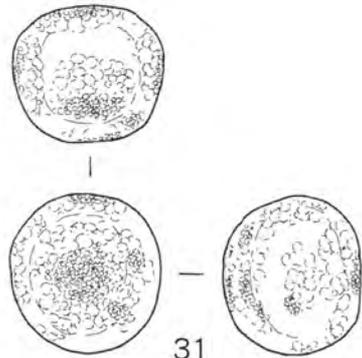
28



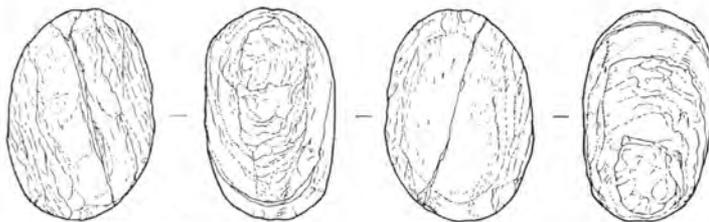
29



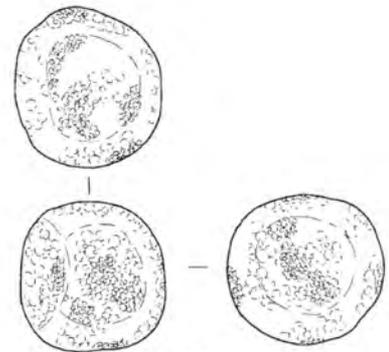
30



31



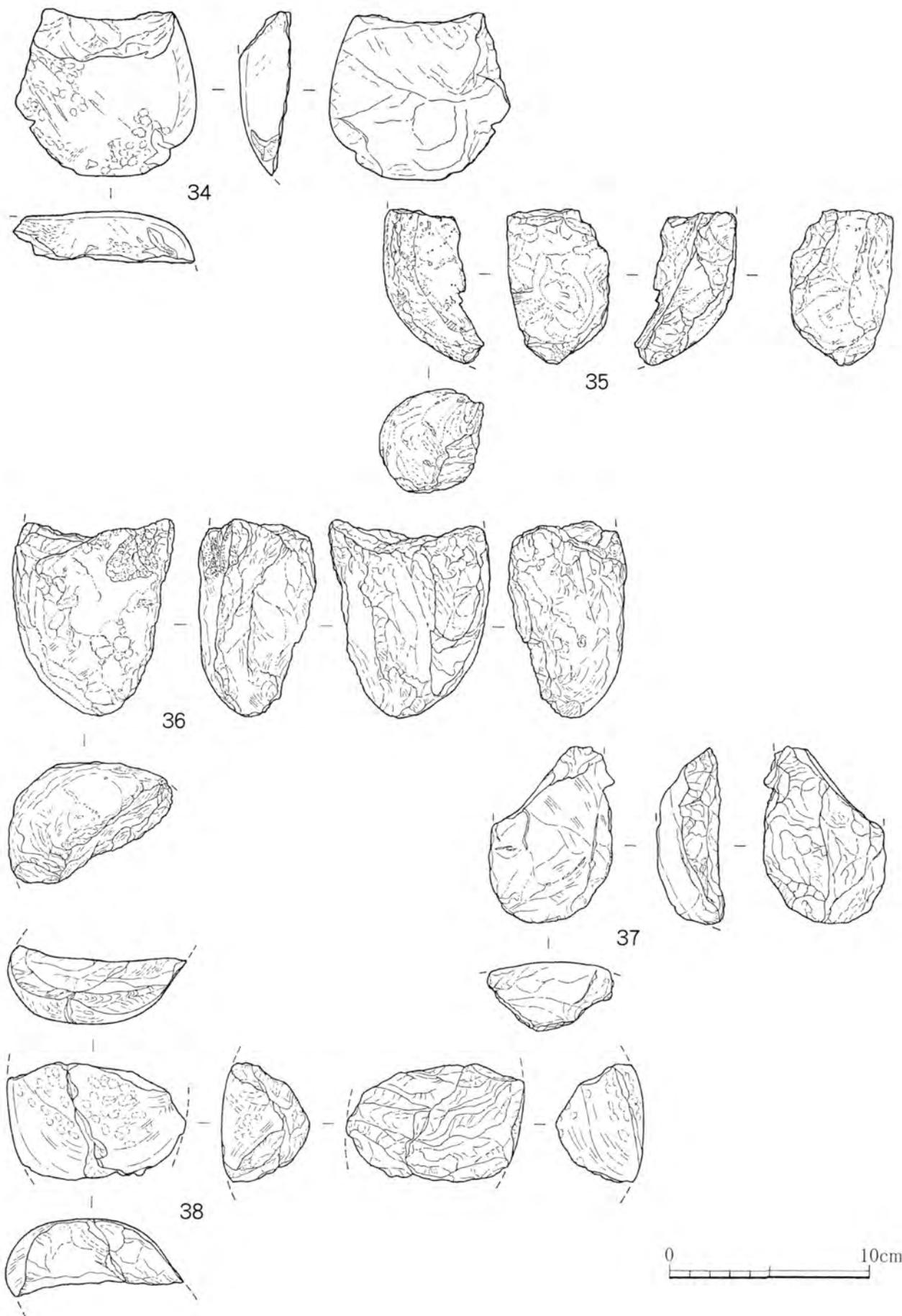
32



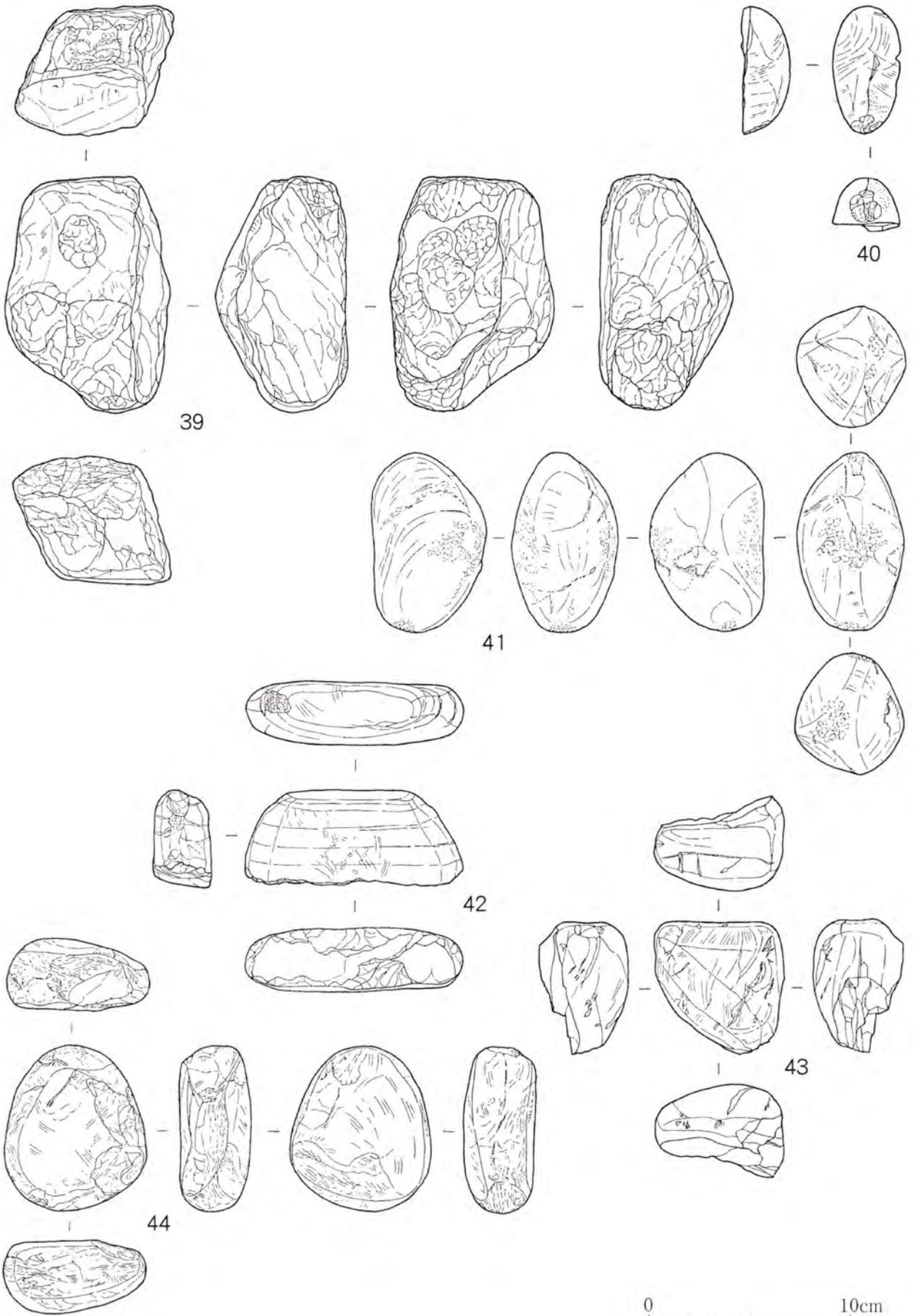
33



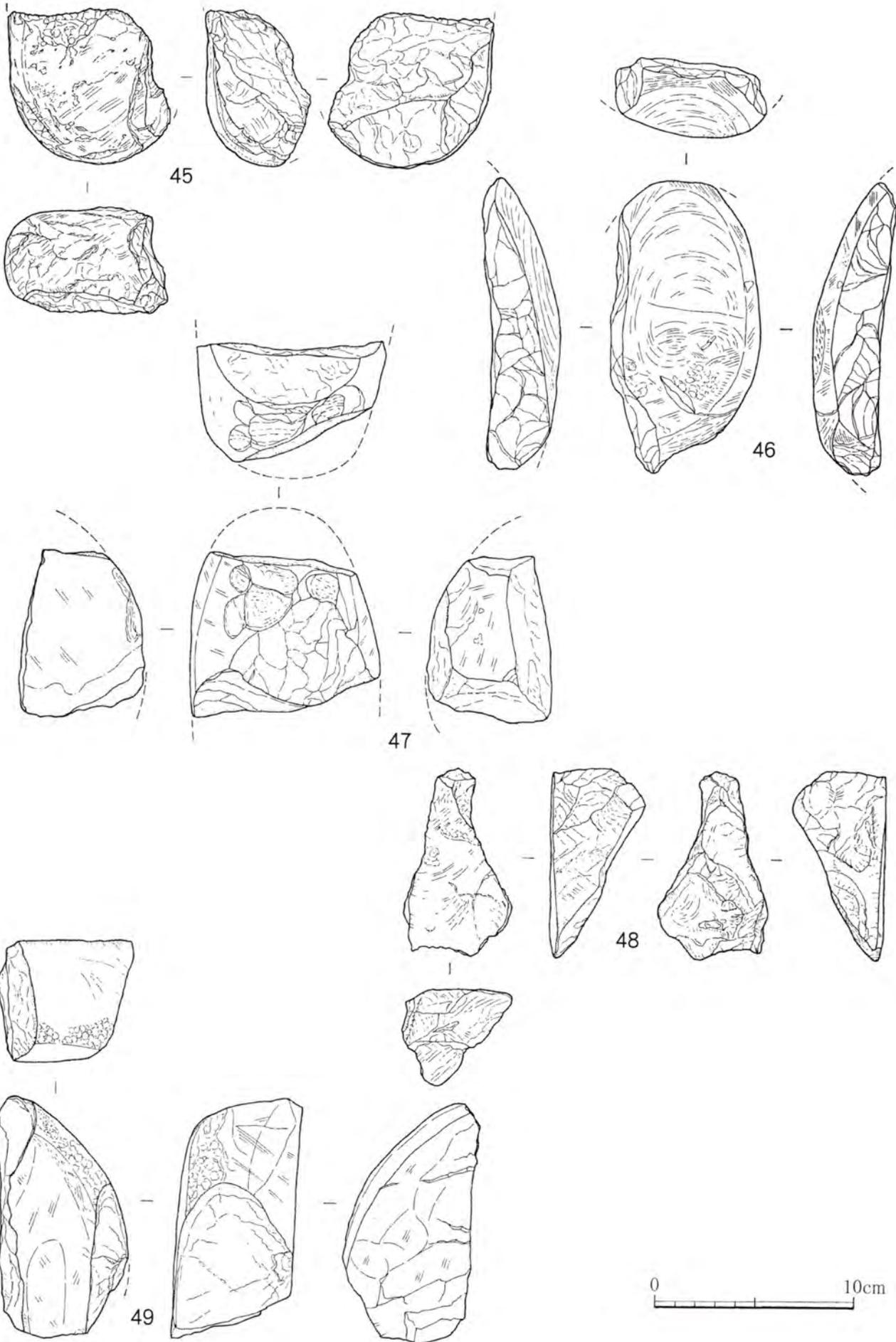
第119图 石器<5>



第120图 石器<6>



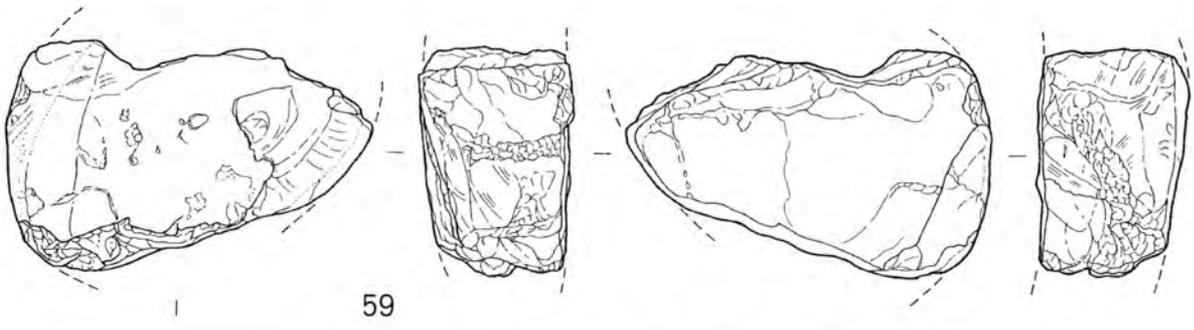
第121图 石器<7>



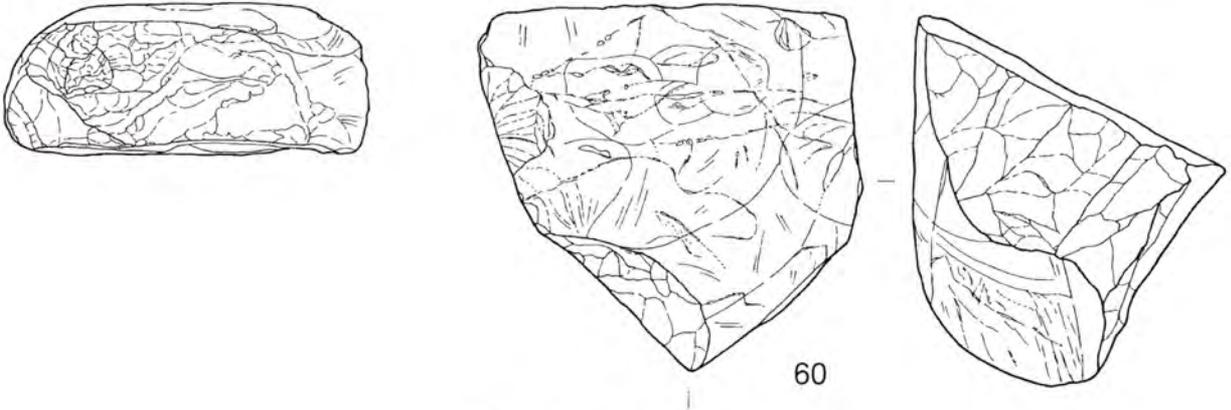
第122図 石器<8>



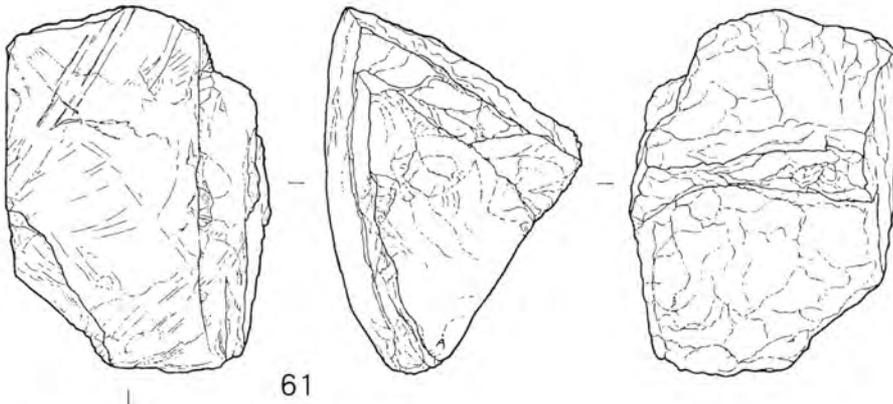
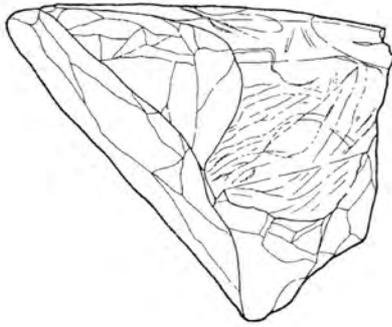
第123图 石器<9>



59



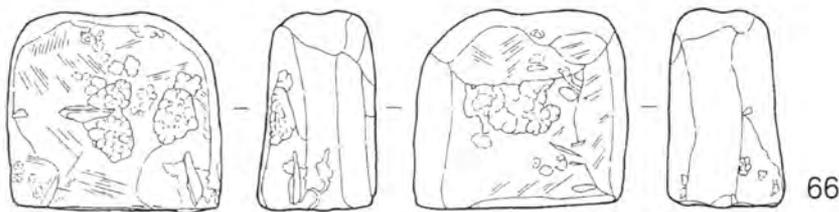
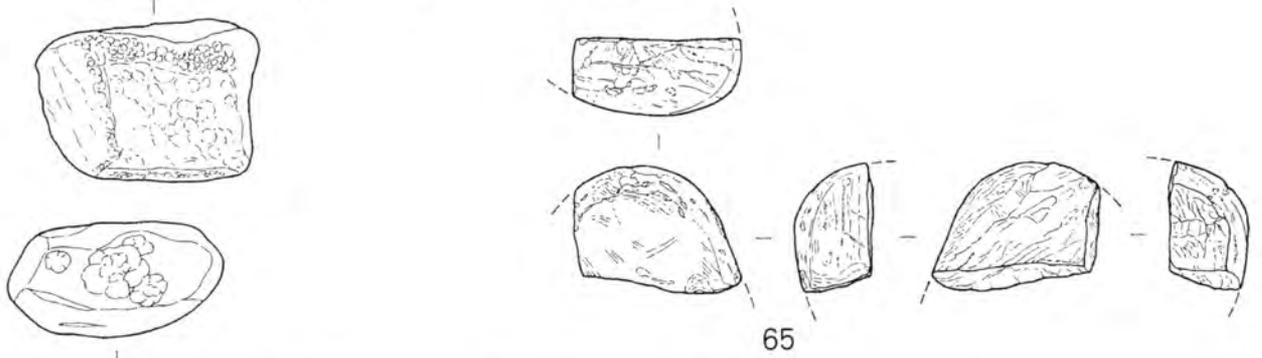
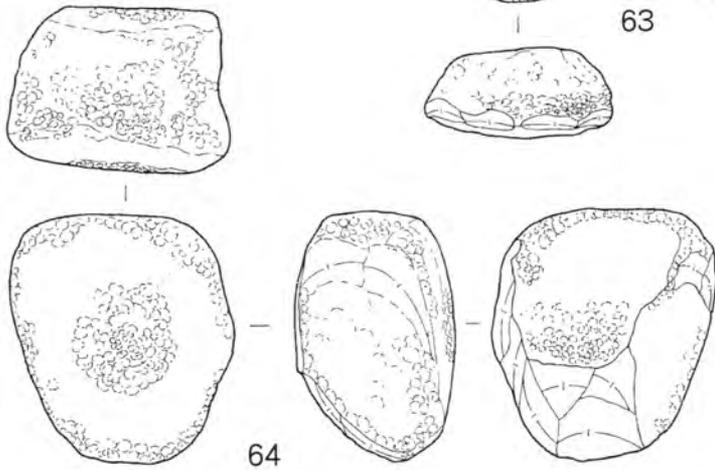
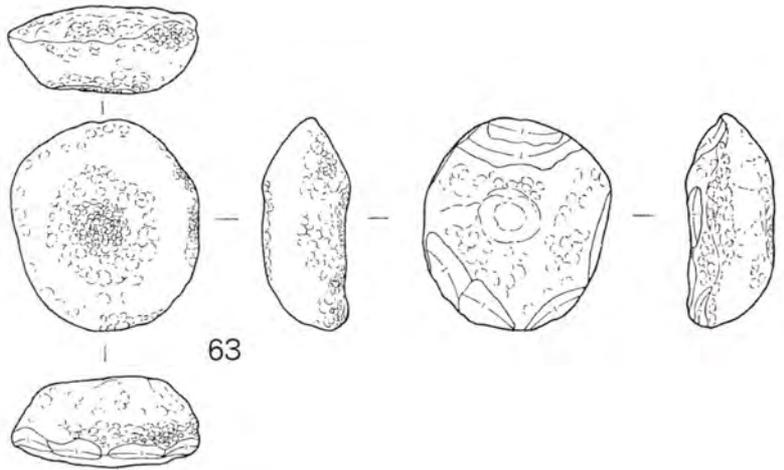
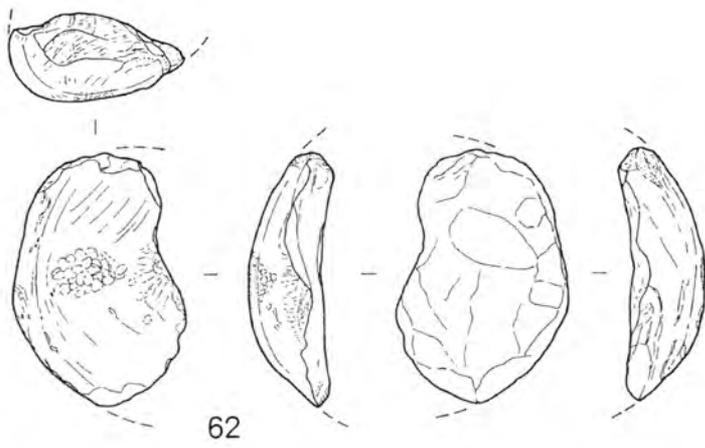
60



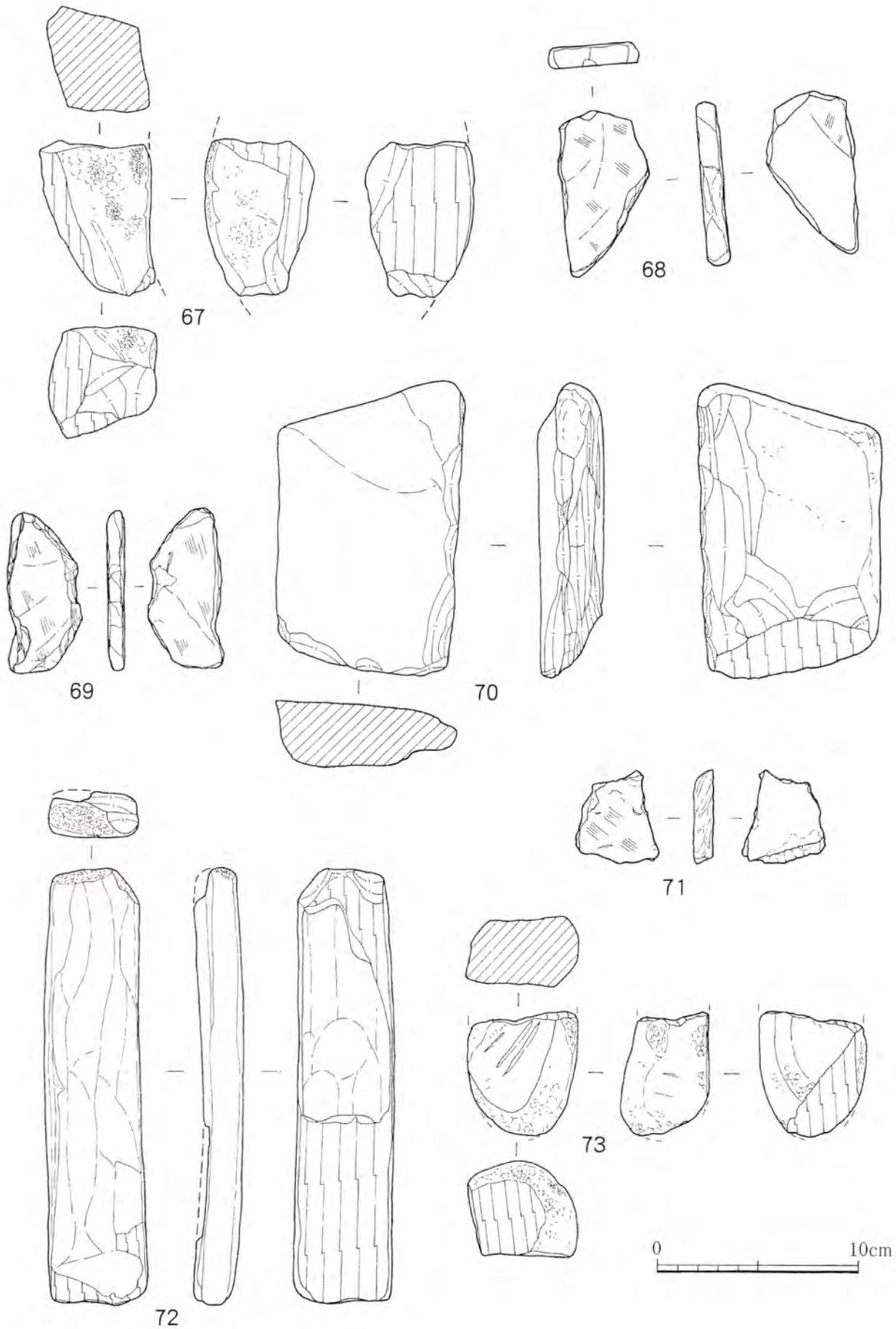
61



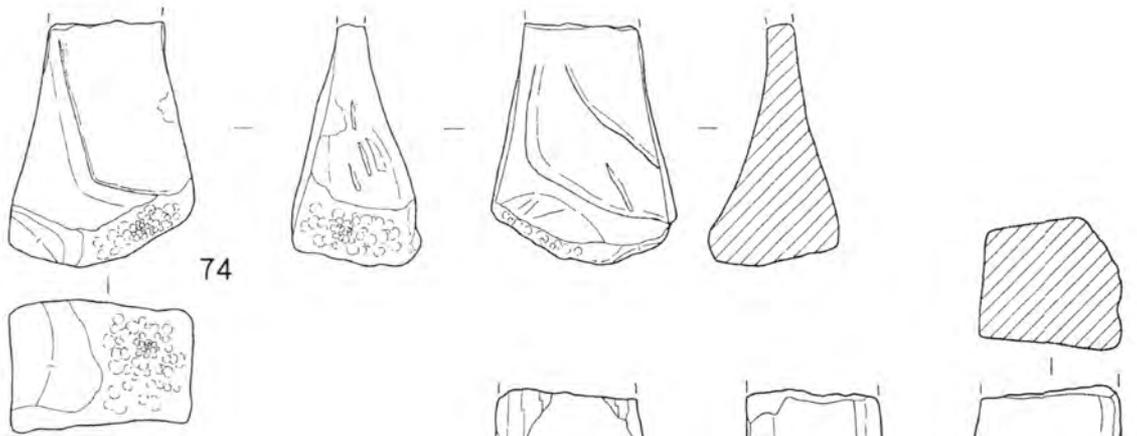
第124図 石器<10>



第125图 石器<11>

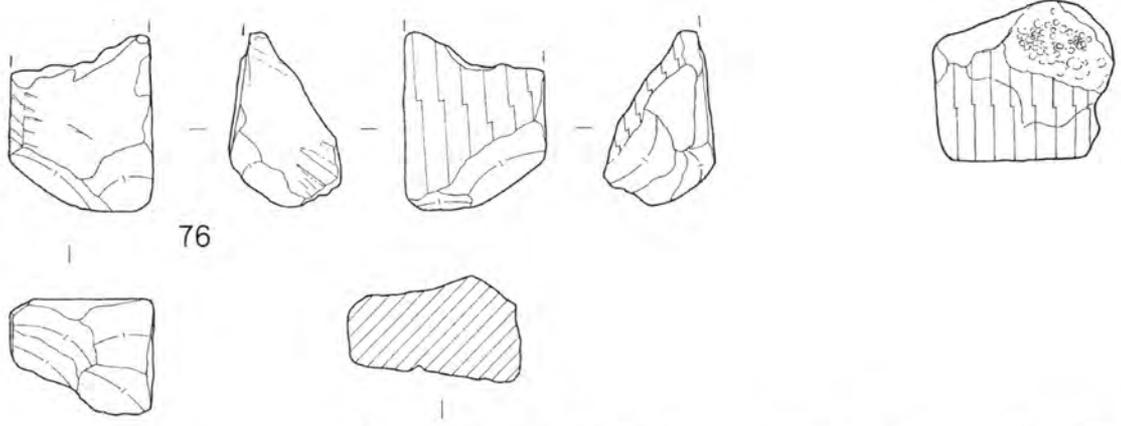


第126图 石器<12>



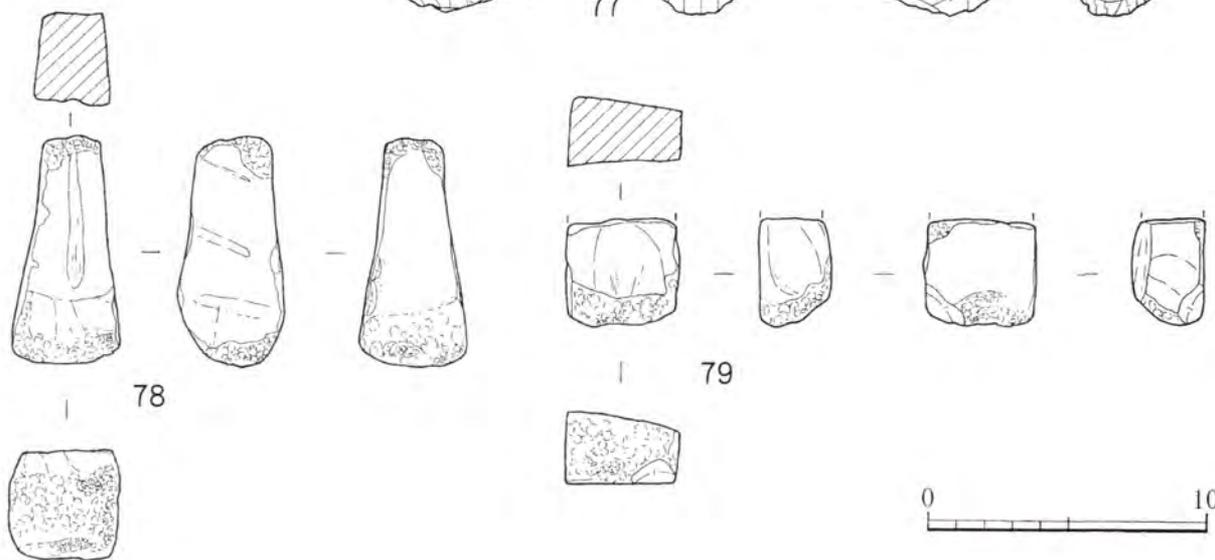
74

75



76

77



78

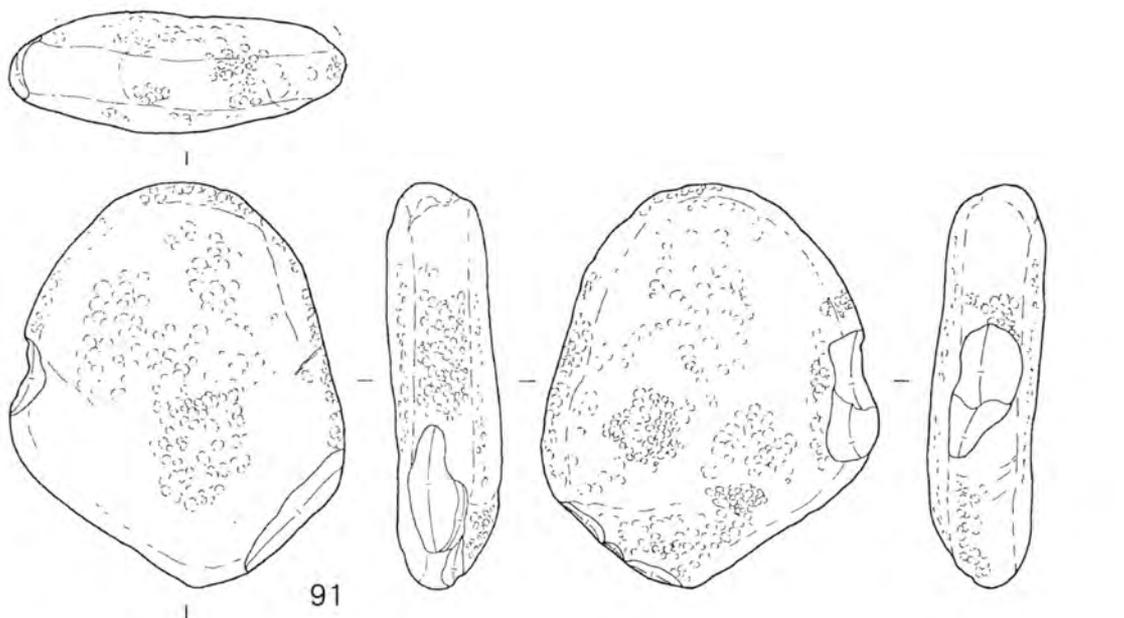
79



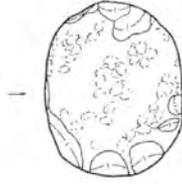
第127图 石器<13>



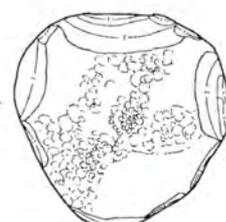
第128图 石器<14>



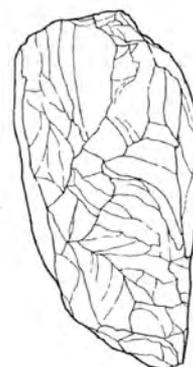
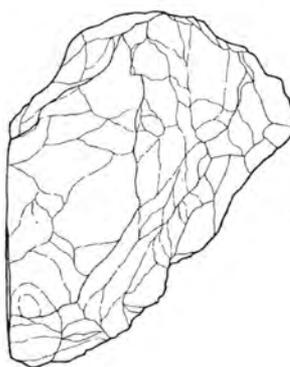
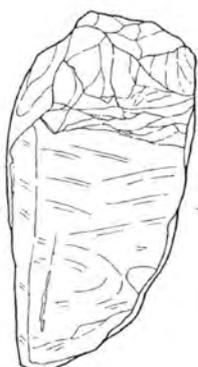
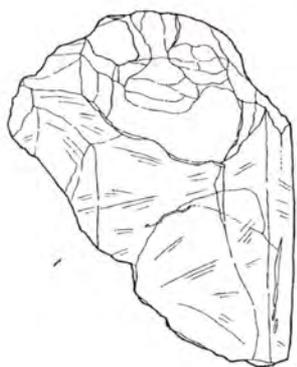
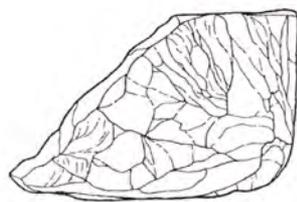
91



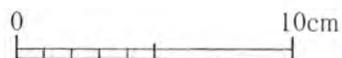
92



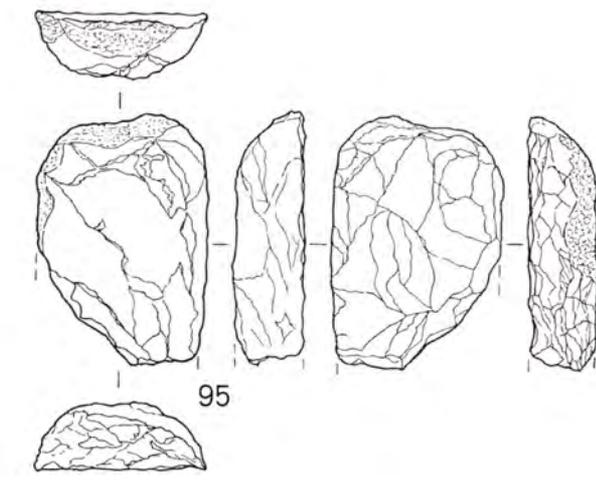
93



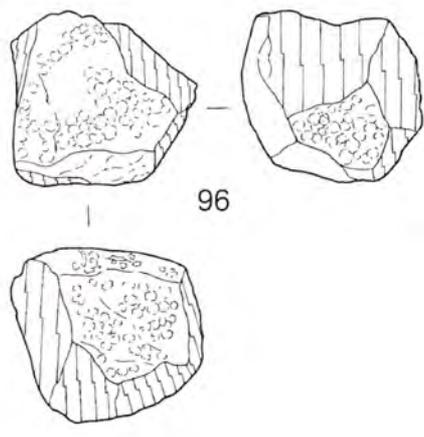
94



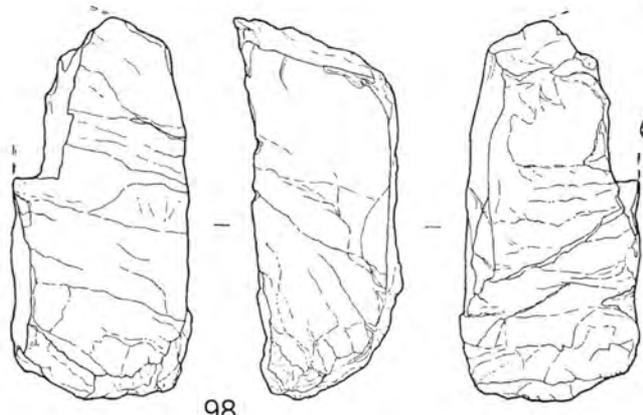
第129图 石器<15>



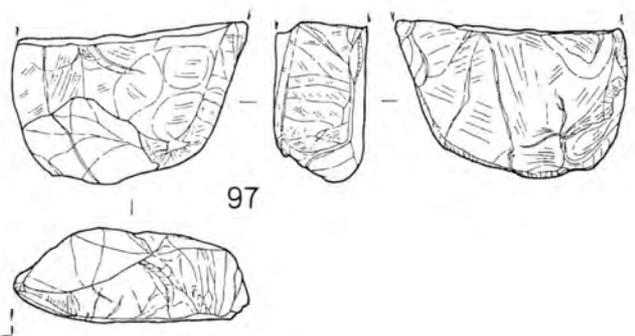
95



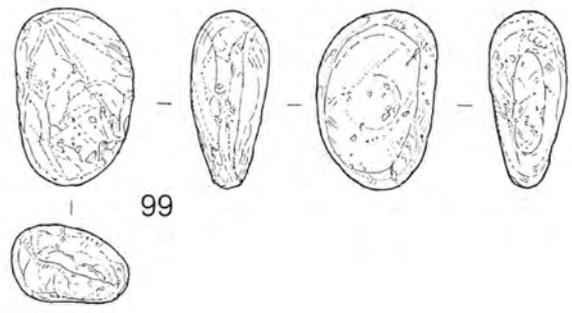
96



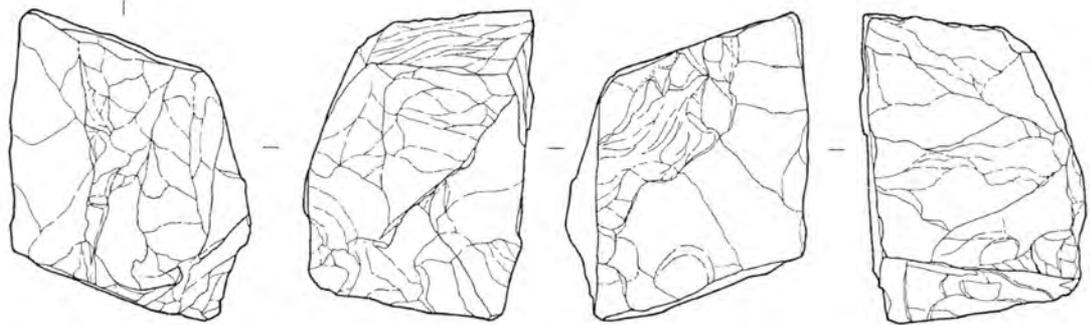
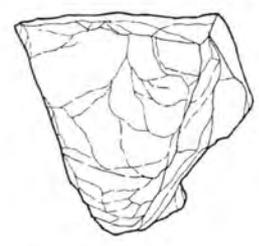
98



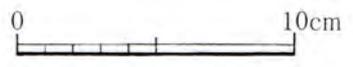
97



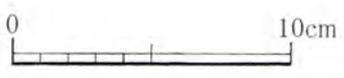
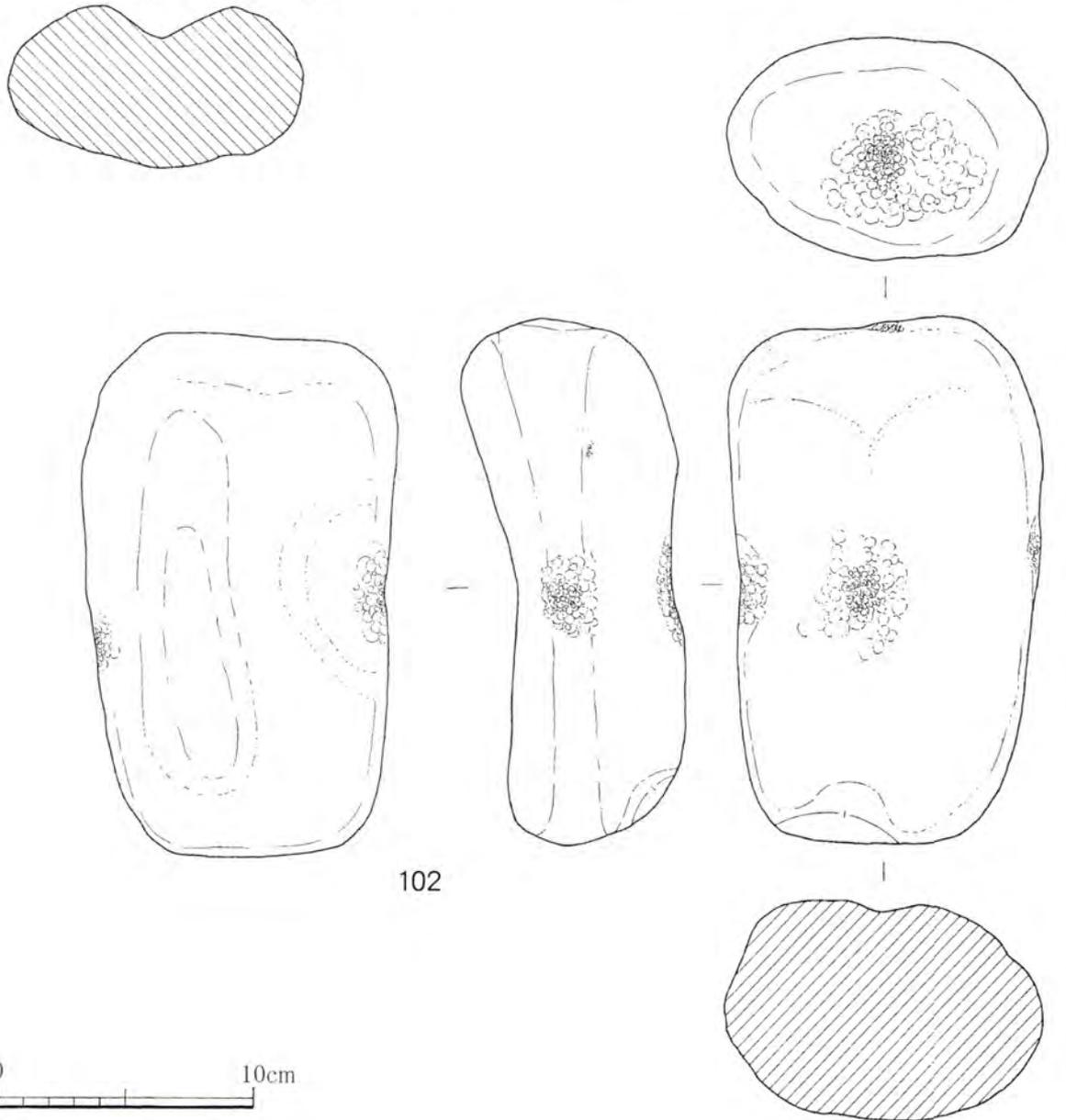
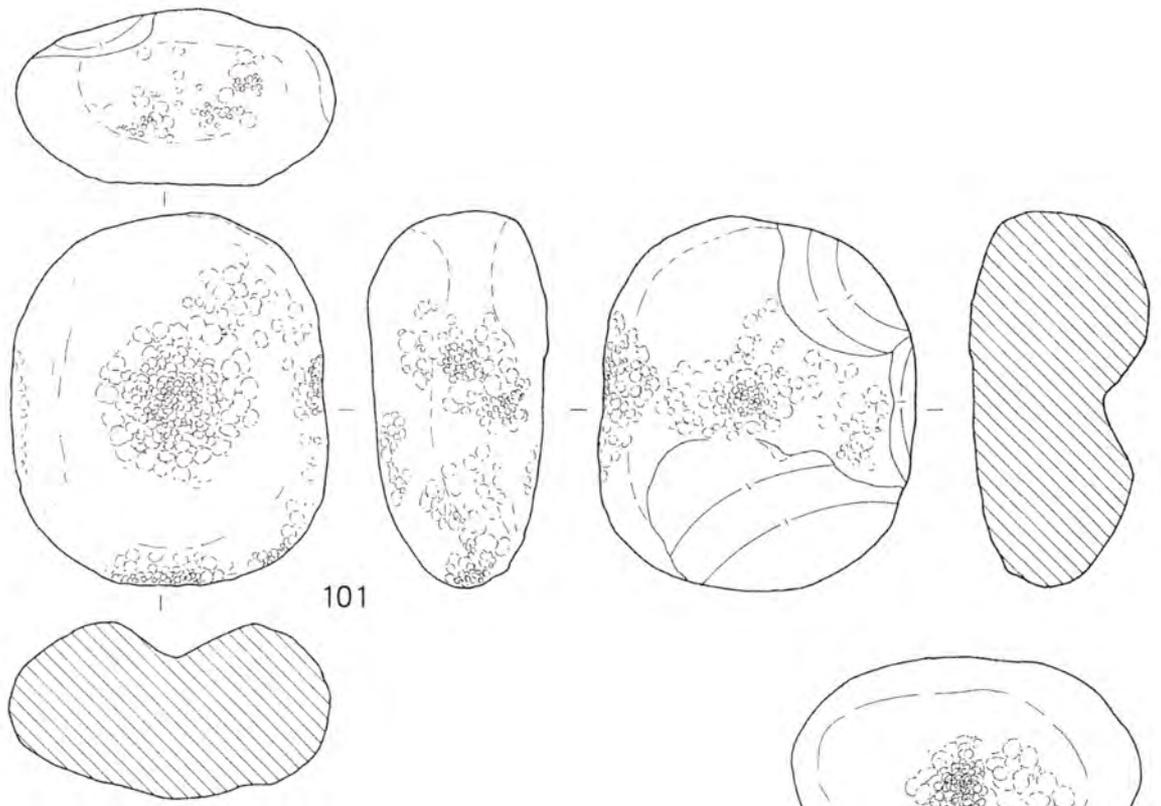
99



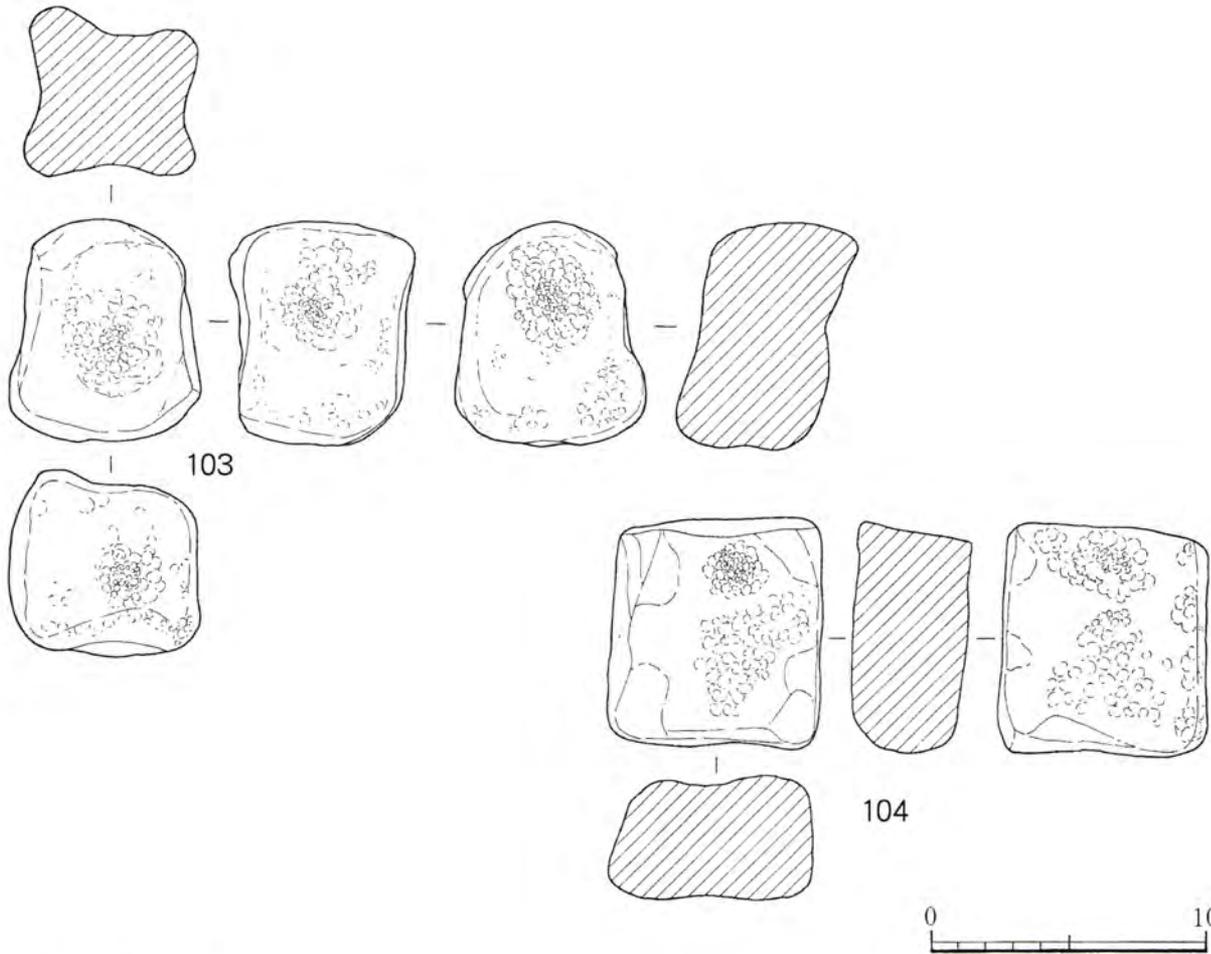
100



第130图 石器<16>



第131图 石器<17>



第132図 石器<18>

第17節 金属製品

金属製品は、鉄製品の釘・刀子・鎌・鋸・不明品、銅製と見られる簪、近現代の遺物で総数180点が得られた（第42表）。

種類別では、角釘が36点、丸釘17点、刀子8点、刃物類10点、鎌8点、鋸が2点、簪1点で、不明品は95点と出土数が多く、鉄板状の小片が61点であった。

層序別では第Ⅲ層bが90点と突出して多く、以下第Ⅲ層cが26点、第Ⅱ層が19点、第Ⅲ層aが15点と続き、第Ⅴ層は4点、第Ⅵ層は3点の出土である。グリット別ではQ-27（33点）、Q-26（21点）、R-27（20点）、R-26（19点）、S-28（19点）、S-27（11点）の順となる。

角釘はQ・R・S-26・27の第Ⅲ層bに集中して見られ、刀子や鎌においてもこの一帯に点在し、不明品も同様である。これらのグリットは遺構が集中して検出されているところであるが、各遺構との関係は判然としない。

各遺物については第43表①～④に観察一覧、第42表に出土量、第133図・第134図・図版84・図版85、レントゲン写真を図版86に示した。

第42表 金属製品種類別出土量

出土地		種類											小計	合計	
		角釘	丸釘	鎌	鋸	刀子	刃物類	簪	不明品	灰落し台	近代金具	砲弾破片			
4区	攪乱									1			1	1	
	I						1						1	1	
	II	3	4	1	1	1	1		6		1	1	19	19	
	IIIa	3	2				1	1	8				15	15	
	IIIb	21	7	3		2	5		52				90	90	
	IIIc		1	1	3	1	2	1		16				25	26
		R-27柱穴No.67						1						1	
	III d	2	1						5				8	8	
	III e	1	1										2	2	
	III f	1							1				2	2	
	III g					1			1				2	2	
	III h												0	0	
	IV	1	1										2	2	
	V	1				2			1				4	4	
VI		2										2	3		
	Q-26柱穴No.874							1				1			
3区不明				1								1	1		
R-28大土坑									1			1	1		
不明									3			3	3		
合計		36	17	8	2	8	10	1	95	1	1	1	180	180	

第43表① 鉄製品観察一覧

挿図 図版	番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特 記 事 項	出土地	層 位
第 133 図・ 図版 84	1	刀物類	17.4	2.5	0.6	35.46	山刀と思われる。峯は平坦に成形され直線的。先端部へ細くなる。中子の方へやや厚くなっている。切先は磨耗し、刃部には刃こぼれが目立つ。 図版86レントゲン	O-25	Ⅲa
	2	刀子	13.0	2.4	0.6	36.12	両刃。茎部の断面は方形。刃部中央部が欠損する。 図版86レントゲン	S-28	Ⅲb
	3	刀子	4.2	1.8	0.6	6.48	茎部。	R-26	Ⅲc最下
	4	刀子	9.3	1.8	0.6	16.66	身部中央付近から外反りとなる。 図版86レントゲン撮影	Q-27	V上面
	5	刀物類	8.3	1.6	0.5	14.56	峯が直線状となるものと見られる。	Q-27	Ⅲb
	6	刀物類	3.3	1.3	0.4	5.00	茎部。	Q-27	Ⅲb
	7	刀物類	6.1	1.0	0.4	7.10	茎部。断面は方形。	Q-27	Ⅲb
	8	刀子	5.2	1.3	0.4	3.79	身部破片。	P-25	Ⅱ
	9	刀子	4.8	2.4	0.5	13.93	身部破片。	S-24	Vb
	10	刀子	5.2	1.7	0.4	9.33	身部破片。	Q-27	Ⅲc
	11	刀子	3.9	1.7	0.5	6.80	身部破片。	S-28	Ⅲg
	12	刃物類	9.1	1.0	0.3	6.83	直線状を呈する峯の部分と見られる。	P-25	Ⅱ
	13	鎌	5.8	1.1	0.7	5.30	ほぼ完形品であるが、刃先を僅かに欠損する。	P-27	Ⅲc (5/10)
	14	鎌	5.5	1.1	1.0	7.70	刃先を僅かに欠損する。茎部が僅かに残る。	S-26	Ⅲc
	15	鎌	3.8	0.9	0.4	1.58	刃先を欠損する。	I-28	Ⅱh
	16	鎌	3.3	0.7	0.7	2.70	刃先と茎部を欠損する。	R-26	Ⅲb (20/25)
	17	鉄鎌	3.6	0.9	0.8	5.69	茎部を欠損する。	R-27	V
	18	鉄鎌	3.8	0.8	0.9	4.70	刃先を僅かに欠損するもので、茎部が僅かに残る。	3区	
	19	鉄鎌	4.0	0.6	0.6	2.50	茎部を欠損する。	Q-27	Ⅲb

第43表② 鉄製品観察一覧

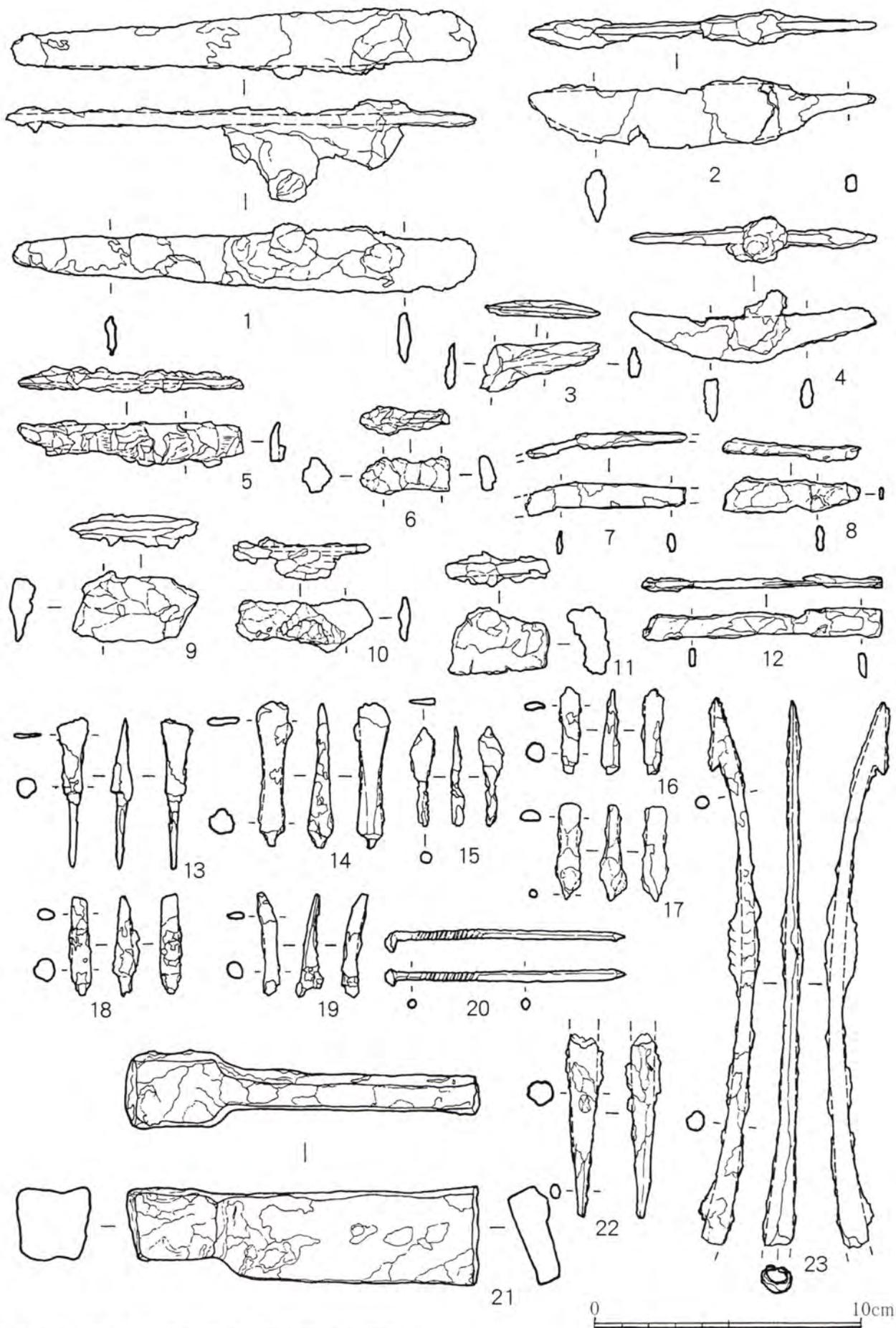
挿図 図版	番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特 記 事 項	出土地	層 位
第133 図・ 図版 84	20	簪	9.2	0.4	0.4	6.20	カブ部が直径約7mmの匙状を呈するもの、首部からほぼ直角に曲げられている。首部の断面が方形を呈する部分は長さ約1cmで、そこから長さ約2cmに渡って螺旋状にねじられた部分があり、竿部の断面は菱形となり先端が尖る。銅製？	Q-27	Ⅲ a (5~10)
	21	灰落とし台	13.4	3.6	2.7	385.0	精糖に使われる炉の灰落とし台と思われるもの。	Q-28	攪乱
	22	銚破片？	7.0	1.0	1.0	10.79	第①図23に類似する部分が見られるもので、上部を欠損した漁具（銚）の一部分と思われる。	O-27	Ⅱ
	23	銚	20.6	1.0	1.1	25.39	漁具（銚）。	Q-26	Ⅲc
第134 図・ 図版 85	1	角釘	8.2	0.8	0.7	27.08	先端が曲がる。	Q-26	Ⅲb (10/20)
	2	角釘	7.3	0.8	0.8	15.19	先端を欠損する。	R-25	Ⅵ
	3	角釘	7.1	0.8	0.6	13.52	上部・先端部を欠損する。	O-24	Ⅱ
	4	角釘	6.8	0.7	0.6	7.17	頭部は逆「L」字状に曲がり、中央部付近で「く」の字に折れ曲がる。	N-27	Ⅲe
	5	角釘	5.4	0.5	0.4	2.91	ほぼ完形の角釘。頭部は逆「L」字状に折れ曲がる。	S-26	Ⅲd
	6	角釘	6.5	0.4	0.4	3.61	頭部を欠損する。	不明	不明
	7	角釘	6.9	0.6	0.6	6.32	頭部を欠損する。	P-26	Ⅲb (0/5)
	8	角釘	6.8	0.6	0.6	8.79	頭部と先端を欠損する。	Q-27	Ⅲb
	9	角釘	7.2	0.6	0.5	7.72	頭部と先端を欠損する。	P-25	Ⅱ
	10	角釘	13.8	1.0	0.8	47.40	ほぼ原形に近い好標品である。頭部が逆「L」字状に折り曲げられた角釘で、しっかりしている。	O-26	Ⅱ
	11	角釘	4.7	0.7	0.6	5.73	頭部縁が潰れたように外側に出る。	P-27	Ⅲb (0/5)
	12	角釘	4.3	0.6	0.5	4.37	先端が曲がる。	R-26	Ⅲb
	13	角釘	4.7	0.9	0.8	11.12	下端を欠損する。頭部やや曲がり平坦となる。	S-27	Ⅲb
	14	角釘	4.1	0.6	0.6	4.34	頭部と先端部を欠損する。	R-27	Ⅲ a (5/10)
	15	角釘	4.0	0.5	0.4	3.24	頭部が曲がる。	P-26	Ⅲd

第43表③ 鉄製品観察一覧

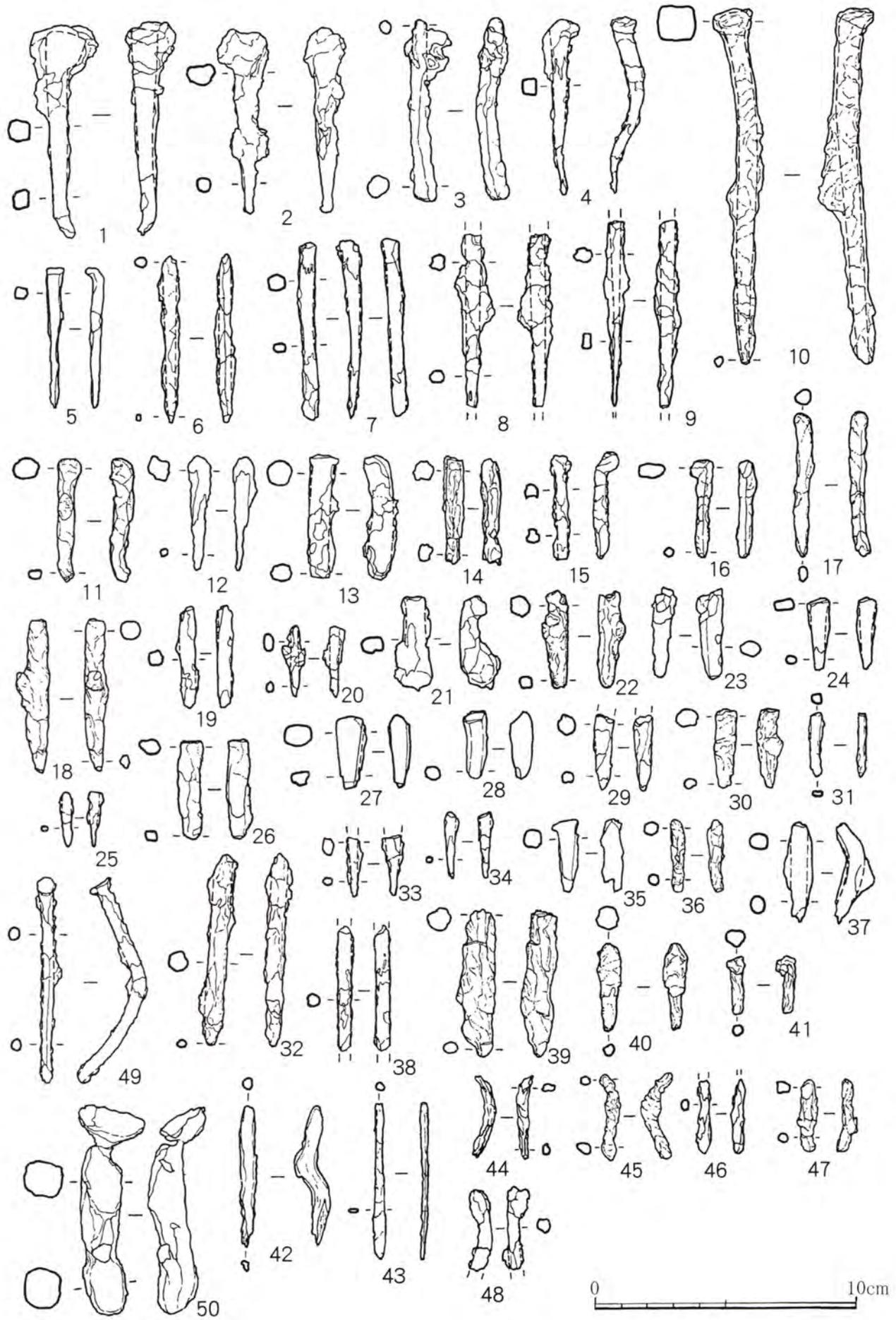
挿図 図版	番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特 記 事 項	出土地	層 位
第 134 図・ 図版 85	16	角釘	3.7	0.5	0.5	3.14	頭部が曲がる。	J-27	IV
	17	角釘?	5.5	0.5	0.5	4.80	先端が曲がる。	S-27	Ⅲb サイカ
	18	不明品③	5.8	0.7	0.7	8.04	上部欠損する。	S-28	Ⅲ f
	19	角釘	3.9	0.6	0.5	6.20	上端と先端部を欠損する。	Q-26	V 上面
	20	角釘	2.7	6.0	0.5	1.29	頭部と先端部を欠損する。	R-26	Ⅲb
	21	角釘	3.7	0.8	0.6	9.12	頭部が逆「L」字状を呈する。	S-27	Ⅲb
	22	角釘	3.8	0.7	0.7	4.94	上部を欠損する。	R-27	Ⅲb (10/15)
	23	角釘	3.5	0.8	0.5	3.69	上部や下端を欠損する。	S-28	Ⅲb
	24	角釘	2.8	0.6	0.4	2.51	先端部。	S-27	Ⅲb
	25	角釘	2.2	0.3	0.3	0.57	上部を欠損する。	Q-27	Ⅲb
	26	角釘	3.9	0.8	0.6	5.72	上部と先端部を欠損する。	S-27	Ⅲa (5/10)
	27	角釘	2.8	1.1	0.7	5.06	先端部。	R-27	Ⅲb サイカ
	28	角釘	2.6	0.8	0.7	3.30	先端部。	R-27	Ⅲb (15/20)
	29	角釘	2.9	0.6	0.6	2.22	先端部。	Q-26	Ⅲb (5/10)
	30	角釘	3.0	0.7	0.6	3.43	先端部。	R-27	Ⅲb
	31	角釘	2.4	0.4	0.3	0.79	頭部を欠損する。	Q-27	Ⅲb
	32	丸釘	7.4	0.8	0.7	8.78	先端部。	R-27	Ⅲb
33	角釘	2.3	0.6	0.4	1.17	先端部。	Q-27	Ⅲb	
34	角釘	2.5	0.4	0.3	0.69	先端部。	R-26	Ⅲb (20/25)	

第43表④ 鉄製品観察一覧

挿図 図版	番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	特 記 事 項	出土地	層 位
第 134 図・ 図版 85	35	角釘	2.8	0.7	0.6	3.07	上部の先端部は欠損する。	R-26	Ⅲb
	36	角釘	2.9	0.6	0.5	1.57	頭部を欠損する。	S-26	Ⅲb
	37	角釘	3.8	0.7	0.6	7.53	頭部と先端部を欠損する。中央部で「く」の字状に折れ曲がる。	S-27	Ⅲb
	38	丸釘	4.8	0.5	0.5	6.31	頭部と先端部を欠損する。	S-28	Ⅱ
	39	丸釘?	5.7	0.9	0.9	9.96	欠損品。断面は円形。	S-28	Ⅲb
	40	丸釘?	3.4	0.8	0.7	3.99	頭部の先端部を欠損する。	Q-27	Ⅲb
	41	丸釘	2.2	0.4	0.4	1.37	頭部が、逆「L」字状に折れ曲がる。先端部は欠損する。	Q-26	Ⅲ
	42	不明品	5.5	0.5	0.5	5.48	かすがい状に曲がる。	Q-27	Ⅲb
	43	不明品	6.1	0.4	0.2	1.98		R-28	大土坑
	44	丸釘	3.2	0.4	0.4	1.18	上部と先端部を欠損する。	R-26	Ⅲb (20/25)
	45	丸釘?	3.3	0.4	0.4	1.33	頭部と先端部を欠損し「く」の字状に曲がる。	S-25	Ⅲd (10/15)
	46	丸釘	2.8	0.4	0.3	1.18	頭部の先端部を欠損する。用途不明品。	Q-26	Ⅲb
	47	丸釘	2.8	0.5	0.4	1.38	頭部が片方に曲がる。先端部が欠損する。	Q-26	Ⅲc
	48	丸釘	3.2	0.5	0.5	2.55	上部・先端部を欠損する。	O-27	Ⅱ
	49	丸釘	7.9	0.4	0.4	8.13	ほぼ完形品。頭部は円形。中央部で折れ曲がる。	R-25	Ⅱ
50	不明品	8.1	1.4	1.3	42.65	偏平な上部と角柱状の部分に分かれる。偏平な部分が片側に曲がる。	Q-26	柱穴 No.874	



第133図 鉄製品〈1〉刀子・鏃・他 (20は銅製)



第134図 鉄製品〈2〉釘

第18節 鍛冶関連遺物

出土遺物のうち砂鉄・羽口・鉄滓・鍛造薄片^(註)を鍛冶関連遺物としてここで記す。羽口は、特徴的なものを図示し、鉄滓は、集計表による出土状況の報告を記す。鍛造薄片の出土が確認されている。

1. 羽口 (第136図～第138図)

出土した羽口は、総数409点で、うち、3点が端部である。いずれも、破片で全形が伺えるものではなく鉄滓が付着したものもある。

羽口は基本的には円筒形であるが、なかには横断面形が隅丸方形を呈するものがある。特徴的なものを図示し、第46表に観察一覧、第44表に出土量を示した。

端部の形態は、先端に斜めの面をもつもの(第136図2)があり、鉄滓が付着する。

胴部には、破損部に鉄滓が付着するもの(第136図1)、第138図16のように内径が次第に大きくなるものがあり、前者は窯側、後者は鞆側と考えられる。

推定外径・内径はさまざまであるが、外径の最大値は9.2cm、最小値は5.9cmである。内径では最大値が4.6cm、最小値が2.0cmである。混和材には、細砂や石英が含まれ、粗砂を僅かに含むものもある。

層別の出土状況は、第V層が最も多く、ついで第Ⅲ層bとなるが、第Ⅲ層上(Ⅲa～c)・下(Ⅲd～h)、V・VI層と比較するとⅢ層上で多い。

第44表 羽口出土量

出土地点 層序	3区										4区										合計						
	N 27	N 28	O 24	O 25	O 26	O 27	P 25	P 26	P 27	小計	Q 24	Q 25	Q 26	Q 27	R 24	R 25	R 26	R 27	R 27 ・ 28	R 28		S 25	S 26	S 27	S 28	不明	小計
表採					4				4	8	3						9			3		1		1	8	25	33
Ⅱ			1		4	1	2	1		9						1		3						1		5	14
Ⅲa				1						1			8			4		6			9	4				31	32
Ⅲb									6	6			19		4	18		10				9	14			74	80
Ⅲc								1	2	3			7 ※	11	9	4	1				1					33	36
Ⅲd	1							1		2			4		1	1					※	3				9	11
Ⅲe		2			1			1		4			2	1		4					4	1				12	16
Ⅲh										0														13		13	13
Ⅲg										0														5		5	5
Ⅳ							1	8		9			6		4	7					6					23	32
Ⅴ		2		2		3	2	2	2	13		※	54	1	9		10	18		8	3			1		104	117
Ⅵ	1	1								2			3		2	6	3				2			1		17	19
大土坑										0															1	1	1
合計	2	5	1	2	10	4	5	14	14	57	3	56	22	47	6	27	32	41	3	27	19	11	13	36	9	352	409

※は先端を1個を含む。

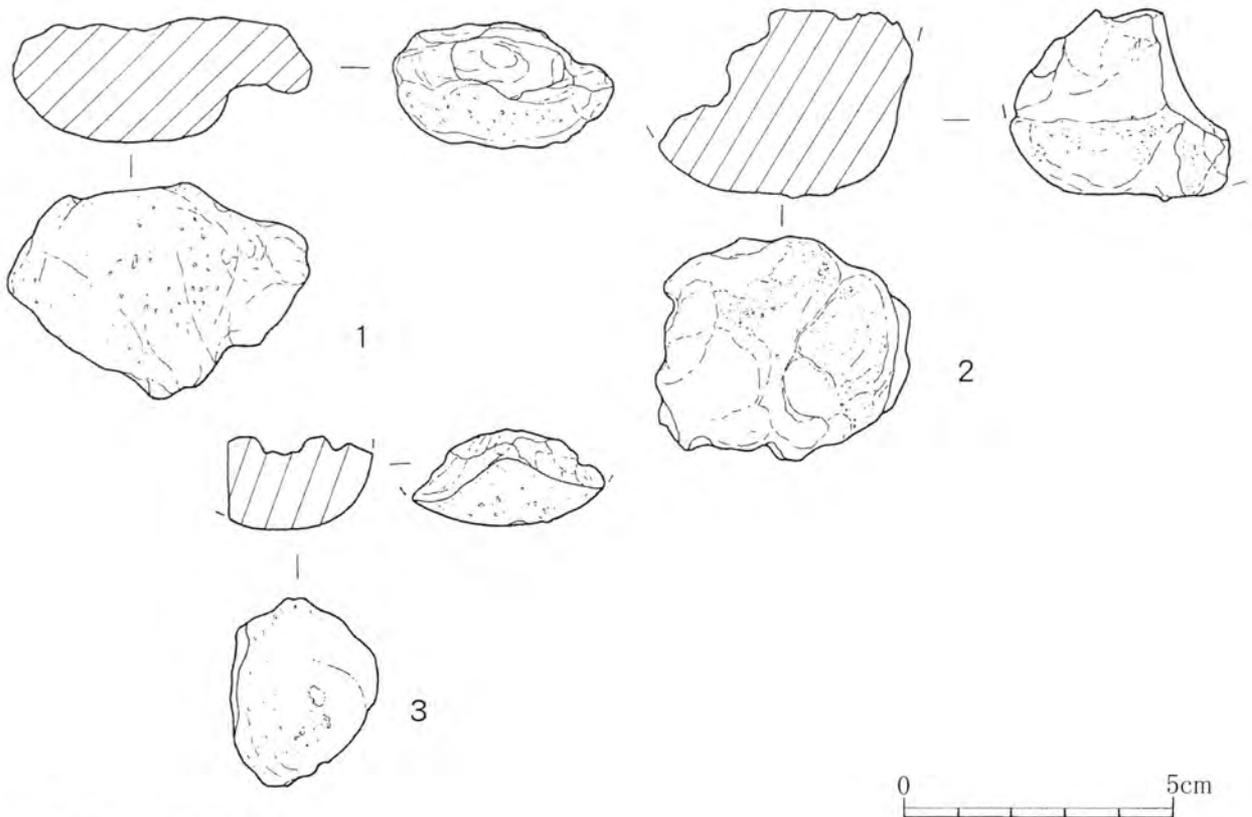
2. 鉄滓 (第135図、図版93下)

出土した鉄滓は、総数47点で、3～4区からの出土である。そのうち、碗型鉄滓が9点出土した。

層別での出土状況は、第Ⅲ層上(第Ⅲ層a～c)では、第Ⅲb層に多く、第Ⅲ層下(第Ⅲ層d～h)、第Ⅴ層では僅かである。第45表に出土量を示した。

第45表 鉄滓・碗型鉄滓出土量

種類 層	鉄滓									碗型鉄滓						
	O-27	P-26	P-27	Q-26	Q-27	R-26	R-27	S-24	S-27	O-27	P-26	Q-26	Q-27	R-26	R-27	S-28
I																2
Ⅲ a					3											
Ⅲ b			2	2	4	1	5								2	
Ⅲ b									1							
Ⅲ c	1		6	4		1				1		1	1	1		
Ⅲ d				1												
Ⅲ e				1												
V		3					1				1					
P3149					1											
不明								1								
小計	1	3	8	8	8	2	6	1	1	1	1	1	1	1	2	2
合計	38									9						

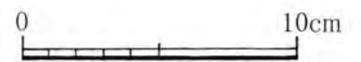
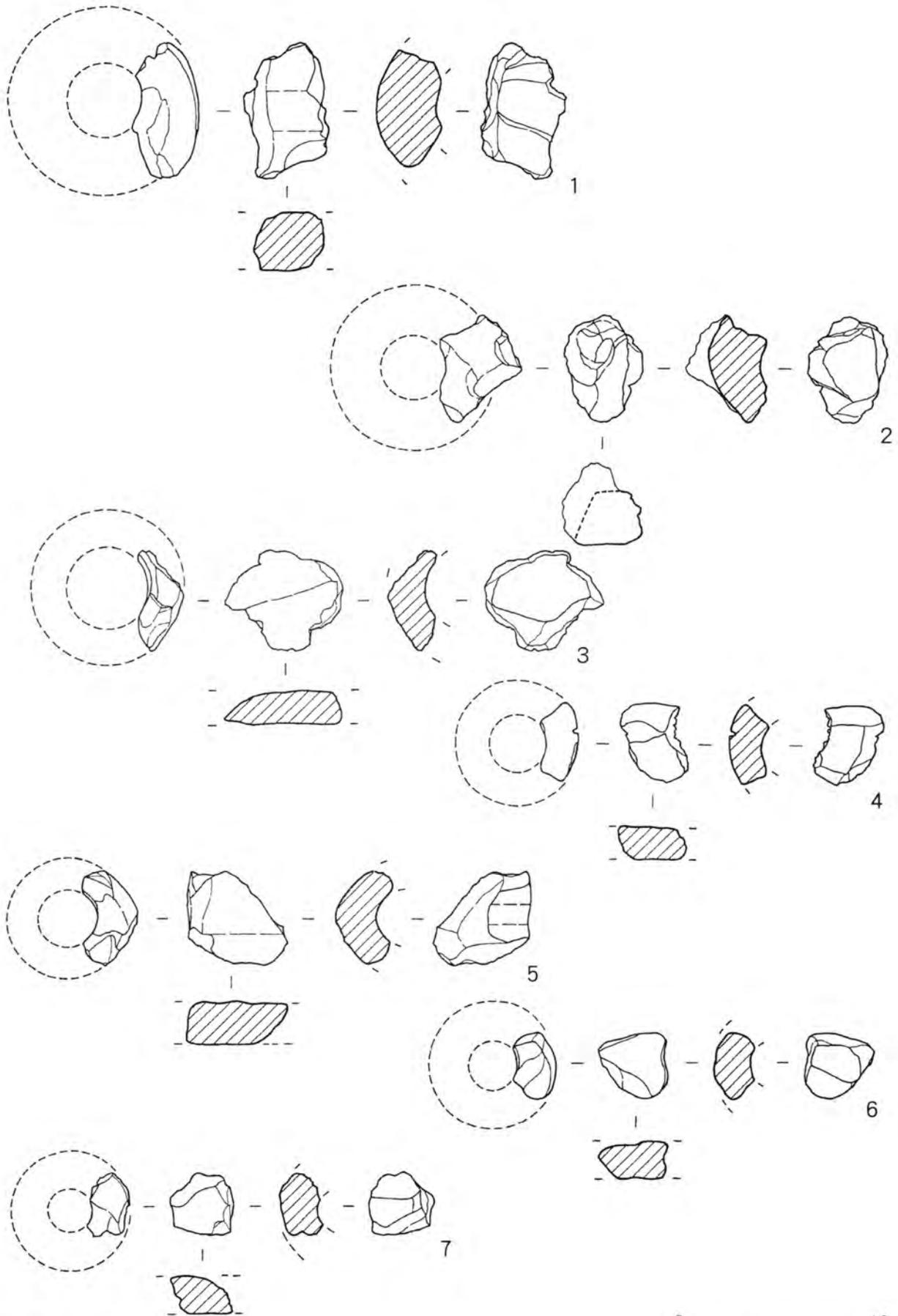


第135図 碗型鉄滓

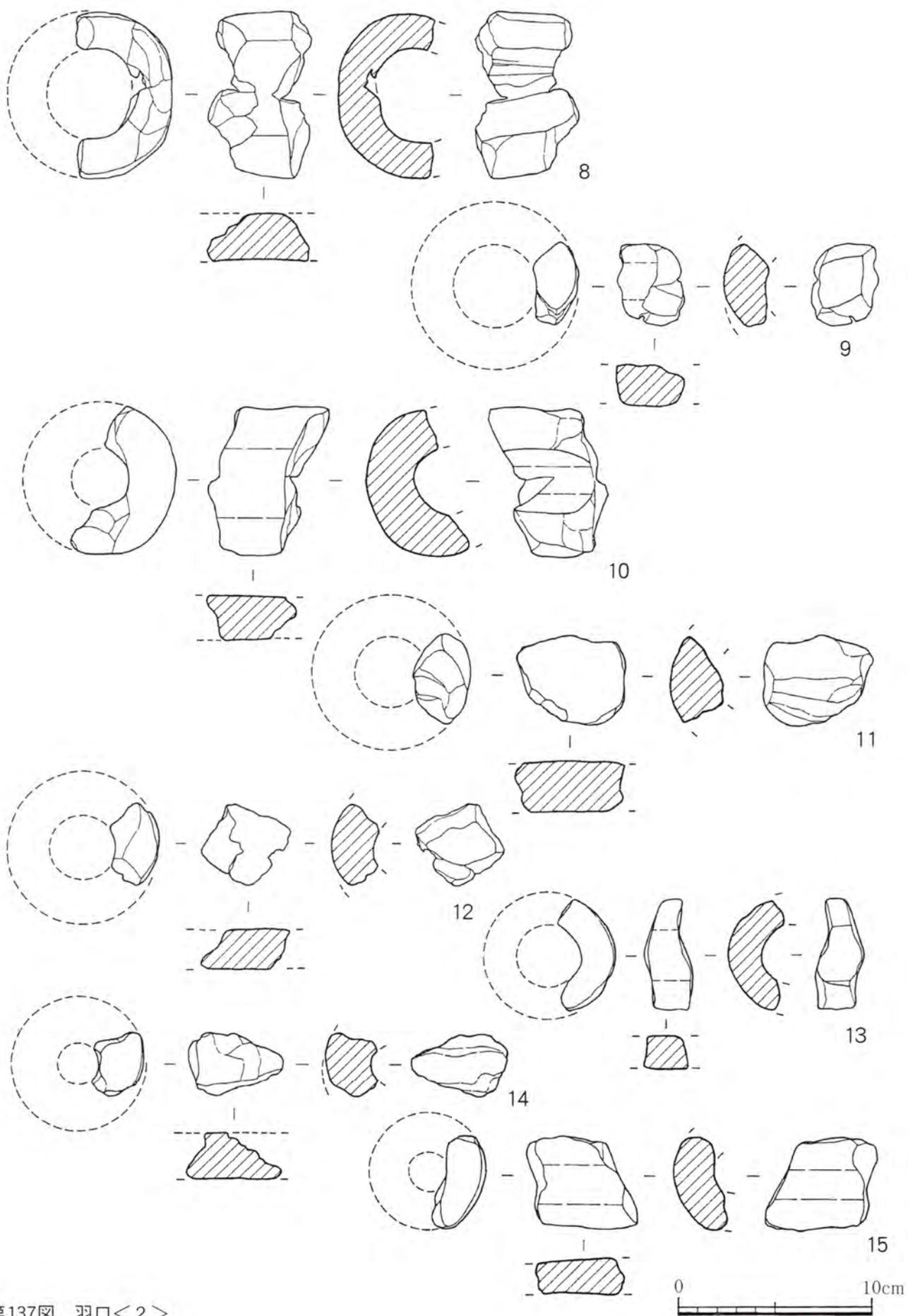
第46表 羽口観察一覧

* 外径・内径は推定の数値である。

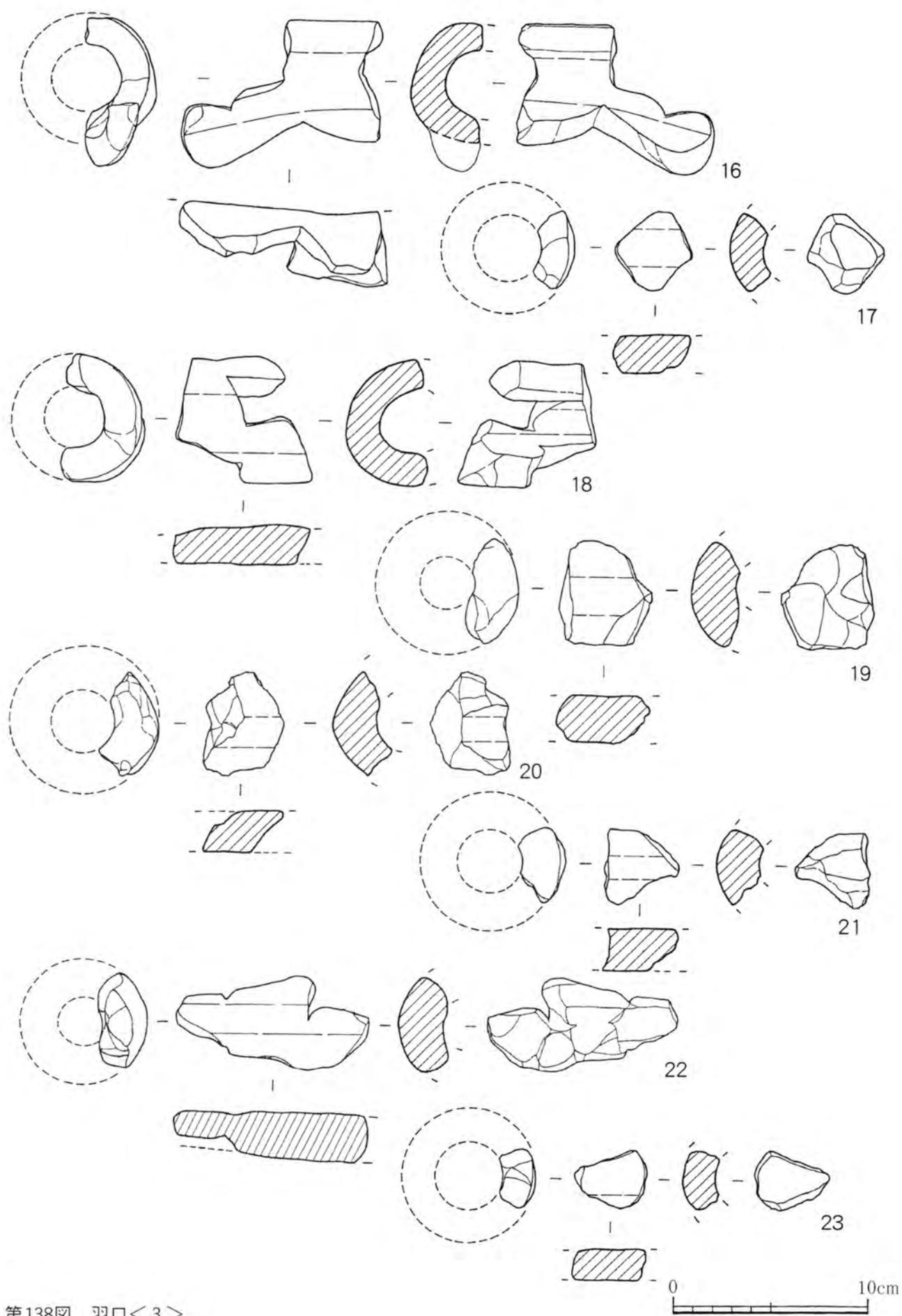
挿図 図版	番号	部位	計測値 (cm)			重量 (g)	鉄滓 付着	観察事項	出土 地点	層序	備考
			外径	内径	厚さ						
第 136 図・ 図版 87	1	先端	9.2	3.7	2.3	75	有り	外面は淡褐色。内面は褐色。外面と片側の破損部に鉄滓が付着。	Q-27	Ⅲ c	—
	2	先端	8.0	3.1	2.5	50	有り	外面には鉄滓塊が付着している。内面はが暗灰色。	S-25	Ⅲ d 10/15	—
	3	先端	7.6	4.0	1.8	38	有り	鉄滓が外面に付着していることから、外面が灰色。内面は先端部分は暗黒褐色、その内側は明橙色。	Q-27	Ⅲ b	—
	4	胴	6.2	2.8	1.6	18	有り	外面が暗褐色。内面が明橙色。部分的に黒味を帯びる。薄く鉄滓が付着することから先端にちかいと考えられる。	P-26	Ⅳ	—
	5	先端	5.9	2.8	1.6	45.8	有り	先端は、胴と同じ厚さに見えるほど鉄滓が付着している。外面が灰褐色。内面は先端部は暗褐色、内側は明褐色。断面でみると羽口の先端は、厚さを減じている。	Q-25	V b	—
	6	胴	6.3	2.4	1.9	21	無し	外面は明橙色。内面は褐色。	Q-27	V	柱穴No.3104
	7	胴	5.9	2.1	1.9	13	有り	外面に鉄滓が付着していることから、先端部付近の胴と考えられる。外面が灰色。内面は厚く暗黒褐色。	Ⅲ区	表採	—
第 137 図・ 図版 88	8	胴	8.6	4.6	2.0	132	無し	外面が灰褐色。部分的に濃淡がある。内面が橙褐色だが、片側の破損部周辺は帯びる。先端近くかと考えられる。	O-26	Ⅱ	—
	9	胴	8.5	4.2	2.2	32.6	無し	外面が淡茶褐色。内面が橙褐色。	Q-27	V	柱穴No.3104
	10	胴	7.8	2.9	2.4	124	無し	外面が明橙色と暗灰褐色で後者は図面上では上部側である。内面が淡褐色	S-25	V b	—
	11	胴	7.9	3.6	2.1	64.7	無し	外面は淡灰色と橙褐色。内面の残りは不明瞭。荒い砂粒を僅かに含む。	O-26	Ⅲ e	—
	12	胴	7.7	3.3	2.3	30	無し	外面が暗灰色。内面は暗褐色。	Q-25	V b	—
	13	胴	6.4	3.1	1.6	29.3	無し	外面は暗灰褐色で、部分的に明橙色。内面は淡褐色。	Q-27	V	柱穴出土
	14	胴	6.8	2.1	2.4	26	無し	外面が暗灰色。内面が橙褐色。外面に鉄滓が薄く付着。	O-26	Ⅱ	—
	15	胴	5.9	2.0	2.0	58.4	無し	両面共明橙色が主であるが、片側が暗灰色を呈する。内面は欠損。	Q-27	Ⅲ b	—
第 138 図・ 図版 89	16	胴	6.9	3.5	1.6	128	無し	内面は灰褐色。内面は褐色。内径・外径ともに片側に開くように径を大きくしていることから、吹口とは反対側の端部近くではないか考えられる。	Q-27	V	柱穴No.3104
	17	胴	6.8	3.4	1.7	27	無し	外面が淡燈色。内面は淡褐色。他のものと比較して見ると、橙色が弱い。	Q-27	V	柱穴No.3104
	18	胴	6.5	3.2	1.7	87	無し	外面は暗灰褐色と部分的に淡燈色。内面は褐色。	Q-25	V b	—
	19	胴	7.3	2.7	2.3	60	無し	外面が暗褐色。内面は橙褐色。荒い砂粒を僅かに含む。	Q-27	V	柱穴No.3104
	20	胴	6.9	3.5	1.7	18	無し	外面が褐色。内面が橙褐色。	Q-25	V b	—
	21	胴	7.6	3.3	2.1	38.6	無し	外面は暗灰色。内面は暗茶褐色。横断面は略し字状を呈しており、隅丸方形または略菱形が考えられる。	R-27	V	—
	22	胴	7.1	3.3	2.0	26	無し	外面が暗茶褐色。内面は褐色。	R-27	V	—
	23	胴	6.5	2.5	2.0	59	無し	外面が灰色。内面が橙褐色。含まれる砂粒が粗い。	S-25	Ⅳ	—



第136図 羽口<1>



第137図 羽口<2>



第138図 羽口<3>

第19節 土鍾（第139図1～3）

土鍾は3点の出土である。管状と溝状の2種類である。管状のものには土器質と瓦質がある。第139図1は、円筒形のもので瓦質である。平面形は隅丸長方形を呈する。ほぼ完形品である。上部の孔はやや上よりにあるが、下部はほぼ中央である。孔口は擂鉢状を呈する。器面はスベスベしており磨きが施された可能性がある。

第139図2は、土器質で右側が欠けた破損品である。平面形は楕円形を呈するものと考えられる。横断面形は円形。表面は暗褐色を呈し、胎土は茶褐色を呈する。整形は雑で、左右に貫通する孔はやや上側に施され、側面に成形時に施された1本の溝が孔口付近から中央部にのびる。孔とは別に左側下部に貫通しない穴があり、右側の欠損部にも孔よりやや下側で左右に各1個、同様な穴がある。いずれも焼成前に施されている。

第139図3は、平面形は細長い長方形を呈し両端にかけて僅かに窄まるもので、表裏面のほぼ中央に長軸方向へ幅0.10cmの溝が廻る。胎土は灰色を呈する。

第47表に観察一覧を示した。第139図1の類例は銘苅原遺跡^{註1} 第139図3の類例は伊原遺跡^{註2}・高嶺古島遺跡^{註3}に見られるが、いずれも幅の狭い側面側に溝を施すものである。

第47表 土鍾観察一覧

図版挿図	番号	分類	材質	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	径 (cm)	孔径		重量 (g)	出土地	層位
								孔口 (cm)	内径 (cm)			
第139図・図版90	1	管状	瓦質	5.50	—	—	3.50	0.80	0.45	89.03	Q-26 Q-27	Ⅲ層 b
	2	管状	土器質	(3.8)	—	—	2.10	0.40	—	15.53	S-28	Ⅲ層 a
	3	溝状	土器質	4.50	1.10	0.90	—	—	—	4.29	R-26	Ⅲ層 b

註：*径は最大値。()内の数値は破損品。—は計測不可。

〈註〉

- 註1 金城正紀ほか 1997『銘苅原遺跡』那覇市教育委員会
 註2 大城 慧ほか 1986『伊原遺跡』沖縄県教育委員会
 註3 金城亀信ほか 1990『高嶺古島遺跡』豊見城村教育委員会

第20節 玉類

1. ガラス小玉（第139図5～8）

小玉は4点の出土である。いずれもほぼ完形品であるが、透明度を保っているのは1点のみで他は風化が著しく白色を呈している。第48表に観察一覧を示した。

2. 勾玉（第139図9）

風化が著しくもろい。尾の部分が一部欠損する。縦0.38cm、横1.30cm、外径（厚さ）1.40cm、孔径は約0.30cm、重さ6.52g。ガラスと考えられる。

第48表 ガラス玉観察一覧

図版 挿図	番号	色調	外径		厚さ	孔径		重量 (g)	観察事項	出土地 層位
			長径	短径		孔口	内径			
第 139 図・ 図版 90	5	白色	1.10	1.00	0.80	0.30	0.25	1.21	全体的に気泡痕がある。孔はほぼ中央にある。孔の周囲を平坦に整形するが、片面のみである。淡濃緑色の皮膜状のものが両面に僅かに残る。微細な螺旋状のスジある。	S-28 Ⅲ層 f
	6	白色	1.00	0.95	0.62	0.35	0.30	0.74	表裏面で僅かに気泡痕がある。微細な螺旋状のスジあり、これに沿って淡い灰色の帯状の線ある。孔は中央部から外れる。上側がやや太い。裏面で僅かに表面部分が剥離が見られる。	S-28 Ⅲ層 b
	7	茶色	0.80	0.80	0.70	0.35	0.30	0.53	透明感がある。表裏面の孔口部分には小な欠損部がある。裏面の孔口には僅かに「バリ」があるが、表面は丁寧に仕上げられている。	Q-26 Ⅲ層 b
	8	暗灰色	0.70	0.69	0.40	0.25	0.20	0.33	表面に茶色の光沢をもつ皮膜状のものが残っており、気泡痕が僅かに見られる。孔は中央部からはずれている。	S-28 Ⅲ層 f

※ 計測値の単位はcm・gである。

第21節 石製品 (第139図・図版90-4)

第139図4は、平・断面形ともに楕円を呈する。ほぼ中央に孔を穿つ。縦2.3cm、横2.0cm、厚さ1.7cm、孔径は孔口で0.5cm、内径約0.25cm、重さ12.91g。S-28第Ⅲ層fの出土である。

同様な形態の土製品が平敷屋トウバル遺跡^{註1}で出土している。

(註)

註1 島袋洋・金城亀信・上原静ほか 1996「平敷屋トウバル遺跡」『沖縄県文化財調査報告書』第125集 沖縄県教育委員会

第22節 骨製品 (第139図・図版90-10)

骨製品は1点のみの出土である。

半円盤状の製品で、全面に研磨が施され光沢がある。平面形は半円を呈し、縦断面形は細長い棒状で両端が尖る。左側面は平坦で、弧の部分は中央部周辺に表裏両面側からの整形時の削り面が残り端部は平坦である。上端が僅かに欠けているがほぼ完形品である。表裏面に片切彫りで施された文様状のスジが3本あり、表面はやや右下がり、裏面は左上がりである。左側の平坦面側から弧状側に向けて幅を減ずるが、弧状側には達しない。幅は平坦面側で約0.2cmである。彫り痕を見ると上側はほぼ真っ直ぐであるが下側は波打っている。

縦は残存部で約3.8cm、幅約1.4cm、厚さは最大値で0.3cm、重さ2.10g。R-26第Ⅲ層b出土。骨の種類は牛か馬の四肢骨と考えられる。

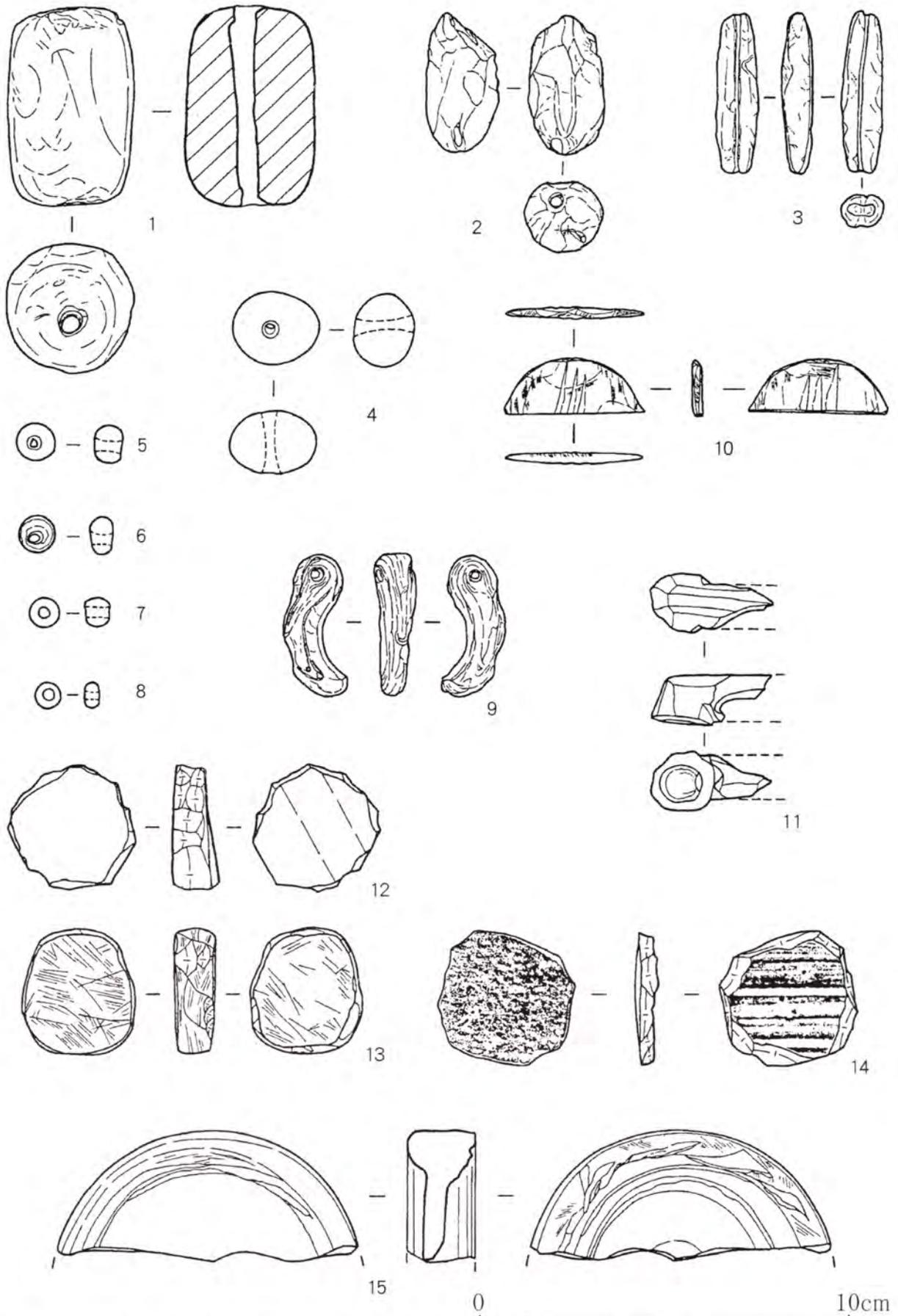
類例に伊原遺跡^{註1}。宮古の砂辺氏が南島考古^{註2・3}に記したのものがある。

(註)

註1 大城 慧ほか 1986『伊原遺跡』沖縄県教育委員会

註2 砂辺和正ほか 1997『南島考古だより』第58号

註3 砂辺和正ほか 1992『住屋遺跡』平良市教育委員会



第139图 土锤·玉类·石製品·骨製品·円盤状製品·煙管

第23節 貝製品 (第140図・図版91-1~4)

本遺跡では、ホシダカラ製有孔品が2点、夜光貝の殻軸部1点が出土した。また、第Ⅱ層出土のサラサバティラの殻底に貫通した3個の孔と未貫通のもの1個を有するものを参考資料として示した。

第140図1は、ホシダカラの背面の前端側に長径2.9cm、短径1.9cmの楕円状の孔があり、外唇に研磨痕が見られるもので、この研磨痕は、外唇と背面の境目付近である。背面のほとんどで殻表面の剥離が見られるが、底面近くには貝の黒斑が残る。殻長は8.1cm、殻幅5.8cm、重さ98g。P-27第Ⅲ層b出土。

第140図2は、ホシダカラの背面の前端側に長径1.3cm、短径1.1cmの楕円状の孔があり、その孔の前端側の孔縁に僅かに擦れた痕が見られる。背面には貝の黒斑が残る。殻長は7.0cm、殻幅4.4cm、重さ46.5g。P-27第Ⅲ層b出土。

第140図3は、夜光貝の殻軸部分で、体層と次体層の境目にあたる螺肋の部分と外唇部分に殻の表面が残り茶褐色を呈している。殻頂が欠損する。殻高は16cm、重さ287g。本品は貝製品の素材の可能性も考えられる。Q-27の第Ⅲ層bの柱穴No.331c内出土。

第140図4は、サラサバティラの殻底に3個の貫通した孔と未貫通の孔1個が見られるものである。殻口側に直径約0.7cmの孔が1個あり、これと向かい合うようにほぼ等間隔に横並びで、貫通した孔2個と未貫通のもの1個が並ぶ。横に並ぶもののうち、周縁に達している不定形の孔は長径1.4cm、短径0.6cm、中央のものは長径1cm、短径0.7cm、未貫通のものは直径0.6cmである。殻口の部分が破損し、殻底や体層の表面が部分的に剥離している。O-27第Ⅱ層出土。本品に見られる孔はヤドカリによる可能性が考えられる資料であるとの助言を千葉県立中央博物館の黒住氏より御教示頂いた。

第24節 円盤状製品 (第139図・図版90-12~15)

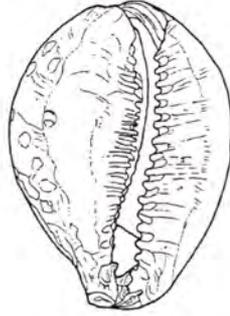
総数4点の出土である。いわゆる円盤状製品は3点、1点は形態から本項目に含めた。

第139図12は、中国産褐釉陶器の胴部片を打ち欠いて成形したものである。平面形が略円形を呈するもので、両面に釉が残るが、裏面は部分的に剥がれている。側面の打ち欠き部分は摩滅している。直径約3.5cm、厚さ約0.85~1.16cm、重さ16.89g。S-27、第Ⅲ層c出土。

第139図13は、瓦を打ち欠いたもので、平面形は隅丸方形を呈する。全体に擦痕が見られ摩滅している。側面の打ち欠き部分も、比較的丁寧に整形され丸みをもつ。長軸は3.4cm、短軸3cm、厚さ約1.1cm、重さ13.19g。色調は橙色。4区東側表採。

第139図14は、カムイヤキの胴部片を打ち欠いて成形したもので、平面形は隅丸方形を呈する。裏面には轆轤痕がある。直径約3.7cm、厚さ約0.6cm、重さ10.23g。M-27第Ⅱ層出土。

第139図15は、いわゆる円盤状製品とはやや異なるもので、青磁壺又は瓶の高台の半欠品で、2次利用したものである。表面の高台内側部分には白色のアルミナが付着し、畳付は摩滅している。裏面の内面側には轆轤痕があり、胴部側の破損部は削られ平滑である。本品は、平滑面を持ち下部の欠損部では縁が摩滅していることから、この状態での使用も考えられ、砥石の可能性も考えられる。現存長約8.1cm、厚さは外側で1.9cm、内側は約6mm、重さ45.49g、色調は淡灰色、胎土は微粒子。R-27第Ⅲ層b・第Ⅴ層出土の接合品である。



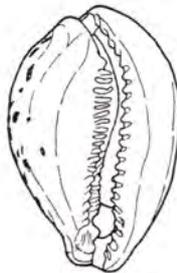
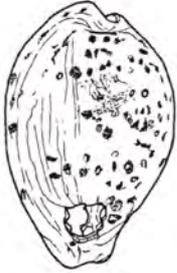
1



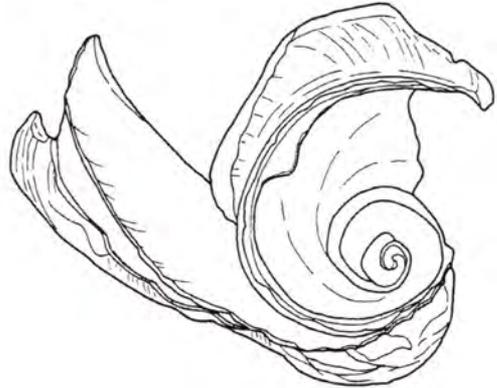
1



4



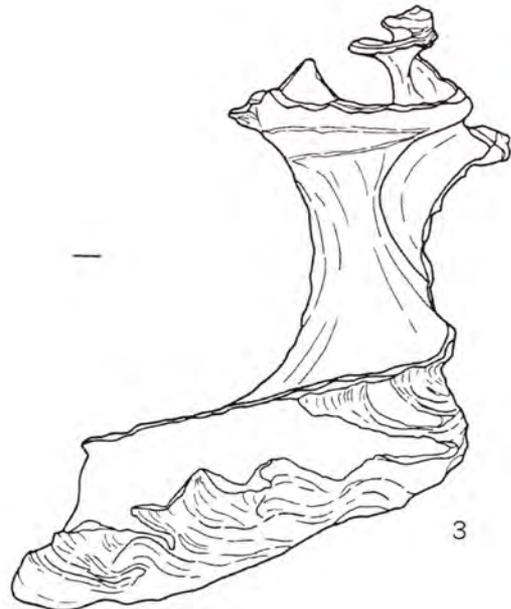
2



1



—



3



第140図 貝製品

第25節 錢貨 (第141図1～22)

出土した錢貨は、総枚数は23枚である。うち、1点は2枚が癒着している。

完形品、または、ほぼ完形品のうち、面文が良好な状態で判読できたものは7種類で、開元通寶・皇宋通寶・熙寧元寶・宣和通寶・紹興通寶・永樂通寶・元豐通寶である。面文の状態は良くないが、景定元寶・政和通寶と判断されるもの、また、錢文が良好な破片で、崇寧重寶・至道元寶と考えられるものが出土した。他は無文錢5枚、判読不可が1枚である。

錢貨は、第V・VI層からの出土はなく、第III層a～dと2・3号石列に関わる小川跡状遺構部分の第II層や攪乱層出土である。年代を見ると、他の遺物と同様である。

第60表に出土量、第49表に観察一覧を示した。

第49表① 錢貨観察一覧

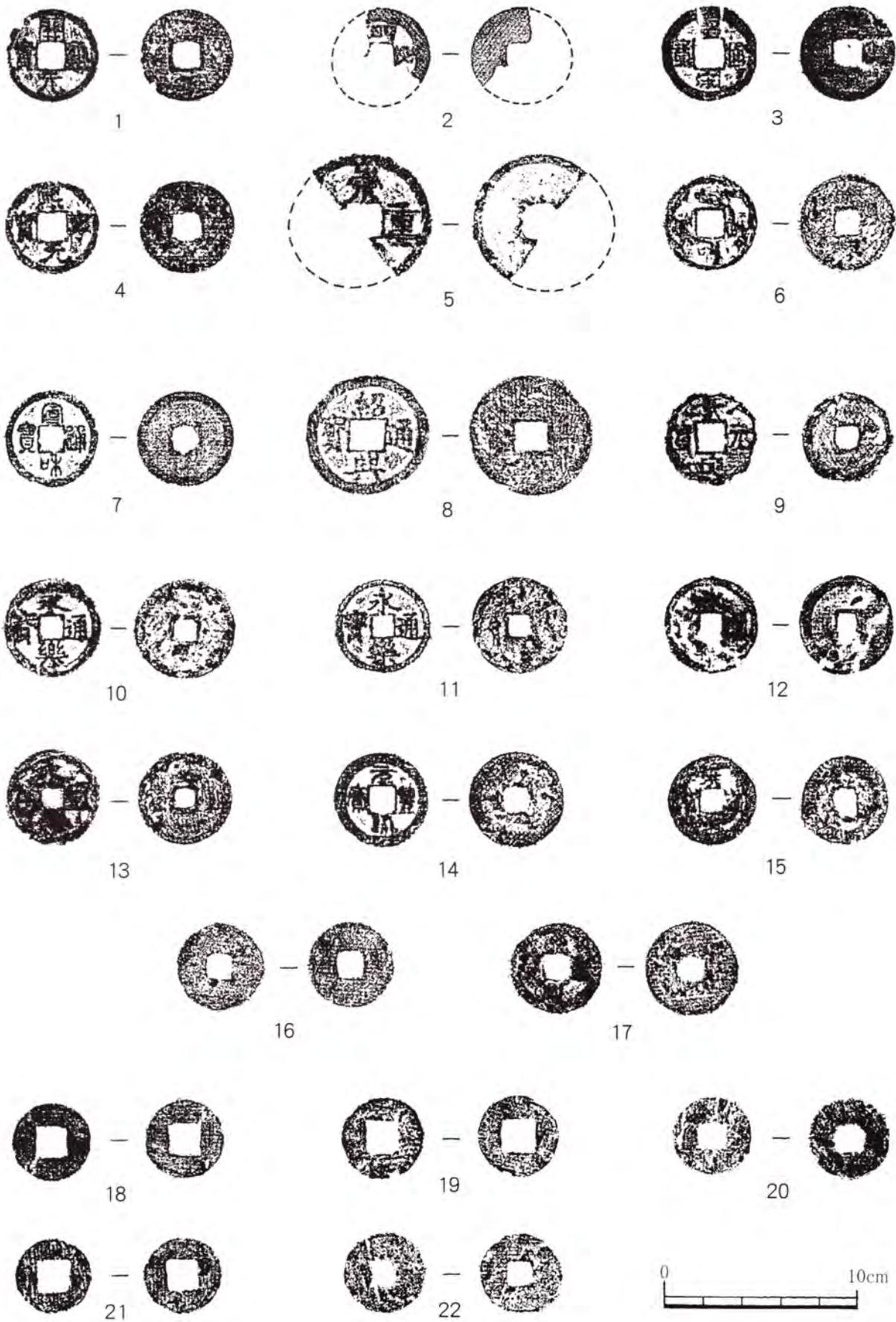
「種類」の項口は面文あり。○は欠矢。()内の数値は推定。

図版挿図	番号	種類 (文字)	西暦 (初鑄年)	時代	直径 cm	厚さ cm	孔径 cm	重量 g	残存 状態	その他観察事項	出土地 層位
第141図・図版92	1	開元通寶	621年	唐	2.4	0.10	0.68	2.5	完形	面文は良好。背文は無い。郭は面では明瞭であるが、背は鏽の付着によって不明瞭。背では段差が低い。外郭の左上の一部が数力所小さく欠ける。孔には僅かにバリが残るが、ほとんど見られない。暗褐色を呈する。赤鏽。	Q-27 III層a (5～10cm)
	2	至○○寶 (至道元寶?)	995年	南宋	(2.7)	0.12	0.58	1.3	破片 (1/3)	面文は良好。外郭は幅広。内郭は細い。孔の1辺は約0.48cm。裏面の郭は認められるが、段は僅かである。孔にはバリがない。暗緑色を呈する。青鏽。	S-28 III層b
	3	皇宋通寶	1039年	北宋	2.5	0.14	0.72	3.9	ほぼ 完形	面文は良好。背文は無い。面の外・内郭ともに明瞭で、外郭の幅が広い。背は外・内郭ともに鏽の付着によって不鮮明で、段差は僅かである。孔の左側の隅に僅かにバリが残る。赤茶褐色。赤鏽。	Q-27 III層a (5～10cm)
	4	熙寧元寶	1068年	北宋	2.4	0.14	0.67	3.3	完形	面文は良好。背文は無い。面の外・内郭の段差はしっかりしている。背は鏽の付着により不明瞭。バリが、孔の隅に残る。左下隅がやや大きい。暗緑色を呈する。青鏽。	O-27 II層 (黄色砂層)
	5	崇○重○ (崇寧重寶?)	1104年	北宋	3.4	0.25	0.83	5.6	破片 (半欠)	厚みのある大型で、面・背ともに面文、外・内郭ともに明瞭である。孔には僅かにバリが残る。赤茶褐色を呈する。赤鏽。	S-27 III層a (5～10cm)
	6	□□□□ (政和通寶?)	1111年	北宋	2.5	0.12	0.63	3.4	完形	面文は判読しづらいが「政和通寶」と判断される。面・背ともに鏽の付着が目立つ。外郭は良好な部分で見ると細い。面の内郭は明瞭だが、背では不明瞭。背の外・内郭の段差は僅かである。孔の四隅に僅かにバリが残る。暗褐色を呈する。赤鏽。	P-27 攪乱
	7	宣和通寶	1119年	北宋	2.5	0.14	0.60	3.4	完形	面文は良好。背文は無い。孔の四辺のほぼ中央に約1mmの小さな抉りがある。孔の四隅にバリが残る。面は外・内郭ともに明瞭であるが、背は鏽の付着によって部分的に見える。暗青緑を呈する。青鏽。	O-26 石列 崩落部 II層
	8	紹興通寶	1131年	宋	3.1	0.20	0.71	6.7	完形	大型であるが、大きさの割に軽い感をうける。面は外・内郭ともに明瞭。内郭は細い。背は鏽のため外・内郭は不明瞭。孔には僅かにバリが残る。青緑色を呈する。青鏽。	O-27 石列崩落部より 連なる隆起部 II層
	9	景定元寶	1260年	南宋	2.4	0.12	0.63	6.1 (3.0)	完形	2枚が癒着したものである。表の1枚目の文字は「景定元寶」と判断される。縁のほぼ全体に凹凸がある。外郭の縁が殆ど欠けている。内郭は細く、段差は明瞭。孔にバリはない。暗青緑色を呈する。青鏽。	O-27 小川状遺構 攪乱

第49表② 銭貨観察一覧

□は面文あり。○は欠失。()内の数値は推定。

図版挿図	番号	種類 (文字)	西暦 (初铸年)	時代	直径 cm	厚さ cm	孔径 cm	重量 g	残存 状態	その他観察事項	出土地 層位
第 141 図・ 図版 92	10	永楽通寶	1408年	明	2.6	0.21	0.47	5.3	完形	面文は明瞭である。出土品のなかで大型で最も厚い。裏は錆の付着のため郭の段が明瞭でない。面は、外・内郭ともに明瞭であるが、背は錆の付着のため不明瞭。孔にはバリが残る。暗茶褐色を呈する。赤錆。	S-27 Ⅲ層b (15cm～最下部)
	11	永楽通寶	1408年	明	2.5	0.16	0.52	3.3	完形	面文は明瞭。背文は不明。下の「楽」と考えられる文字の部分は、孔の縁から欠損しひび割れている。面は外・内郭の段ははっきりしている。背は錆の付着が多いため郭は不明瞭。孔には僅かにバリが残る。暗茶褐色を呈する。赤錆。	S-25 Ⅲ層b
	12	永□通□ (永楽通寶?)	—	—	2.5	0.12	0.53	1.9	完形	面文は不明瞭。背文は無い。面では外・内郭ともに明瞭であるが段差は低い。背では内郭が不明瞭。外郭の幅は均一ではない。洗浄作業後に、真新しい銅色が露出している。孔には僅かにバリが残る。赤茶褐色を呈する。赤錆。	Q-26 Ⅲ層c ～最下部
	13	永□通□ (永楽通寶?)	—	—	2.4	0.13	0.47	2.8	完形	面・背ともに錆によって不明瞭。錆によって面文の周囲にも錆が付着しているため、判読は困難であるが、上の面文は「永」、右は「通」ではないかと考えられることから「永楽通寶」と考えられる。孔には僅かにバリが残る。赤茶褐色を呈する。赤錆。	O-27 Ⅲ層b
	14	元豊通寶	1508年	天正 ～ 元禄	2.5	0.13	0.65	3.6	完形	面文は良好。背文は無い。面は外・内郭ともに明瞭で、外郭は幅が広い。背は錆の付着が目立ち内郭は不明瞭で、外郭の段差は殆どない。孔の周囲に錆の付着が多いため、内郭の段は不明。孔に僅かにバリが残る。暗緑褐色を呈する。青錆。	O-27 石列南端部 Ⅱ層
	15	□□□□	—	—	2.3	0.14	0.56	3.0	完形	文字の部分に錆が細く帯状に回っており文字はほとんど判読できないが、1文字のみ「洪」の書体に似る。「洪武通寶」であろうか。背文は不明。面・背ともに、外郭は幅が広く、内郭は細い。段差は低い。部分的に青緑色を呈している。右下側の一部が曲がる。隅にバリが僅かに残る。暗赤褐色。赤錆。	S-27 西側畦 Ⅲ層c
	16	□□□□	—	—	2.2	0.12	0.62	2.3	完形	判読不可。背文は無い。外・内郭が僅かに見える。孔には僅かにバリが残る。薄い。暗緑褐色を呈する。青錆。	S-25 Ⅲ層b
	17	□□□□	—	—	2.4	0.10	0.58	2.6	完形	面文は判読不可。背文は無い。面は、外・内郭ともに明瞭である。背は錆の付着のため不明。洗浄作業後に銅色が露出。孔には僅かにバリが残る。薄い。赤茶褐色を呈する。赤錆。	O-27石列崩落部より連なる隆起部分Ⅱ層
	18	無文銭	—	—	2.4	0.19	0.77	1.4	完形	右側に僅かに曲がる部分がある。孔に僅かにバリが残る。茶褐色を呈する。赤錆。	O-27 Ⅲ層d 最下部
	19	無文銭	—	—	2.1	0.10	0.84	1.5	完形	一部縁が僅かに挟れている。孔には僅かにバリが残る。暗茶褐色を呈する。赤錆。	R-26 Ⅲ層b (20～25)
	20	無文銭	—	—	2.0	0.10	0.65	1.2	完形	文字・外郭・内郭の有無は判然としない。一見内郭があるように見え、外・内郭の段差がほとんど見られないことから無文銭に含める。孔には僅かにバリが残る。暗茶褐色を呈する。赤錆。	S-25 Ⅲ層b (0～5cm)
	21	無文銭	—	—	2.0	0.11	0.80	1.4	完形	孔には僅かにバリが残る。赤茶褐色を呈する。赤錆。	S-25 Ⅲ層b (5～10cm)
22	無文銭	—	—	2.0	0.17	0.60	1.7	完形	孔が比較的小さい?。バリが僅かに残る。錆のため暗褐色を呈す。表裏面ともに腐蝕による剥離が生じている。赤錆。	S-27 Ⅲ層b	



第141図 錢貨

第26節 煙管 (第139図・図版90-11)

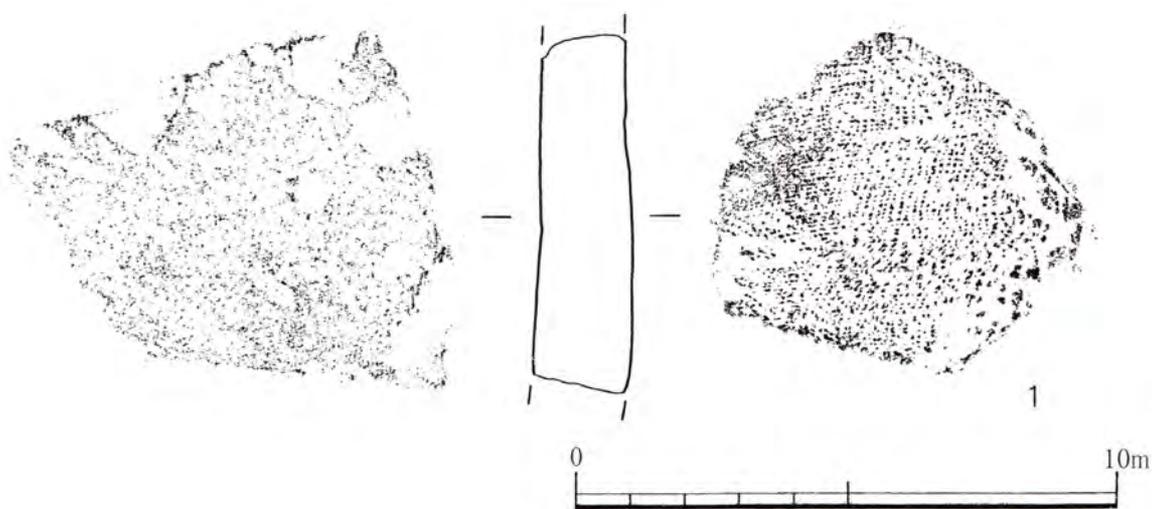
壺屋焼の雁首の破損品である。火皿部・身ともに八角形に面取された素焼のもので、表面は暗褐色を呈し、素地は赤褐色を呈するが左側面に窯変によるものと考えられる黒釉状を呈する部分がある。残存長約3.1cm。火皿部分の最大径1.7cm、孔径の最大径は1.1cm。身部最大径1.4cm、孔径身部分の孔径約0.5cm。重量4.61g。

第27節 瓦 (第142図・図版93上)

瓦は2点出土し、両資料とも明朝系瓦と思われる。図化したのは1点のみで、両者の中では新しい瓦と思われる。他の1点(図版93上-2)は図版のみの紹介としたい。

第142図1は形状から平瓦と思われる破片資料である。現況のサイズは長さ7.4cm、幅6.2cm、厚さ1.6~1.8cmを測る。凸面は工具による器面調整が施され、凹面は全面に細かい布目痕が明瞭に見られる。色調は淡茶褐色、胎土は粘土質で赤褐色粒を少量含む。4区Q-26第Ⅲ層c出土。

図版93上2も平瓦で左角の破片資料である。長さ10.6cm、幅5.1cm、厚さ1.1~1.4cmを測る。凸面は滑らかな凸凹で、凹面は上述資料のような布目痕は見られないが、桶の結び目の窪みと、分割部分の縁側に長さ約4cm、幅0.2cm、深さ約0.1cmの圧痕が見られる。色調はベージュ色、胎土は粘土質で中央部が淡灰色を帯びている。また、暗褐色粒を多く含む。3区P-27第Ⅲ層b出土。



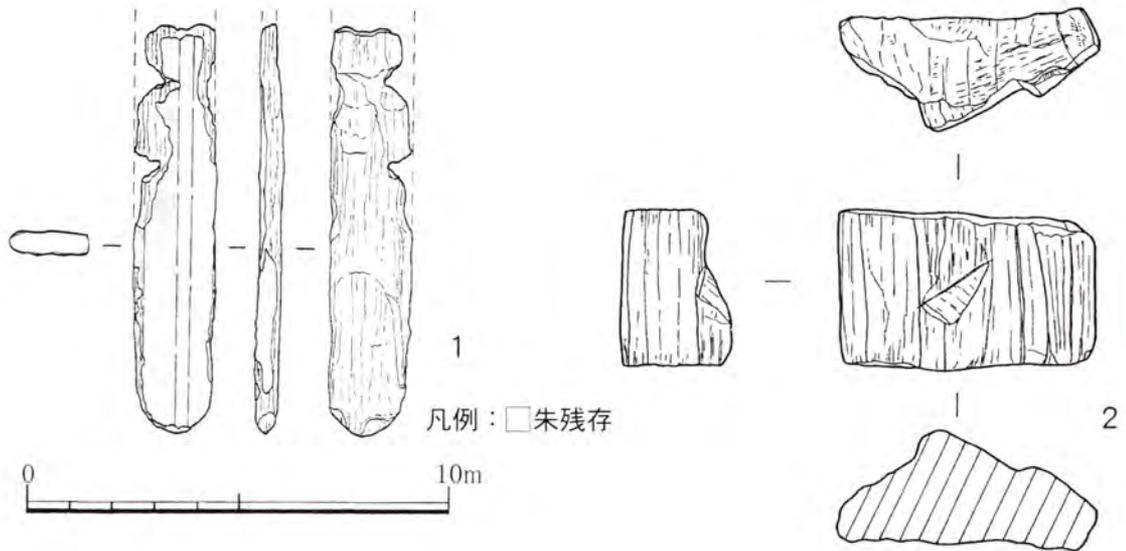
第142図 瓦

第28節 木製品 (第143図・図版93)

木製品は木片と漆製品を図化した。

第143図1は朱色の漆製品である。破片資料で、長さ8.4cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmの長方形状を呈するが形状は不明である。漆質の残存状態は良く、塗布状況は表面と右側面の2面で残存し、文様は見られない。木質部の残存状態は良好である。3区O-27第Ⅲ層c出土。

第143図2は木片で破片資料と思われる。長さ6cm、幅3.4~3.6cm、厚さ2.3cmである。本資料の縦断面は微弱な凹凸面であるが磨耗している。図面の上面からみると右側から年輪の輪が広がっている状況がみられることから、木材を縦半分、若しくは銀杏形に割いて使用したのではないかとと思われる。また、横断面の上下面は平坦に仕上げられており、幅は現状のとおりとなる。3区O-28第Ⅲ層d出土。



第143図 木製品

第29節 貝類遺体

今回、本遺跡から得られた貝類遺体は、主に調査範囲の南東部の第Ⅲ層 a, b から出土したものである。この地区の層序では12-15世紀の遺物が混在していたことから、貝層は過去に堆積していたものが15世紀後半に削られて形成されたものと考えられている。そのためグスク時代の中での時期的変遷を押さえることはできなかったが、今回の貝類遺体は、グスク本体以外の集落で、しかも農耕が確実に行われていた遺跡での食用貝類の組成を示している例であった。これは、グスク時代の人々の生活を知る上で、かなり重要なものであると考えられる。

貝類遺体は、発掘中にピックアップ法で得られたものに対して、完形個体をカウントすることで評価した（第50表 貝類出土量）。

その結果、全体として、約5万2千個体が確認された。その中で、約2%以上の出土が認められたのは、マガキガイ（42%）・カンギク（6%）・クワノミカニモリ（5%）・アラスジケマン（5%）・ネジマガキ（4%）・リュウキュウサルボウ（3%）・オニノツノガイ（3%）・ヌノメガイ（2%）・コオニコブシ（2%）の9種であり、これらで全体の約70%を占めていた。

本遺跡の貝類遺体組成の特徴として、マガキガイが極めて多かったことが挙げられる。この種は、現在も食用として多く利用されているものであり、サンゴ礁のイノー内の砂底に生息しており、外洋-サンゴ礁域に面した様々な時代の遺跡からも多く出土する種である。さらに、本遺跡では、オニノツノガイ・コオニコブシといった外洋-サンゴ礁域に生息する貝類も上記9種の中に含まれ、全体として、約半数がこの場所で得られていることが分かる。ただし、サンゴ礁の干瀬に多いチョウセンサザエやサラサバテイは比較的少なく、同じサンゴ礁でもこの部分での採集活動は少なかったと考えられる。

グスク時代になると、貝類遺体では、内湾-転石域のカンギクや河口干潟-マングローブ域のアラスジケマンが優占種（主体貝）となる遺跡の多いことが知られている。本遺跡に近接した北谷町の玉代勢原遺跡でも、アラスジケマンが全体の1/4強を占め、このパターンを示している。一方、北谷城二の廓や北谷城第7遺跡では、本遺跡ほどではないが、同じくマガキガイの多いことが報告されている。また、グスク時代の遺跡では、ウミノナ類やカニモリ類の割合の増加することが知られており、本遺跡でもクワノミカニモリが多く、他の同時代の遺跡と同様な状況でも認められた。

結論として、本遺跡の貝類遺体では、マガキガイが多く、サンゴ礁のイノーの利用が最も卓越していたが、アラスジケマンやクワノミカニモリの出土からグスク時代の特徴も示していると言える。このように本遺跡における貝類の採集空間としてサンゴ礁域の利用が卓越する要因は、サンゴ礁に面した遺跡の立地のみ起因するのではなく、サンゴ礁の干瀬までは行けないが、イノーでは比較的まとまった漁労時間をとることができたためではないかと考えられる。今後、このような視点から、貝類遺体と他の人工遺物との関係を探ることは興味深いと思われる。

（黒住耐二）

第50表② 貝類出土量 (巻貝)

科名	NO.	貝種	学名	地区 層序	I区						2区						3区										4区										全区 合計													
					II	III	IV	V	VI	1区 合計	I	II	III (c~h)	IV	V	VI	2区 合計	I	II	III 攪乱	III (a~b)	III (c~h)	III 攪乱	IV	V	VI	表採	攪乱	3区 合計	I	II	III	III (a~b)	III (c~h)	IV	V		VI	表採	攪乱	大 土坑	4区 合計								
ウツカガイ科	80	ウツカガイ	Ovula ovum																																															
	81	モノタガイ	Monetaria moneta			4																																												
	82	カキムシガイ	Cypraea carneola			1																																												
	83	コブガイ	Cypraea cernica																																															
	84	エロシガイ	Erosaria erosa																																															
	85	タルガイ	Talparia talpa																																															
	86	エロシガイ	Erronea erronea																																															
	87	モノタガイ	Monetaria(Ornamentaria)annulus																																															
	88	モノタガイ	Ravitriona caputserpentis																																															
	89	ヒメガイ	Lyncina lynx																																															
	90	ヒメガイ	Erronea cylindrica																																															
	91	ヒメガイ	Ponda(Mystaponda)vitellus																																															
	92	ヒメガイ	Cypraea tigris																																															
	93	ヒメガイ	Arabica eglantina couturieri																																															
	94	ヒメガイ	Cypraea interrupta																																															
	95	ヒメガイ	Arabica arabica																																															
	96	ヒメガイ	Natica solida Blainville																																															
	97	ヒメガイ	Polinices maura																																															
	98	ヒメガイ	Polinices vavaosi																																															
	99	ヒメガイ	Naticidae sp																																															
	100	ヒメガイ	Sinum haliotoideum																																															
	101	ヒメガイ	Polinices mamilla																																															
	102	ヒメガイ	Natica vitellus Linnaeus																																															
	103	ヒメガイ	Eunaticina papilla																																															
	104	ヒメガイ	Natica cernica																																															
	105	ヒメガイ	Polinices flemingiana																																															
	106	ヒメガイ	Tectonatica lurida																																															
	107	ヒメガイ	Mammilla opaca																																															
	108	ヒメガイ	Guttarium muricinum																																															
	109	ヒメガイ	Cymatium hepaticum																																															
	110	ヒメガイ	Charonia tritonis																																															
	111	ヒメガイ	Gymatriton nicobaricum																																															
	112	ヒメガイ	Colubrellina granularis																																															
	113	ヒメガイ	Bursa bufonia																																															
	114	ヒメガイ	Tonna pernix																																															
	115	ヒメガイ	Drupa rubusidacus																																															
	116	ヒメガイ	Murex sp																																															
	117	ヒメガイ	Cronia margariticola																																															
	118	ヒメガイ	Chicoreus brunneus																																															
	119	ヒメガイ	Drupa grossularia																																															
	120	ヒメガイ	Drupa ricinus																																															
	121	ヒメガイ	Cronia cariosa																																															
	122	ヒメガイ	Morula biconica																																															
	123	ヒメガイ	Mancinella armigera																																															
	124	ヒメガイ	Mancinella echinulata																																															
	125	ヒメガイ	Drupella cornus																																															
	126	ヒメガイ	Chicoreus carneolus																																															
	127	ヒメガイ	Mancinella hippocastanum																																															
	128	ヒメガイ	Mancinella tuberosa																																															
	129	ヒメガイ	Mancinella aculeata																																															
	130	ヒメガイ	Drupella fragum																																															
	131	ヒメガイ	Purpura persica																																															
	132	ヒメガイ	Drupa morum																																															

第Ⅵ章 総括

本調査は、北谷町新庁舎建設に伴う緊急発掘調査で、1996年6月19日から1997年2月1日の約7ヶ月間で行われた。

後兼久原遺跡は、標高約20mの舌状にとび出した小丘陵地域を中心に、沖積平野部にかけて形成された遺跡である。調査範囲は、この遺跡の中の標高約4～5メートルの緩やかな斜面から平坦地にあたる。調査区の南東側に遺構・遺物が集中し、グスク時代の集落を考えるうえで貴重な遺構が相次いで発見され、出土遺物から11世紀後半から16世紀にまたがる集落遺跡であることが判明した。また、近世の土地利用が窺われる石列や溝状遺構・段差などが検出された。

前章までに、遺構・遺物についてグスク時代と近世に分けて詳細を述べたが、ここでもその成果を分けて整理し、若干の考察をおこないまとめとしたい。

今回の成果で特に注目されるのは以下の4つにしばられる。

第1に注目されるのは3区の第Ⅵ層から12世紀初頭の平地住居址（1号）と高床式建物址（1号）がセットで検出され、両者が間合いをおいて建てられていたことである。その位置関係は住居址を丘陵側、高床式建物址は海手側にあることが判明した。この位置関係は、4区の第Ⅵ層においても規則的に見られた。

第2は畠址が鋤痕の痕跡とともに、12世紀初頭の高床式建物址（2号）の柱穴に切られた状態で検出されたことである。この畠は畝間の溝状を呈しており、畝をもつ畠は近世になってからの農法と考えられており、グスク時代の遺跡では列状に並ぶピット群が報告されていることなども含めて考慮すると農業史を考える上で示唆を与えるものと考えられる。

第3は地面に掘られた穴の中に、砂鉄が詰まった状態で出土したことである。グスク時代には鍛錬鍛冶が行われていたことを示す遺物の出土が他の遺跡でも報告されているが、この砂鉄の出土は、原料から鉄分を取り出す製錬鍛冶の存在を暗示しており、グスク時代の鍛冶史に一石を投じるものと思われる。

第4は、4体の埋葬人骨が検出され、3体の成人男性の内の2体が木棺におさめて葬られていたことである。この検出例は南島の葬制史に示唆をあたえるものと考えられ、類例が宜野湾市の伊佐前原第一遺跡^(註1)で報告されている。

これらの遺構の時間的な変遷を理解するために遺構群についての概要を述べるが、土壙墓については他の遺構と分けて述べる。

本遺跡は、第144図に示したように第Ⅰ～Ⅱ層の第三期（近世）、第Ⅲ層a～cの第二期（14世紀後半～16世紀）、第Ⅲ層d～第Ⅵ層の第一期（11世紀後半～13世紀）に分けられる。

検出された遺構は、いずれも3・4区の間に取り出した岩盤部分周辺に位置（第25図）し、第Ⅵ層の遺構はその北側と南側、第Ⅲ層の遺構は南東側で検出され、遺構の検出状況や遺物の出土状況から遺跡は丘陵側と南東側にひろがっていると推測された。また、第Ⅳ層はヌノメカワニナを含んだシルト質土壌であることから一時期一帯は湿地がひろがる環境の変化が推測された^(註2)。遺跡にはいくつかの水の流れの痕跡が確認されており、そのひとつがグスク時代から第Ⅰ層期まで流れていたと見られる小川跡状遺構（第25図・別刷1-C）が、3・4区の間に取り出した岩盤西側で検出された。以下、グスク時代の遺構についてまとめる。

第一期の遺構のうち第Ⅵ層では、平地住居址と高床式建物址は2本の中柱を持つ掘立柱建物跡の平地住居址2基と高床式建物址7基〔4本柱（1基）6本柱（2棟）、8本柱（1棟）・9本柱（2棟）、不明（1棟）〕・1号平地住居址に伴う屋内・屋外炉の2基・鍬痕を伴う畠・砂鉄貯蔵穴2基（2・3号）・柵列状遺構・1号土壙墓・大土坑・柱穴群が検出された。3区で検出された平地住居址と高床式建物址の位置関係は、4区においても見られ遺構が集中する丘陵側とやや離れた海手側で間合いをおいており、両者ともに概ね北西から南東方向を軸とする向きである。高床式建物址には単独のものと重なりを持つものがあり、その内の1基（2号）が畠を切っていることが確認され、畠は同建物址よりも古く、これに加え、2号高床式建物址はさらに3号に切られた状況が確認された。さらに、高床式建物址の南東側には柵列状遺構が（第61図）検出され、その周辺でウシの足跡状の痕跡が見られた。2基の砂鉄貯蔵穴は平地住居址と高床式建物址の近くにあり、2号砂鉄貯蔵穴は6号高床式建物址の脇、3号砂鉄貯蔵穴は2号平地住居址の西側で検出された。

第Ⅲ層eでは、掘立柱建物跡と見られる4本柱プラン1基・1号砂鉄貯蔵穴・3号土壙墓、3号土坑が点在して第Ⅳ層上面や地山面で検出された。第Ⅲ層dで遺構は検出されていない。

第二期の遺構のうち第Ⅲ層a～cは、平地住居址（3棟）・炉跡（7基）・土坑（4基）・楕円状土坑・長楕円状土坑・5号石列・柱穴群（別刷2-A・B）が迫り出した岩盤の南側で第Ⅴ・Ⅵ層に比して丘陵側に集中して検出され、R・S-28では第Ⅲ層bの1号炉跡・楕円状土坑・柱穴群が5号石列の北側（丘陵側）で検出された。同石列を境に第Ⅲ層cは丘陵側の堆積が途切れ、この石列北側では第Ⅲ層bと第Ⅴ層の間に地山の土で整地したと考えられる橙黄褐色土が堆積し、その上面で第Ⅲ層bの遺構が検出され、さらに、この橙黄褐色土下位に堆積する第Ⅴ層には第Ⅲ層土（第Ⅲ層cまたは第Ⅲ層b）が堆積する柱穴が確認され、この柱穴の上部が、削られたと見られる状態であることからこのグスク時代の5号石列の北側（丘陵側）は整地が行われた可能性が考えられた。

次に、遺物について述べる。出土遺物は、くびれ平底土器・グスク系土器・カムイヤキ・中国産白磁・青磁・染付・瑠璃釉・褐釉陶器・黒釉陶器・三彩・タイ産陶器・タイ産半練土器・滑石製品（石鍋・二次製品）・石器・鍛冶関連遺物（砂鉄・鉄滓・鍛造薄片・羽口）・金属製品（釘・刀子・鋸・簪など）・土錘・玉類（ガラス小玉・勾玉）・石製品・骨製品・貝製品・銭貨・瓦・木製品などが得られている。

土器は、グスク系土器が大半を占め、くびれ平底土器は少ない。グスク系土器は鍋形・鉢形・壺形・碗形が出土し、把手（縦耳・横耳）を持つ滑石製石鍋模倣と見られるものや鏢状の凸帯を囲繞させるものなどがありいずれにも滑石を混入するものがある。カムイヤキは、壺・碗・鉢が得られ、壺が最も多く、口縁部が大きく外反するものが多い。短頸・長頸のものは少ない。カムイヤキに見られる壺の胴中央部に把手が付くものが出土した。

白磁では、玉縁口縁碗の出土が多く、櫛描文碗・端反碗・口禿碗・ピロースクタイプ碗（Ⅱ）・直口縁口碗、口禿皿などが出土し、11世紀後半～13世紀代のものが第Ⅲ層・第Ⅴ・Ⅵ層から出土した。14世紀後半から15世紀の厚手の外反口縁碗やそれに後続する内彎口縁皿が第Ⅲ層a～cに多い傾向が見られた。

青磁では、劃花文碗・蓮弁文碗（鎬蓮弁文碗・無鎬蓮弁文碗・線刻細蓮弁文碗）・雷文帯碗、

櫛描文皿・口折皿・稜花皿などが出土し、福建泉州窯系青磁皿も出土した。皿は、ほぼ第Ⅲ層 a～c で出土し、盤も同様な傾向が見られる。碗は第Ⅲ層 a～c で14・15・16世紀のものが多く、第Ⅴ層に13～14世紀代のものが見られ、12～13世紀代の出土量が少なく、第Ⅵ層からの出土が見られない。染付は、碗・皿・鉢・杯・壺で景德鎮や福建・広東省系のものが得られ、第Ⅲ層 a・b に出土が多く、16世紀代が多い。中国産陶器は、褐釉陶器は壺・茶入れ、黒釉陶器は天目茶碗、三彩は鴨型水注の把手の付け根が見られる破片が出土した。タイ産陶器は、褐釉・無釉陶器が得られ第Ⅲ層 a～c で出土した。タイ産半練土器は蓋が出土している。

滑石製品では、滑石製石鍋の器形復元可能な資料が得られ、二次製品には有孔のものと撮状のものや蓋状・バレン状製品などが出土し、大型の破片が第Ⅴ・Ⅵ層、中型は第Ⅳ・Ⅴ層、小型は第Ⅲ～Ⅵ層で得られ、第Ⅴ層の出土が多い。

石器は、石斧・石皿・敲石・磨石・凹石・砥石・球石・器種不明が得られた。砥石には鉄製品の研磨に用いられたと見られる凝灰岩製のものが第Ⅱ層・第Ⅲ層 b～e で得られた。

鍛冶関連遺物は、製錬鍛冶の存在を暗示する砂鉄が出土し、鉄の塊を取り出すときに生成される鉄滓が第Ⅲ・Ⅴ層から得られ、第Ⅲ層 b・c に多く出土した。羽口は第Ⅲ層・第Ⅴ・Ⅵ層で見ると第Ⅲ層に多いが、各層別では第Ⅴ層での出土が最も多い。羽口には鉄滓が付着したものが得られた。鍛錬鍛冶が行われていたことを示す鍛造薄片の出土が確認された。金属製品は釘・刀子・鎌・鋸・簪などが得られ、出土数の半分が第Ⅲ層 b からであった。農耕具の出土が見られない。

土錘・骨製品・勾玉・明朝系と思われる瓦・貝製品などは第Ⅲ層 b で得られ、木製品では、漆が施された木片が第Ⅲ層 c、銭貨は7種類が第Ⅲ層 a～d で得られており铸造年が出土遺物からの年代観に重なる資料が得られたが、出土地が小川跡状遺構に関わって出土する状況もあることから留意される。石製品は第Ⅲ層 f、玉類は、ガラス小玉が第Ⅲ層 b と第Ⅲ層 f で得られた。

自然遺物は、貝類や魚骨とともにウシ・ウマ・イノシシなどの獣骨や海亀・イルカの歯などが得られた。また、イノシシの上腕骨の中には、遠位端の「滑車上孔」が閉じたものが2本確認され、小型のブタの上腕骨と判断された。この骨は、第Ⅲ層 c・dからの出土によって、これまでのブタの由来した時期とされる14世紀後半よりも約半世紀近く古くブタが存在する可能性を強くすることとなった^(註3)。

このように多様な出土遺物が得られた遺跡の年代は、その指標となる中国産陶磁器などの出土に混在した状況が見られるものの、その出土状況や7号炉址(第Ⅲ層 c)・第Ⅲ層 f・5号高床式建物址の柱穴③(No.10070a)の炭素14年代測定結果^(註4)などから、第一期は11世紀後半～13世紀(第Ⅲ層 d～第Ⅵ層)、第二期は14世紀後半～16世紀(第Ⅲ層 a～c)と考えられる。第一期の第Ⅲ層 d～第Ⅵ層のうち、第Ⅲ層 d・e と第Ⅲ層 f～h は第Ⅴ・Ⅵ層に対応すると考えられる(第143図)。

第Ⅲ層 e は、4本柱プラン・1号砂鉄貯蔵穴・3号土壙墓・3号土坑が検出され、第Ⅲ層 f～h はグスク時代の5号石列南側の一角に堆積し、アバタ状を呈する土器が集中して出土し、白磁玉縁口縁碗、滑石製石鍋模倣土器が共伴している。

第144～145図に示した、第一・二期に分けてまとめた遺物の接合関係の出土状況では、第一期はP-26・Q-27、第二期ではQ-27・R-26に多い傾向が窺える。

この第一・二期の時期をもとに4基の土壙墓について述べる。

4区で平地住居址などの遺構群の下層から4体の埋葬人骨が検出された。3体が成人男性（1・2・4号土壙墓）で、1体は幼児（3号土壙墓）である。いずれも平面形が長方形や長楕円形に掘られた壙に埋葬されたもので、1・2号土壙墓で検出された2体が木棺に納めて葬られたと判断され、4号土壙墓から木棺の痕跡は検出されていないが、壙の形態は類似している。

成人男性は、仰臥屈葬の姿勢で頭位を南東に向けているが、幼児人骨は、成人と反対の北西に頭位を向け、伏臥屈葬の姿勢の体全体を押さえるように約30cm大の礫が置かれた特異な埋葬状態であった。人骨の残存状態は1・3号が2・4号に比して良好であった。松下孝幸氏の所見によると1号人骨の右腕は現在の人の倍ほどの太さをしているらしく、右腕を特に使用する仕事に従事していたと考えられ、本遺跡では、鍛冶が行われた遺跡であることからその関連が想起された^(註5)。

これらの4基の土壙墓は一定の区域に、しかも一方向に並んでいることから、偶然に埋葬されたとは考えにくく、この地域が一時期埋葬地として利用されたことが考えられた。

4基の土壙墓の所属する時期は、1号土壙墓の検出面は地山、2・4号土壙墓は第Ⅴ層、3号土壙墓は調査区南壁にかかって検出された第Ⅲ層eの遺構で、いずれの土壙墓にも第Ⅲ層は堆積しておらず、1・2・4号土壙墓には第Ⅲ層b・cの遺構が掘り込まれており、1号土壙墓は人骨の頭骸骨の左側部分を挟む第Ⅲ層bの4号土坑・その下位で暗黒褐色土が堆積する柱穴、2号土壙墓では土壙墓の縁にあたる部分や覆土の部分に第Ⅲ層cの柱穴が掘られており、このうちの3本は5号住居の柱穴プランにあたる。4号土壙墓には7号炉址の一部が重なって掘り込まれていた。

以上の検出状況から1～4号土壙墓は第三期の遺構と考えられた。

土壙墓の前後関係は1号土壙墓がもっとも古く、ついで2・4号土壙墓、3号と判断された。

砂鉄貯蔵穴は3基のうち、砂鉄がぎっしり詰まった状態が検出された第Ⅲ層eの遺構である1号砂鉄貯蔵穴も12世紀から13世紀の範疇にあると判断される。

次に、近世の農耕に伴うものと考えられる土地利用の状況が伺える遺構について述べる。調査区内で略南北方向に伸びる2段の柵状の区画を成す第二期の土留め状に石灰岩礫が積まれた1～4・6号石列が検出された。このうち2～4号石列の一部は、グスク時代から第Ⅰ層期まで流れていたと見られる小川跡状遺構の両側に沿って検出された。この石列が築かれたことによって第Ⅲ層の丘陵側から平地側への広がりほとんど途切れ、小川跡状遺構の南側では2号石列、北側は3号石列によって途切れていた。また、6号石列は第Ⅱ層下部にあたる第Ⅱ層fの土中から検出されており、2～4号石列よりも石灰岩礫の密度が低い石列である。

この6号石列が検出された第Ⅱ層下部にあたる第Ⅱ層d～gには、ヌノメカワニナが含まれており、グスク時代の間層である第Ⅳ層に類似した特徴をもつことから、この時期にも湿地があったと考えられる。

第Ⅰ層では、第Ⅰ層cで溝状遺構が検出され、この遺構は1号石列の位置に生じた段差に沿っており、この遺構の北西側には、グスク時代から第Ⅰ層期まで流れていたと見られる小川跡状遺構があり、調査区外の南西側に続くと見られるものである。この遺構は第Ⅴ・Ⅵ層を切って地山に達しており、これによって1号土壙墓の南東側壁の一部が失われており、この溝状遺構の部分では遺物包含層が攪乱された部分も見られた。第Ⅰ層a・bでは戦前の農耕に伴うものと考えられる段差が、小川跡状遺構につながる状況が見られた。

これまで述べてきたように、本遺跡の調査によって11世紀後半から13世紀を中心とするグスク時代の集落を彷彿させ、人々の生活が垣間見える多くの成果が得られた。

なお、第Ⅲ層 a～c の第Ⅳ層の堆積がない遺構集中部でのプランの把握について、さらなる検討の余地があり、鍛冶が行われていたことを示す状況が見られるものの鍛冶炉が検出されていないことなども含め、今後の課題としたい。

〈註〉

註1 當銘清乃ほか 2001『伊佐前原第一遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター

註2 黒住耐二氏の助言を頂いた。

註3 川島由次氏の所見による。付篇3参照。

註4 地球科学研究所の分析結果による。下記参照。

註5 松下孝幸氏の所見による。付篇1参照。

・炭素14年代測定結果

地球科学研究所で炭素14年代測定を行った結果、下記のように示された。

なお、資料の測定方法の詳細は p292 に示した。

炭素14年代測定結果報告

測定番号	試料名	試料種	^{14}C age (y BP)	$\delta^{13}C$ (permil)	補正 ^{14}C age (y BP)	暦年代
Beta- 117388	NO.10070@	charred material	1020 ± 50	-32.6	900 ± 50	交点 AD 1170 2SIGMA AD 1020 TO 1250 95%probability 1SIGMA AD 1040 TO 1215 68%probability
5号高床式建物址 柱穴 NO.10070						
整理番号 8536	測定方法	AMS	処理・調製・その他	acid-alkali-acid graphite		
Beta- 117389	S-28	charred material	750 ± 50	-26.4	730 ± 50	交点 AD 1285 2SIGMA AD 1225 TO 1310 AD 1355 TO 1385 95%probability 1SIGMA AD 1265 TO 1295 68%probability
S-28 第Ⅲ層 f (炭混じり)						
整理番号 8537	測定方法	Radiometric	処理・調製・その他	acid-alkali-acid Extended Counting benzene		
Beta- 117390	S-26	charred material	660 ± 60	-27.7	620 ± 60	交点 AD 1315,1345,1390 2SIGMA AD 1280 TO 1425 95%probability 1SIGMA AD 1295 TO 1410 68%probability
S-26 7号炉址 (4号土壌墓上部)						
整理番号 8538	測定方法	Radiometric	処理・調製・その他	acid-alkali-acid Extended Counting benzene		

* ^{14}C の半減期は5568年を用いた。誤差は±1sigma

〈第144図柱状模式図について〉

同図右側の柱状模式図は、資料整理の成果をもとに本遺跡の層序と遺構の関係と時期について示した。同図左側の柱状模式図は『後兼久原遺跡展』（中村 愿・與那覇政之ほか 1997年『後兼久原遺跡展』北谷町教育委員会）に掲載したもので、内容についての修正・加筆したものを比較できるように示した。

〈第145～147図と第51～60表〉

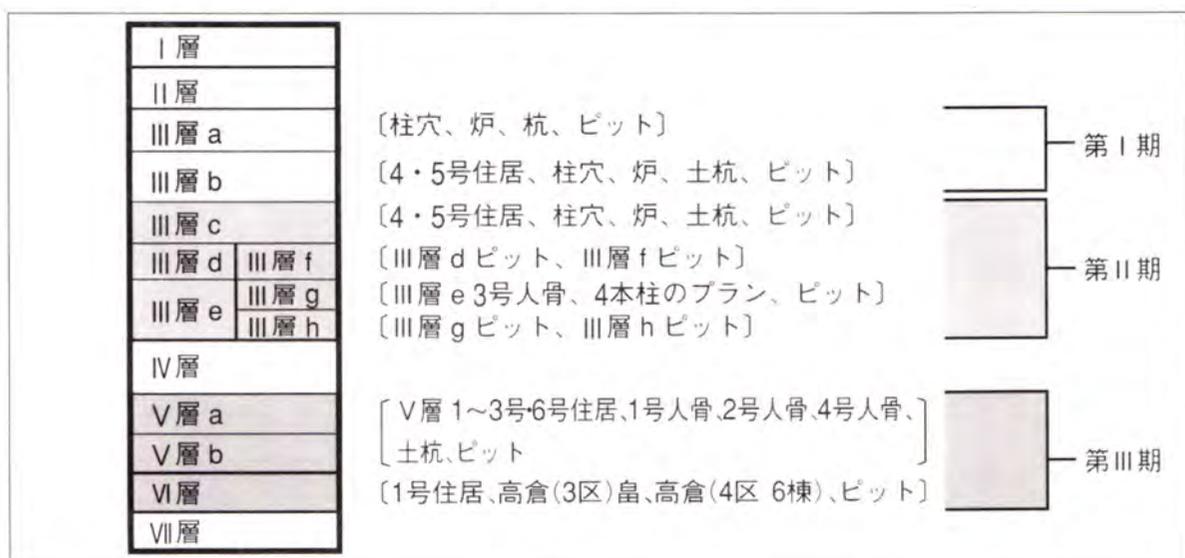
第144～146図は、第一から三期の出土遺物の主なものを、各期に分けた。遺物の接合関係である。第51～60表の遺物別のグリット・層序別出土量は、第145～147図との比較のためにここにまとめ、土器は第V章に示した。

尚、この接合を示す線の起点は便宜上出土したグリットを示すもので出土地点、ではない。

〈第51～60表〉

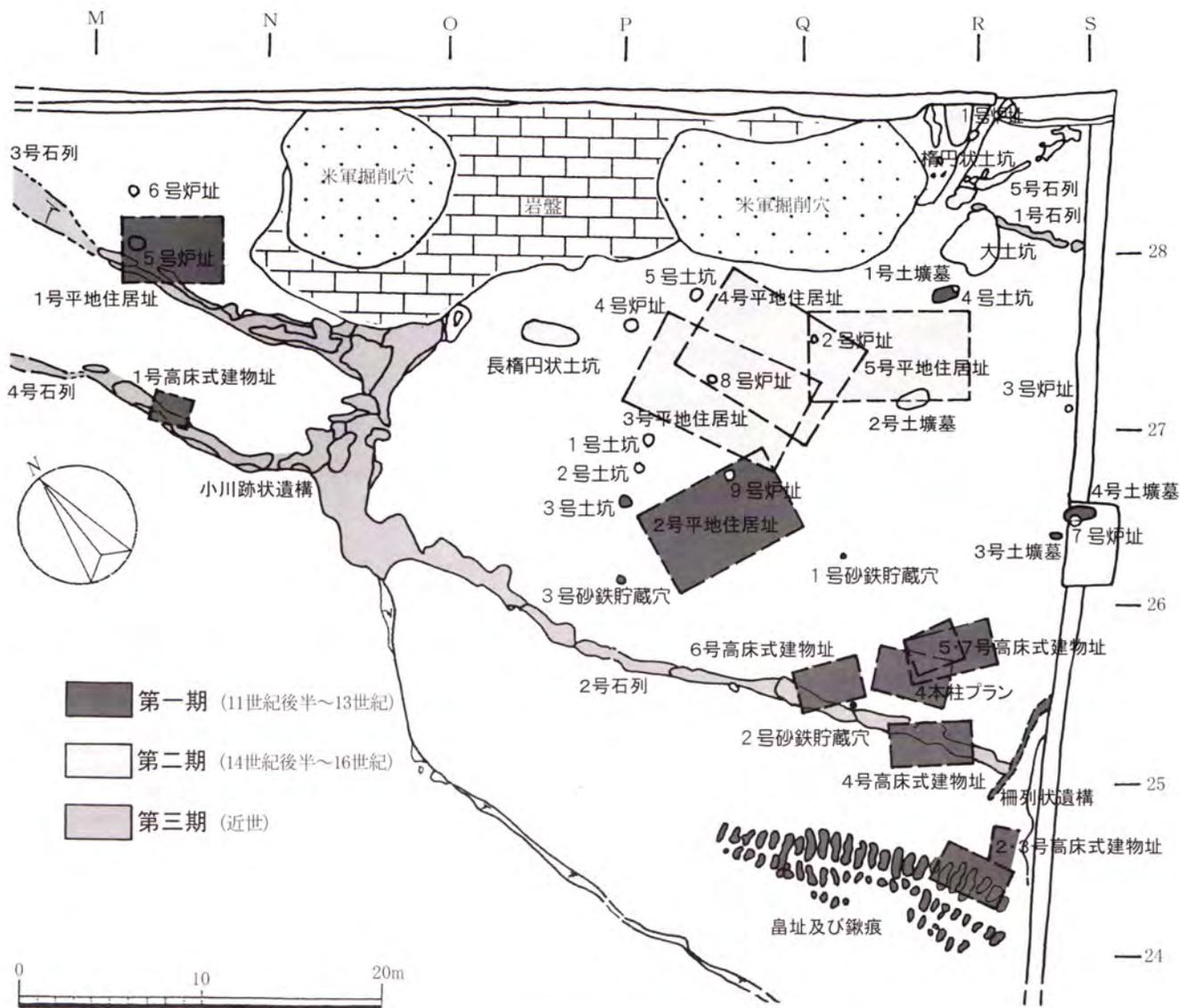
同表の層の項目にあるⅢ上は第Ⅲ層 a・b、Ⅲ下はS-28では第Ⅲ層 f～h、他のグリットでは第Ⅲ層 d・eである。

展示会パンフ掲載時の模式図（変更前）



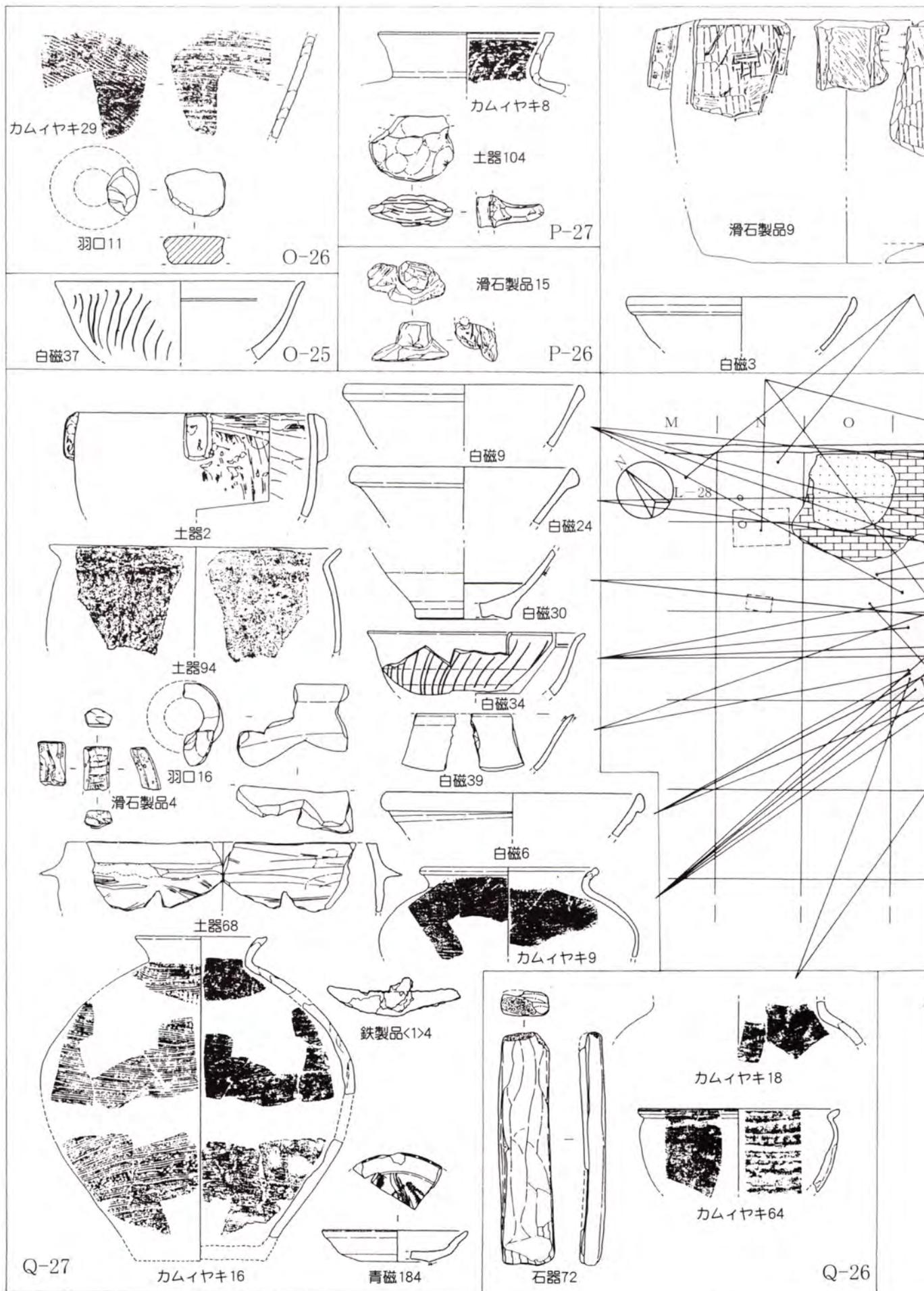
「住居」は「平地住居」、「高倉」は「高床式建物址」に名称を変更。

第144図 層序の柱状模式図

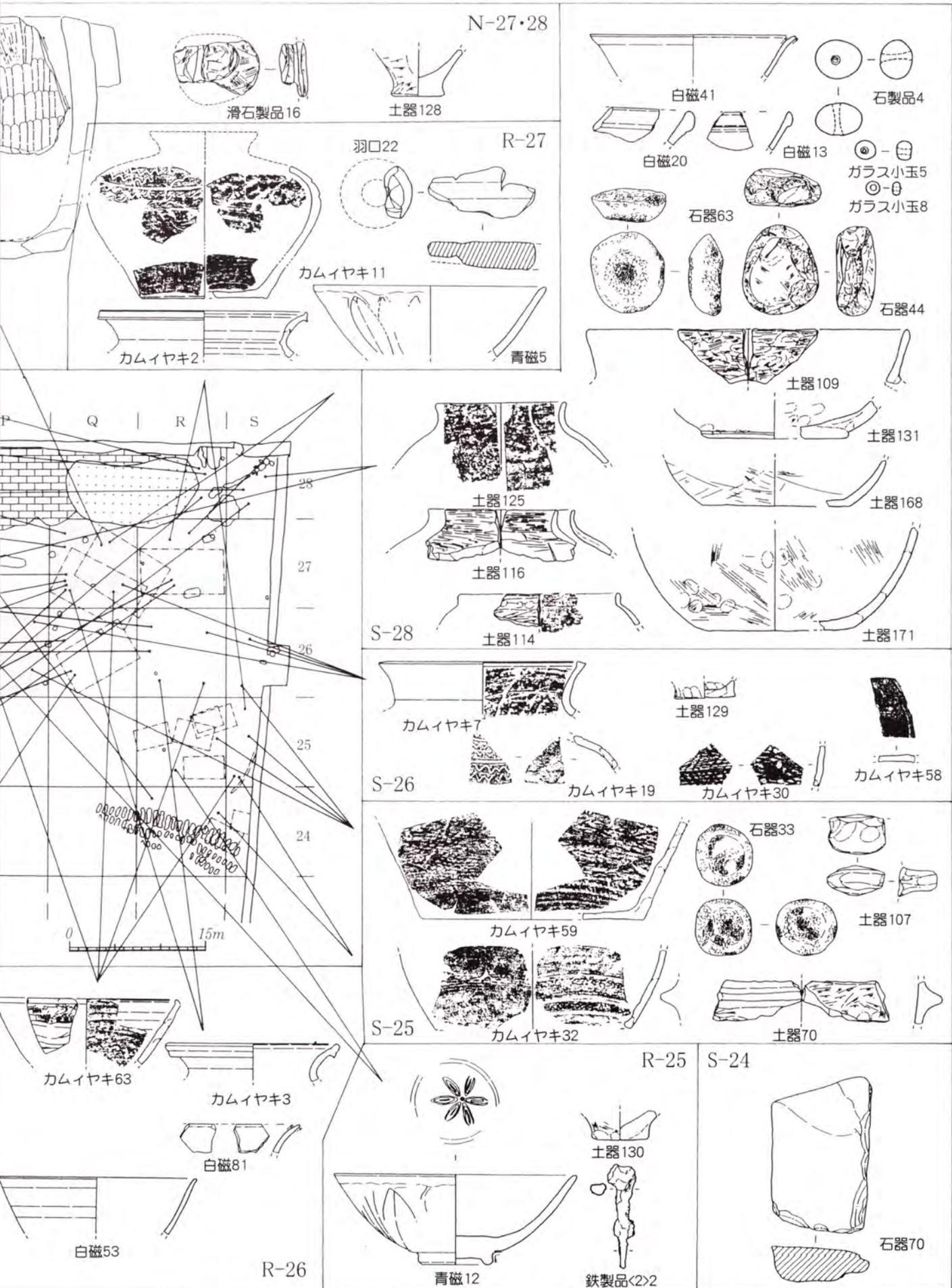


展示会パンフ掲載時の模式図 (変更後)

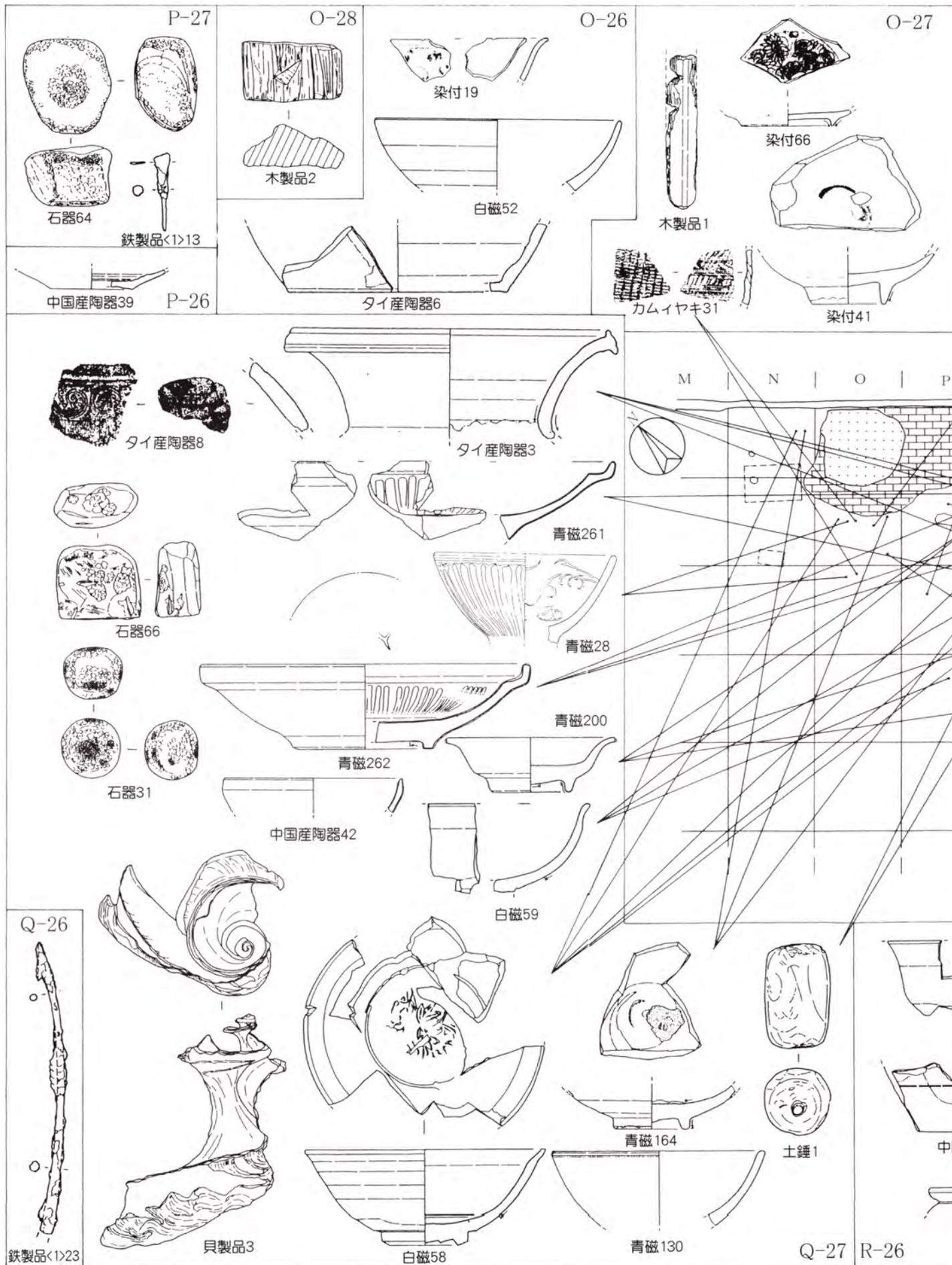
基本層序 (IV層がある 場合)	基本層序 (IV層が ない場合)	S-28 5号石列 南側	S-28 5号石列 北側	炭素C14年代 測定結果	
第I層	第I層	第I層	第I層		第三期: 近世 1号石列、溝状遺構 2~4・6号石列
第II層	第II層	第II層	第II層		
第III層a	第III層a	第III層a	第III層a		第二期: 14世紀後半 ~16世紀: 平地住居址(3・4・5号) 1・2号土坑、5号石列、炉址(1~4・7~9号)、 土坑(1・2・4・5号)、楕円状土坑、長楕円状土坑
第III層b	第III層b	第III層b	第III層b	S-26 7号炉址 660±50BP	
第III層c	第III層c	第III層c	橙黄褐色土 (整地土?)		第一期: 11世紀後半 ~13世紀 4本柱プラン、1号砂鉄貯蔵穴、3号土坑、 2・3・4号土墳墓 1・2号平地住居址、1~7号高床式建物 址、2・3号砂鉄貯蔵穴、1号土墳墓、畠址、 鋤痕、柵列状遺構
第III層d	第III層d	第III層d	第III層d		
第III層e	第III層e	第III層e	第III層e		
第IV層	第V層	第III層f	第V層	S-28 IIIf 750±50BP	
第V層	第VI層	第III層g	第VI層	5号高床式建物址 1002±50BP	
第VI層		第III層h			
地山	地山	地山	地山		



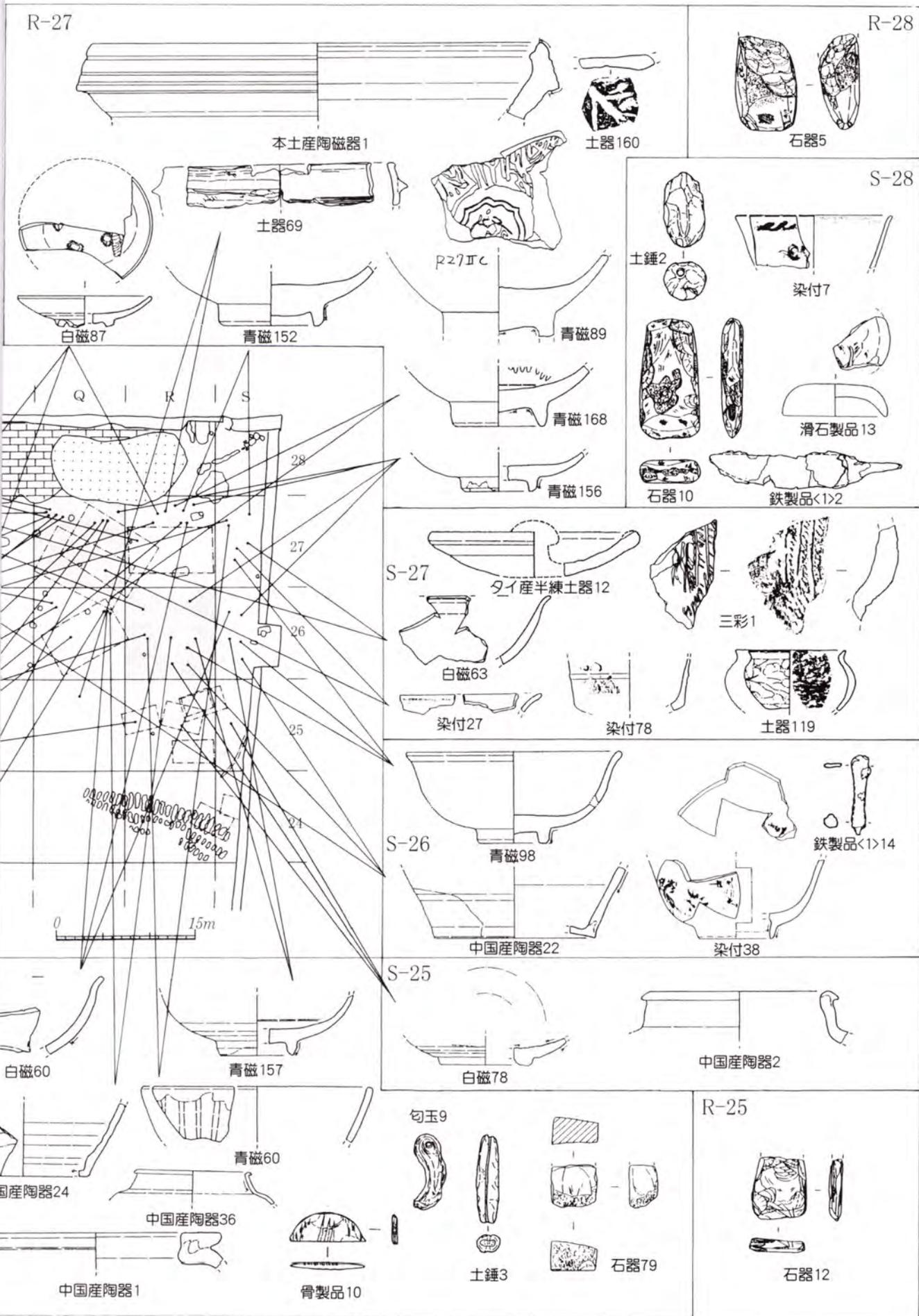
第145図 第一期（11世紀後半～13世紀）の出土遺物



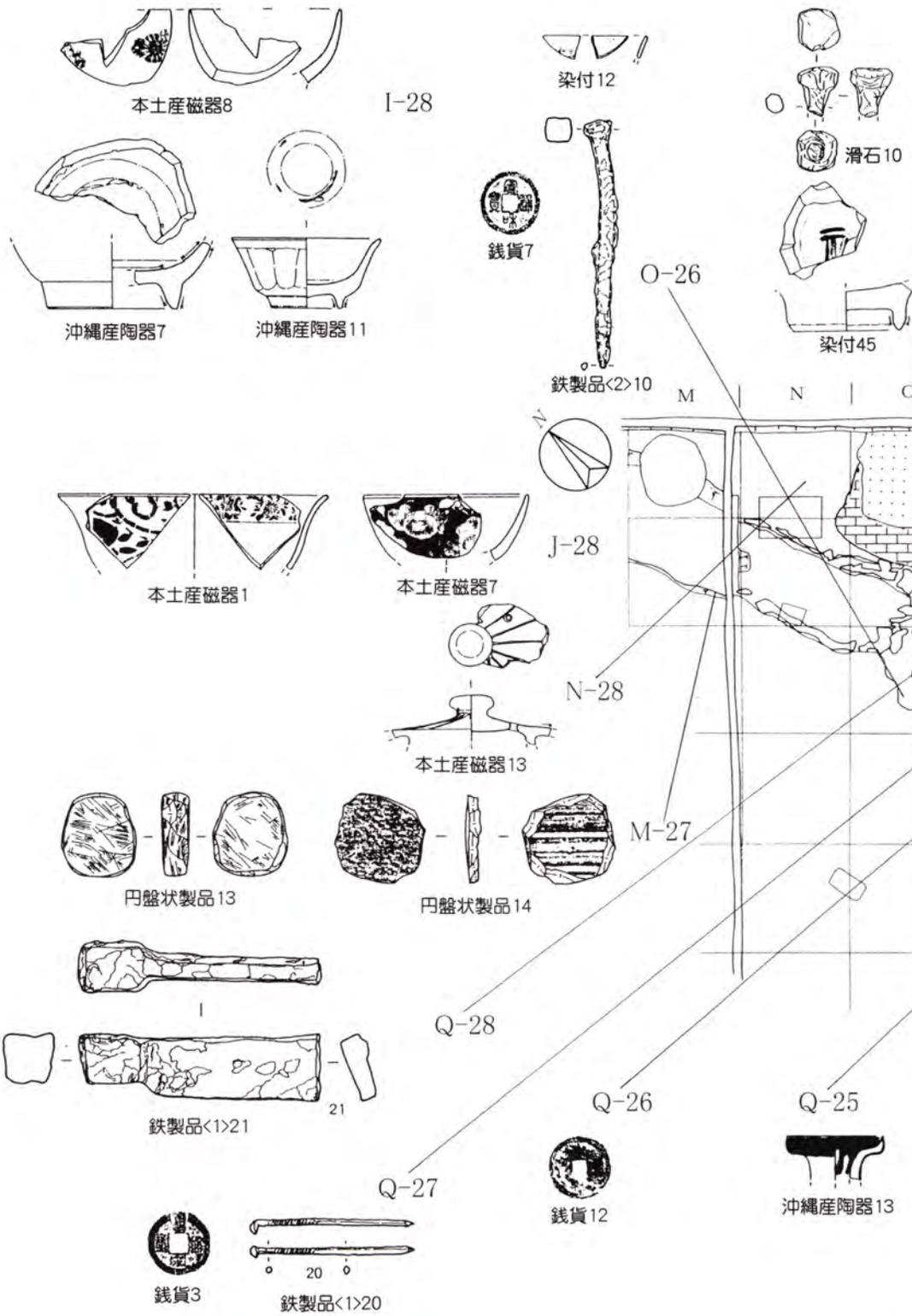
<凡例> 図中の番号は、遺物の種類、遺物番号を表す。遺物番号は観察一覧、図、図版番号と一致する。出土地は各々の遺物の観察一覧を参考のこと。接合の点数の多いグリッドに網掛をした。



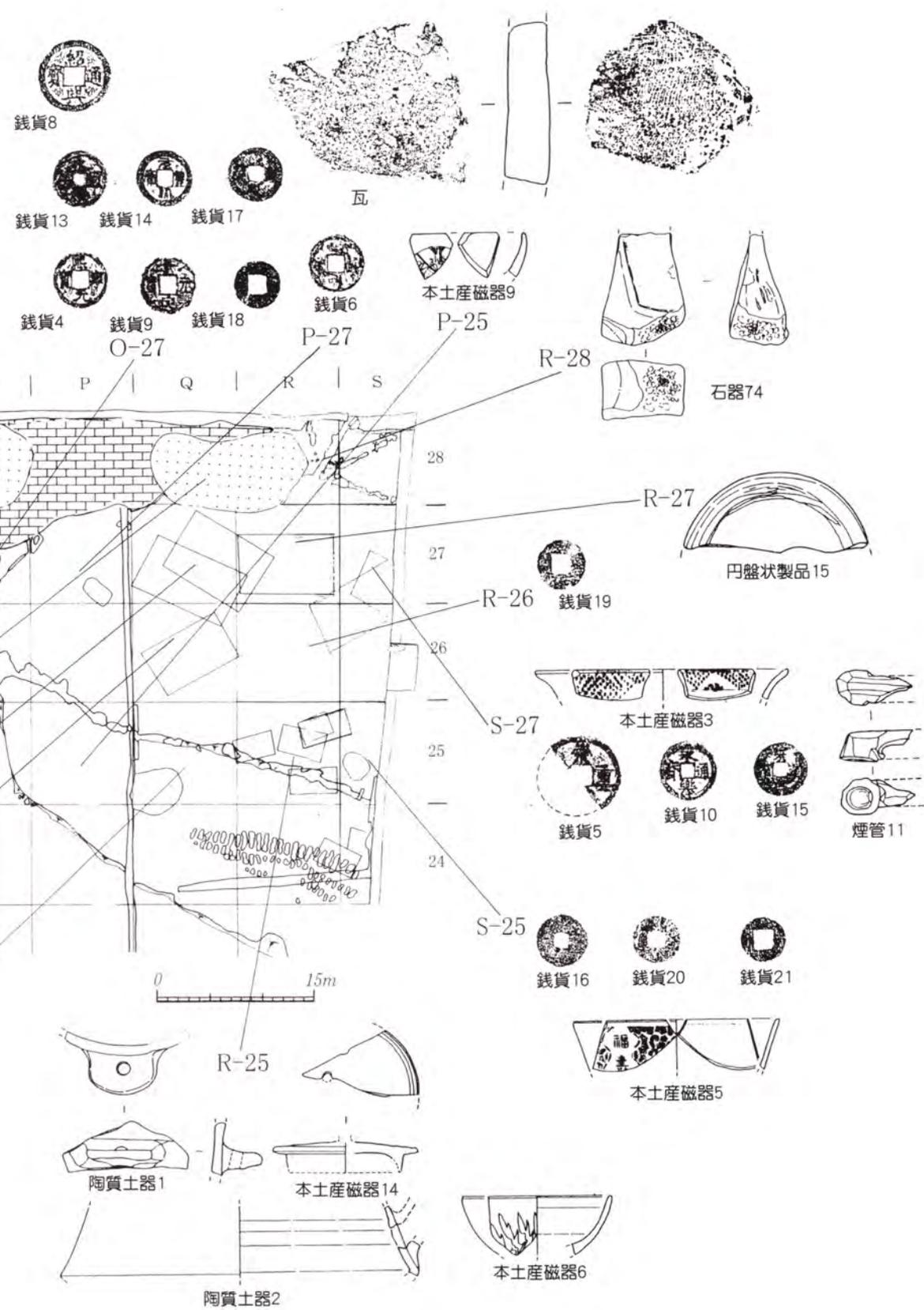
第146図 第二期（14世紀後半～15、16世紀）の出土遺物



<凡例> 図中の番号は、遺物の種類、遺物番号を表す。遺物番号は観察一覧、図、図版番号と一致する。出土地は各々の遺物の観察一覧を参考のこと。接合の点数の多いグリッドに網をした。



第147図 第三期（17世紀以降）の出土遺物



<凡例> 図中の番号は、遺物の種類と遺物番号を表す。遺物番号は観察一覧、図、図版番号と一致する。出土地は各々の遺物の観察一覧を参考のこと。

第52表 グリット・層位別遺物出土量 (白磁)

H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		層位	グリット	合計	
12世紀代	13中 14前	14 15中	15 16後	12世紀代	13中 14前	14 15中	15 16後	12世紀代	13中 14前	14 15中	15 16後	12世紀代	13中 14前	14 15中	15 16後	12世紀代	13中 14前	14 15中	15 16後	12世紀代	13中 14前	14 15中	15 16後				12世紀代
				1								不			1		1		1		2	1	1	II	9		
								1															III上	26			
																							III中	0			
																							III下	28			
																							IV	7			
																							V	1			
																							VI	5			
																							PI	3			
																							II	8			
G不明: III上																							III上	132			
13c~14c-1点																							III中	9			
15c-2点																							III下	27			
不明: 13c~14c-1点																							IV	3			
14c~15c-1点																							V	1			
15c-5点																							VI	11			
15c~16c-4点																							PI	1			
																							II	11			
																							III上	36			
																							III中	36			
																							III下	26			
																							IV	13			
																							V	9			
																							VI	5			
																							PI	4			
																							II	2			
																							III上	6			
																							III中	8			
																							III下	25			
																							IV	3			
																							V	7			
																							VI	5			
																							PI	2			
																							II	2			
																							III上	24			
																							III中	1			
																							III下	2			
																							IV	23			
																							V	7			
																							VI	1			
																							PI	2			
																							II	22			
																							III上	23			
																							III中	7			
																							III下	2			
																							IV	15			
																							V	13			
																							VI	6			
																							PI	2			
																							II	15			
																							III上	76			
																							III中	9			
																							III下	12			
																							IV	2			
																							V	5			
																							VI	11			
																							PI	22			
																							II	15			
																							III上	76			
																							III中	9			
																							III下	12			
																							IV	2			
																							V	5			
																							VI	11			
																							PI	22			
																							II	15			
																							III上	76			
																							III中	9			
																							III下	12			
																							IV	2			
																							V	5			
																							VI	11			

P-27 表1 15c~16c

R-27 P1 15c

第53表 グリット・層位別遺物出土量 (青磁碗)

H 12~13世紀	I 12~13世紀	J 13~14世紀	K 14~15世紀	L 15~16世紀	M 16世紀	N 12~13世紀	O 13~14世紀	P 14~15世紀	Q 15~16世紀	R 12~13世紀	S 13~14世紀	層位	グリット	合計		
															12世紀	13世紀
	1	2				1			1		12 6	5 3 18 2	II		51	
		1				1 1 1			1		4 9 25 3	6 12 103 13	III上	28	176	
	1 1		1			1 1 2						1	III C		5	
													III下		17	
												1 5	IV		2	
												7	V		1	
													VI			
		1	1		2	3 2 1	1 3 1 13 2	1 1	2 2		2 2	1 5 3	II		49	
							1 2	1 3 19 6	8 34 127 43	9 19 165 33	1 14 84 142 32	III上	27	743		
								5	2 17 2	2 2 14 1	1 3 6 3	III C		62		
						1 1 2 1	2 1	2 5					III下		15	
						2 2							IV		4	
						1	3 2 2		1 1	9 1			V		20	
													VI			
						1	1 1 9	1 3 1	1	2	2	1	II		21	
							2	1 2 2	2 8 33 3	9 27 120 28	7 10 77 14	III上		345		
							1	2 1	5 1 30	2 8 64 13	3 18 1	III C		149		
									4	1 2 1	6 11	III下	26	30		
								1 4	2			IV		8		
								2 1 1	1	14 9 1	1 2	V		28		
										2 1	2	VI		5		
							1	2	1 2	1 2 2	1 1	II		13		
												III上		5		
												III C		58		
								1	3 3	1 1 31 5	13 1	III下	25	24		
									4 1	2 1 6	1 1 1 6	IV		7		
						1			1	1 2	3	V		3		
										1		VI		2		
											1 1	II		3		
												III上				
												III C				
												III下	24			
												IV				
												V				
												VI				
						N-28 : 表15c 1点			O-27 : 不15世紀2点	R-27 : 人骨15世紀	S-25 : 不16世紀1点	II				
									Q-28 : 攪13世紀2点	P 15世紀2点	S-28 : 不明P-14世紀	III上				
									14世紀1点	R-28 : 攪15世紀1点	2点、15世紀1点	III C				
									16世紀1点	16世紀3点	S-27 : P-15世紀3点	IV				
										大土坑12世紀1点	表14世紀2点	V				
										14世紀1点	15世紀3点	VI				
												II				
												III上				
												III C				
												IV				
												V				
												VI				
												II				
												III上				
												III C				
												IV				
												V				
												VI				
												II				
												III上				
												III C				
												IV				
												V				
												VI				
												II				
												III上				
												III C				
												IV				
												V				
												VI				

1 1 2 2 1 2 1 1 2 1 2 6 12 4 2 9 4 37 4 1 6 6 41 12 20 46 226 54 29 87 468 96 4 42 123 420 71

1889

第54表 グリット・層位別遺物出土量 (青磁皿)

H					I					J					K					L					M					N					O					P					Q					R					S					層	グリット	合計
12 13世紀	13 14世紀	14 15世紀	15 16世紀	16世紀	12 13世紀	13 14世紀	14 15世紀	15 16世紀	16世紀	12 13世紀	13 14世紀	14 15世紀	15 16世紀	16世紀	12 13世紀	13 14世紀	14 15世紀	15 16世紀	16世紀	12 13世紀	13 14世紀	14 15世紀	15 16世紀	16世紀	12 13世紀	13 14世紀	14 15世紀	15 16世紀	16世紀	12 13世紀	13 14世紀	14 15世紀	15 16世紀	16世紀	12 13世紀	13 14世紀	14 15世紀	15 16世紀	16世紀	12 13世紀	13 14世紀	14 15世紀	15 16世紀	16世紀																		
										2					1																																														II	13
																																														III上	15															
																																									III中	0																				
																																									III下	28																				
																																									IV	1																				
																																									V	1																				
																																									VI	1																				
																																									II	10																				
																																									III上	109																				
																																									III中	4																				
																																									III下	27																				
																																									IV	1																				
																																									V	1																				
																																									VI	1																				
																																									II	38																				
																																									III上	15																				
																																									III中	15																				
																																									III下	26																				
																																									IV	7																				
																																									V	1																				
																																									VI	1																				
																																									II	1																				
																																									III上	1																				
																																									III中	4																				
																																									III下	25																				
																																									IV	1																				
																																									V	1																				
																																									VI	1																				
																																									II	1																				
																																									III上	24																				
																																									III中	1																				
																																									III下	23																				
																																									IV	1																				
																																									V	1																				
																																									VI	1																				
																																									II	22																				
																																									III上	22																				
																																									III中	1																				
																																									III下	1																				
																																									IV	1																				
																																									V	1																				
																																									VI	1																				

第56表 グリット・層位別遺物出土量（染付）

H				I				J				K				L				M				N				O				P				Q				R				S				層位	グリット	合計																																													
14 15世紀	15 16世紀	16 17世紀	18世紀																																																																																												
												1				1																2 3				8				II	28	3	4 11																																																				
																				1												1				8				III上																																																							
																																3				1				22 3				IIIc																																																			
																																				3				2				26 3				III下																																															
																																								3				1				33				IV																																											
																																								3				2				26 3				V																																											
																																												3				1				6 1				VI																																							
																																																5				1				12				II	26	3	6 43																																
																																												1				1				19				III上																																							
																																																1				1				1				IIIc																																			
																																																				1				1				1				III下																															
																																																				1				1				1				IV																															
																																																				1				1				1				V																															
																																																								1				1				2				VI																											
																																																												1				1				19				II	25	2	2																				
																																																				1				1				1				III上																															
																																																								1				1				1				IIIc																											
																																																												1				1				1				III下																							
																																																												1				1				1				IV																							
																																																																1				1				1				V																			
																																																																				1				1				1				VI															
																																																																												1				1				2				II	23	2	2				
																																																																				1				1				1				III上															
																																																																				1				1				1				IIIc															
																																																																				1				1				1				III下															
																																																																				1				1				1				IV															
																																																																								1				1				1				V											
																																																																												1				1				1				VI							
																																																																																1				1				1				II	22	2	2
																																																																								1				1				1				III上											
																																																																								1				1				1				IIIc											
																																																																								1				1				1				III下											
																																																																								1				1				1				IV											
																																																																								1				1				1				V											
																																																																								1				1				1				VI											

・N-28表16世紀2点 ・3区表16世紀1点 ・3区表15世紀1点 ・Q-28II層年不1点 ・Q-27Do t 16世紀1点
 ・R-27不1点 ・R-27P i t 16世紀1点 ・R-28欄1点
 ・R-28大土坑16世紀1点 ・R-28表16世紀1点
 ・S-28大土坑16世紀1点 ・不16世紀8点 ・不17世紀1点 ・不18世紀1点 ・不1点 表16世紀2点

第58表 グリット・層位別遺物出土量 (羽口・金属製品・鉄滓)

H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		層	グリット	合計羽口	合計鉄製品	合計鉄・碗滓
板状	丸釘	II																										
													1			1												

放射性炭素年代測定結果報告書

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

14C age (y BP) : 14C 年代測定値
試料の 14C/12C 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。
半減期として5568年を用いた。

補正 14C age (y BP) : 補正 14C 年代値
試料の炭素安定同位体比(13C/12C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
14C/12C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。

δ 13C (permil) : 試料の測定 14C/12C 比を補正するための 13C/12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)
で表現する。

$$\delta 13C (\text{‰}) = \frac{(13C/12C)[\text{試料}] - (13C/12C)[\text{標準}]}{(13C/12C)[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、13C/12C [標準] = 0.0112372である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 14C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の詳細な測定値により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。(Stuiver et al,1993 ; Vogel et al,1993 ; Talma and Vogel,1993)
ただし、この補正は約 10,000 y BP より古い試料には適用できない。

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸 - アルカリ - 酸洗浄
acid washes : 酸洗浄
acid etch : 酸によるエッチング

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出

Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

graphite : AMS測定の際、最終的に試料を石墨に調製する
benzene : Radiometricによる測定の際、最終的に試料をベンゼンに調製する

分析機関 : BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami, FL33155, U.S.A

版 圖



図版1 上：遺跡遠景（南東より）
中：遺跡遠景（東より）
下：現況（庁舎は写真中央）



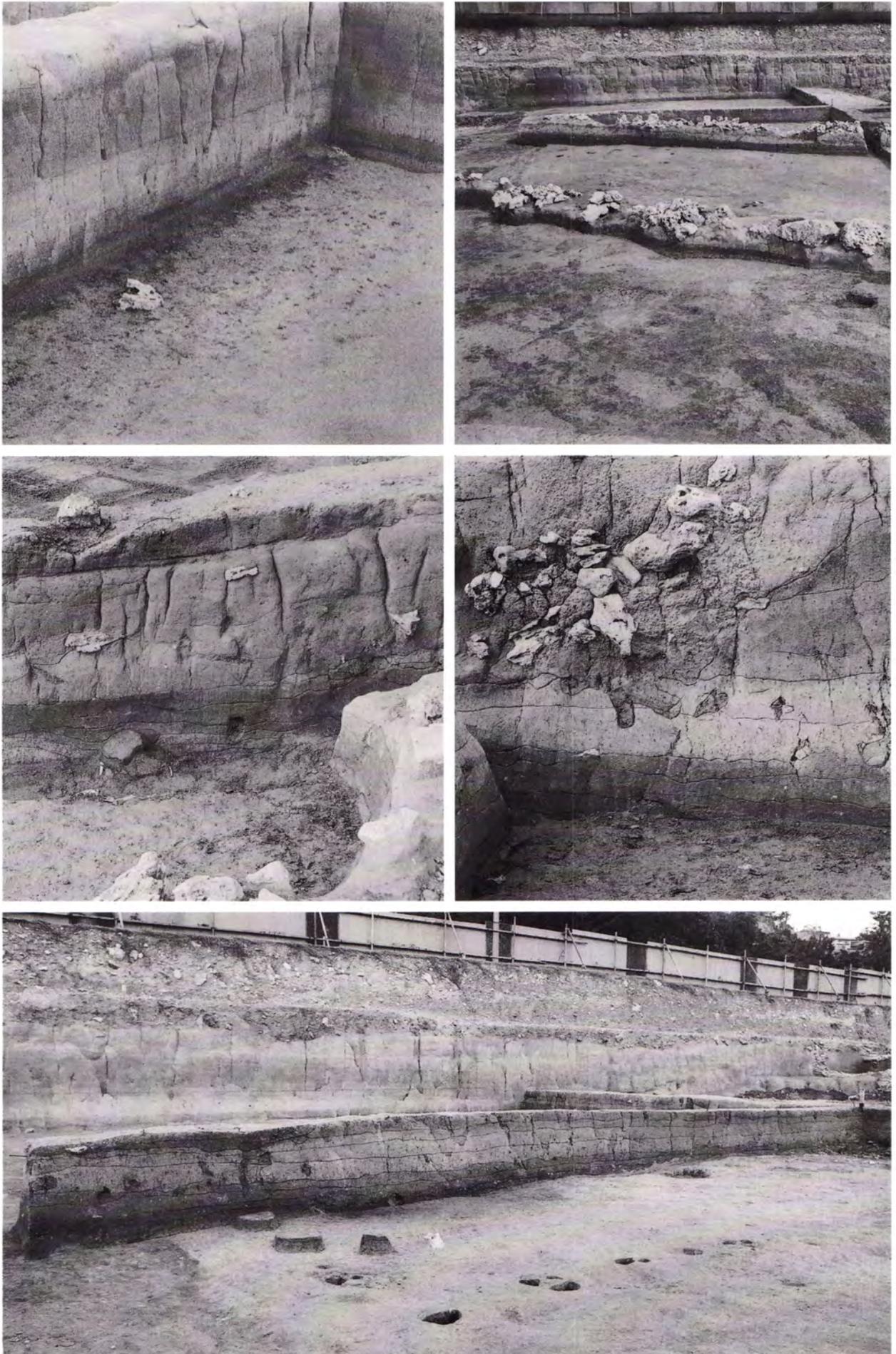
図版2 上：1区東壁（H～J）6号石列検出状況
 中左：I-28東壁 中右：No.1畦と1区の6号石列接点部（27ライン）
 下左：1区調査区西壁（G-27） 下右：No.1畦2号石列部（28ライン）



図版3 上：2区東壁（K～M）2号石列
 中左：No.1畦と調査区東壁の接点（K-28） 中右：調査区東壁（Lライン）
 下：1・2区東壁・No.3畦の第IV層堆積状況（壁面下部の白色）



図版4 上：3区の2・3号石列検出状況（左奥が3号、中央に小川跡状遺構。西より）
 中：2号・3号石列（奥が3号、手前が2号）小川跡状遺構（右端）
 下：3区の石列検出状況（右側奥は、岩盤。南西側より）



図版5 上左：No.2畦と調査区東壁の接点（N-28） 上右：2号石列（手前）、3号石列（後方）
 中左：No.2畦と2号石列の接点（N-27北壁） 中右：No.2畦と3号石列の接点（N-28北壁）
 下：N-27東壁（1号平地住居址上の畦、手前は検出中の柱穴）

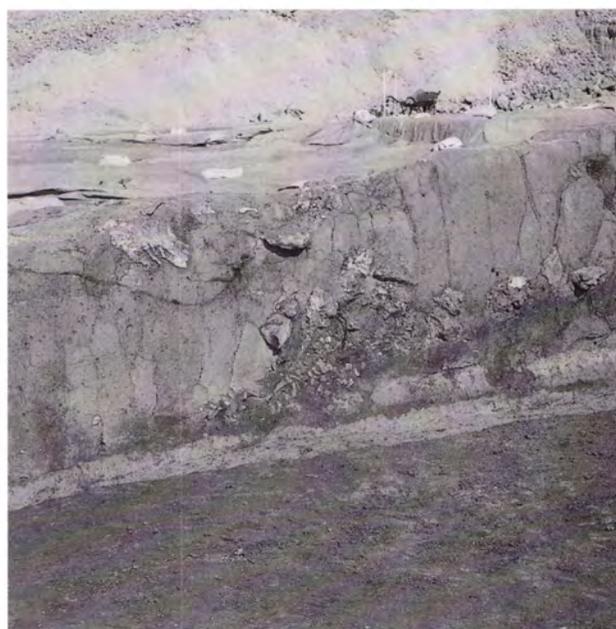
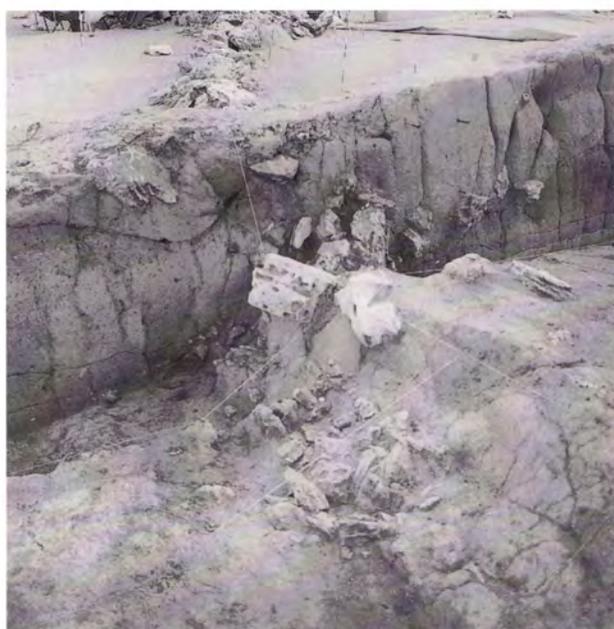


図版6 上：4区の2号石列検出状況（南西より）

中：2号石列の南壁（25ライン）

下左：2号石列検出状況

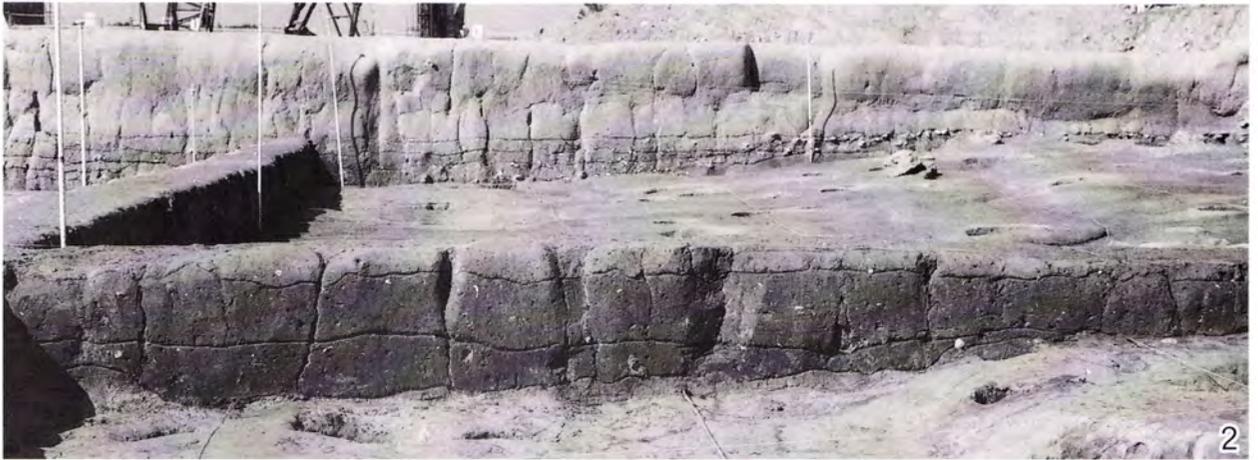
下右：2号石列の南壁（25ライン）



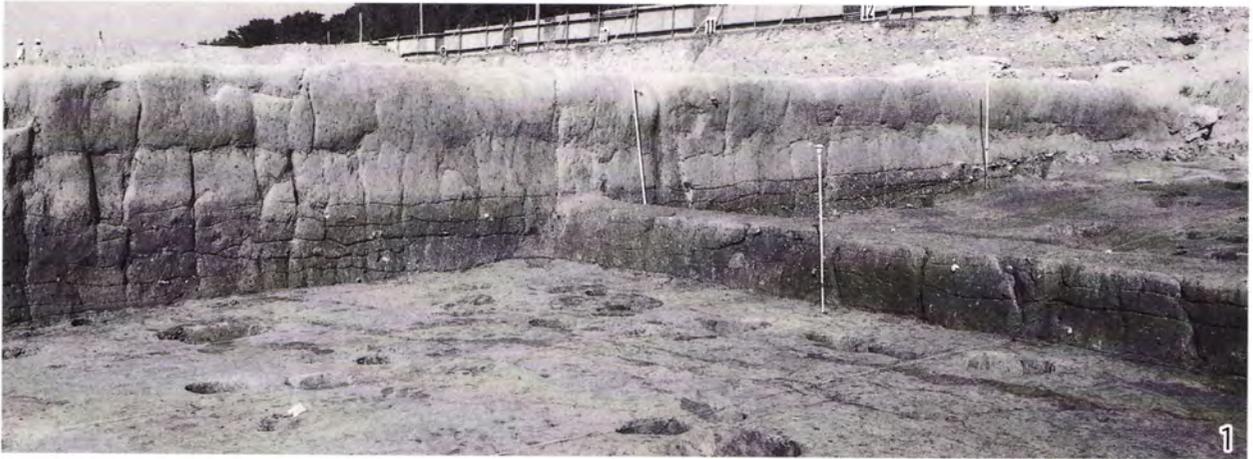
図版7 上：No.3畦（N-25側から見る。グリット内は第Ⅲ層d上面）
 中：No.3畦（2号石列）・Q-25東壁（グリット内は地山面）
 下左：No.3畦の2号石列（検出時） 下右：No.3畦の2号石列



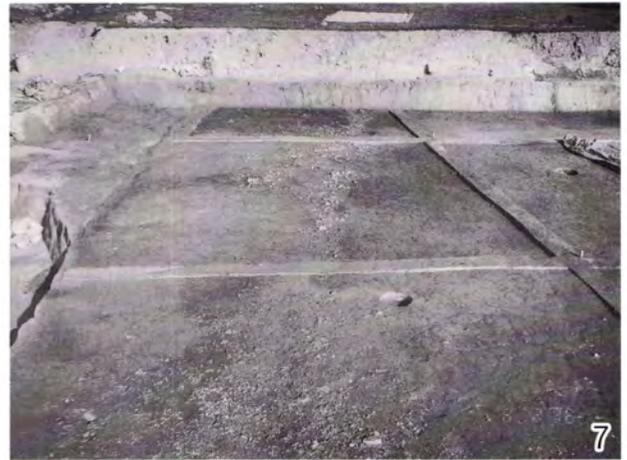
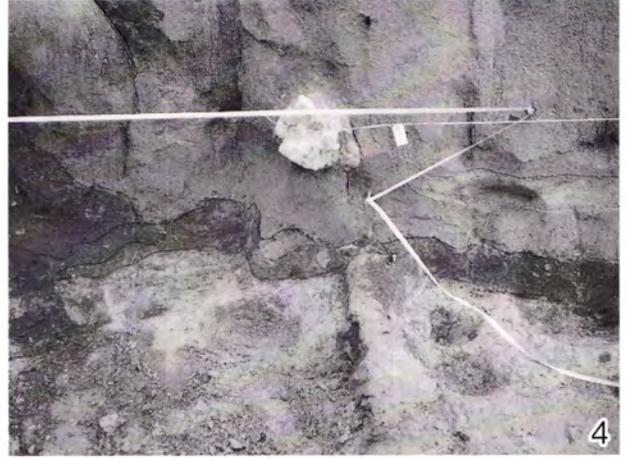
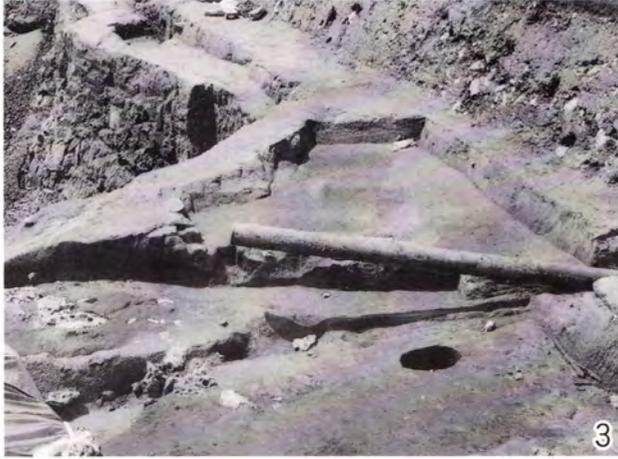
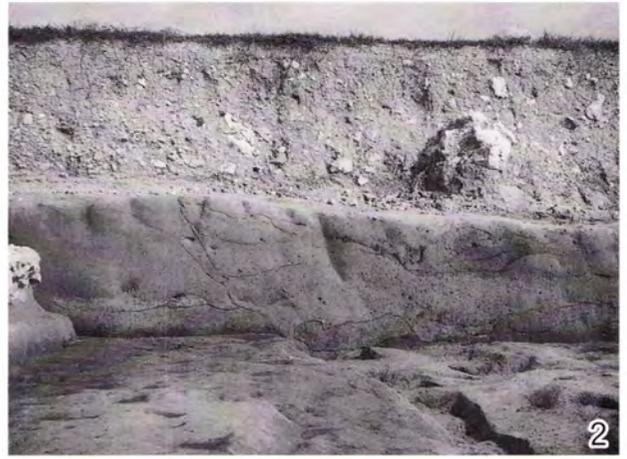
図版8 上：R-25北壁（4号高床式建物址柱穴検出時、手前の黒色部）
 中：R-25東壁（5号高床式建物址柱穴検出時、手前の黒色部）、うかせた柱穴は4本柱プラン
 下：R-27北壁



図版9 1 : R-27北壁
 2 : R-27北壁 (西側の地山落ち込み部)
 3 : S-26北壁
 4 : S-25北壁 (取り上げ後、右下は試掘溝)



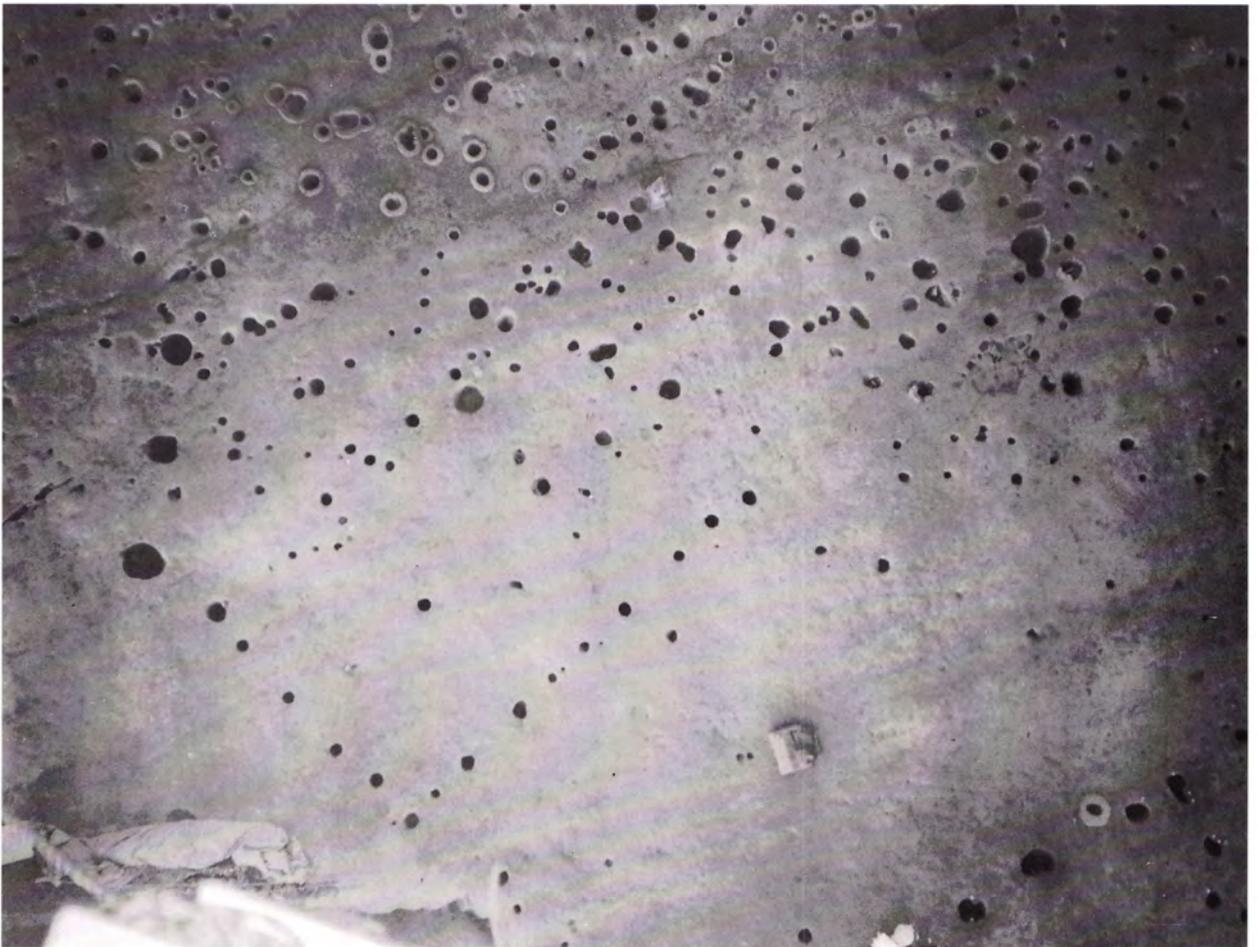
図版10 1：Q-27北壁
 2：Q-27東壁（畦の最下は第V層。）
 3：R-27東壁（畦の最下は第V層。）
 4：S-26東壁



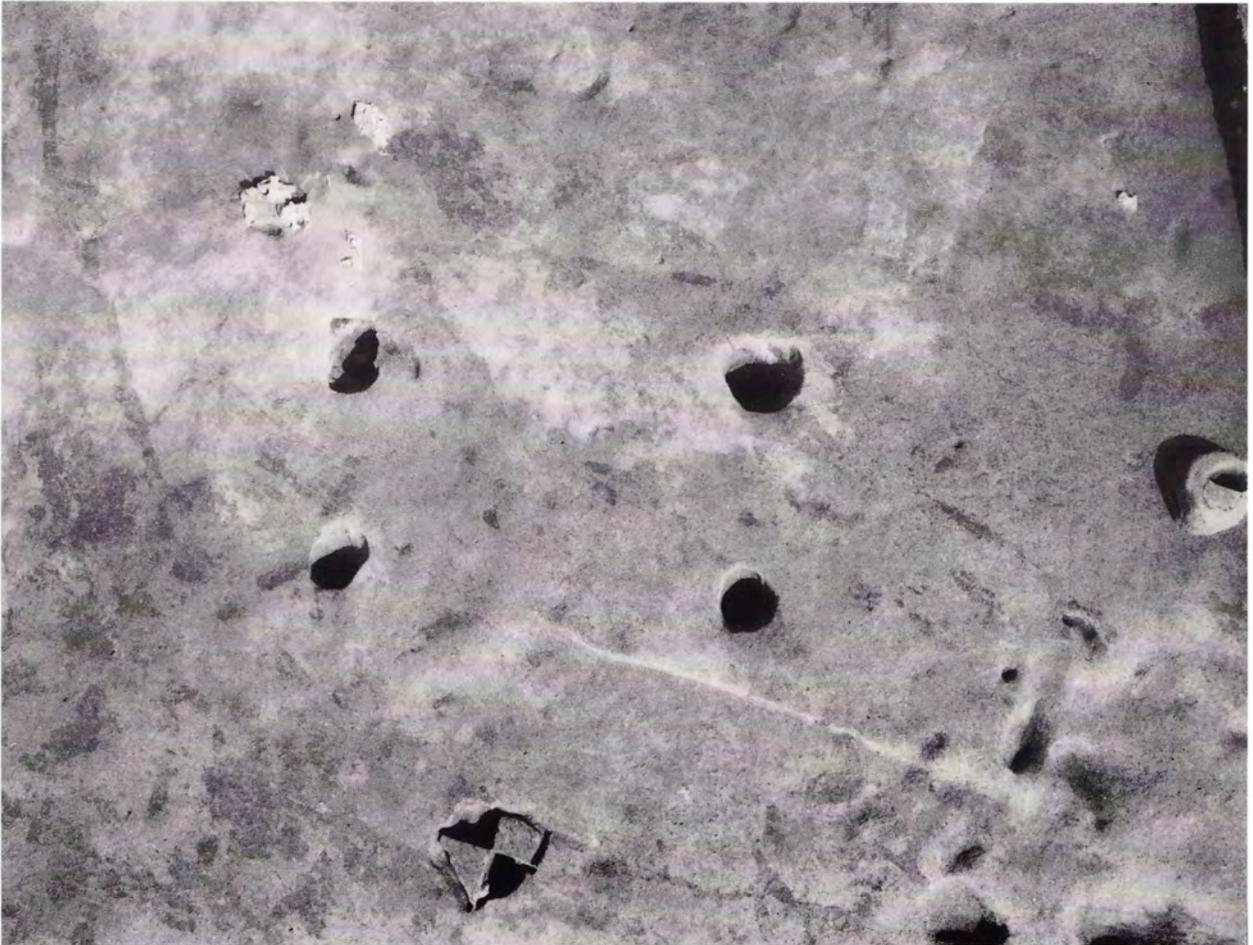
図版11 1 : 1号石列 (S-28) 2 : 1号石列南側部の層序 (S-27南壁)
 3 : 1号石列背後に流れ込むⅡ層 (R-28) 4 : S-28南壁
 5 : グスク期の造成部堆積 (R-28・地山上はⅥ層。米軍掘削穴の南側面)
 6 : Q・R-27の堆積 (米軍掘削穴の西側面) 7 : 貝層の広がり (Q・R・S-27)



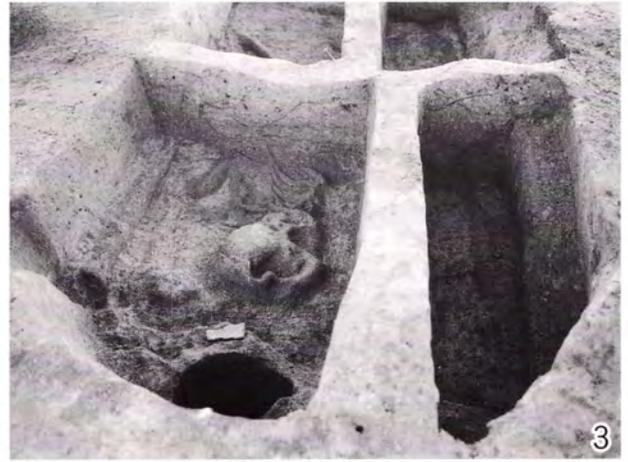
図版12 上：5号石列・楕円状土坑（左奥）の検出状況
下：R・S-27・S-28の検出状況



図版13 上：R・S-26・27の柱穴群検出状況
下：2号平地住居址の検出状況（R-26）



図版14 上：1号平地住居址（西側より）
下：1号高床式建物址（西側より）



図版15 1：1・2号土壙墓検出状況

2：1号土壙墓と人骨頭部を扶る4号土坑

4：1号土壙墓扶られた頭蓋骨

6：1号土壙墓畦

3：2号土壙墓横断面

5：2号土壙墓畦南側面

7：2号土壙墓畦東側面



図版16 1：3・4号土墳墓検出状況（3号は中央、4号は左）

2：3号土墳墓

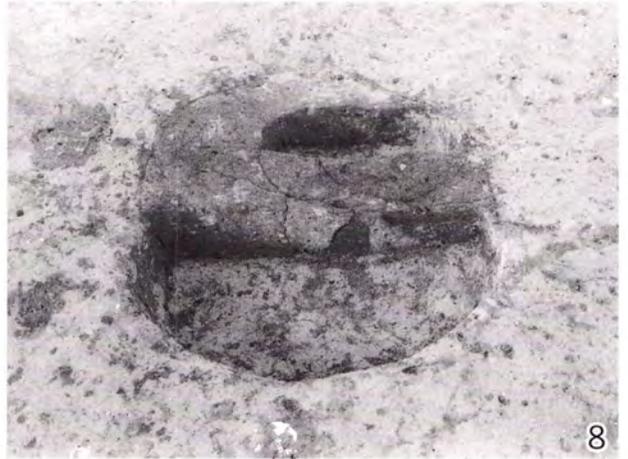
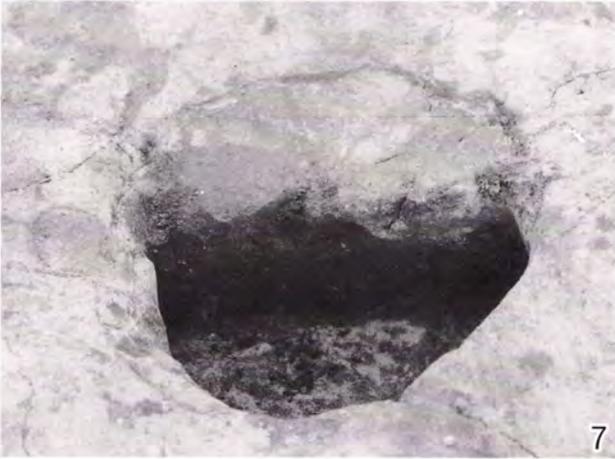
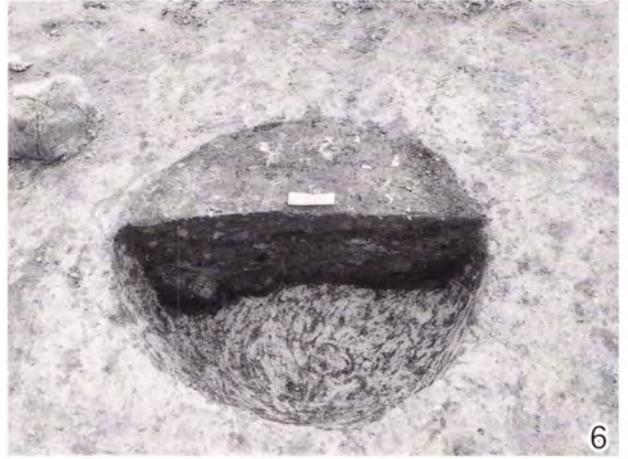
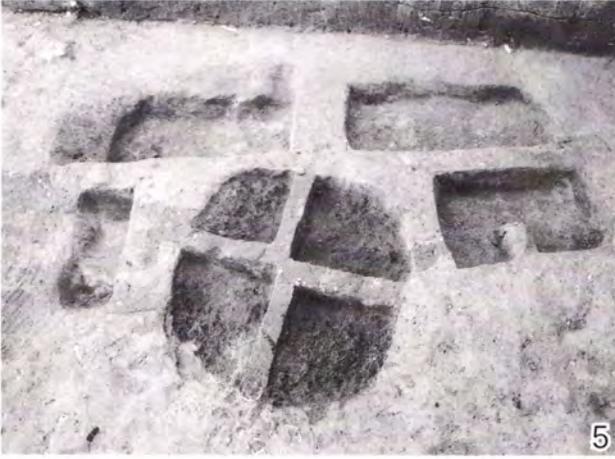
4：3号土墳墓両足上の石灰岩礫除去後

6：3号土墳墓楕円形の微粒砂岩礫除去後

3：4号土墳墓と7号炉址

5：4号土墳墓畦西側面

7：4号土墳墓畦南側面



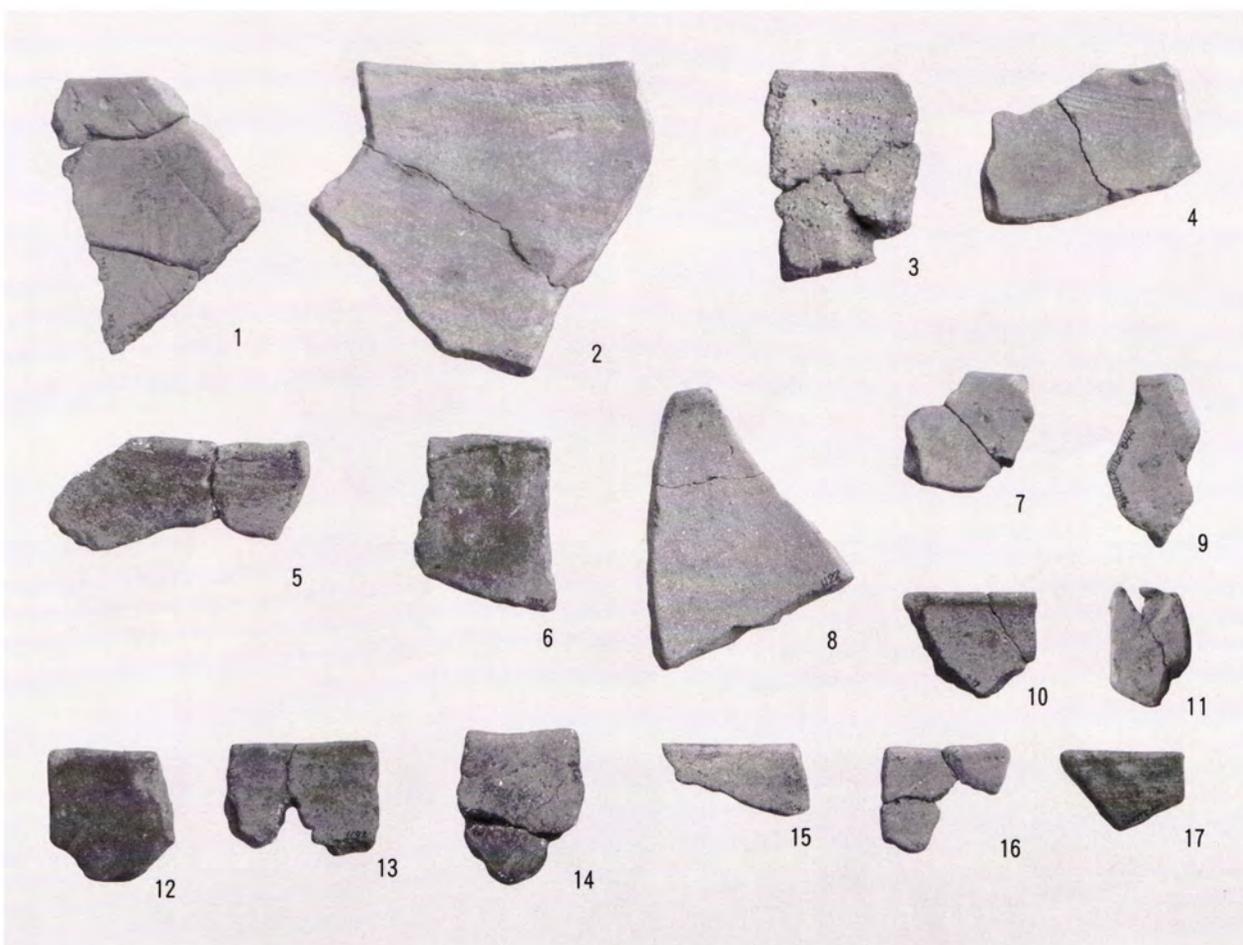
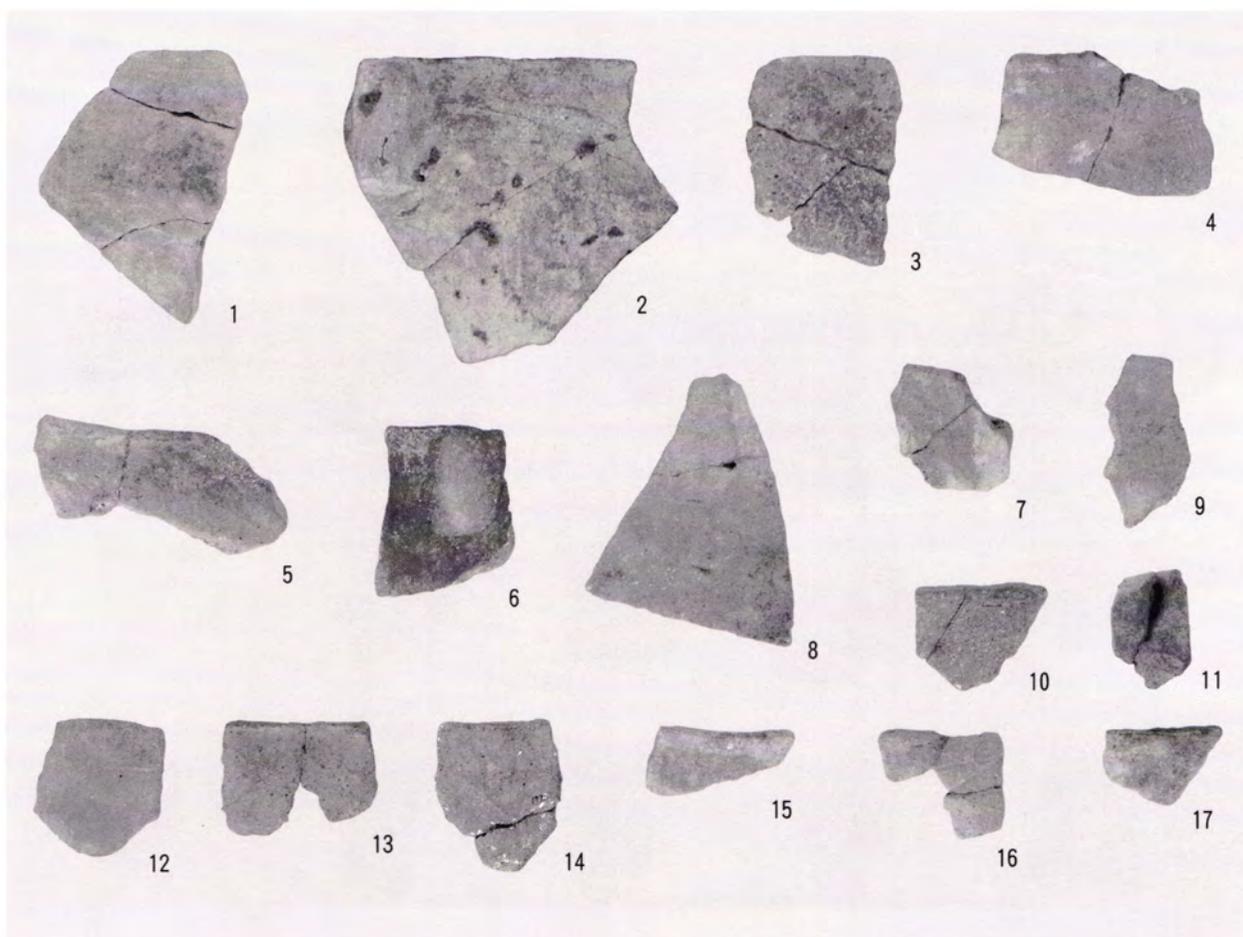
図版17 1：1号炉址
 3：3号炉址
 5：7号炉址と4号土壙墓
 7：1号砂鉄貯蔵穴

2：2号炉址
 4：4号炉址
 6：9号炉址
 8：3号砂鉄貯蔵穴

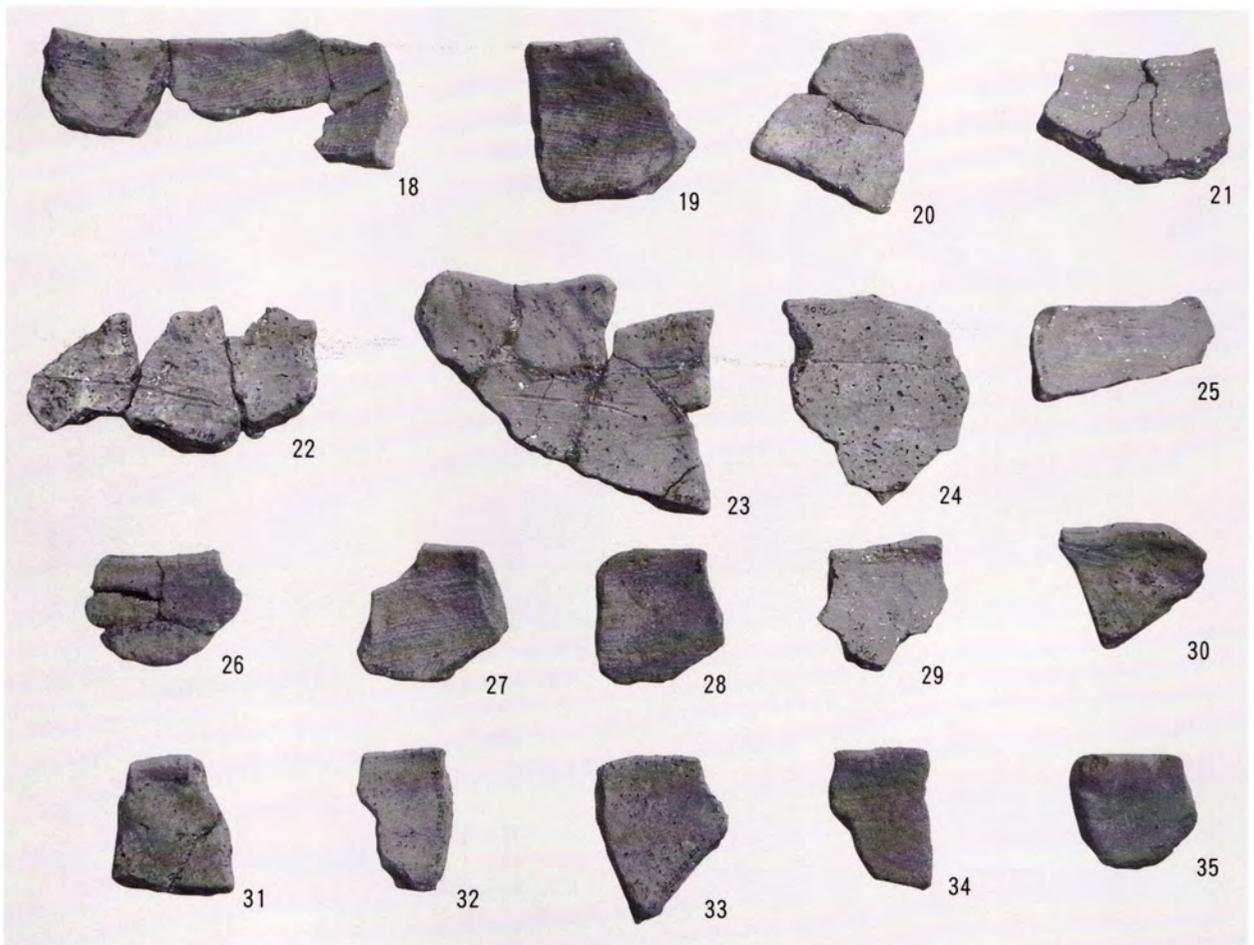
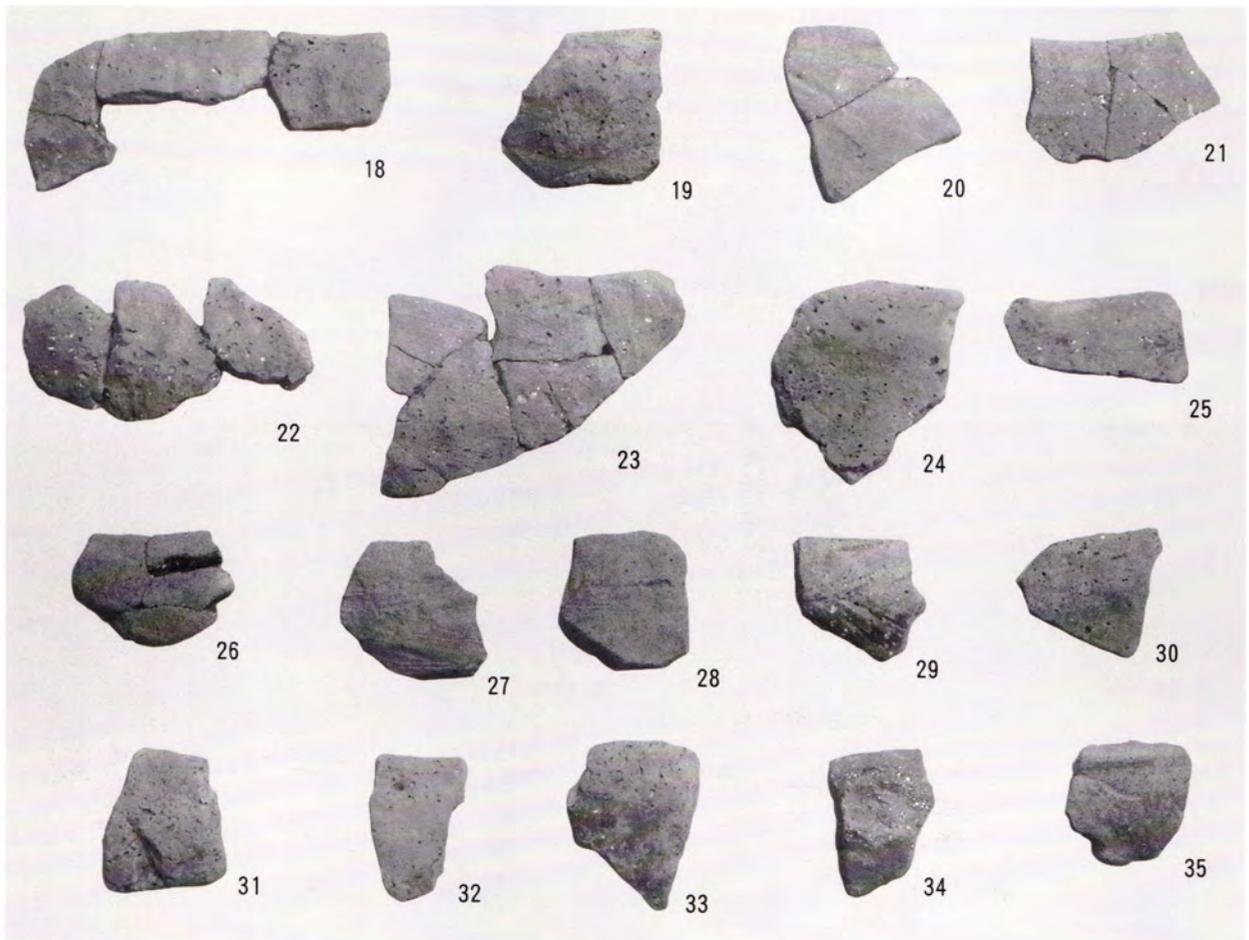


図版18 1 : 1号土坑
 3 : 2号土坑
 5 : 3号土坑
 7 : 大土坑 28ライン東壁

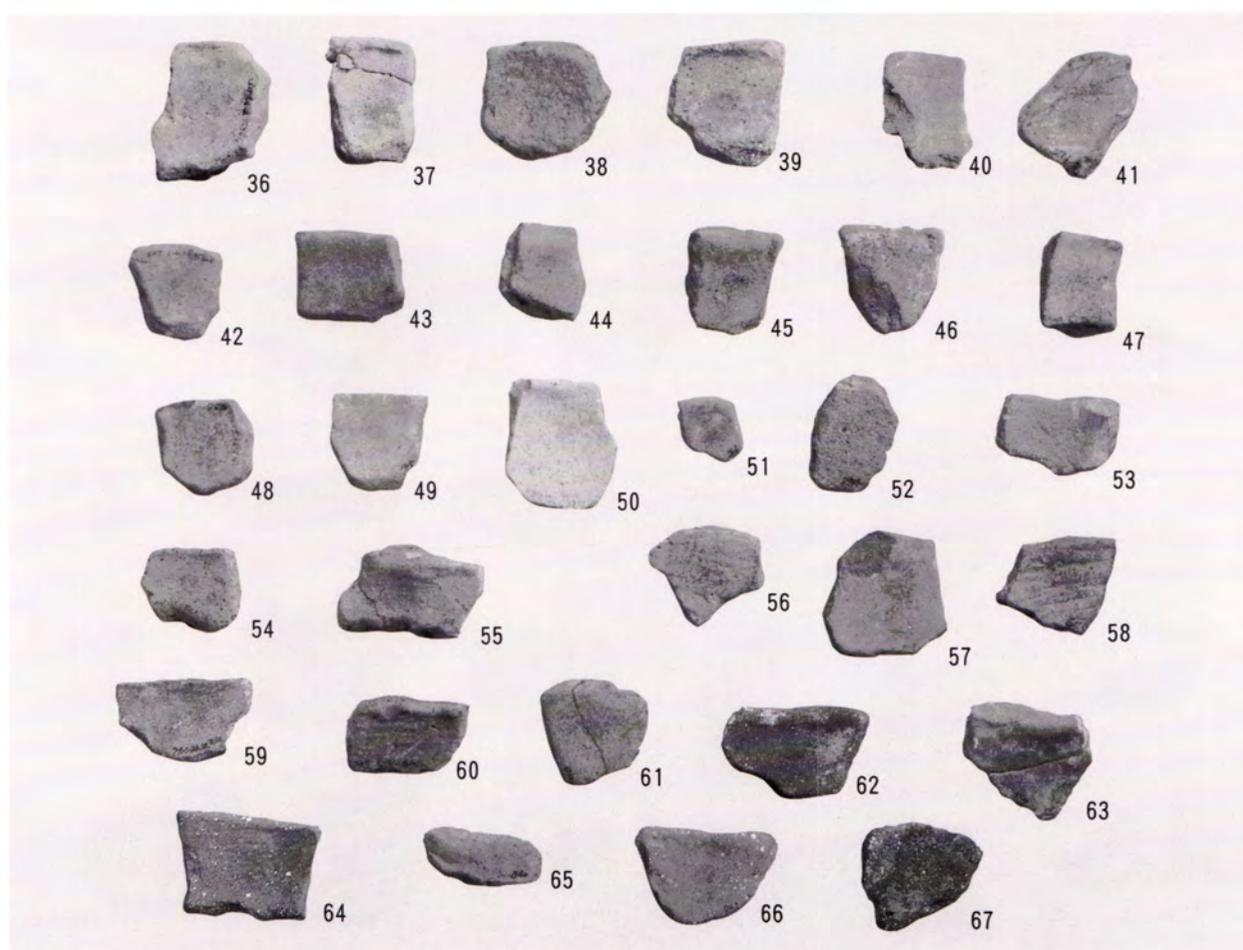
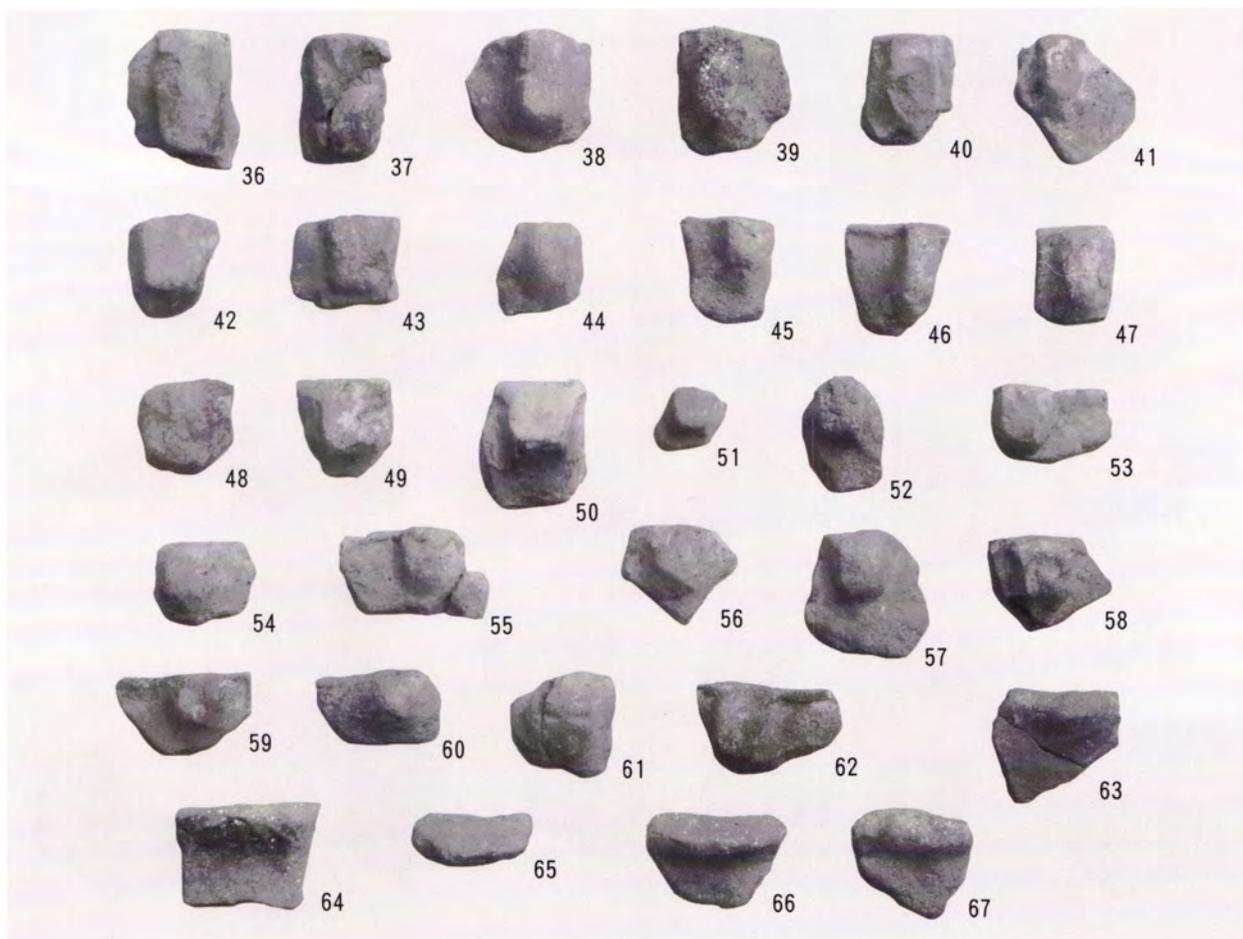
2 : 長楕円状土坑
 4 : 楕円状土坑
 6 : 楕円状土坑内の貝殻集中部
 8 : 大土坑に落ち込む石灰岩礫



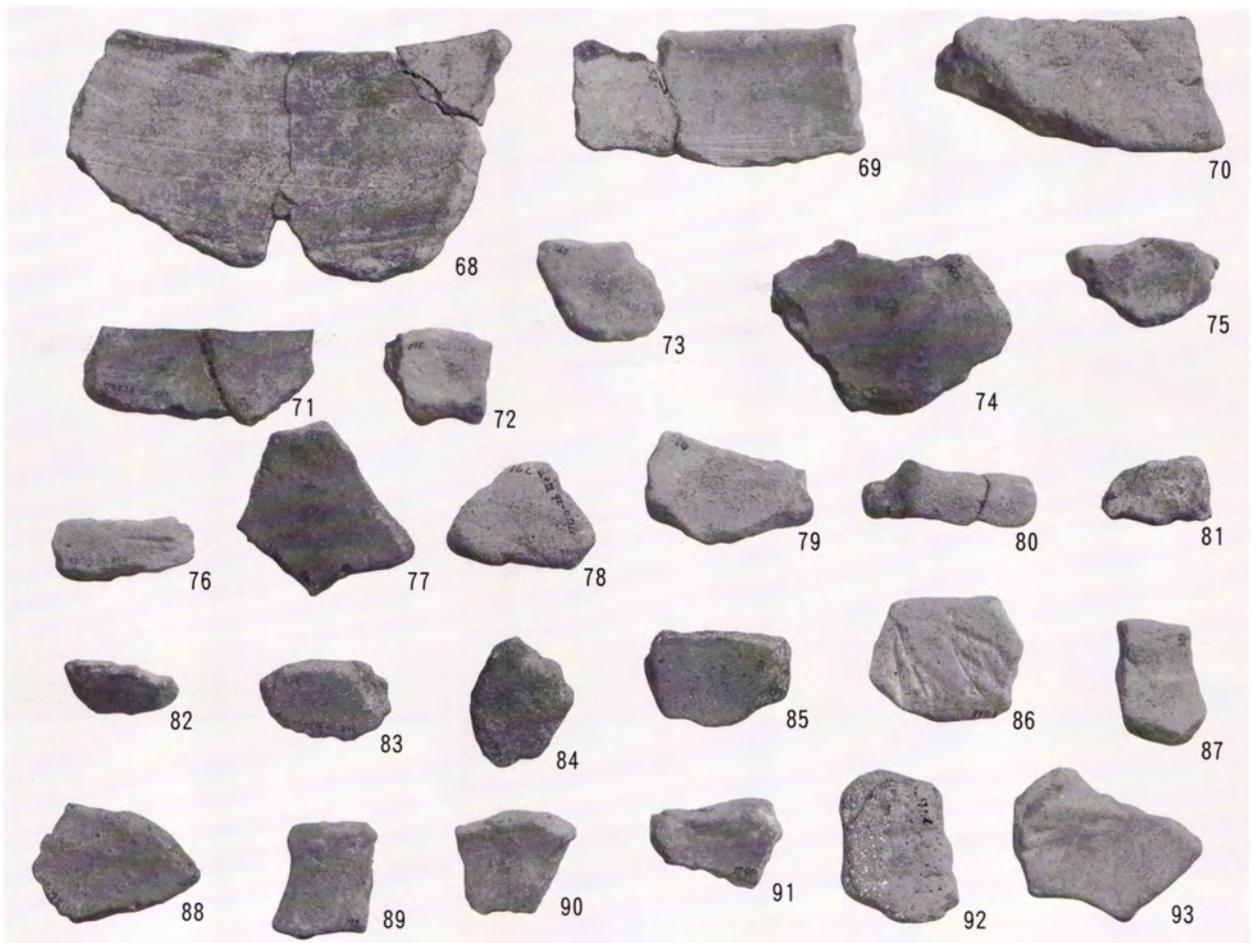
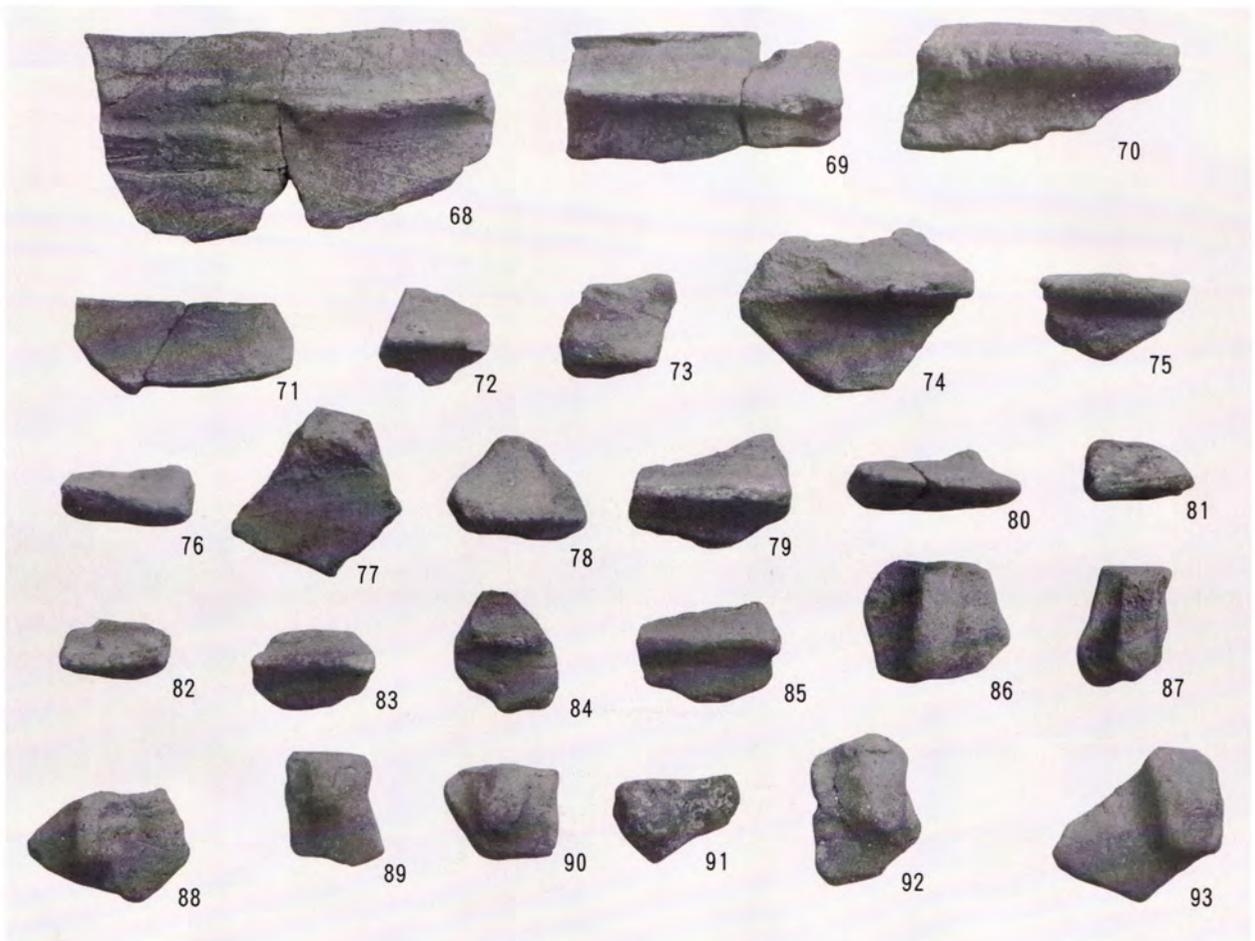
図版20 土器<2> II群 A類1 (上:外面、下:内面)



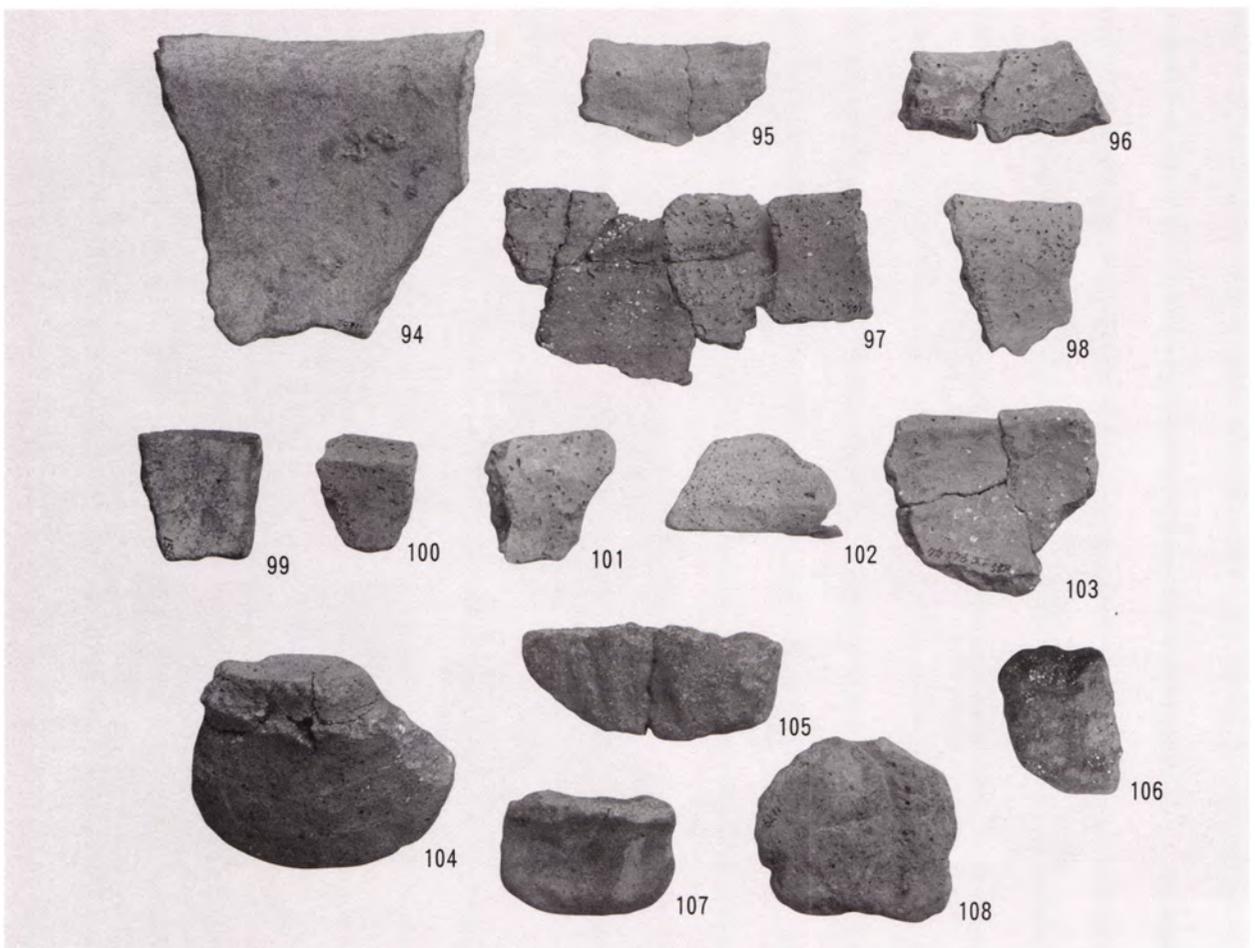
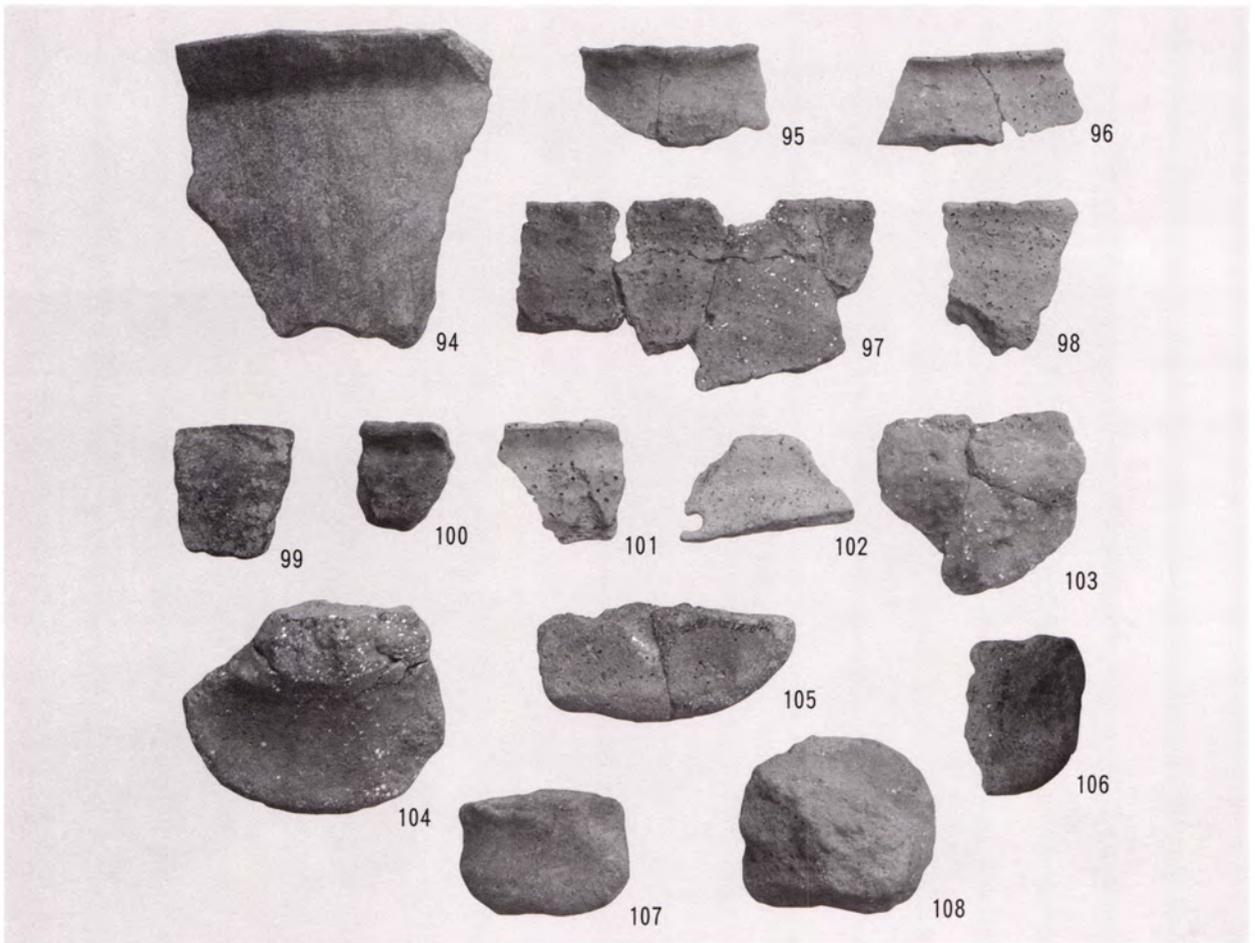
図版21 土器<3> II群 A類2 (上:外面、下:内面)



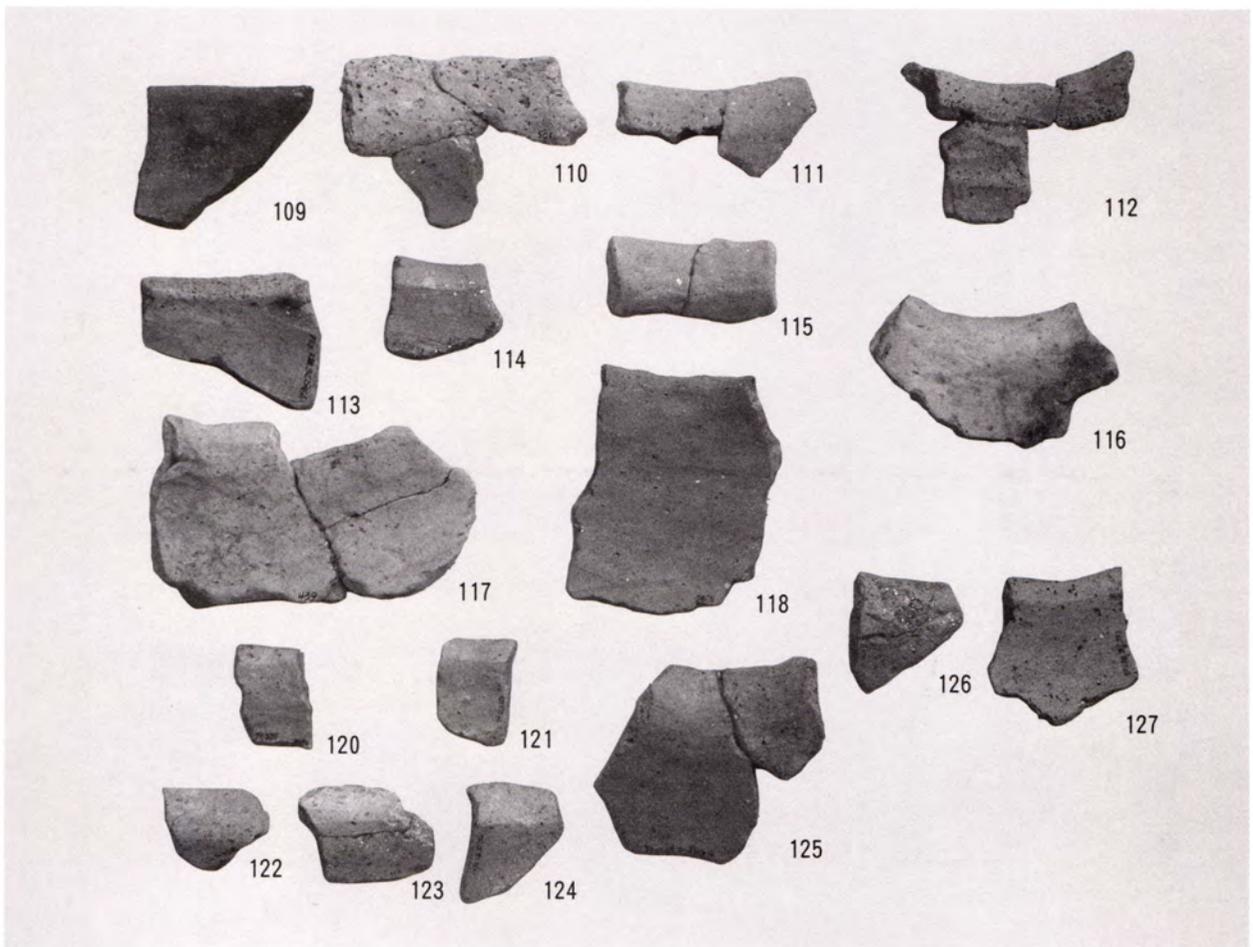
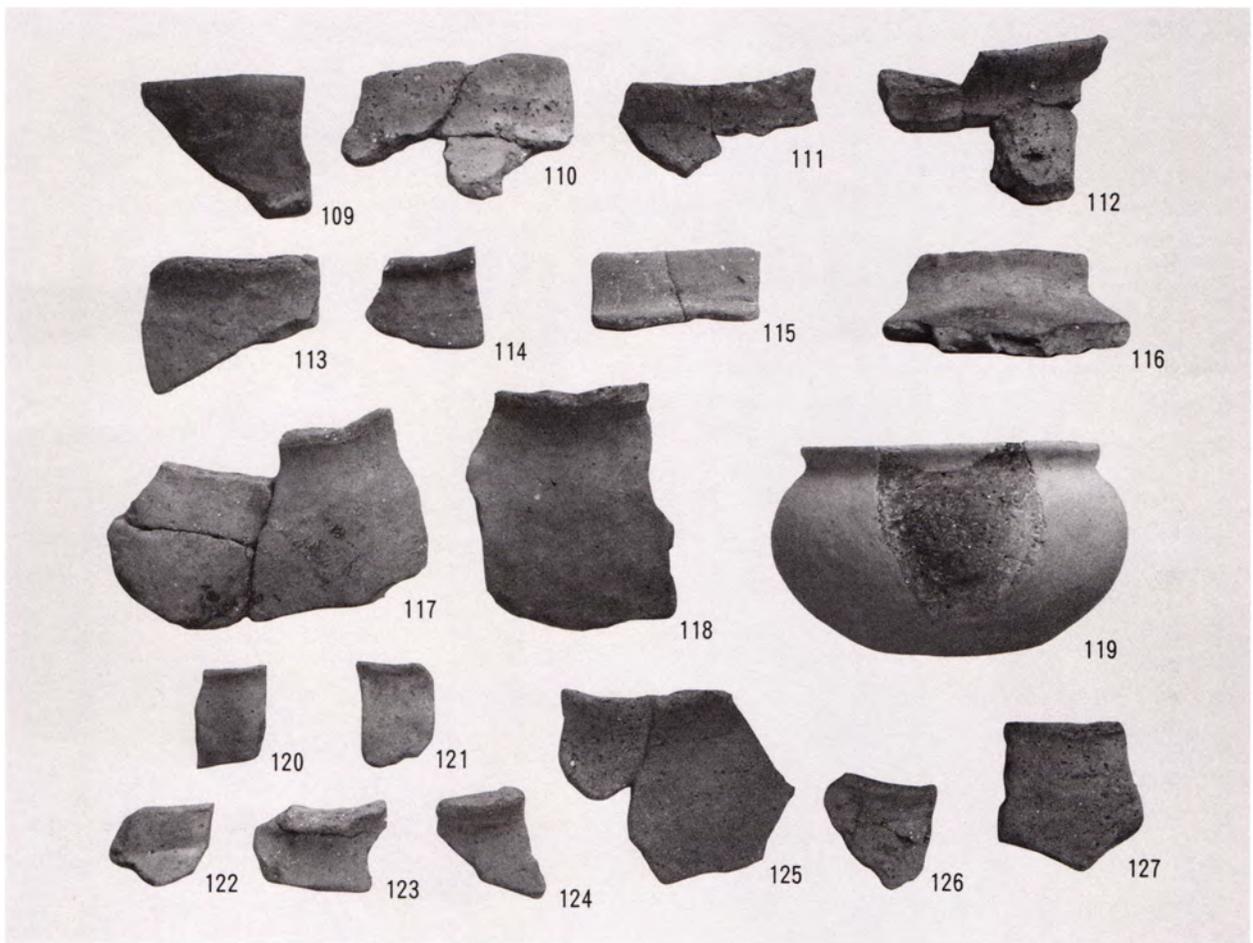
図版22 土器<4> II群 A類1 (把手) (上:外面、下:内面)



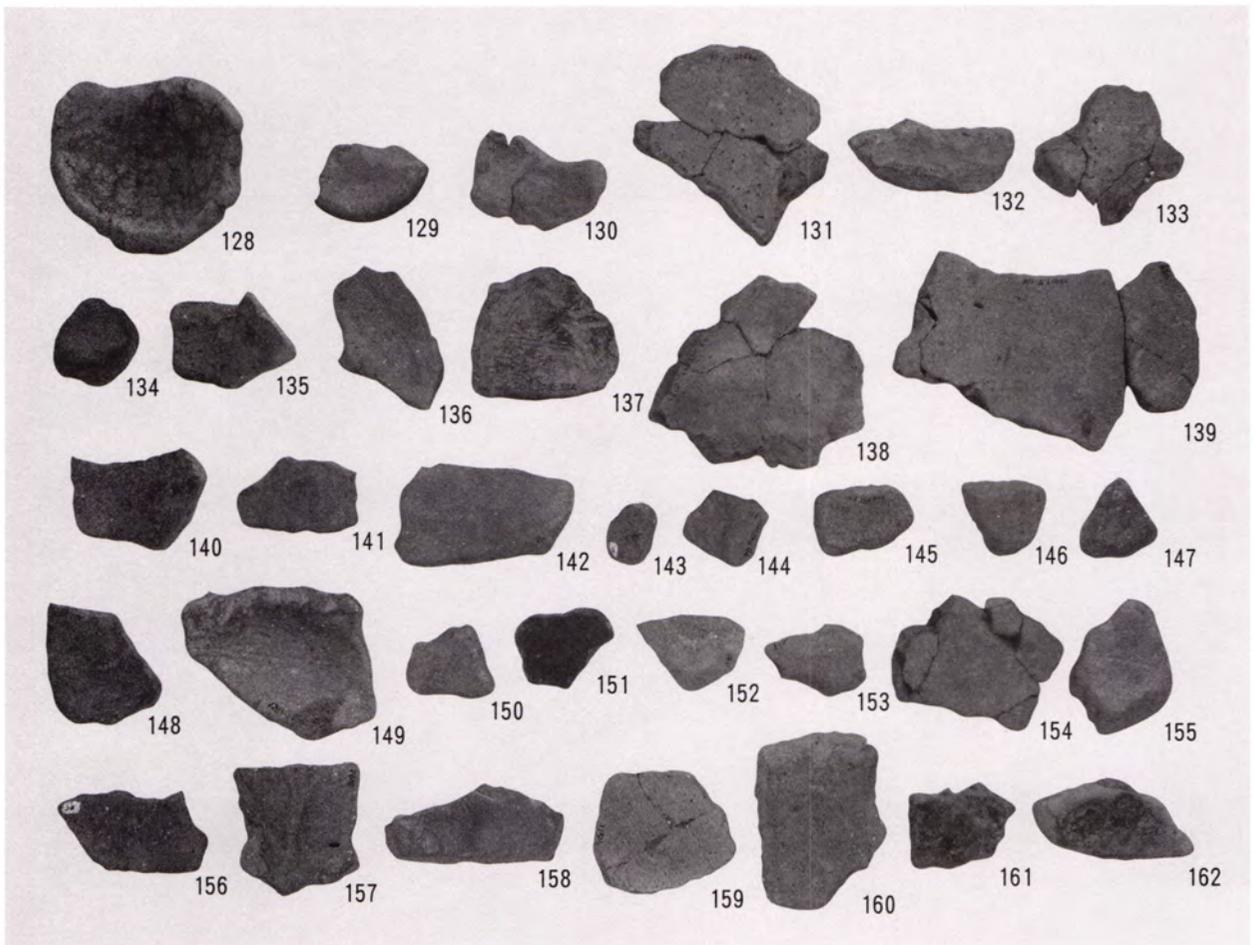
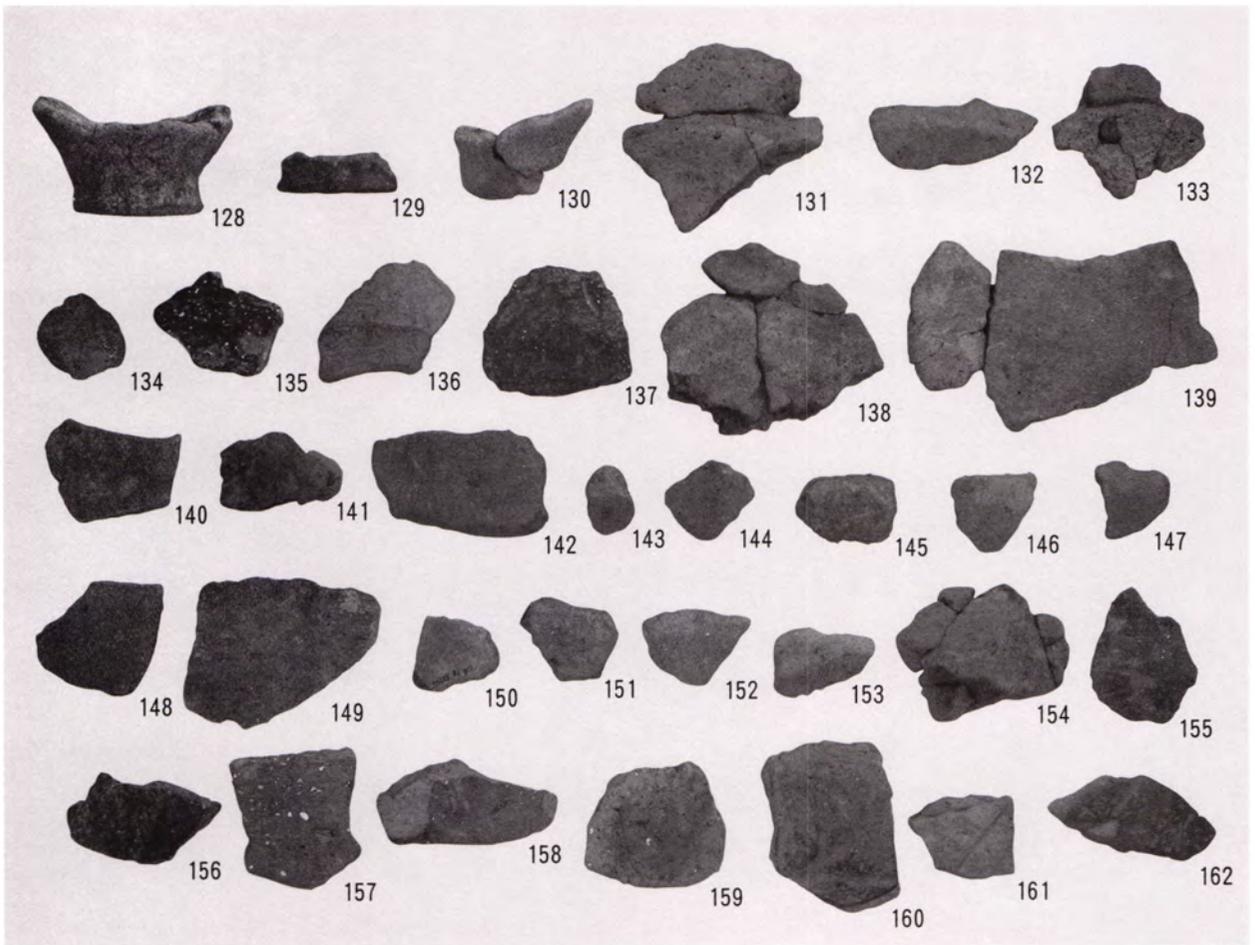
図版23 土器<5> II群 A類3 (鏢)、A類2 (把手) (上:外面、下:内面)



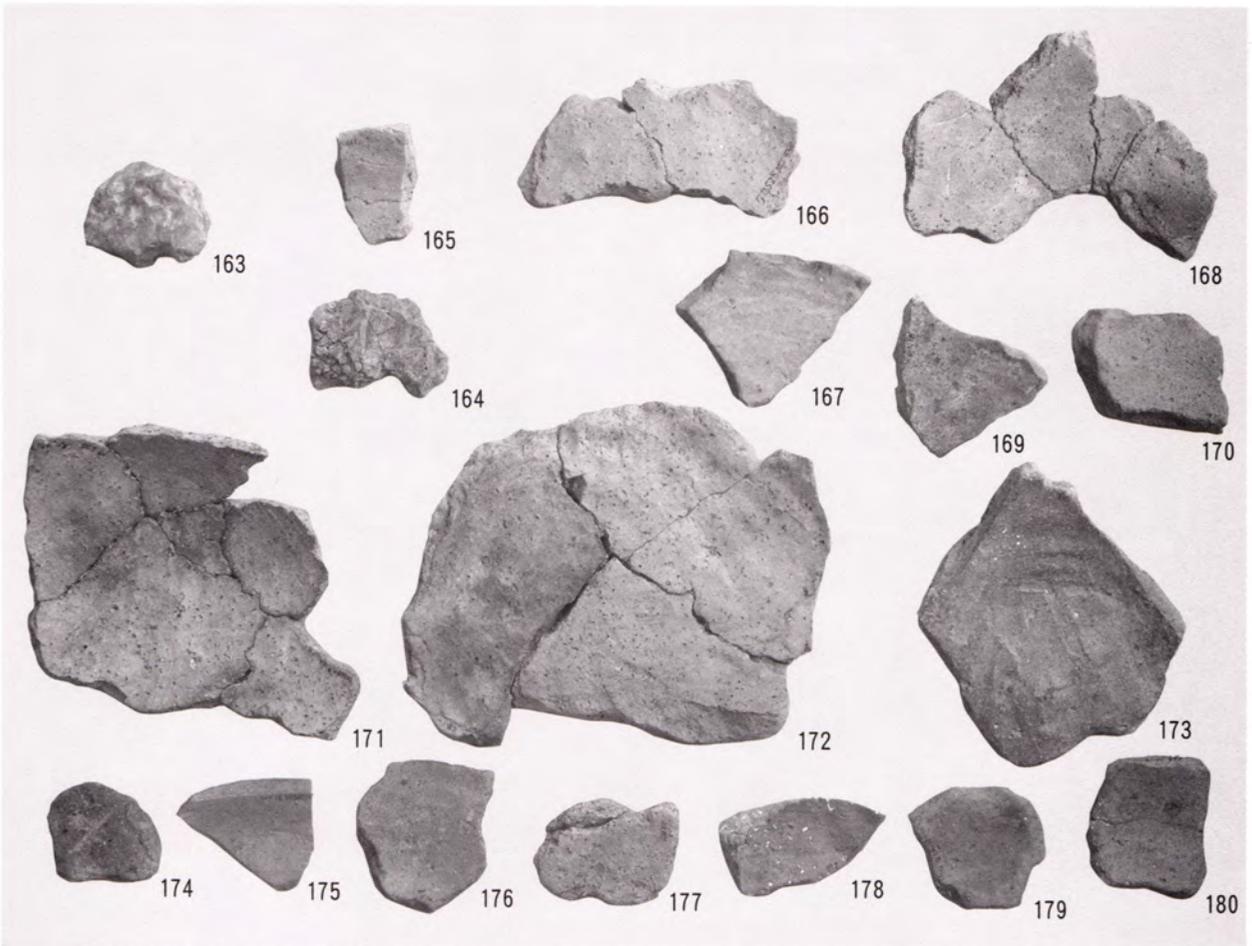
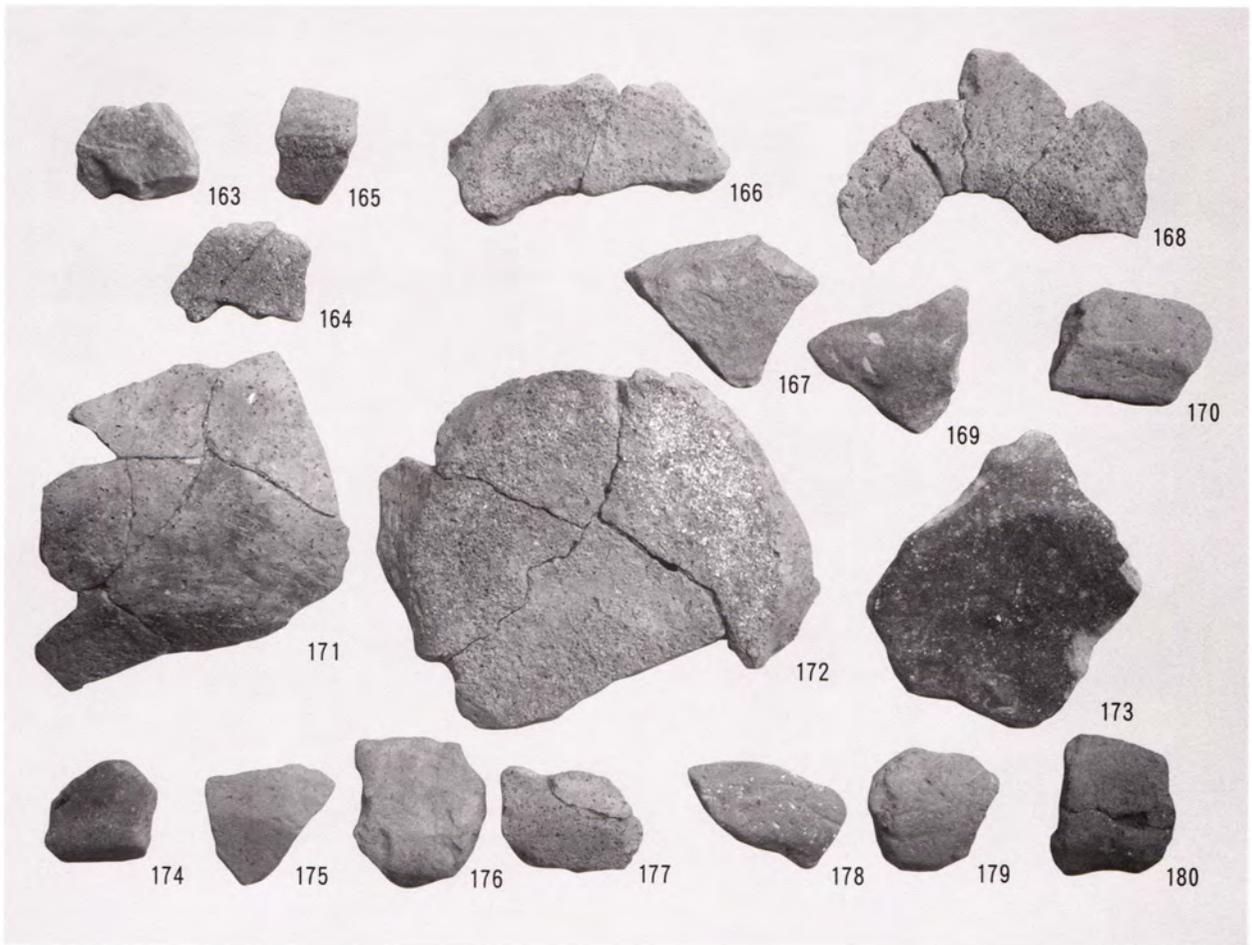
図版24 土器<6> II群 B類、D類、A類(把手)(上:外面、下:内面)



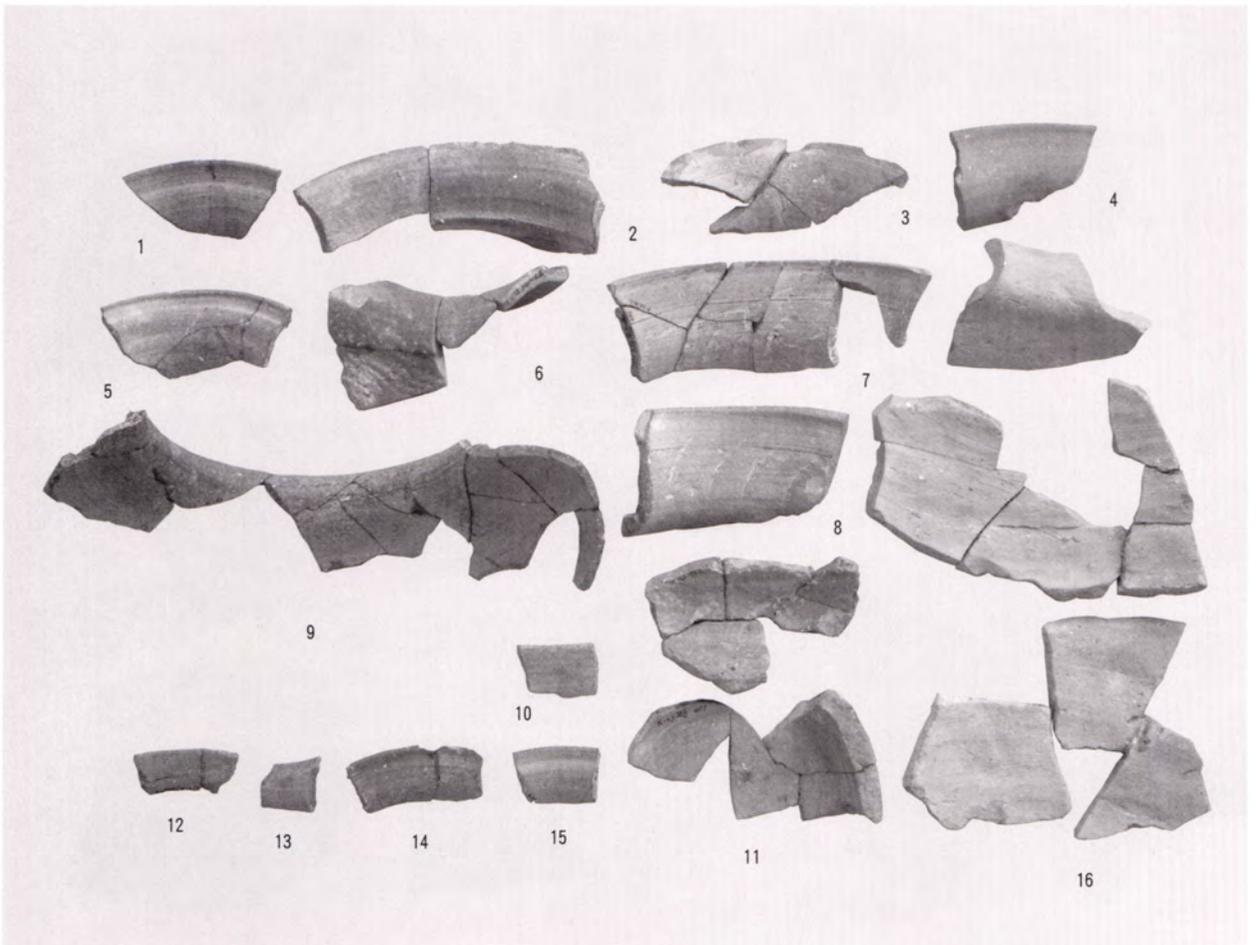
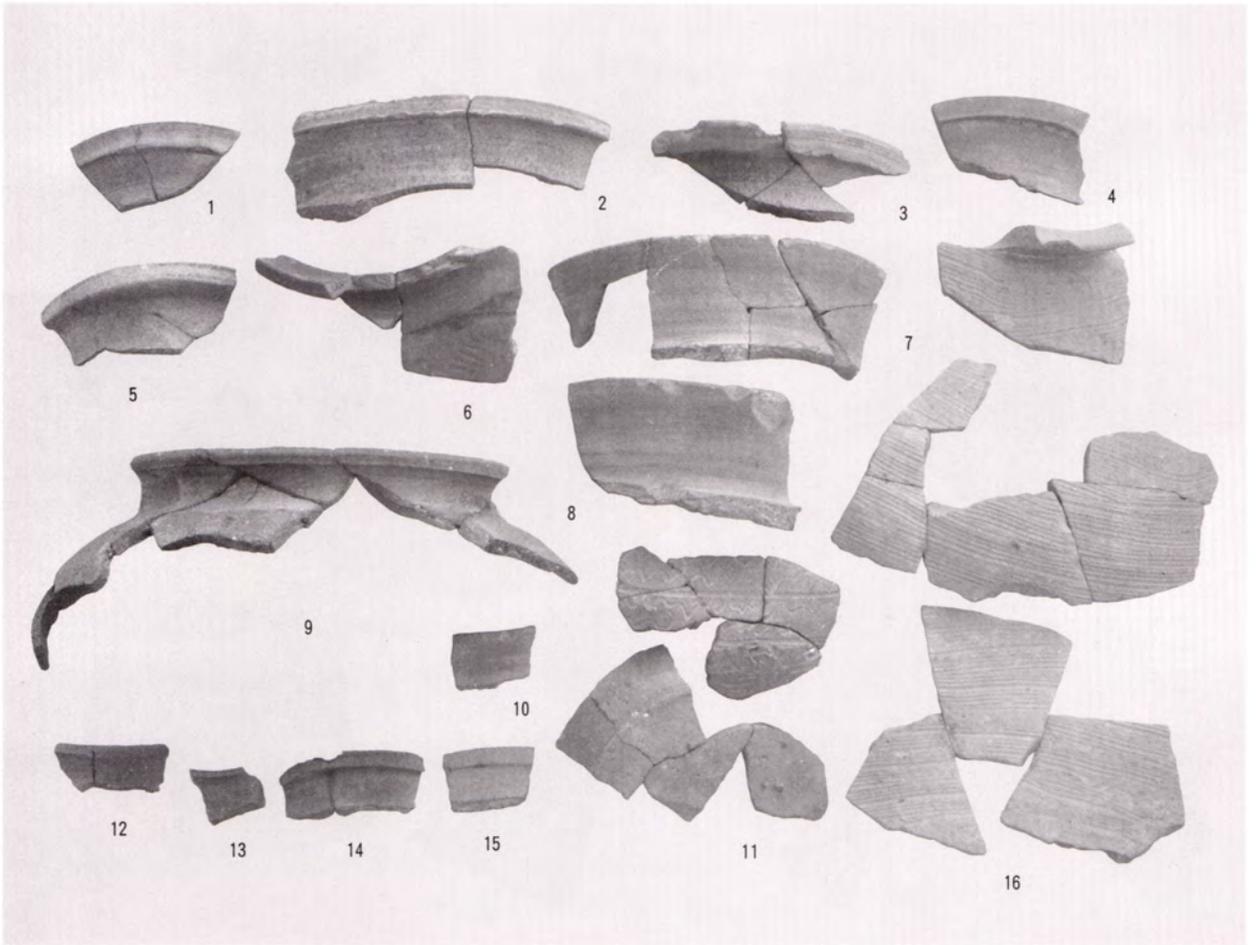
図版25 土器<7> II群 C類 (上:外面、下:内面)



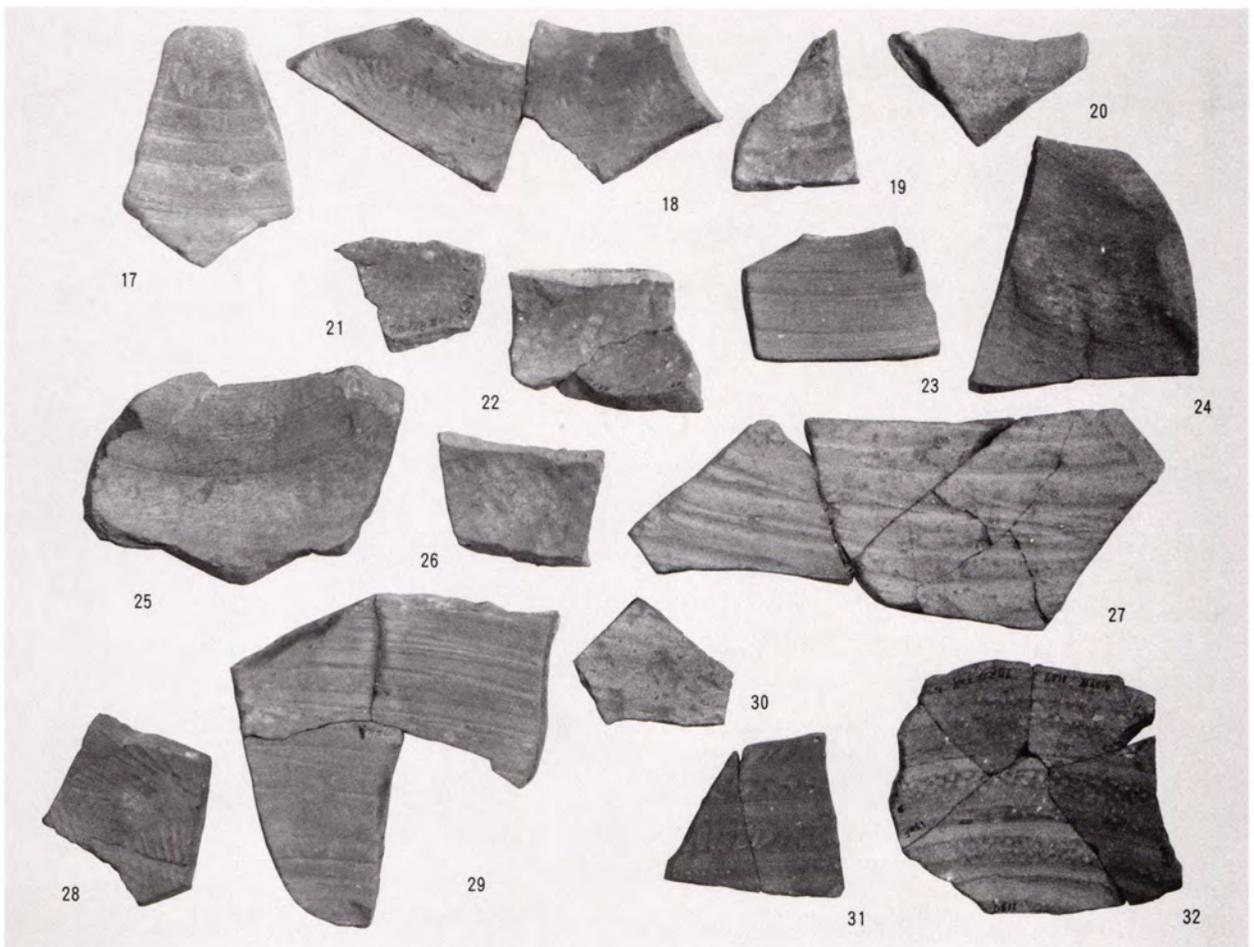
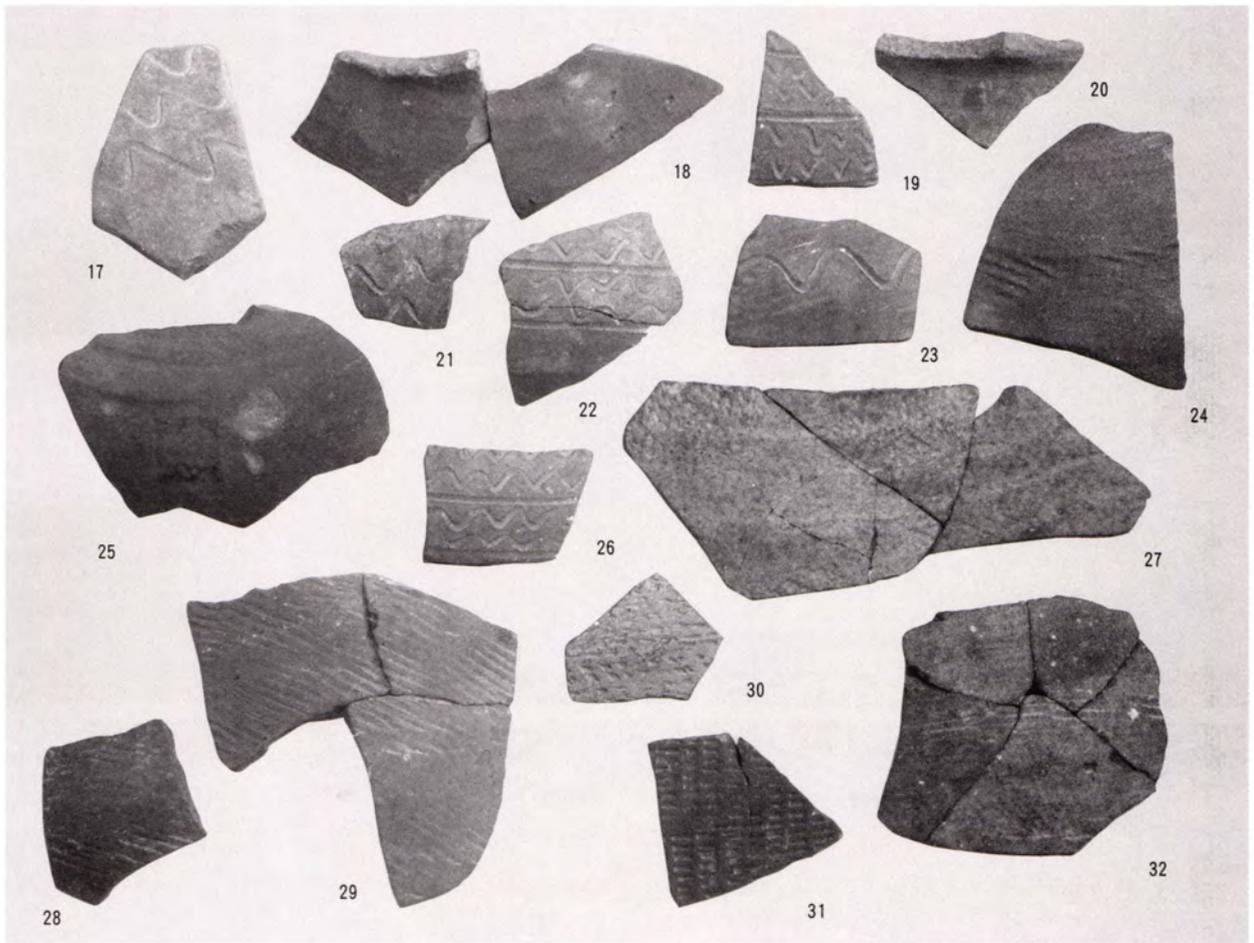
图版26 土器<8> I群底部、II群底部(上:外面、下:内面)



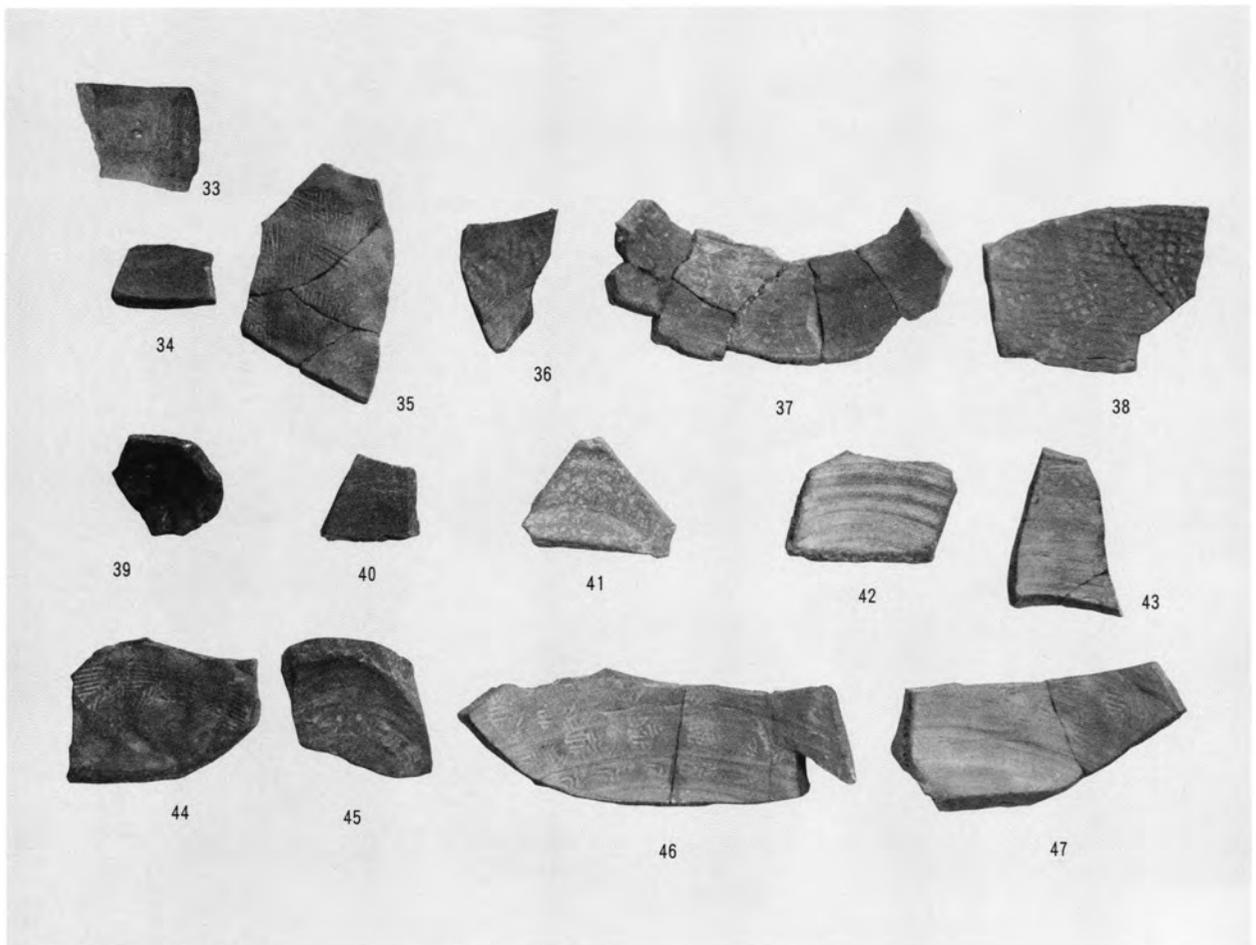
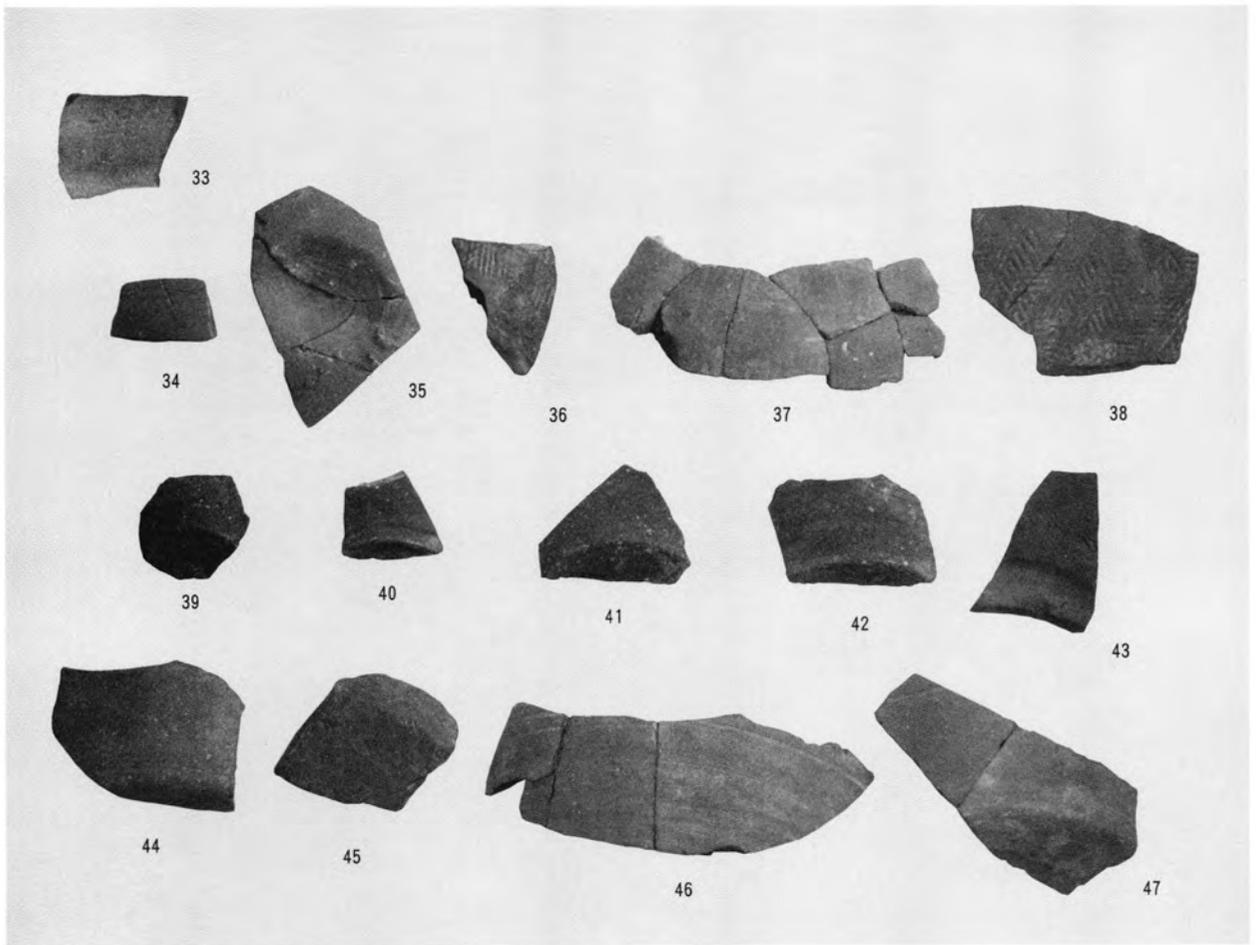
图版27 土器<9> II群底部(上:外面、下:内面)



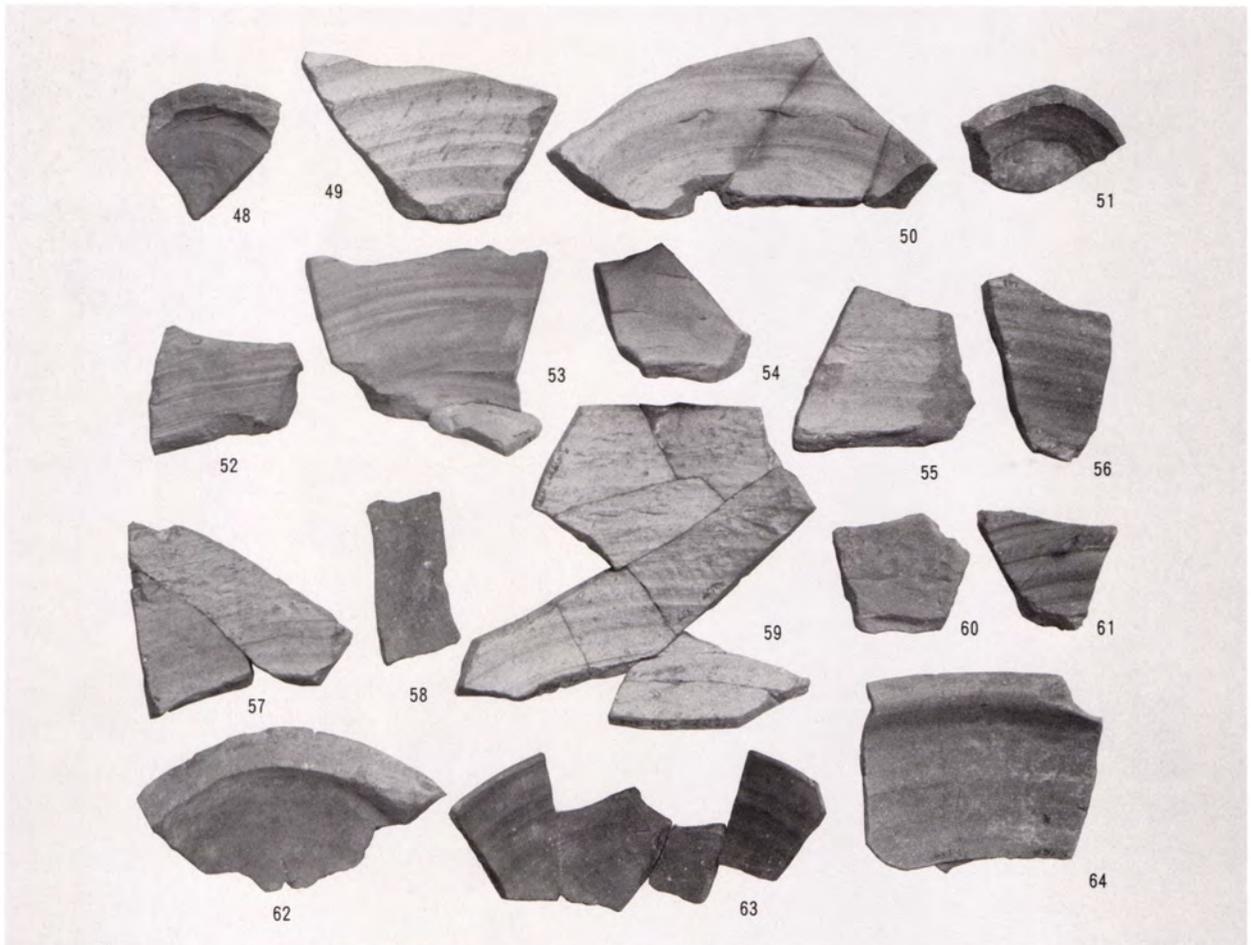
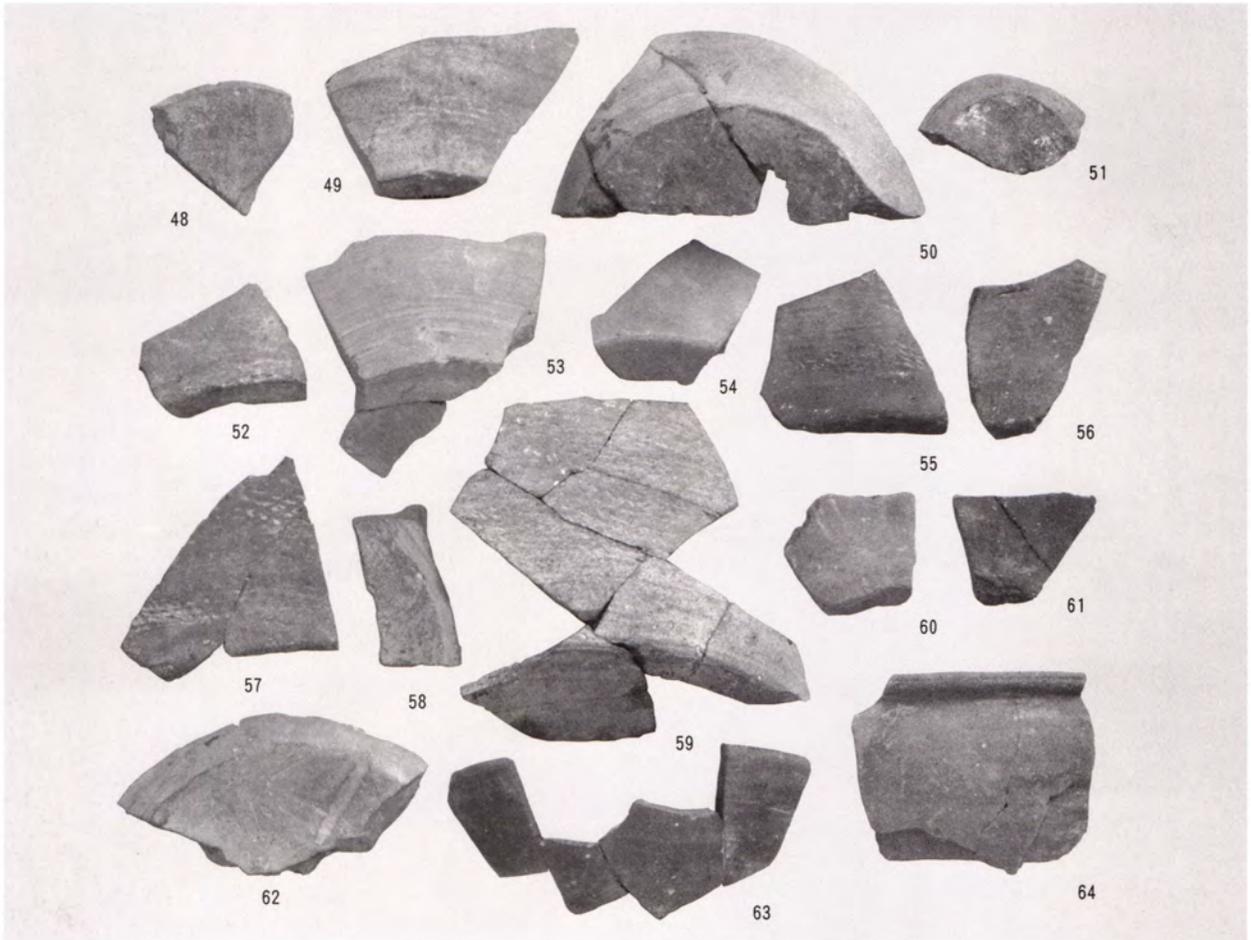
図版28 カムイヤキ<1> 壺 (上:外面、下:内面)



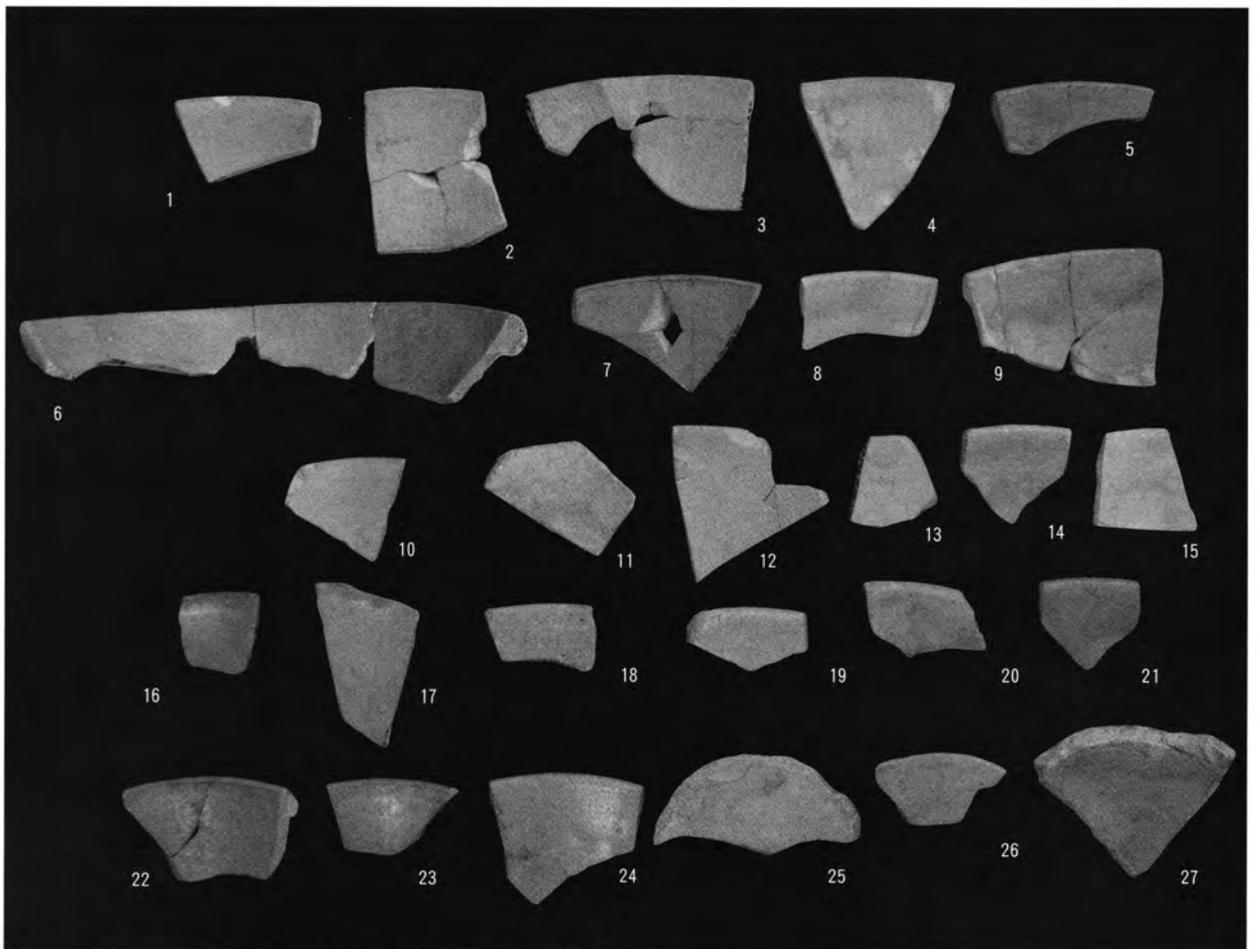
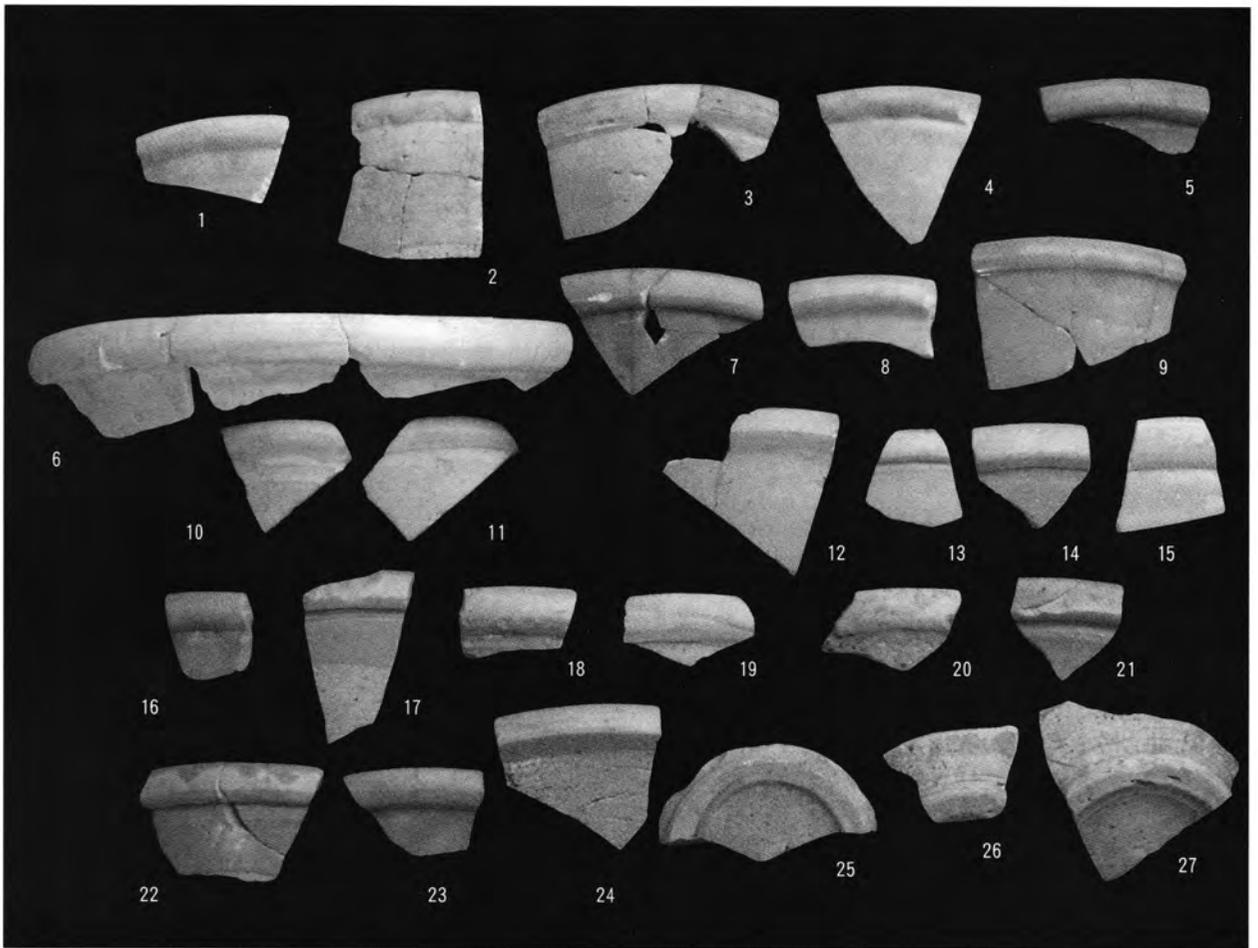
図版29 カムイヤキ<2> 壺 (上:外面、下:内面)



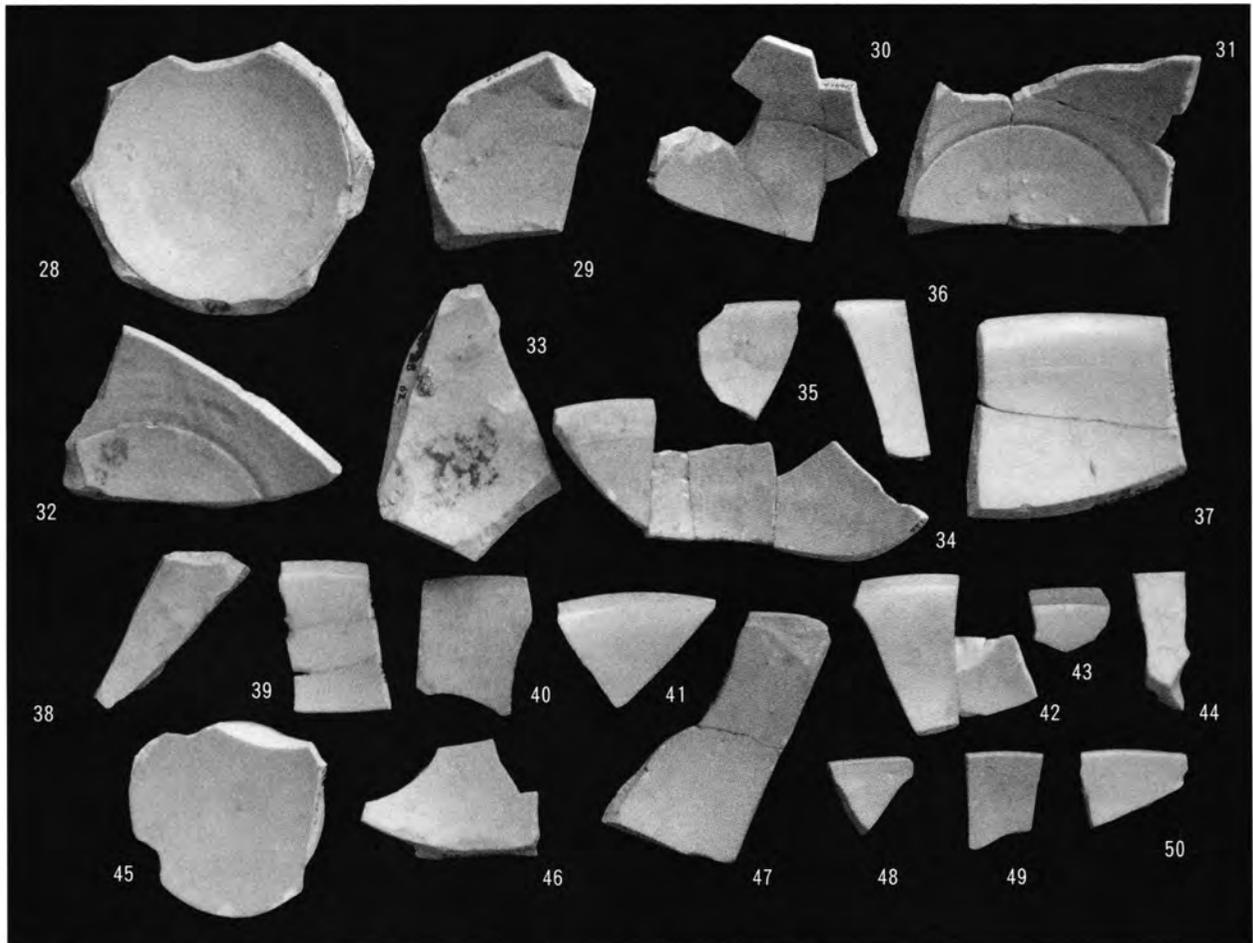
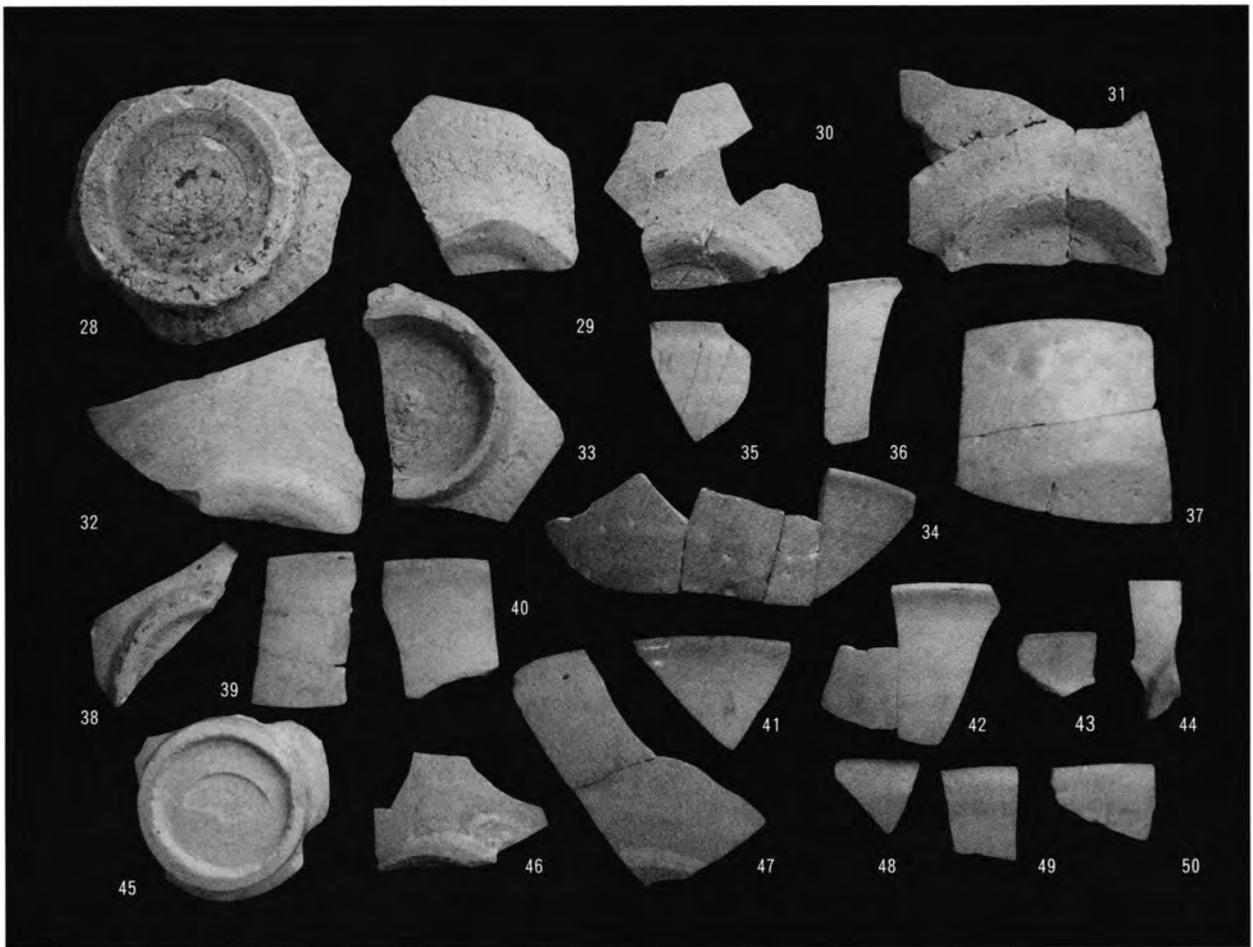
図版30 カムイヤキ<3> 壺 (上:外面、下:内面)



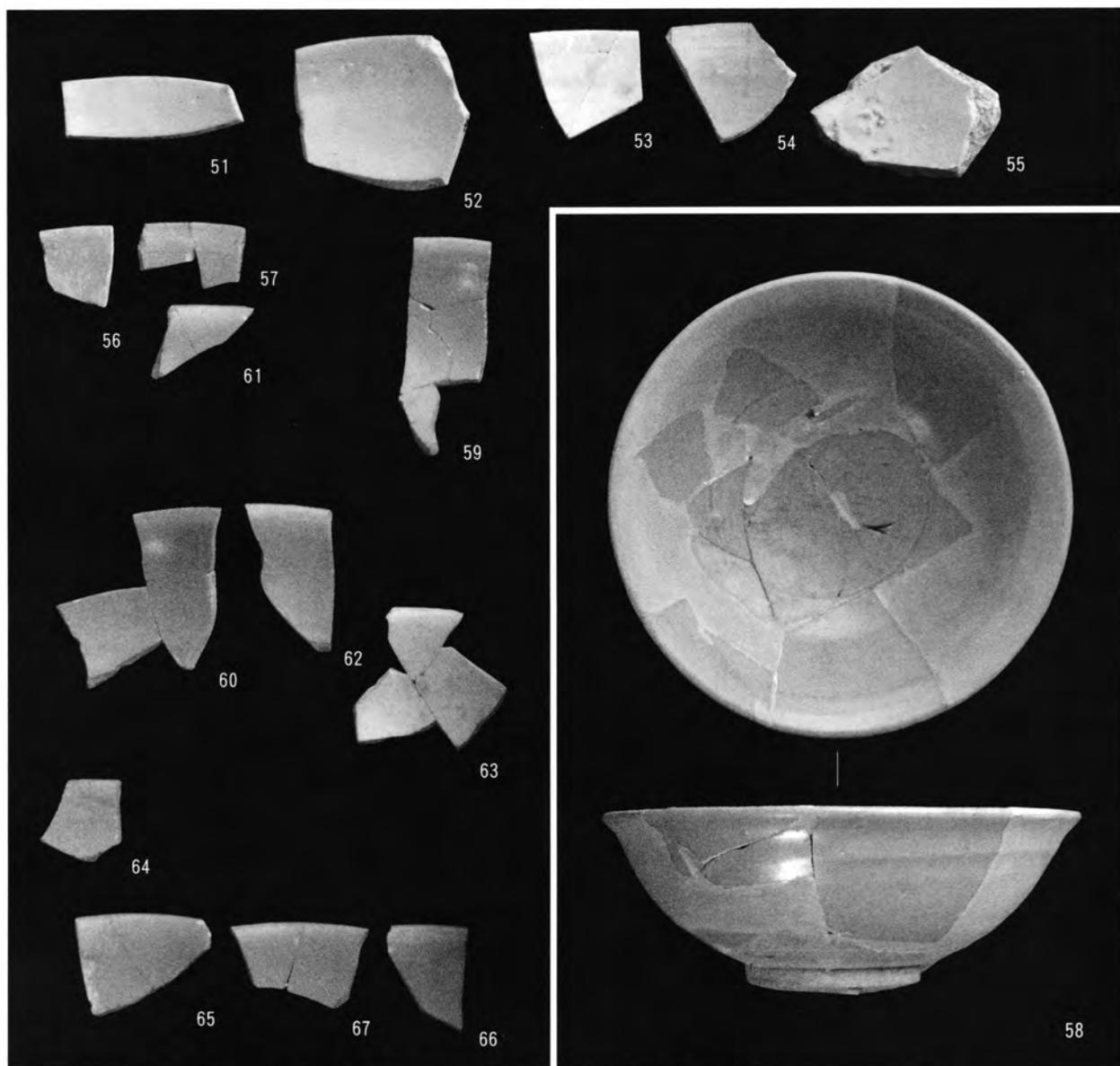
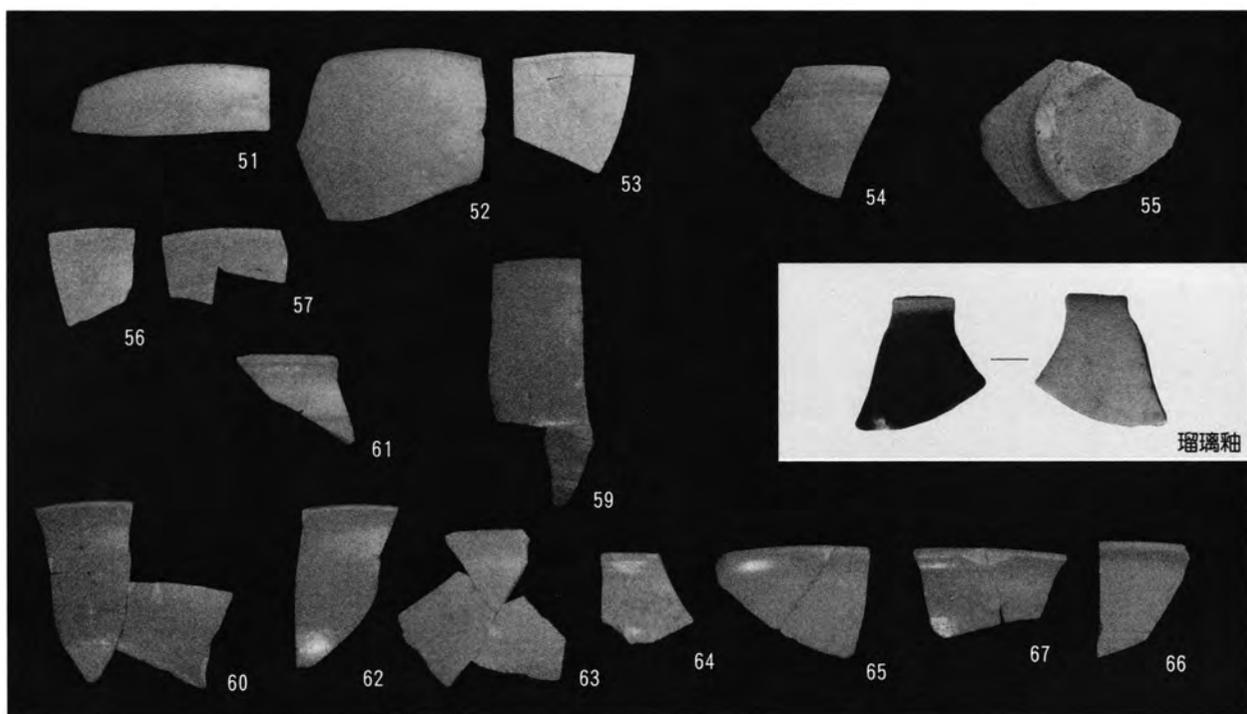
図版31 カミヤキ<4> 壺、鉢、碗 (上:外面、下:内面)



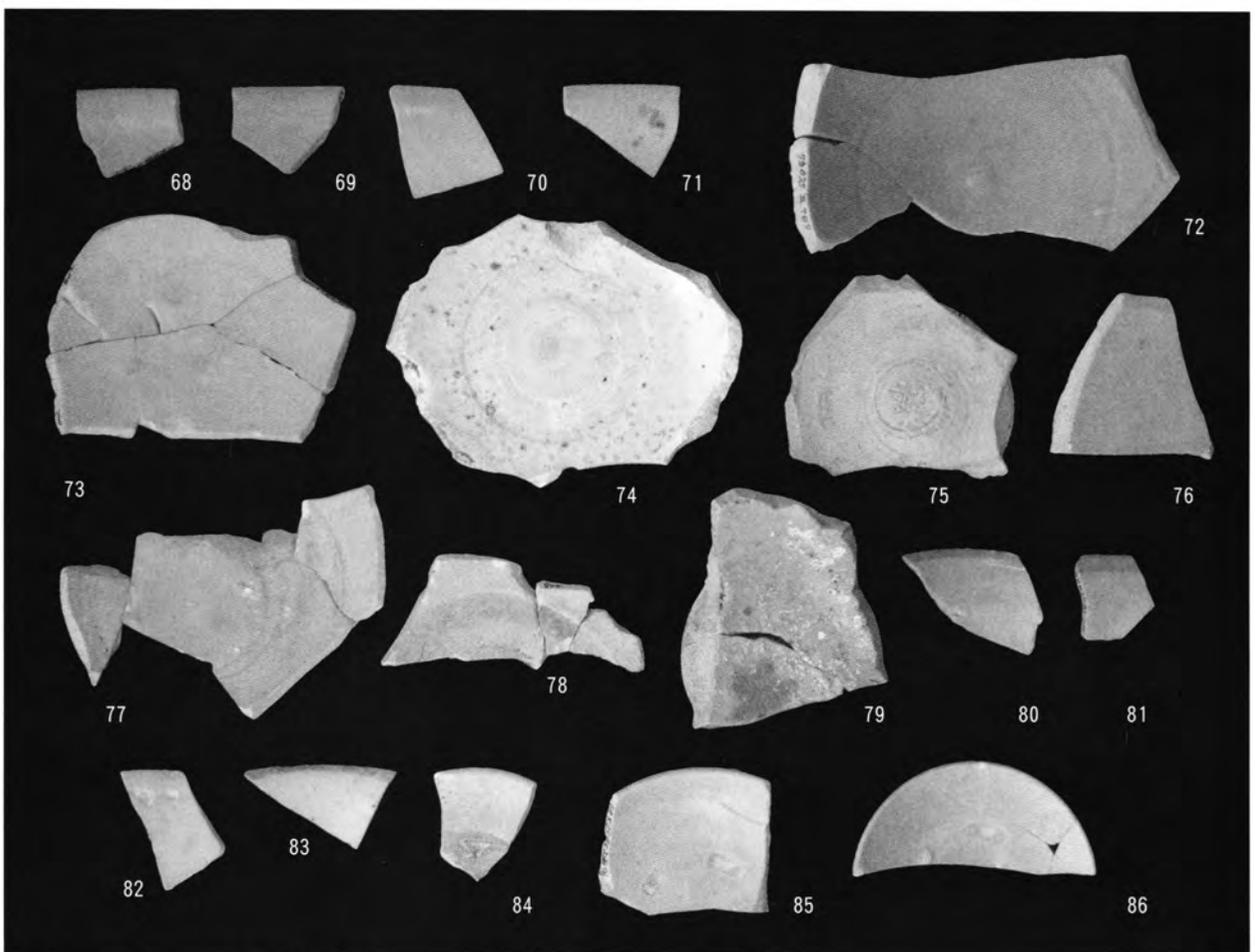
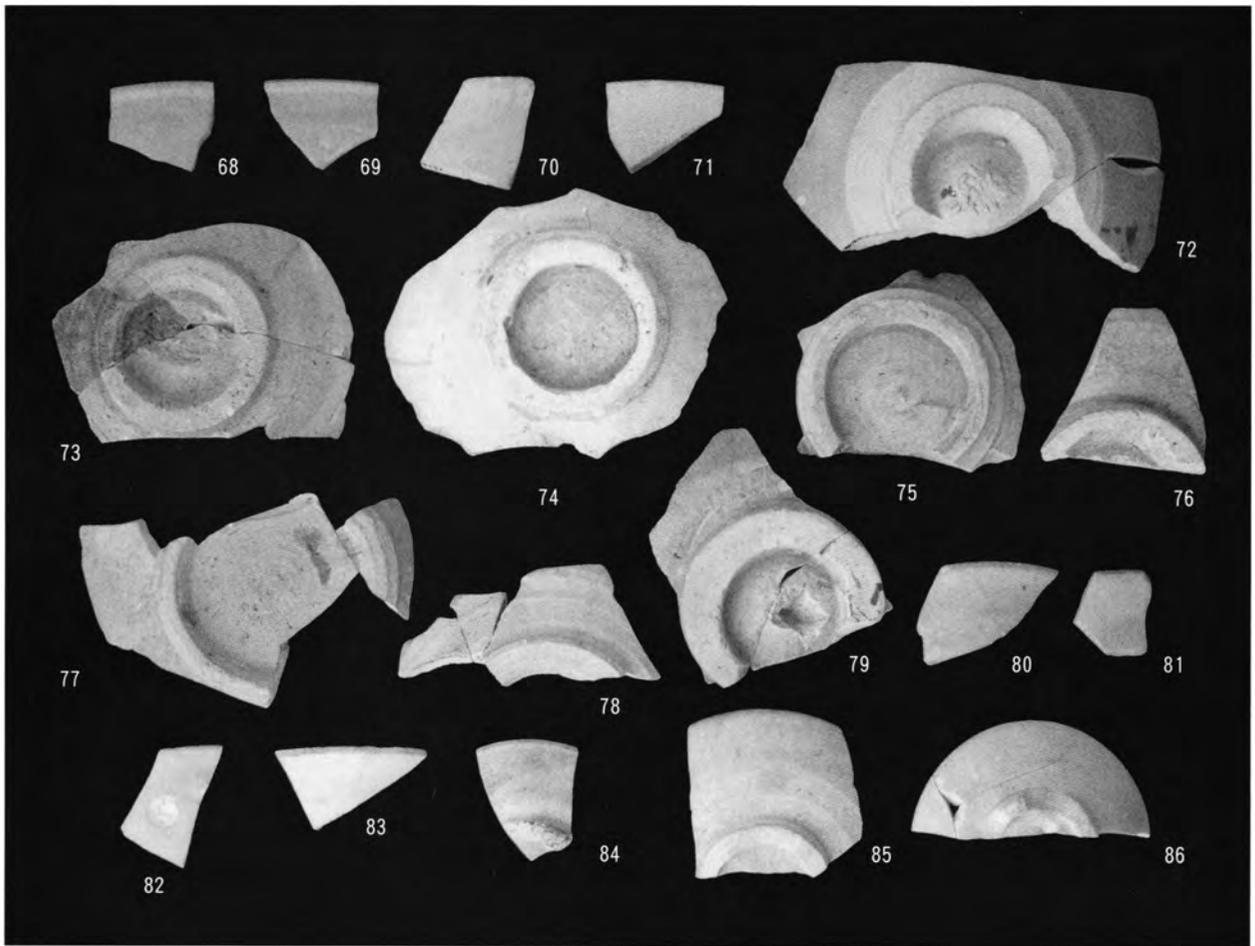
図版32 白磁<1> 玉縁口縁碗 (上:外面、下:内面)



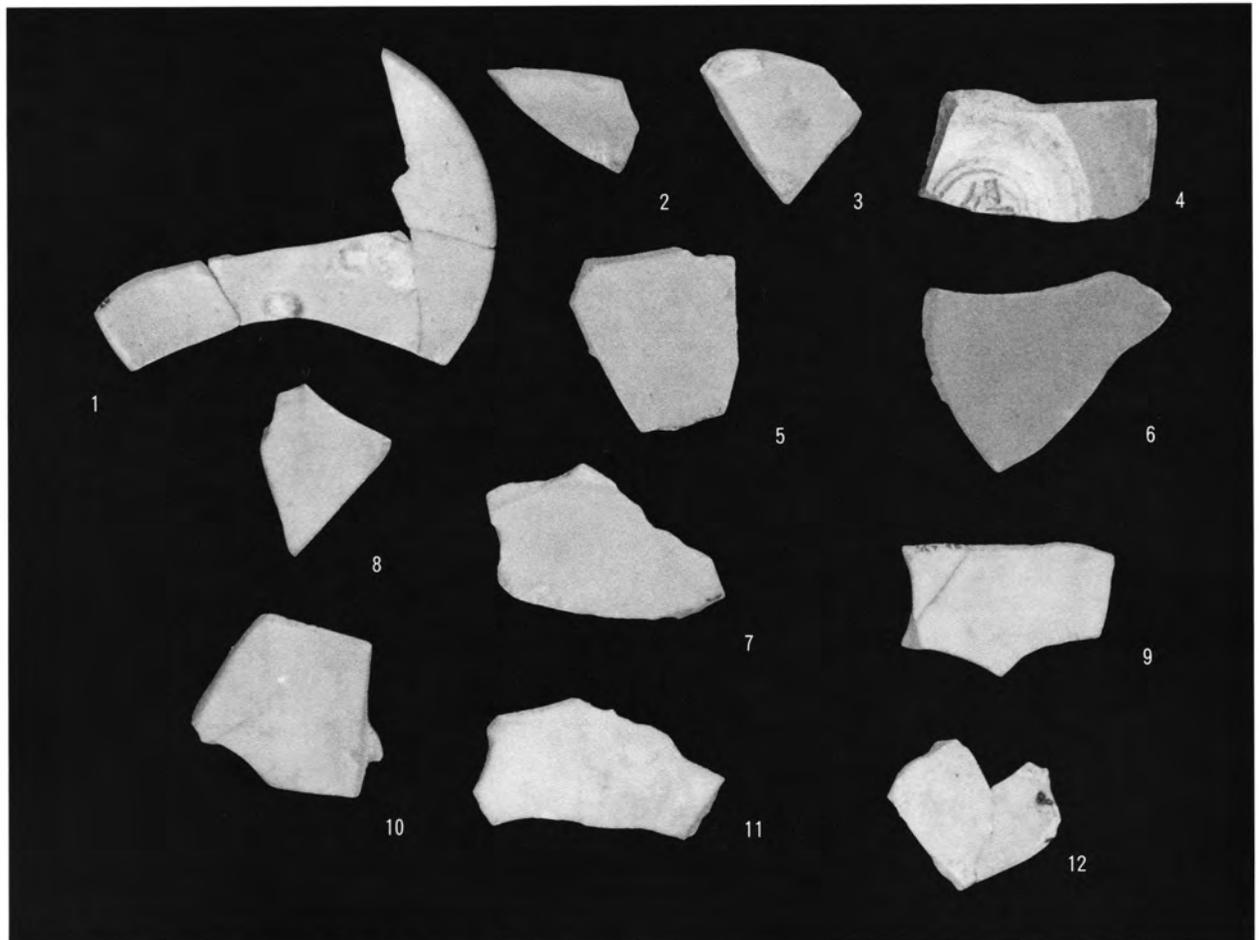
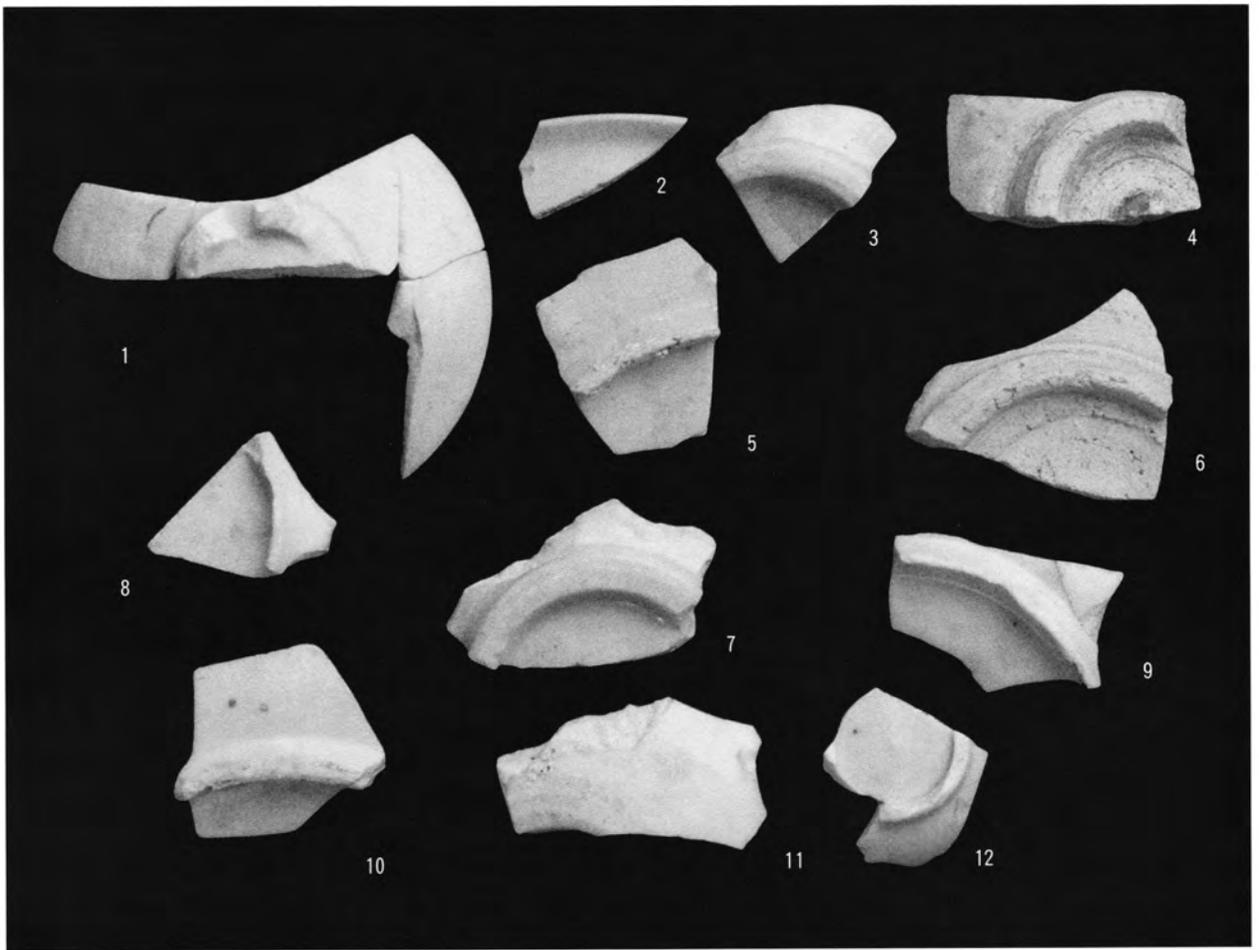
図版33 白磁<2> 玉縁口縁碗、外反口縁碗、内彎口縁碗 (上:外面、下:内面)



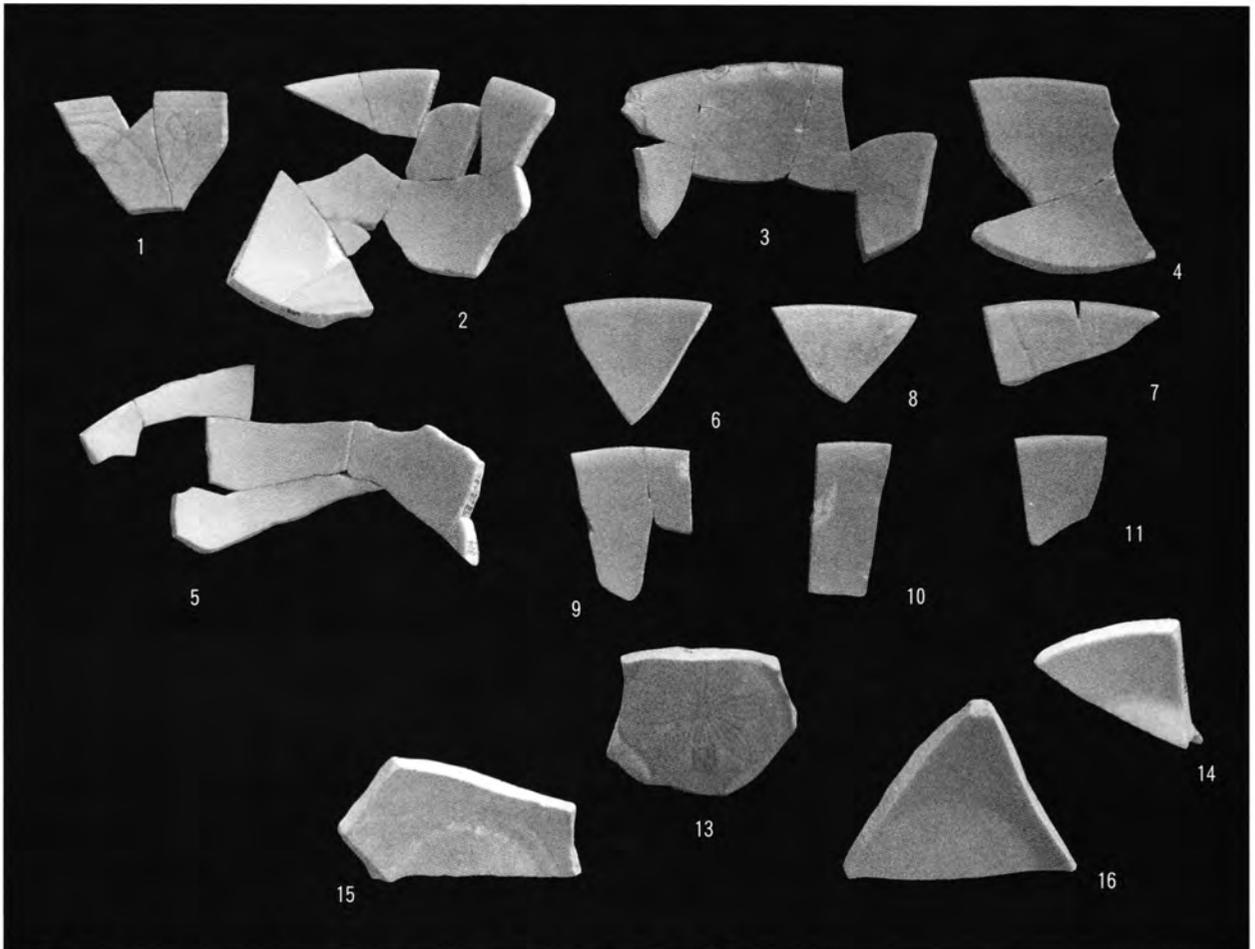
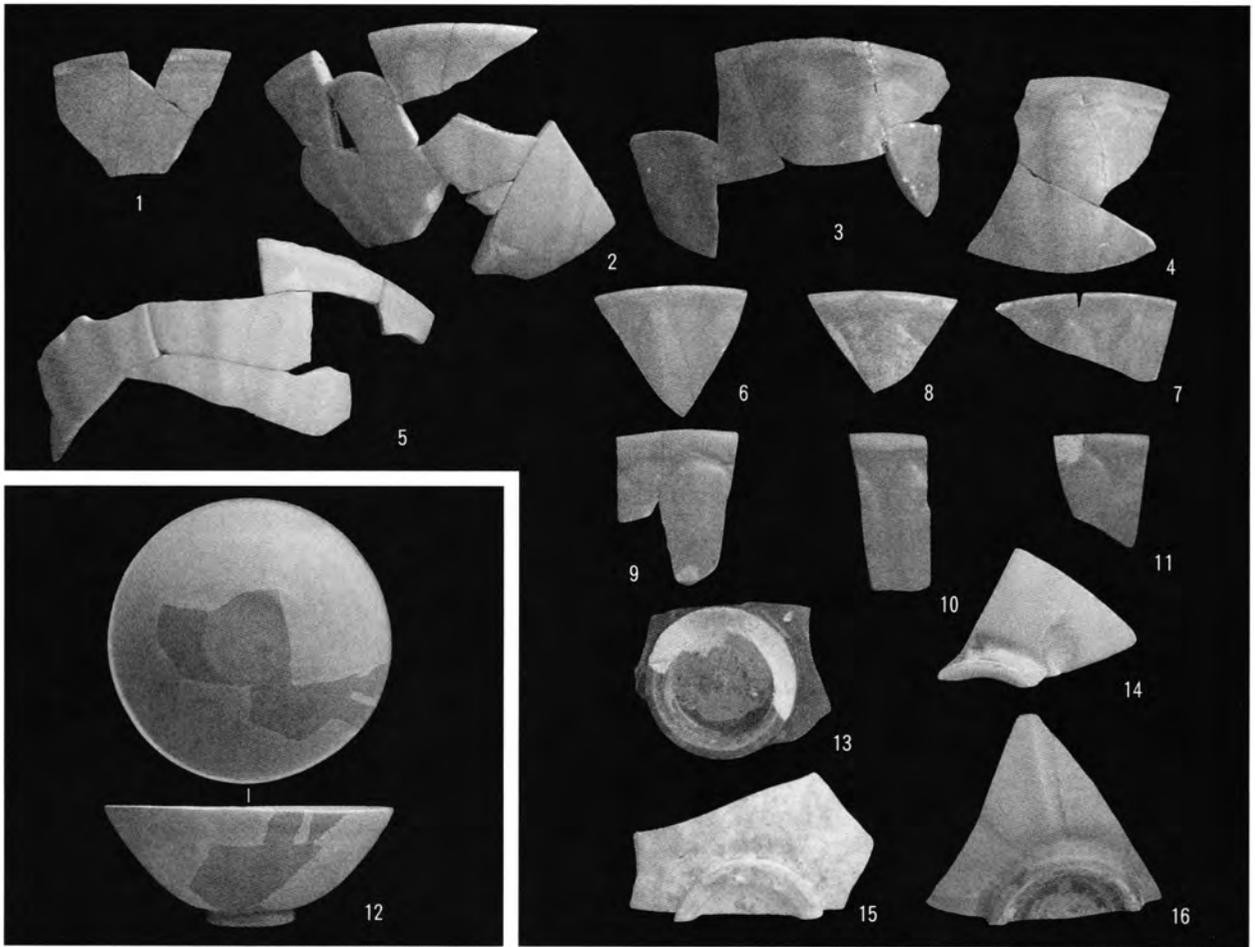
図版34 白磁<3> 内彎口縁碗、直口口縁碗、外反口縁碗 (上:外面、下:内面)、瑠璃釉



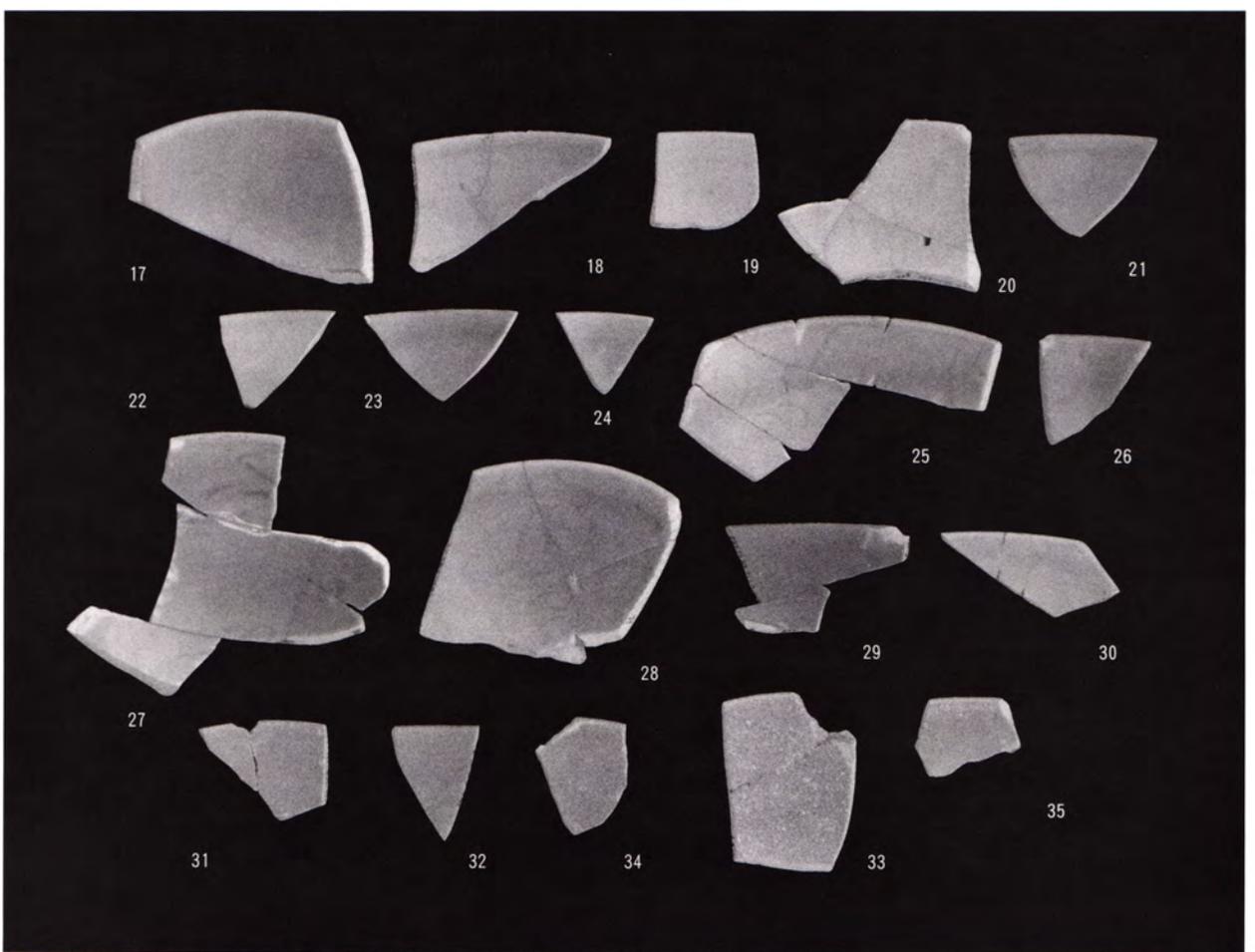
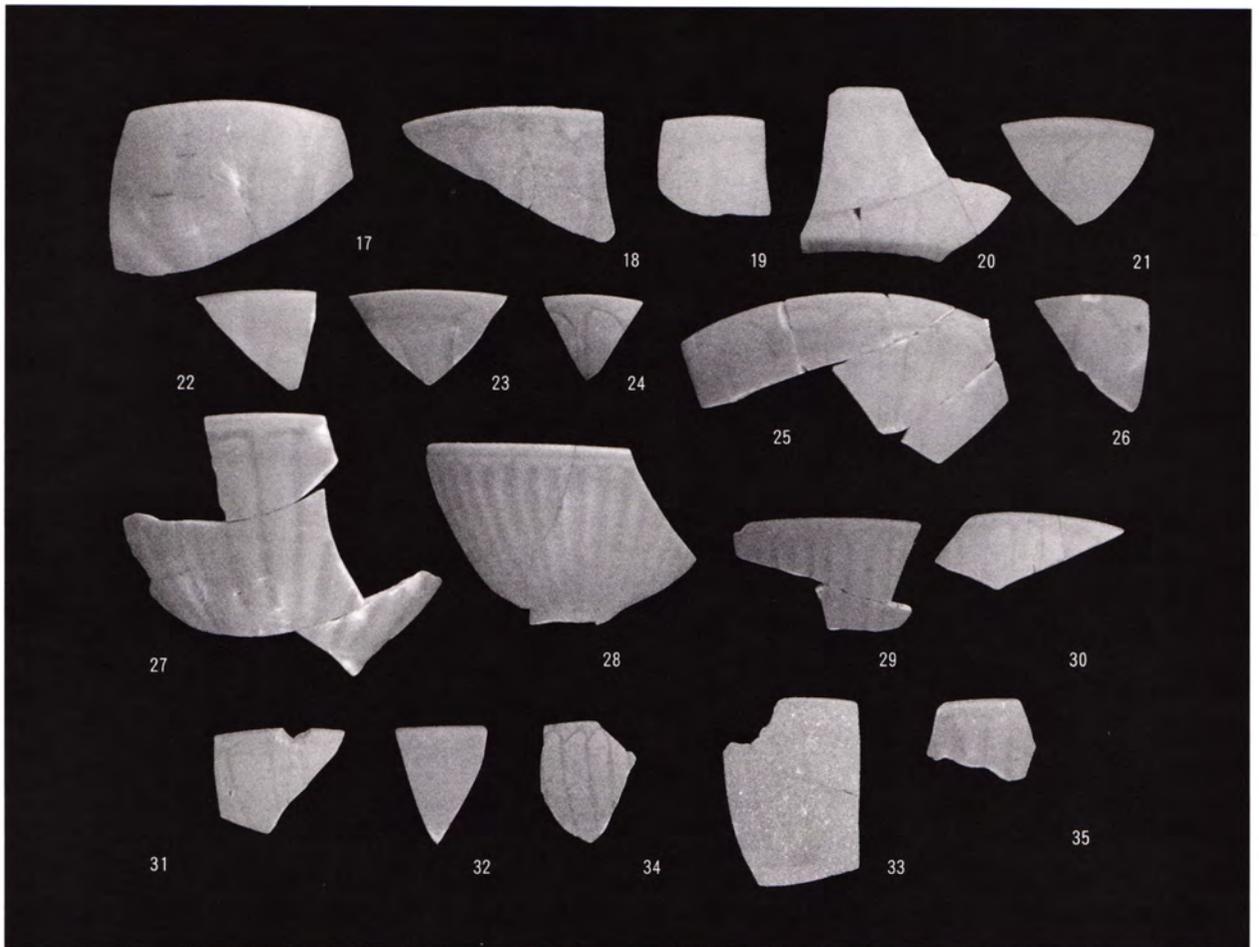
図版35 白磁<4> 外反口縁碗、碗底部、皿(上:外面、下:内面)



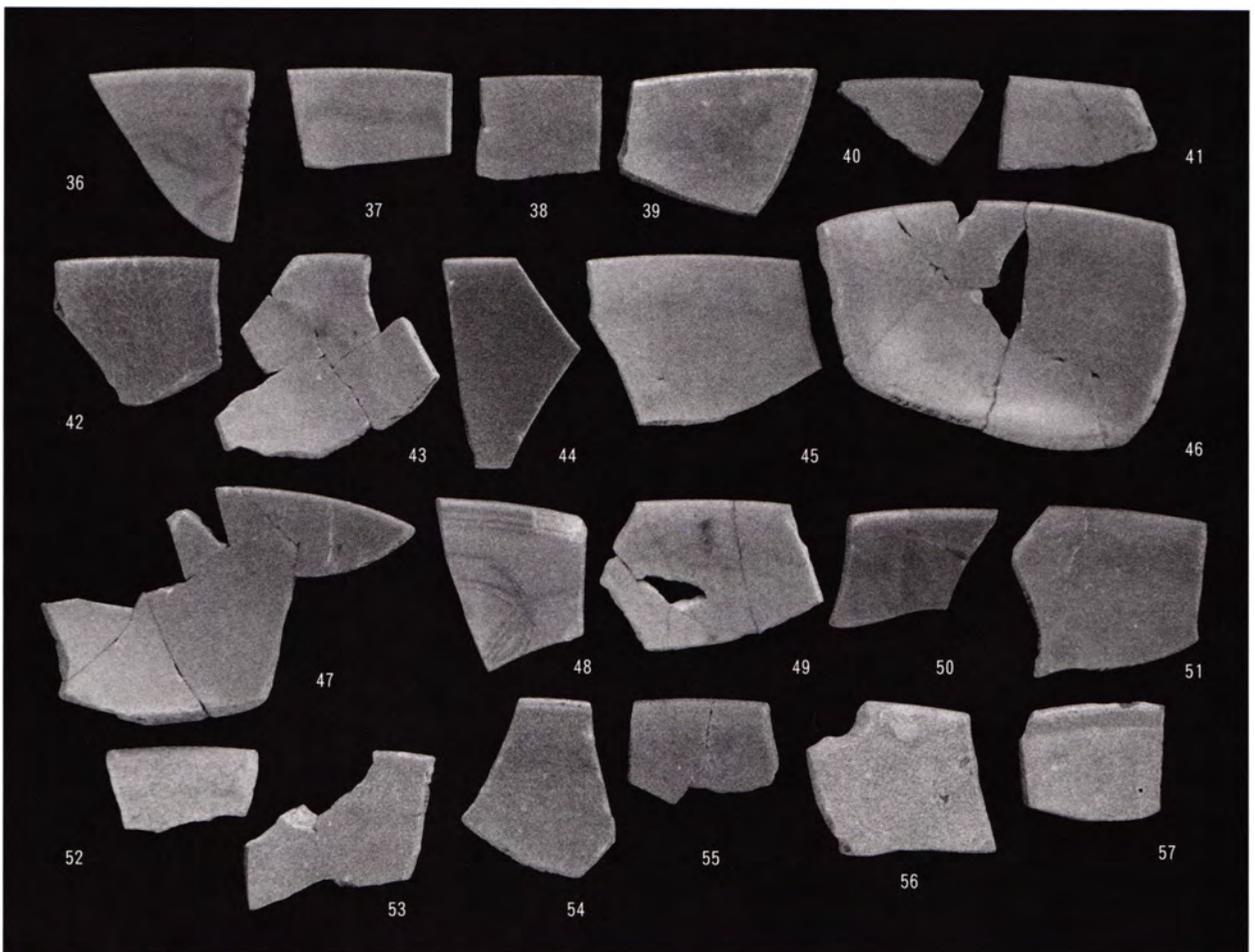
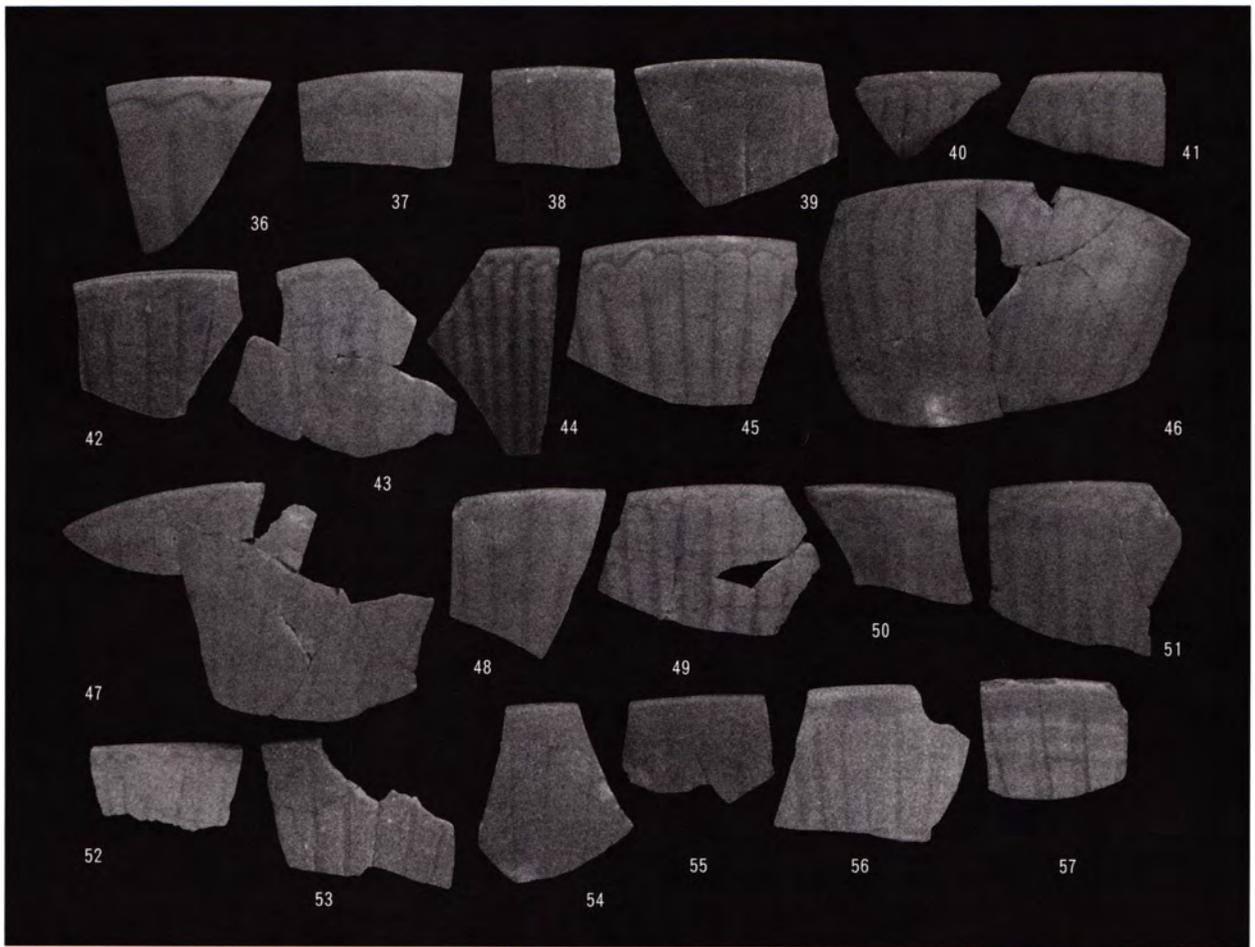
图版36 白磁<5> 皿 (上:外面、下:内面)



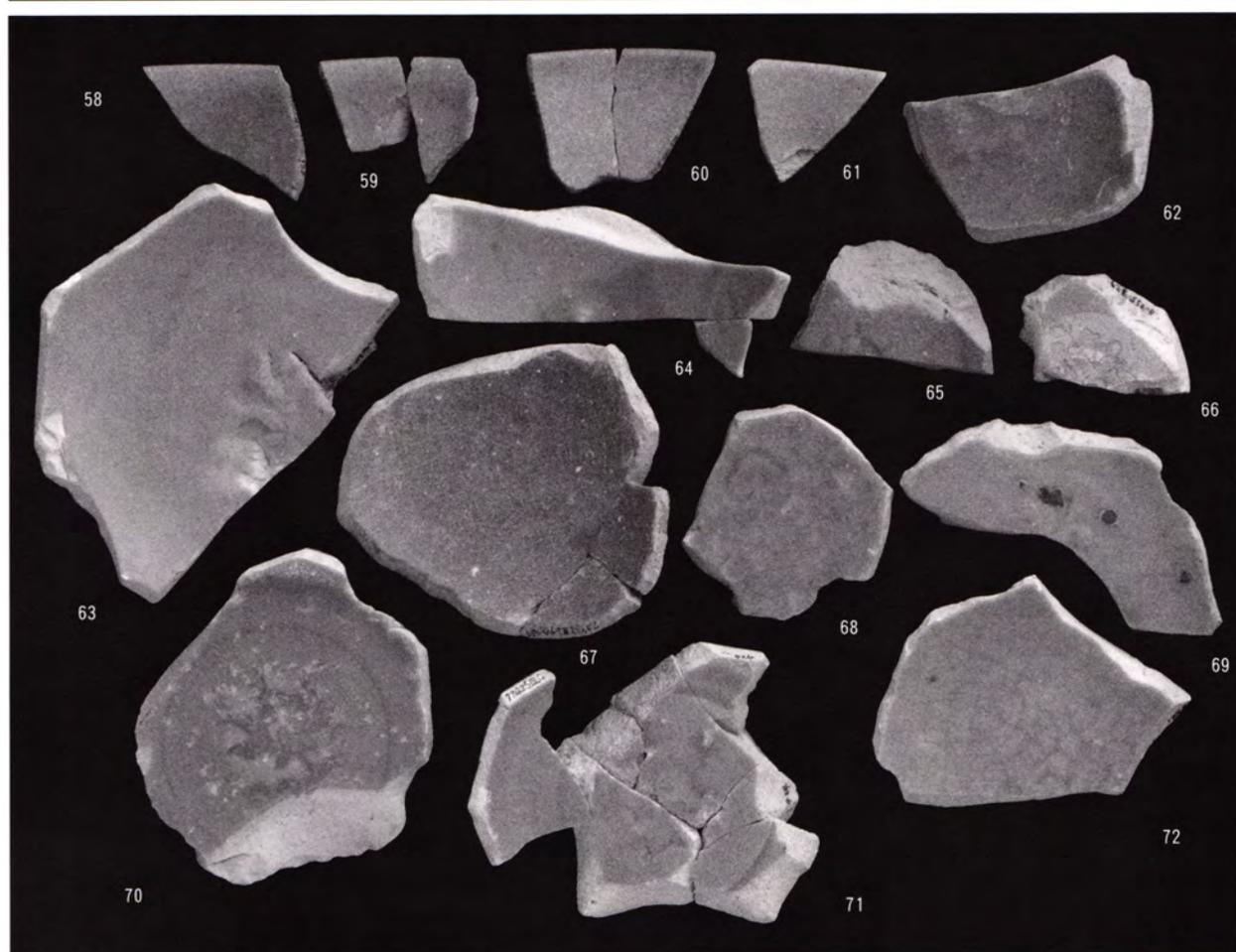
图版37 青磁<1> 碗 (劃花文、鎬蓮弁文) (上:外面、下:内面)



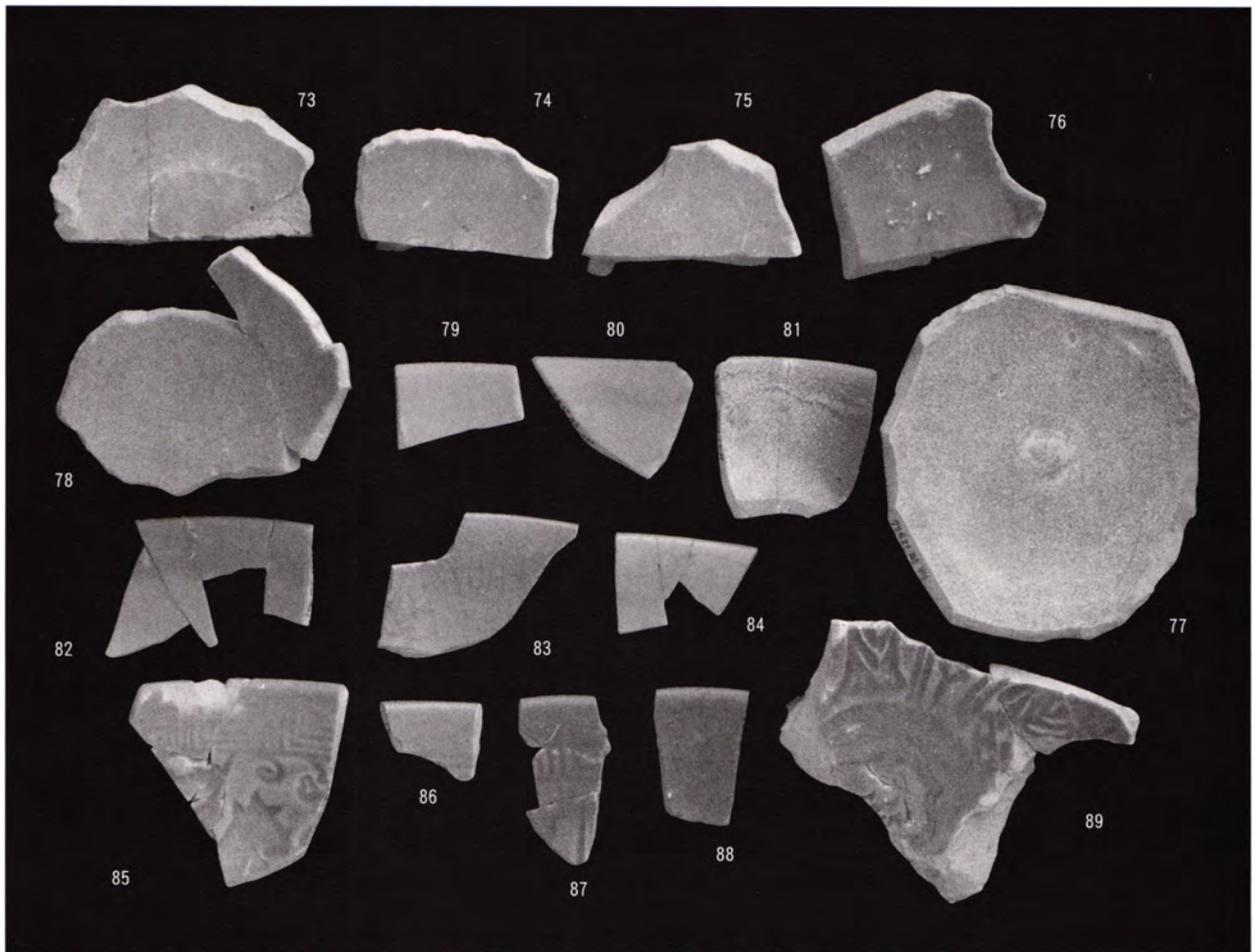
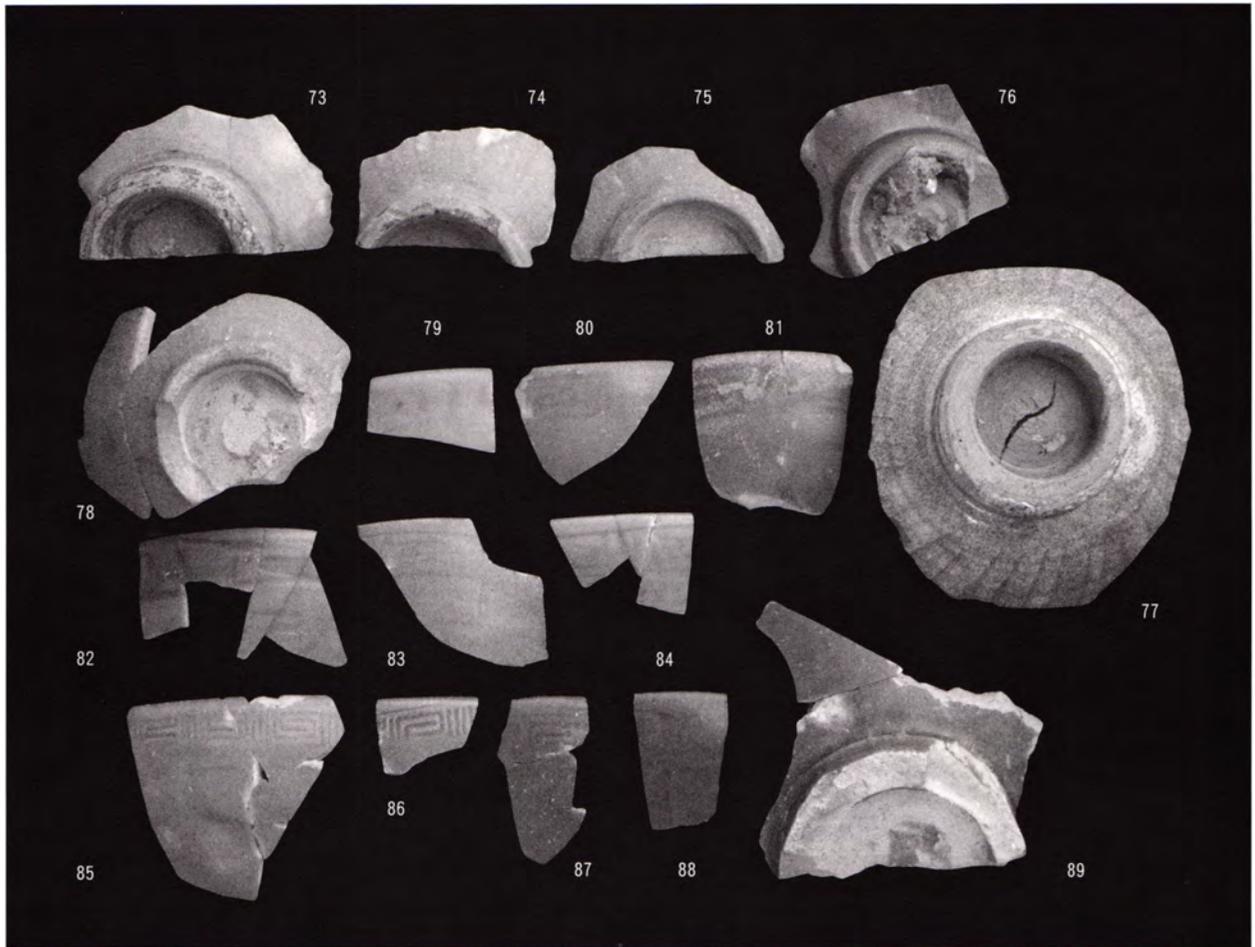
図版38 青磁<2> 碗 (蓮弁文) (上:外面、下:内面)



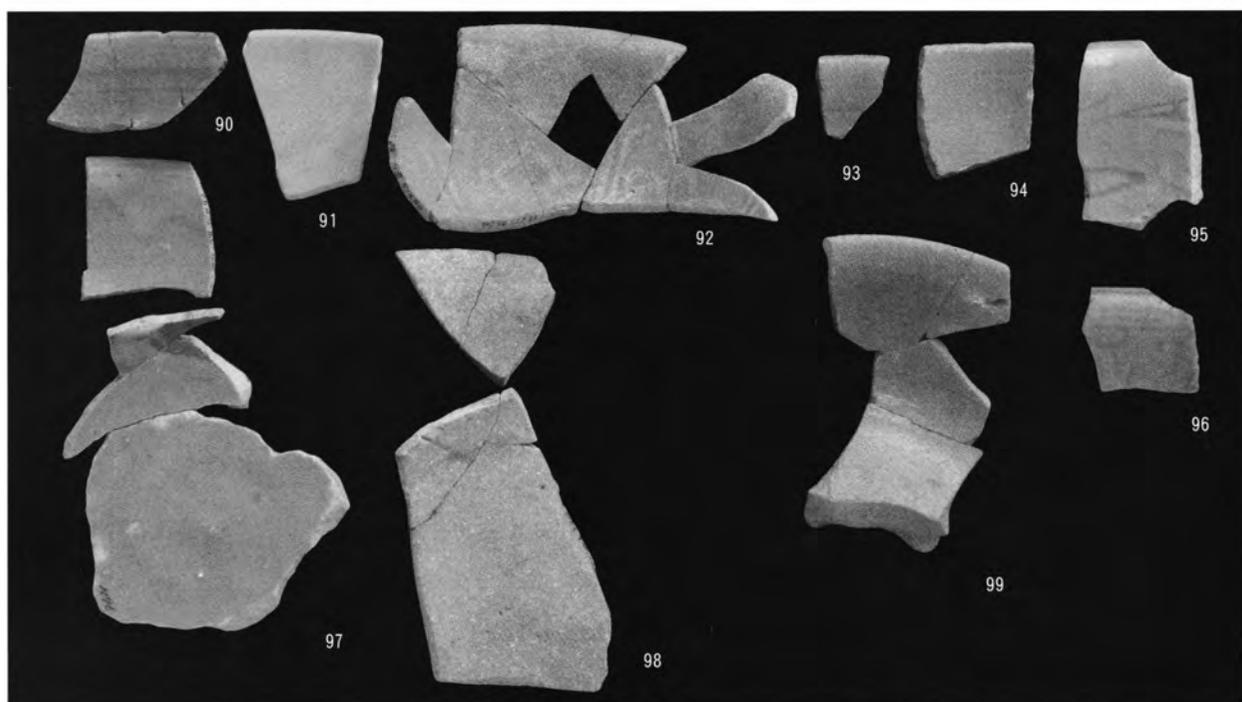
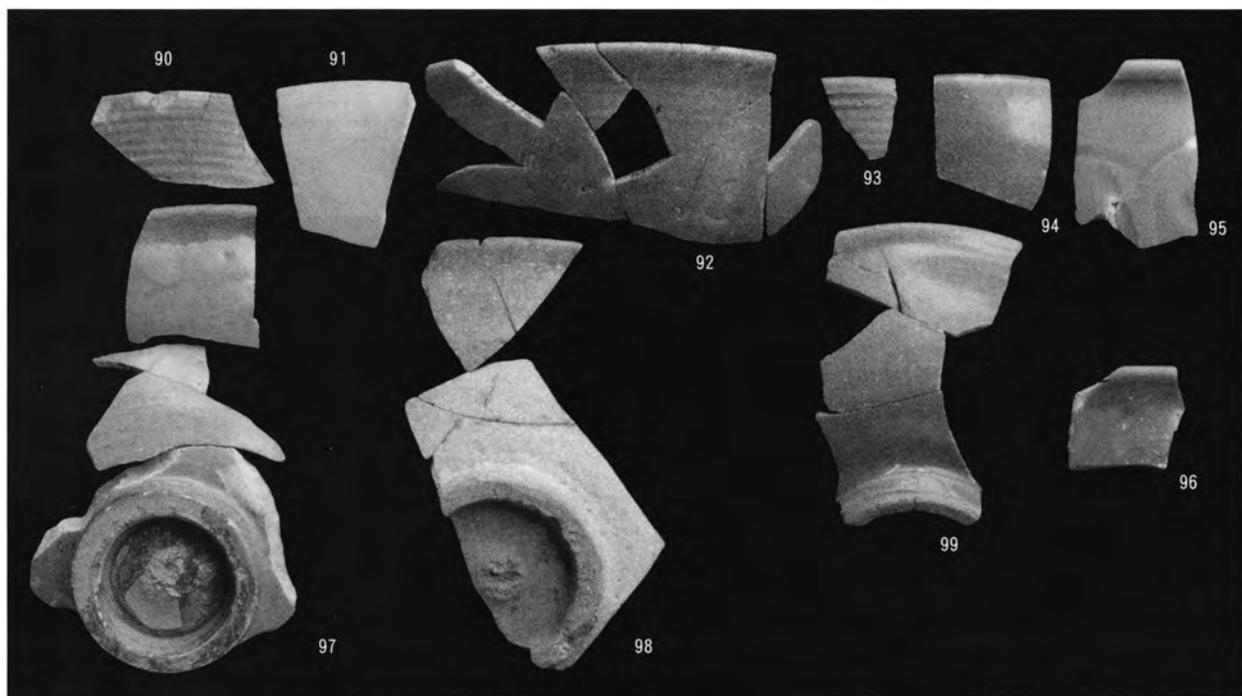
図版39 青磁<3> 碗 (蓮弁文) (上:外面、下:内面)



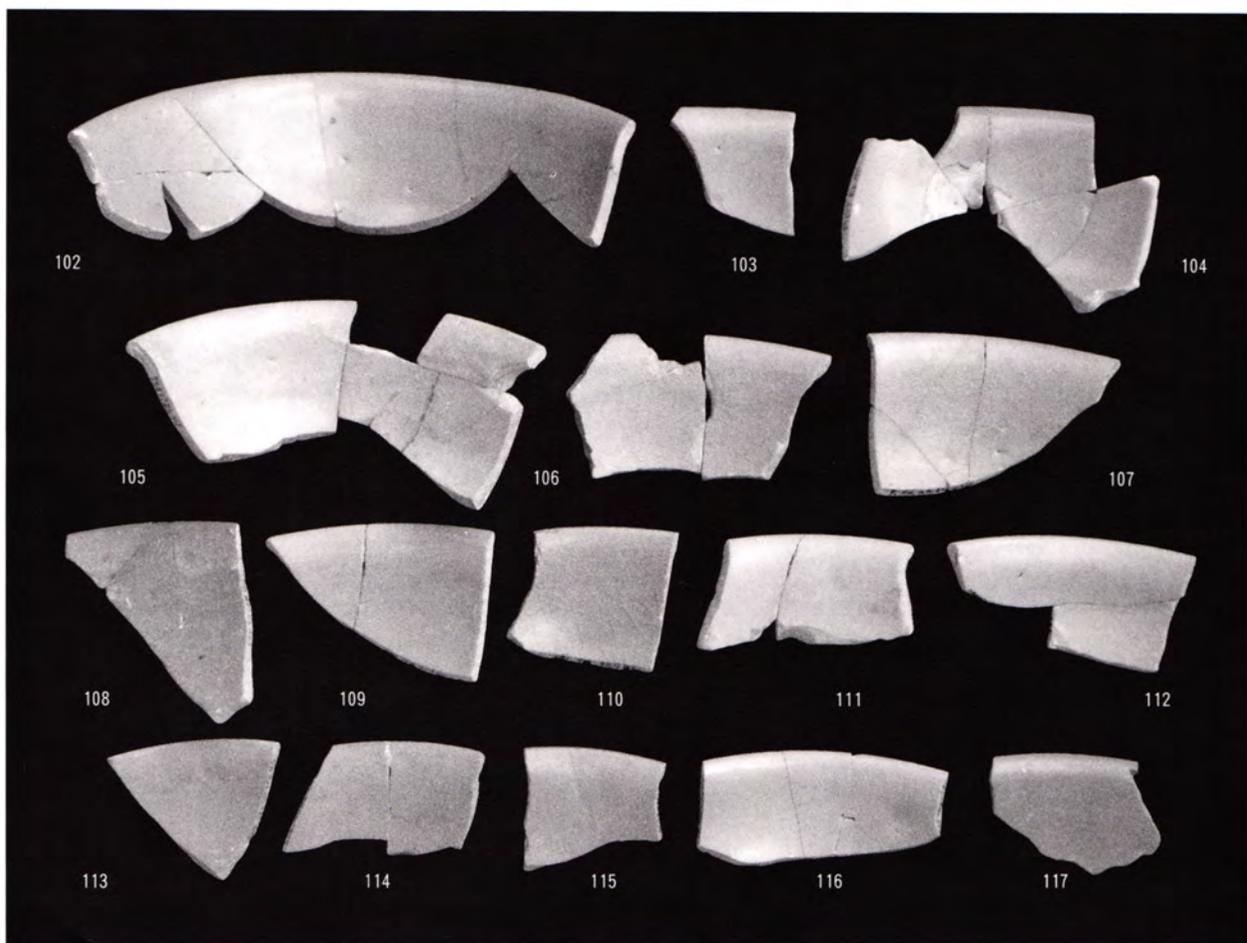
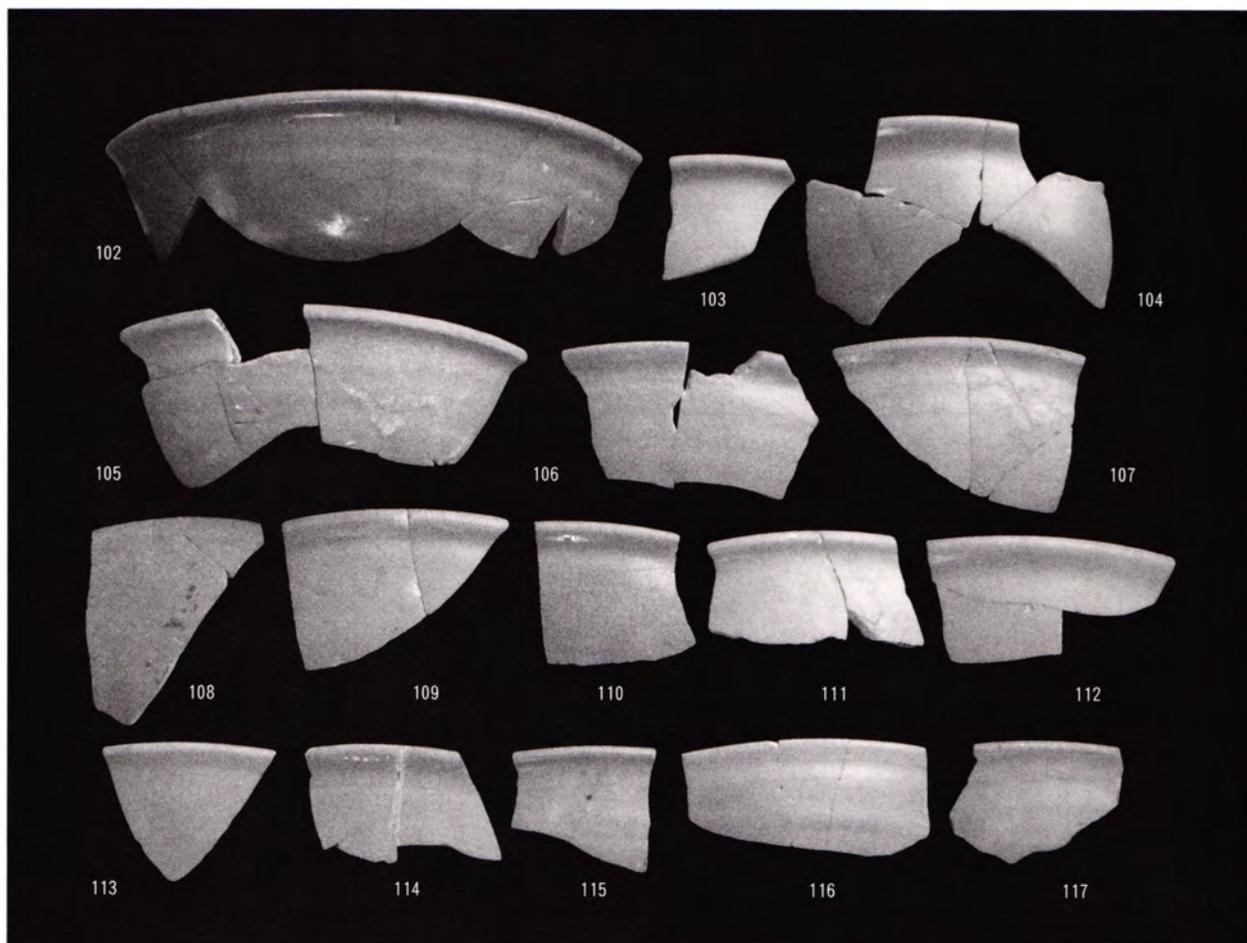
図版40 青磁<4> 碗(蓮弁文)(上:外面、下:内面)



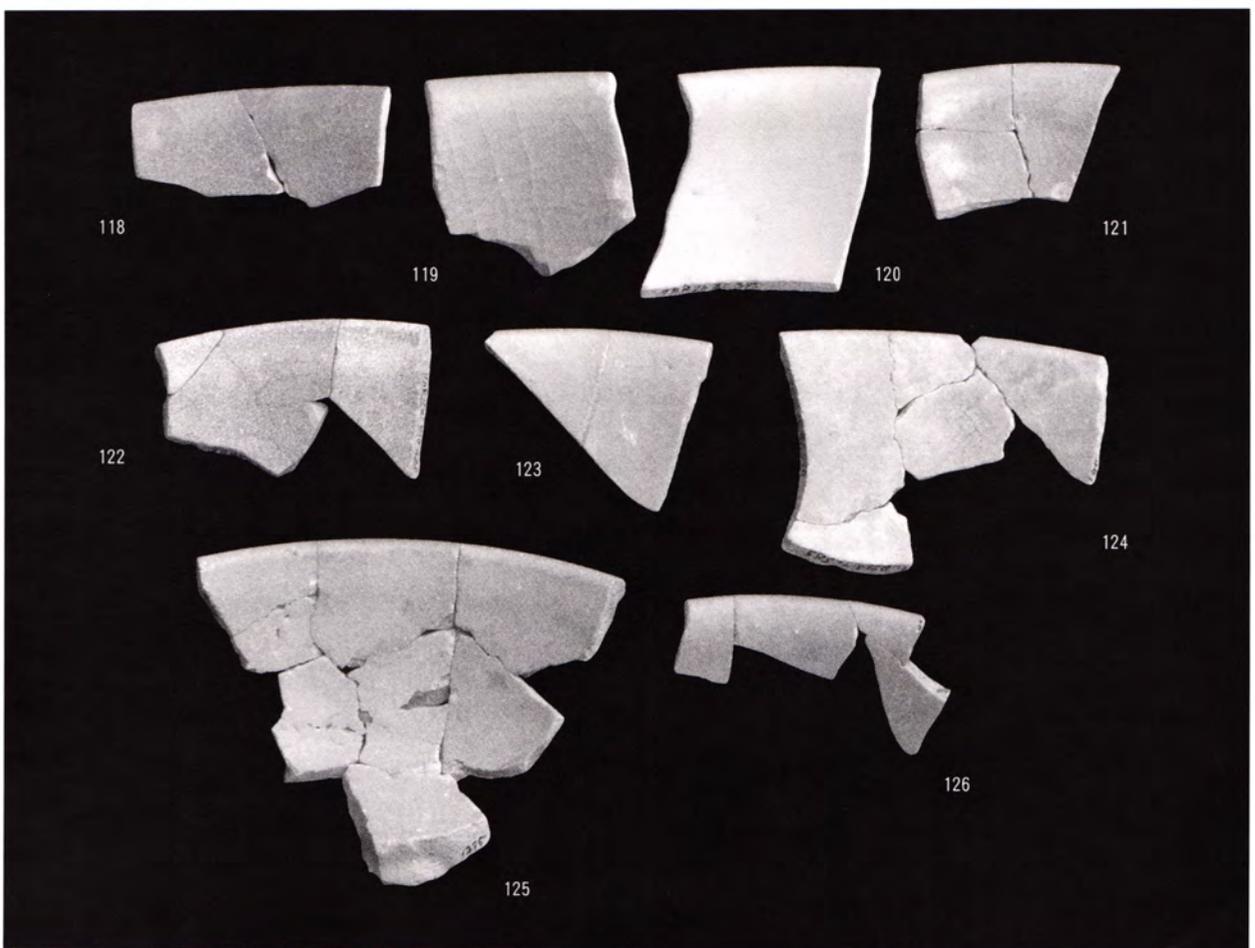
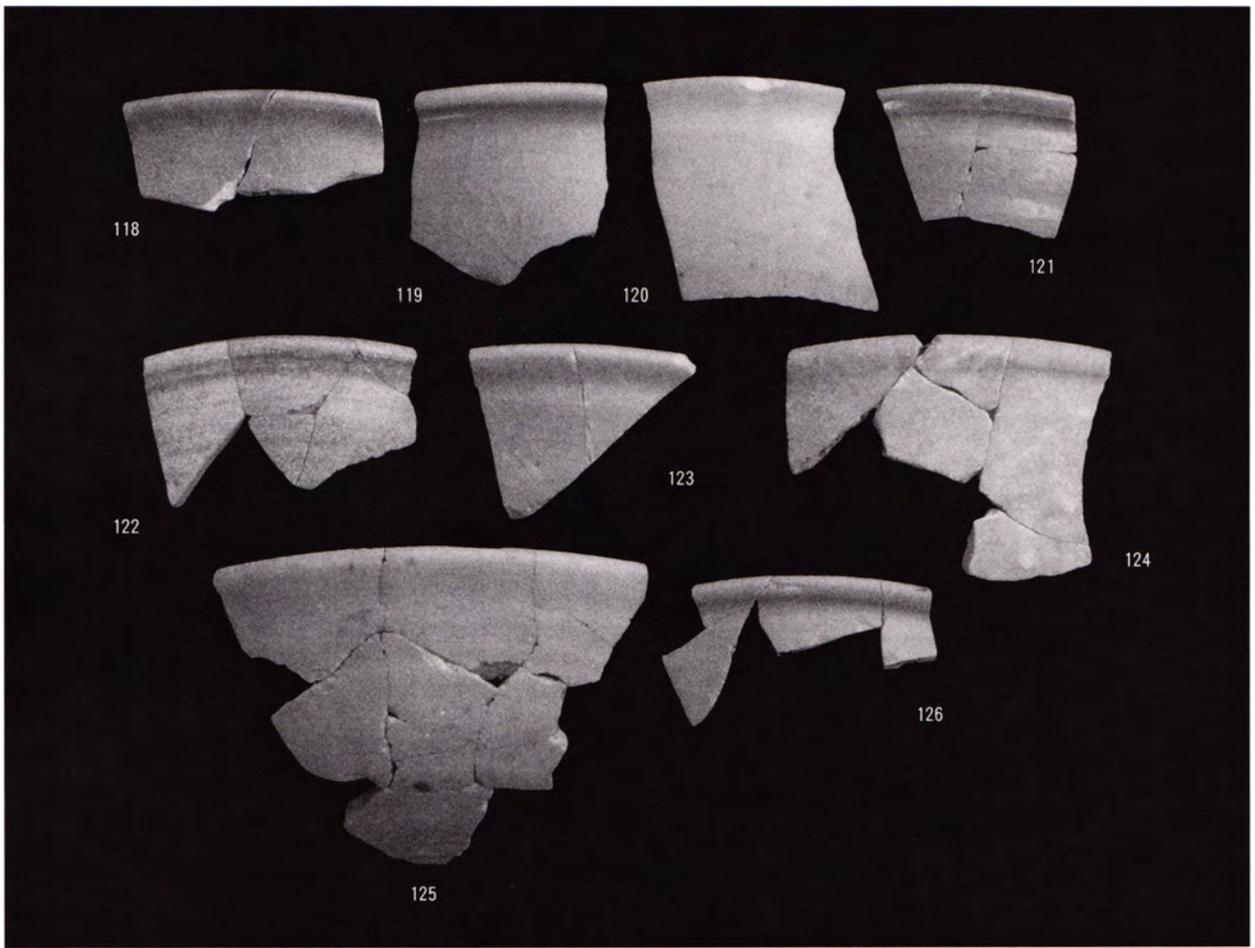
図版41 青磁<5> 碗(蓮弁文、雷文帯) (上:外面、下:内面)



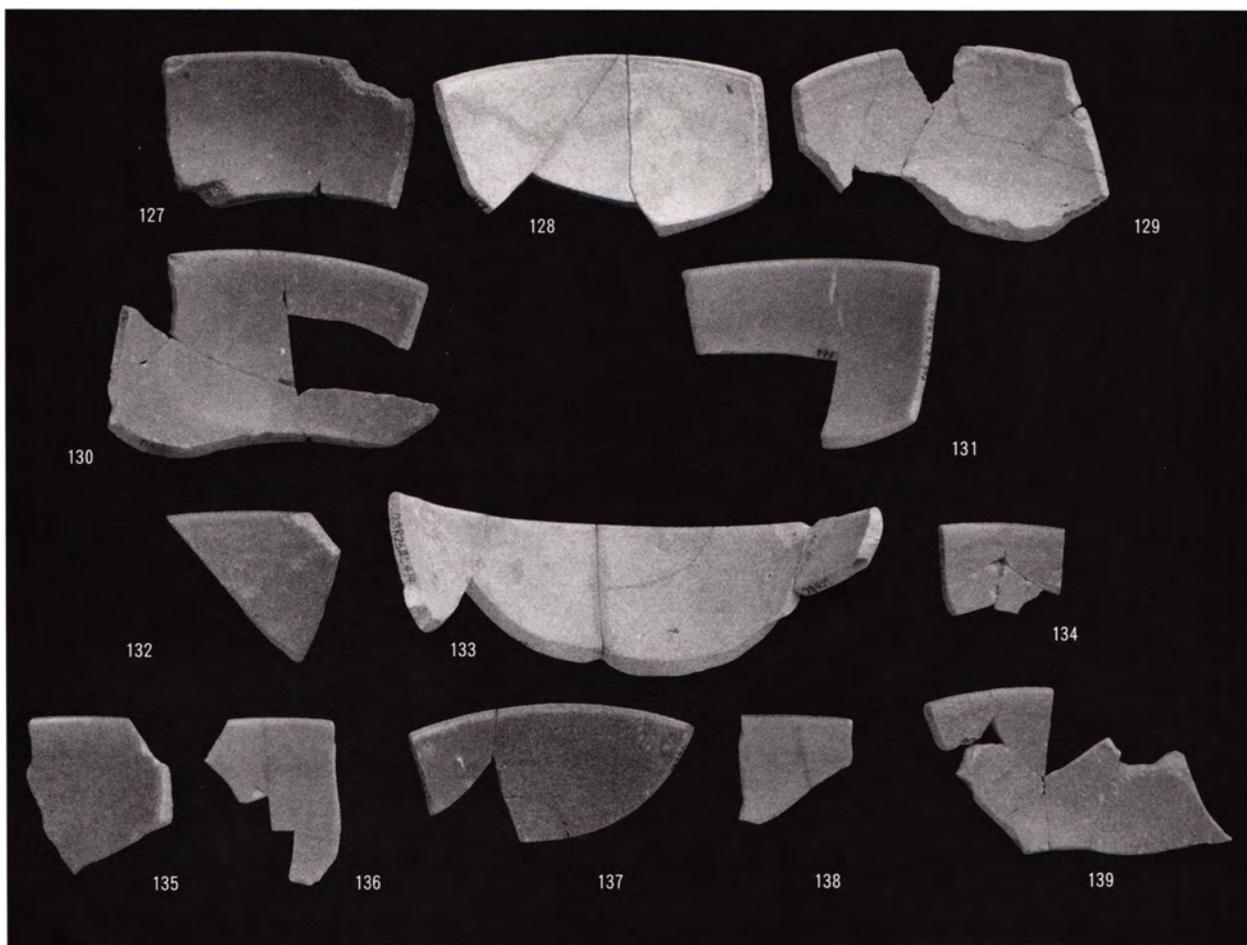
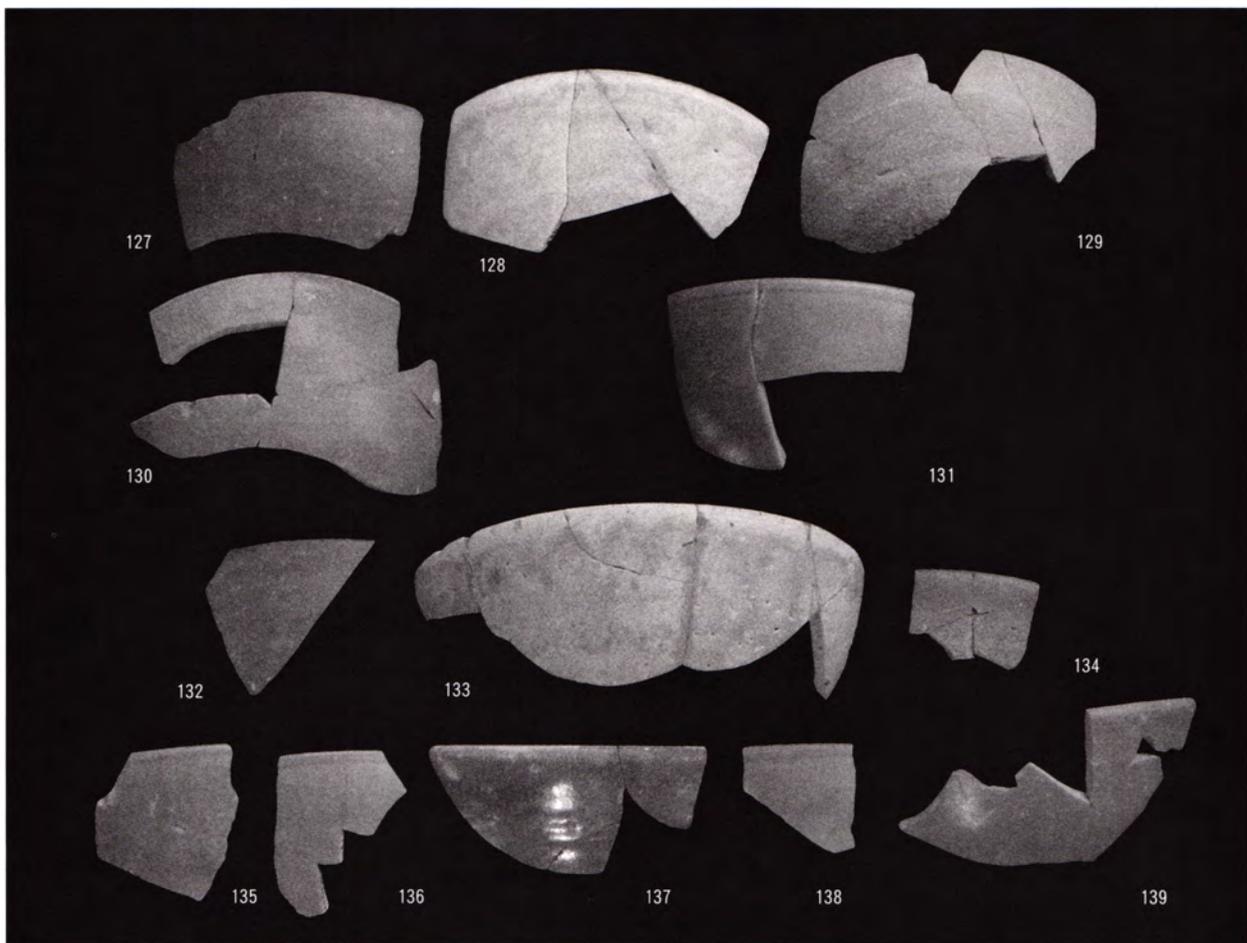
図版42 青磁<6> 碗(弦文帯)(上:外面、中:内面)無文碗(下左、下右)



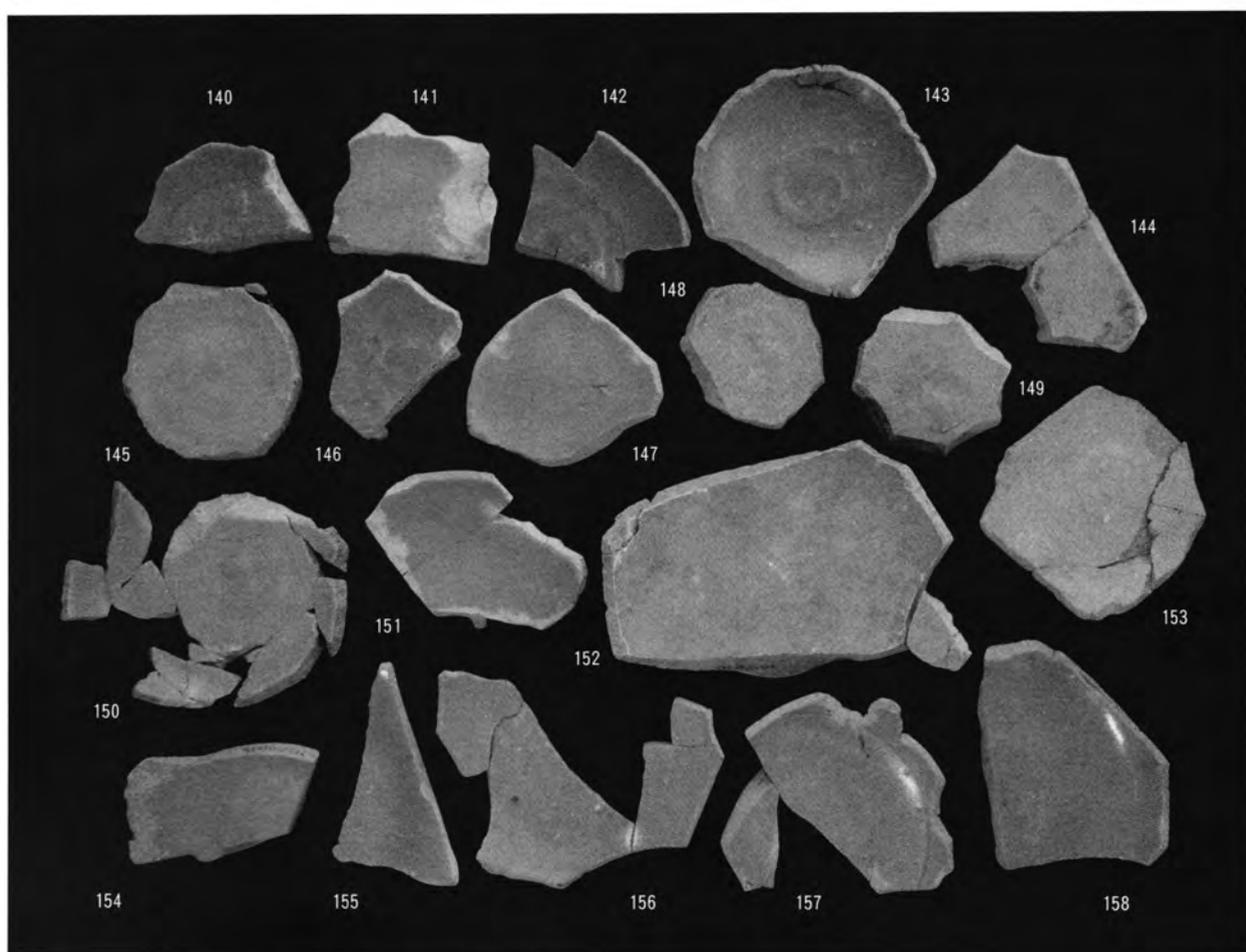
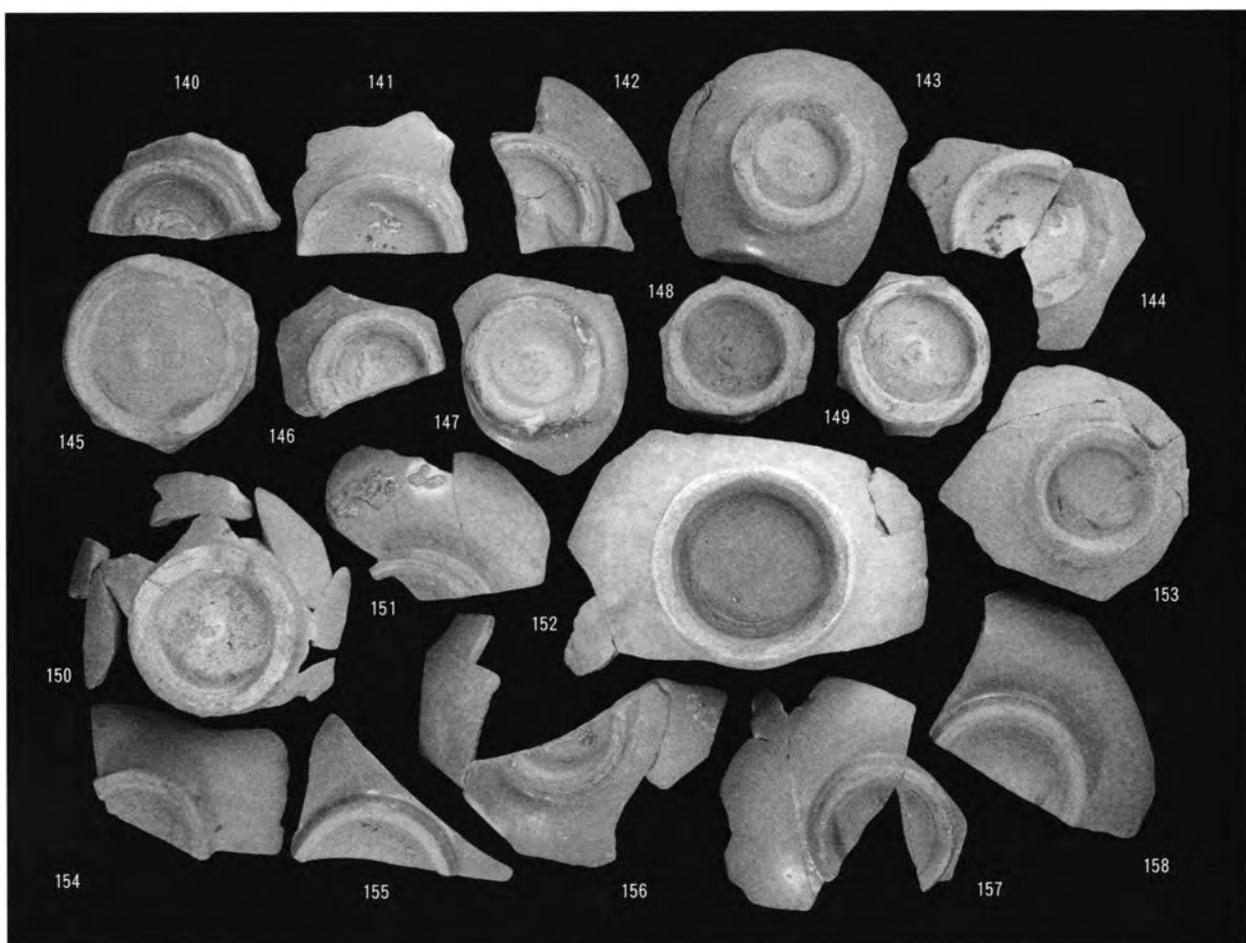
図版43 青磁<7> 碗 (外反口縁) (上:外面、下:内面)



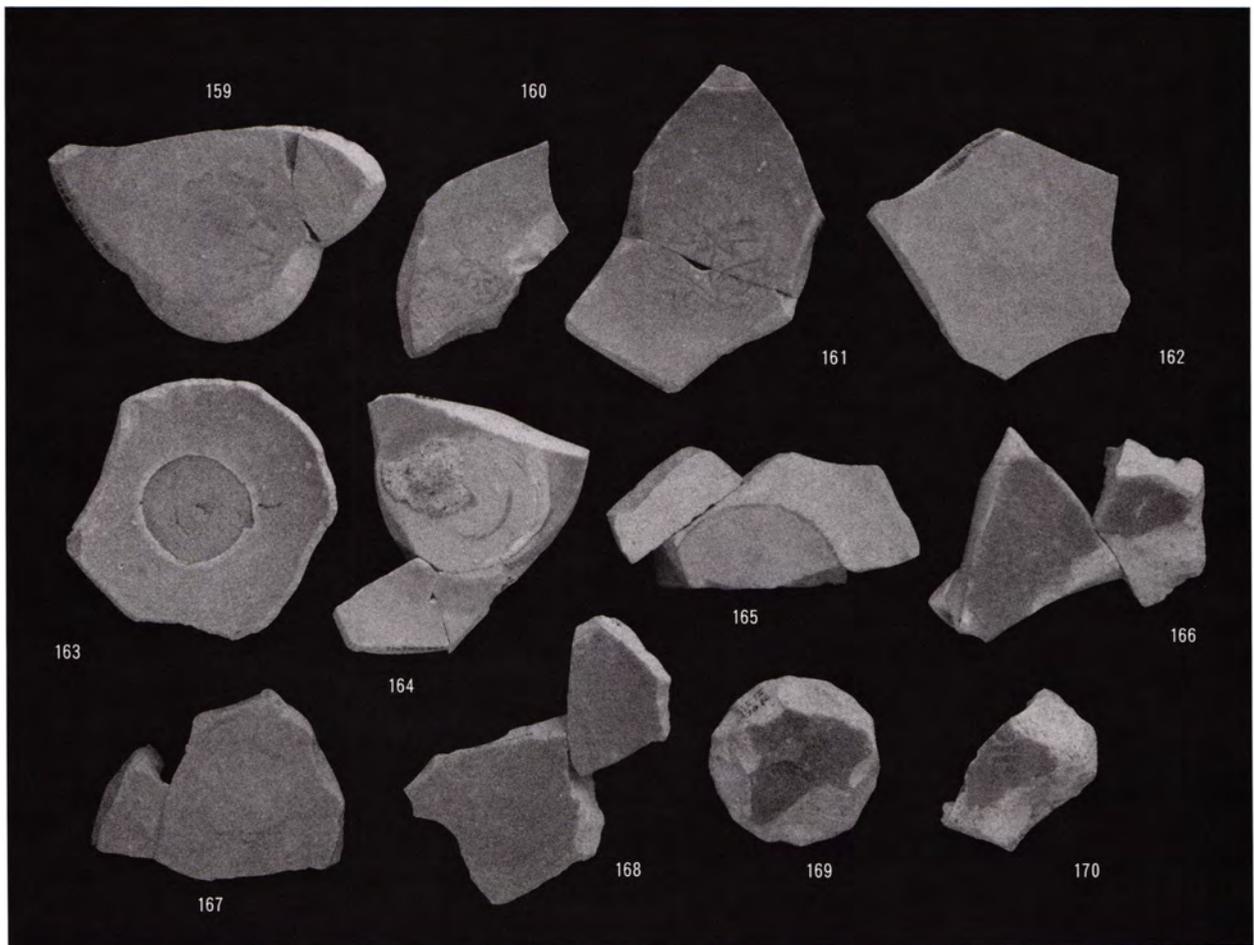
図版44 青磁<8> 碗 (外反口縁) (上:外面、下:内面)



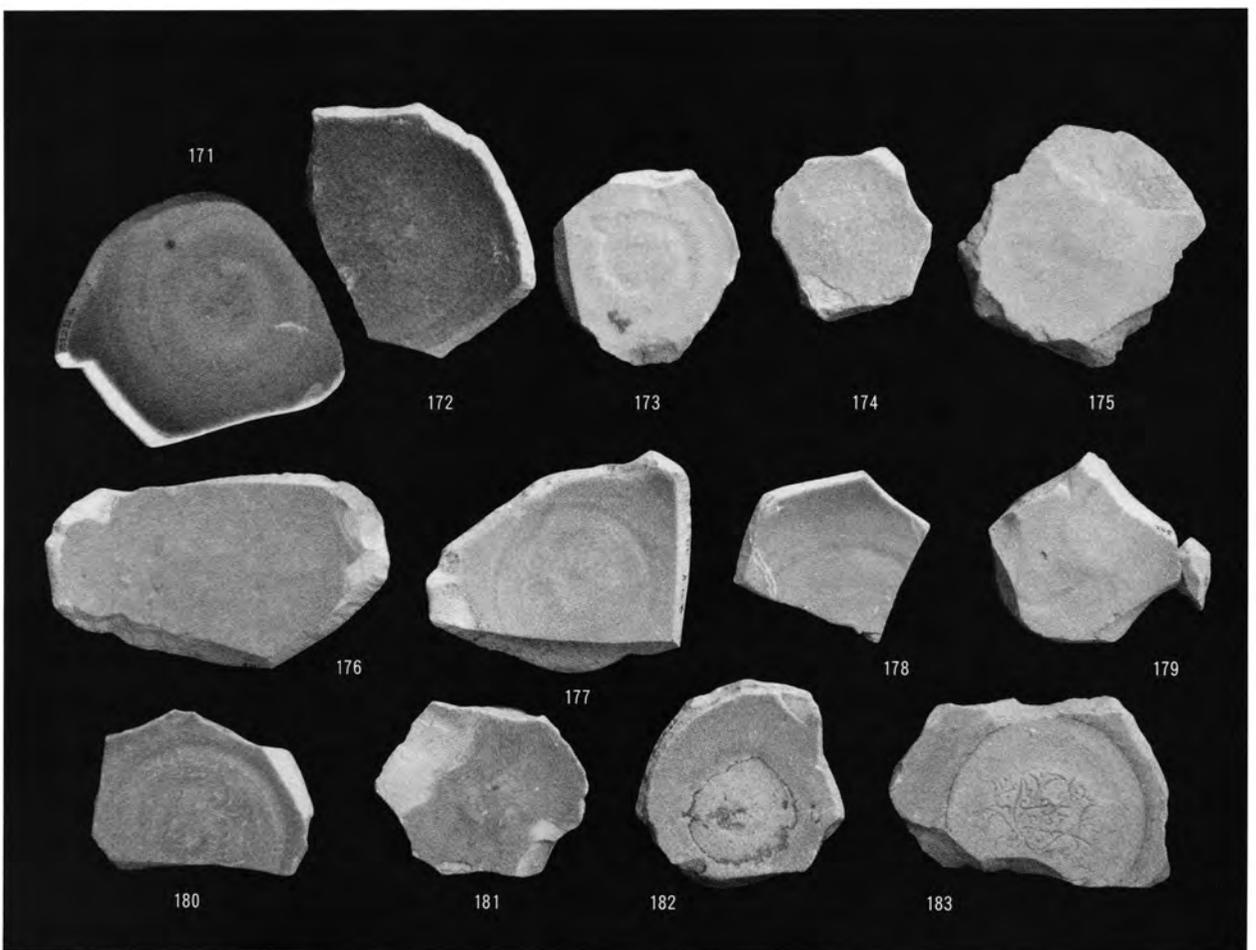
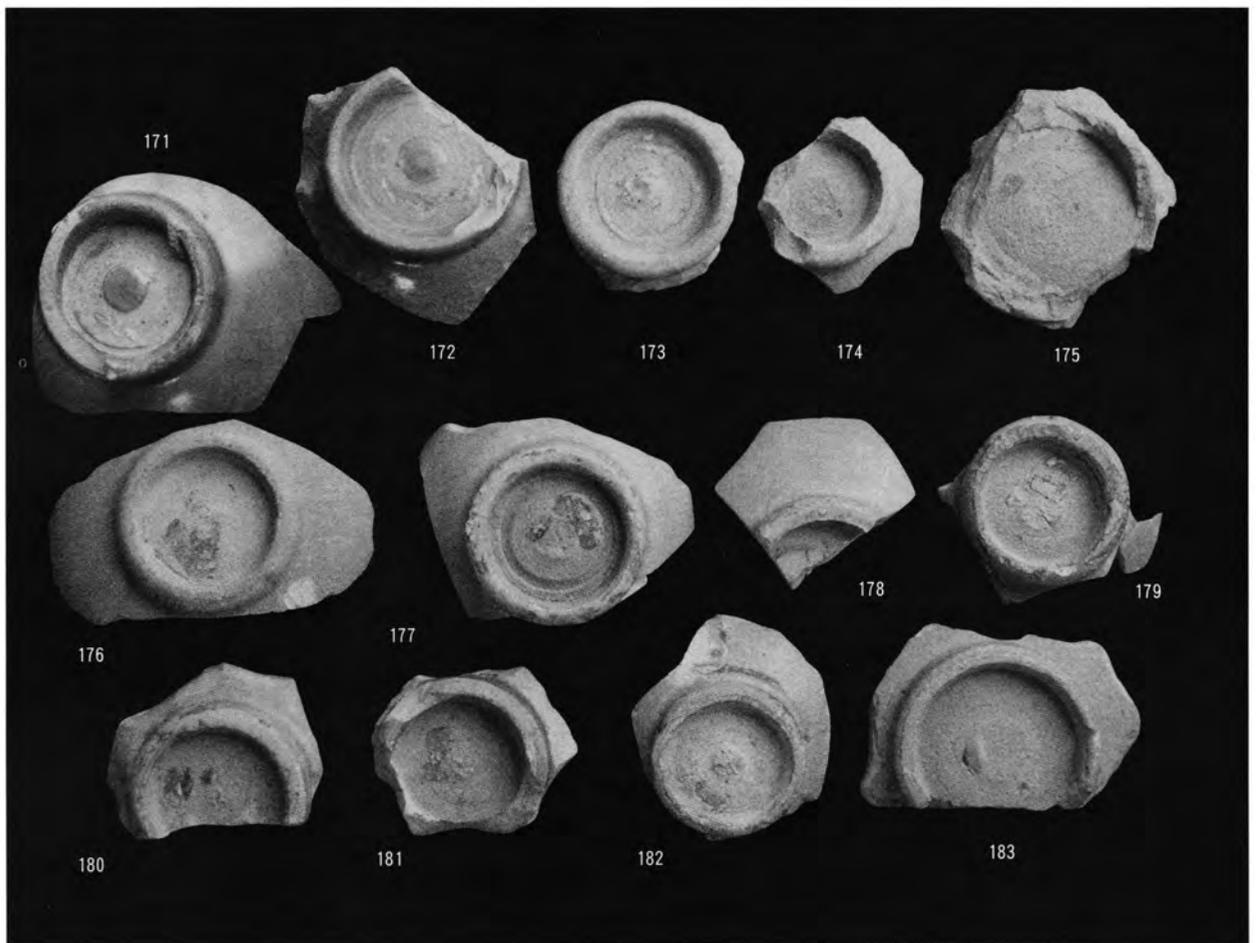
図版45 青磁<9> 碗 (直口口縁) (上:外面、下:内面)



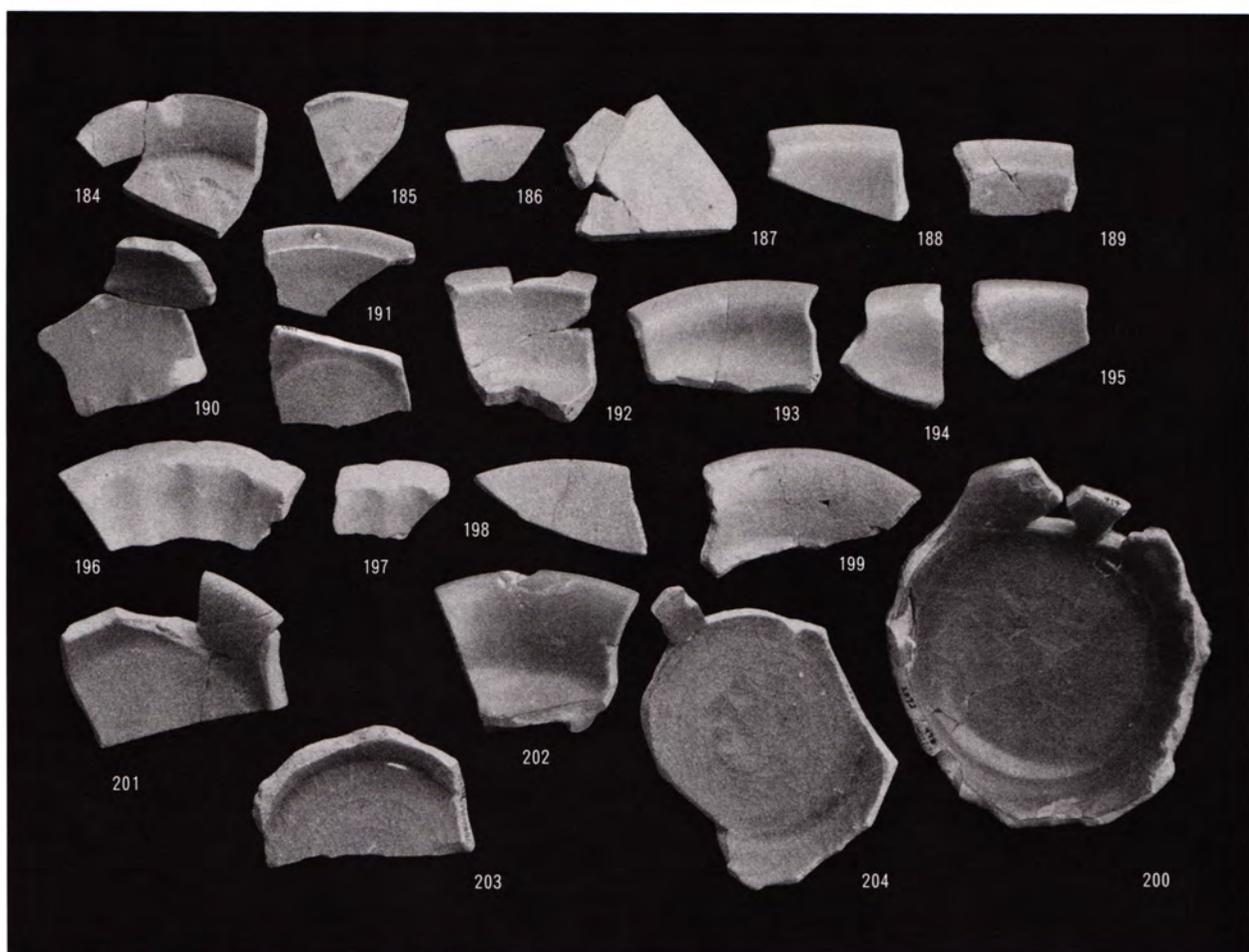
图版46 青磁<10> 碗 底部 (上:外面、下:内面)



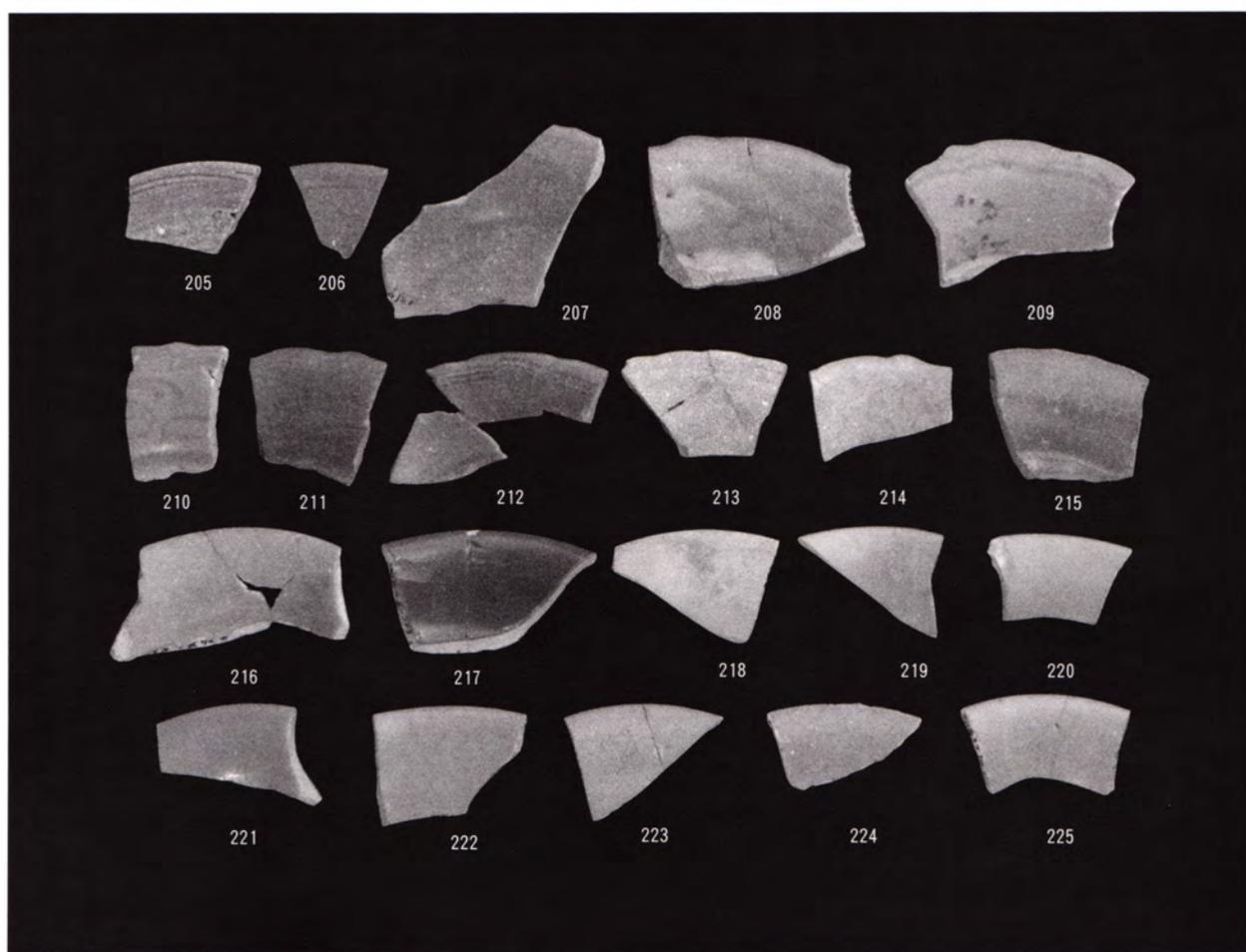
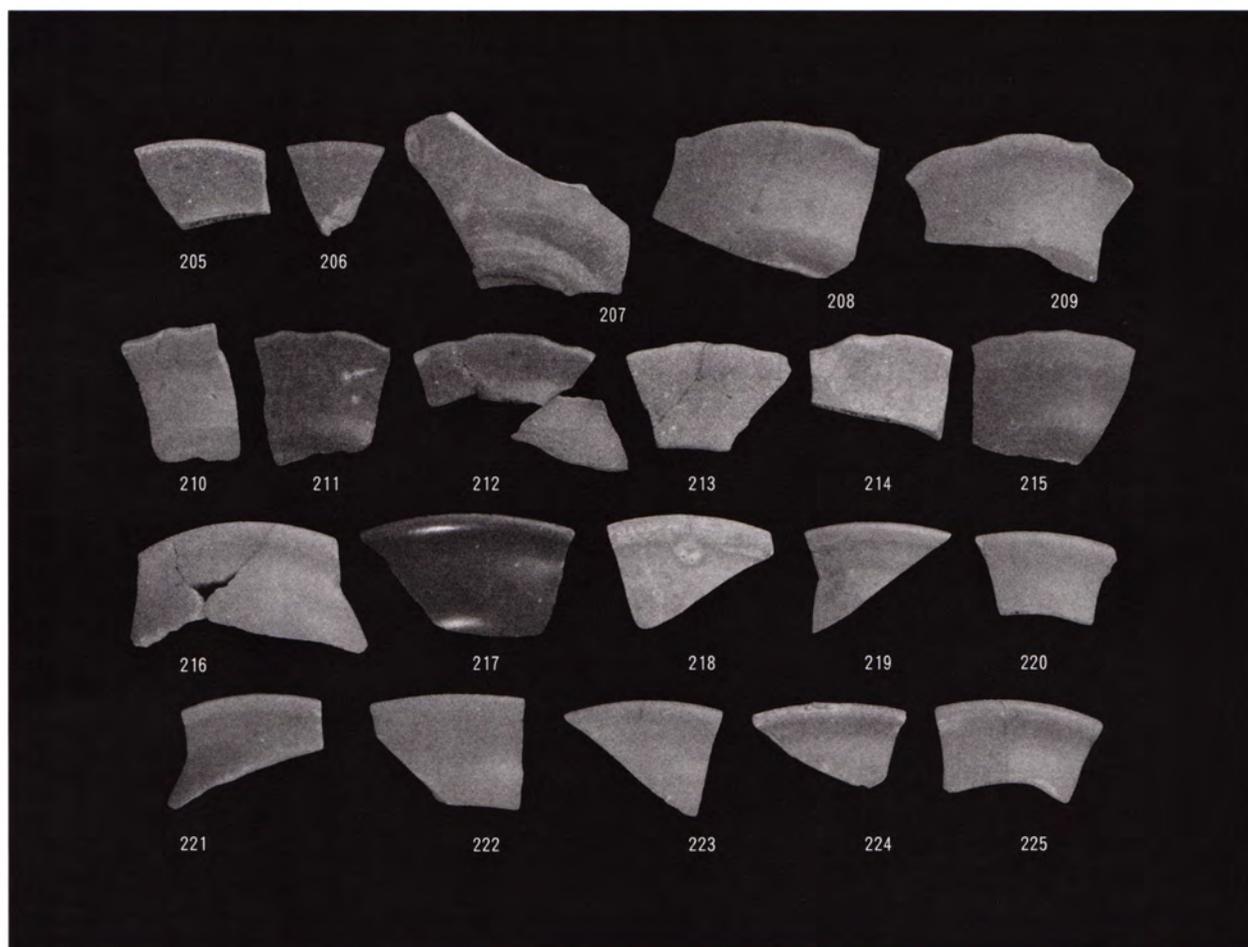
图版47 青磁<11> 碗 底部 (上:外面,下:内面)



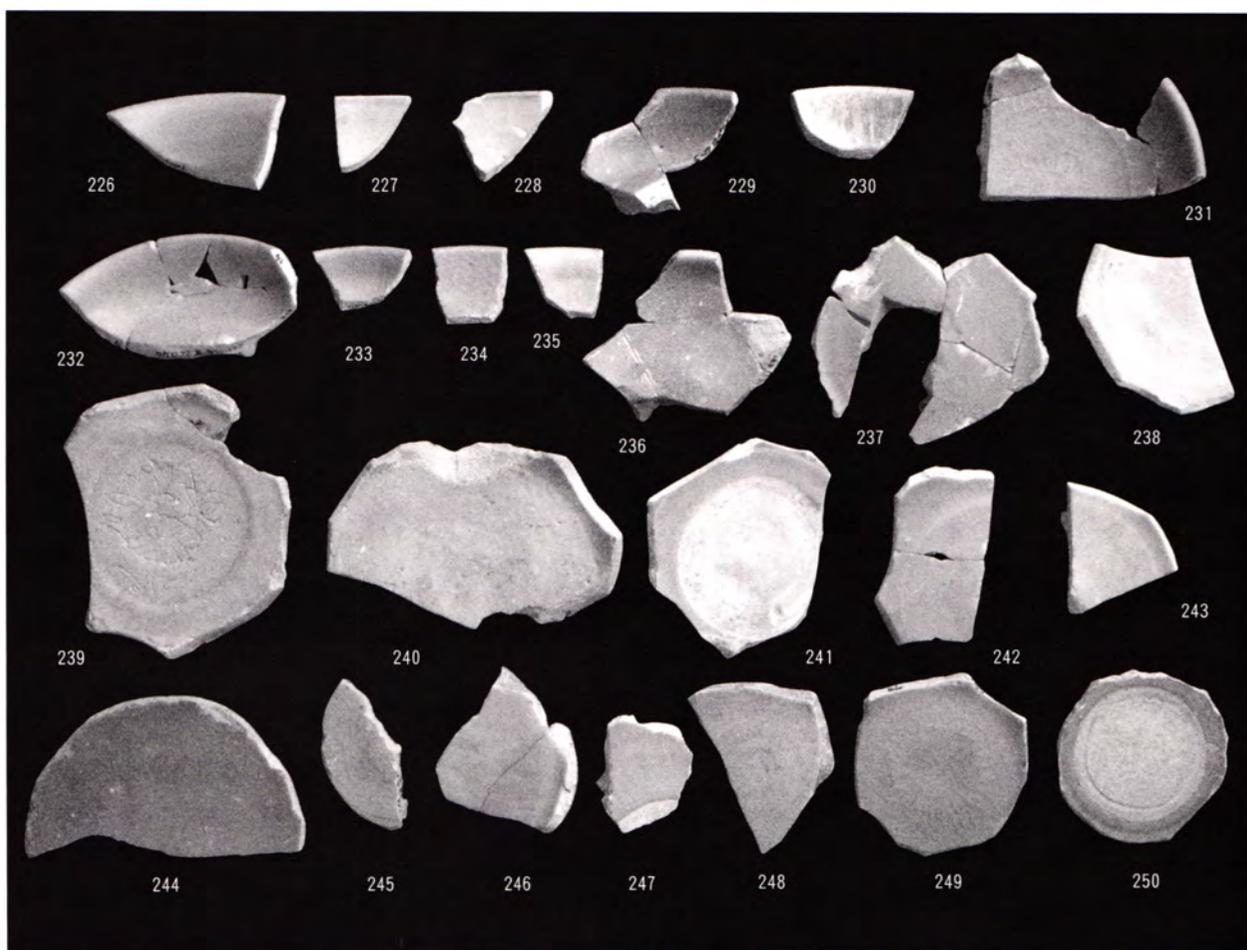
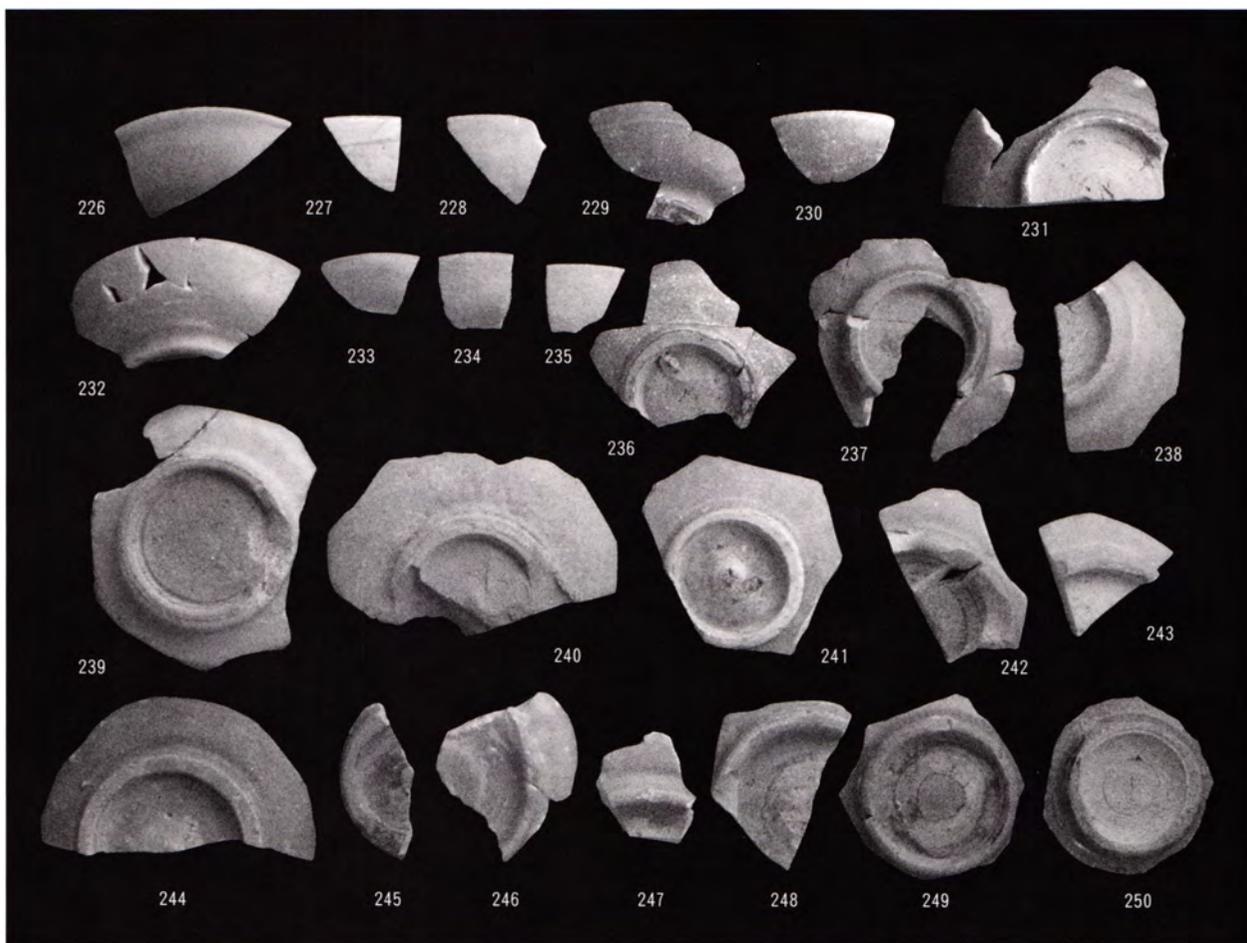
图版48 青磁<12> 碗 底部 (上:外面、下:内面)



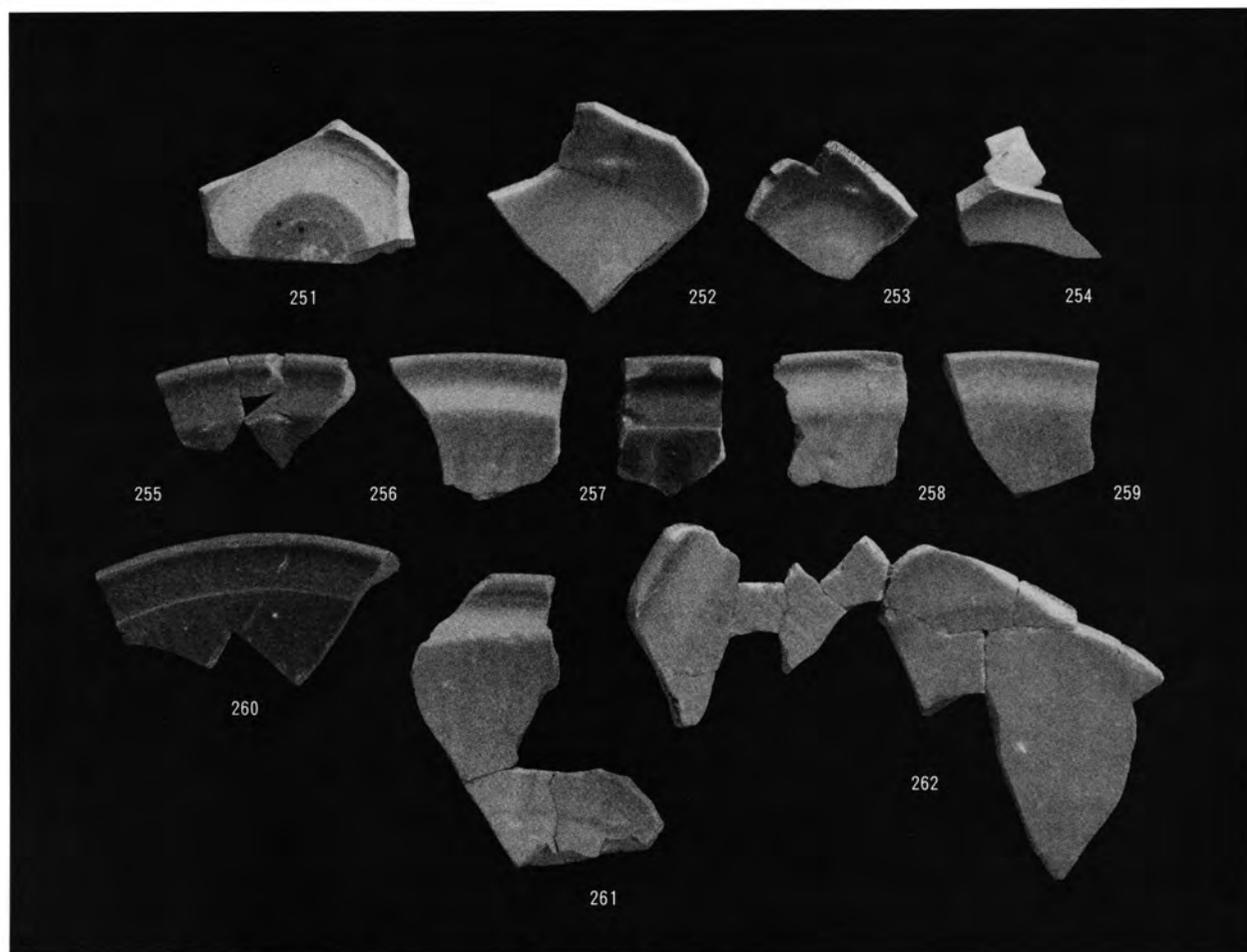
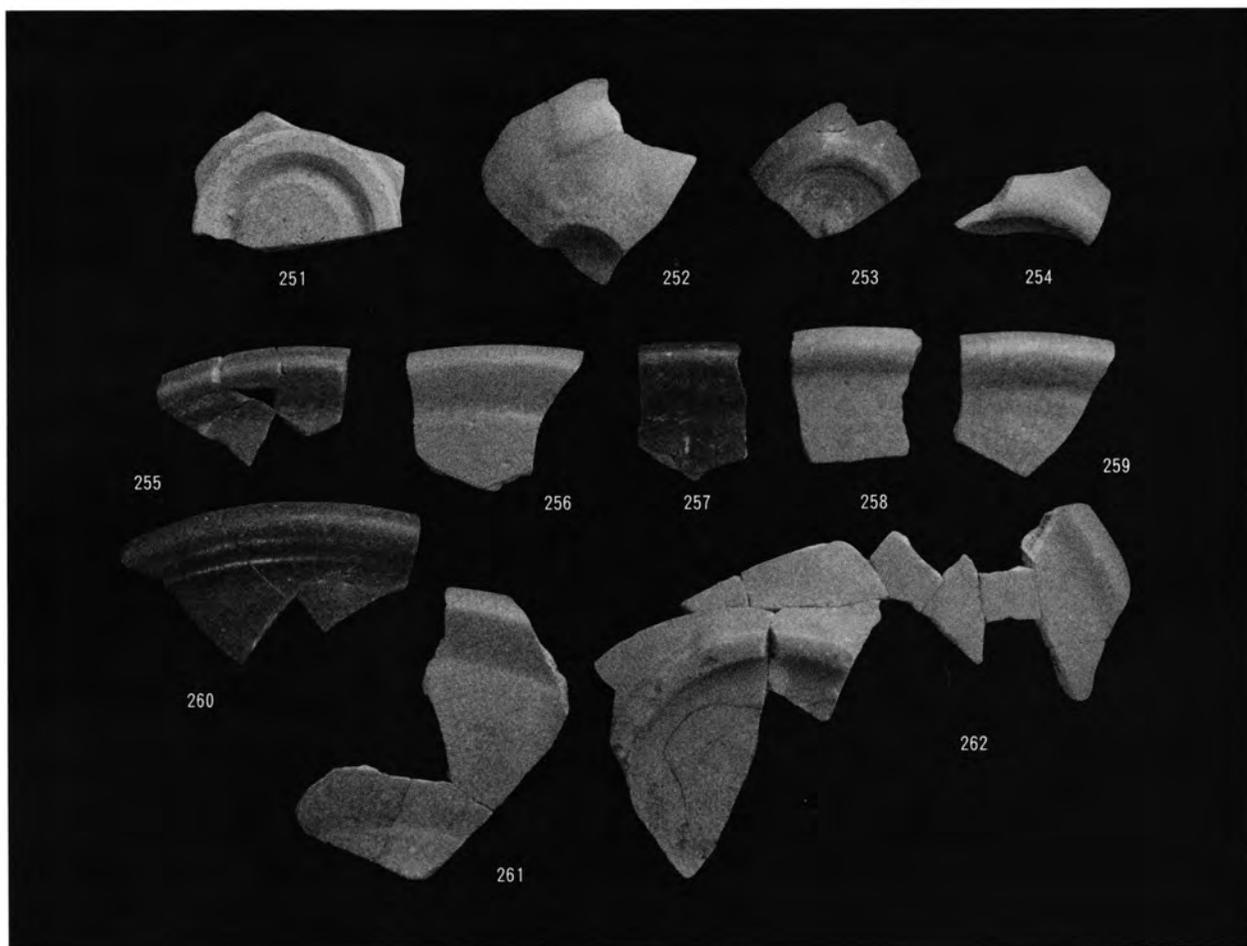
図版49 青磁<13> 皿（櫛描文、口折口縁、腰折）（上：外面、下：内面）



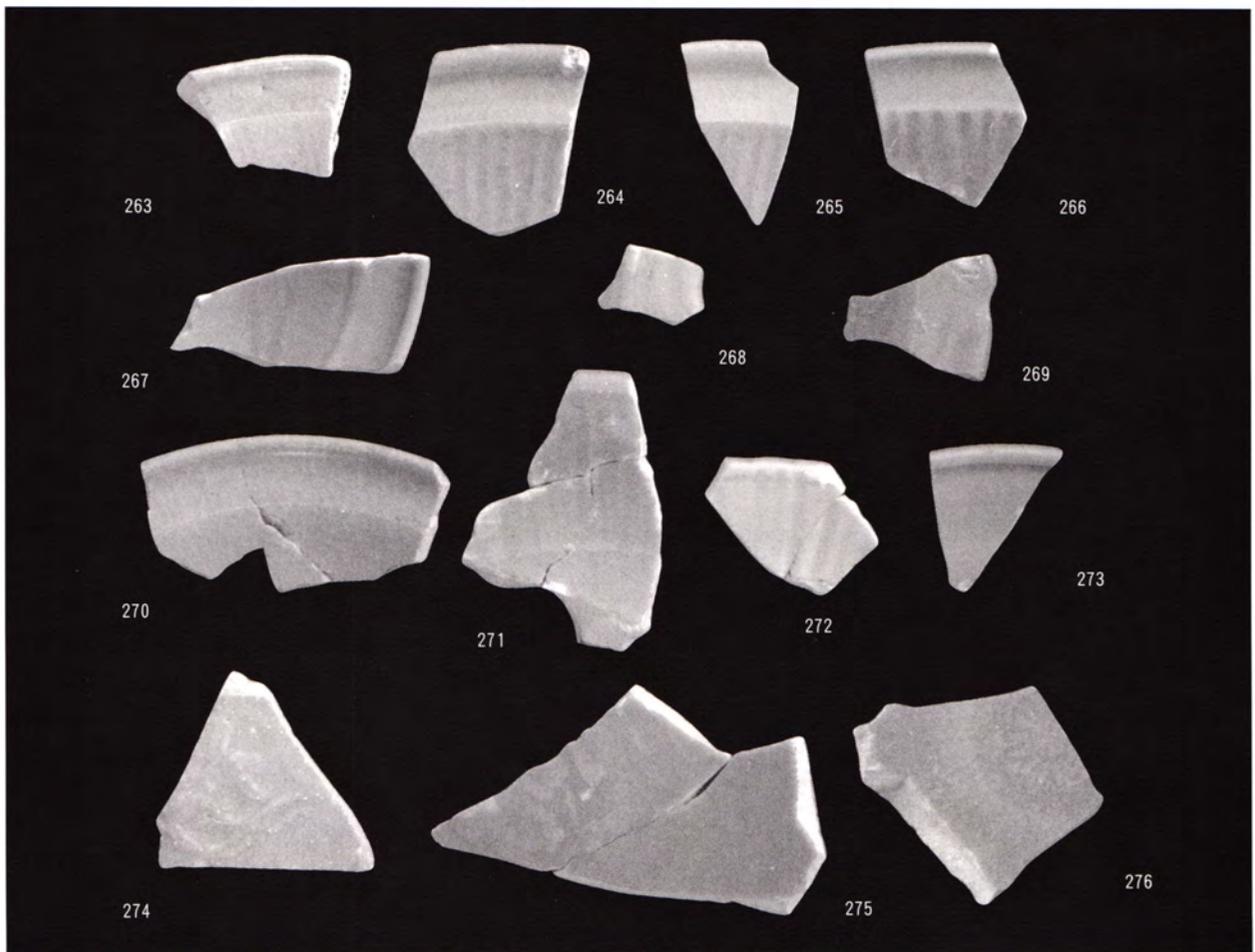
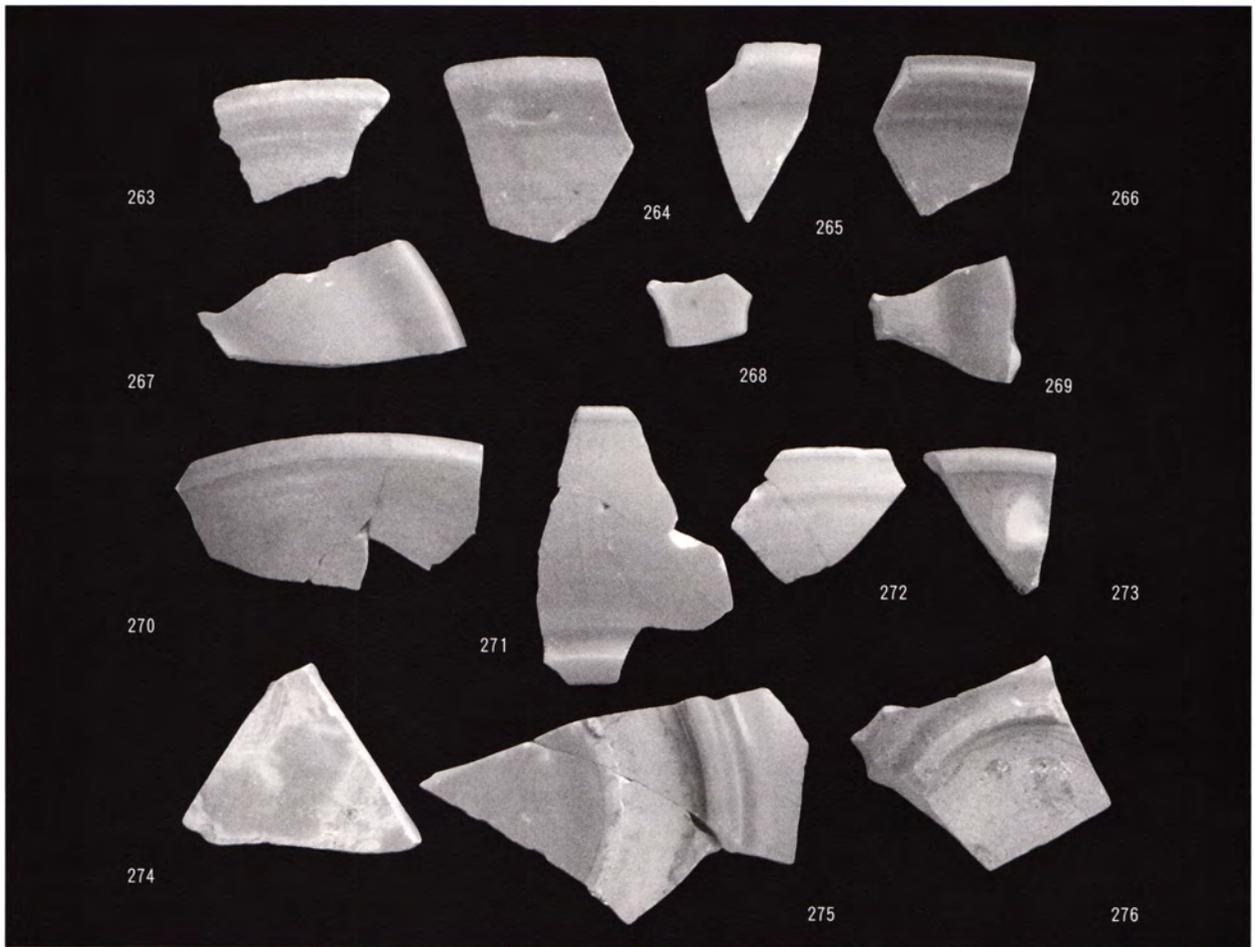
図版50 青磁<14> 皿（稜花、腰折、外反口縁）（上：外面、下：内面）



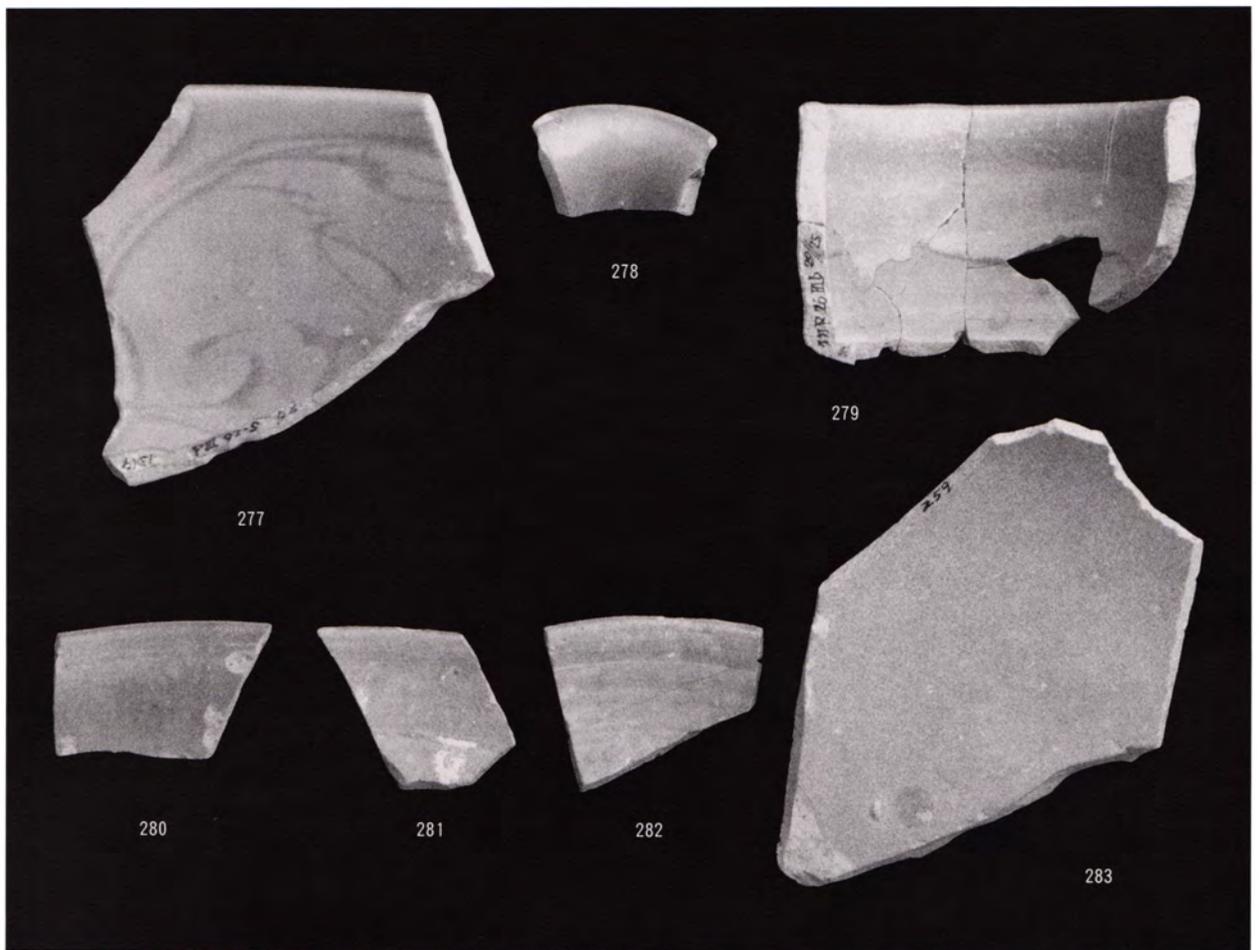
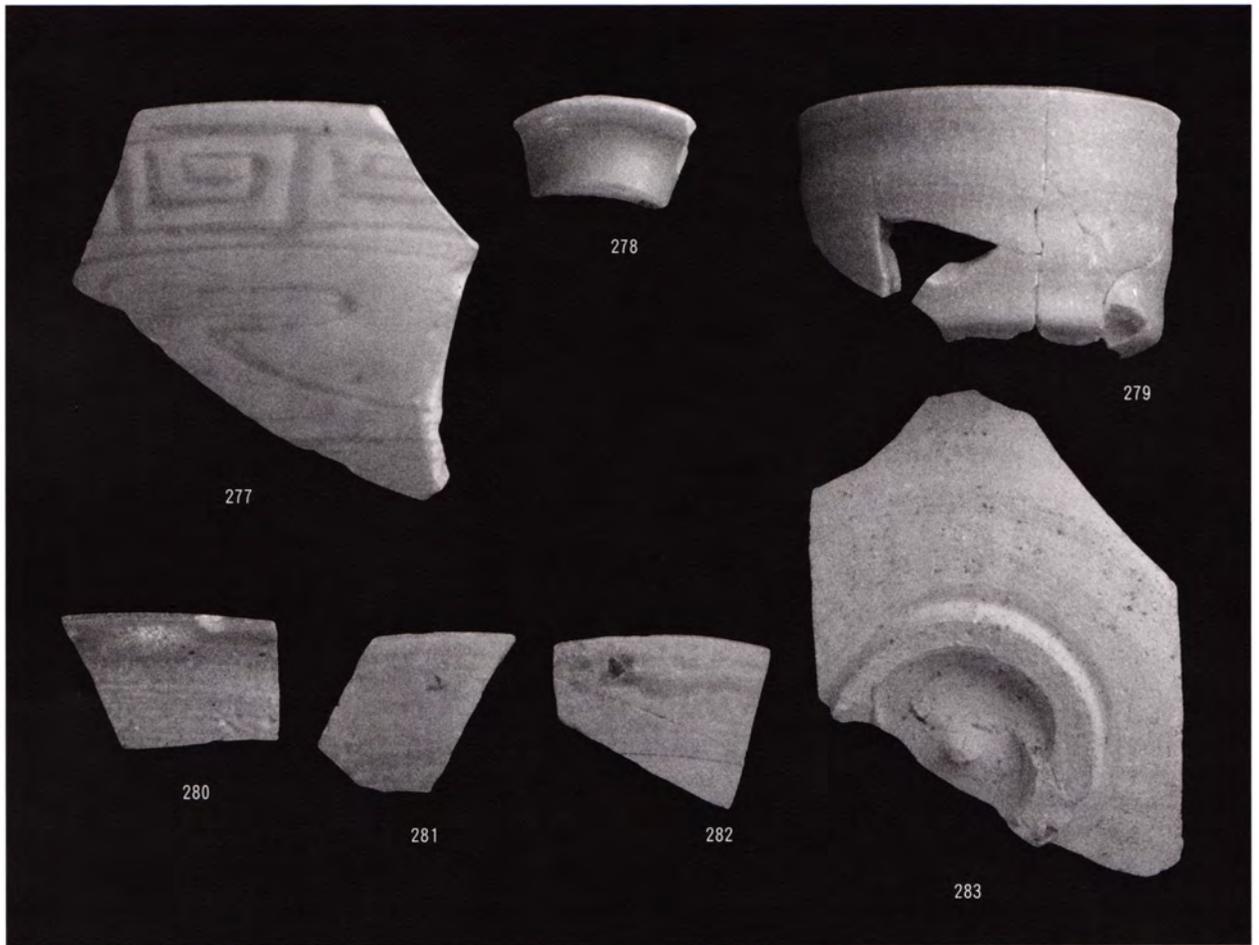
図版51 青磁<15> 皿(直口口縁、底部) (上:外面、下:内面)



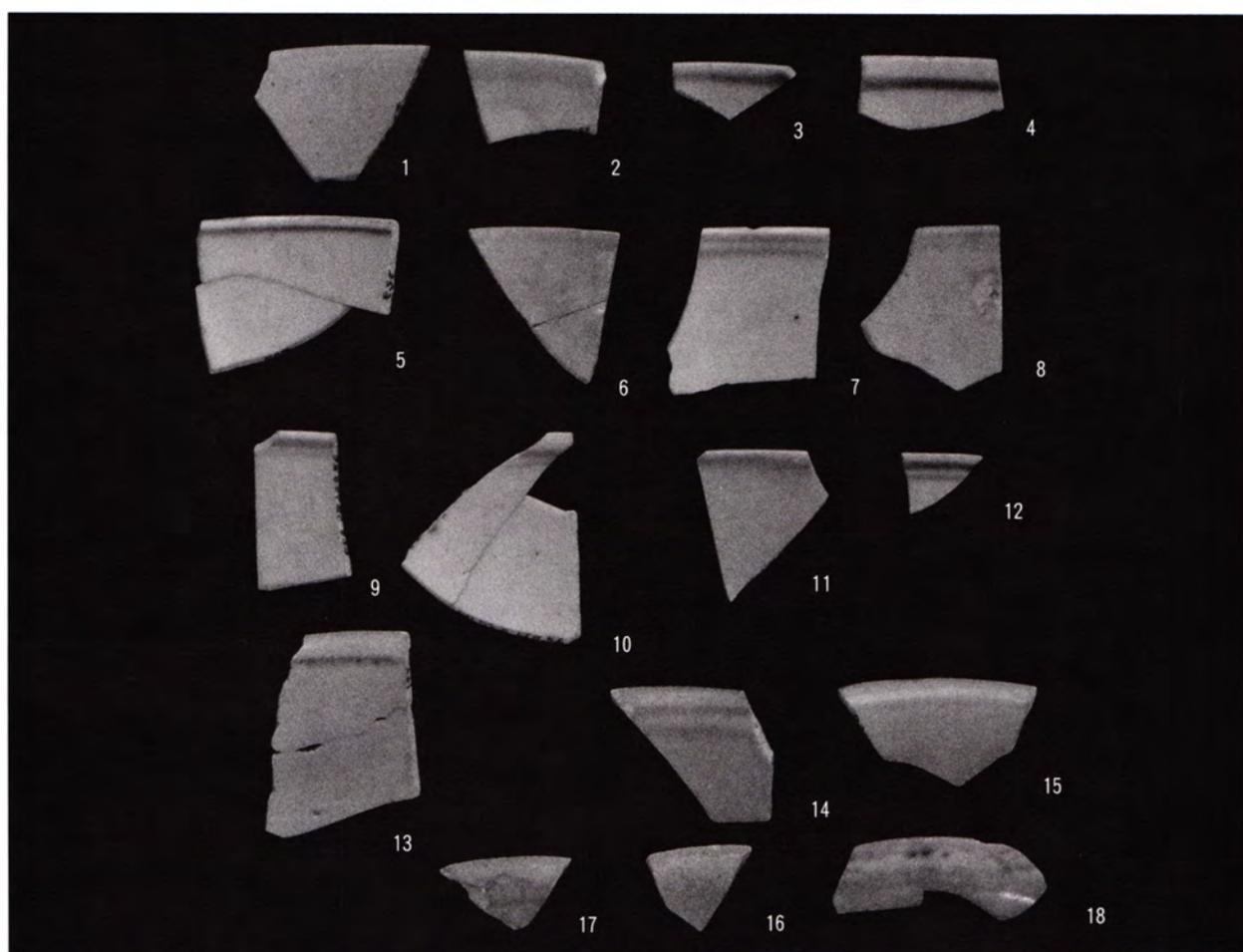
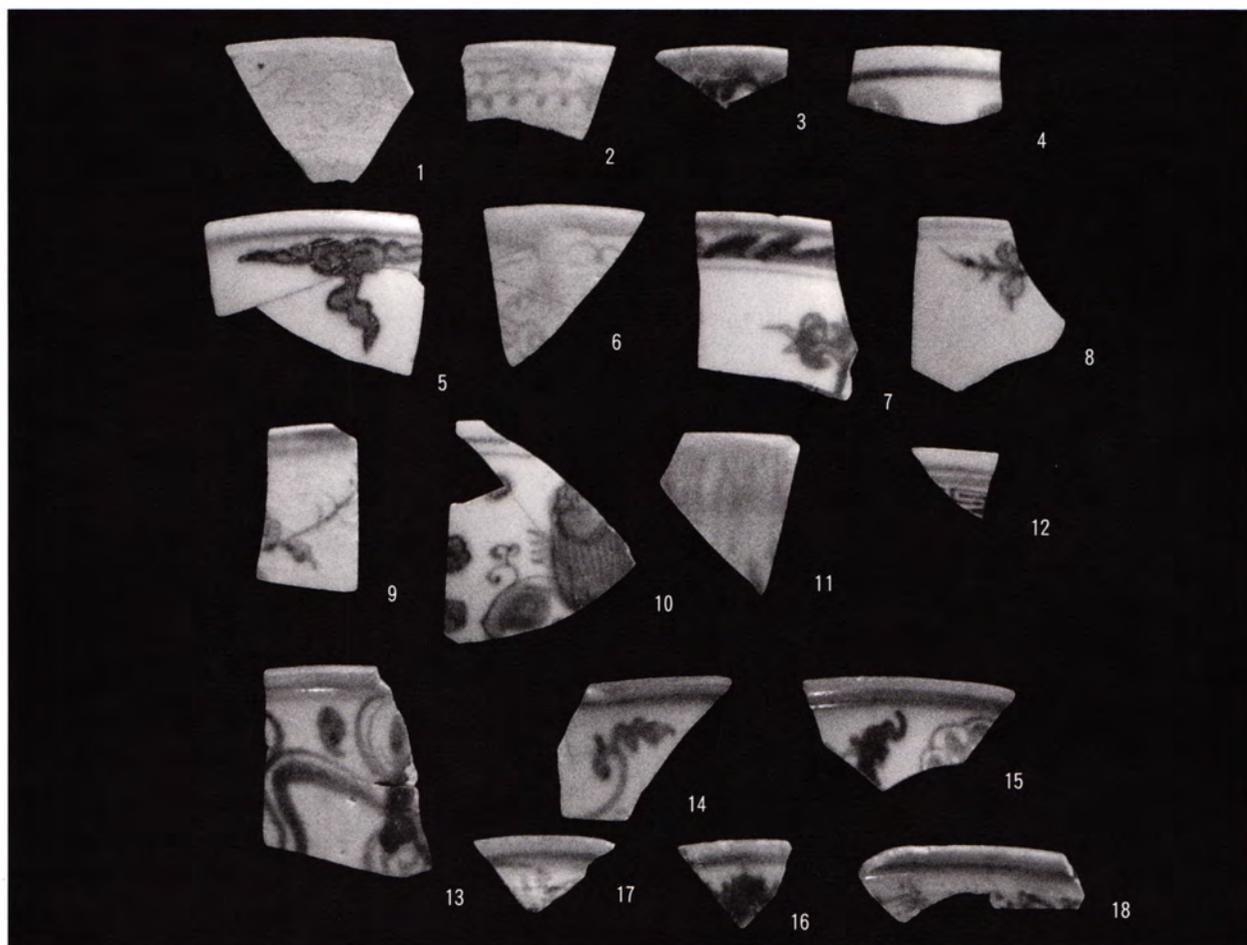
图版52 青磁<16> 皿(底部)、杯、盘(上:外面,下:内面)



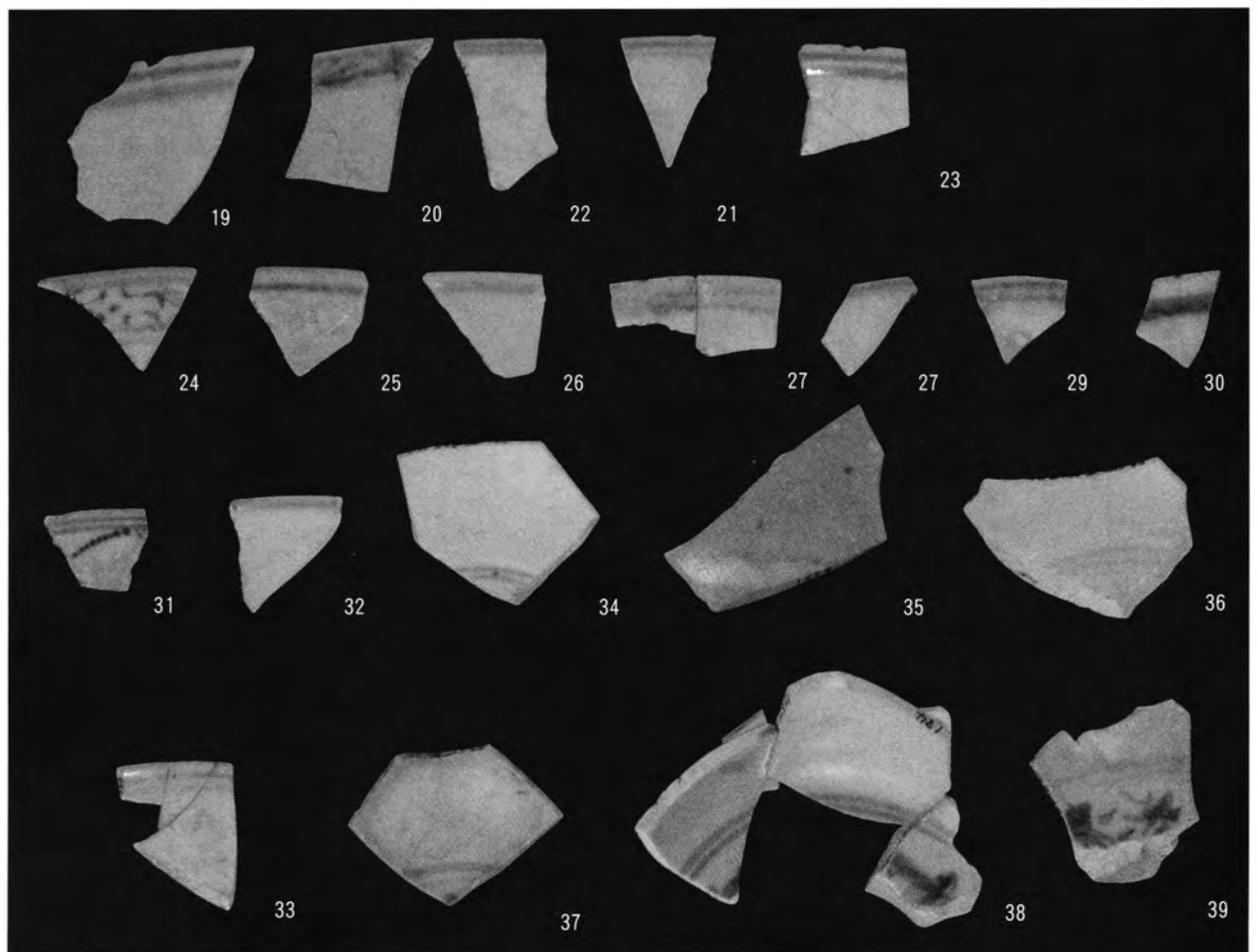
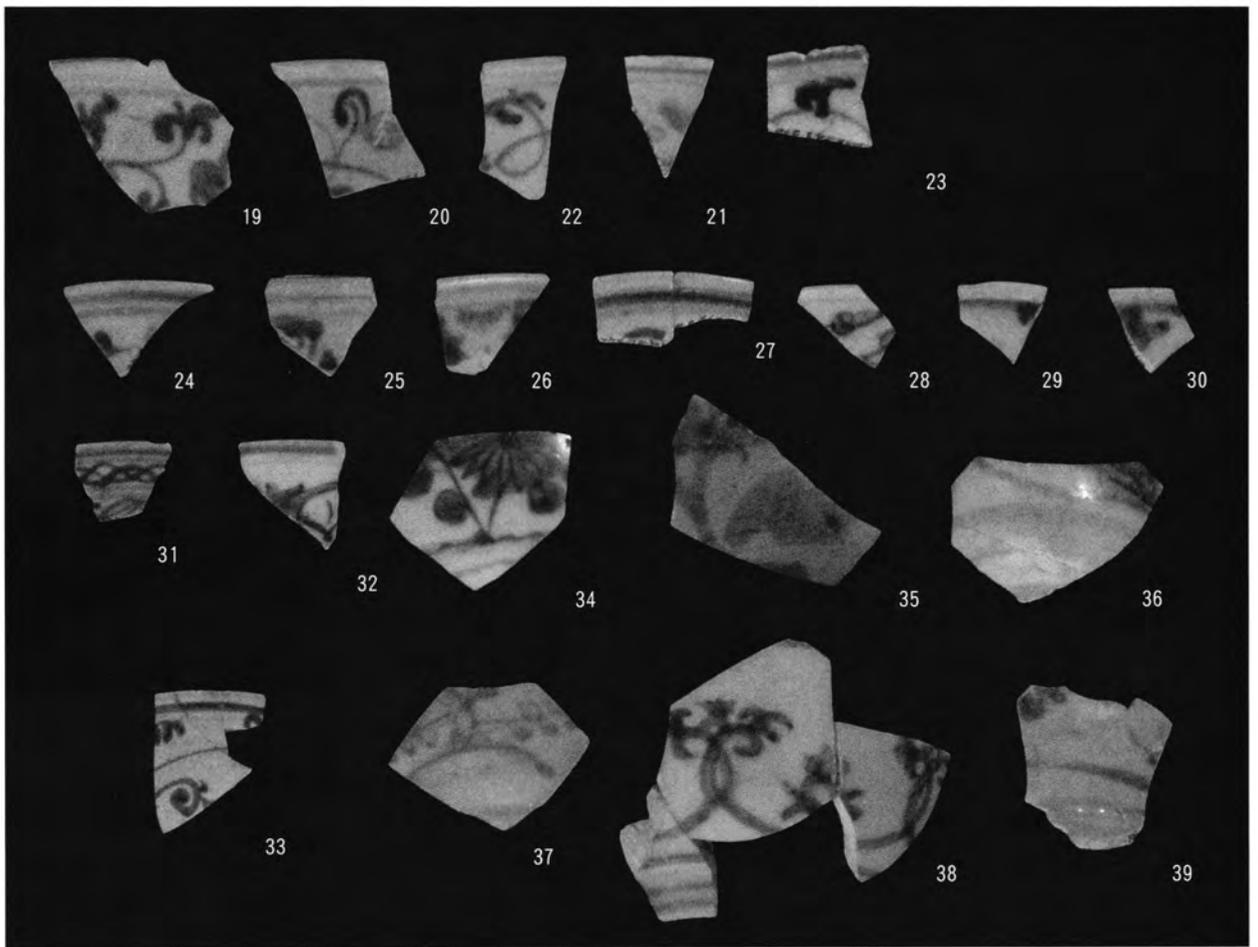
図版53 青磁<17> 盤 (口折、直口口縁) (上:外面、下:内面)



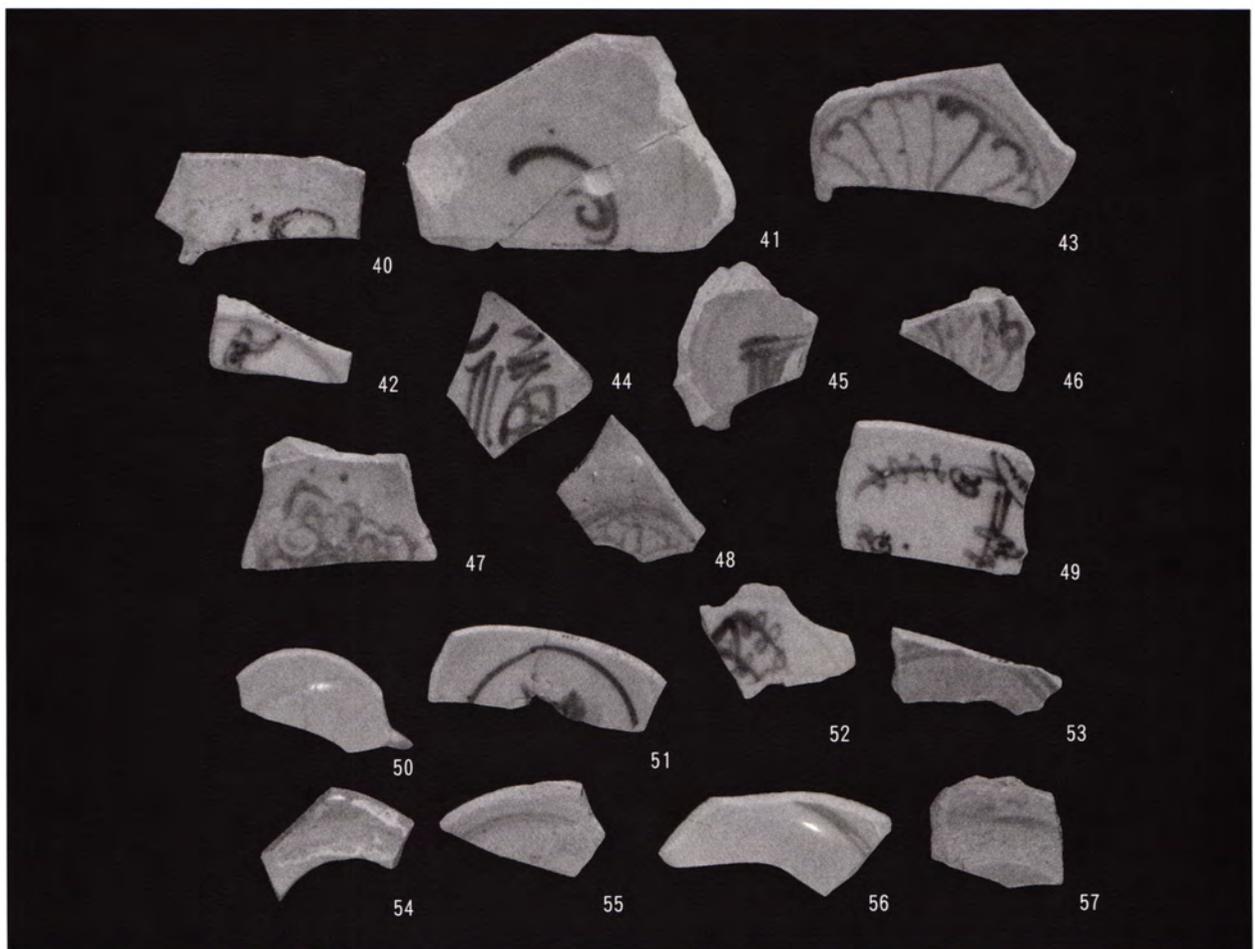
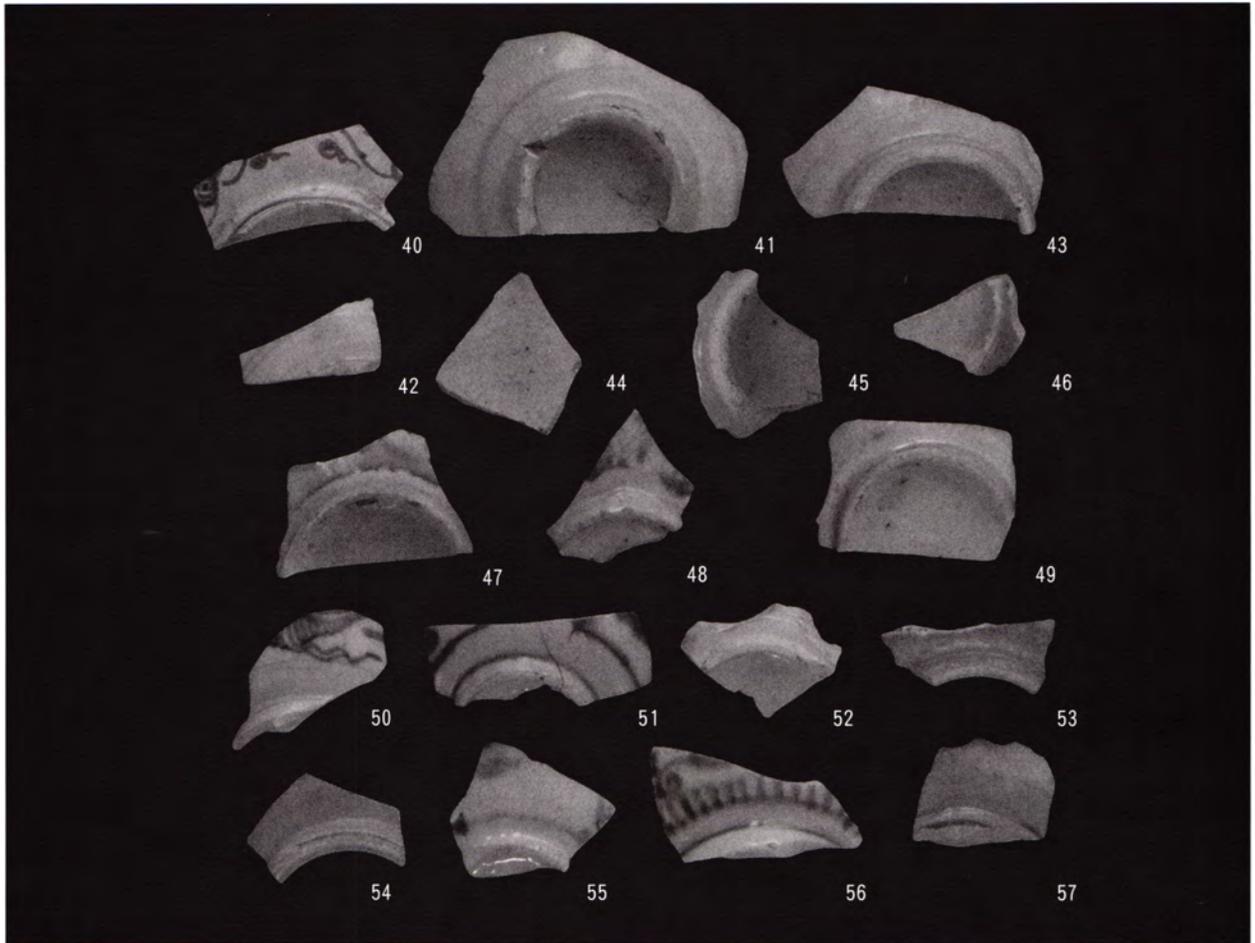
图版54 青磁<18> 鉢、瓶、香炉、泉州窯青磁(上:外面、下:内面)



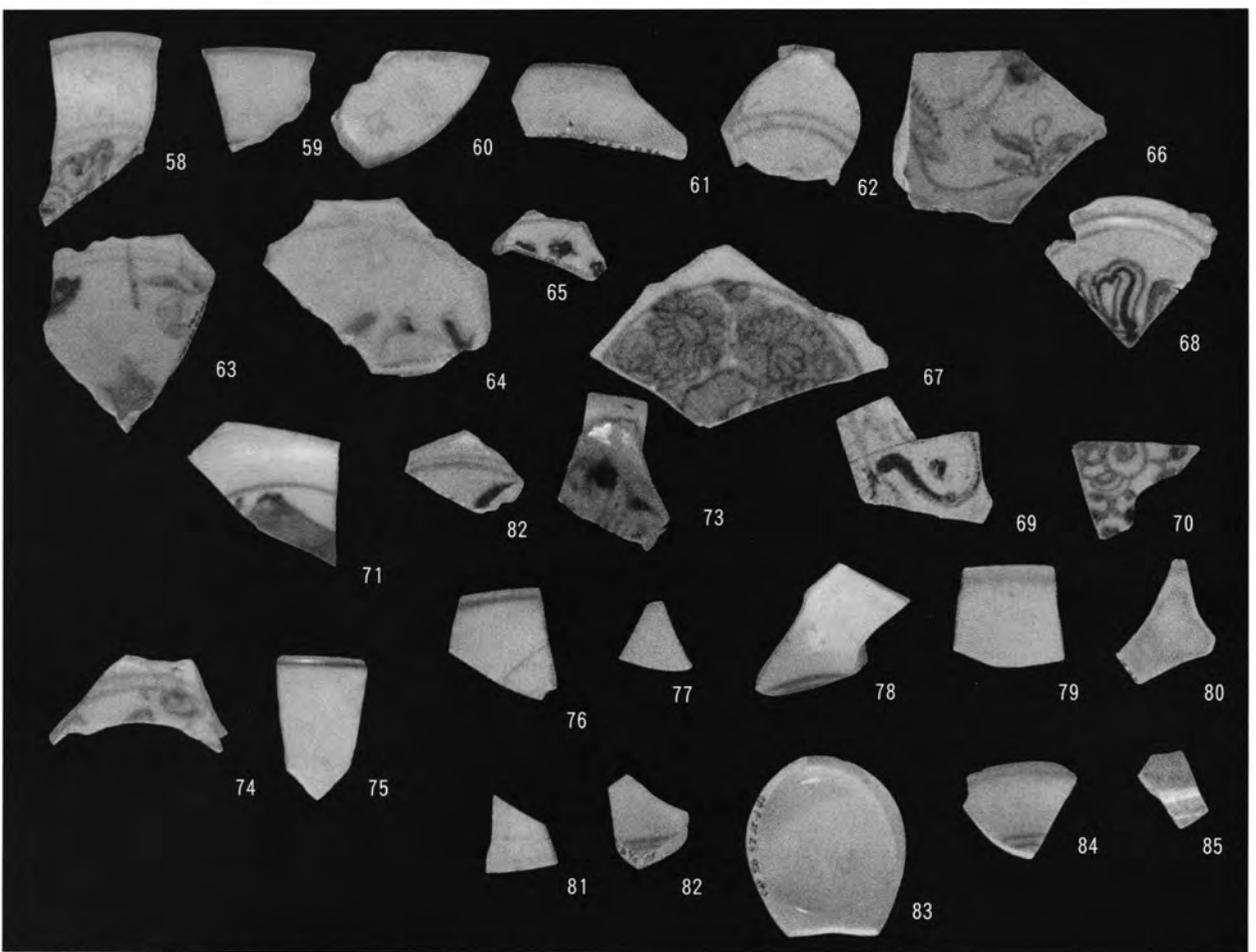
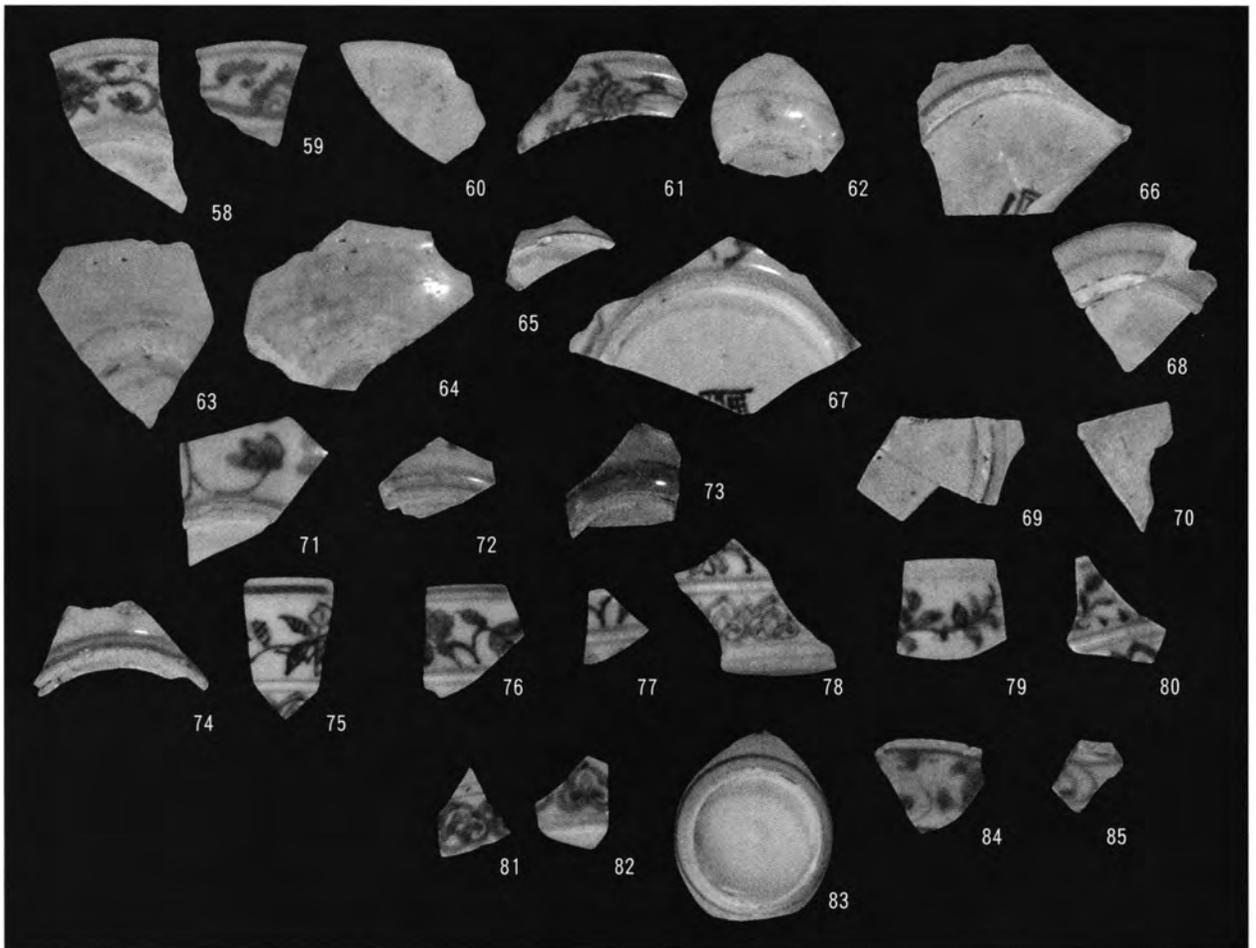
图版55 染付<1> 碗(上:外面、下:内面)



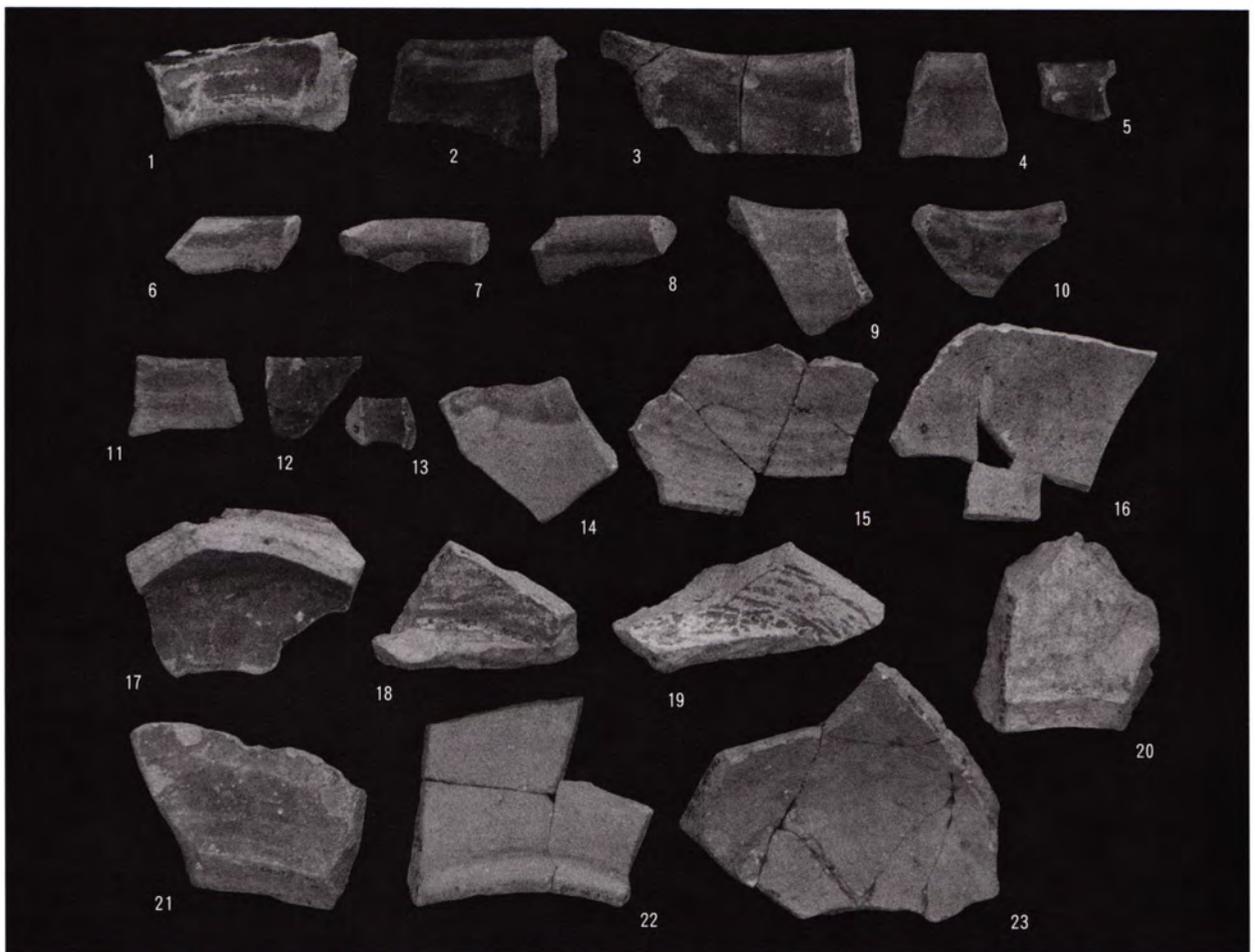
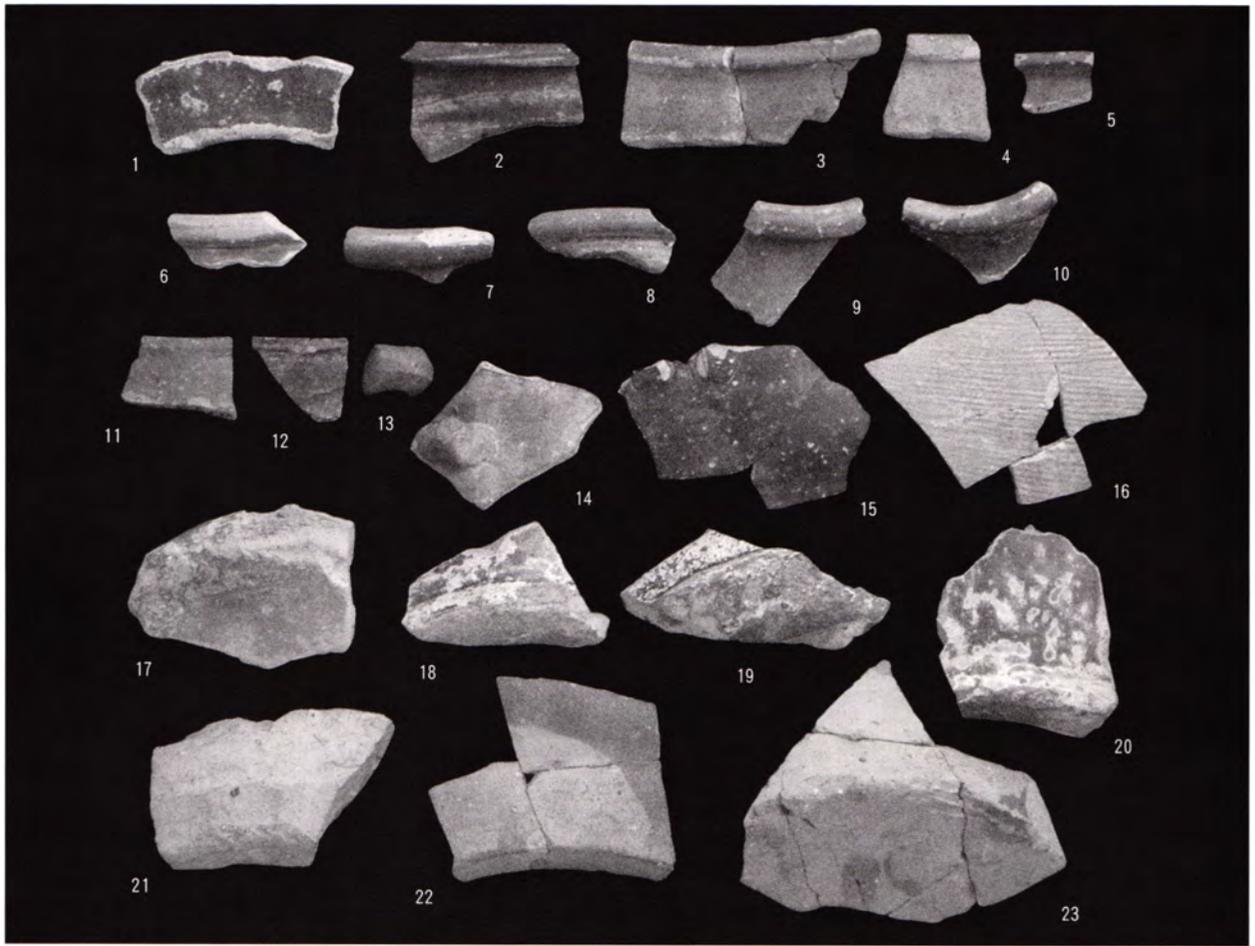
図版56 染付<2> 碗 (上:外面、下:内面)



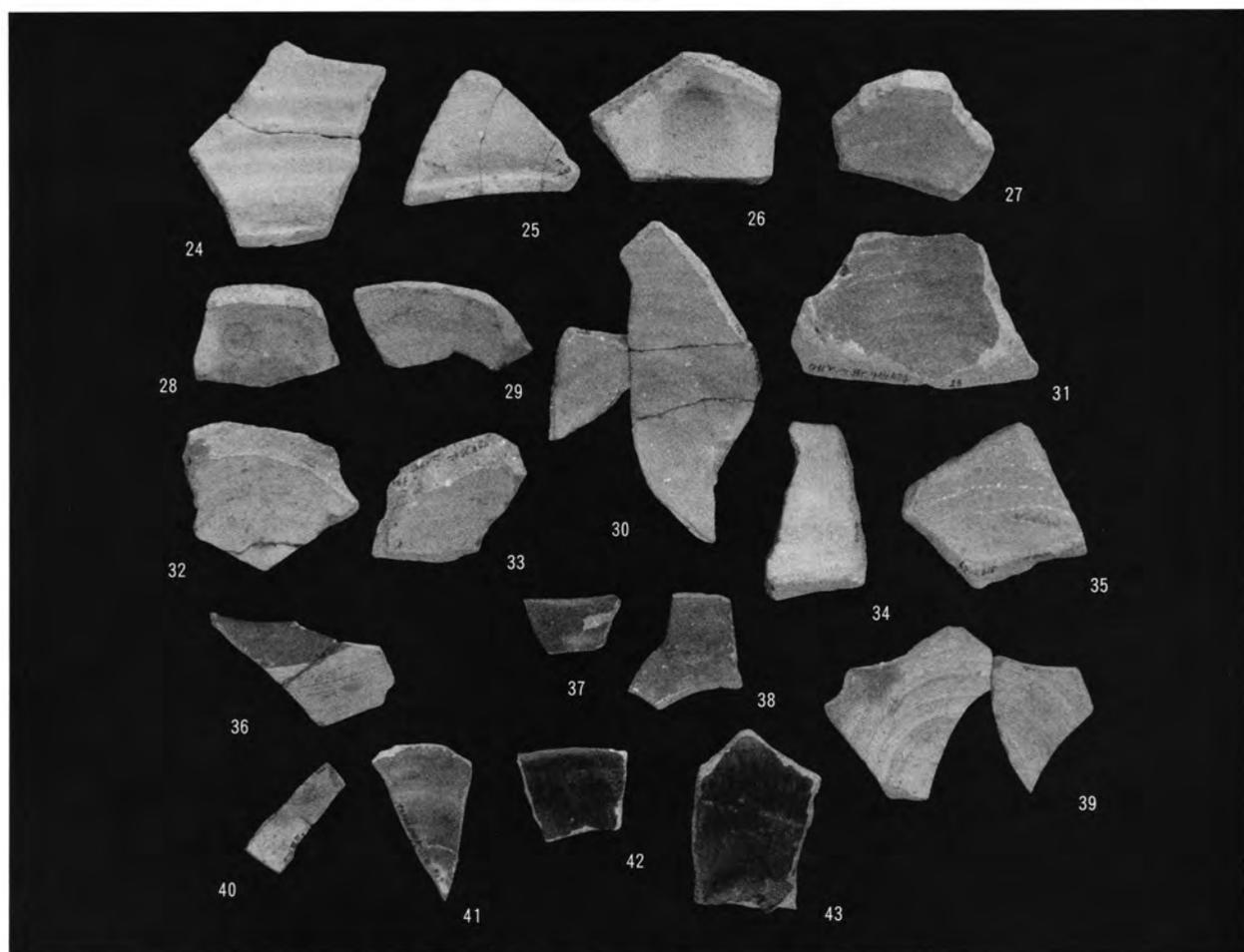
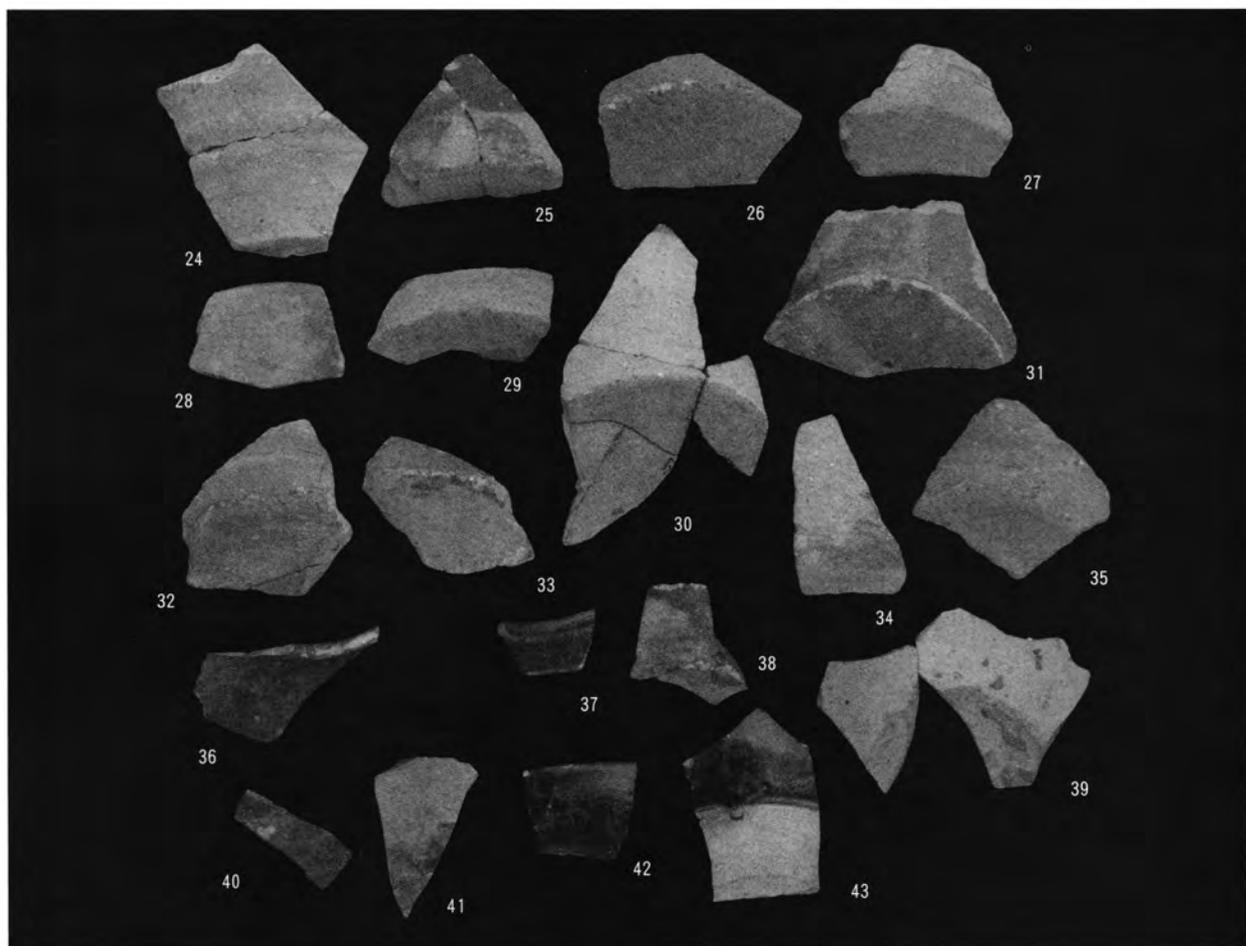
図版57 染付<3> 碗 (上:外面、下:内面)



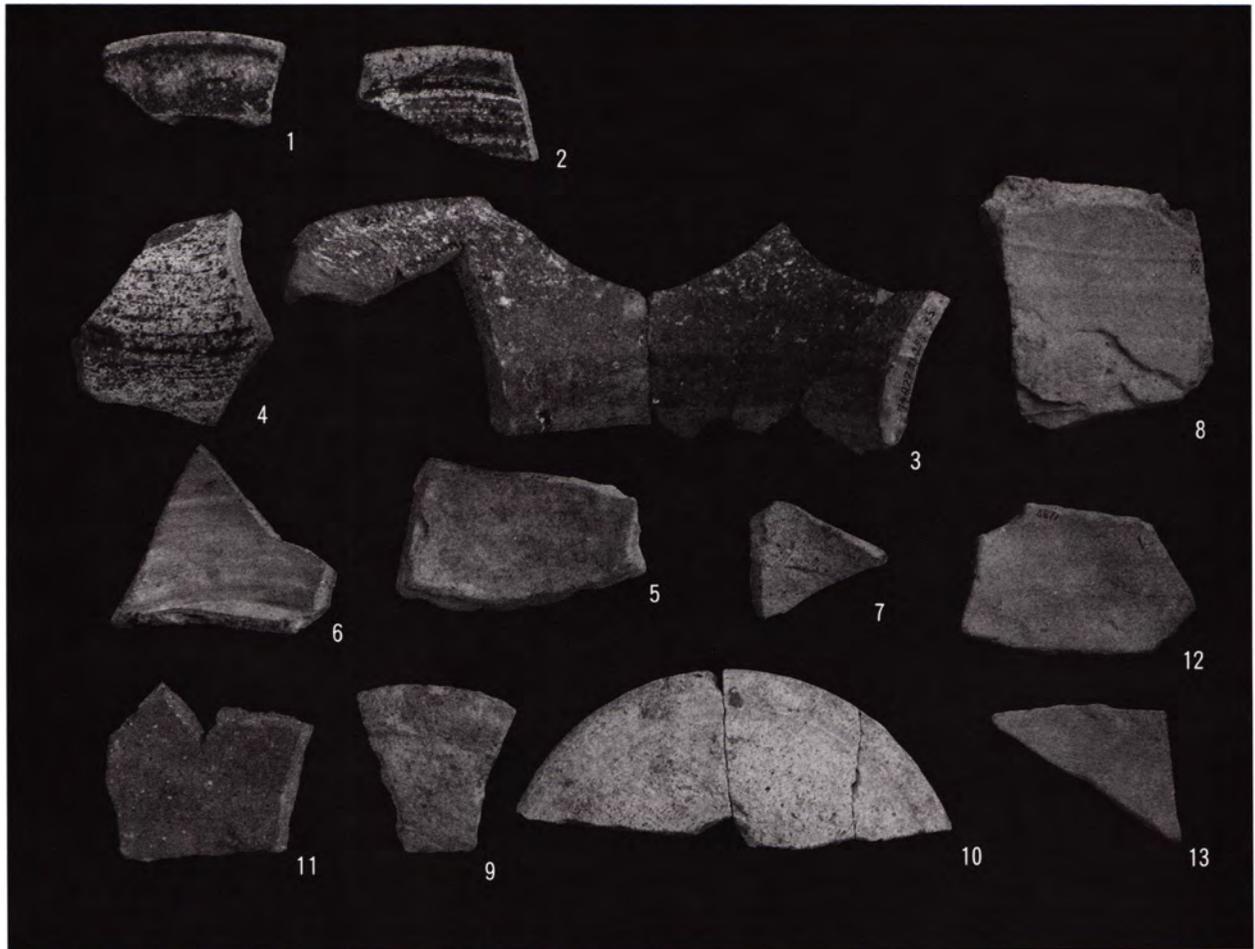
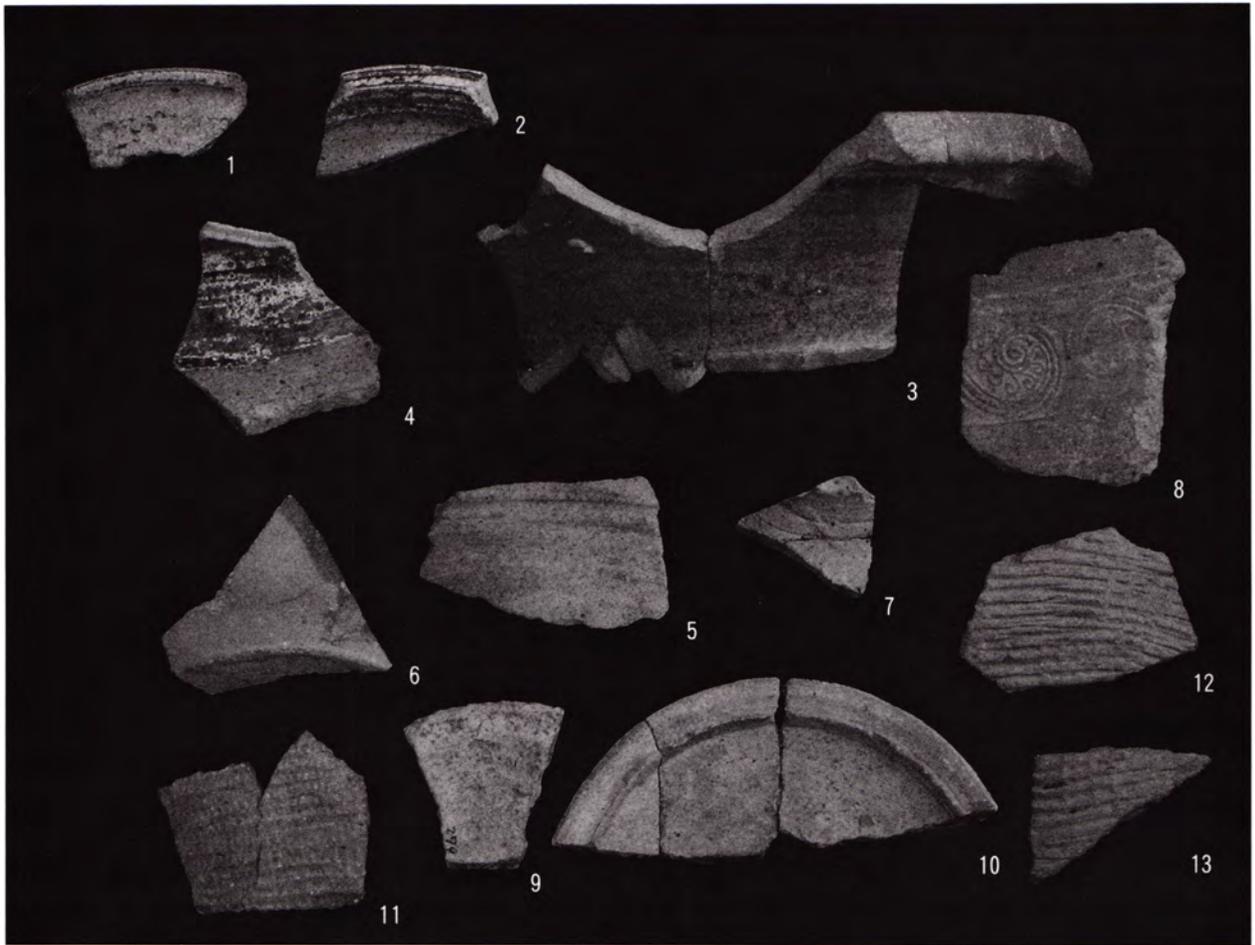
図版58 染付<4> 皿、鉢、杯、壺 (上:外面、下:内面)



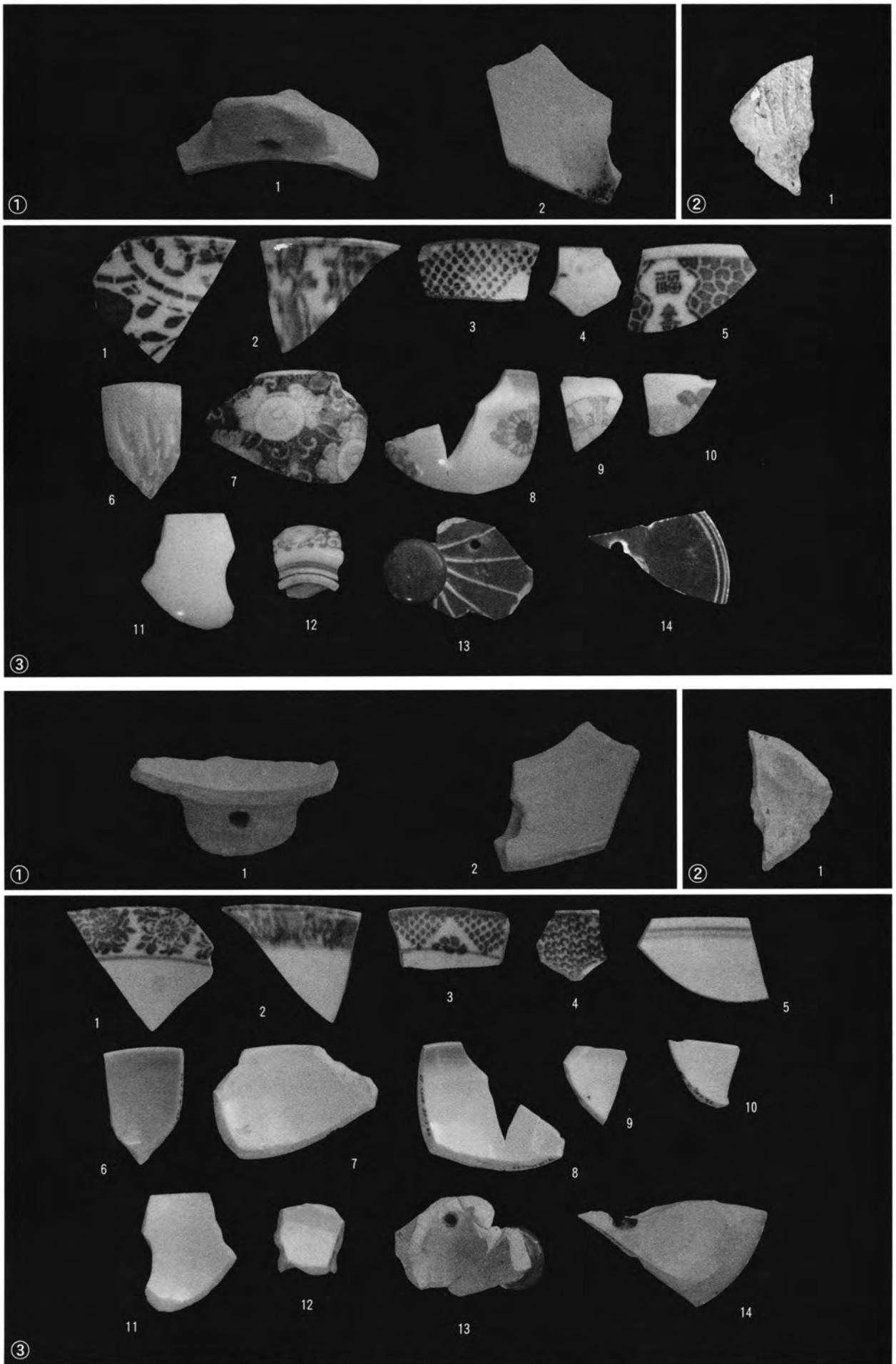
図版59 中国産陶器<1> 褐釉陶器 (上:外面、下:内面)



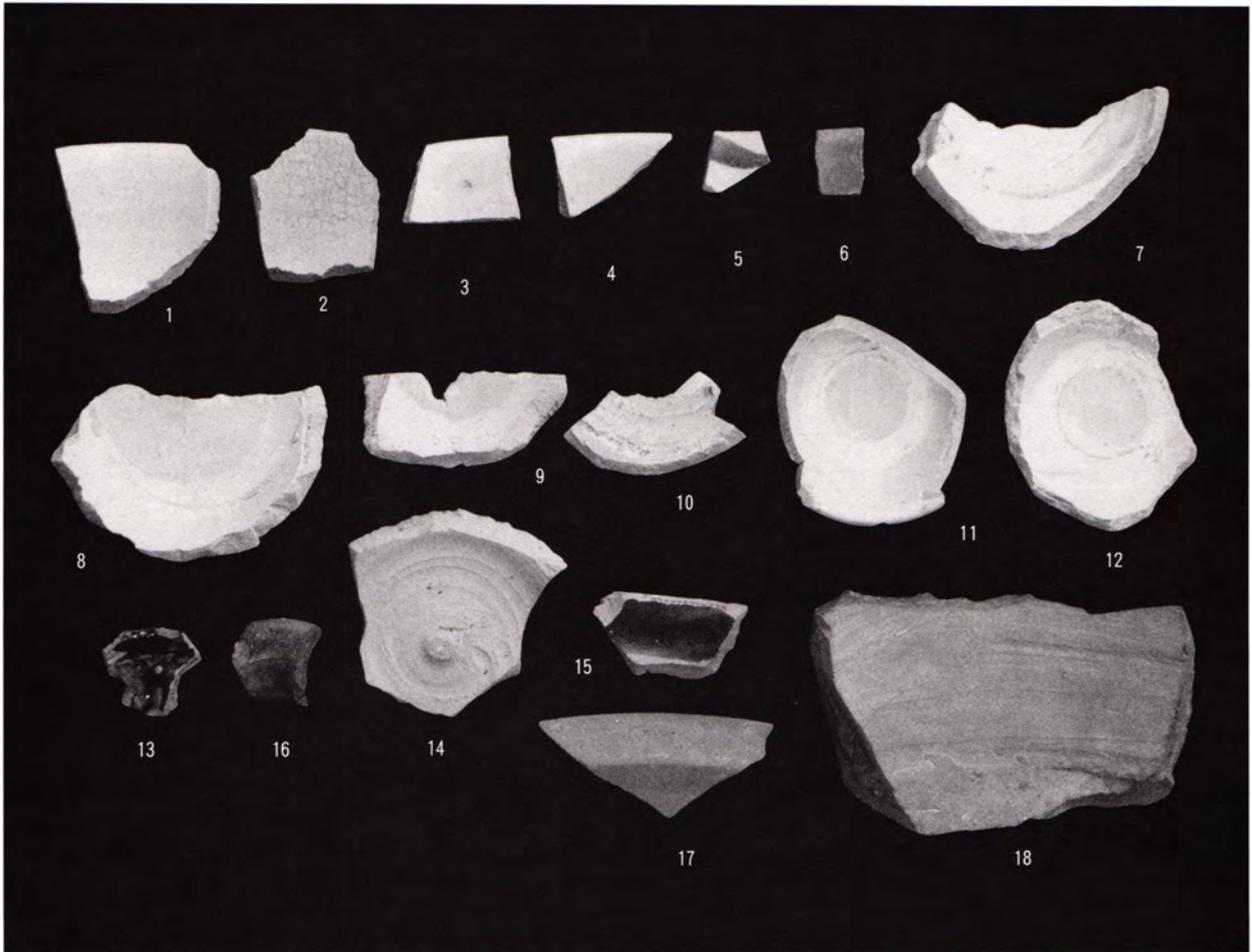
図版60 中国産陶器<2> 褐釉陶器(壺茶入れ) 黒釉陶器(上:外面、下:内面)



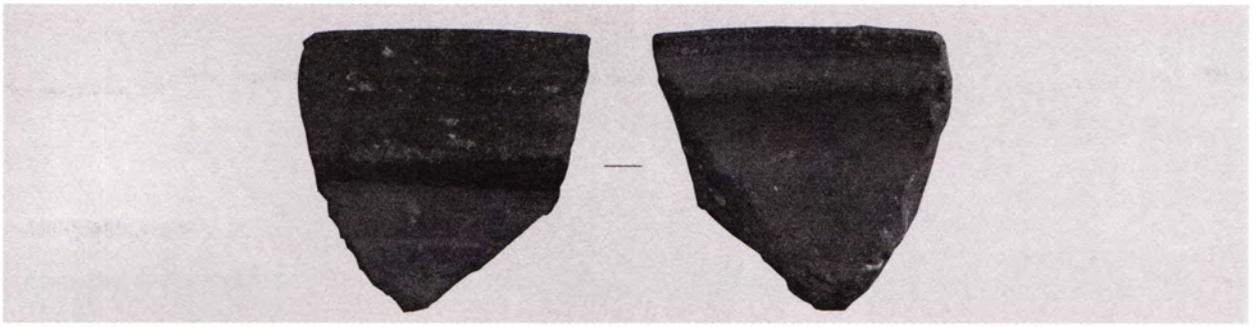
図版61 タイ産陶器（褐釉陶器・無釉陶器）タイ産半練土器（上：外面、下：内面）



図版62 ①三彩(瓶) ②陶質土器(急須、耳) ③本土産磁器(碗、小碗、蓋)(上段:外面、下段:内面)



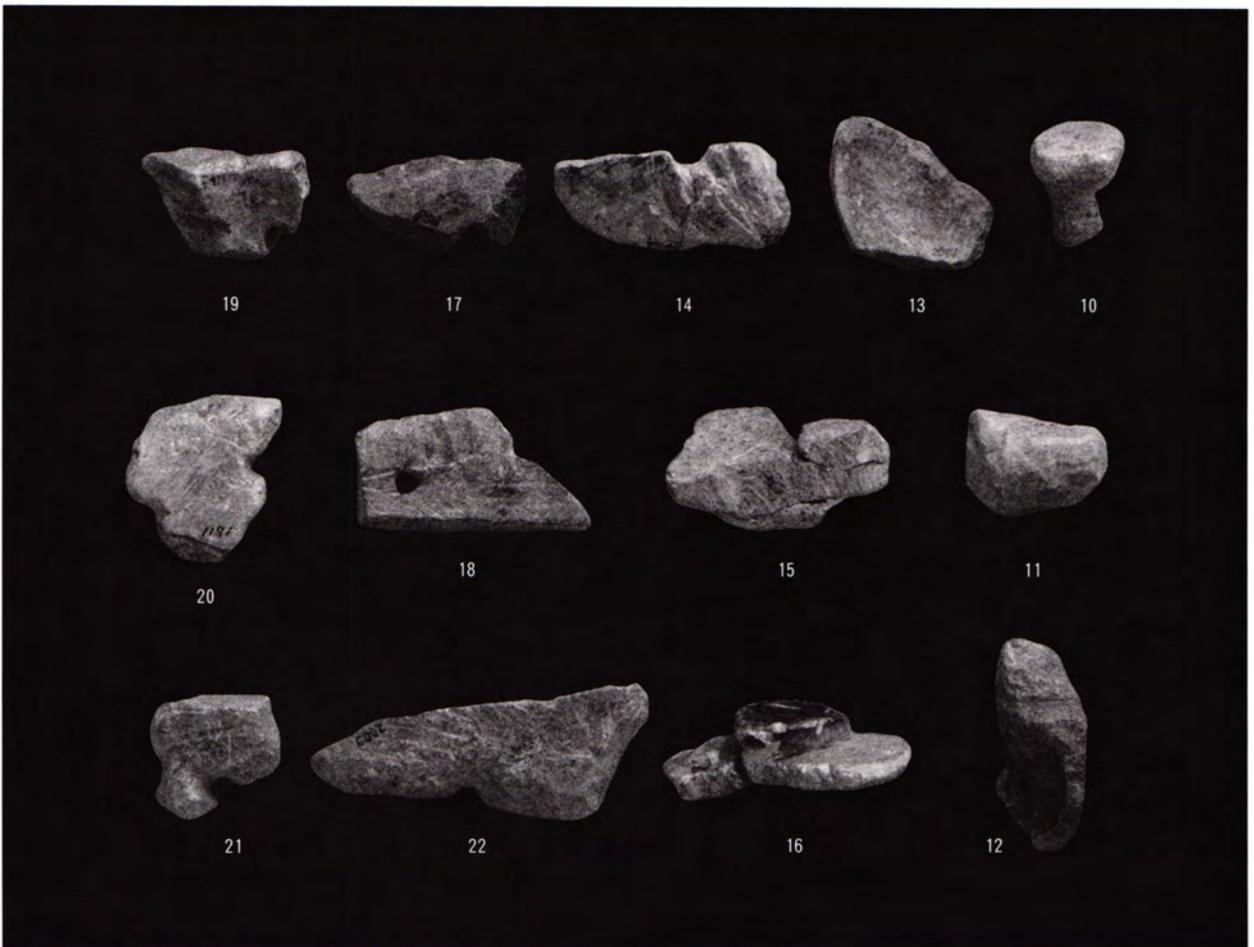
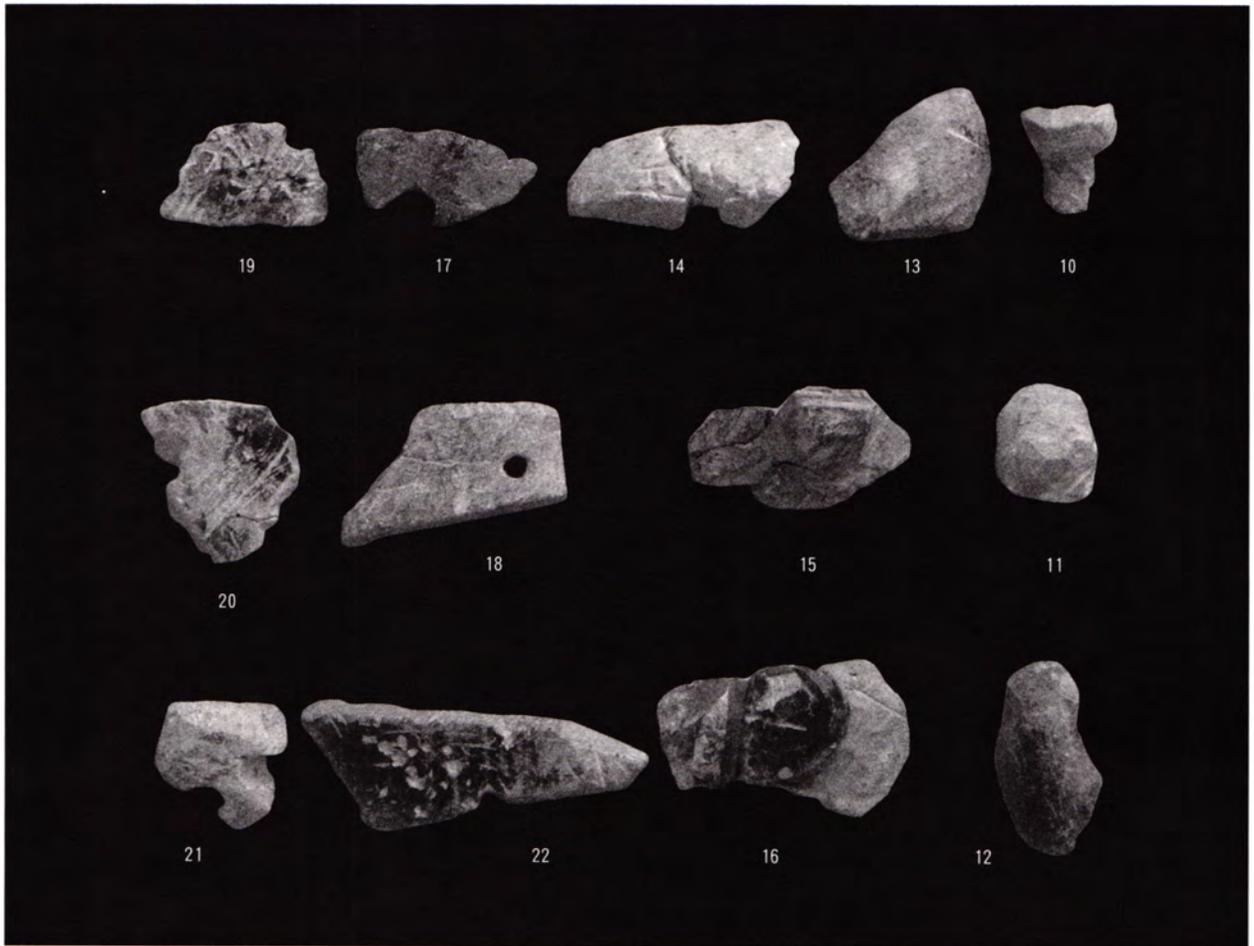
図版63 沖縄産陶器（施釉陶器、無釉陶器）（上：外面、下：内面）



図版64 a 本土産陶器



図版64 b 滑石製品<1> 石鍋



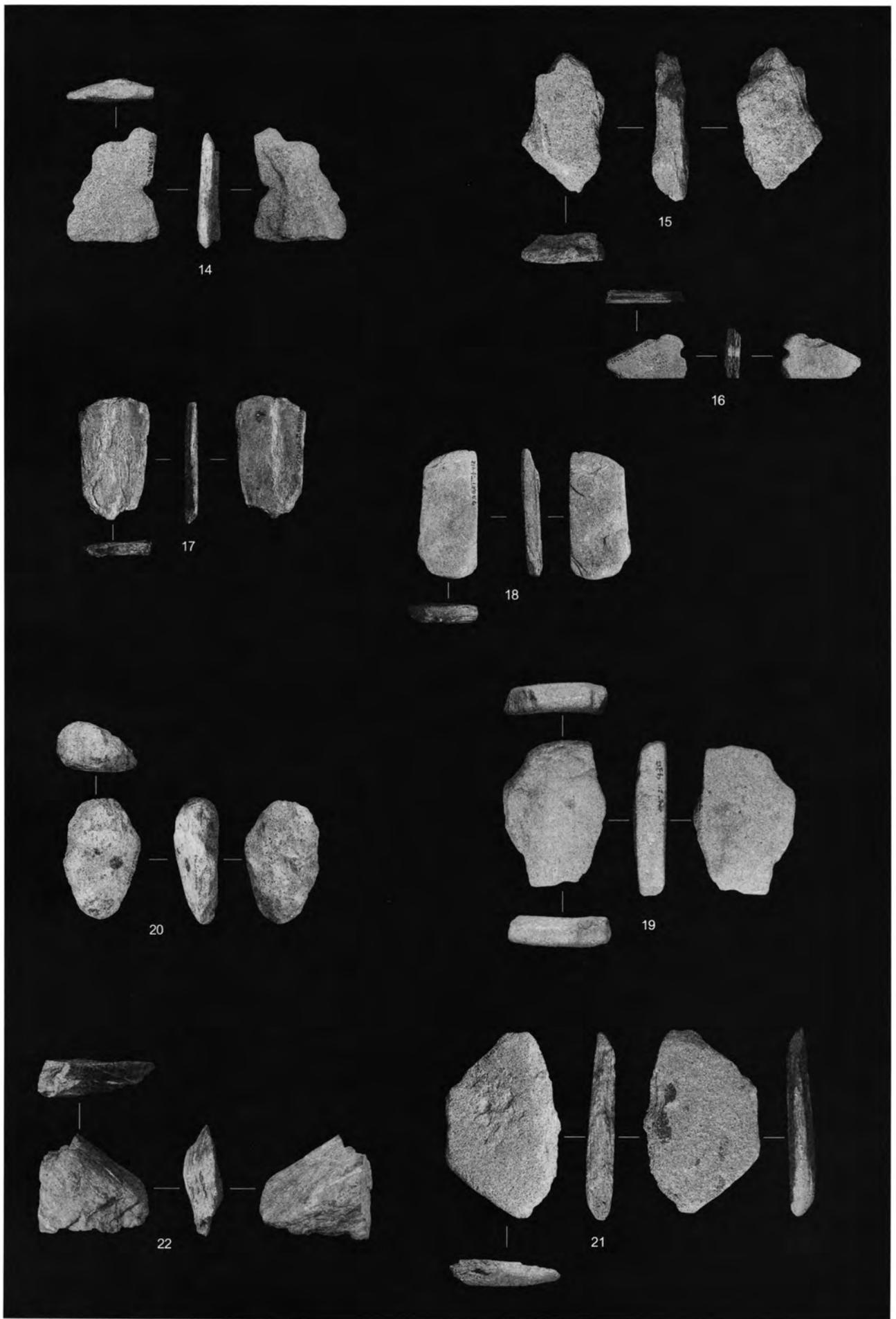
図版65 滑石製品<2> 二次製品



图版66 石器<1>



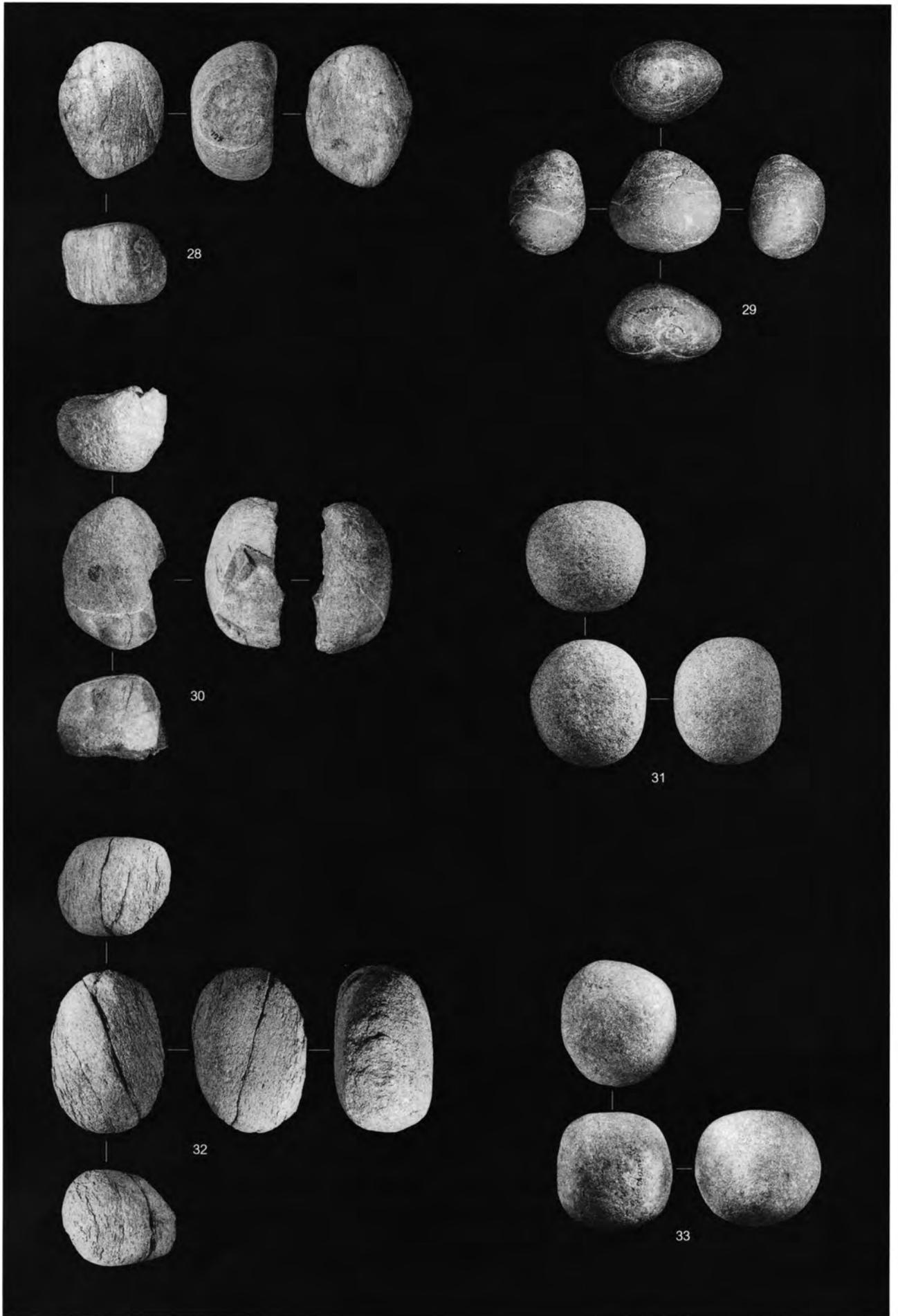
图版67 石器<2>



图版68 石器<3>



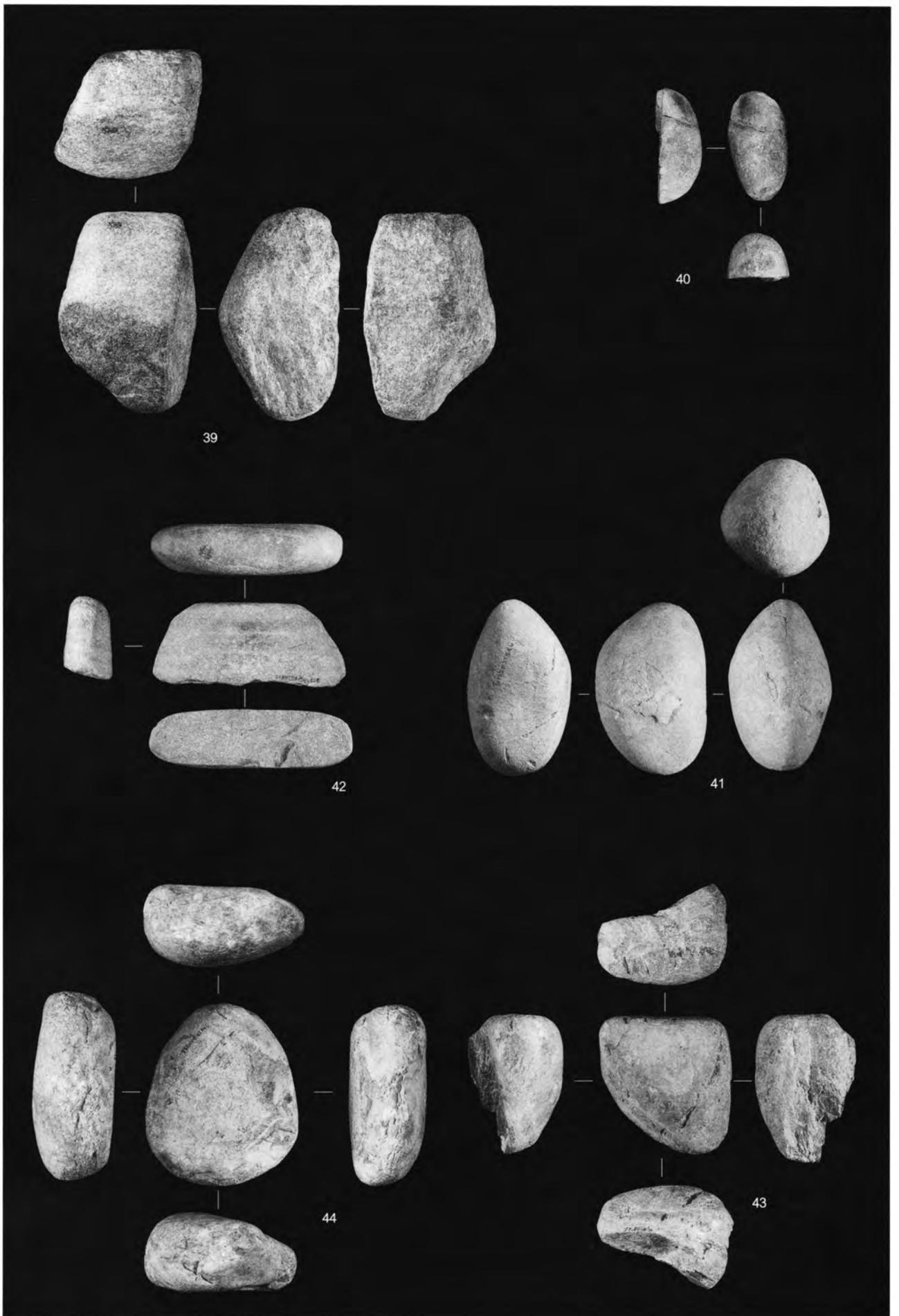
图版69 石器<4>



图版70 石器<5>



图版71 石器<6>



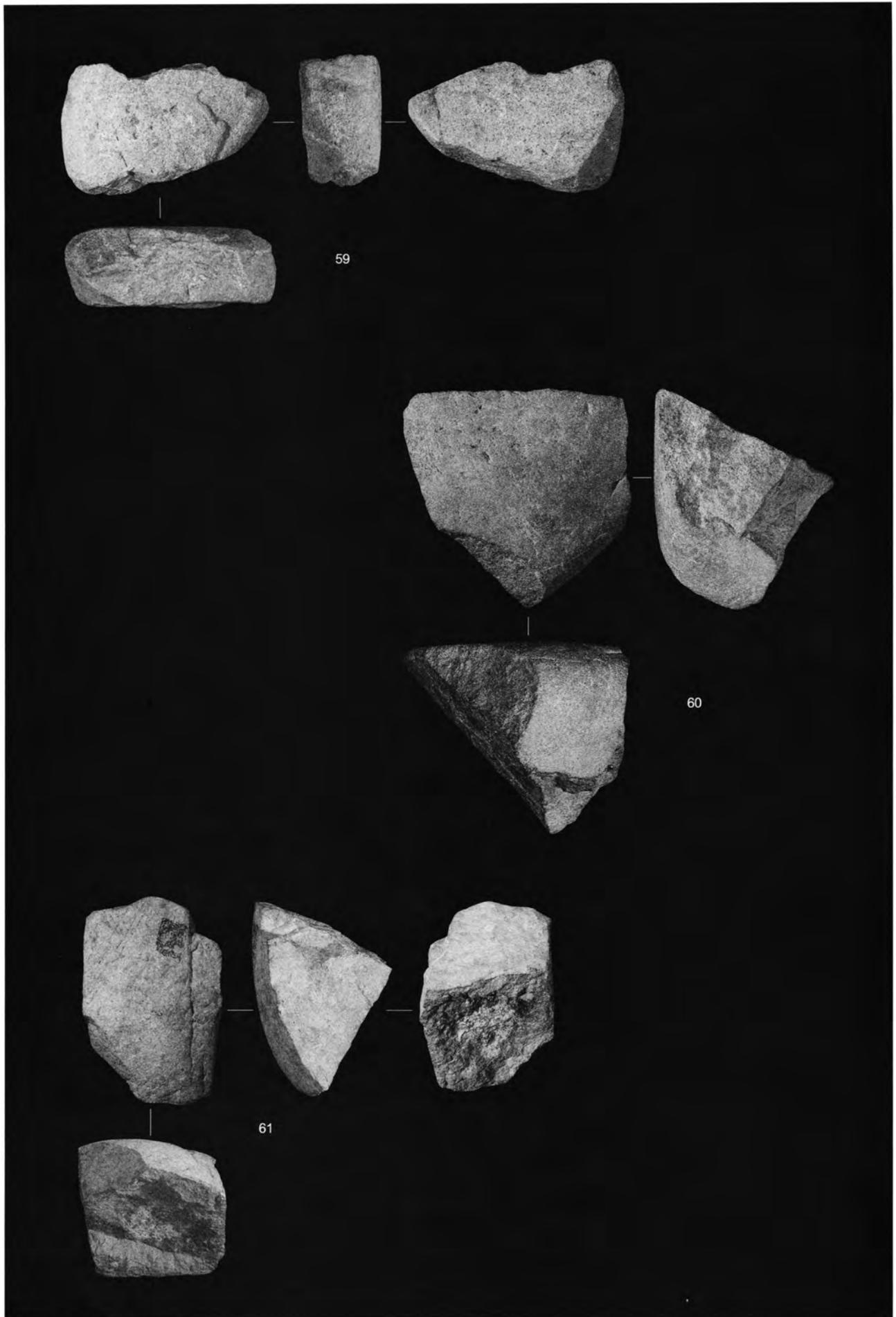
图版72 石器<7>



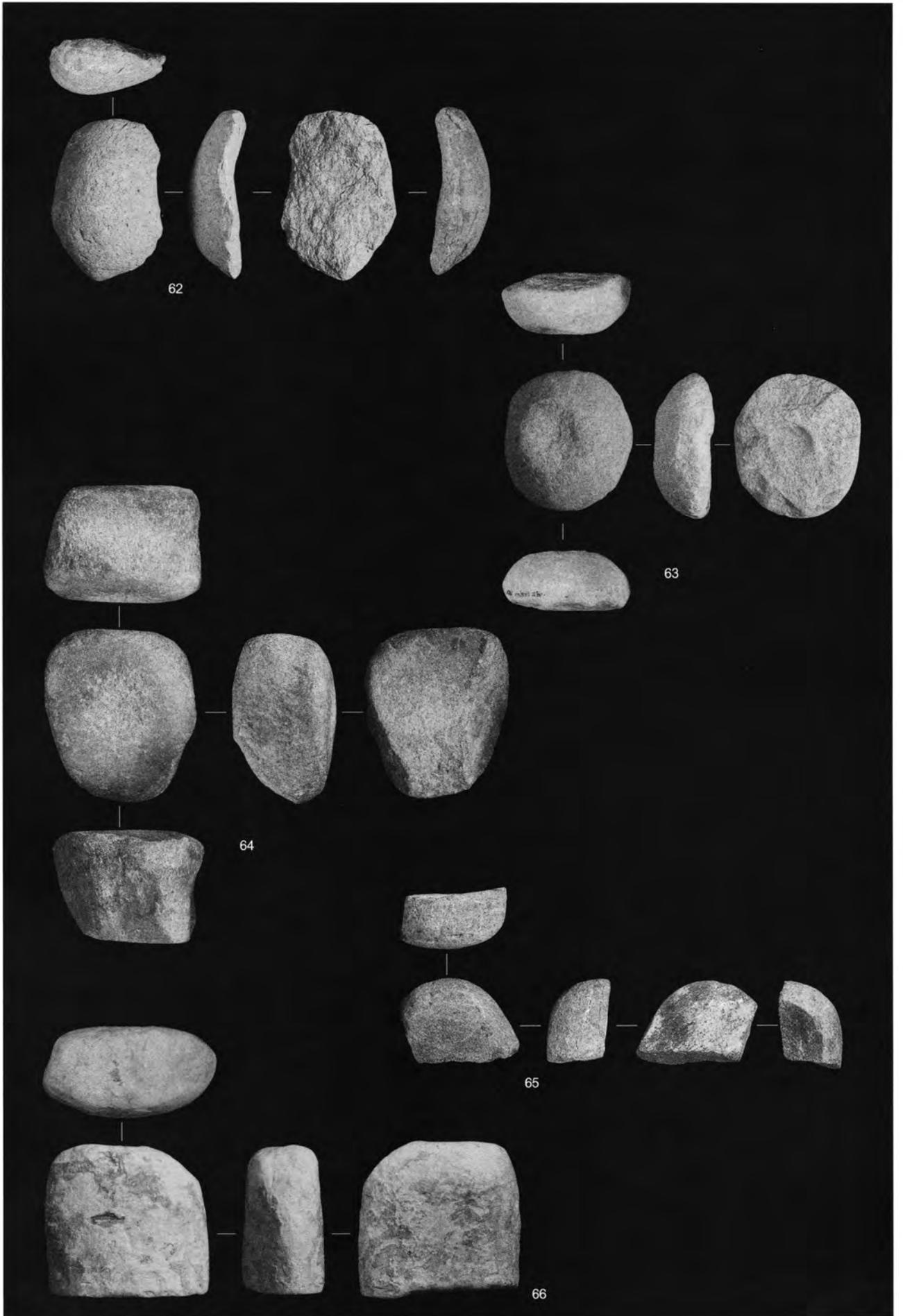
图版73 石器<8>



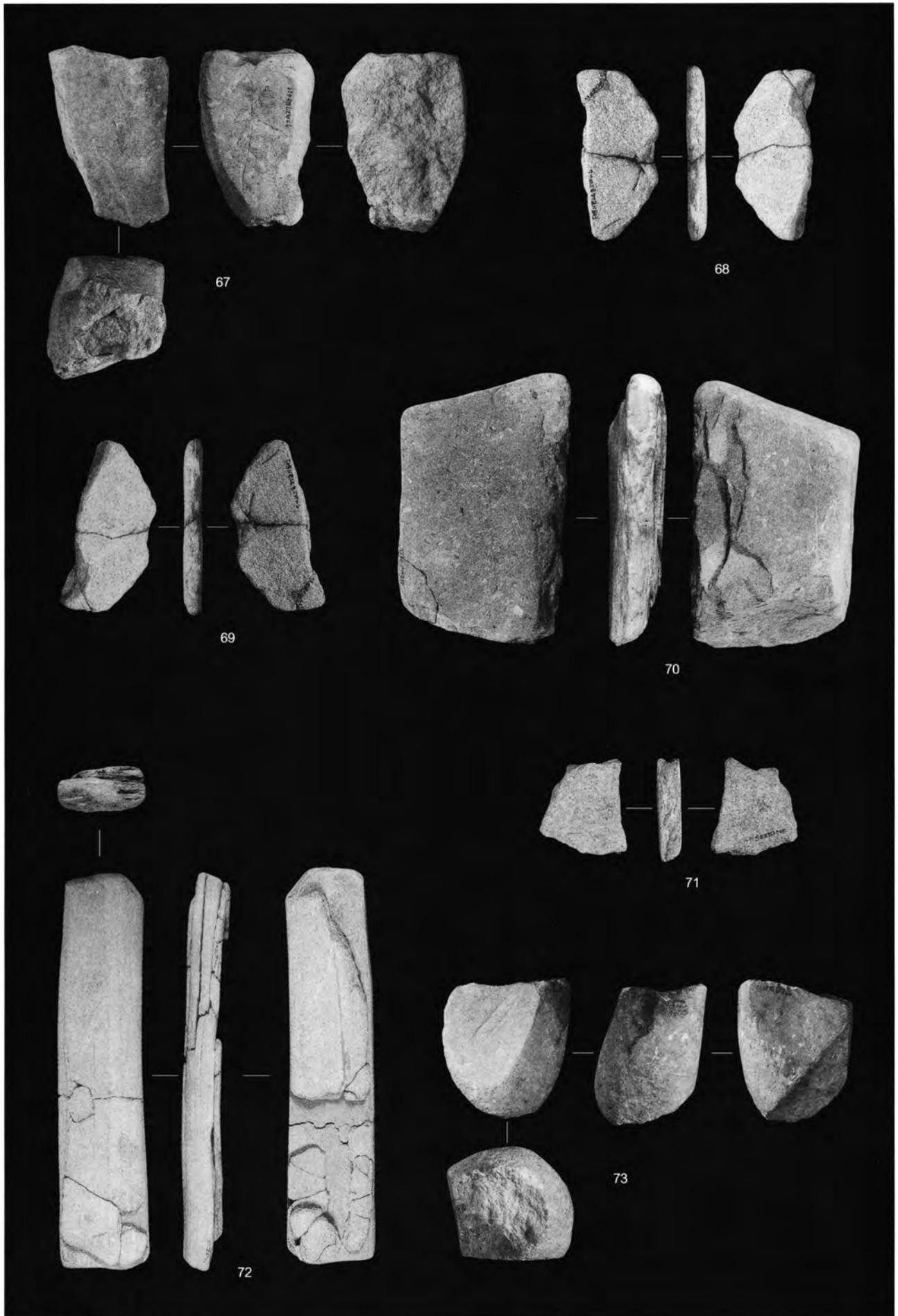
图版74 石器<9>



图版75 石器<10>



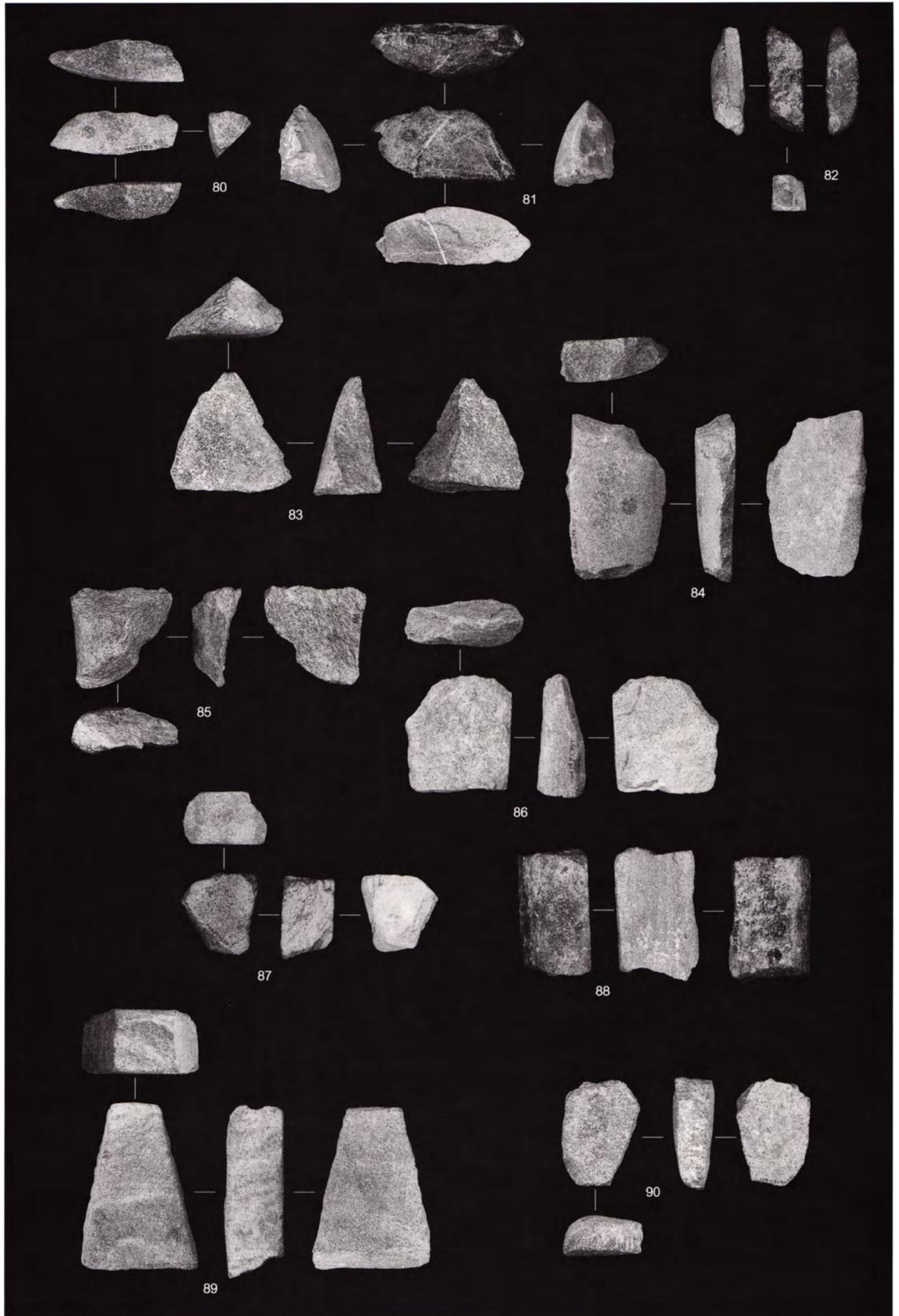
图版76 石器<11>



図版77 石器<12>



图版78 石器<13>



图版79 石器<14>



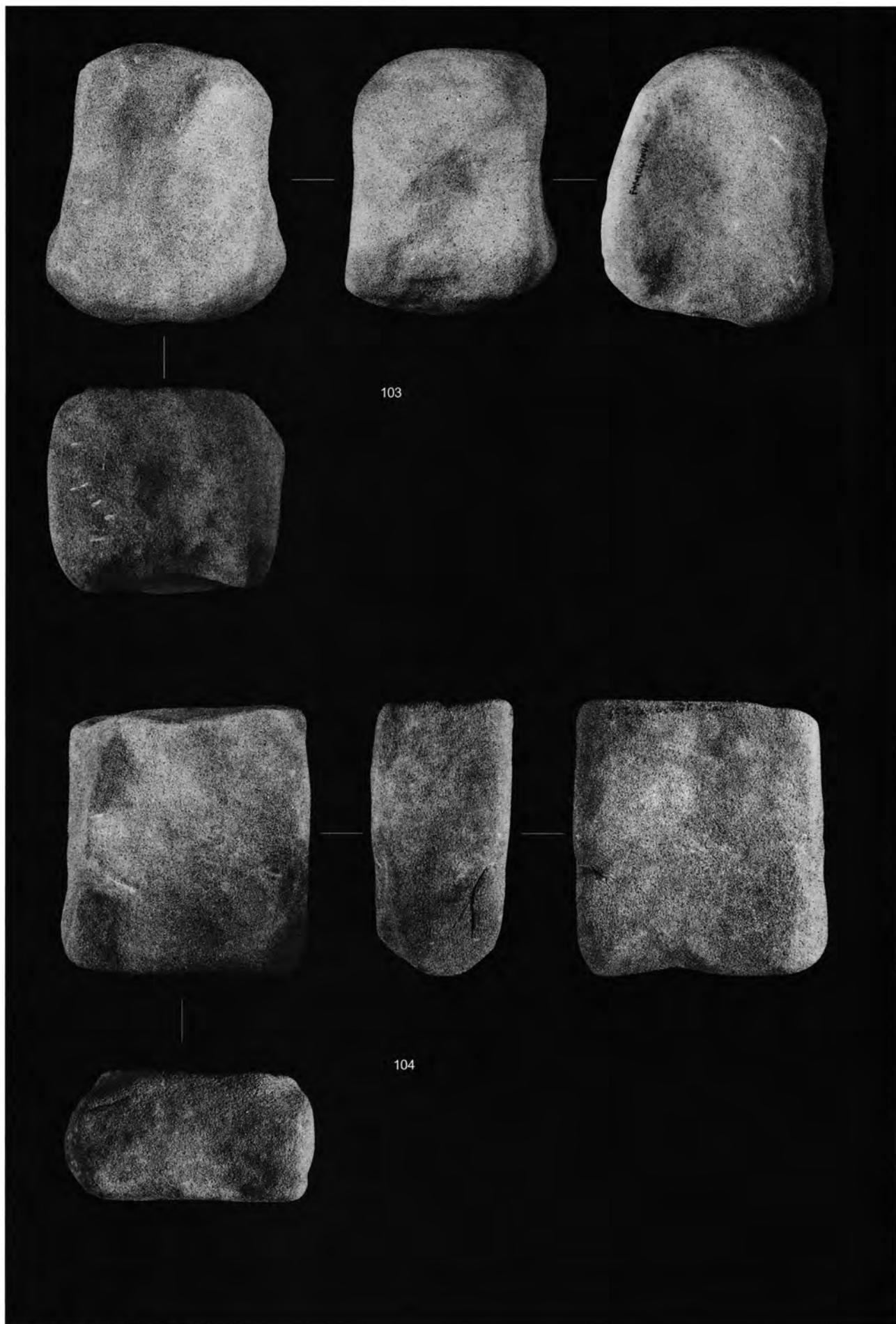
图版80 石器<15>



图版81 石器<16>



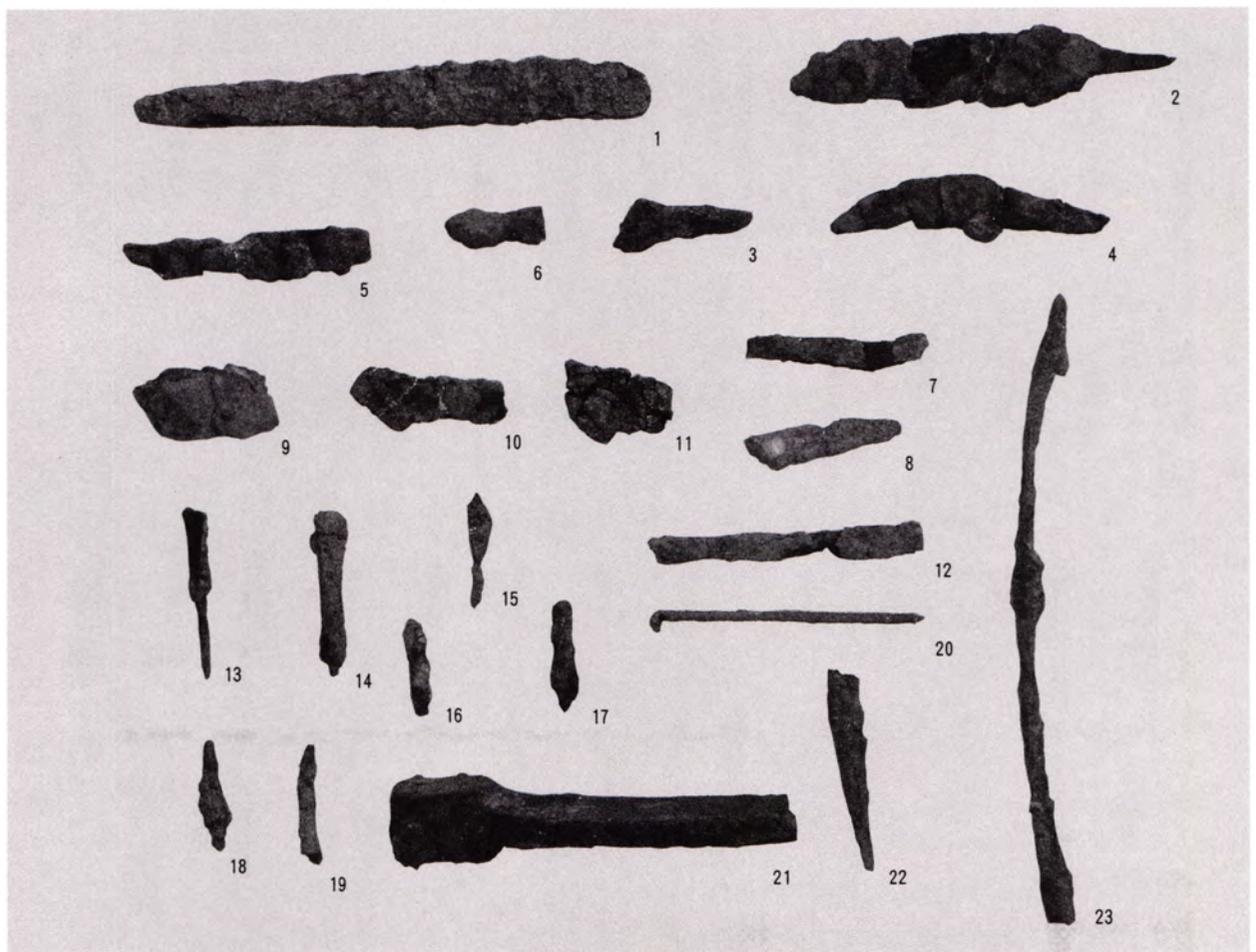
图版82 石器<17>



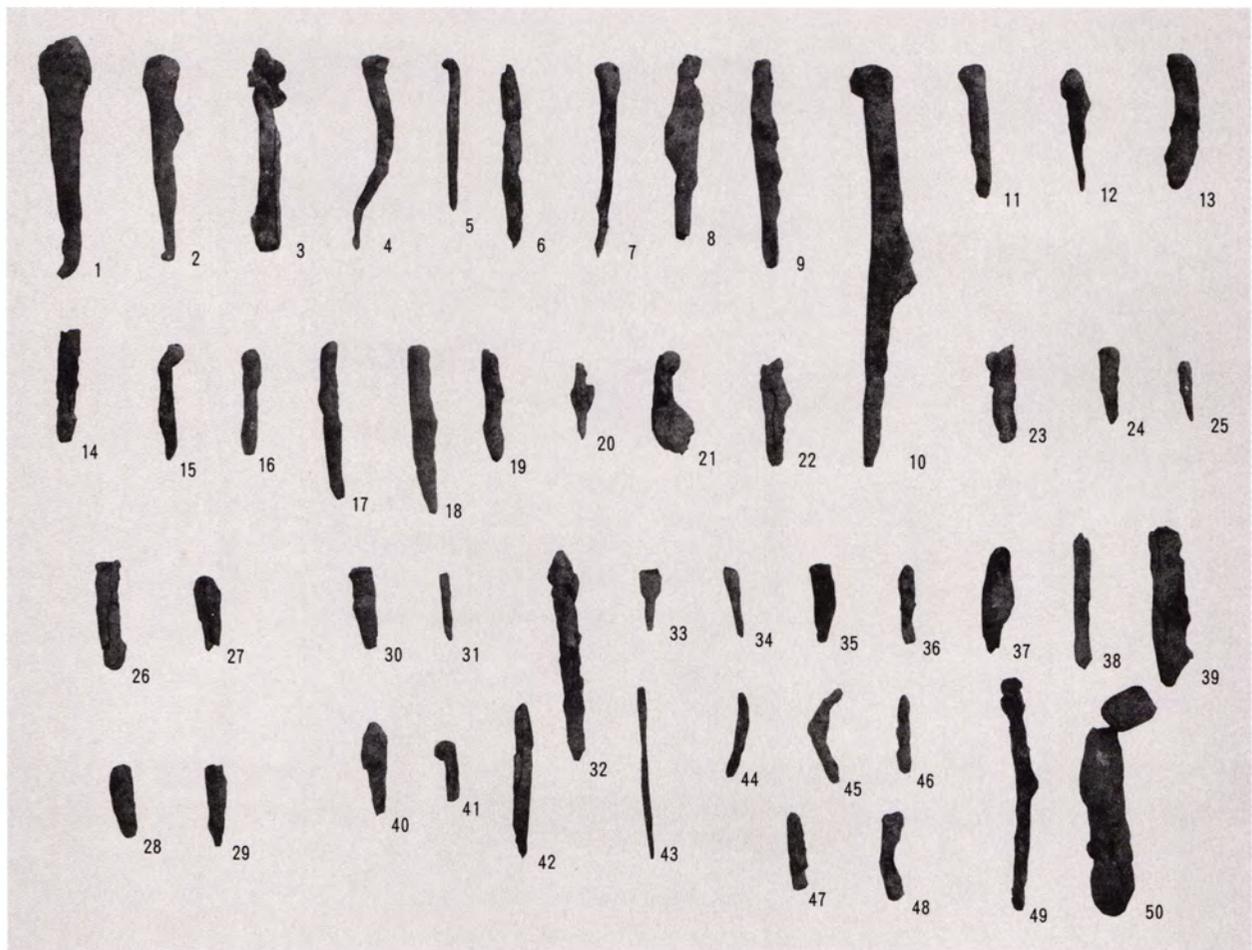
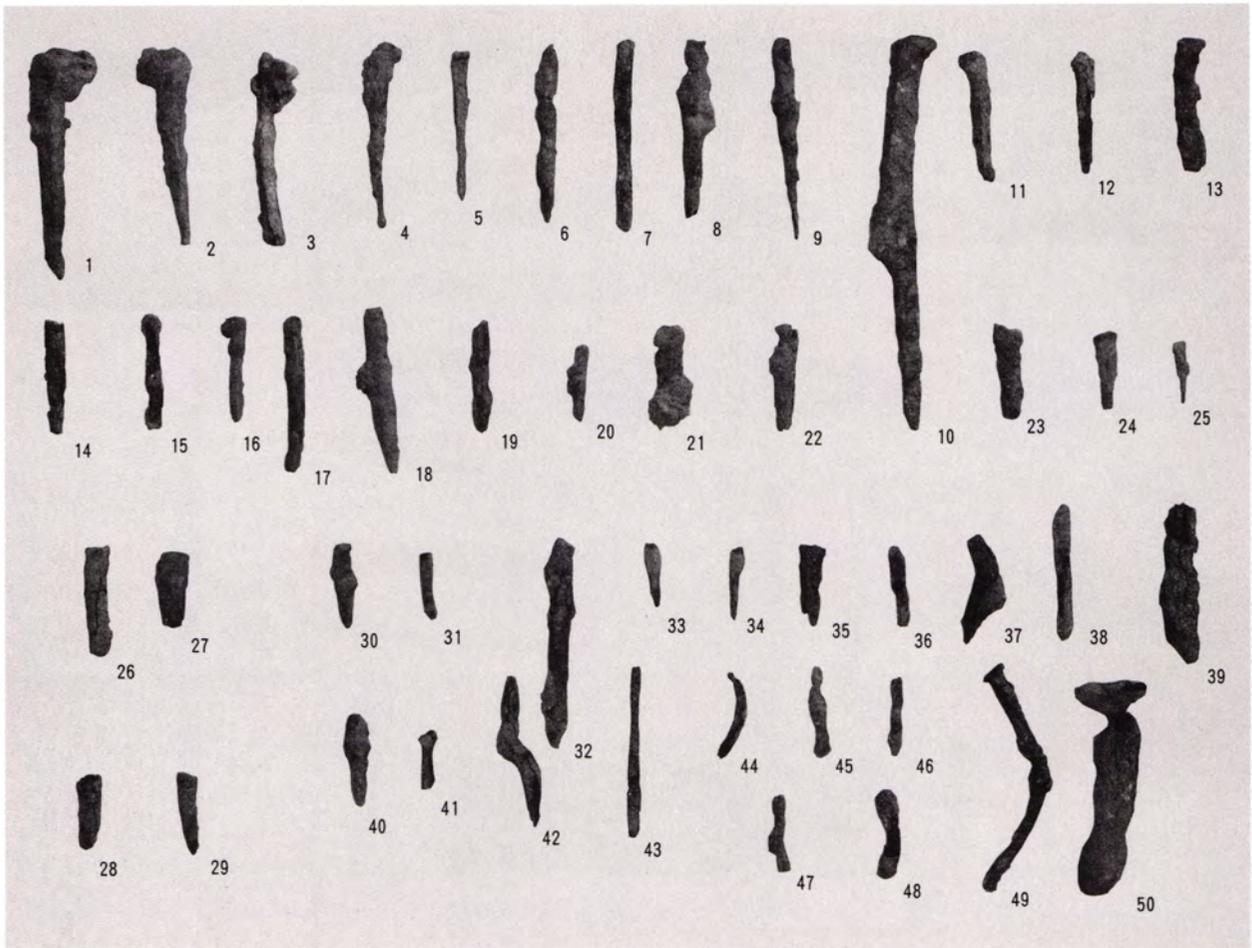
103

104

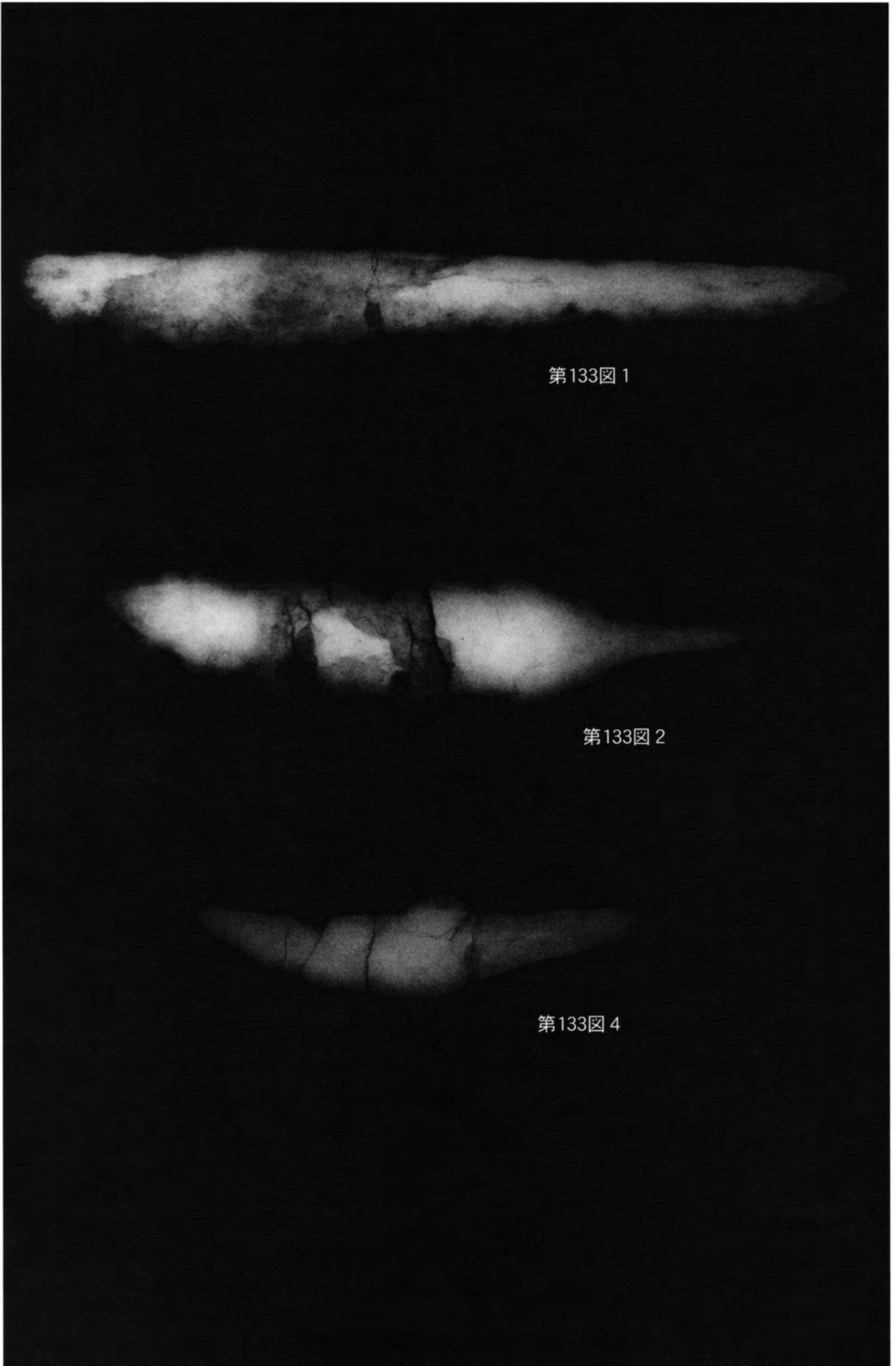
図版83 石器<18>



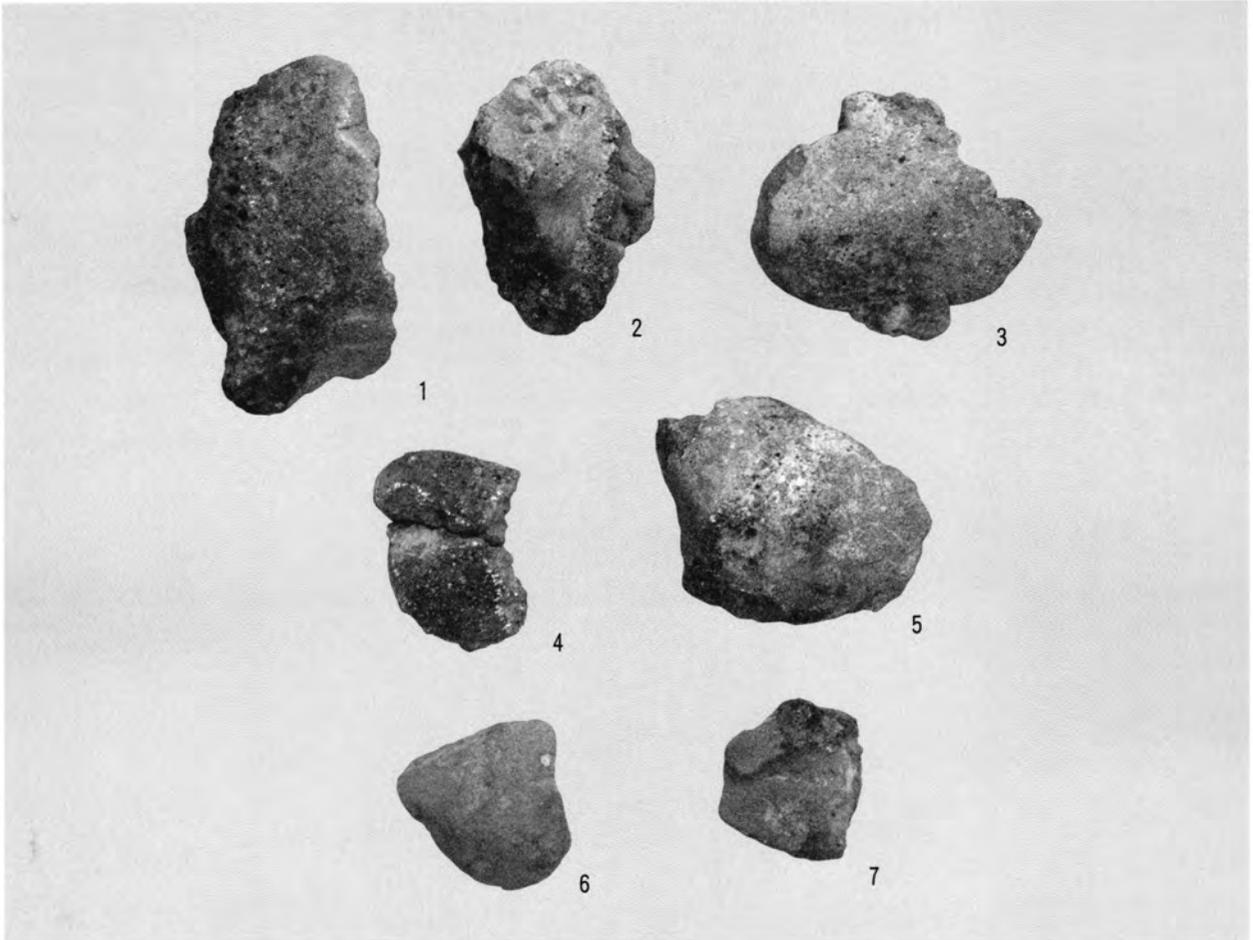
図版84 鉄製品<1> 刀子・鏃・他 (上:表面、下:裏面) (20は銅製)



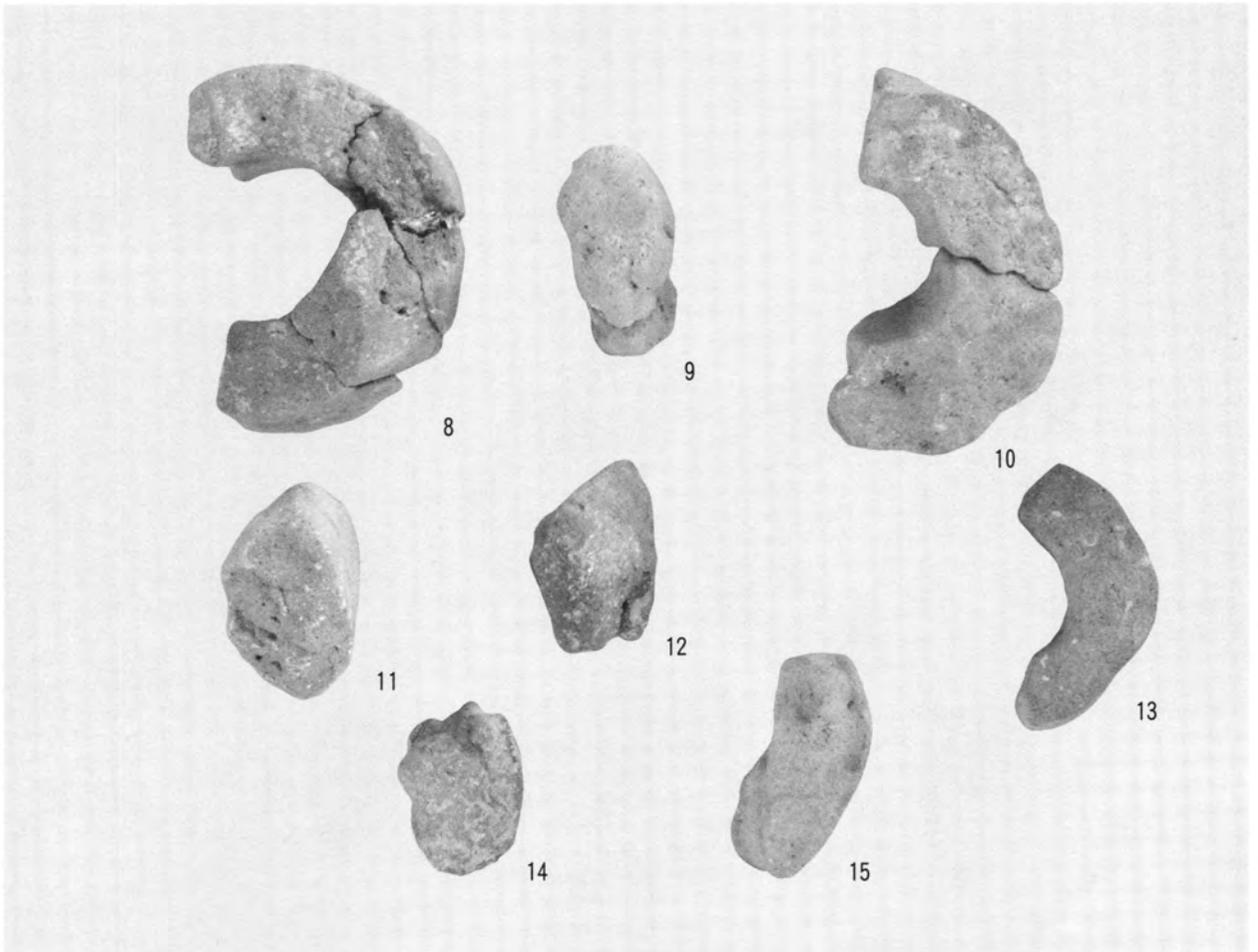
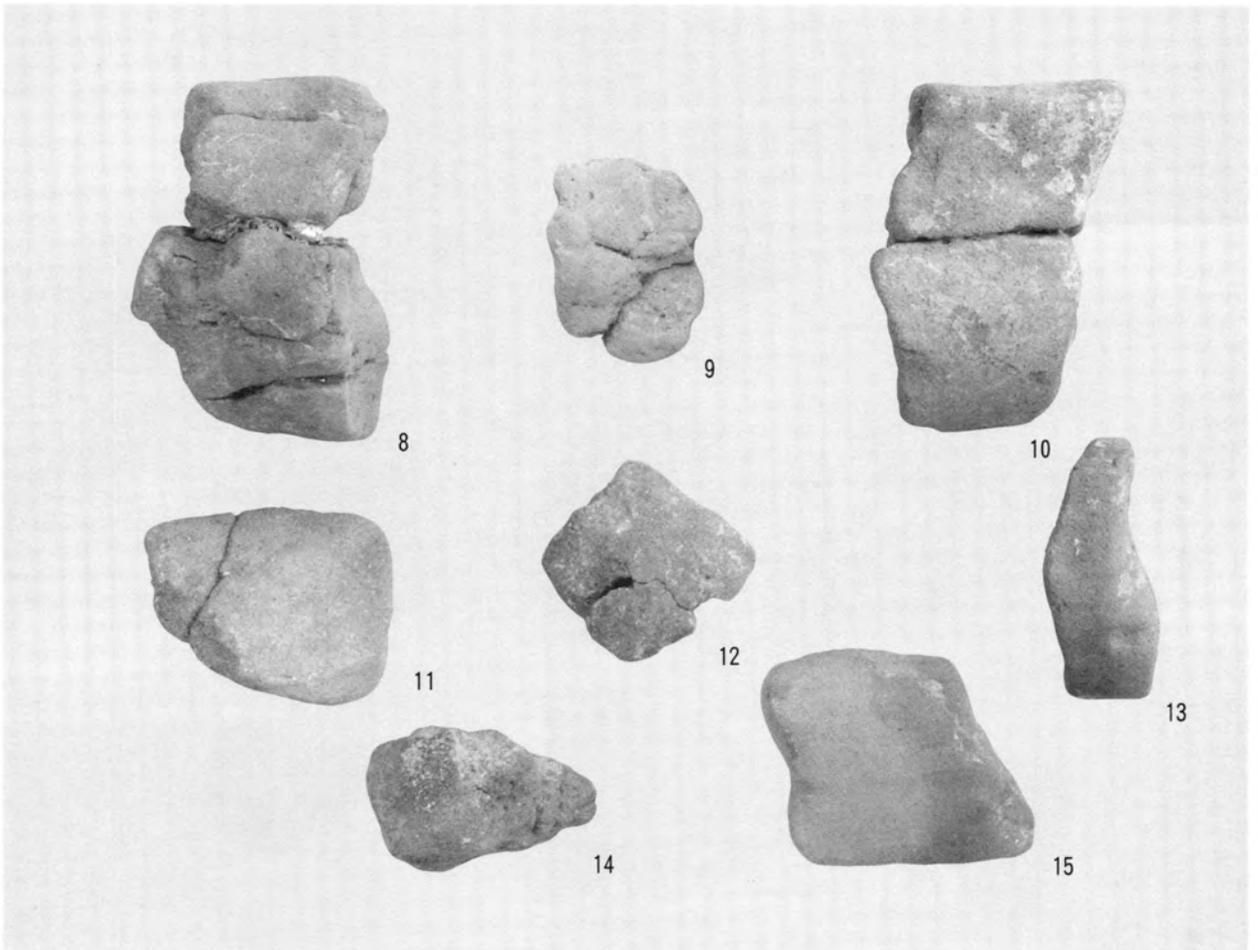
図版85 鉄製品<2> 釘 (上:表面、下:裏面)



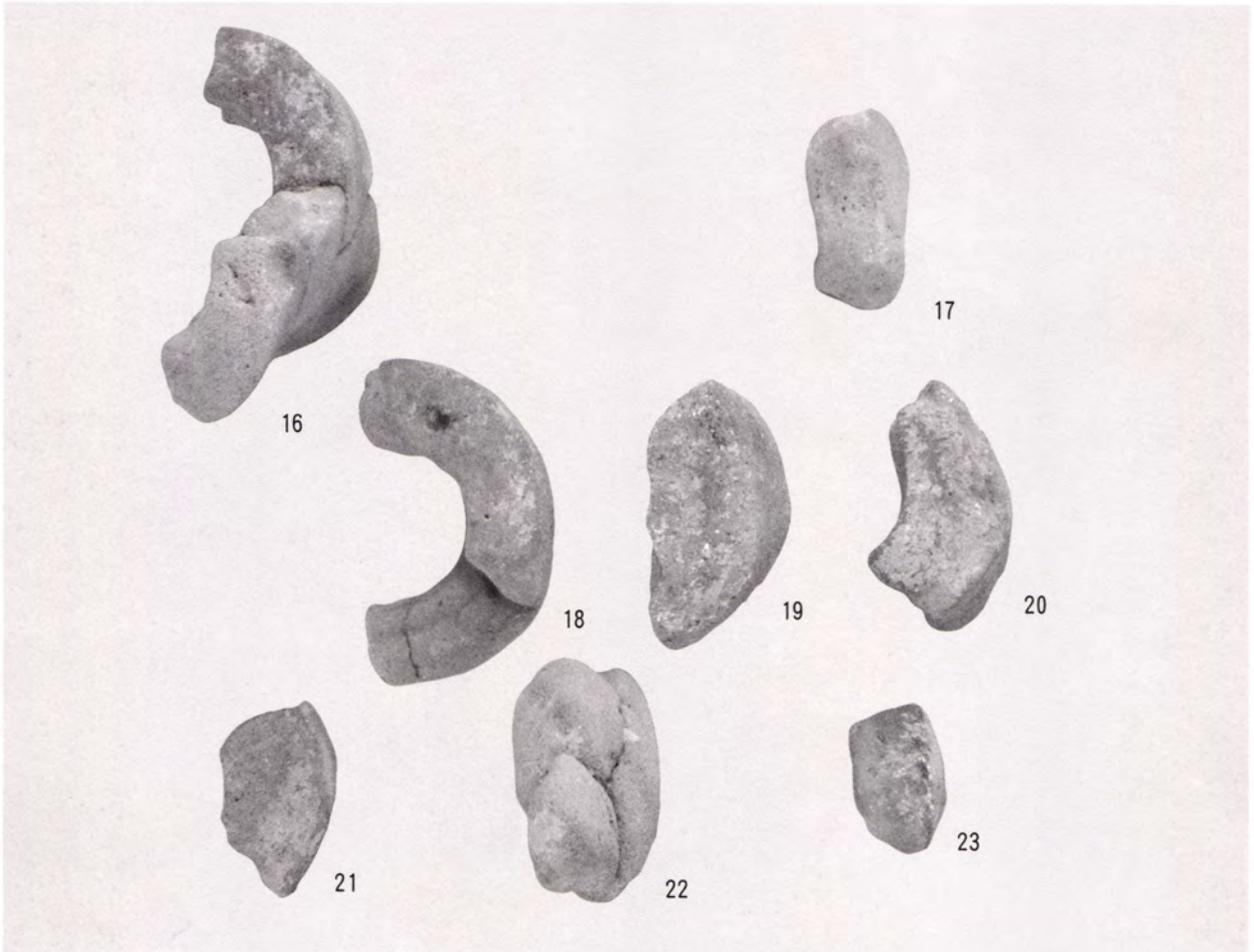
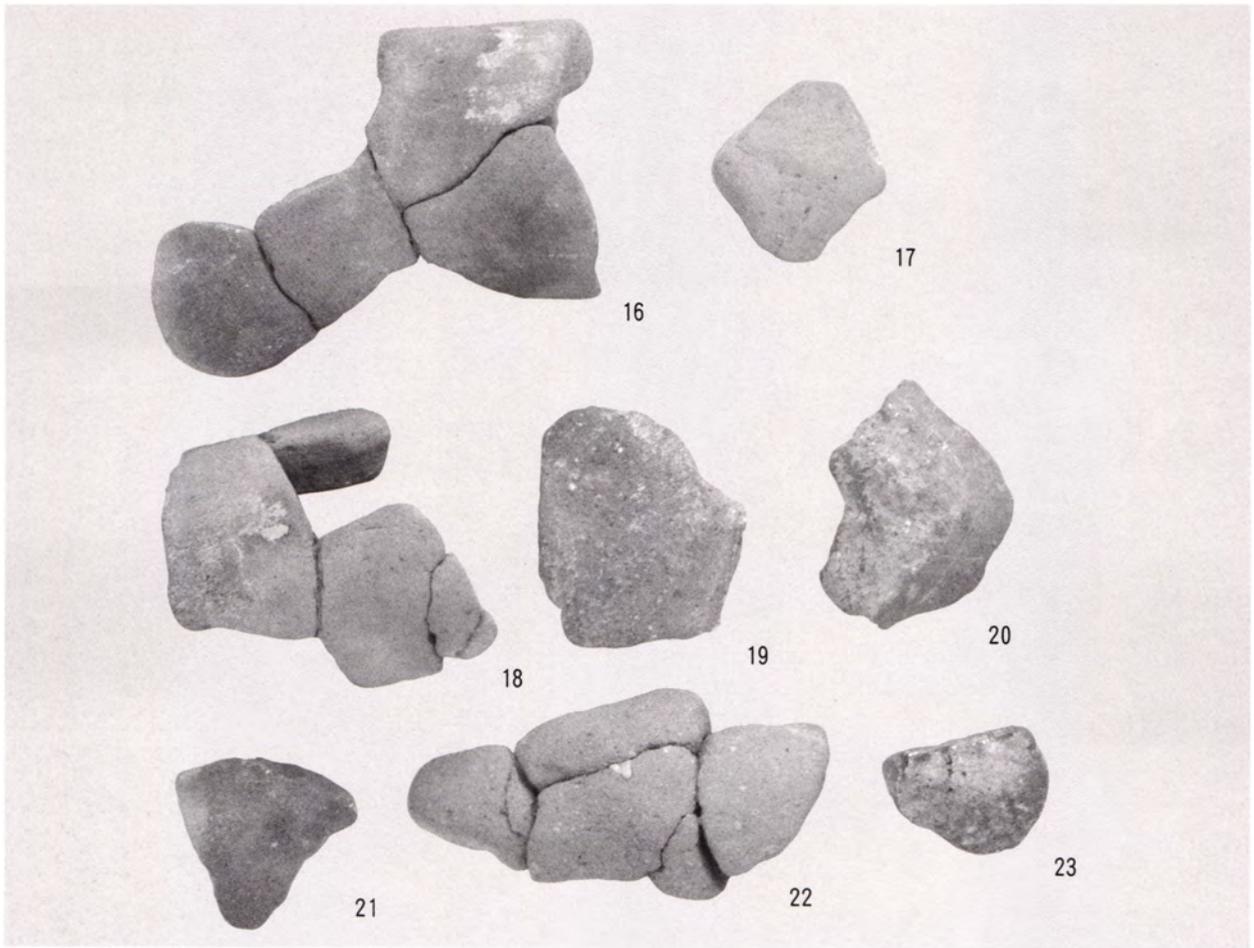
図版86 鉄製品 (レントゲン撮影)



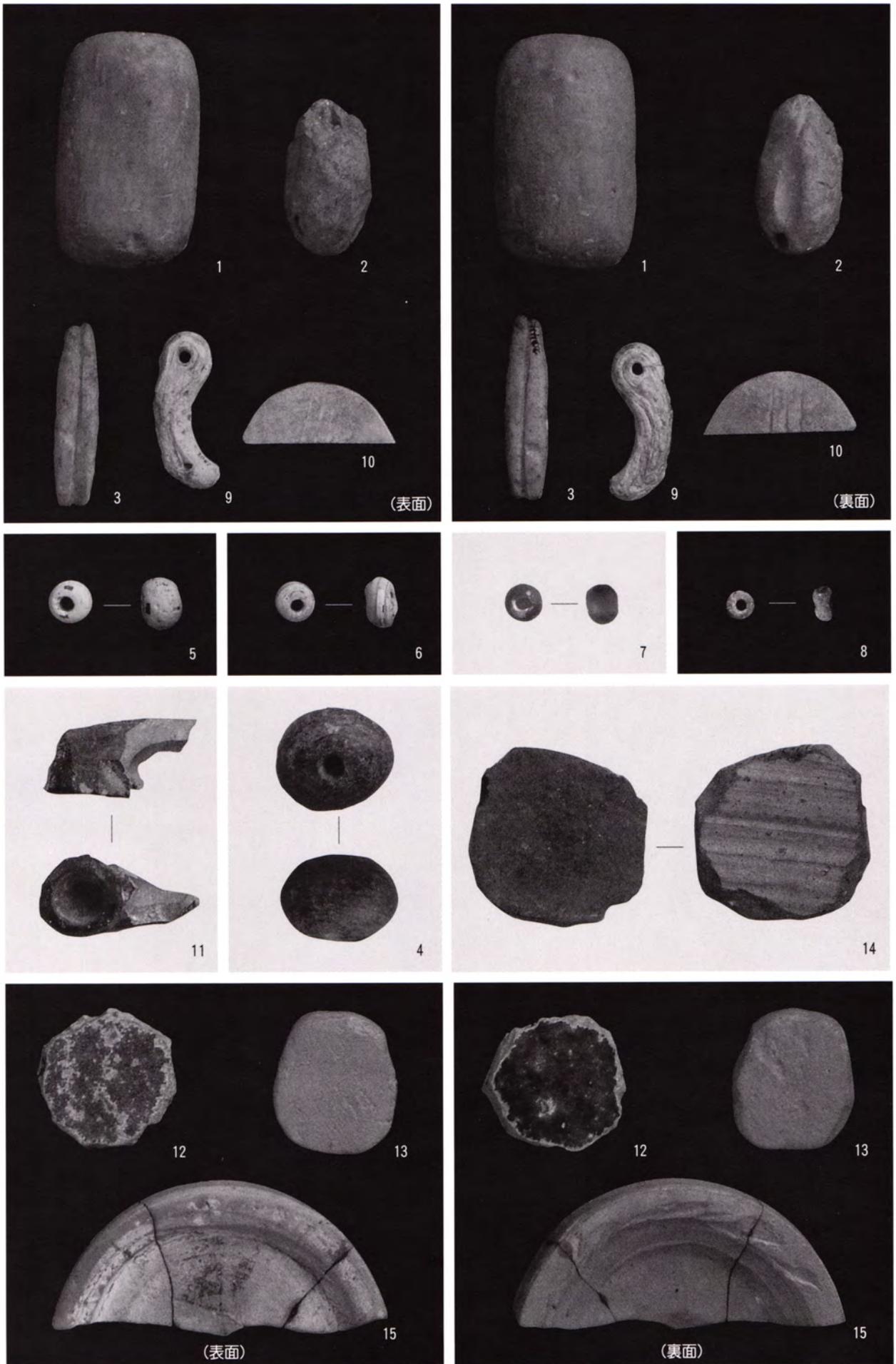
图版87 羽口<1> (上:侧面、下:正面)



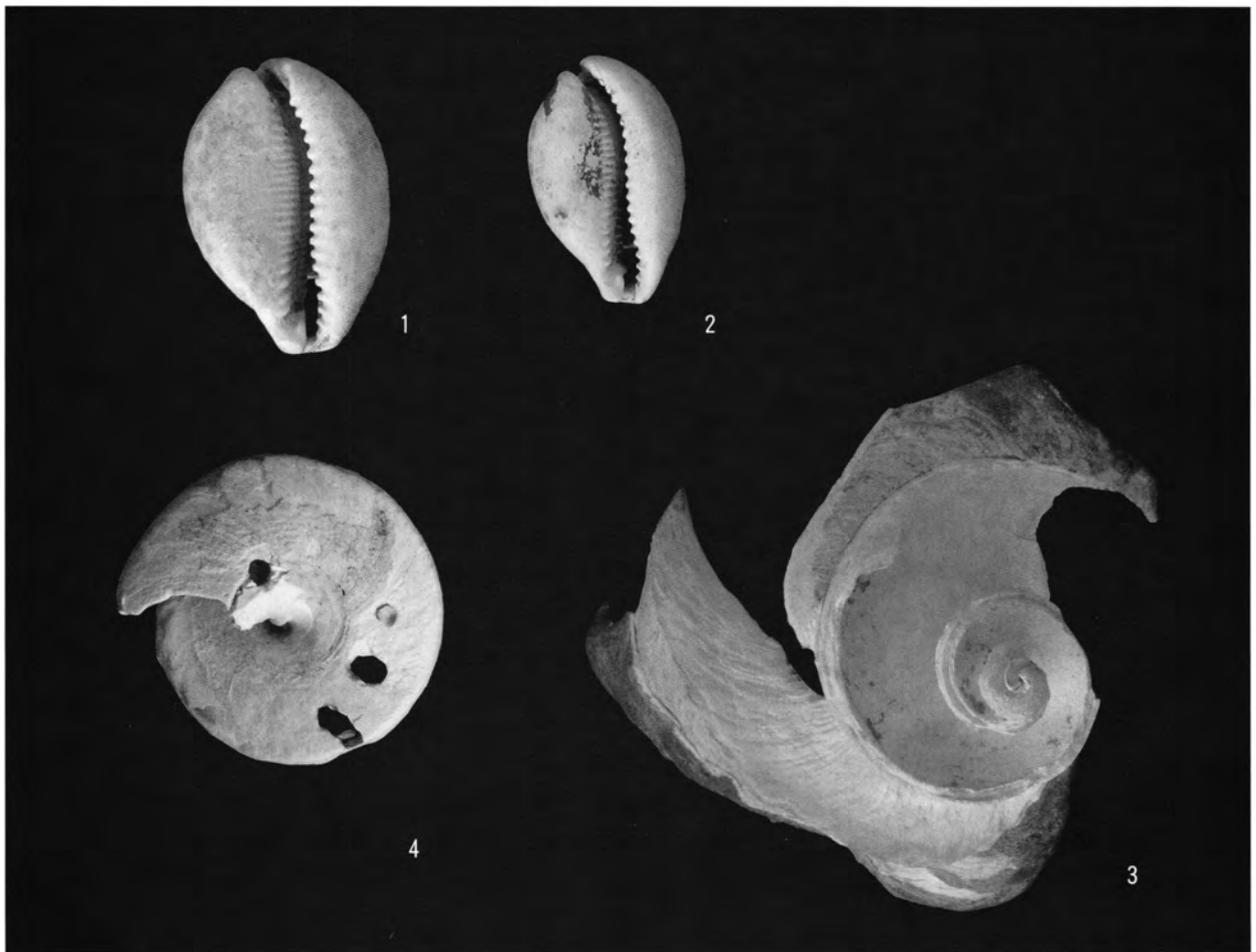
图版88 羽口<2> (上:侧面、下:正面)



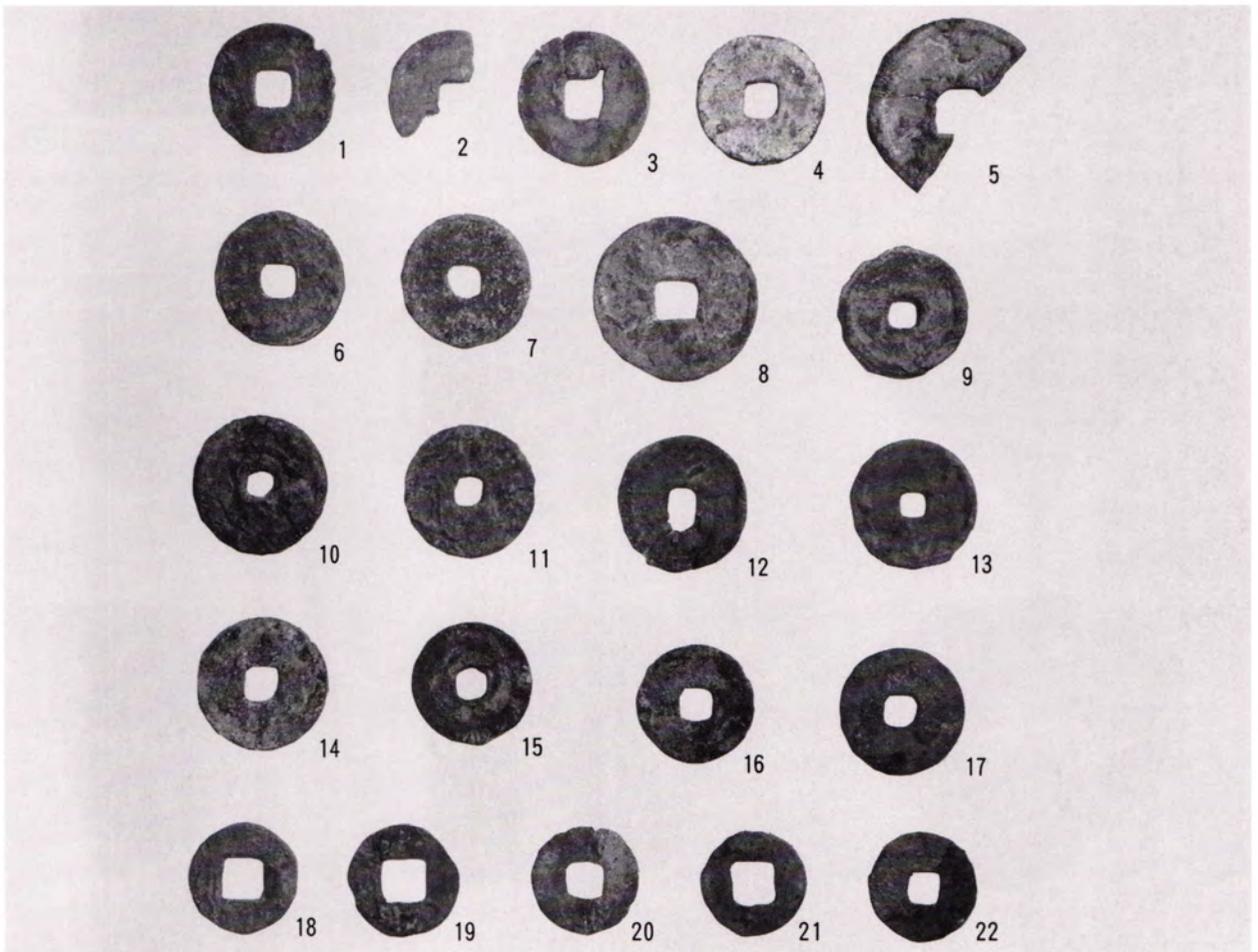
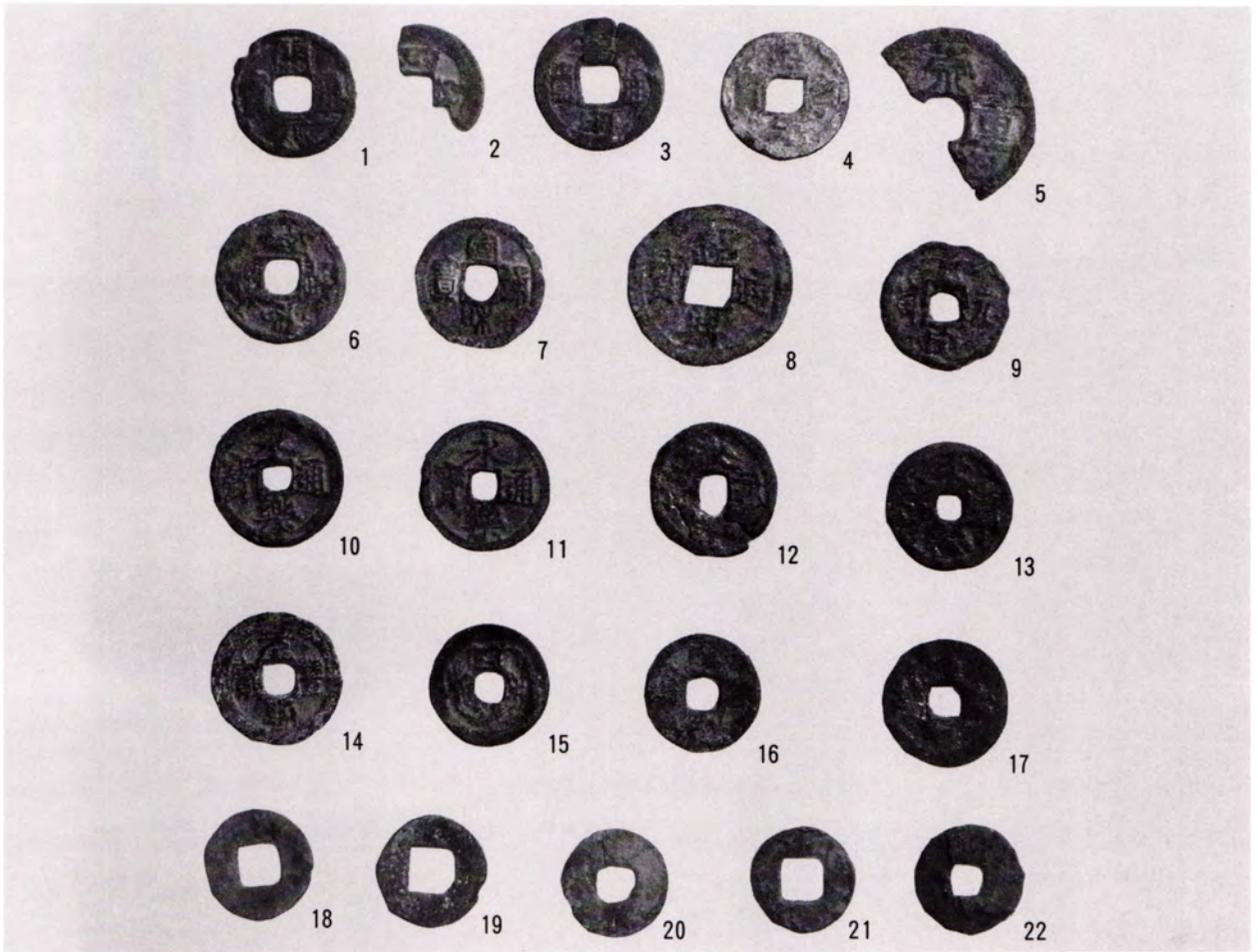
图版89 羽口<3> (上:侧面、下:正面)



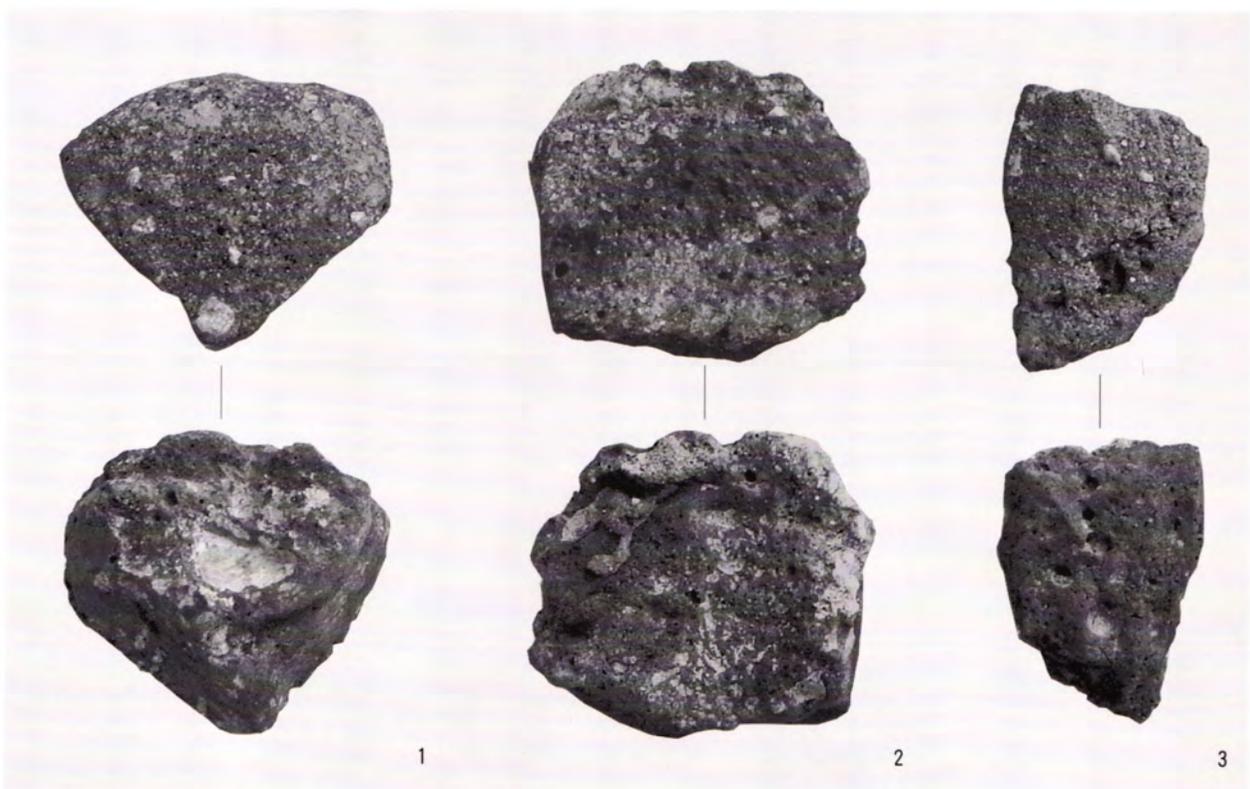
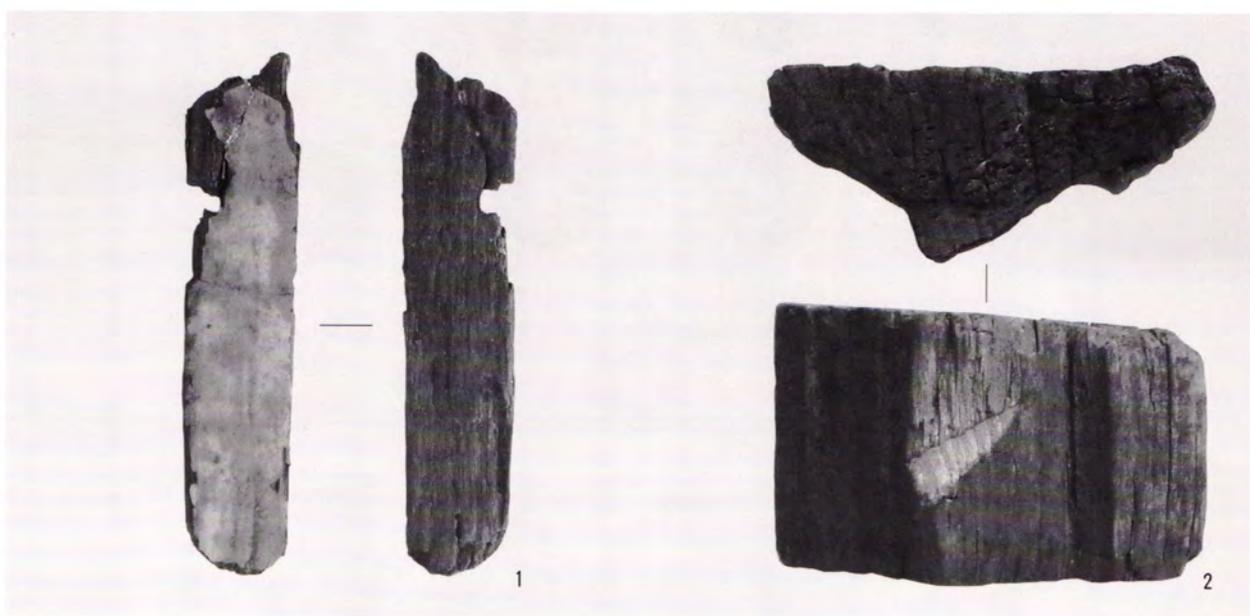
図版90 土錘・玉類・石製品・骨製品・円盤状製品・煙管



図版91 貝製品 (上：表面、下：裏面)



图版92 钱货 (上: 表面、下: 裏面)



図版93 上：瓦・中：木製品・下：碗型鉄滓

付 篇

＜付篇 1＞沖縄県北谷町後兼久原遺跡出土のグスク時代人骨

松下孝幸*

【キーワード】：沖縄県、グスク時代(中世)人骨、男性、幼児、木棺墓、太い四肢骨

はじめに

沖縄県中頭郡北谷町字桑江小字後兼久原くしかにくばるに所在する後兼久原遺跡から、1996年（平成8年）の発掘調査で、墓が4基出土し、そのなかから人骨が検出された。この遺跡は米軍基地、キャンプ桑江内に存在する。基地返還に伴い、この敷地に町庁舎の建設が予定されており、その工事に先立ち発掘調査が行なわれた。

この遺跡のピット内からは砂鉄が発見されたり、ふいごの一部が出土していることから、ここで鍛冶が行なわれていたようである。

これまで、沖縄県でグスク時代（中世）の人骨が出土しているのは、本例の他には、勝連城、浦添城、石垣市のピロースク遺跡、石垣貝塚（松下、1993）（15世紀後半）と平川貝塚（松下、1993）（15世紀後半～16世紀初頭）、勝連町の津堅第二貝塚に過ぎない。

今回出土した人骨の保存状態は必ずしもすべてが良好というわけではないが、性別は推定できるし、計測もできる部分があり、グスク時代の人骨がきわめて少ないことを考えれば本人骨は貴重な資料といえる。人骨の人類学的観察と計測をおこない、若干の考察をおこなったところ、興味ある所見を得たので、その結果を報告しておきたい。

資 料

1996年度の調査で、墓が4基検出され、4体の人骨が出土した（表1）。4基のうちの3基には成人が、残り1基には幼児が埋葬されていた。1号墓、3号墓では人骨の保存状態は比較的良好であったが、2号墓と4号墓では保存状態が著しく悪く、人骨は皮一枚がかろうじて残存していたという程度の残り方で、残存していた骨の名称と埋葬姿勢を知ることができただけで、骨の計測は不可能であった。しかし、成人骨3体については性別を推定することは可能であった。

表1 資料数 (Table 1. Number of materials)

成 人			幼小児	合計
男性	女性	不明		
3	0	0	1	4

成人骨にはきわめて明瞭な特徴が認められ、グスク時代（12世紀）の人々の形質的特徴の一部が見え始めてきた。

* Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

表2 出土人骨一覧 (Table 2.List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	埋葬姿勢	埋葬遺構
1号墓人骨	男性	壮年	仰臥	木棺
2号墓人骨	男性	不明	仰臥	木棺
3号墓人骨	-	幼児(4歳)	伏臥	土壇
4号墓人骨	男性	不明	仰臥	不明

なお、性判別については所見の項でそれぞれの個体ごとにその推定根拠を挙げた。年齢区分に関しては表3の基準のとおりである。

現場での詳細な観察や人骨の所見から、表2のとおり、1号墓人骨、2号墓人骨、4号墓人骨はともに男性骨と推定した。3号墓人骨は4歳ぐらいの幼児骨である。

表3 年齢区分 (Table 3.Division of age)

年齢区分		年	齢
未成人	乳児	1歳未満	
	幼児	1歳～5歳	(第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳	(第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳	(蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳	(40歳未満)
	熟年	40歳～59歳	(60歳未満)
	老年	60歳以上	

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

なお、両者の所属時代は12世紀と考えられており、沖縄の時代編年でいえば、グスク時代ということになる。

人骨の出土姿勢は、1号墓人骨(男性)は、仰臥で、右側の肘関節は強屈しており、手のひら(掌側面)を右胸にあてている。左側の肘関節は伸展状態で、手は左側の寛骨の上に置かれており、手のひら(掌側面)を腰に向けている(回内状態)。一方、下肢骨は、両側とも膝の関節を強屈した状態で、両大腿骨はそれぞれ外側に開いていた。要するに股を開いた状態で膝を強く曲げていた。

2号墓人骨は、右側半分の人骨の残りが悪い。姿勢は仰臥である。左側の肘関節は強屈していたが、右側の上肢骨が残存していないので、右側の肘関節の状態は不明である。下肢骨は、左側の下腿の骨が残存していなかったため、膝関節の様子がわからないが、右側では下腿の骨の一部を確認することが可能であった。その位置から推測すれば、どうやら、2号墓人骨の場合も1号墓人骨と同じように、大腿骨を開き、膝関節を強屈した状態で埋葬されていたようである。

3号墓人骨は、頭の向きが西で、他の成人の場合とは反対方向であった。埋葬姿勢は伏臥である。右側上肢は腹の前に肘関節を伸ばした状態で、左側はからだの脇に肘関節を伸展した状態であった。下肢は、膝関節を60度ぐらい曲げた状態であった。下肢を屈曲しているため、下肢を

墓壙内に納めるためには、腰は墓壙の北側によせなくてはならなかったようである。右側の肋骨の状態からからだ全体は右側方向へ強く圧力がかかったようである。幼児の上には大きな石が乗せてあり、埋葬状態は異常である。埋葬姿勢が伏臥であることと遺体を石で覆うことは関連があるようで、幼児の異常死を想起させる。

4号墓人骨は、頭の向きは東である。姿勢は仰臥。上肢は、右側の肘関節の状態は不明であるが、左側の肘関節は強屈している。下肢は、右側の膝関節は強く屈曲した状態で、左側に倒れていた。左側は大腿骨が痕跡状態で残っていたにすぎないので、膝関節の状態は不明であるが、かろうじて残っていた左側大腿骨の位置から右側と同じ状態であったものと推測される。

所 見

・ 1号墓人骨（男性、壮年）

1. 頭蓋

顔面部を欠失している。脳頭蓋もかろうじて形を保っていた。計測はできない。観察によっても頭型は推測もできない。後頭骨は原形を保ったまま取り出すことができた。幅径はかなり広く、頭蓋の径は大きかったようである。三主縫合は矢状縫合の後半部とラムダ縫合の左側部が観察できたが、前者は内外両板ともまだ開離しており、後者では内板の一部に癒合がみられた他は開離しており、外板も開離している。外後頭隆起の観察ができたが、この部分は著しく突出している。また、乳様突起もかなり大きい。外耳道は観察できない。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/	/	6	5	4	3	/	1		1	/	3	4	/	/	/	8
8	7	6	5	4	③	/	/		/	/	/	/	5	6	/	/

〔●：歯槽閉鎖 ○：歯槽開存 ▼：先天的欠損 ■：未萌出 /：不明、番号は歯種〕

〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の 2～3 度で、咬耗はかなり強い。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。また、上顎左側中切歯の舌側面に強い咬耗の跡がみられることから、歯の咬合形式は鉗状咬合であろう。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

両側の上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

① 上腕骨

右側の方が良好な残存状況である。骨体は著しく大きく、三角筋粗面の発達もきわめて良好である。

計測値は、中央最大径が 27mm（右）、26mm（左）、中央最小径は 19mm（右）、17mm（左）で、骨体断面示数は 70.37（右）、65.38（左）となり、骨体には強い扁平性が認められる。骨体最小周は 69mm（右）、67mm（左）、中央周は 75mm（右）、70mm（左）で、骨体はかなり大きい。

② 橈骨

右側の方が保存良好である。骨体は著しく大きく、扁平で、骨間縁の発達も良好で、橈骨粗面もかなり大きい。

③尺骨

尺骨も右側の方が保存良好である。骨体は著しく大きく、骨間縁は中央部で著しく突出している。

(2)下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

①寛骨

右側の保存状態は良好である。腸骨と坐骨が残っていた。大坐骨切痕の観察は可能で、この角度は小さい。

②大腿骨

左右とも残存していたが、右側の方が保存状態は良好である。長さはあまり長いものではないようである。また、粗線の発達も良好で、骨体は太く、骨体上部は扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径が28mm (右)、30mm (左)、横径は29mm (右)、29mm (左)で、骨体中央断面示数は96.55 (右)、103.45 (左)となり、骨体両側面の後方への発達はあまりよくない。骨体中央周は90mm (右)、93mm (左)で、骨体は著しく太い。また、上骨体断面示数は75.76 (右)、81.25 (左)となり、右側の骨体上部は扁平である。

③脛骨

右側の方が保存状態は良好である。長さは長いものではないようである。骨体は太くて、扁平である。ヒラメ筋線の発達もきわめて良好で、骨体の断面形は両側ともヘリチカのIVに近いV型を呈している。

計測値は、中央最大径が34mm (右)、35mm (左)、中央横径は22mm (右)、22mm (左)で、中央断面示数は64.71 (右)、62.86 (左)となり、左側は平脛に属し、骨体は扁平である。骨体周は89mm (右)、89mm (左)、最小周は81mm (右)、80mm (左)で、骨体は太い。

④腓骨

腓骨も右側の方が残存状態はよい。骨体の径は大きい。稜の発達は良好で、溝も深い。

4. 推定身長値

四肢長骨の最大長が計測できるものはなかったが、現場で右側大腿骨の最大長を推測できた。どんなに長く見積もっても最大長は約40cmくらいしかない。この推定値から Pearson の公式を用いて推定身長値を算出すると、156.51cm の値が得られる。これは低身長値である。

5. 性別・年齢

性別は、外後頭隆起が強く隆起し、大坐骨切痕の角度が小さいことから、男性と推定した。年齢は、観察できた矢状縫合の後半部とラムダ縫合の左側部の内外両板がほとんどまだ開離していることから、壮年と推定した。

・ 2号墓人骨 (男性年齢不明)

頭蓋、鎖骨、肋骨、左側の上肢骨、左側大腿骨、両側の寛骨、右側の足骨を確認することができたが、大部分の骨は取り上げることができなかった。取り上げが可能で、多少の所見が得られたのは以下の骨のみである。

1. 頭蓋

上顎骨の観察が可能であった。歯槽性突顎の傾向がうかがえる。

2. 上肢骨

左側の上腕骨体が残存していた。計測はできないが、現場で観察したところ、1号人骨ほどではないが、骨体は太い。尺骨らしい骨も残存していたが、大きさなどの特徴は保存状態が悪いので、よくわからない。

3. 下肢骨

観察ができたのは左側大腿骨だけである。骨体は太い。長さは計測できないが、現場で確認したところ、最大長はおそらく40cmぐらいだったようである。

4. 性別・年齢

性別は、四肢骨の径が大きいことから、男性と推定した。年齢は不明である。

・ 3号墓人骨（幼児・4歳）

埋葬姿勢が伏臥で、遺体の上には石がのせてあった。伏臥の埋葬姿勢は真志喜安座間原遺跡などの例など沖縄ではよく目にする埋葬姿勢であるが、本土では珍しい姿勢で全時代を通じてほとんど存在しない。人骨には傷などの異常所見は認められなかった。永久歯根の形成程度から、4歳の幼児骨と推定した。計測値は文末に掲載している。

・ 4号墓人骨（男性・年齢不明）

3体の成人骨のなかでもっとも保存状態が悪いものである。頭蓋、左右の上腕骨、左側の前腕の骨、右側の大腿骨と下腿の骨、左側の大腿骨および肋骨を確認することができたが、左側の大腿骨と肋骨は痕跡状態である。

1. 頭蓋

頭蓋は現場では下顎骨や上顎骨および頭頂骨、右側側頭骨などを確認できたが、取り上げは困難な状況であった。頭型は観察によっても推測できなかった。下顎骨の径は大きそうであった。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／	／	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	／
8	7	6	5	④	③	／	／	／	／	3	4	⑤	6	7	8

〔●：歯槽閉鎖 ○：歯槽開存 ▼：先天の欠損 ■：未萌出 ／：不明、番号は歯種〕

〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の3度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。また、歯の咬合形式は不明である。

3. 上肢骨

両側の上腕骨を確認することができたが、残存状況は皮一枚という状況である。観察したところでは、骨体は細くない。また、左側の橈骨と尺骨も確認できたが、これも取り上げられない状況であった。現場での観察ではこの骨体も細いものではなかった。

4. 下肢骨

大腿骨は右側の観察が可能であったが、左側は痕跡状態で、観察もできなかった。右側大腿骨の骨体は取り上げても計測できない状況であったが、現場で観察したところでは径は大きく、骨

体は太かった。

右側の脛骨と腓骨が残存していたが、計測はできない。観察が可能であったが、腓骨はそれほど太いものではなく、脛骨体の径は大きいものであった。

5. 性別・年齢

性別は、下顎骨と下肢骨の径が大きいことから、男性と推定した。年齢は縫合の観察がまったくできなかったため、不明としておきたい。

考 察

本例は頭蓋の保存状態が悪く、計測できるものが存在しなかったため、四肢骨について若干考察をおこなっておきたい。

1. 上腕骨

男性の上腕骨は骨体がかなり太く、本遺跡出土人骨の最大の特徴といっても過言ではない。1号人骨は計測ができたが、2号人骨は計測できなかった。1号人骨の上腕骨の計測値を周辺の人骨と比較してみた。比較には同じ沖縄県の例として、石垣市の石垣貝塚、宜野湾市の真志喜安座間原、木綿原、九州の弥生人の例として、佐賀県の大友と上腕骨がかなり太かった長崎県の壱岐の大久保、それに縄文人の例として大振りな熊本県の御領を用いた。石垣貝塚出土の人骨は中世人骨、真志喜安座間原は縄文の晩期から弥生時代の中期頃の人骨で、木綿原は弥生人骨である。また、大久保は時代の決め手を欠いているが、風習的抜歯が存在することから私は弥生人骨と考えている。

表4のとおり、本例の中央周と最小周はかなり大きい。現場で実見したとき一見して上腕骨がかなり太いことがわかった。このような上腕骨は山口県豊北町の大河浜遺跡出土の近世人骨や土井ヶ浜弥生人骨の一部にみられるものと同じ特徴を示しており、上腕部の筋の発達が良好であったことを示している。

本例の中央周と最小周の計測値は石垣貝塚、真志喜安座間原、木綿原、大友よりも大きく、壱岐の大久保に一致し、御領とも大差ない。骨体断面示数は木綿原、大友、大久保、御領よりも小さく、真志喜安座間原と大差ない値で、この時代の上腕骨としては骨体は扁平である。

2. 大腿骨

表5は大腿骨の比較表である。中央周は上腕骨の場合と同じ傾向が認められ、計測値は大久保の計測値に一致し、かなり大きく、石垣貝塚、真志喜安座間原、木綿原、大友、御領よりもかなり大きい。表5で本大腿骨はかなり太いことがわかる。骨体中央断面示数は表5では最小値を示し、骨体両側面の後方への発達はみられない。また、上骨体断面示数は御領に次いで小さく、骨体上部は扁平である。

3. 脛骨

表6は脛骨の比較表である。骨体周と最小周は表6では最大値となり、やはり骨体太いことがわかる。中央断面示数は表6では最小値を示し、骨体はこの時代の脛骨としてはかなり扁平である。

4. 本人骨の特徴

各人骨の特徴を明らかにし、周辺地域の人骨との比較をおこなった結果、後兼久原グスク人の

特徴はかなり明瞭なものになった。しかし、残念ながら、頭型や顔面の形態は保存状態が悪かったので、明らかにすることはできなかった。とくに時代変化や系統性を論じる際に大きな手がかりになる鼻根部の特徴がわからなかったことは、四肢骨の特異性が明らかになっただけに残念である。

今回出土したのは3体の男性骨と1体の幼児骨であったが、このうち1号人骨の四肢骨の特徴は、とにかく上肢も下肢も骨体が太いことである。とくに上腕骨の太さと骨体の扁平性は特筆に値する。下肢骨も太く、下半身もよく発達していたことがうかがえるが、大腿骨には柱状性がみられないことと脛骨が扁平であることから、大腿部よりも下腿の筋の発達がよかったものと思われる。この遺跡が鍛冶の遺跡であることを考えると、上腕部の発達がよいことは鍛冶労働の結果と考えられる。槌を打つ際、足首の関節（距腿関節）を安定させることが必要になる。膝関節と距腿関節を安定させるために下腿部の筋の発達がうながされたものと思われる。本例の場合、骨の特徴と労働形態がよく一致し、被葬者の生前の労働形態が示唆されて、興味深い。

また、推定身長値は、156.51cm程度であろう。この値は西北九州弥生人よりも低く、低身長であるが、沖縄県の12世紀ころの身長値がどのくらいであったかがよくわからないので、身長値についてはグスク時代の出土例が増えてから検討してみたい。

要 約

沖縄県中頭郡北谷町字桑江小字後兼久原にある後兼久原遺跡の1996年（平成8年）の発掘調査によって、4基の墓が出土し、グスク時代に属する人骨が検出された。このうちの1体は保存状態も良好で、これまでほとんどわかっていなかったグスク時代人骨の特徴の一部を知ることができた。その結果は次のように要約することができる。

1. 検出された人骨は4体で、1体は4歳の幼児骨、残りの3体は成人骨で、すべて男性骨であった。
2. この4体の人骨は、考古学的所見から、グスク時代（12世紀）に属する人骨と考えられている。
3. 埋葬姿勢は、成人は仰臥であったが、幼児は伏臥で、遺体の上には石がのせてあった。
4. 3体の成人骨のうち保存状態がよかったのは1体のみであったが、それでも頭蓋の保存状態は悪く、頭型、顔面の形態、鼻根部などの特徴を知ることはできなかった。また、この1体は四肢骨が太く、頑丈であったが、とくに上腕骨体は著しく太く、上肢筋の発達がよかったことがうかがえる。
5. 男性の推定身長値は156.51cm程度で、低身長である。
6. 本遺跡は考古学的調査の結果、鍛冶の遺跡であることがわかった。被葬者の四肢骨、とくに上腕骨の所見は鍛冶労働に従事していたことを推測させるには十分であった。
7. 幼児の伏臥例が見られた。沖縄では伏臥の埋葬はけっして珍しいものではないが、本例では、遺体の上には石が乗せられており、特別な意味が込められているようである。伏臥という埋葬姿勢の意味を考える上で貴重な例といえる。
8. グスク時代の人々の形質的特徴はほとんどわかっていない。本例でも鍛冶従事者の特徴がわかったにすぎないし、頭蓋の特徴は明らかにできなかった。今後の出土例の増加に期待したい。

謝 辞

擧筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた沖縄県北谷町教育委員会の諸先生方に感謝致します。

《参考文献》

1. 金岡丈夫、1929：沖縄県那覇市外城嶽貝塚より発見せる人類大腿骨に就いて。人類学雑誌、44：217-230.
2. 松下孝幸、1987：弥生人の地域性。〈シンポジウム〉西南日本人—文化と人の渡来をめぐって。季刊人類学18-4：219-232.
3. 松下孝幸・他、1988：沖縄県宜野座村クジチ墓出土の近世人骨。宜野座村乃文化財第6集（クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書）：107-140.
4. 松下孝幸・他、1989a：沖縄県宜野湾市真志喜安座間原第1遺跡出土の縄文・弥生相当期の人骨（予報）（会）。人類学雑誌、97：265.
5. 松下孝幸・他、1989b：沖縄県北谷町クマヤ洞穴出土の古人骨（縄文時代晩期相当期人骨）（会）。解剖学雑誌、64：362.
6. 松下孝幸・他、1989c：沖縄県北谷町伊礼原B遺跡出土の人骨。伊礼原B遺跡—旧メイモスカラー地区雨水排水施設工事に係る発掘調査—（北谷町文化財調査報告書第8集）：127-149.
7. 松下孝幸・他、1990a：沖縄県読谷村木綿原遺跡出土の弥生時代人骨（会）。解剖学雑誌、65：244.
8. 松下孝幸・他、1990b：沖縄県浦添市城間古墓群出土の近世人骨。城間古墓群—牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査—：75-112.
9. 松下孝幸・他、1991：沖縄県嘉手納町野国貝塚群B地点出土の縄文時代人骨。（投稿中）
10. 松下孝幸・他、1992：沖縄県宜野湾市真志喜安座間原遺跡出土の縄文・弥生時代人骨。謝名II（真志喜土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書[1]）宜野湾市文化財調査報告書第15集：第5章：1-99.
11. 松下孝幸・他、1993a：具志川島遺跡群出土の古人骨。具志川島遺跡群（伊是名村文化財調査報告書第9集）：215-244.
12. 松下孝幸、1993b：沖縄県石垣市石垣貝塚出土の人骨。石垣貝塚（石垣市文化財調査報告書第17号）：31-50.
13. 松下孝幸、1993c：沖縄県石垣市平川貝塚出土の人骨。平川貝塚（石垣市文化財調査報告書第18号）：87-91.
14. 松下孝幸、1994：「日本人と弥生人」、祥伝社。
15. 松下孝幸、1996：弥生人=その形質的特徴と起源を探る=、『卑弥呼の動物ランド-よみがえった弥生犬』（大阪府立弥生博物館平成8年春季特別展図録）：82-87.
16. 松下孝幸、1996：沖縄県北谷町上勢頭古墓群出土の近世人骨。上勢頭古墓群（北谷町文化財調査報告書第16集）：105-115.
17. 佐野一、1978：木綿原遺跡出土の人骨について。木綿原遺跡（読谷村文化財調査報告書第5集）：112-114.

表4 上腕骨計測値 (男性、右、mm) (Table 4. Comparison of measurements and indices of male right humeri)

	後兼久原 グスク時代人 沖縄県		石垣貝塚 中世人 沖縄県 (松下)		真志喜安座間原 縄文～弥生人 沖縄県 (松下・他)		木綿原 弥生人 沖縄県 (松下・他)		大友 弥生人 佐賀県 (松下)		大久保 弥生人 長崎県 (松下・他)		御領 縄文人 熊本県 (金関・他)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1. 上腕骨最大長	—	—	2	302.00	2	276.50	1	278(左)	9	294.33	1	306	1	328
5. 中央最大径	1	27	4	22.75	11	22.82	3	23.33(左)	37	24.46	1	25	3	25.50
6. 中央最小径	1	19	4	16.00	12	16.08	3	17.33(左)	37	17.97	1	19	3	19.00
7. 骨体最小周	1	69	3	59.67	11	58.91	3	59.33(左)	37	64.57	1	69	3	70.33
7(a). 中央周	1	75	4	65.50	11	64.00	3	67.67(左)	35	71.00	1	75	3	75.33
6/5 骨体断面示数	1	70.37	4	70.29	11	69.36	3	74.67(左)	37	73.60	1	76.00	3	74.50
7/1 長厚示数	—	—	2	20.88	2	20.91	1	20.50(左)	9	22.32	1	22.55	1	22.90

表5 大腿骨計測値 (男性、右、mm) (Table 5. Comparison of measurements and indices of male right femora)

	後兼久原 グスク時代人 沖縄県		石垣貝塚 中世人 沖縄県 (松下)		真志喜安座間原 縄文～弥生人 沖縄県 (松下・他)		木綿原 弥生人 沖縄県 (松下・他)		大友 弥生人 佐賀県 (松下)		大久保 弥生人 長崎県 (松下・他)		御領 縄文人 熊本県 (金関・他)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1. 最大長	—	—	—	—	2	407.00(左)	1	411	15	413.60	1	409	1	433.0
6. 骨体中央矢状径	1	28	4	27.25	14	25.93(左)	3	26.00	41	28.85	1	30	2	27.50
7. 骨体中央横径	1	29	4	26.75	14	23.29(左)	3	25.33	41	26.07	1	27	2	27.25
8. 骨体中央周	1	90	4	84.00	14	77.43(左)	3	81.33	41	87.22	1	90	2	86.00
9. 骨体上横径	1	33	4	30.50	13	27.85(左)	4	28.75	42	30.62	1	34	2	41.25
10. 骨体上矢状径	1	25	4	25.00	13	21.62(左)	4	23.25	42	24.83	1	29	2	30.00
8/2 長厚示数	—	—	—	—	2	19.89(左)	1	20.54	15	21.13	1	22.17	1	20.5
6/7 骨体中央断面示数	1	96.55	4	101.86	13	112.12(左)	3	102.46	41	111.72	1	111.11	2	100.9
10/9 上骨体断面示数	1	75.76	4	82.45	12	78.49(左)	4	80.83	42	81.34	1	85.29	2	72.7

表6 脛骨計測値 (男性、右、mm) (Table 6. Comparison of measurements and indices of male right tibiae)

	後兼久原 グスク時代人 沖縄県		石垣貝塚 中世人 沖縄県 (松下)		真志喜安座間原 縄文～弥生人 沖縄県 (松下・他)		木綿原 弥生人 沖縄県 (松下・他)		大友 弥生人 佐賀県 (松下)		大久保 弥生人 長崎県 (松下・他)		御領 縄文人 熊本県 (金関・他)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1. 脛骨全長	—	—	2	340.50	—	—	1	336	12	339.58	1	321	1	360.0
1a. 脛骨最大長	—	—	2	345.50	—	—	1	345	14	347.86	1	329	1	365.0
8. 中央最大径	1	34	4	28.50	7	28.71	3	28.00	35	31.26	1	29	3	30.33
9. 中央横径	1	22	4	20.50	7	19.43	3	21.33	38	21.29	1	24	3	21.00
10. 骨体周	1	89	4	78.50	7	76.43	3	77.67	34	82.85	1	83	—	—
10b. 最小周	1	81	4	70.75	5	67.80	3	71.33	34	75.35	1	77	3	77.00
9/8 中央断面示数	1	64.71	4	73.03	7	67.80	3	76.22	34	68.03	1	82.76	3	69.40
10b/1長厚示数	—	—	2	21.63	—	—	1	22.62	12	21.88	1	23.99	1	22.2

表7 顔面頭蓋計測値 (mm、度) (Facial skeleton)

		後兼久原 2号人骨 男性	
51.	眼窩幅 (右)	—	—
	(左)	(40)	—
52.	眼窩高 (右)	—	—
	(左)	33	—
52/51	眼窩示数 (右)	—	—
	(左)	(82.50)	—

表8 上腕骨計測値 (mm) (Humerus)

		後兼久原 1号人骨 男性	
		右	左
1.	上腕骨最大長	—	—
2.	上腕骨全長	—	—
5.	中央最大径	27	26
6.	中央最小径	19	17
7.	骨体最小周	69	67
7(a).	中央周	75	70
12.	小頭幅	16	—
6/5	骨体断面示数	70.37	65.38
7/1	長厚示数	—	—

表9 橈骨計測値 (mm) (Radius)

		後兼久原 1号人骨 男性 右	
1.	最大長	—	
1b.	平行長	—	
2.	機能長	—	
3.	最小周	50	
4.	骨体横径	20	
4a.	骨体中央横径	20	
4(1).	小頭横径	—	
4(2).	頸横径	—	
5.	骨体矢状径	12	
5a.	骨体中央矢状径	12	
5(1).	小頭矢状径	—	
5(2).	頸矢状径	—	
5(3).	小頭周	—	
5(4).	頸周	—	
5(5).	骨体中央周	52	
5(6).	骨下端幅	—	
3/2	長厚示数	—	
5/4	骨体断面示数	60.00	
5a/4a	中央断面示数	60.00	

表10 尺骨計測値 (mm) (Ulna)

		後兼久原 1号人骨 男性 右	
1.	最大長	—	
2.	機能長	—	
2(1).	肘頭尺骨頭長	—	
3.	最小周	—	
6.	肘頭幅	—	
6(1)	上幅	—	
7.	肘頭深	—	
8.	肘頭高	—	
11.	尺骨矢状径	13	
12.	尺骨横径	19	
S	中央最小径	13	
L	中央最大径	18	
C	中央周	53	
3/2	長厚示数	—	
11/12	骨体断面示数	68.42	
S/L	中央断面示数	72.22	

表11 大腿骨計測値 (mm) (Femur)

		後兼久原 1号人骨 男性		後兼久原 2号人骨 男性 右
		右	左	
1.	最大長	—	—	—
2.	自然位全長	—	—	—
3.	最大転子長	—	—	—
4.	自然位転子長	—	—	—
6.	骨体中央矢状径	28	30	24
7.	骨体中央横径	29	29	29
8.	骨体中央周	90	93	84
9.	骨体上横径	33	32	—
10.	骨体上矢状径	25	26	—
15.	頸垂直径	—	—	—
16.	頸矢状径	—	—	—
17.	頸周	—	—	—
18.	頭垂直径	—	—	—
19.	頭横径	48	—	—
20.	頭周	—	—	—
21.	上顆幅	—	—	—
8/2	長厚示数	—	—	—
6/7	骨体中央断面示数	96.55	103.45	82.76
10/9	上骨体断面示数	75.76	81.25	—

表12 脛骨計測値 (mm) (Tibia)

		後兼久原 1号人骨 男性	
		右	左
1.	脛骨全長	—	—
1a.	脛骨最大長	—	—
1b.	脛骨長	—	—
8.	中央最大径	34	35
8a.	栄養孔位最大径	—	—
9.	中央横径	22	22
9a.	栄養孔位横径	—	—
10.	骨体周	89	89
10a.	栄養孔位周	—	—
10b.	最小周	81	80
9/8	中央断面示数	64.71	62.86
9a/8a	栄養孔位断面示数	—	—
10b/1	長厚示数	—	—

表13 腓骨計測値 (mm) (Fibula)

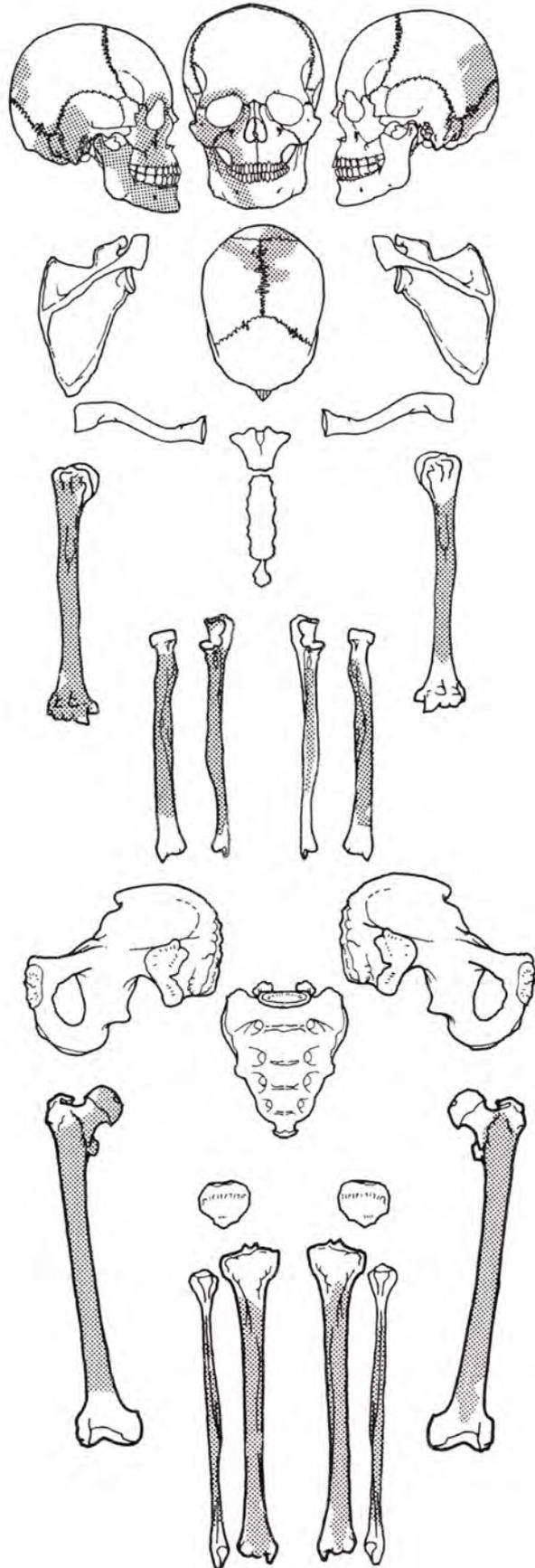
		後兼久原 1号人骨 男性
		右
1.	最大長	—
2.	中央最大径	17
3.	中央最小径	10
4.	中央周	46
4a.	最小周	—
3/2	中央断面示数	58.82
4a/1	長厚示数	—

表14 下顎骨計測値 (mm、度) (Mandible)

		後兼久原 3号人骨 4歳
69.	オトガイ高	23
69(1).	下顎体高(右)	17
	(左)	19

表15 幼児・四肢骨計測値

		後兼久原 3号人骨 4歳	
		右	左
大腿骨			
1.	骨体最大長	—	—
2.	骨体中央横径	14	13
3.	骨体中央矢状径	11	11
4.	骨体中央周	41	40
3/2	骨体中央断面示数	78.57	84.62
脛骨			
1.	骨体最大長	—	—
2.	骨体中央横径	—	12
3.	骨体中央最大径	—	13
4.	骨体中央周	—	39
7.	骨体最小周	—	39
2/3	骨体中央断面示数	—	92.31
腓骨			
1.	骨体最大長	—	—
2.	骨体中央最大径	7	7
3.	骨体中央最小径	6	6
4.	骨体中央周	23	22
3/2	骨体中央断面示数	85.72	71.43



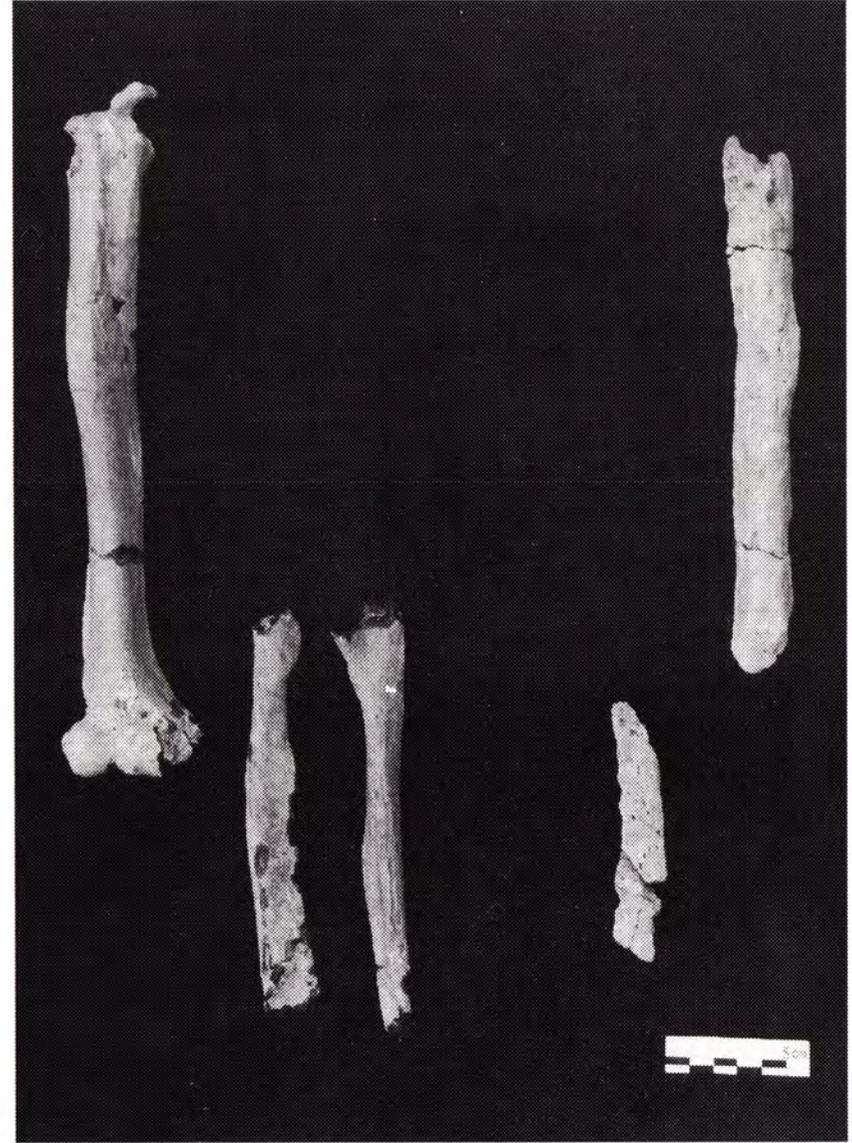
後兼久原1号墓骨 (男性・壮年)

図2. 人骨の残存部、アミかけ部分

(Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



下肢骨 (Bones of the lower limb)



上肢骨 (Bones of the upper limb)

後兼久原1号墓人骨 (男性・壮年) (Kushikanikubaru 1, young adult male)

＜付篇2＞沖縄における貝類遺体からみた湿地堆積物の検討

—後兼久原遺跡のコラムサンプリング調査—

黒 住 耐 二（千葉県立中央博物館）

1. はじめに

後兼久原（くしかにくばる）遺跡は、沖縄島の中部西岸に位置するグスク時代の遺跡である。この遺跡では、12世紀頃にこの地域一帯が湿地化し、淡水産のカワニナ類を多量に含む堆積層が形成されている（中村、1998）。この湿地堆積物が水田等の人為的なものかどうかを検討するために、筆者はこの堆積層およびその上下の堆積層からコラム（柱状）サンプリングを行い、貝類遺体に関して調査を行った。予報的な内容であるが、ここにその結果を述べる。

本遺跡の調査に際し、北谷町教育委員会の中村 愿・山城安生の両氏には資料の採取から内容の検討まで、大変お世話になった。記してお礼申し上げる。

2. 調査地点および方法

今回、コラムサンプルを採取した地点は、後兼久原遺跡I区外の西側である。この部分の基本層序は、I層の米軍による客土・II層のグスク時代より後の耕作土等・IV層とVI層までのグスク時代の層・VII層の地山となっている。この地点では、V層は欠落しており、またVI層に明瞭な遺構・人工遺物は認められなかった。この部分に表面積25cm×25cmで厚さ5cmの単位サンプルを連続して、上から順に1から番号をふり、採取した。

今回は、都合により、下部からNos. 17、10、7、3の4つの単位サンプルを検討の対象とした。No.17はVII層の白砂層で少し赤みを帯びた部分のものであり、No.10はVI層下部の灰色の粘土層で、No.7はIV層の黒色で淡水貝類の多く含まれている層であり、No.3はI層からII層上部にかけてのものである。

採取した土壌は、黒住（1998）と同様に、乾燥させ、水中で4mm・2mm・1mmのメッシュで篩うと共に微小貝類を含む浮遊物を目合いの細かいネットですくい取った（フローテーション法）。これらの全てのものを検討の対象とし、貝類の抽出を行った。浮遊物中ものは、フロートと表記して示した。ただし、No.10に関しては、全土壌の1/2を対象とした。

抽出されて貝類遺体は、可能な限り成貝と幼貝を区別し、それぞれ部位別に個体数をカウントした。ただ、フローテーションで得られたヌノメカワニナの2mm未満の個体に関しては、完形か殻頂かの区別を行わなかった。

3. 結果

今回の調査で得られた貝類遺体の詳細な組成を表1に示した。少なくとも淡水産腹足類5科10種、陸産腹足類6科6種、海産腹足類9科11種、海産二枚貝類3科3種が確認された。これらの中には、これまでに筆者が見たことのなかったトウガタカワニナ科の可能性のある種の幼貝やベッコウマイマイ科の未詳種も含まれていた。また、ここでトウキョウヒラマキ?としたものは、ヒラマキミズマイマイに類似するが周縁角が明瞭なものである。

以下に、下部から各単位サンプルごとの特徴を述べる。

No.13

いわゆる砂丘の白砂層で、貝類遺体や炭化物等は得られなかった。僅かにフローテーションで

草本の根と思われるものが認められた。

No.10

僅かに海産二枚貝類の小破片が得られただけであった。フローテーションでは、やや多く草本の根らしきものと僅かに炭化物が認められたが、筆者の観察では炭化穀類は含まれていないと考えられた。径3-8mmで長さ5-20mm程度の赤褐色の固結物も多く見られた。

No.7

現地でカワニナ層と認識できた部分で、産出直後と思われる微小な幼貝から成貝までヌノメカワニナが極めて多かった（ヌノメカワニナはいわゆる胎生で、子供を直接産む）。その他にヒメモノアラガイやヒラマキモドキ等の6種の淡水産貝類が得られたが、その個体数はヌノメカワニナと比較すると少ないものであった。陸産貝類は2種確認されたが、極めて少なかった。海産貝類は、イボウミニナの螺層部の破片が1個体のみ得られた。このイボウミニナには、磨滅やオカヤドカリ宿貝の痕跡は認められなかった。

フローテーションでは、多く草本の根らしきものと炭化物が認められたが、筆者の観察では炭化穀類はなかった。

No.3

このサンプルからは、9種と多くの淡水産貝類が得られ、No.7で極めて多かったヌノメカワニナは少なく、オキナワミズゴマツボやヒラマキミズマイマイが多かった。No.3と7の間には、種組成と量的組成の両方で、相違が認められた訳である。

陸産貝類も、5種得られ、湿性な環境に生息するウスイロオカチグサが最も多く、オカチョウジガイ類やヒメベッコウマイマイ属類似種も多かった。陸産貝類でも、No.3と7の間には、種組成と量的組成の両方で、相違が認められた。

海産貝類も少なくとも15種が得られたが、これらは主に1mmメッシュに残った何れも小形から微小なもので、そのほとんどが磨滅を受けた死殻であった。

フローテーションでは、多く草本の根らしきものと炭化物が認められたが、筆者の観察では、1個体のみ炭化種子が得られたが、穀類ではないと思われた。

4. 考察

以上の各単位サンプルの結果を踏まえて、このコラムの示す環境の変遷を考えてみたい。

まず、No.17は地山の砂丘の白砂層であり、人間の活動に起因する貝類遺体が得られなかったことは当然である。ただ、同じ砂丘の白砂層でも、奄美大島の古代相当期の用見崎遺跡では、いわゆる間層の白砂層でも海浜性の陸産貝類が僅かに得られており（黒住、1998）、本遺跡の状況とは異なると考えられる。陸産貝類が得られなかったことから、このサンプルの堆積当時は、砂丘の形成速度が極めて速かったことと、砂丘表面の砂の安定性が低く、海浜植物群落が形成されていなかったという2つの可能性（両方が同時に存在したことも含めて）が考えられる。

それが、No.10のサンプルでは、粘土質の堆積物となっていた。貝類遺体は、僅かな小破片の海産貝類以外確認されなかった。自然状態ではこのような小破片と言えども海産貝類が入る可能性は低く、近接した地点で人間の活動があった可能性があると考えられる。

No.7のサンプルからは、ヌノメカワニナが極めて多く得られ、他の淡水産貝類からもこの堆積物が止水的な環境で形成されたことがわかる。また、上部のNo.3と比較して、陸産貝類が極めて少ないことから、水体の中央部で堆積した可能性が高いように思われる。

ここでも、磨滅等のないイボウミニナの破片が1個体得られている。イボウミニナのような塔型の海産貝類を多量に食用に用いることはグスク時代の特徴の一つであり（黒住・金城、1988参照）、本種はこのサンプル堆積時にも、この場所に人間活動のあったことを示しているのではないかと考えられる。

No.3からは、淡水産貝類・陸産貝類・海産貝類が多く得られた。このことは戦前の水田を含む耕作土層に由来する淡水産・陸産貝類と、戦後の米軍の客土層に由来する海産貝類が混じりあったものと考えられ、この地点ではI層とII層上部が攪乱を受けていると結論づけられる。なお、海産貝類の多くは、内湾域に生息するものが多く、磨滅しており、地先の海岸で得られた可能性が高い。

このサンプルでは、淡水産・陸産貝類とも、No.7よりも多様性が高かった。この地点は、陸産貝類が多かったことから、水体の中央部ではなく、辺縁部で堆積したと考えられる。もっとも多いウスイロオカチグサは淡水の水辺に生息する種であり、現在でも水田の畦でも見られる種である。淡水産貝類の多様性の高さは、詳細は不明であるが、水体の利用方法に起因する可能性も想定される。

このように層の形成過程を想定してきたが、ここでは、この堆積物が水田であるかどうかという視点から、再度検討してみたい。沖縄を含む琉球列島での水稲耕作の開始時期に関しては、グスク時代からという想定はあるものの、未だ考古学的な検証が完全ではない（例えば、木下、2002参照）。それで、この問題に今回のNo.7の淡水湿地堆積物中の貝類遺体から、どこまで迫れるかという訳である。

その考えられるチャートを、表2に示した。このサンプルNo.7のカワニナ層が水田であるかどうかの直接的な考古学的証拠である畦やその他の遺構は検出されていない（中村、1988；本報告書）。さらに、調査者の山城氏からの御教示では、今回のコラム採取地点には存在していなかったが、陸側のII層下部のNo.7と類似した堆積物に関しては石列で段差を作っているが、No.7のIV層は本遺跡の多くの面で連続し、ほぼ同一のレベルを持ちながら石列等の遺構が認められていないこと、高倉等の遺構が残ったのもIV層の急激な堆積が生じた結果である可能性も考えられるとのことであった。さらに、間接的な否定の根拠として筆者が考えるものには、IV層と同一時期の人工遺物が少ないのではないかとということ、III層において人口増加が認められないのではないかとことがある。つまり、IV層が水田であったとしたら、農業生産にかかわる人口が増え、その痕跡が遺跡に残るのではないかと考えるのである。

以上がサンプルNo.7の層が水田ではないという否定的な根拠である。このような考古学的事実から、このIV層は自然状態での広大な湿地の急激な形成という可能性が高いと考えられる。ただ、いくつか水田という可能性も皆無ではないと筆者には考えられるので、今後の類似した堆積物の検討項目という意味からも、肯定的な点に関しても、述べておきたい。1個体のみではあったが食用になった破損面が磨滅していない海産貝類が得られたことと、近接した地点のIV層と類似した堆積物（両者が同じ時代・成因という保証はないが）では、堆積層の人為的な管理の可能性がある（中村、1998；国立歴史民俗学博物館の辻先生の間接報告）ことが、肯定的な根拠となろう。

もし水田であったとしたら、作物は稲であったのだろうか。その点に関しても、表2に示したので、ここでは貝類遺体から考えられる稲作の否定ということ述べておきたい。貝類遺体では、No.7とNo.3（グスク時代より後のもの）の間に大きな組成の相違が認められた。これは、作物

の相違を反映しているとも考えられる。また、関東地方の弥生時代の貝塚からは、縄文時代には見られなかった現在主に水田に生息するマルタニシが急に出土し始め、これが水田稲作のメルクマールとなるのではないかと考えており（黒住・岡本、1994）、沖縄においてもマルタニシは現在までの報告ではグスク時代以降からしか出土記録がない。そして、今回No.7からはマルタニシが得られなかった（No.3からも得られなかったが）ことも、このIV層では水田稲作が行われていなかった可能性がある。稲でなく、現在の所、筆者は水イモの耕作が想定されるのではないと考えている。

また、沖縄の民俗例を筆者は知らないが、ヤマトでは水田に肉入りの貝類や海藻を肥料として播くことが知られており、今回の堆積物では、このような肥料由来の貝類遺体は認められなかったが今後湿地の堆積物の解析には、肥料としての貝類等の利用への注意も必要であろう。

結局、今回の堆積物は水田である可能性は低いと考えたが、今後、堆積構造の詳細な検討や花粉やプラントオパールからの追試が、この堆積物の成因の理解に不可欠であろう。

引用文献

- 安里 進, 1990. 考古学からみた琉球史. 上古琉球世界の形成. 1902 pp. ひるぎ社, 沖縄.
 木下尚子 (編), 2003. 先史琉球の生業と交易. 204 pp. 熊本大学文学部.
 黒住耐二, 1998. 1997年の用見崎遺跡発掘調査で得られた貝類遺存体 (予報). In 若杉あずさ (編), 用見崎遺跡IV, 考古学研究室活動報告, (33):38-45. 熊本大学文学部, 熊本.
 黒住耐二・金城亀信, 1988. 豊見城村の長嶺, 保栄茂および平良グスク試掘調査により出土した貝類. In 金城亀信 (編), 豊見城村の遺跡, 豊見城村文化財調査報告書, (3):137-153.
 黒住耐二・岡本正豊, 1994. 千葉市の貝類II-貝類相に関する中間報告II. In 千葉市野生動植物の生息状況及び生態系調査報告, II, pp. 270-301. 千葉自然環境調査会, 千葉.
 中村 愿, 1998. 沖縄県北谷町・米軍基地内における埋蔵文化財の近況. 月刊文化財, (412):28-36.

表2. 後兼久原遺跡のサンプルNo.7の淡水性湿地堆積物に対する水田かどうかの検討.

1) 否定	a. 畦等の耕作跡・足跡等の未検出 (中村, 1998; 本報告書)*
	b. 同時期の人工遺物のすくなさ*
	c. 人口増加等が認められていない*
2) 肯定	a. No.7から海産貝類の出土
	b. 同様な堆積層の人為的な管理の可能性 (歴博/辻先生の中間報告: 中村, 1998)*
	i) 水稲
	ア. 遺跡立地での戦前の水稲栽培*
	イ. 余剰生産物としての米という形態の重要性*
	ii) 水イモ
	ア. No.7とNo.3 (後代の耕作土層) の淡水産貝類相の相違
	イ. 水稲に伴うと考えられるマルタニシの未出土
	ウ. 炭化穀類の未出土*
	エ. 穀類における畑作の卓越 (安里, 1990)*

*は貝類遺体以外の情報.

表1. 沖縄県北谷町後兼久原遺跡のコラムサンプルから得られた貝類遺体

コラム番号(column number)	17				10				7				3										
層位(layer)	VII				VI下				IV				II上/I										
表面からの深さ(cm:depth)	80-85				45-50				30-35				10-15										
メッシュサイズ(mm)とフローティング	4	2	1	70-ト	4	2	1	70-ト	4	2	1	70-ト	4	2	1	70-ト							
軟体動物門 Mollusca																							
腹足綱(淡水産) Gastropoda (Freshwater)																							
トウガタカワニナ科 Thiariidae																							
トウガタカワニナ	Thiara scabra															4j,1u	6j,2jb	8j					
ヌノメカワニナ	Melanoides tuberculatus																						
	成貝															7a,4ab	7a						
	幼貝															4j,20jb	17jb	12j,4jb	95j,70jb	2jb	1j,6jb	2j	3j,2fb
	螺層															2w	5w	5w	37w	3w	7w		1w
	殻頂																6u	7u	9u				
	微小幼貝																		182				
カワニナ科 Pleuroceridae																							
カワニナ	Semisulcospira bensoni																1j		1j				
科不明 unknown																							
不明(カワニナ類?)	unknown (Thiariidae?)																	4j					
ミズゴマツボ科 Stenothyridae																							
オキナワミズゴマツボ	Stenothyra basiangulata																1a	2a,4ab,2u	22a,1ab,7j,7u				
モノアラガイ科 Lymnaeidae																							
タイワンモノアラガイ	Radix auricularia swinhoei																	2u	1j,2f	2j			
ヒメモノアラガイ	Austropeplea ollula																	1f	4u	2j,2f	4j	5j,36u	
ヒラマキガイ科 Planorbidae																							
ヒラマキミズマイマイ	Gyraulus chinensis															2a	1jf	1a,9j,1jf	1a	6j	2a,50j		
トウキョウヒラマキ?	Gyraulus tokyoensis?																	1f	1a	2a			
ヒラマキモドキ	Polypylis hemisphaerula															1j,2jh	1jh,1u	1a,1ab,11j,1jh			1a,3j,2jh		
腹足綱(陸産) Gastropoda (Terrestrial)																							
カワザンショウガイ科 Assimineidae																							
ウスイロオカチグサ	"Paludinella" deviris																15a,2j	2ab,10j,2u	2a,11j,6u				
サナギガイ科 Puppilidae																							
シモチキバサナギ	Vertigo shimochii																		1a,1j				
オカチキレガイ科 Subulinidae																							
オカチョウジの一種	Allopeas sp.																		2b	2a,10j			
オカモノアラガイ科 Succineidae																							
ヒメオカモノアラガイ	"Succinea" lyrata																	1j,1u					
ベッコウマイマイ科 Helicarionidae																							
ヒメベッコウ属類似属	Discoconulus? spp.																			10j			
オナジマイマイ科 Bradybaenidae																							
バンダナマイマイ	Bradybaena circulus																1f	3f		3j			
バンダナ/オキナワウスカワ(孵化幼貝)	B. circulus/ A. d. despecta (hatchling)																1u		2	1,1u			
腹足綱(海産) Gastropoda (Marine)																							
リュウテン科 Turbinidae																							
ムラサキサンショウスガイ	Collonisata costulosa																		2ue				
ニシキウズ科 Trochidae																							
イワカワチグサ	Iwakawatrochus urbanus																1be	4e,4be					
オニノツノガイ科 Cerithiidae																							
カヤノミカニモリ	Clypeomorus bifasciata																1je	4je					
ヒメムシロカニモリ	Cerithium mailardi																	2je					
スズメハマツボ科 Dialidae																							
マキミソスズメハマツボ?	Diala stricta?																		4e,2be				
リソツボ科 Rissoidae																							
フトウネチョウジ?	Schwartziella triticea?																		2e				
ウミニナ科 Batillariidae																							
リュウキュウウミニナ	Batillaria flectosiphonata																2je	2je					
イボウミニナ	Batillaria zonalis																1f						
タカラガイ科 Cypraeidae																							
タカラガイの一種	Cypraea sp.																1ue						
スイフガイ科 Cylichnidae																							
オオコマツブの一種	Acteocina sp.																		4be				
ヘコミツラガイ科 Retusidae																							
マメヒガイの一種	Rhizorus sp.																		2e				
海産腹足類不明	unknown (marine gastropods)																1ue	2ue					
二枚貝綱(海産) Bivalvia (Marine)																							
トマヤガイ科 Carditidae																							
トマヤガイ	Cardita leana																1f						
ザルガイ科 Cardiidae																							
オキナワヒシガイ	Fragum lochooanum																1fe	2ue,2f					
ニッコウガイ科 Tellinidae																							
リュウキュウシラトリ	Quidnipagus palatum																1fe						
海産二枚貝不明	unknown (marine bivalves)																1f	2f	3fe				

詳細(Details): a:成貝(adult), b:体層(殻頂欠損を含む;body whorl), e:磨滅(erode), f:破片(fragment), h:一部割れ(broken), j:幼貝完形(juvenile), u:殻頂(umbo), w:螺層(whorl).

<付篇3>後兼久原遺跡 砂鉄貯蔵穴出土の砂鉄分析結果

・コメント

内間カンジャヤーガマ遺跡・後兼久原遺跡の砂鉄は、粒子がとても小さいことと量的にも少ないことから製鉄（製錬）の原料には向かない（裏付けができない）。製鉄の原料となる砂鉄の粒子の大きさは3mmはあるが、内間カンジャヤーガマ遺跡採取砂鉄は0.2～0.26mm、後兼久原遺跡の砂鉄は1mm程である。

表1 供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	* * * * *											Σ*		注							
							酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)		炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	酸化ジルコニウム (ZrO ₂)	造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe	
UKG-1	内間カンジャヤーガマ遺跡	か-12-Ⅲ き-11-Ⅳ	砂鉄	グスク時代?	50.67	0.05	25.43	44.11	8.60	4.05	0.87	1.87	0.33	0.37	0.44	12.60	0.10	0.01	0.20	0.13	0.26	<0.01	-	16.09	0.318	0.249	
UKG-2	同上	か-11-Ⅳ コーラル造成	"	"	50.88	0.28	26.51	42.88	8.17	3.93	1.08	1.85	0.29	0.36	0.46	12.85	0.19	0.01	0.18	0.18	0.26	<0.01	-	15.68	0.308	0.253	
KUS-1	後兼久原遺跡	砂鉄貯蔵穴	砂鉄	12～13世紀	43.13	0.22	21.57	31.38	15.25	2.92	0.57	7.04	0.24	0.11	0.44	17.95	0.05	0.02	0.17	0.13	0.22	0.002	-	26.13	0.606	0.416	1
Y-871	屋慶名	海中道路沿湾岸	砂鉄	現代	55.6		31.5	44.5	0.66	1.86	1.07	1.54			0.46	14.27	0.078	0.021	0.23	0.19	0.33	0.006		-	-	0.257	2
Y-872	藪地島	勝連町	砂鉄	現代	58.9		32.2	48.4	0.78	2.09	0.60	1.44			0.41	10.32	0.072	0.017	0.19	0.14	0.27	0.005		-	-	0.175	3
A-841	牧港貝塚	第I地区J12～K12 第I層淡灰色	砂鉄	沖縄貝塚時代 後期	56.8		18.14	61.0	2.32	2.61	1.68	1.81			0.50	10.11	0.047	0.056	0.20	0.24	0.24	0.003		-	-	0.178	4
A-842	牧港貝塚	第I地区 J12～K12白砂中	砂鉄	沖縄貝塚時代 後期	56.2		12.79	66.2	1.42	2.42	1.12	1.87			0.52	10.98	0.053	0.016	0.19	0.15	0.25	0.003		-	-	0.195	4
B-84	渡口	表面採取	砂鉄	沖縄貝塚時代 後期	-		-	-	-	-	-	-			-	9.45	-	-	-	-	-	-		-	-	-	4
2D-841	具志原貝塚	G-6グリット 第7層落ち込み内	赤鉄城石	沖縄貝塚時代 後期の層	65.6		0.43	93.3	2.71	0.94	0.84	0.39			0.085	0.018	Nil	0.032	0.22	0.22	0.010	Nil		-	-	0.0003	4
G-90	渡名喜島		赤鉄城石	現代	63.55		16.11	69.72	5.38	2.38	0.78	0.24			0.27	0.29	0.005	0.531	1.590	0.17	0.010	0.0039		-	-	0.0046	5
-	新城寺田	鹿児島垂水坂元地区	砂鉄	現代	51.10		27.66	-	12.52	2.10	0.53	4.40			0.43	9.14	-	-	0.27	-	0.33	-		-	-	0.179	6
-	谷山	鹿児島谷山生見地区	砂鉄	現代	51.62		28.12	-	10.20	0.68	0.90	4.16			0.65	9.14	-	-	0.20	-	0.29	-		-	-	0.177	6
2E-8401	願娃町	鹿児島指宿郡	砂鉄	現代	57.76		22.57	57.5	3.04	2.93	1.54	2.12			0.73	7.63	Nil	0.017	0.997	0.06	0.30	Nil		-	-	0.132	7
-	種子島	東邦金属KK普通砂鉄	砂鉄	現代	58.54		33.01	43.18	1.16	2.98	0.15	2.87			0.65	12.26	-	0.018	0.24	-	-	-		-	-	0.209	8
2J-883	石寺	浜砂鉄	砂鉄	-	45.8		16.60	47.0	8.82	1.25	0.89	5.02			0.77	18.10	0.02	0.021	0.16	0.03	0.19	0.033		-	-	0.395	9
AMI-1	アモイ	浜砂鉄	砂鉄	現代	66.0		18.82	73.5	0.84	0.48	0.09	0.06			0.22	0.38	0.04	0.029	0.076	0.03	0.12	0.003		1.47	0.022	0.006	10
SMY-14	住居遺跡		城石	?	35.07	0.03	0.15	49.93	19.45	11.72	0.59	0.56	0.754	0.046	2.83	0.60	0.08	0.007	0.72	0.05	0.02	0.006		33.120	0.9443	0.01710	11

注)

1. 大澤正己「後兼久原遺跡出土砂鉄の金属学的調査」
2. 大澤正己「沖縄県における貝塚・グスク時代の鉄の動向」(西表島古代鉄研究会資料)1989年8月24日 サンプル提供は沖縄県教育委員会 大城慧氏による。
3. 大澤正己 前掲書2
4. 大澤正己「沖縄・牧港貝塚・渡口洞穴遺跡採取砂鉄および具志原遺跡出土赤鉄鉱の金属学的調査」(牧港貝塚・真久原遺跡) 沖縄県文化財調査報告書第65号 沖縄県教育委員会 1985年。
5. 沖縄県教育委員会 大城慧氏採取品。試料受取りは1980年2月6日。

6. 工業技術院地質調査所「本邦のチタン砂鉄および磁砂鉄資源」1960年11月15日。
7. 大澤正己「上加世田遺跡出土製鉄一貫体制遺物と銅遺物の金属学的調査」(上加世田遺跡) 加世田市教育委員会 1985年。
8. 原道徳「鉄の古里」1972年7月1日引用。
9. 1988年11月27日 たたら研究会におけるの採取品。
10. アモイ砂鉄：沖縄県教育委員会(現在沖縄県立博物館)所属 大城慧氏提供。未発表資料。
11. 大澤正己「宮古・住居遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」(住居遺物I)～庁舎建設に伴う緊急発掘調査報告書～(平良市埋蔵文化財調査報告書第4集) 沖縄県平良市教育委員会 1999年3月。

＜付篇4＞県内最古（14世紀前半）と推定されたブタ出土骨について

川島由次・三鬼香織・小倉 剛（琉球大学農学部）

「後兼久原遺跡」は沖縄県中頭郡北谷町の米軍基地キャンプ桑江内にあり、北谷町役所および役所南側周辺に立地するグスク時代（12～16世紀）の遺跡である。本遺跡の獣骨の調査で、ウシ（11個体）・ウマ（5個体）イノシシ（5個体）・イヌ（1個体）そして小型のブタの上腕骨遠位端が2本確認できたが、そのうちの1本を写真に示した（写真中央）。上腕骨をブタと判断した根拠は、イノシシに出現する「滑車孔」が存在しないからである（写真左）。ブタにおいてはいずれの品種においても、「滑車孔」は存在しないのである（写真右）。写真右の現生リュウキュウイノシシ（雌）の体重が35kgレベルであったので、このブタは原始的な小型ブタであり、体重もイノシシと同レベルであり、雌であった可能性が高い。上腕骨の存在した地層は、Ⅲc層（14～15世紀に相当）とⅢd層（14世紀前半）の2層より各1本ずつ出土した。層序の細分は土器と中国産の青磁片によって行われた。すなわち、今日までのブタの由来とされる14世紀後半よりも、約半世紀近く古くブタが存在する可能性が強くなった。沖縄へのブタの由来に関する明確な記録は、今日においても見あたらない。獣医・畜産関係者において、現在において確実性の高い点で一致する意見は、14世紀後半（1392年）に明国よりの渡来人集団（久米三十六姓）が諸技術と共に、ブタを持ち込んだとする説である。

1392年の明国よりの渡来人帰化については、明国の公式記録である「明実録」（1368～1644年）に記載されており、琉球国王府の編集による「中山世譜」（1701年）・「琉球国由来記」（1713年）・「球陽」（1745年）にも記載されている。1372年、明国よりの招諭により朝貢が1372年より開始され、琉球国は進貢貿易の時代にはいるが、将来の冊封使の来琉に対するそなえとして久米三十六姓は“先発隊”として来琉し、その中に養豚技術者もいたことは間違いないと思われる。

14世紀レベルにおける当時の農業について詳細は不明であるが、農村においてブタの飼育頭数が急速に増加する様な経済的な余裕はなかったものと思われる。野草としてタンパク質含有量の高い「ノアサガオ」・「タイワンクズ」の利用の可能性はある。明国の冊封使の報告書には、滞琉中の間の宴会における食事のメニューまで記録されることが常である。では第1回目（1404年）の冊封使の一行の来琉時に、琉球王府は十分な豚肉で歓待したのであろうか？残念ながら第1～5回までの冊封使の記録は、故宮博物院にも現存せず、琉球国でどの様な接待を受けたのか不明なのである。金城須美子琉大教育学部教授は「牛肉でもてなしたと思う」（談）という意見である。筆者はかなり独断的ではあるが「牛肉とイノシシ肉で接待した」と考えている。14～15世紀当時、ブタを飼育できたのは一部の高級士族・按司・親方などの階級であり、少数のブタが利用・継代飼育され、甘藷の伝来普及された後に農村でのブタ飼育頭数の増加をみたと思われる。研究者の中でも、帯広畜産大の石黒助教授（分子生物学専攻）や岩手県「ウシの博物館」の黒沢弥悦博士（血清学専攻）らは「沖縄のブタの由来は14世紀前半よりさらに古いのでは」と主張している。

14世紀以前における民間人の交流・通商を通じて、ブタが由来した可能性も十分に考えられるので、今後、遺跡の骨を比較解剖学的方法でさらに追求するつもりである。

なお、最近「アーク」または「島豚」のミトコンドリアDNAチトクロームb遺伝子領域の塩基

配列が、小沢智生名古屋大学大学院理学研究科教授によって調査されている。島豚の塩基配列にはヨーロッパ系とアジア系の豚に固有な2種類の配列が認められ、ヨーロッパ系の豚のそれはデュロック種の配列と一致し、アジア系の塩基配列は中国系の梅山豚と金華豚の配列と完全に一致した。前者の配列は明治時代以降に移入された欧米系品種との交雑によって島豚集団に導入された配列であると思われるので、琉球在来豚は中国本土より移入されたと結論している。

〈参考文献〉

大城逸朗・小沢智生（2000）哺乳類遺体からみた琉球列島－台湾陸橋・リュウキュウイノシシ・琉球豚－、日本人と日本文化、No.12、P.27、国際日本文化研究センター（京都市）



図1 1. 現生リュウキュウイノシシ、2. 後兼久原遺跡出土のブタ、3. ランドレース種

県内最古の豚の骨

北谷後兼久原遺跡から出土 14世紀以前に交易か

大 琉 川 島 教授ら確認

後兼久原遺跡から出土したブタの上腕骨(中央)。右は現生のリュウキュウイノシシ。滑車上孔の有無が確認できる。左は現生のブタ(ランドレース種、体重200*g)。スケールは10*cm



【北谷】北谷町桑江の授が北谷町教育委員会資
後兼久原(くしかにくば)料室で見し発表した。
遺跡から出土した獣骨は一九九六年十二月
骨が、県内で確認されたに十四世紀前半の層から
中で最古(十四世紀前出上し、川島教授が垂熱
半)のブタの骨である。とが琉大農学部
の川島由次教授(比較解剖学)らの研究で分かった。沖縄へのブタの移入は明から十四世紀後半にもたらされたとする説が有力だが、それよりも約半世紀古い骨の発見は十四世紀以前の海外との交流、物流研究に新たな示唆を与えることになりそうだ。

二月二十八日、川島教

授が北谷町教育委員会資料室で見し発表した。獣骨は一九九六年十二月に十四世紀前半の層から出上し、川島教授が垂熱

帯動物学講座の学生らと研究を続けてきた。長さ約八*cm、幅約三*cmで一歳半から二歳(成体)のブタの前脚上腕骨の遠位端(上腕骨下部)。

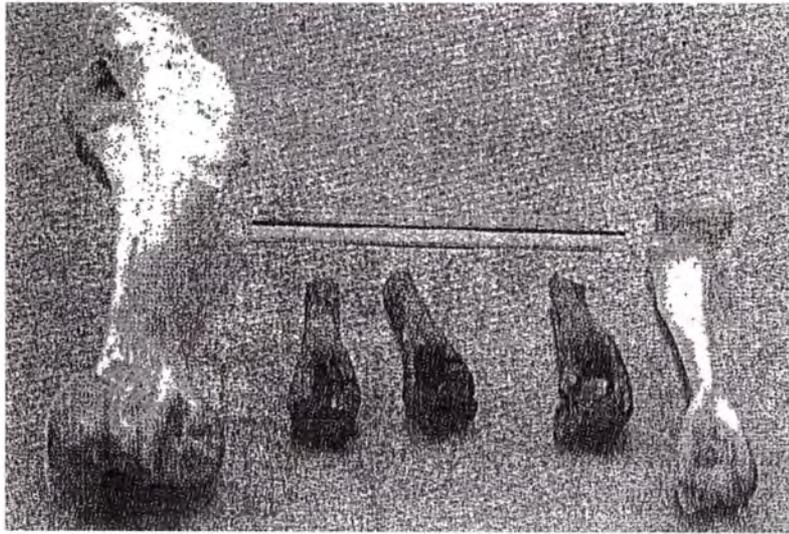
川島教授によると大きさとしてはリュウキュウイノシシの骨に似ているが、イノシシ特有の滑車上孔がなく、ブタの骨と判断できるといふ。さら

に体長も現生のブタ(平均二〇〇*kg)より小型(三十一・四十*kg)であることが分かった。川島教授は「十四世紀以前から物流していた可能性がある」と指摘もあ

ったが、これまで証拠として確認できるものがあった。滑車上孔の確認できる部分が出てきたことで自信を持って確認できた。

後兼久原遺跡は現在北谷町役場庁舎付近に位置し、九五年に発見され、九六年、庁舎建設予定地と重なることから緊急発掘調査が行われた。住居跡や高倉、木棺に埋葬された人骨などが出土しており、グスク時代(十二世紀から十四世紀前半)の一般の人々が生活していた遺構として貴重な遺跡とされる。

豚 いろいろ沖縄に



滑車上孔(穴の部分)のあるイノシシの上腕骨(右2点)と豚の骨。右端は現代のイノシシ、左端は現代のランドレース種(豚)

北谷町後兼久原遺跡で出土

グスク時代が最古 比較解剖学 弥生時代並行期に DNA解析

【北谷】沖縄に豚がいづれも、十四世紀のグスク時代までさかのぼる」とする解剖学的研究と「DNA分析で弥生時代(三世久米三十六姓とともに大

陸から入って来たとの説より古いことを示しているが、導入時期の差が千年以上離れていることから論議を呼びそうだ。

する学際的研究」分野の会誌(ニューズレター、一月発行)には、石黒直隆帯広畜産大学助教らの研究グループによる、

元前三世紀から紀元後三世紀)には大陸からの東アジア系家畜豚がいた」と展開している。イノシシと豚はDNAの塩基配

列が異なるという。これまで発掘された伊江島の具志原貝塚(弥生時代中期)では、リュウキユウイノシシよりも大きなイノシシ属の獣骨が出土しており、考古学関係者が豚の可能性をめぐり、注目していた。川島教授は「残りの貝塚から具志原貝塚の例は、形質的な判定は難しいと話している。

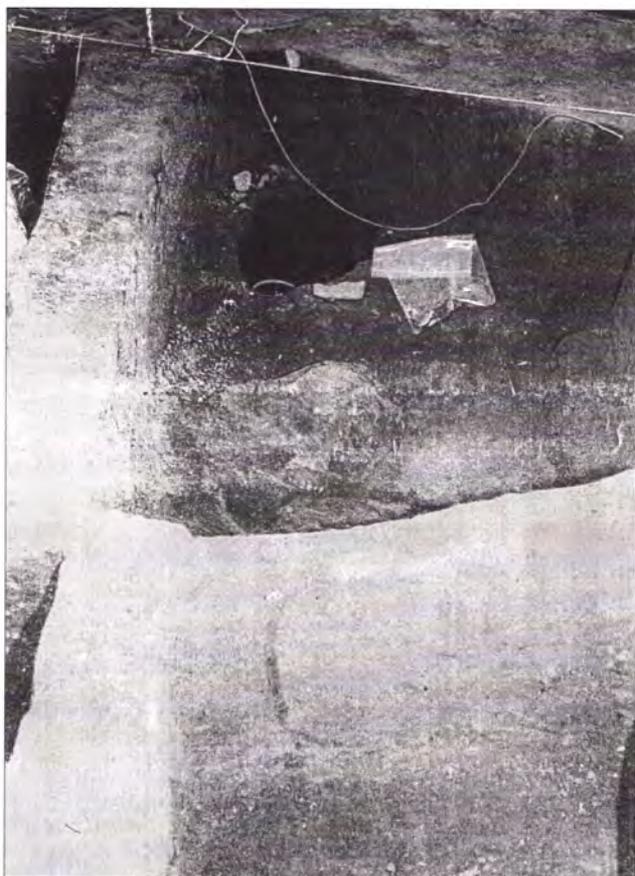
琉球大学の川島由次農学部教授(家畜比較解剖学)は二十八日午後、北谷町教育委員会で見出し、同町桑江の町役場一角にある後兼久原遺跡の十四世紀前半の層から出土した獣骨に豚の前足骨があった、と発表した。見つかったのは長さ約八センチの上腕骨二本。イノシシの骨にある「滑車上孔(かっしやじょうこう)」という穴がないため、豚と断定したという。「県内で確認されたものでは最古。当時の豚はイノシシとほぼ同じ大きさ」と話している。

一方、国際日本文化研究センターの「日本人および日本文化の起源に関

る

る

Two 800-year-old skeletons discovered on Camp Lester



LCPL JASON DEQUENNE

Portions of an 800-year-old skeleton lay uncovered at the archeological excavation site at Camp Lester.

LCpl. Jason Dequenne

Staff writer

CAMP LESTER — Pieces of Okinawa's expansive history were uncovered during an archeological excavation site near the U.S. Naval Hospital here Oct. 25.

Archeologists discovered two 800-year-old skeletons as well as the first signs of iron smelting by villagers who inhabited the area, according to archeologist Sunao Nakamura, the Chatan-cho Board of Education deputy director of cultural assets.

The archeological excavation is part of a cultural asset survey being done on a 6,000-square-meter area where Chatan-cho City Hall will be constructed. A ground breaking ceremony for construction of the new city hall was held Thursday and construction is scheduled to begin by mid-November.

According to Dr. Christopher White, the cultural and natural resource manager of the engineering division, Japanese law mandates that cultural asset surveys be completed before construction projects be-



LCPL JASON DEQUENNE

A worker at the archeological excavation site carefully removes dirt from the remains of a skeleton.

gin on any Japanese land.

Although the land is currently leased to the U.S. government, it is slated to be returned to the government of Chatan-cho earlier than the rest of Camp Lester as part of the Special Action Committee on Okinawa (SACO) plan.

The purpose of the survey is to safeguard against the destruction of Okinawan tombs, cultural ruins, relics or sacred areas, said White.

Excavation of the site began June 18 and was scheduled to conclude by the end of October, he said.

However, the cultural asset survey will continue for several weeks because of the recent discoveries.

Studying the skeletons and other artifacts unearthed at the site, such as coins and pottery from China, will provide insight into the lifestyles, trade practices and social development of the villagers who inhabited the area, he said.

"There's a lot we can learn about these people by examining the skeletons," White said. "such things as age, sex, what type of diet they had, what illnesses they suffered from, what diseases they had, how healthy they were and how their bones developed."

Archeological specialists from Tokyo were scheduled to arrive Thursday to assist Nakamura in removing the skeletons from the site, said White.

After the skeletons are removed, they will be flown to mainland Japan for examination and then returned to the city government of Chatan-cho.

Upon their return from the mainland, the skeletons will be placed in permanent storage at Chantan-cho's archeological storage facility.

21249

北谷町文化財調査報告書 第21集

くし かに く ばる
後 兼 久 原 遺 跡

—庁舎建設に係る文化財発掘調査報告書—

編 集 北 谷 町 教 育 委 員 会
2003年(平成15年)3月
沖縄県北谷町字桑江226番地
電 話 (098)936-3490

印 刷 有 限 会 社 金 城 印 刷
沖縄県糸満市西崎町5丁目9-16
電 話 (098)995-0001
